國譯一切經　本緣部　九

昭和六年一月十日印刷
昭和六年一月十五日發行
昭和十一年九月五日再版

不許
複製

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　兩角製本所

索　引

（頁數は通頁を表はす）

—ケ—

—コ—

—サ—

—シ—

——本緣部九索引終——

「我、七塔の舍利を取り、分布して廣く世界を度せん」。是の時、王、善い哉とて、未曾有の智を嘆じ、歡喜して彼の舍利を取る。虚空の中に、神聖の聲にして、此の偈を說くを聞く、

當に歡喜心を發すべし、　善德不可稱なり、　當に功德を廣布し、　舍利を遺して敎化すべし。

天王、彼の舍利に於て、若干種の華を雨ふらす。是の時、王、八萬四千の塔を起し、一日にして皆悉く成る。是の時、王、彼の群臣に告げて言はく、「彼に是の如き眞諦の言敎有り。世の稱譽する所なり。佛今已に滅度したまへるが爲めに、舍利を世界に分布せん。亦衆結無く、身淨きこと金の如く、亦白雪の如し。此の地を觀ずるに、未だ曾て惡を起さず。彼も亦是の如し。此の地を見已りて之を擁護す。敎授する所の智や動かす可からず。巖穴中に在るも、極峻高空にして量有ること無し。況んや、當に一切を統領すべきをや。一切地は是福田なり。十力は衆生の類を觀じたまふ。起す所の塔寺增減有ること無からん」。是の時、世尊の舍利、[一七二]一切種の爲めに、各各若干種の論を作す。時に王說いて曰はく、「[一七三]猶、此の力は無數の金剛三昧なり。骨を碎くまで自ら休息を捨つるを得ん。云何ぞ當に此を度すべき」。

僧伽羅刹所集經卷下（終）

【一七二】一切種類。麗本にはたゞ一種類に作る。元明二本によつて一切と爲す。

【一七三】猶此力無數金剛三昧、碎骨而自得捨休息、云何當度此。世尊の舍利が一切の種類のために、若干種の福を作せる、其の法力に無數の金剛三昧あり。骨を碎くまで休息せずして之を窮むとも、到底之を解し得ざらんの意なるべし。

衆生度を得已りて、功德量有ること無けん。當に威儀恩慈を行ひて、皆照明を見せしむべしと。我、夢中に於て、是の如きの語を聞けり」。又此の偈を說く、

若は彼の音響を聞き、　道場を自ら覺知す、　彼は是釋師子なり、　應に舍利を供養すべし。

是の時、王、諸の比丘を集め、復此の義を以て、彼に問うて曰はく、「諸の比丘、法の教を以てせよ」。時に、王、復彼の比丘に語りて言はく、「諸賢の說く所は、我が夢中に於て見し所なり。則ち、是、我が宿植せし德本なり」。是の時、王、八日に於て、〔一七〇〕八關齋を受け、純白衣を著、鐘を撞き、鼓を鳴らし、伎樂を作倡し、琴を彈じ、瑟を鼓し、螺を吹き、種種の香を燒き、羅閱城に於て、舍利を得んと欲す。「彼の城裏に金券書有りと聞く。已に金券を見る、其の形像有らん。前世に土を以て惠施し、彼の相を見るなり」。（聞より以下は諸の比丘の言なり）王、須臾、思惟し、便ち是の語を作す、「此れ必ず當に微妙の果を得べし。實に、我、銅函を發開し、此の中の文を見んと欲す」。卽函を發開して、金券有るを見、亦文字を見る。（此の券は、阿闍世王の記にして、佛、阿條王有りと言ふ也）此の證驗を見、卽、衆生に於て、便ち此の文字を讀む、「摩竭國界に於て、羅閱城有り。長者有り、波羅蜜多羅と名く。彼に子有り、脾闍耶蜜多羅と名く。第二家を波條波陀羅と名く。子有り、波條達多と名く。彼の二長者の子、四徼の道頭に在りて、土を弄して戲る。土を弄して戲むるる時に當り、毘闍耶蜜多羅長者の子、便ち歡喜を懷き、便ち土を掬して惠施す。復、歡喜を助くる者有り。如來百歲涅槃の後、毘闍耶蜜多羅、當に世に出現すべし。彼の土の功德に緣りて、王有り、阿條と名く。〔一七一〕波邪種に出でん」。時に、王、此の文字を讀みて、便ち歡喜を懷き、未曾有と嘆じ、復、群臣に告げて、更に此の金券を讀むに、上の如くにして異る無し。「彼、此の世界人民の類に於て、皆當に統領すべし。然るに、波條達多を嘆譽せず。當に彼の人臣と爲るべし」。時に、王、便ち是の嘆を作す。「善い哉、大福田。是の少施を作して、大功德を獲ること。」心に歡喜を得たり。或は是の說を作す有り、

〔一七〇〕八關齋。八齋戒に同じ。關は禁なり。八罪を禁じて犯さゞるを以て、關と名く。

〔一七一〕波邪種（Maurya）。孔雀種といふ。旃陀羅笈多王より出づ。

色不可思議なり、佛の覺悟したまふ所。三世に名を稱揚し、神仙彼岸に至る。世に於て巳に休息し、永く盡きて起滅無し、大智通第一にして、一切に自在を得たまへり。

七十九、阿⿰亻魚王[一六八]

聞けり、如來般涅槃百歲の後、一切智見、世間に布現せり。摩竭國界、欺羅梨城に王有り、[一六九]阿⿰亻魚と名く。其の德甚だ巍巍たり、猶、彼の天帝のごとくにして異る無し。大威德有り、聰明黠慧なり、彼と論議するに堪任し。民を視ること子の如し。彼、夜眠らんと欲するの時、便ち是の思惟を作す、「我、今、所願已に果して、更に悕望無し。當に人民を擁護すべし。今、當に何の方便をか設け、何の業をか爲すべき。當に何事をか興起して、世の人民をして、皆其の德を蒙らしむべき」。是の思惟を作し已り、卽夜、睡瞑す。夢中に於て、便ち此の偈を聞く、

審諦甚だ微妙にして、三世に敬事する所なり、當に舍利を廣布すべし、最勝滅度を取りたまへり。

此の語を聞き已りて、彼の王、卽、驚きて覺む。時に、王、已に覺し、便ち是の嘆を作す、

善い哉、彼の衆生、滅度を取りたまひて後、舍利は天の傳ふる所なり、我等當に承事すべし。

口の傳へ、耳の聞く所なり。是の時、大王、卽、群臣を召し、大衆を集め、此の義を以て、彼に問ひて言はく、「我、當に何の義を以て人民を恤化すべき」。彼の群臣人民、各自ら陳言す。或は言はく、如來の舍利を供養せよと。或は言はく、神天を祭祀せよと。是の時、王、便ち是の說を作す、「當に、至誠の語を以て、其の法を擁護すべし。我、昨夜、夢中に便ち是の聞を作せり。此の舍利を思惟せよ。甚だ善い哉。此の世の爲めの故に、我等宜しく世間の人民を擁護すべし。自ら旣に福を獲、

【一六八】此一段は、阿育王が、昔て一童子として、土砂を以て佛を供養せる功德によつて、佛滅百年の後に、大王として世に出で、佛舍利を天下に廣布して、八萬四千の塔を建てたる因緣を叙す。

【一六九】阿⿰亻魚(Aśoka)。阿育、阿輸迦に同じ。

世尊、已に愛淵を度すること是の如し。曩昔、諸佛惠施を作す所の利根、皆悉く成就し、諸行普ねく至れる、志性柔和なるを、皆悉く度し已る。次に中根と度し、次に軟根を度して、漸漸に須陀洹に至らしむ。外學の與に演說すること、世尊皆周遍す。爾の時、便ち涅槃を取りたまふ。是に於て、便ち此の偈を說く、

外學を度せんと欲するが故に、　大尊、與に等しきもの無し。　自ら覺して、復彼を度したまひ、
此の淵に溺るるもの有る無し。　種種の業を經度し、　漸漸に長益有り、　是に於て歡喜を生じて、　皆悉く彼處に度る。

七十八、一切成就

[一六六]如今、清淨にして瑕穢無く、所生の處、常に善處に値ひ、已の行成就して亦衆慢無し。諸の功德に緣りて皆悉く成就す。彼の境界の爲めの故に、相應成就す。慇懃を以ての故に、生皆成就す。救濟拔苦して無爲處に至り、是の如く、成就を得。若は豪尊の家に生れて、居家成就す。色微妙の故に、親屬成就す。所爲已に足りて、無爲處成就す。限量有るが故に、所爲皆成す。種種の結使を斷ずるが故に、降伏成就す。行業を與す所、誓願成就す。諸の功德を種ゑ、未だ曾て犯す所有らずして、所爲成就す。威儀成就し、諸の功德戒律成就す。四意止を演べて、威儀成就す。言教を分別して、境界成就す。智慧を興起して、衆成就を集む。已に諸有を捨てて、諸戒具足して、[一六七]戒律成就す。智を以て專心にして、亦禪に依らずして、三昧成就す。如實に彼の界を分別して、智慧成就す。諸の結使を斷ずるが故に、解脫成就す。諸の愚癡を斷ずるが故に、解脫見慧成就す。諸の功德を集めて、一切成就す。已に滅寂を得て、止觀成就す。是の故に、十力を拜手しまつる。是の時、便ち此の偈を說く。

【一六六】此一段は、世尊の一切成就を叙す。

【一六七】戒律成就。戒律・三昧・智慧・解脫・解脫見慧を五分法身といふ。

に、護世の想有り。我が今日の金剛の身の如き、碎きて百分と爲さざらんや」。或は說く者有り、「此の身、必ず當に果を獲べし。然る所以の者は、如來を供養するが故なり。」是の時、密迹金剛力士、便ち是の說を作す、「此の事、云何。是の時、太子、馬車に乘りて城を出づ。時に彼の馬還り來りて、七日食はず、三十三天に生れたり。況んや、當に、我等承事して、如來の教誡を受くるをや。耳に入る者、諷誦する者、一切皆悉く學び、衆生を度して限量有ること無し。若は復、珍寶の海、當に廣く之を求むべし」。是の時、密迹金剛力士に、二賢聖有り、此の偈を論說す、

彼の神龍處に於て、　金剛、海より出づ、　云何ぞ、當に擁護すべき、　是の如く師子吼す。

是の時、思惟して、復、是の說を作す。

猶、彼の深海の、力能く過ぐる者無きが如し、　世に於て精進を行じ、　大德有ること無し。

七十七、四十五年說法地

[一五三]是の如く、世尊、[一五四]波羅奈國に於て、法輪を轉ず。初めて此の法を轉ずる時、多く衆生を饒益す。卽、此の[一五五]夏坐に於て、摩竭國王を益する有り。第二、三は[一五六]靈鷲頂山に於てし、第五は[一五七]脾舒離なり。第六は[一五八]摩拘羅山(白善)なり、母の爲めの故に。第七は三十三天に於てし、第八は鬼神界にて、第九は拘[一五九]苦毘國にて、第十は[一六〇]枝提山中にて、第十一は復、鬼神界にて、第十二は摩伽陀の閑居處にて、第十三は復、鬼神界に還りて、第十四は本佛所遊の處、舍衛[一六一]祇樹給孤獨園に於てし、第十五は[一六二]迦維羅衛國、釋種村中にて、第十六は迦維羅衛國に還りて、第十七は羅閱城にて、第十八は復、羅閱城にて、第十九は[一六三]柘梨山中にて、第二十は夏坐して羅閱城に在り、第二十一は拓梨山中に還り、鬼神界に於てし、餘處を經歷せずして、四夏坐を連ぬ。十九年は餘處を經歷せず、舍衛國に於て夏坐す。如來、是の如く最後に夏坐せる時、[一六四]跋祇境界の[一六五]毘將村中に於て夏坐す。

【一五三】此一段は、釋尊一代の事蹟を學く。
【一五四】波羅奈國。この下に釋尊一代四十五年の說法處を擧ぐ。經律論多しと雖も、四十五年の說法處を、悉く記錄せるは、獨、此經あるのみ。
【一五五】夏座。夏安居なり。夏期九十日間外出せずして坐禪修行すること。
【一五六】靈鷲頂山（Grdhrakūṭa）。
【一五七】脾舒離（Vaiśāli）。
【一五八】摩拘羅山。（Makula）
【一五九】拘苦毘（Kauśambi）。
【一六〇】枝提山。（Caitya?）
【一六一】祇樹給孤獨園。Anāthapiṇḍika（給孤獨）の佛に供養せし Jetavana の園なり。
【一六二】迦維羅衛（Kapilavastu）。釋尊の生地。（Caliya?）
【一六三】柘梨山。（Caliya?）
【一六四】跋祇（Vrjji）。
【一六五】毘將村。Licchavi 離車毘の毘を取れるものか。

其れ如來を觀る有り、晝夜に懈怠なかりき。時に、滅度を取り、此の四大の形を捨てんと欲したまふ。勤苦して其の德を成じ、未だ曾て正法に違せず、生死の海を度したまひしを以て、今當に[一五一]陰入を捐てたまふべし。

是の時、世尊、般涅槃せんと欲する時に臨み、諸の比丘に告げたまはく、「汝等比丘。狐疑する所有らば、便ち時に問ふ可し。乃至、一切の行は淨常無きや。云何」。尊者阿那律、「世尊、般涅槃したまふ耶。」是に、[一五二]密迹金剛力士、如來の後に立ちて、如來の顏色・支節・筋骨の、皆悉く牢固にして重任に堪任し、亦微妙の法を說くに堪任するを觀じ、卽、啼泣して而して是の說を作す、

無垢にして衆瑕無きを、世間は覆蓋を失ふ。猶、彼の紫磨金のごとし、今、當に衆を捨てて去りたまふべし。猶、此の世間の、年熟して時已に過ぎたるが如し、釋種釋迦文、無想にして永く寂滅したまふ。

其の中、或は說く者有り、「止みね、止みね、是の語を作す莫れ」。是の時、彼、此の懊惱を懷き、便ち是の說を作して、自ら念ずらく、「世尊、兜術天從り降神して、世間に來生したまふ。憶ふに、彼に數千萬天有り、己の功德を以て、皆靑衣を著く、威神の力有り、力、沮壞す可らず、五百は退轉せず。復、十二の大鬼神有り、見る者皆恐怖を懷く。來りて如來を擁護せんと欲す」。斯に須らく思惟して、復是の說を作す、「如來の支節を攝して、皆光明を放てり。便ち我等に告敕し、諸天に敕して是の語有り。護世の神、使を遣はして此に至る」。彼の處に於て、便ち是の語を作す、「我等、歡喜して承事供養す。胎に處ります時の如し。夢寤の中にも常に遠離せず。我等此の世に染着す。衆生牢固なり。此に於て、苦樂の想有り、父母の想有り。一切世に微妙にして、無上の想有り。護世の所造、兄弟の想有り。微信の施を受くるが故に、福田の想有り。心邪に傾かずして、執御の想有り。流れて度せんと欲するが故に、船師の想有り。得可らざるが故に、珍寶の想を懷き、大慈を得るが故

【一五一】陰入。五陰十二入、卽ち五蘊十二處の古譯なり。
【一五二】密迹金剛力士(Guhyapada)。佛を護る夜叉神なり。

此の尊、第一妙なり、彼の衆生の類の爲めなり。此の法も亦無上なり、今、當に、滅度を取りたまふべし。

是の時、世尊、便ち雙樹の間に至りて、而して坐す。是の時、雙樹の間、諸天、展轉して、相告げ語りて言はく、「彼の亂世に於て、一切智、當に滅度を取りたまふべし。云何ぞ、當に人民の類を捨てて、滅度を取りたまふべきや」。是に於て、便ち此の偈を說く、

諸、深義爲るが故に、疾く甘露味に逮べり。彼の尊、是の力有り、今悉く當に過去したまふべし。彼の金剛輪の如し、人民の嘆譽する所なり、彼の輪或は敗有れども、此の尊は壞す可きこと難し。

彼の中間に於て、盡く無常を修し、精進の力、沮壞す可らず。諸有の少壯なるものも、皆悉く無常なり。諸佛世尊も、亦復滅度したまふ。此の患、甚だ苦惱なり。便ち此の偈を說く、

彼の諦を思惟するに、色像は廻轉する有り。彼の更樂に縛せられて、諸の苦惱の患を受く。

其の中、或は此の偈を說く有り、

最始の生を苦と爲す、此の[一四九]陰持の名有り。生無くば壞有らず、誰か此の患を脫する有るぞ。

其の中、或は是の說偈を作す有り、無常の從りて生する所と爲す。

最初此を覺する時、一切の念悉く成ず、彼、是の如きの色有り、諸佛に常住無し。

「我等、今日、當に、何の業を修すべき。今、世尊、最後に此の法を說きたまふ。是の故に、當に、愍懃に[一五〇]心を修すべし。是の福田亦持す可らず」。而して歡喜心を發す。是の時、娑羅園中の諸天、皆世尊を拜手し、若干種の曼陀羅花を雨らし、皆啼泣涕零す。便ち此の偈を說く、

【一四九】陰持。五陰十八持、卽ち五蘊十八界の古譯なり。

【一五〇】修心。麗本には鬧心に作る。今、三本によつて、修心とす。

の苦惱を受けたり。若は復、阿難、我、今、此の身は父母の所生なり。怨敵の能く我を害する者有ること無し。終に此の義無し。此の金剛三昧、種種の三昧を分別す。若、我が滅度を取りたる後、彼、若、舍利の芥子等の如きを供養せんに、此の功德限り有ること無からん」。是の時、便ち此の偈を說きたまふ、

初發意從り來、所作第一爲り。人中の上爲ることを得たり、誰か能く與に等しき者ぞ。
若は父母にも妻子にも、世に於て自在を得たり。餘命有りて存すと雖も、[一四七]今、盡く當に之を捨つべし。

七十六、遺教

[一四八]「汝、今、往け。阿難。如來の爲めの故に、彼の雙樹の間に往詣せよ」。廣說すること、契經の如し。是の時、尊者阿難、佛從り教を受け、便ち是の思惟を作す、「今日、世尊、審に涅槃したまふ耶。」便ち愁憂を懷き、尊教に違せず。即、驚怖を懷き、便ち彼の間に往至す。皆是宿命の相追ひ逮ぶが故なり。勤苦の致す所、陳ぶる所有らんと欲し、復狐疑を懷く、「當に、云何が、此の言を陳べん」。便ち世尊に白す、「所爲已に辦ず」。是の時、世尊、便ち彼の所に往至し、足を舉げて地を蹈み、時に彼處に至らんと欲す。是の時、尊者阿難、心意遂に熾然して、復是の心を生ず、「此れ幻夢爲り耶、是審然爲りや」。是の如く猶豫す。是を思惟し已りて、復還りて其の意を正しくす、「此を名けて無常と曰ふ。衆生流轉して、此の患を脫せず」。是の時、世尊、漸く彼の雙樹の間に至る。其の中間に於て、諸天有りて、虛空に側塞す。或は伎樂を作倡するあり、顏色變易す。或は啼哭涕零する有り。稱計す可からず。諸の須輪の衆、法を悕望し、法を恭敬す。是の時、便ち此の偈を說く、

【一四七】今の字、麗本に命に作る。今、三本によつて、今と改む。

【一四八】此の一段は、沙羅雙樹の下に於ける佛の入滅を敍す。

し。教化して、未だ原本を盡したまはず」。是の時、世尊、告げて曰はく、「[一四一]汝、今、云何、世平かに豐熟にして、恐畏苦難有ること無けん。法王有りて出世し、轉輪聖王、法を以て治化し、樹木藥草稱計す可らず、諸有の牢獄に閉繫する者、皆解脫せしめん。或は復、[一四二]鼎沸の世に、轉輪聖王あつて、諸有の牢獄に閉繫する者を、皆解脫して苦厄に遭はざらしむる如き有らん。彼の衆生に恩慈有り。彼、云何ぞ、衆生に恩慈有らん」。是の時、尊者阿難、世尊に白して言はく、「第一法王は、人の表に出づる者なり。厄に遭ひて苦惱する者、能く苦惱を脫するを、最要と爲す」。[一四三]「猶、阿難、太平の世に、轉輪聖王有るが如し。隨葉佛の世に處せし時も、亦復是の如し。猶、牢獄に繫閉するもの、皆悉く之を度脫するが如し。阿難、我が今日の如き、壽命極めて短く、世に出現せり。彼の衆生は、猶、[一四四]刀劍劫の生のごとし。彼の惡劫には、諸の結使厚くして、未、結使を離るること能はず。種種の邪見に依りて、邪見の結使有り。非法の欲を以ての故に、欲の結使有り。彼の衆生に於て、中間に生ずる所、是の如き惡起る。時世惡しきが故に、教化する所少く、若は、彼の人に於て、此の行を勤修す。阿難、我、本、未だ道を得ずして獼猴爲りし時、身命を惜まず、餘の同類をして、皆度を得しめ、度を得ざる者有ること無りき。本、復、師子爲りし時、爾の所の商人の彼の惡道に趣くを度脫し、久しく梵行を修したりき。爾の時、阿難、所趣の處、衆生を潤澤すること有らざること無りき。我、是の時、阿難、復、人身に還り、摩竭界に於て、諸人を潤澤せり。復、青雀の時に於て、無數の商人を度脫し、復、大仙人と爲り、無數の梵天を度脫せり。我、年八歲の時、此の誓願に於て、意、退轉せず。身に草衣を被りて、苦行を勤修し、彼の閑靜處に住して、修行する所、皆悉く護持せり。云何ぞ、阿難、我、此の迷惑の世に於て、[一四五]天、雨を降さざらんや。時に、釋提桓因、即、雨を降らしめき。是の時、阿難、我、未だ生れざりし時、人民の類、一子を愛念せり。若は復、我、一衆生の爲めの故に、一劫の中、代りて[一四六]泥黎の苦を受けたり。彼の衆生の爲めに、此の如き

【一四一】こゝの佛の問は、佛世尊の出世は、世平安穩の時に出世する轉輪聖王の如くなるべきか、濁世苦惱の時に出世する轉輪聖王の如くなるべきか。佛は衆生に對して恩慈あるべし、何ぞ衆生より恩慈を受くべきといふにあり。

【一四二】鼎沸。鼎に湯のわきたてるが如く、世の亂れたること。

【一四三】猶如阿難は、恐らくは阿難猶如の錯簡なるべし。

【一四四】刀劍劫。一住劫に二十の增減劫あり。減劫の時には刀兵火の三災起る。刀劍劫とはそれを云ふ。

【一四五】麗本に天下降雨とあれど、宋元明三本によりて天不降雨と改む。

【一四六】泥黎(Niraka)。地獄なり。

し。彼、名稱有り、一切世間に悉く能く充滿す。此は是、彼の舍利なり。三界に於て、身自在を得、善香の熏ずる所なり。是の故に、當に、是の如きの功德を拜手し禮ずべし。世の爲めに[一三八]萠類の衆多の功德を現ぜり。當に、解脫を學びて、彼の處所に至るべし」。

七十五、釋尊入滅

[一三九]爾の時、世尊も亦壽命を捨てたまはんとす。是の時、地、爲めに大いに動き、四面に雷電霹靂し、諸天虛空に側塞して伎樂を作倡す。大光明有りて照明せさる靡し。雲霧覆蔽して、火に光有ること無し。是の如きの語有りて流布す。一切智、當に滅度を取るべしと。是の時、尊者阿難、淸旦に座從り起ち、世尊の所に往詣し、頭面に世尊の足を禮し、一面に在りて住す。便ち世尊に問ひて言はく、「此は是、何の因緣ぞ、地をして大いに動かしむる」。世尊の意、移動せず、便ち是の語を作したまふ、「阿難、八因緣を以ての故に、地爲めに大いに動くなり」。復、尊者阿難に語りたまふ、「若、第一聲聞、般涅槃を取り、如來、涅槃を取るに、是の如きの瑞應有り」。阿難、佛に白して言はく、「今日、世尊も亦壽命を捨てたまふ耶」。世尊報へて曰はく、「是の如し、阿難。我も亦壽命を捨てん」。是の時、尊者阿難、自ら地に投ず。廣說すること、契經の如し。世尊に白さく、「我、面たり、如來從り聞きて、受持し諷誦す。諸有の比丘の所修の四禪・神足、劫に住し、若は無數劫に至らん」。廣說すること、契經の如し。是の時、世尊の意移動せず、此の如きの言教を吐き、便ち是の說を作したまふ、「云何ぞ、阿難、我、再三汝に告げしにあらず耶」。是の時、尊者阿難、尊みて二語無し、便ち默然として住す。猶、大海中の船の破壞して、彼岸に至るを得るに由無きがごとし。世尊に白して言はく、[一四〇]「隨葉世尊從り已來、彼の三耶三佛の所有の境界、人民皆悉く長壽成就せり。今日、如來の境界、修行したまふ所甚だ勤苦し、精進惠施に、限量有ること無し。今日の如きは、衆生の壽命、甚だ短

【一三八】萠。麗本に明とあれど、今は、宋元明三本に依りて萠とす。

【一三九】この一段は、釋尊の入滅せんとして、地動の瑞あり、よつて阿難の問によつて、壽命短促、剛强難化の世時に出世せる所以を叙す。

【一四〇】隨葉世尊。玄應音義二十一によれば、毘舍浮（Viś-vabhū）の譯なり。曰く、毘攝浮、舊言毘操羅、亦云隨葉佛、此云種種變現也。

なり。一切世人、供養せざる莫し。【一三二】如來の身所に、彼の舍利を供養し、及び鉢と三法衣とを尊者阿難に與へんとて、到り已りて便ち是の語を作す、「我が事ふる所の師、今已に滅度せり」。尊者阿難、均頭沙彌に問ふ、「汝の師は、是誰ぞ。何等と名くと爲す。」「我が事ふる所の師、【一三三】優鉢低舍と名く。今、尊者、已に般涅槃せり。此、尊者舍利弗なり」。是の時、尊者阿難、是の如き語を聞きて、便ち愁憂を懷き、【一三四】愚癡城裏に彼の舍利を納め、心意迷惑して、覺知する所無し。須臾、愁煩して立ち、便ち均頭沙彌を將いて、世尊の所に往至し、是の語を以て、具さに世尊に白さく、「我、今日、身、本の如くならず。故は彼の尊者舍利弗が般涅槃を取りたりと聞けばなり」。廣說すること契經の如し。世尊告げて曰はく、「彼、戒身を持して去れり耶。及び我が所覺の法をも亦持して去れり耶。所謂【一三五】四意止なり。」廣說すること契經の如し。「然るに、復、阿難、行は久しく保つ可らず、皆當に壞敗すべし。阿難、無常の行は常存する者有ること無し。亦善行を觀ぜざる無し。阿難、行は依怙する所無し。阿難、【一三六】苦の更樂を興起するは、顚倒の想を懷けばなり。阿難、行は無我にして、自在なることを得ず。阿難、【一三七】行は捨つ可きこと難し、常に有教を受けよ。阿難、行は害する所有り、皆悉く空寂なり。阿難、當に遠離すべし。彼の行は苦樂の想を起せばなり」。

是の時世尊、均頭沙彌に告げて曰はく、「汝、此の舍利を授けて、我が手中に著けよ」。是の時、均頭沙彌、即如來に授與す。是の時、世尊、黃金の臂の極めて軟細なるを申べて、而して之を受く。爾の時、世尊、舍利を受くる時に當り、彼、極めて清淨にして、瑕穢無く、心意歡喜す。覩る者皆歡喜して、冥闇處に著く。是の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、「汝等比丘、此の舍利弗の舍利を禮して、自ら嘆譽すべし。彼の名聞遠布し、聲聞中に於て、尊最妙なり、唯一有りて存せるのみ。彼の一切は皆悉く過ぎ去れるも、諸行の朋類、是の樂を得んと欲せば、神足を現じて、垢濁を去らん。彼、復是の明有り、皆悉く周遍せり。設は、當に是の色有るべし。當に彼の智慧を拜手すべ

【一三二】供養如來身所彼舍利及鉢三法衣、與尊者阿難到已。

【一三三】優鉢低舍(Upatiṣya)。舍利弗の父の名。舍利弗も亦かく稱せられたり。

【一三四】便懷愁憂、納愚癡城裏、彼舍利。納の字、三本には綱に作り、裏を三本には裏念に作り、舍利を三本には舍利弗に作る。然らば「便、愁憂の綱を懷き、愚癡城裏に、彼舍利弗を念うて」となるも、こゝは舍利弗の舍利を見て、悲嘆せるの意なるべし。

【一三五】四意止。四念處の觀法なり。

【一三六】興起苦更樂懷顚倒之想。更樂は觸の古譯なれば、行に對して苦を感ずるは、これを樂なりと思ふ顚倒心より來るといふ意ならん。

【一三七】行難可捨常受有敎。

報へて言はく、「二義を以ての故に、閑居處に住し、或は復、閑居の德を嘆する有り。[一二六]自ら現法中に於て、觀樂を得んと欲す。[一二七]後世の人の爲めの故に、照明と作り、是の如きの德を布現す。是を以て、苦行を修勤す」。是に、世尊、告げて曰はく、「善い哉、善い哉、大迦葉よ、常に、當に、閑居を樂しむべし」。廣說すること契經の如し。是に於て、便ち此の偈を說く、

彼何の自在をか得て、　弟子、苦行を修する。　清淨にして衆惱無し、　月星中の明の如し。
如は、今、狐疑無く、　彼、是の大德有り。　當に正法を牢持し、　一切の穢を淨除すべし。

七十四、舍利弗入滅

[一二八]是の時、尊者舍利弗、自依甚深にして邊際有ること無く、所知大海の如くにして、邊涯有ること無し。外學と論議して、皆悉く降伏するに堪任す。善法を稱揚して、彼の意を失はず。愛欲に於て、解脫を得たり。意の覺知する所、生死の趣く所、皆原本を盡くす。便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、世尊に白して曰はく、「我、是の如きの義を起し、皆悉く牢固なり。彼彼、外道異學處に止住せしも、今此の處に到り、甘露を服して一切の結縛を除かんと欲す。意、亦我が處所に於て著する所無し。世尊、我が爲めの故に、是の如きの義を說きたまへ。當に惱患を除くべし。」是の如きの義を說き已るに、諸の凡夫人、皆悉く愁憂を懷き、學者亦愁憂を懷き、諸の狐疑無き者も、皆悉く聞かんと欲す。是の時、世尊、須臾、思惟し、尊者舍利弗に告げて言はく、「此の[一二九]行は、皆是有爲なり。」是の時、尊者舍利弗、常に空閑處を樂しみ、法を好喜し、法を拜す。繞ること三匝にして、便ち直身にして如來の形を觀じ、[一三〇]那羅陀村中に往詣し、草を以て地に布き、師子奮迅三昧に入る。已に彼の三昧に入れるは、如來所止の方便なり。彼に於て而して般涅槃す。是の時、[一三一]均頭(州鷄切)沙彌、常に尊者舍利弗の與に、當に與ふべき所を供給し、尊法輪を轉じ、佛事を修行す。最大の聲聞

【一二六】二義の中の第一義なり。

【一二七】其の第二義なり。

【一二八】この一段は、舍利弗尊者が、故郷の那羅陀村に於て入滅し、弟子の沙彌均頭が、その舍利を持して、阿難に至り、倶に世尊に至れるを敍す。

【一二九】行。諸行無常の行にして、遷流する一切の法をいふ。

【一三〇】那羅陀(Nalanda)。後に千餘年を經て、こゝに那爛陀精舍あり。佛教學者の淵源地となれり。玄奘渡天の時代は、隆昌の極時なり。

【一三一】均頭(Kunti)。婆羅門の子なり。七歲の時、父母、舍利弗に從つて出家せしむ。舍利弗、之を得て祇園に至り、漸く結を得て阿羅漢果を得しむ。均頭既に法を得て、師恩を思ひ、終身沙彌として師に承事し、供給せり。均頭又は均提に作らる。

七十三、大迦葉

【一二二】爾の時、尊者大迦葉、苦行を勤修して、身體疲厭す。彼の園觀處に於て、自ら娯樂し、【一二三】火に事へて懈息無く、已に衆園繞せるに。僧迦梨壞し、髮爪皆長く、諸根淳熟して、內に婬を降伏す。經行往來し、觀察する所、皆悉く之を知る。閑處を樂しみ、名稱遠く聞ゆ。故に大慈悲を得て、彼と尊德等しき者無し。天人の供養する所、是大福田なり。加敬恭拜すれば、諸の困厄に遭ふ者、皆之を度脫せしむ。彼の生死を度し、法相を布現す。歡樂を布現して、擁護すること父に事ふるが如く、異ること無し。供養する所、山の如くにして動かす可らず。異法を歡樂するが故に、頭面に世尊の足を禮し、閑靜處に獨一ならんことを欲す。世尊所に往至す。歡喜踊躍して、如來を觀察せんと欲し、一面に在りて坐す。爾の時、世尊、少欲の德を嘆譽せんと欲して、便ち尊者大迦葉に告げて曰はく、「汝、今、迦葉、年老い形熟し、復少壯の意有ること無く、長老の身の堪任する所無し。漸漸に衰耗し、盛意已に盡きたり。更に著る所の補納の衣の極重なるを與にせされ。汝の今の身を計るに、此の重衣に堪勝ならず。汝の年已に邁けり。諸の長者の、衣を持して施す者有らんに、便ち納受す可し」。是の時、尊者大迦葉、諸の法想【一二四】具はり、如來に恭敬心あり。卽、坐從り起ち、長跪して、世尊に白して曰はく、「生死長遠にして、義皆眞ならず。此の樂痛を受け、心常に愁憂なり。諸有の豪尊長者、亦彼の家に至るを樂はず。已に自ら【一二五】阿練し、復阿練の德を嘆ず。自ら少欲にして、復少欲の德を嘆ず。然るに、世尊、諸天、證知したまふ。我、今世の果に於て、若は有力なるも、無力なるも、皆悉く頂戴せり。況んや、我が今日の身、婬怒癡無く、憍慢は皆悉く盡き、清淨にして瑕無く、世を離れて世と相應せざるを、皆悉く之を得たるをや。今、當に、云何ぞ、此の麤服を捨つべき」。是の時、世尊、告げて曰はく、「此れ云何。」廣說すること契經の如し。是の時、尊者大迦葉

【一二二】此一段は、大迦葉の少欲苦修の德を叙す。少欲苦修とは、頭陀行のことなり。

【一二三】事火。大迦葉は事火婆羅門なりき。神の表現として火を尊敬し、朝夕之に禮拜するなり。

【一二四】具。麗本に其とあれど、今は宋元明三本に依る。

【一二五】阿練(Āranya)。比丘の住所。

根有ること無しと。然るに眼根は所造無し。此れ何に由るが故に。或は外は根果に依らず、本或は影果に同じければなり。此に於て、云何が、等一切身根なりと言ふや。過去、無根に依らざるを以て、草果の根壞敗有り。復、是知る所なり。外は情有ること無く、然も內は情有り。』中に於て是の說を作す。云何ぞ情想は果實有り耶。猶、外の花實の如し。此の種果亦復是の如し。是を以ての故に、或は情有り。或は復共に情を同じくす。中に於て、實に有ること礙無し。云何ぞ、當に、念有るべき。』中に於て、是の說を作す。此の義、云何。或は是の說を作す有り。彼の處所は住處有ること無しと。答へて曰はく、猶、彼處所無きが如し。便ち是の淸淨有り。外は壞敗無し。便ち是の因緣有り。』中に於て、是の說を作す。彼の四大は增上有り、所依に果有る者の如しと。是の事然らず。此れ復、是知る所なり。所作の行業外に現はれず、猶、內の所有の如し。不住を名けて樹と曰ふ。住なる者は樹に非らず。（中に於て、是の說を作す。云何が此の地持、壞敗する所無き耶。此の地亦歎風有り。若は彼に依りて是の堅相有り、風の爲めに吹かれて、便ち之を知る可し。此亦是の如し。然るに、外に藥草樹木有り。無常斷絕して壞敗と相應す。當に、是の觀を作すべし。因緣は無常なり。苦・空・無我も亦是の如しと。然るに外は空にして所有無し。衆生も亦是の如し。猶、無我の如し。內を觀ずるに、亦是の如し。況んや、當に、內に所造有り、內に思想を懷くべきをや。彼は皆是外なり。猶、木を濕ほし種うる時、便ち生ずるが如し、此亦是の如し。根は意の敎ふる所なり。猶、身心の法に依りて往來周旋するが如し。此れ皆所依無し。猶、〔二三〕壽・煖・命・識の如し。此亦是の如し。終始有ること無し。

彼の志性趣を觀ずるに、外及び樹木草は、實に空にして果實無し、法に於て當に分別すべし。彼已に壞敗有り、身等は卽思惟なり、彼の塵勞の結を壞し、五根永く以て滅す。

【二三】壽・煖・命・識。小乘有部の說に依れば、過去の業より非色非心の體を生ず之を命と云ふ。命の體は壽にして、一期の間、煗と識とを持す。煖は煗と同義。

ずるに、皆外に依りて生ず。內に於て、云何が生ずる。是の說を作す有り。內の識處に於て、等しく是の觀有り。是の如く、外住は種に隨ひて便ち生ず。中に於て是の說を作す。日月現るるも光無きが如く、此各各相依ると。』所說有り。外に依りて亦生ずと。此の義云何。答へて曰はく、[一六]今に於て相依らずんば、食は水の爲めに漬けられ、火の爲めに煮られて、安くにか形體を處せん。或は風の爲めに吹かれて、地の樹を生じ、風の來往に隨ふが如きを、中に於て、皆悉く之を知る。身は風に觸れられ、耳は聞く所有るを、時に亦能く識知す。彼を[一七]細滑と曰ふ也。[一八]堅は外に依る。彼智有るに非ず耶。是の如きは亂想なり。若、外果の所生、皆悉く觀察せば、外は內に緣る。』中に於て、是の說を作す。一切は[一九]思惟に非ずして色相なり耶と。是の觀を作さざるは、四大を觀察するが如し。是の如きの境界、皆悉く之を觀ず。或は一果を觀じて、眼識若干の果を生ずとて、識を以て首と爲す、是の故に壞敗す。』中に於て、是の說を作す。外、亦若干の果を作す有り。猶、彼の色の半靑半黃なるがごとし。猶、樹の同一根より若干種の果實を生じ、秋に則ち果有ること無く、或は時に隨ひて生ずるが如し。此の生死の樹も亦復是の如し。身を最本と爲し、根を枝葉と爲す。猶、三昧の境界の如し。是の故に識の果を施すを上と爲すと。是の如くにして而して覺知す。眼を以て彼の樹に喩へんに、若は彼の眼識所攝の色有り、其の根、今、色云何が成ずることを得ん。所謂所說の觀の如し。觀を便妙と爲す。彼、是の如く現じ、是に於て復現ず。[二〇]諸の所生の種子漸漸に長益し、彼に於て生じ而して果を成す。時に隨ひて萎るるが如し。彼の果所、因無く、等しく是の果有り、所謂心垢の染する所なればなり。』中に於て、是の說を作す。眼識皆悉く知ると。』中に於て、是の說を作す。中間に於てせず。猶、彼の色は彼の果に緣りて生ずる如し。是の如く意識に緣りて、此の生死の樹有り。彼の眼識を首と爲す。』中に於て、是の說を作す。猶、胎の漸漸に長ずるが如し。彼に於て眼識を生じ、是の如くして眼識有りと。』中に於て是の說を作す。眼識の中間に於て而して死せず、身

【一六】於今不相依食、爲水所漬、爲火所煮、安處形體。

【一七】細滑。觸の古譯。

【一八】堅依外彼非有智耶、如是亂想若外果所生、皆悉觀察外緣內。

【一九】一切非思惟色相耶、不作是觀、如觀察四大、如是境界皆悉觀之。

【二〇】諸。麗本には謂とあれど、宋元明三本に隨ひて諸とす。

りと雖も、彼に於て無畏なりと雖も、彼の義に愚癡有り。復、承事供養し、恭恪の心ありと雖も、然も數數修行せず。復修行すと雖も、亦經歷すること久しからず、中に於て亦恐懼の心有り。彼に於て久しく修行すと雖も、意捷疾ならず、中に於て故に恐懼有り。捷疾の意有りと雖も、亦親近せず、中に於て故に恐懼の心有り。彼親近すと雖も、亦實依せず、中に於て亦恐懼の心有り。意依ること善なりと雖も、自ら此の善無し、彼の衆中に於て、故に恐懼の心有り。若は復、遍く此の意有り、然れども巧便ならず、彼、衆中に於て故に恐懼の心有り。

彼の世尊、菩薩爲りし時、師衆に承事し、三界に寶幢を牢要にす。[一四]錠光佛從り以來、三耶三佛、若干劫に、極淨にして瑕穢無し。一切、幽として照さざる無し。彼の覺意に緣りて是の如きの形類有り。所爲成就せり。彼の道の爲めの故に、九十一劫にして造行す。爾の時、世尊、名號を受くることを得、是の如きの黠慧を起して成佛す。智慧と相應し、意悉く覺悟す。彼の善意に依りて、一切皆悉く辨じ、一切の意著する無し。彼、第一に染汚無く、亦恐懼の心を懷かず。是の故に、世尊、是の如く常住にして、恒に三昧に入る。彼の智に於て勝有り、無數世に勝有り、是の觀察を作す。其の難問するもの有れば、終に猶豫せず、文字缺くる無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

身は師子王の如く、　彼の園觀を度らんと欲したまふ。　群獸皆恐怖して、　各東西に奔走す。
是の如く所著無く、　大衆、勇猛を現ず。　生死の原を樂はず、　法を以て天人を度したまふ。

七十二、世間虛假

[一五]爾の時、世尊、一切世間は、猶、草木の如しと觀ず。所謂、云何が當に試むべき。最初、種に五行有り。猶、外の草木のごとし。此に於て、何の五種か有る。」復是の說を作す。云何が彼の樹、展轉して相猗る耶。種種の結を生ずるは、苦諦の所斷なり。外亦生有り、五種の行有り。彼の苦地の所生を觀

【一四】錠光佛(Dīpaṃkara)。過去佛の最後にして、釋尊は、最後の菩薩として、この佛より、將來成佛の授記を得たり。

【一五】此一段は、一切を草木の如く、空にして、實なしと觀ずべきを說くもの〻如くなるも、譯文生硬にして、且錯簡あるべく、意義頗る捕捉し難し。

彼の衆生徳有り、諸の色想を壞敗し、眼淨くして瑕穢無し、覺最勝を拜手しまつる。

七十一、無所畏

[一〇九] 彼の三耶三佛に、是の如きの功德有り。是の如く自ら覺知し、是の如く甚深にして、極めて微妙無比なり。中に於て自ら諸法を覺る。[一一〇] 設、復、人有りて我を誹謗して言はん、「彼、或は聲性有りて、與に相應すれども、是の如きの有餘有り」。如、是の説を作すること有らば、餘の沙門出家、若は婆羅門の、聰明黠慧にして、若は天に住止する、若は欲界の魔天、若は梵天、色界の妙なる者ありて、是の如くにして而して説法すと作すに、我亦彼の相を見ず、亦因緣無きこと、彼の所説の如し。若は復其の相を見ず、云何ぞ等正覺せざらん。』亦是の説を作さん、「彼が説法を見るに、安隱處に逮りて而して自ら娛樂し、等正覺を爲し、亦無畏處及び餘の無著に到れり」。廣説すること、契經の如し。「彼を最妙と爲す、無著にして不搖動の處なり。若干の彼の名無し。當に、梵法輪を轉ずべし。彼の梵世尊、此の法を轉ぜん。所謂賢聖八品道なり。當に、何處に於て、而して轉ずべき」。』或は是の語を作す。『此の衆に於て轉ずるを妙と爲す。此の衆に於て、而して師子吼し、亦空處に於て而して轉ぜじ。此に於て師子吼せば、亦恐畏無からん。』』復是の説を作す、「彼の衆を降伏せんと欲するが故に。此に最初に畏るる所無し。第二に、諸漏未だ盡きず」。此の義云何。所謂有漏障中に、諸の恐畏有り。[一一一] 若は復、斷智具足せば、此れ第二・第三の我が所説の道法なり。此れ何の義か有る。所謂是の如きの實有り。彼の爲めの故に求む。彼、是の説を作す、[一一二]「此れ諸の內入を造るは、此れ第三、第四に所縛有り。彼に十事の、人の修する所の行あり。衆に在りて恐畏無し」。[一一三] 或は恭恪心無く、彼、是の如きの威儀有ること無し、是を以ての故に、大衆に於て恐怖を懷く。復、恭恪心を爲し、明黠なること如實にして、此の威儀有りと雖も、彼、亦復恐畏有り。衆に於て、復恭恪の心有

[一〇九] 此一段は、佛陀が轉法輪するに當りて、一切の怖畏なきを叙す。

[一一〇] 此一節もまた訓讀しがたき部分多し。設復有人誹謗我言、彼或者聲性與相應、有如是有餘、以下の如し。

[一一一] 若復斷智具足、此第二第三我所説道法。

[一一二] 此造諸內入、此第三第四有所縛。

[一一三] この後に、恐怖心ある十事を説く。

如し。無常の教を聞きて、所樂に味著し、各此の戀愛心有り。爾の時、世尊、師子鹿王爲り。意に悉く恐懼無し。其の道果を成じて、亦退轉せず。觀る者皆歡喜し、止觀微妙なり。彼の功德を知り、愚惑有ること無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

猶、彼の師子吼のごとし、聞く者皆驚愕す。智を以て法を分別し、種種に別名有り。生死の恐懼に於て、佛德や議すべからず、是の故に師子を拜しまつる。師子は王中の王なり。

七十、七覺支

[一〇五]是の時、世尊、人中の雄象爲り。一切智慧皆悉く具足す。所有の支節、首と相稱ふ。所謂、是の智慧の首あり。智慧に因りて、念有り。念を頭と爲し、彼に依る。止觀を腹と爲し、以て休息解脫し、亦師學無く、自然に辦具す。信根を以て、妙法と爲し、信力を以て、而して縛し、是の如きの力護有り。清淨以て牙と爲し、惡趣を除く。慚愧を營從と爲し、身妙以て耳と爲す。佛法身滿ちて亦害意無く、而して梵行を修して、其の原を究竟し、其の方便を求めて、勇猛不退に、一切世の微妙なる、能く此の功德に過ぐる者有ること無し。猶、[一〇六]安明山の如し。禪を修習すること、彼の利刀の如し。[一〇七]覺意自在にして、七處安詳なり。無常・苦・空の行、一切法皆悉く無我なり。涅槃を滅淨と爲す。所持は甘露の如く、十力に力勢有り。[一〇八]觀る者皆歡喜し、以て憍慢の行を破壞す。解脫の果報の緣依る所、彼の甘露や不校計なり。本意の所造に著する所、解脫甘露の果を食す。甘露の如きもの、利養を得、諸の穢濁を除く。以て食と爲し、亦藏貯せず。九十一劫に於て、善く自ら降伏す。爾の時、便ち是の定心有りて、衆亂有ること無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

和悅して衆亂無く、極清淨の意定まる、無量德を拜手しまつる、人中の雄象王なり。

【一〇五】此一段は、如來の七覺支成就を叙し、特に定心を讃嘆す。

【一〇六】安明山。須彌山のこと。

【一〇七】覺意。覺支又は菩提分の古譯なり。こゝは世尊の七覺意の成就を叙するものなるべし。之を新譯に對照するに、智慧は擇法に、止觀は精進に、清淨は喜に、慚愧は除に、身妙は捨に、禪は定に、念は念に配當せらるべし。七處安詳は、七覺意の成就を言ふ。

【一〇八】觀者皆歡喜、以破壞憍慢行、解脫果報所緣依、彼甘露不校計、所著本意所造、食解脫甘露果、如甘露者得利養、除諸穢濁、以爲食亦不藏貯。

所、亦復能く辦ず。諸の結使を拔くが故に、[九八]衆を最妙と爲す。[九九]倍、種種の相生じ、受取を妙と爲す。若は自ら一切生を求むるを妙と爲す。當に、最福田を拜手すべし。人民を擁護する所、王は最第一なり。是の觀を作さされ、彼の義甚深なりと。衆の穢法を捨つるは月最勝爲り。諸法を分別するは、[一〇〇]毘沙門第一爲り。聲響淸徹するは、師子吼最第一爲り。良福田を種ゑ、增上學有らんと欲して、一切の田業を捨つるは、[一〇一]釋提桓因第一爲り。一切の世間には、功德第一爲り。涅槃道を示現するは亦勝爲り。一切衆生を愍護し、一切縛を解くは妙爲り。是に於て、便ち此の偈を說く、

如來の功德、　一切普く悉く備はり、　釋種の家に止住したまふ、　猶、海の衆寶を集むるがごとし。　及び餘の佛法衆、　三世界に充滿す。　彼岸に往くことを求めんと欲せば、　當に如來に從ひて取るべし。

六十九、獅　子　吼

[一〇二]是の時、世尊、人中の師子雄爲り。一切智を悕望して、色和悅し、咽喉の功德無比なり。佛法の功德に四神足有り、甚だ安詳にして、麤獷の言を去離す。直身、正意にして、衆智具足す。眼は淸淨根の萠芽爲り、衆法を分別して、其の德を稱揚す。[一〇三]未知智は、猶、甘露を雨らすがごとく、沮壞す可きこと難し。十力具足して、勇猛彼に超ゆ。一切の所趣を覺知し、而して往いて救濟す。大慈悲・禪・解脫の四等、未だ曾て缺けず。亦愛欲の味無く、食を觀て而して食す。無所畏を得て、彼の衆を降伏す。彼は、猶、師子鹿王の如し。鳴吼の時、其の聲を聞く者、皆四趣に馳走し、谷に止るは谷に趣き、穴に止るは穴に趣き、鳥は虛空に飛ぶ。此も亦是の如し。若、無常の聲を聞けば、此の凡夫人、長壽に及ぶとも、皆恐怖を懷き、身見に於て、皆馳走して去る。猶、彼の龍象の、師子の聲を聞きて、覺えず便利し、或は[一〇四]羈絆を絕ちて走るが如し。諸の長壽有る色界の諸天も、亦復是の

【九八】衆は僧伽(Saṃgha)の譯なるべし。
【九九】倍種種相生受取爲妙。
【一〇〇】毘沙門。毘沙門天(Vaiśravaṇa)は多聞天とも云ひ、如來の道場を護りて、法を聞くこと多し。又護法、施福の天王なり。
【一〇一】釋提桓因(Śakra devānām Indra)。忉利天の王なり。
【一〇二】此一段は、如來の獅子吼說法の無比なるを敍す。
【一〇三】未知智猶雨甘露、難可沮壞。
【一〇四】羈絆。馬を繫ぎとめるたづな。

觸れず、身意の依倚する所、是の如きの衆事有り、幻惑を微細と爲す。

六十七、梵　行

[九五]是の時、世尊、梵行を爲したまふ。云何が梵にして、不亂なりや。彼に從つて學ばず、獨遊にして侶無し。人中に於て、功德威儀最微妙爲り。一切衆生に無著なり。所爲の業、能く及ぶ者無し。衆生に量有ること無く、一切微妙の法に依倚す。法は自然の故に、一切智壞す可らず。大要道を成じ、所欲成就す。果を必すること疑無く、諸の功德具はる。聲聞圍繞し、一切德を生じ、一切微妙なり。爾の時、世尊、彼の衆妙の形體に於て、最第一にして、衆德成就す。幽冥を除き、世に所著無く、三世に無著なり。諸の結使を棄つるを以て、大慈悲を得、心に亂想無し。已に彼の憂畏の處を度して、安穩處に至る。長夜に其の心を降伏し、自ら得て彼に授く。是に於て、便ち此の偈を說く、

梵行を最妙と爲す、　慈の功德成就せり、　若は彼、此の教を聞けば、　天人皆拜手しまつる。　正法に於て二無く、　彼の業亦二無し、　必ず當に賢聖と成るべし、　是の故に聖を拜手しまつる。

六十八、衆　寶　功　德

[九六]爾の時、佛世尊[九七]三耶三佛、忍地を最微妙と爲す。諸の結使を除きて、亦所著無く、火の燒かさる所なり。悟る所の事勝り、風亦復勝る。功德無畏にして、衆の爲めに重擔し、甚深に相應して、思議す可らず。猶、師子の怯弱心無くして、顏色和悅するが如し。彼が爲めに外學するが故に、已に無著を修す。猶、蓮華の染汚する所無きが如し。自ら衆に依るが故に、自ら意を破壞し、悕望する

[九五] 此一段は、世尊の梵行を叙す。

[九六] 此一段、佛の功德を叙す。

[九七] 三耶三佛（Samyak-saṃbuddha）。正徧智と譯す。

世に修善少なりと雖も、思惟して憶して忘れず、亦彼の欲を受けず、衆生を度せんと欲するが故なり。況んや、復甘露の、世尊の一切の妙を開くをや。云何が、功德を造りて、彼の智、時に隨ひて興ら(しめ)ん。

六十六、覺知生本

[九三] 爾の時、世尊、云何が、周旋來往して、生の本を覺知する。所謂此等の語に二種の風有り。形體の功德と心意の所覺となり。是を二風と謂ふ。彼の形體風とは、諸の愛念を生ずるなり。意の所覺とは、猶、華の敷きて鮮明淨潔なるが如し。猶、彼の風の如し、解脱を觀見して、所爲の事勝る。猶、雪の水と成るがごとし、此の心雪も亦復是の如し。內外の境界を攝持し、清涼風有りて起り、彼の意を覺知す。彼の持は、無量にして、破壞せず。六境の機關有り、外、四大の爲めに使はる。四大は根力の繫る所、彼に軟風有りて起り、漸漸に智有りて生ず。亦彼の足を擧ぐる時の如き、皆是本行の德にして、本の所爲の相を失はず。蹕骨の來往を行ずる所、皆火有りて起り、一切の骨に於て、屈伸卷舒し、筋脈漸く緩くして、悕望する所あり。若、復、視瞻し、開目し、閉目するに、內身の根、更樂、漸漸に熾然し、彼に隨ひて來往す。若、復、食噉し、屈伸卷舒す、皆形に由りて造す所、及び餘心の所造の行なり。煖風に依りて、顚倒風を除去し、亦脣齒聲響本意所造の一切種子の法を吹落す。然るに、彼の風處の所有の勝に、皆此の語有り、是の如きの聲響有り。彼是の說を作すに、福を爲さず。云何ぞ繫縛を爲さざらん。我、是の說を爲すに、此の機關有り。外、壞敗有り、內、衆行有り。是を作さざる時は、便ち盡くる有り、便ち長養有り。[九四] 猶、智車の此に於て載せらるが如し。是の如きの豪貴の法に緣り、彼に緣依する時、想顚倒す。是に於て、便ち此の偈を說く、

此の甚奇甚特は、空・無智を覺知し、展轉相依倚す、機關を最要と爲す。亦彼の意に

【九三】此一段は、世尊が生本を覺知せるを叙す。譯文生硬にして、その意義を捕促し難し。

【九四】猶如智車於此見載、緣如是豪貴法、緣依彼時想顚倒。

を作し、比丘に語りて言はく、「此れ極めて微妙なり、共に娛樂す可し」。時に、鉢默比丘、報へて言はく、「我盡く此を觀ぜり。亦、當に餘を觀ずべし」。旃陀梨言はく、「餘とは何者か是なるや」。鉢默報へて言はく、

我。今果實を觀ずるに、　欲は最第一の苦なり、　終に當に地獄に入り、　彼の鑊湯の惱を受くべし。

是の時、旃陀梨、報へて言はく、「止みね、止みね、比丘よ。我に語りて是の言を作すこと莫れ」。鉢默比丘、報へて言はく、「此の語は、是愚癡なり。我を幻惑せんと欲すとも、我は爾と同じからず」。彼の旃陀梨、見已りて、便ち大火坑を作る、塵曀有ること無し。時に、鉢默比丘、報へて言はく、「我、已に此の火坑を見たり」。旃陀梨報へて言はく、「若、女に親近せんを欲せずば、此の火坑に入りて死せんに如かず」。是の時、彼の比丘、便ち是の思惟を作す、「此の火、恐懼なりと雖も、火を避けて欲に親近せば、然も欲は大火より熾なり。設、欲を犯さば、後に罪を受くること無量ならん。寧、今日此の火坑に入るとも、此の欲を犯さざらん。然り、我が師は神通無比なり。云何ぞ、當に、師教に違すべき。是を以ての故に、當に、火坑に入りて死すとも、欲を犯して而して生きざるべし。今倶に二事を捨つ、云何ぞ、三世に如來の立てませる禁戒に於て、今、我、當に、犯すべけんや。是を以ての故に、火坑に入りて死せん」。是の如く思惟し已り、僧迦梨・鉢を持ちて、以て彼の人に施さんと欲す。時に、旃陀梨、報へて言はく、「是の衣鉢を用つて、(何をか)爲さん」。鉢默比丘、報へて言はく、

今此の諸の梵行、　我が衣鉢を持つて施す。　諸有の集聚する者に、　我が語を持つて彼に告げよ。　比丘を鉢默と名く、　此の厄難處に遭ひ、　今火坑に投じて死し、　彼の欲愛を受けずと。

乃至、彼の二人、倶に出家學道す。廣說すること、契經の如し。是の時、復、此の偈を說く、

【九二】僧迦梨(Saṃghāṭi)。比丘の所有する三衣の一にして、說法乞食する時に著する衣なり。

六十五、鉢摩迦比丘

八九當に、云何が、世尊を觀察すべき。所謂、是の如きの無漏の智慧有り。彼、道場を觀じ、處所亦力勢を見る。世の爲めの故に、世の光明を觀ず。其の中間に於て、所修の苦行、皆悉く觀察す。彼彼の衆生に、慈悲心を觀じ、彼を安隱ならしめんと欲して、無量勤苦す。是の如きの苦行を觀じて、異境界に於て、自ら觀察し、大衆中に於て、如來說の微妙の法を觀じ、義を分布して、其の握法を觀ぜしむ。若は法眼淸淨にして、亦彼の法身を觀じて、衆生の想有ること無し。若は、復是の觀を作せば、亦禁戒を言はず。曾て聞けり。尊者を優波斯と名く、弟子有り、鉢摩迦と名く。*摩鍮羅境界に往詣し、彼に於て止宿す。彼、到る時、衣を著け、鉢を持てり。廣說すること契經の如し。九〇人、未だ曾て見ず、彼の威儀を解せず。便ち婬女村中に入る。彼の婬女、此の比丘の年少端正にして、身に塵埃無きを見る。見て歡喜を懷き、欲意熾盛なり。時に、彼の比丘、便ち婬舍に入る。是の如きの結使を觀じ、結を造りて、是の如く解脫の法を穢すを欲せず、速に此の法果を得たり。是の時、比丘、便ち是の語を作し、而して此の偈を說く、

欲は彼の毒藥の如し、　欲は不淨行爲り、　欲は壞婬色爲り、　墮する人は惡趣に入らん。

是の說を作し已り、便ち退いて去る。彼の人、婬意熾盛なり。彼の比丘の爲めの故に、便ち九一旃陀梨の呪術を結せんとて、彼の旃陀梨に是の如きの義を語る。是の時、旃陀梨、此の女人を莊嚴し、村落の處を化作して、比丘の來るを致す。「汝、此の處を觀察せよ。猶、彼の釋提桓因の宮殿のごとくにして異ること無し。夏堂高廣にして、亦比有ること無く、莊嚴の臥具、無數の衆色、彼の夏堂上に在り、所臥の處、文繡の綩綖(坐褥)あり。此の地處を觀ずるに、種種の華香其の上に散す。一一の周匝に、種種の靑蓮、芳蘭として其の邊に生ず」。是の如きの觀を作し、便ち是の結呪

【八九】この一段は、如來が無漏の智慧を以て、常に衆生を觀じて、之を安隱ならしむるを叙し、如來の念力によりて、婬女の火坑を脫せる鉢摩迦比丘を引例す。鉢摩迦比丘と婬女との因緣は、摩登伽經に說かるゝ阿難と婬女との因緣に類似す。

*摩鍮羅(Mathurā)。

【九〇】人未曾見不解彼威儀の中の不の字、或は誤りて加はるか。然らば「人未だ曾て彼の威儀を解くを見ず」ならん。

【九一】旃陀梨(Caṇḍālī)。屠殺を業とする下賤なる女人。

[85]是の時、云何ぞ復此の苦を生ずる。所謂、自相境界は、五根具足し、若は彼の自相境界[86]智と相應して廻轉すれば、是の故に、極めて清淨なり。愚者は覺せさる所、智慧と相應せざればなり。復、利根の愚者有り、之を盲冥と謂ふ。世尊と諸の聲聞との本所造の行は、智慧善根の自相合會し、相は所修の如くして、苦賢聖諦皆悉く觀察す。云何が、當に、此の生死苦を觀ずべき。[87]苦賢聖諦有り、悉く無常なりと知りて、牢持にして而して捨てず。皆悉く同一なりと、是の如きの心を起す。苦に於て苦を觀ずる、彼を最妙と爲す。苦に於て空を觀ずるは、最初の微妙にして、等しく彼處に度る。苦に空を觀ずる時、彼は皆是分散の法なりと、自然に觀察すること是の如し。苦に於て無我を觀ずるは、彼の智信の所成なり。最初に是の頂法有り、善く長益し、數數方便を求め、等智の功德、悕望する所無し。三昧林は缺漏せず、外塵永く盡きて、亦所著無し。想思惟を以ての故に、塵埃たる一切の境界の苦を除去して、敗壞する所無し。有愛を除去して、亦所畏無く、亦暴亂無し。顏色和悅して、自ら境界を觀ず。彼に於て、光を現じ、三世に於て、大燈明を起す。彼の結を害し、惡趣を拔濟せんと欲し、彼の衆の爲めの故に、彼此の心無く、亦懈怠せず。甘露味を得て、彼の章を分別し、等しく生死を度するが故に、[88]四境界に流轉す。彼の衆生を照明せんと欲するが故に、苦行を勤行して、一切に周窮し、亦處所無く、亦顚倒無し。顚倒を除去する者は、甚深にして、測る可きこと難し。是に於て、便ち此の偈を說く、

若は、苦有りと明す時、　清淨にして量念無く、　無味にして極めて鮮明なり、　人の嘆譽する所なり。　彼、是の如きの智あり、　音響相娛樂す、　佛の十種の力を觀ずるに、　世の衆生の類を護したまふ。　如、禁戒を見る有るは、　如來の長益したまふ所なり。　執志は金剛の如く、　一切は空なりと分別したまふ。　若は愛の根本を拔きて、　亦衆の苦惱無し、　當に息心を拜手すべし、　最勝にして比有ること無し。

【八六】智の字、麗本に知に作る。今三本に從つて改む。

【八七】知有苦賢聖諦悉無常牢持而不捨。こゝは苦諦に於て、無常・苦・空・無我の觀を爲すを叙す。

【八八】四境界。地獄・餓鬼・畜生・修羅なるべし。

と爲す、所依離れざればなり。境界を苦と爲す、外色を招致すればなり。苦痛を苦と爲す、形體を燒くが故なり。樂痛を苦と爲す、苦に由りて生ずればなり。無苦無樂を苦と爲す、境界に由りて生ずればなり。想を最苦と爲す、衆生行有るに由ればなり。識を最苦と爲す、彼に緣りて生ずればなり。[七四]老ゆれば、則ち諸根羸劣と爲る。[七五]病を最苦と爲す、四大隨はざればなり。[七六]死を最苦と爲す、更に異形を受くればなり。[七七]怨憎會を苦と爲す、親近の心を共にすればなり。[七八]欲する所を得ず、此を最苦と爲す、亦甚苦なり、要を取りて之を言へば、[七九]五盛陰は苦なり、常に重擔を彼の所趣の處に於て負へばなり。地獄を苦と爲す、身形を燒炙すればなり。畜生を苦と爲す、各相食噉すればなり。餓鬼を苦と爲す、飢渴、形に逼ればなり。人身を苦と爲す、種種に非行すればなり。天を苦と爲す、福盡くれば、必ず落ち、彼の界に隨ひて、三惡趣に墮すればなり。欲界を苦と爲す、愛欲纏絡すればなり。色界・無色界、亦智有ること無し。皆悉く苦と爲す。是の如く、[八〇]三苦に逼まられ、皆悉く攝持す。爾の時、身意の行を以ての故に、或は一行を以て、苦を造る。所造の行、皆悉く苦爲り。是の如きの衆苦、休息有ること無く、因緣盡きず。當に、色は是の如く、愚者の所爲なることを覺知すべし。然るに、[八一]須陀洹は其の源を究盡し、[八二]斯陀含は少しく毛髮の餘を盡さゞるあり。[八三]阿那含は當に除くべし。[八四]阿羅漢に至りて永く盡きて餘すこと無し。世の爲めに、照明を現ず。爾の時、世尊三耶三佛、衆生の類の爲めに、大覆護と作り、便ち此の偈を說きたまふ、

無數百の衆行、　常に苦惱の業を造る、　此の色難を懷くを以て、　現在に此の證有り。　彼は實に是無常なり、　本を解すれば皆悉く空なり、　自然法の所立を、　常に當に自ら覺知すべし。

六十四、[八五]四　法　印

[七四] 老則爲諸根羸劣。八苦の中の老苦。
[七五] 病最爲苦。八苦の中の病苦。
[七六] 死最爲苦。八苦の中の死苦。
[七七] 怨憎會爲苦。八苦の中の怨憎會苦。
[七八] 所欲不得、此最爲苦。八苦の中の所求不得苦。
[七九] 五盛陰苦。八苦の中の五盛陰苦は五陰より成れる身體に纏はる他の七苦以外の苦を總括す。
[八〇] 三苦。苦苦・壞苦・行苦の三苦なり。
[八一] 須陀洹(Srota-āpanna)。預流と譯す。
[八二] 斯陀含(Sakṛdāgāmi)。一來と譯す。
[八三] 阿那含(Anāgāmi)。不還と譯す。
[八四] 阿羅漢(Arhat)。應と譯す。以上の四を四沙門果又は聲聞四果といふ。
[八五] 此一段は、苦諦より進んで、四法印を說く。

に墮つる者あり。世尊の甘露に飢虚なり。是の時、便ち此の偈を說く、

世尊亦無生にして、　天人衆を饒益したまふ。　甘露味を食するが如し、　終に飢渴の患無し。　今日十種の力、　生ずる時、世稱歎す、　當に深法味を飲むべし、　已に解脫界に至りませり。

六十三、苦　諦

〔六六〕爾の時、是の如きの衆行、苦の賢聖諦を觀察す。最初受胎の苦、何從り生ずと爲す。永く幽冥に處りて、燈明を見ず。是を以ての故に、〔六七〕生を最苦と爲す。此の苦相を觀ずるに、生を長苦と爲す。意に厭足無し。求むる所有らんと欲して、獲ざるを苦と爲す。悕望して〔六八〕獲んとする所を充さざるを苦と爲す。若干の方便を起して失はず、以て護らしめんと欲するに、漸漸に磨滅するを苦と爲す。〔六九〕若干の衆惱悉く至り、已に彼岸に度ることを得るは有り難し。內外の人の共に諍ふは苦なり。親族・錢財皆散じ、彼を憶ひて忘れ難きは、苦なり。愛欲を離れざる、諸の結使は苦なり。欲を最苦と爲す、未だ滅せざるを以ての故なり。瞋恚を苦と爲す、罪行滅せざるの故なり。癡を最苦と爲す、照明無きが故なり。憍慢を苦と爲す、意の熾盛なるに由りてなり。自大を苦と爲す、尊卑の意無ければなり。朋友を苦と爲す、心分離せざるが故なり。愛を最苦と爲す、味著して厭くこと無ければなり。貪嫉を苦と爲す、心開解せざればなり。無戒を苦と爲す、變悔するに由るが故なり。所見を苦と爲す、眞諦を見ざるが故なり。然るに、一切の結有り。自色を苦と爲す。恃怙する所無きを苦と爲す。果報を求むるは苦なり。諸樹草木及び〔七〇〕四大の所成共に相繫著して、諸の因緣を起せばなり。〔七一〕內の四大は苦なり、若干に變怪すればなり。諸の〔七二〕陰持は苦なり、自然に由るが故なり。〔七三〕諸入を苦

〔六六〕此一段は、苦諦を說く。

〔六七〕生爲最苦。八苦の中の生苦なり。

〔六八〕獲の字、麗本に護に作る。今三本に從つて改む。

〔六九〕若干衆惱悉至、已得度彼岸、難有內外人共諍苦。

〔七〇〕四大。地・水・火・風を云ふ。外の四大にして諸色を指す。

〔七一〕內の四大。人身なり。

〔七二〕陰持。五陰と十八持となり。新譯の五蘊十八界なり。五蘊とは色・受・想・行・識。十八界とは、六根・六境・六識を云ふ。

〔七三〕諸入。十二入なり。新譯の十二處。六根・六境を云ふ。

の語を作すや」。更に、互に乞食して、與めに深法を說く。是の時、五人、教誡を受けず、「此の法は、甚だ覺知するに苦む」とて、是の時、世尊に語りて言はく、「汝、本、六年勤苦して道を學び、日に一麻一米を食せども、猶、道を得ず。況んや、今、心、口に隨ひ、自ら恣にして、道を得たりと言はん耶。甘饌を食し、飲食し、珍寶の衣を被り、意の欲する所に隨ひて、自ら其の身を養ふ」。是の時、世尊、告げて曰はく、「云何ぞ、汝等比丘、如來の顏色に、變易有るを觀じたる耶。諸根心寂して、顏貌端正なり。今の如きの顏像と、本の容色と、豈異らずや。彼の境界は過去なり」。彼答へて曰はく、「今の如きは、端正にして、比有ること無し」。世尊、告げて曰はく、「若、本、是の甘露を得ずんば、誰か、當に此の三千世に於て、而して甘露を得べき。亦聞く、天[六四]阿須倫は、大海中、須彌山底に於て、而して甘露を得たりと。此も亦是の如し。此の三千世に於て、勇猛の意を以て、智の甘露の味を得たり。此れ甚奇甚特にして、世に未だ曾て有らず。百千劫に造す所の行、息心を最妙と爲す。名色を遠離し、解脫自在にして、甘露味甚だ深し。彼の衆生の爲めの故に、而して其の法を說き、甚しき勤勞を忍び、未だ曾て辭憚せず。一切の結使の爲めの故に、塵勞を起さず。心智を開かんと欲するが故に、母胎に處る。此の生死を以ての故に、而して其の原を究竟す。無滅の故に、盡す可らず。有常の故に、法寡きこと無し。憂慼無きが故に、樂也。結を滅せんと欲するが故に、更に新を造らず。大神仙衆の嘆譽する所、已に衆成就せり。然るに、我行する所の勤苦は、一切の萠類の爲めの故なり。今、當に、法を說くべし」。時に、世尊の圓光七尺、顏色安明山の如し。三世に宗重せらる。一切智の說く所、罣礙する所無し。「是の如く比丘、是を謂つて苦の本と爲し、阿維三佛を成就せり」。廣說すること、契經の如し。天人の嘆ずる所、光明盡くること有ること無し。是の時、日曀りて現はれず。[六五]復、以て、此の人、或は身を以て微妙の衣裳を著けて、如來の所に至り、或は天衣を著けて、如來の所に至る、皆天冠の、種種の色の同じからざるを垂る。或は瓔珞して、而して地

【六四】阿須倫(Asura)の倫の字、麗本に輪に作る。今、三本に從つて、倫に改む。

【六五】復以此人或以身。此處に天人來詣の叙事あるべし。これを脫するを以て意義通ぜず。もし此人を天人とせば意義やゝ通ず。

連り、内に臭穢を盛る、何の貪る可き有らん。』猶、婆羅門、嬰孩の小兒の、先づ甘味の口に著するを與へ、後飲むに苦を以てするが如し。此も亦是の如し。合會して欲想を起し、能く欲苦相の種種若干百類なるを忍ぶ。『猶、新死の犢子の、其の皮を觀て、乳多きを得るが如し。（新生の犢死す。皮を取りて草を釀たすこと、生犢の形の如くし、其の母の前に置くに、母は子活きたりと謂ふが故に、乳竭きず）。此も亦是の如し。諸の死の境界は、等しく度を越ゆ。彼、其の相貌を觀じ、便ち染着の意を起す。』猶、婆羅門、飢渴の人の夢に甘饌を食し、飲食して、便ち歡喜踊躍するがごとし。然るに、彼の人、亦食する所無し。此も亦是の如し。諸の愚癡の人、欲に貪著す。猶、彼の夢に異ること無し。合會して、其の念を生ず。然るに、彼の人、實に善行に趣くこと無し。若は男女、[六〇]若は衆の變易有り」。是に於て、便ち此の偈を說きたまふ、

此は是、眞法に非らず、　欲怒何ぞ貪る可けん、　梵志、當に善觀すべし、　苦の本は拔く可きこと難し。　道の最要に親近し、　當に愛欲の意を斷ずべし、　賢聖八品の道は、　爾り乃ち善處に至る。

六十二、五　比　丘

[六一]是の時、五人、[六二]遙に如來を見る。見已りて、便はち相告げて言はく、「彼の人、此に向ひて來る。本、爲す所の事、今亦辦ぜず。廣く見聞する所、意の念ずる所に隨ひ、忌難すること有ること無し。種種に苦行を勤めつゝ、迷惑して、未だ道術を成ぜず」。廣說すること、契經の如し。爾の時、世尊、便ち是の念を作し、此の愚惑の人の、自ら制限を作すを愍む。彼の制限なる者は、如來の所に恭恪の心有ること無きなり。爾の時、世尊、已に彼の人の所に至り、即、淨地に於て坐す。[六三]縛は何に由りて生じ、病を治療せんと欲する。爾の時、佛、五人に語りたまふ、「云何ぞ、汝等是

【六〇】若男女若有とあれど若男、若女、有の誤か。

【六一】此一段は、五比丘濟度を叙す。

【六二】遙の字、麗本に逢に作る。今三本に從つて、遙と改む。

【六三】縛由何生、欲療治病の二句と、次の更互乞食與說深法の二句とを、入れ代ふる時は、意義の通ずるを思はしむ。何等か錯誤あるべし。

の義云何」。廣說すること契經の如し。』是の時、闍提舒尼梵志、復世尊に問ふ、「云何が缺と爲すや、云何が漏と爲すや。云何が行と爲すや。云何が有力ならざるに非ずとするや。云何が衆行極めて清淨にして比無く、是の梵行有りとするや」。是の時、世尊、告げて曰はく、「是の婆羅門に於ては、當に、是を行じて、愛欲更樂を求むべし。若梵行有る者にして、自ら苦樂を覺知し、眼色是の如く、梵行是の如しと觀じて、初めて、當に、梵行を求むべし。設、想著を起せば、彼を名けて、缺と曰ふ。彼の衆數を計する者を、名けて漏と曰ふ。意の覺知する所の者、是を非不有力と謂ふ。塵垢の意有る無き——中に流馳して不淨の意を起すは、是、梵行の垢の故なり——故に梵行と曰ふ。」廣說すること契經の如し。』「婆羅門、我が觀ずる所の、皮に覆はるる中の不淨聚に於て、選擇して、其の身を見ば、我が色愛已に盡きん。復、當に、眼に於て、眼色を觀ずべき耶。然るに、婆羅門、我、更樂を觀じて、亦行有ること無し。豈、當に、更樂有るべけん耶。更樂に染著して、此の細滑を受けんと欲せんや。然るに、婆羅門、我、一切は無常なりと觀ず、豈、染着の意有るを盡さゞるを欲せんや。若は、婆羅門、此の諸法に於て、我亦此を觀ぜざらんや。若は男、若は女、皆悉く分別せり。云何ぞ當に女欲の想を起し、流馳して、彼に著すべき。若は、復、婆羅門、彼に男欲の想無く、復、女想と相應せずして、直に欲想を起さんや。』猶、婆羅門、彼に限齊有り、出要の樂を得たる如き、何ぞ、當に本所造の行を憶ふべき耶。然る後、婆羅門、諸の非の義生じ、苦惱を拔濟せんと欲して、出家學道し、此の誓願を以て、而して梵行を修す。——七事有るが故に、梵行と相應せず、——缺漏無く、亦衆行無し」。廣說すること契經の如し。「若は、復、婆羅門、衆生は亂想有り、愛欲に著して離れざるも、彼の衆生の類に於て、云何ぞ、當に是の觀——諸有の淨想——を作すべき。(然らば)此の身内の臭を盛る處に著するの欲皆盡きん』。猶、婆羅門、水を以て乳に和するが如し。猶、此の乳有るが如し。此の合會愛欲も、亦復是の如し。當に、是の察を作すべし。節骨相

して、醜陋有ること無く、彼の相甚だ微妙にして、猶山の移動す可らざるが如しと雖も」。便ち門に往至し、歡喜心を生じ、衣毛皆竪つ。出要心を以ての故に、欲の相無し。世尊の足を頭面禮し、便ち是の說を作す「猶、世尊の如き、是の如きの色有り、心意正を得て皆悉く成就せり。佛及び比丘僧、我が[五六]優陀耶波陀羅太子をして、亦復是の如くならしめたまへ。」便ち是の義を問ひ、歡喜して、是の如く語りて、亦此の偈を說く、

海の邊有る無きが如きも、　風吹けば水則ち動く。　聖尊は移す可らず、　今、人中の上を覲じまつる。　帝釋來りて拜手し、　及び諸の梵天の衆も(しかなり)。　我、今當に尊敬して、自ら世尊に歸命しまつるべし。

六十一、闍提蘇尼梵志

[五七]是の時、闍提蘇尼梵志は、猶、純白華の如く、馬車に乘り、弟子の衆圍繞して、舍衞國を出づ。如來を試みることを得んと欲し、乃ち車行處に至り、便ち車に乘りて往く。即、車を下り、步して園中に入る。如來と共に、漸漸に論義し、一面に在りて坐す。』是の時、世尊所居の處、所有有るを見ず。如來の顏色を見るに、甚だ微妙にして、與に等しき者無し。亦怯弱無く、轉輪聖王の相有り。此の身體を見るに、眼、是の如きの法を觀知す。世尊の法の如き、甚深微妙にして、梵行も亦處所無し。是の如きの大功德有り。智者の嘆譽して說く所なり。愛欲は牢要たる有ること無く、亦虛妄無し。』是の時、梵志、便ち是の問を作す、「云何ぞ、尊、自ら知つて梵行を行ずる耶。梵行を行ずるに非ずと爲すや。諸根を竪立するが爲めに自ら爾るや。量る可きこと難きを知る」。是の時、世尊、告げて曰はく「若、是等の說を作す者は、亦缺漏ならず、有力ならざるに非ず。亦[五九]衆行無くて、極清淨にして、瑕穢無く、梵行を修す。若、人有りて、我に語りて、等しく說いて是の說を作さば、此

相具足、無有醜陋、彼相甚微妙、猶如山不可移動、如我豪尊、云何當向彼禮拜、彼無服飾、我今著王服天冠。耆婆白王言、云何當作是說、於是天王、能降伏憍慢者、便得豪貴處、憍慢者、便生卑處。是時王便自息、便往至門、生歡喜心、衣毛皆竪、以出要心故、無欲之相、頭面禮世尊足、思惟是言、便作是說、猶如世尊、有如是色、心意得正、皆悉成就、便作是語、此是福田、我當行此業耶、佛及比丘僧、使我優陀耶波陀羅太子、亦復如是。

而もまた前節と對照して、之を加減する時に、初めて當初のものに還元し得べし。

【五六】 優陀耶波陀羅(Udayabhadra)。

【五七】 此一章は、闍提蘇尼梵志の問に對して梵行を論議せられしを叙す。

【五八】 爲竪立諸根自爾知難可量。

【五九】 衆行。一切の人間の行爲、換言すれば、梵行ならざるものを云ふ。此の行を淨化するを以て梵行と云ふ。

種の瓔珞、其の身を莊嚴す。[四五]彼に於て聞已るや、猶、彼の神象の遊行するがごとく、[四六]珍寶亦狐疑無し。

[四七]四部の兵・人民、自ら圍繞し、彼の象上に於て、火を擧げ、象鼻攝持す。爾の時、世尊、羅閱祇城に在す。如來を見ることを得んと欲して、便ち世尊の所に往至す。是の時、世尊、[四八]王の斯に須らく出づべき頃を見るに、無數の衆圍繞す。王、便ち是の念を作す、「遠く從り來る。我、宜しく當に自ら護るべし」。便ち是の念を生じ已りて、便ち[四九]耆婆に告げんと、見已りて、便ち是の語を作さく、[五〇]「汝、我を活かさず耶」。是の時、王、須臾の間、([五一]顏色端政にして比無く、人の上に出づ。花果茂盛し、亦衆塵無し。三部具足すれど、猶、蜂王の如く、音響善く生ぜず彼の園觀に於て、比丘僧、前後圍遶す。)遠く來りて如來を見んと欲す。見已りて、數數耆婆を顧視す。耆婆に告げて曰はく、「其の中に處る者、是何物と爲す」。時に、耆婆、彼の王に奏して言さく、[五二]「此れ肉髻と名く」。時に、王、復問ふ、「此れ自然なり耶、自然に非ずと爲す耶」。耆婆、王に白して言さく、「行果の種ゑし所なり、今の所造に非ず」。王報へて言はく、「復、何の果を以て、菩薩と成る」。本の所生、本の受胎、本と所造の行、本と所造の身なり」。廣說すること、契經の如し。時に、王、便ち是の頌を說く、

猶、彼の日の[五三]光明のごとく、　或は若干種有り、　頂髻、上有る無し、　況んや、復及び餘相をや。　顏貌已に和悅せり、　[五四]能仁、怯弱無し、　已に此の光明を出し、　十方の刹を照徹したまふ。

[五五]時に、王、便ち佛所に至る。佛、耆婆に告げて曰はく、「云何ぞ、當に是の說を作すべき」。耆婆、王に白して言はく、「是の天王に於てや、能く憍慢を降伏する者、便ち豪貴の處を得、憍慢なる者、便ち卑處に生ず」。是の時、王、便ち自ら息みて、是の言を思惟し、便ち是の語を作す、「此は是、福田なり。我、當に此の業を行ずべき耶。我が豪尊の如き、云何ぞ、當に彼に向ひて禮拜すべき。彼は服飾無く、我は、今、王服天冠を著けたり。彼の人、端正の心もて以て、休息し、衆相具足

【四五】於彼聞已。王が六師外道に問うて、いづれも心に滿足せずして、耆婆の勸告によつて釋尊に向ふの發端を表す。
【四六】珍寶。種々瓔珞の次にあるべきに似たり。
【四七】四部の兵。象車馬步の四種の兵なり。
【四八】見王斯須出頃。
【四九】耆婆(Jīvaka, Jīva)。王舍城の名醫。
【五〇】汝不活我耶。王の心の疑を叙す。王は耆婆を以て、或は王を陥るゝにあらざるかを疑ひ、幾度か躊躇せり。
【五一】顏色端政無比、出人之上、花果茂盛、亦無衆塵、三部具足、猶蜂王音響不善生、於彼園觀、比丘僧前後圍繞の文は、次の一節の時王便至佛所の次に入るゝ時は、意義通徹すべし。
【五二】肉髻問答は、佛に面して後に起るべし。次の一節との間に錯簡あるべきなり。
【五三】光明。麗本に明光に作る。三本に從つて光明と改む。
【五四】能仁。釋迦牟尼の義譯。
【五五】此經、頗る錯簡ありて、意義通徹せず。此一節を例して、以て他を比知せしめんとす。此一節は、若、次の如くせば、實に意義通徹すべし。時王便至佛所。(佛)告耆婆曰、彼人雖端正心以休息、衆

恚の火漸漸に休息す。廣說すること、契經の如し。是の時、手の輪相、甚だ微妙にして比有ること無きを以て、爾の時、如來、手を擧げて象の頭上に著くるに、慈悲心を以て、瞋恚の心無し。如來の語を聞き、卽便ち涕零し、頭面を如來の足上に著け、舌を以て足を舐め、亦移動す可らず。是の時、彼の象、便ち此の恐懼を懷き、形體に、力勢有ること無く、覺えず便利す。然る後、世尊、[三九]此の賢聖が、便ち此の偈を說くを以て、

[四〇]欲・憍慢有る無し、　世尊此の塵無ければなり。　時に、慈悲心を發す、　必ず當に天處に生るべし。

爾の時、世尊、此の音響を以てすれば、倍歡喜を懷き、和顏悅色す。如來所に於て、額鼻を以て、如來の足に著け、還りて本國に入る。人民の衆多、此の未曾有を見る。象の降伏歡喜して、恐懼の心無きを以て、皆如來に[四一]信樂有り。爾の時、便ち此の偈を說く、

山の如く動かす可らず、　況んや當に瞋恚に勝つべきをや、　彼の怨敵の、猶、[四二]伊羅鉢龍のごときに勝つを以て、　是の如きの德有り、　力勢の等しきもの有る無し、　人中の雄師子なり、　盡く當に來りて拜手すべし。　是の如きの衆生の類、　愚癡の心有る無し、　三界其の名に伏す、　覺意與に等しきもの無し。　是の如きの衆生の類、　亦瞋恚の患有るものも、　志性皆休息し、　牢固の稱遠く布く。　智慧にして而して瓔珞、　心淨くして所著無し、　十力悉く具足す、　是の故に當に拜手すべし。

六十、阿闍世王

[四三]是の時、王は、猶、月の虛空に衆塵有ること無きが如く、息心して事皆辦ず。[四四]七神仙皆瓔珞と爲り、亦塵垢有ること無し。星は自ら瓔珞なること、猶、伊羅鉢の所至の處、雲其の後に隨ふが如く、種

【三九】此賢聖。賢聖の何人なるかは此處には說かれず、空中の聲なるべし。

【四〇】此の偈は、象が世尊の慈力に依つて欲憍慢を離れ、慈悲心を發するを以て死後生天すべきを云へるなり。

【四一】信樂。所聞の法に順ひ、之を愛樂すること。

【四二】伊羅鉢龍（Erāpattra-nāga）。鉢の字、麗本末に作る。今、三本に從つて鉢と作す。

【四三】此二節は、阿闍世王の懺悔歸佛を叙す。長阿含第十七沙門果經、異譯、寂志果經と、結構を同じくす。而も錯簡混雜多くして、意義通徹せず。此二節能く此經の如何に錯雜せるかを示すべき好標本なり。

【四四】七神仙。沙門果經に對比するに、六師外道に、佛陀を加ふるものか。

る所、制持す可きこと難し。若異聲を聞けば、便ち瞋恚を懷き、若自ら影を顧見するも、亦瞋恚を懷き、能く前に當る者無し。意の欲する所に隨ふ。若、彼、戰闘すれば、亦毀れず、其の力亦減少せず。爾の時、世尊、便ち、彼の城に入りたまふ。却敵・樓櫓[三三]・埤堄[三四]、皆悉く具足し、人民熾盛なり。或は愁ふる者有り、或は歡喜する者有り、如來を害せんことを恐れ、如來に親近するを得んと欲す。是の時、提婆達兜[三五]、象子に飲ませ、醉はしめて而して彼の象を放つ。是の時、調達、象を放ち已り、便ち此の偈を說く、

自ら大力、及び身に十種の力有りと稱するも、今日已に集會せるが、盡く當に此に於て滅すべし。

爾の時、世尊、畏懼する所無し。此の偈を說きたまふ、

伊羅鉢[三六]、千有りとも、能く我に勝る者無し、況んや、當に此の小蟲の、人中の上を害せんと欲するをや。

我、爾の時に於て、思想する所無し」。便ち此の偈を說きたまふ、

無欲の力勢よ。衆生、欲心有り、此の欲の報を除けるを以て、亦亂想を懷かず。

復次に此の偈を說きたまふ、

[三七]「我、今破壞すと雖も、大象甚だ牢固なり、我、今彼を降伏す、一切世に無上なり」。

爾の時、檀陀波羅[三八]、如來の形を熟視して、顏色極めて黑し。彼の象の尾を翹ぐるを見たまへども、*身體方正なり。覩る者皆恐怖を懷く。*奔走して如來に向ふ。爾の時、諸の比丘如來の恩力を蒙り、如來の教誡に順つて、當に此の惡象を避くべしとて、各自馳走して、如來所に遠かる。唯、尊者阿難のみ、如來の後に在り。無數生に、常に如來と共に幷ぶ。既に自ら身命を惜まず、亦如來を捨てず。是の時、檀那波羅象、瞋恚熾盛にして、火其の身に纏絡し、如來を害せんと欲す。是の時、瞋

【三三】樓櫓。やぐら。

【三四】埤堄。城のついぢ。城壁の上にあつて、小さき窓をあけたひめがき。

【三五】提婆達兜(Devadatta)。前に及び次に調達とあるものに同じ。

【三六】伊羅鉢(Erāpattara)。龍王の名。

【三七】我今雖破壞。大象甚牢固は、大象甚牢固なりと雖も、我今破壞すの意味ならん。

【三八】檀陀波羅(Dāṇḍavana)。前にも後にも檀那波羅とあり。前後相違す。

*身體方正。如來の身體の方正にして不變なるを云ふ。

*奔走。象の奔走して、如來に向ふを云ふ。

ち是の心を生ず。此れ悪業なりと雖も、然も我等夜叉、此の身を以て、當に是の事を辨じ、亦世尊をして百千樂を受け使めまつるべし。若我能く此の事を爲す者ならば、とて、便ち此の偈を說く、

心、清淨にして瑕無く、　若干の義を起す。　我、今此の身を沒すとも、　最勝を害するを得ること無(からしめん)。

爾の時、調達、便ち石を以て如來の上に放つ。時に、山上に於て、彼の鬼、卽、手を以て石を接す。一碎石有りて、如來の上に墮つ。此の報對を受け、脚指に血を出す。調達、無量の罪を受け、是の果報に緣りて、當に地獄に入るべし。是の時、石地に墮つ。時に、[22]三十三天、[23]散華供養するに、空解脫を以てす。爾の時、散華、虛空に側塞す。[24]彼の受化講堂に於て、三十三天の[25]書度樹あり。佛の光明遠く照して、憍慢無く、衆生を慈愍す。時に、[26]波羅墮時梵志、五百の事を以て、世尊を呵罵す。舍利弗・[27]朋肌耆等の比丘、如來を嘆ず。是の時、如來、若は毀辱せらるるも、以て慼と爲さず、若は復讃嘆せらるるも、以て喜と爲さず。爾の時、便ち此の偈を說く、

苦を受くるも心移らず、　猶、[28]安明の動かざるがごとし。　息意甚だ牢固たり、　故に神仙を拜手しまつる。　他の衆生の爲めの故に、　功德量有る無し。　父の其の子を愛するが如し、　誰か拜手せざる者あらん。

五十九、檀那波羅象

[29]曾て是の如きを聞けり。世尊、摩竭國界に在す。是の時、世尊、無量の功德具足す。時に到りて衣を著け、鉢を持つ。大衆圍繞し、諸根具足せり。己の身を觀察するに、亦衆亂無し。行步庠序として、亦卒暴ならず。諸の無數の比丘衆を[30]將ゐて、彼に往詣せんと欲す。爾の時に當りて、摩竭國王に象有り。[31]檀那波羅と名く。形貌極めて端政にして、頭に[32]三捶を生じ、聲響清徹す。意欲の至

【二二】三十三天(Trayastriṃśa)。欲界の第二天忉利天なり。帝釋天を中央にして四方に各各八天あれば、總じて三十三天となる。
【二三】散華供養。以空解脫。
【二四】於彼受化講堂、三十三天書度樹。
【二五】書度樹。忉利天にある大木。
【二六】波羅墮時梵志(Bhāradvāja-brahmacārin)。
【二七】朋肌耆(Vaṅgīsa)。增一阿含經卷三に、この比丘の、能く偈頌を造りて、如來の德を嘆ずると、言論辨了して、疑滯なきとを以て、比丘中の第一なりと稱す。
【二八】安明。須彌山の譯。探玄記五に、須彌こゝに妙高山といふ。高八萬四千由旬、縱廣正等なり、また安明山と名くとあり。
【二九】此一段は、提婆が醉象によつて、佛を殺さんとせるを叙す。
【三〇】將、麗本に持に作れども今三本が將と作せるに從ふ。
【三一】檀那波羅(Dhanapāla?)。
【三二】捶の字、宋元二本に檻に作り明本に壓に作る。檻ははれものなり。頭に三つのこぶの如きものあるの謂。

任せんや。汝、今瞋恚を捨てたり、疑有らば、便ち時に問へ、汝の所有の猶豫を、我、當に事事に解すべし。

爾の時、彼の鬼、便ち是の問を作す、「人、何者をか上と爲す」。廣說すること、契經の如し。爾の時、現法中に於て、便ち如來所に於て、歡喜心を發し、而して此の偈を說く、

未だ曾て是の此の如きの沙門なる者有るを見ず。誰か能く大海を捨てて、而して手跡の水に就かんや。當に我が身の爲めの故に、便ち是の如きの說を作したまふべし。誰か此の味を服せずして、當に甘露を捨て去るべき。彼の有力の士の如きだに、水の爲めに漂溺せらる。已に厄難處を拔け、無爲の岸に安處せり。善色比有る無し、智者の觀ずる所なり。彼の義有る所の者、能く皆此の法を說きたまふ。今自り佛に歸命しまつる。三寶は最も是尊し。求願する所以の者は、一切濟度を得ん(ためなり)。

五十八、提婆達兜

[一四]是の如く[一五]聞けり。[一六]摩竭國界の五地大神、[一七]羅閱城に於て止まる。大勢他を羅して、人民を擁護す。車乘熾盛にして、土地豐熟なり。賢聖の人民、皆其の中に處り、與に等しき者無し。食は甘露の如く、[一八]三事微妙にして、亦衆惱無し。猶、彼の難陀洹園の、諸天中第一なるが如し。爾の時、佛世尊、最無比爲り。時に、[一九]調達、世尊の所に於て、常に瞋恚を懷き、未だ曾て休息せず、行ふ所、法に非らず。是の瞋恚を以ての故に、[二〇]耆闍崛山に上る。[二一](園觀熾盛にして、樹木繁茂し、泉源清淨なり。)手に石を執り、如來を擲たんと欲す。卽便ち、石を放つ。是の時、彼の石、情念有ること無きも、猶自能く持して、漸漸に地に墮つ。彼の調達に是の非義有り。種種の鬼神の輩、石を持して墮ちさらしめんと欲す。金毘羅鬼、耆闍崛山に在りて住す。己の力を以て、彼の石の墮ちんと欲する時、便

【一四】此一段は、提婆達多が佛に背きて、石を投ぜる事を叙す。
【一五】聞。高麗本に闇とあれど、宋元明三本に依りて聞に改む。
【一六】摩竭(Magadha)。
【一七】羅閱(Rājagṛha)。王舍城と譯す。
【一八】三事。身口意の三を云ふ。
【一九】調達(Devadatta)。調はデーヴのデーの音を取り、達はダッタのダッの音を取る。
【二〇】耆闍崛(Gṛdhrakūṭa, Gijjikūṭa)。靈鷲と譯す。
【二一】園觀熾盛、樹木繁茂、泉源清淨の三句は、錯簡なるべし。上の亦無衆惱の次にあるを可とすべきか。

爲す。〔二〕(二善難)彼の大鬼神に語らしめて言はく、「是の語を作す莫れ。佛世尊は、未降伏の者を、能く之を降伏し、能く衆生を安處して、無上道を獲しめ、皆有形の類を擁護せしむ。是の如き不相應福田は、汝の今の麁言惡語と、與に相應せず」。時に、瞋恚大にして、前に盛倍す。是の時、阿羅披鬼、喘息の氣、猶、火災の如く、視瞻極惡にして、便ち彼の鬼界を捨つ。瞋恚の纏絡する所、身體極黑に、顏色變易して、常と同じからず、口に四牙を出し、髮黃にして金の如く、上下相叉す。人血其の形を汚し、皆濕うて乾かず。師子皮を著け、象皮を著け、犛牛皮を著け、大華鬘は大火炎の如し。手に刀劍を執り、地に撞いて而して行く。皆山岳を破り、山林を移し、樹を拔く。或は大雲を起して、大光明を〔三〕曀覆す。水を以て虛空に灑ぎ、聲、雷震の如し。便ち自ら住處に到り、世尊を傷害することを得んと欲す。種種の樹木皆悉く焚燒し、色變易す。手に輪を執り、雷電霹靂す。是の如く瞋恚し、如來を觀察し、若干の變化を作して、如來を求む。便ち時に、佛、此の偈を說きたまふ、

　衆生には畏想有れども、我が志移動せず、今、解脫法を得たり、恐怖心有る無し。火に處りて火を畏れず、亦復水を畏れず、諸の惡念を懷く者、何んぞ能く我を傷害せん。

　爾の時、阿羅披鬼、世尊の言を聞き、便ち自ら息心し、壞することを得る能はず。彼處は恐畏なり、人の至らざる所。便ち、雹雨を如來の上に降らすに、盡く地に墮ちず、各散じて餘處に在り。或は復、如來の身に墮つる者有り、皆化して曼陀羅華と作る。是の時、鬼神の王、此の力勢を見て、未曾有と嘆じ、便ち歡喜心を發し、如來の所に於て、便ち、是の言を作す、「速かに沙門を出でよ」。世尊、便ち、出でたまふ。彼の鬼、爾の時、世尊を試みんと欲し、便ち、是の語を作す、「還つて沙門に入れ」と。然るに、世尊、怨恨心無し、卽彼の處に入りたまふ。是の如く、三たびに至る。廣說することと、契經の如し。是に於て、世尊、便ち此の偈を說きたまふ、

　〔三〕釋及び諸の梵天だも、能く一毛を動かす無し。況んや、復汝の今の力、吾を傷害するに堪

【二】二善難。梨薩摩披陀爲首の本に夾法として加へらる。その意を知り難し。

【三】曀覆。おほひくもらすること。

【三】釋。帝釋天。

して言はく、

沙門自ら住せずして、　我が住を不住と言ふ。　云何ぞ、我不住なりや、　願くば、世尊、具に說きたまへ。

是の時、世尊、告げて曰はく、

惡無ければ則ち是住なり、　持戒して、人を護つて長(ぜしむ)、　迦葉弟子の如し。　是の故に、汝不住なり。

彼の本行、諸惡少し。永く流血の汚體を棄くす。便ち劍を解きて捨て、一面に著け、世尊に白して言はく、

師は今是我が護なり。　此の聖師に遭遇す、求めて爲めに弟子と作らん。師の禁戒に違せじ。

爾の時、世尊、是を作すが故に、告げて曰はく、　善來比丘と。便ち此の偈を說きたまふ、

猶、彼の大海水も、　亦烱火災を生ぜん。　未だ降伏を受けざる者よ、　今應に我が化を受くべし。　亦善く降伏する有りて、　淸淨にして得度し、　亦我が弟子と爲れば、　是の如きは、有を受けず。　[八]觀る者は皆怖畏せんも、　及び諸妖鬼神、　是の諸の鬼神の處に、　最勝は便ち彼に入る。

五十七、鬼　神

[九]是の時、阿羅婆鬼、彼の[一〇]褐陀披鬼の語を聞き、瞋恚熾盛にして、　顏色變異す。瞋恚の火起りて、眼、赤銅の如く、聲響雷振し、無數の瞋恚熾盛なり。頭を搖り、唇を齧み、身體を振動す。便ち是の語を作す、我、世間に於て、亦人民の類の能く我住處に來至する者を見ず」。是の如き狐疑を懷く、「何の故に、彼の人我が所に來至する」。諸の彼の鬼神、婆多と名くる者、[一一]梨醯摩披陀を首と

【八】觀者皆怖畏。汝を觀るものは皆怖畏して、汝に近づかず。されど最勝は、汝はいふに及ばず、諸の鬼神の處にも入りて、之を降伏すの意。
【九】此の一段は鬼神降伏を說く。阿羅婆鬼(Aravaka?)。
【一〇】褐陀披鬼(Gandharva?)。

五十六、鴦崛鬘

[五]爾の時、世尊、鴦崛鬘[六]の、今應に受化すべきを知る。爾の時に當りて、惡知識の言論無し。覺し已りて、便ち彼の道を往くに、唯一人有りて存在す。血流路に盈ち、人皆、飛鳥・鷲鳥の處處に噉食するを證知す。時に、鴦崛鬘の行くこと疾風の如し。若は擧足する時、群鹿・飛鳥、皆悉く驚怖して馳走す。是の時、鴦崛鬘、闍梨園中に在り。左右顧視するも、覩見する所無し。唯、世尊の端正無比にして紫磨金色に、方便の爲す所、腰、傾曲せず、身體極めて軟細にして、行歩庠序たるを見る。其の力勢を盡して、如來の後を走逐す。是の時、世尊、舊行を改めざるに、亦及ぶこと能はず。爾の時、世尊、便ち此の地を化して、坑渠刺棘と作さしむ。是を以ての故に、及ぶことを得る能はず。或は是の說を作す有り。脚を以て地を躡む。是を以ての故に、世尊に及ぶこと能はずと。或は是の說を作す有り。無色の四大を化し、眼識持す可らずと。或は是の說を作す。佛の功德可思議なりと。然るに彼の鴦崛鬘の力、暴象の如く、能く當る者無し。然るに佛の威力不可思議なり。猶、彼の神龍・那羅迎の億百千數も、亦如來に近づくを得ること能はず。是の時、鴦崛鬘、便ち是の嘆を作して曰はく、「此の未曾有を見る」。便ち世尊に曰す、「此の意、甚奇甚特なり」。便ち瞋恚害意無く、是の思惟を作す、「此は是、誰の恩德ぞ、此れ必ず是神人ならん。[七]猶、此の惡世に、我、此の美に還るが如し。猶、飢饉に利有るが如く、亦愛念を生ずるが如し。然るに、我及ぶことを得る能はず。此れは必ず是善知識ならん。今、我、疲極して住す」。遙に世尊に語りて曰はく、

當に我が身の爲めの故にしたまふべし。　世に希に見聞する所、　今亦自ら德を見たてまつる、　願くば當に少らく、留住したまふべし。

世尊告げて曰はく、「汝自ら住せずして、方に我に住せよと言ふ」。是に於て、鴦崛鬘、世尊に白

【五】この一段は、指鬘外道濟度を叙す。

【六】鴦崛鬘（Aṅgulimāla）。指鬘と譯す。佛在世の時、舍衞城に住し、九百九十九人を殺し、指を切り連ねて、鬘となし、首にかけたり。千人目に我が母を殺さんとする時、佛の濟度に遇ふ。

【七】猶如此惡世、我還此美、猶如飢饉有利、亦如生愛念。我還の下に得の一字を脫するに似たり。

五十五、道迹

[一]爾の時、世尊、云何が道迹を說く。彼に於て、道迹を說く時、猶、王の大路を、之を王路と謂ひ、星宿を星宿路と謂ふが如し。此の迹も亦是の如し。涅槃に至る者を至涅槃路と謂ふ。彼は是、[二]等見の處所なり。等志・等語・等命に、差違有ること無し。等方便缺漏せず、等念無量にして、等三昧色變易せず。彼に緣りて、若干の色に婬欲有ること無く、亦塵垢無し。結使永く起らざらしむ。色の愛著有ること無く、亦衆刺無し。愛を滅せんと欲するが故に、亦泥有ること無し。邪見を除かんと欲するが故に、等見具足す。等しく結使を滅するが故に、永く復起らず。彼の微妙の果の中に、種種の義を現ず。悕望を除かんと欲するが故に、衆想有ること無し。出要の樂を求めんと欲するが故に、若干の果成就す。要に著すること無きが故に、等しく彼の名色を度す。彼に於て遊行するが故に、是を道は一にして二有ること無く、皆彼に至るを得と謂ふ。[三]第一義の處所を緣と爲して一往すとは、自心の誓願もて一入するを謂ふ。爾の時、世尊、第一辯を以て、道を知り、能く自ら覺知するを以て、則ち壞敗せず。所爲の業、勝りて、亂想有ること無し。果報已に獲、諸の善根を得、能く彼の衆生を覺寤して、便ち是の道を說いて、無爲に至らしむ。是に於て、便ち此の偈を說く、

衆生の類を與す所の、　道有り、甘露法なり。　佛に是の功德有り、　世に於て最第一なり。

「我、今に於て、自ら淸淨禁戒の具を得たり、　人の爲めに須らく[四]論說すべし」と。　是の故に我、拜手しまつる。

【一】此一段は、道迹を叙す。

【二】等見・等志・等語・等命・等方便・等念・等三昧。八正道なり。こゝに等業を脫す。

【三】第一義處所爲緣一往者自心誓願謂一入。訓じ難きが故に、一應上の如くに訓ぜり。後の識者を待つ。

【四】論說。論の字、麗本に倫に作る。三本に從ひ、論と改む。

偈を說く、

諸惡已に休息するは、大神仙の所制なり、彼をして淸淨なら使むるは、十力の所說なり。彼の釋の城郭に於て、常に生老病を畏れ、涅槃處に至らざるは、皆衆生の苦に出る。

が如し。佛も亦是の如し、諸の賢聖寶に乏しき者に、便ち七財を以て、之を惠施す。猶、轉輪聖王の、衆生を[二二八]導引して、以て正法を示すが如し。佛世尊も、亦復是の如し、衆生に涅槃に至る道を指授す。猶、轉輪聖王の、世に出現するや、諸の牢獄に閉在する者、皆悉く之を脫するが如し、佛世尊も、亦復是の如し。世に出現する時、生死の牢獄に於て、便ち悉く之を脫す。是に於て、便ち此の偈を說く、

法王を第一と爲す。衆の尊は佛に過ぐる無し。彼の衆生の類を愍みて、三界を佛は覆護したまふ。事ふ可し、恭敬す可し、不度を度せんと欲する者を、是の如きの功德者を、
佛を、不覺を覺する者を。

五十四、法城

[二二九]爾の時、世尊、何の城か有る。所謂四賢聖の智慧・正觀なり。彼の戒定の地に於て、善く無爲行を相とす。智慧を以て城郭と爲し、三三昧を以て[二三〇]却敵と爲し、解脫門を以て[二三一]闉と爲し、等見を以て街巷と爲し、念を以て牆と爲し、意止を以て塹と爲し、五根を以て堂と爲し、禪を以て室と爲し、慚愧を以て自ら障屏して、彼の道を指授し、神足を以て遊行して障蔽す可らず、覺意の華を以て自ら嚴飾し、諦果を以て行と爲し、賢聖第一を以て而して自ら娛樂し、極めて安隱にして、彼の衆を敎授し、皆悉く濟度す。舍利弗・目揵連に、無數の衆善想有り、常に敎化に遊び、善滿具足し、所覺皆成就す。彼の浴池に於て洗ひ、戒を以て塗香と爲し、辯才黠慧以て法服と爲し、其の身を嚴莊す。三三昧を以て食と爲し、法味を以て漿と爲し、七寶具足す。時に、世尊、大衆の學無學の爲に皆悉く圍繞せらる。彼の衆をして、涅槃に到り無畏處に至りて亦退轉せざらしめんと欲す。衆生に於て欲する無く、無所畏を得、法力具足す。諸陰入成就し、塵垢に著せず。是に於て、便ち此の

【二二八】導引。麗本に外道に作る。今、宋元明三本によりて導引と作す。
【二二九】此一段、世尊に外魔を入らしめざる城郭あるを敍す。
【二三〇】却敵。敵の接近するを防げる裝置。
【二三一】闉。小さい門。

脱の明識然なり。一切具足して、三愛有ること無く、一切の結を度して、力勢壞す可らず。涅槃海に至りて、世俗の患無し。智慧の金剛を以て、復、智業を以て、諸の[二二三]惡趣を滅す。十力解脱し、四無所畏あり、本修習する所を降伏して、行に敗壞無し。一切種種の色像、皆悉く成就す。諸の魔衆を滅して、亦所著無し。是に於て、便ち此の偈を説く、

[二二四]種種來の恐畏を、　金剛精進の意もて、　彼の魔衆、及び餘の諸の塵結を降伏したまふ。[二二五]諸の有生有想の、　結使皆永く盡く。　是の三昧行に由りて、　故に牟尼士に歸しまつる。

五十三、法　雨

[二二六]爾の時、世尊、云何が法雨を以て之を雨らす。所謂不死の法輪を轉ずるなり。八部衆中に於て、此の法を嘆譽す。百劫に求むる所の善行修行は、慈に於て轉牢固に、清淨の法は是の如し。賢聖牢固にして、出家の觀に住して、大威神無著なり。復、忍智の力を以て、皆悉く解脱の門を牢固にす。若干種の珍寶、瓔珞は、本願の追ふ所なり。還つて其の方便有り、其の東方微妙の處に住す。彼の貝多樹下に於て、極めて端[二二七]政なり、諸天虚空に塞がる。東方に向ひ、坐して觀察す、是の時、佛を妙と爲す。亦中間に、是の如きの歡喜の散花を作して、嘆ずる有り。是を觀察する時、若は須倫の衆、是の如きの德を聞く。及び諸の神仙(もしかなり)。昔、佛の所造なり。最勝幢蓮花稱佛・錠光佛・隨葉佛は、彼の大衆に於て、心に第一自在を得たり。爾の時、世尊釋迦文に一切智あり。諸の天衆歡喜す。皆是本佛の所造なり。彼は、猶、轉輪聖王の境界に於て、自在を得るが如し。世尊も亦復是の如し。己の無漏法中に於て、自在を得。猶、轉輪聖王の自在境界は、衆生の類の共に鬪諍する者を、悉く能く斷絶するがごとし。佛世尊も、亦復是の如し、聲聞中に於て、其れ衆生の類有り、法を狐疑する有れば、皆悉く能く斷ず。猶、彼の轉輪聖王の、財寶無き者に、皆悉く能く施す

【二二三】惡趣。惡業によりて衆の趣く所。地獄、餓鬼、畜生。或はその三に、人、天を加ふ。

【二二四】種種來恐畏。

【二二五】諸有生有想、結使皆永盡。

【二二六】この一節、如來の法雨を叙す。

【二二七】政、宋元明三本に正に作る。

五十一、輪　喩

二一七 是の時、世尊、是の如きの輪有り。二一八 意止具足し、根・力・覺意に缺漏有ること無く、皆自ら莊嚴す。四神足最第一なり。四意斷善く身を莊嚴し、善口、教を說きて七覺意を遠布す。等見にして而して解脫を得。止觀を以てして、癡愛有ること無し。已に彼の三昧を度して、無所畏を得、師子吼を爲して、恐畏有ること無し。辯才無礙にして、信歡喜を得、精進にして、懈怠の念無し。境界に度を得て、彼の智慧解脫す。彼の魔境界に遊びて、欲愛有ること無く、功德具足して、諸の惡趣を消滅す。三乘の果、微妙なり。第一善成就す。彼の魔衆を滅して、三欲永く盡き、諸有の愁憂苦惱、永く盡きて餘無し。亦愛有ること無く、亦五蓋無く、亦瑕穢無し。彼の身盡く捨離するに依る。狐疑を除去して、愚癡有ること無し。二一九 覺有り觀有り、亦憍慢無し。時に隨ひて興起して、亦顚倒無し。永く邪見を除きて、威力有り。歡喜して結使を滅し、魔衆を降伏す。是に於て、便ち此の偈を說く、

一切の人供養しまつる、　衆生の類を救度し、　無護に爲めに護と作り、　魔前に法輪を轉じたまふ。　彼の輪や等しきもの有る無し、　天人の歎譽する所。　已に此の名稱有り、　彼を最第一と爲す。

五十二、降魔之智劍

二二〇 是の時、世尊、何の金剛に因りてか、彼の魔衆を降伏する。所謂、爾の時、世尊、禁戒の車に乘じ、弘誓の鎧を被り、諸の忍力有り。大雲を以て、淸淨の幢蓋と爲す。結使無きを以て、無欲の二二一 擁を執る。等見を執持し、四禪に緣りて、愛慢に解脫淸淨を得。二二二 等志等語、皆悉く淸淨なり。辯才智を以て、神足莊嚴す。自ら其の意を專にし、解脫牢固にして、婬怒癡無し。覺意を以て、解

【二一七】この一節、如來の法輪を叙す。

【二一八】意止根力覺意。意止は四念處なり、根力は五根五力なり、覺意は七覺支なり。次の四意斷は四正斷なり。これに四神足、八聖道分を加へて、三十七助道品とす。この中、八正道分なきも、文中、等見・三昧・精進・莊嚴身あり。次節に等志、等語等ありて、散說せらる。

【二一九】覺觀。新譯の尋と伺となり。

【二二〇】この一節、如來の降魔を叙す。

【二二一】擁、ふせぐ。

【二二二】等志等語。八正道中の正思惟・正語なり。

池清淨にして、一切布善し、三世の歎ずる所なり。是の故に拜手禮頂しまつる。是に於て、便ち此の偈を說く、

善く三世の護を興したまふ、　彼の萠類の爲めの故なり。　覺意の花、身を飾り、　解脫の果、成就す。　聲聞衆中の王なり、　功德を生じて穢無し。　當に彼の樂處を求むべし、　必ず安樂處を獲ん。

五十、空喩

[二二二]爾の時、世尊、是の如きの空有り。意同一色、廣布無邊なるが故に空と爲すと曰ふ。諸の欲愛を斷じ、一切に所住無し。智の果報を以て、一切潤澤し、諸結有ること無く、亦諸蓋無し。三昧[二二三]愛を以て、諸の塵垢を度す。[二二四]善く出要して、以て解脫し、清淨月の善光あり、以て功德無量なり。意、一生の業に專にして一生の梵を修し、常に歡喜を懷く。智慧眼清淨にして、而して境界淨し。諸の結使を斷ずるが故に、所著無し。已に大慈を得るが故に、一切處所無し。意を分別するが故に、種種に成就を得。供養を得るが故に、結使に染せず。彼の心に依るが故に、淨不淨を以て其の心を染汚せず。[二二五]彼の聲聞衆の種種の鳥に依りて圍繞(せられ)、止觀具足するが故に、極めて微妙にして盡さず。三昧林の故に、星宿の衆圍遶す。正法を以て、外敵を降伏するが故に、以て疇匹を爲し難し。當に是の觀を作すべし。猶、人有りて、歡喜を得、其の業を究竟すれば、[二二六]必ず本處を疑ひ退轉するあらさる如し。是に於て、便ち此の偈を說く、

歡喜して愛樂を念じ、　結塵垢有る無し、　此の若干の色有り、　復能く悉く分別す。　一切に等意を得、　是の稱譽を作さんと欲す。　已に彼岸に到越し、　喜樂の心有る無し。

【二二二】此一段は、世尊の空に入りて喜樂の心なきを讃す。

【二二三】愛。元明二本に受に作る。

【二二四】善出要以解脫清淨月善光。

【二二五】依彼聲聞衆種種鳥圍繞止觀具足。

【二二六】必不有疑退轉本處。

於て、善く已に修行す。苦報を指授すること是の如し。彼の功德極めて無量なり。智成就して、涅槃門に於て發趣す。而して第一尊重を供養するを得て、潤、衆生に及ぶ。是の故に、佛火を拜手し禮しまつる。是に於て、便ち此の偈を說く、

能く草木を焚燒する、　火最崖有ること無し。　佛火第一妙なり、　是故に當に拜手しまつるべし。　佛火は滅盡するを以て、　苦樂復起らず、　猶功德を遺す有り、　世間に於て流布す。

四十九、園觀喩

[198]爾の時、世尊、是の園觀有り。極柔軟にして、禁戒成就す。彼の處所に於て、五蓋有ること無く、亦石沙の穢惡無く、亦[199]屺山無し。一切諸法の根本、皆悉く自在を得、大慈悲清淨にして垢穢有ること無し。極めて自ら娛樂し、等しく度して彼に到る。是の如きの思惟の功德有り。諸行淳淑にして、力勢の爲す所、善の根本を成じ、亦、法忍に於て移動せず。狐疑等の見無し。八賢聖道、悉く具足す。諸の供養を得る、無數百行、稱計す可らず。戒三昧具足し、十力悉く疑有ること無し。諸の陰蓋解脫して、清淨の誓願已に果す。枝葉繁茂して、彼に於て、花實を生ず。若干百の三昧林を生じ、悉く皆茂盛す。等見にして、邪見無く、禪無色にして、而して自ら身を樂しみ、[200]慈悲喜護もて、常に衆生に加ふ。其の中間に於て、七覺意を分別す。息心は第一果なり。慚愧圍繞して常に惠施を念ず。出要を求むるが故に、是の淸涼雲有り。力を以て諸の結使を拔く。此の勇猛有り、解脫を得んと欲す。功德壞す可らず。[201]善覺集りて彼に在り。彼の衆生の婬怒癡を除き、無所畏を得ること、猶、彼の[202]阿若拘隣・[203]舍利弗・[204]大目揵連・[205]迦葉・[206]迦栴延子・[207]阿那律・[208]難提・[209]金鞞羅・[210]難陀・[211]離越の(ごとくならしむ。)彼の聲聞の園中に於て、聲聞王と爲り、功德無比なり。浴

【一九八】この一節、如來を園觀に喩へて讚嘆す。
【一九九】屺山。草木なき山。
【二〇〇】慈悲喜護。四等心なり。
【二〇一】善覺集在彼。
【二〇二】阿若拘隣。(Ājñāta-kauṇḍinya)。
【二〇三】舍利弗。(Śāriputra)。
【二〇四】大目揵連。(Mahā-maudgalyāyana)。
【二〇五】迦葉。(Kāśyapa)。
【二〇六】迦栴延子。(Kātyāyaniputra)。
【二〇七】阿那律。(Aniruddha)。
【二〇八】難提。(Nandika)。
【二〇九】金鞞羅。(Kimbila)。
【二一〇】難陀。(Nanda)。
【二一一】離越。(Revata)。

心に觀じて而して彼を觀ず。人民・須輪・鬼神の衆に於て、三世に於て、慈を行じ、皆淸淨の蔭涼を得、解脫門至要の處を得しむ。復、智慧光を以て、彼の淸淨の人民の衆を洗ひ、下、男女に至るまで、皆善を得しむ。[一九四]彼に於て遊行して、諸の忍業を得、甚深法を得(しむ)。衆生法を善くして、善根を種(ゑしむ)。衆生、甘露の味を飢虛すれば、彼の度脫を得ざる者を憂へ、修行の法を以て、彼をして、[一九五]一切有爲の行は皆悉く無常・苦・空なり、一切法は無我なり、涅槃を第一樂と爲すと覺らしむ。等しく此の苦樂を度し、善く悉く分別し、言語具足して、種種の衆中に於て、善法を稱揚して、解脫の根を種う。婬・怒・癡・憍慢の法は、盡く之を捨離す。無畏金剛の志を以て、彼の勤苦の患を度す。他の衆中に於て、正法を受けしむ。恐怖有る者に、一切智は、皆一切を愍ましむ。一切惠施して、所著無し。是の故に、雨甘露を拜手して禮しまつる。是に於て、此の偈を說く、

　功德照明を出して、　十力の雲無比なり。　當に歡喜心を發して、　甘露を說いて渴を除くべし。　已に無所畏を得たり、　是一切智雲なり。　已に外を降伏する有り、　是の故に甘露を食す。

四十八、火喩

[一九六]爾の時、世尊、是の如きの火有り。[一九七]所謂、彼の求行なり。人民の類皆喜樂を求む。解脫して四等心を得、所求已に度し、第一義具足して、智と相應す。一切遍三昧に、是の神力有り。種種の名聞あり、諸の根・力具足す。等至甚深にして、已に此の力有りて、無數百千種なり。此の根戒もて、一切の法に自在を得。三世の最尊なり。十力威神を以て、無所畏を得。是第一解脫なり。第一光明・第一空寂を得。是の如きの德有り、深法を布現す。彼の衆生の類に於て、訓誨して忍を行ぜしめ、諸の瞋恚を度し、言語柔和にして、傷損する所無く、一切の結使を滅す。學・無學に於て、四部衆に

【一九四】於彼遊行得諸忍業、得甚深法善衆生法而種善根。

【一九五】一切有爲行皆悉無常等。一切行無常・一切法無我・涅槃第一樂を以て、三法印と爲し、又、一切行無常・苦・空・一切法無我を以て、四法印と爲す。

【一九六】この一節は、如來を火に喩へて讚嘆す。

【一九七】所謂彼求行。

しまつるべし。

四十六、蓮花喩

〔一八九〕如來蓮花とは、何の像貌と爲す。所謂第一功德の所成なり。三有に於て、有信を度することを得、衆生に於て、清淨の等智、普ねく悉く周遍す。精進力を以て、彼岸に度ることを得、雲霧を消滅して、禪悅皆悉く得度す。解脫を念じて、衆想無く、觀を以て、彼の種種の穢患を息めて、亦異意無し。等見滿足し、悉く之を成辦して、皆悉く覺知す。戒の香を以て、香四遠に聞え、〔一九〇〕清淨光を以て、衆生の類を壞す、猶、彼の蜂衆の嚮の若干種なるを、悉く分別して了するがごとし。三有に於て、等しく解脫を得、衆生皆、悕望を得。種種の方便もて、之を安隱にせんと欲す。甚妙の觀、厭足無く、一切の根に、缺漏無し。息心の衆中に於て、婬・怒・癡・憍慢の患、更に熾盛ならず。極めて清淨柔軟にして、而して度脫を得。是に於て、便ち此の偈を說く、

清淨の所生の、　供養花無比なり、　無數の功德具はり、　微妙最第一なり。　休息の樂を得んと欲し、　衆生清淨を得。　已に能く彼を覺知し、〔一九一〕謂呼、常に聲有り。　已の嘆譽する所、　世と而も相應す。　微妙第一の色、　善香を最も妙と爲す。　人中の最上たり、　世人の嘆譽する所、　我、今、無著大神仙に拜手して禮しまつる。

四十七、雲喩

〔一九二〕爾の時、一切智、是の如きの雲有り。所謂九十一劫所造の行にして、〔一九三〕不淨を思惟する神力の所制なり。所說に異有ること無く、諸の欲愛を盡して、愁憂有ること無し。諸の三昧に於て、彼處に到るを得。大慈悲を以て、一切衆生の爲めに、功德を得しむ。百福具足して、彼をして休息を得しむ。

〔一八九〕この一節、如來を蓮花に比す。

〔一九〇〕以清淨光、壞衆生類、猶彼蜂衆嚮若干種悉分別。

〔一九一〕已能覺知彼、謂呼常有聲。

〔一九二〕この一節、如來を雲に比して讃嘆す。

〔一九三〕思惟不淨神力所制所說無有異。

自ら勝へざらしむ。善身口意の十力の船を以て、衆生を載せ、皆一切甘露涅槃處に至るを得しむ。是に於て、便ち此の偈を説く、

無數劫に苦行し、　而して福德の船と造り、　善く安隱處に趣きて、　三世の救護と爲る。
彼、歡喜の心もて、　疾く生死の岸を度る。　一切悉く當に終るべし、　盡きて當に是の樂有るべし。

四十五、日　喩

〔一八六〕爾の時、如來に是の如きの日有り。所謂、禪・四等なり。具足の行に、缺漏無く、穢行無し。善く一切の爲めにする戒を將護して、名稱遠く布き、種種の衆生の類、皆悉く敬仰す。樂止の處を得て、心に歡樂を得しむ。無數百千劫に〔一八七〕苦習盡道を修行して、第一義を現す。智慧を以て照明して、愚癡の冥を除く。諸苦を消滅して、彼の衆中に遊ぶ。皆悉く十力・無畏・勇猛の意を成就して、三千世に於て、皆悉く破壞す。不度の者を愍護して、智、破壞せず。爾の時、世尊、彼に於て、日明を現じ、無漏行具足す。大乘の車に乘じて、等御無畏なること、風の帆を吹くが如し。念車、皆彼と相應するを以て、現在前す。〔一八八〕等志を以て、彼の所有に於て、皆悉く具足す。等三昧もて、一切衆生の類を思惟す。彼、三世に於て、具足翼從す。其の教を承受するもの、意に欲・怒・癡・憍慢無く、諸の結使を捨つ。天人衆、花を以て供養し、五蓋有ること無し。信財を以て、一切衆に布現して、皆覺知せしむ。塵埃有ること無く、諸の結使無礙なり。是の如く、世尊を日光明を爲す。是に於て、便ち此の偈を説く、

百智已に具足し、　彼に於て衆、缺くる無し、　已に三世の光を現す、　是の故に光を拜手しまつる。
無數百劫の行もて、　愚盲冥癡を滅し、　已に能く此の岸を度る、　當に慧日を拜手

〔一八六〕この一節は、如來を日に喩へて叙す。

〔一八七〕苦習盡道。苦集滅道の四諦なり。

〔一八八〕等志・等三昧。八正道の中の正思惟・正定なり。前出。

是の故に當に度を求めて、道船に慇懃なるべし。如來海は無量なり、是の故に佛に拜手しまつる。已に度して彼處に到り、功德の福無量なり。已に此の苦樂有り、當に安隱處を求むべし。

四十四、船喩

[178]如來船とは何者か是。所謂善造牢固たる果報なり。習衆、違失する所無く、亦缺漏せず。衆行具足し、諸惡永く盡く。第一甘露の禁戒、用つて身に纒絡す。斷滅有常の想無く、已に住して休息し、彼の道に住するを得たり。常に忍を愛樂して、瞋恚を起さず、五根を分別し、等見にして、異想無し。種種の清淨解脫あり、空・無願・無相の[179]三三昧具足す。常に慚愧を懷き、彼の猶豫を度す。[180]禪の四等、無色の三昧、種種の行を悉く分別して限量有ること無し。汚露不淨を觀じ、第一忍智、常に現在前す。婬に覺想有り、皆悉く不淨として、常に遠離を念じ、金剛三昧を、而も之を布現す。無量の方便もて、衆生を度せんと欲す。覺意の珍寶、智と相應し、出要の道を修行して、生老病死の患無し。[181]更に胎を受けて、衆生を度せんと欲す。三世の行に於て具足し、沮壞す可らず。一切の世俗を樂まず、一切の相を觀じて、捨離を得んと欲す。是の如く增減の心無くして、能く一切衆生を度す。十力の船を以て、長夜に衆生を度して、彼岸に度せしむ。常に此の觀有り、已の身の爲めにせず。[182]第一聲聞、遍觀三昧に入りて、種種の觀を作し、承事して、繒幡・花蓋を供養す。三三昧を以て、佛印と爲し、冷梅檀を以て身に塗る。[183]五通徹視して、種々の香遠布す。四無所畏を以て螺と爲し、鐘鼓具足して、缺漏無し。無常・苦・空・無我にして、生死海を離るるを得んと欲す。魔衆を降伏し、皆碎壞して、無爲の處を盡す。法想を分別して、一切受けず。不度の者は、度して[184]滅識處を得、苦樂無くして、涅槃に至らしむ。福車に乘りて、[185]四部衆の爲に、皆歡喜踊躍して、

【一七八】この一節は、如來を船に比して讃嘆す。

【一七九】三三昧。空・無想・無願なり。或は三解脫門といふ。

【一八〇】禪四等無色三昧。禪四等は色界四禪定をいひ、無色三昧は無色界四空定をいふ。

【一八一】更受胎欲度衆生。幾たびか、生を受けて衆生を度せんとするなり。又次に、度一切衆生とあり、不爲己身とあり、菩薩大乘の精神の既に醬勃たるを見る。次の節に乘大乘車とあるをも、併せ見るべし。

【一八二】第一聲聞入遍觀三昧作種觀。

【一八三】五通。天眼・天耳・神足・他心・宿命の五神通を云ふ。

【一八四】滅識處。滅盡定のことなるべし。

【一八五】四部衆。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。

く、各當に散離すべきが如し。此も亦是の如し。命根已に盡き、當に載せて塚間に向ふべし』。猶、彼の蓮華子の熟して後、復萠芽を生ずるがごとし。此の相も亦是の如し。數數有を受く。猶彼の壞敗せる花莖のごとし』。衆生の類を想うて、是に於て、便ち此の偈を說く、

是の故に當に有を棄つべし、　亦當に此の華を觀ずべし。　猶、彼の胞胎を生ずるがごとし、
懇懃に當に滅を求むべし。　欲求は萠芽を生ず、　樂の空にして有ること無きを知れ。　彼處に到ることを得んと欲せば、　當に自らの意に從ひて求むべし。

四十三、海　喩

〔一七四〕世尊海とは其の義云何。所謂第一に衆生を度し、彼岸に到る。思惟無量にして、功德を增益す。清淨にし瑕無く、大智慧有り。解脫して怨恨の心無し。第一に解脫を得、善覺觀を以て、善根を離れず。名聞遠く布き、智慧普ねく至る。種種の香遠く布く、猶、樹の茂盛するがごとし。〔一七五〕七覺意の寶、無常・苦・空・無我を分別して、已に度す。智慧百福具足し、常に三昧に入りて、亂志有ること無し。衆生を勸助して、善心を發さしむ。能く一切種種の三昧を成辦し、學・無學の中に於て、最第一たり。法を布現して、未だ曾て懈惓せず。等度平正にして、語言柔和なり。清淨にして瑕無く、婬怒癡無し。大衆中に於て、功德第一なり。普ねく一切を慈みて、安樂休息し、境界を教授して、常に恭敬を念じ、功德窮極すること無し。爾の時に當りて、世尊、〔一七六〕九十一劫中に漸く此の德を成ず。一切甚深の業を覺知し、一切群生をして、其の一味を同じくせしめんと欲して、說法に時節を失はず、常に彼と相應す。十力の珍寶あり、一切の衆寶を具足し、四無所畏、四大に止宿するに依りて、彼の衆生の爲めの故に、尊卑を選擇せず。已に〔一七七〕世の八法を度して、增損の心無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

【一七四】この一節は、如來を海に比して讚歎す。

【一七五】七覺意。又、七菩提分、七覺支(Sapta-bodhyanga)。擇法・精進・喜・輕安・念・定・行捨の七菩提分なり。

【一七六】九十一劫。釋尊むかし彌勒と共に發志求道し、彌勒は智慧勝れしが、釋尊は精進に於て勝れ、之が爲に九劫を超越して、彌勒に先だちて成佛せりといはる。

【一七七】世八法。利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂の八法を云ふ、世人の心情を動かすものなり。

如し。是の故に一切當に捨つべし』。猶、彼に於て衆行を生ずる有るが如し。此も亦是の如し。是の故に彼の法は、猶、彼の萠芽の子と相似るが如し。此も亦是の如し』。[一七〇]大人の相は毀壞すべからず。是の如きは性の所造なること、猶、蓮華子の萠芽を生ずるが如し。是の故に此の無數は、亦生ずるもの有らず』。猶彼の萠芽の生ずる時、來處有ること無きが如し。此も亦是の如し。是の故に來無く、去無し』。猶彼の去る時に、住止の處有ること無きが如し。此も亦是の如し。是の故に住處無し』。猶、彼の萠芽の俱に長益して、漸漸に花を敷くが如し。此も亦是の如く、高無く下無し』。猶、彼の蓮華の萠芽の必ず當に長益すべきが如し。此も亦是の如し。本所造の萠芽、胞胎中に於て、漸漸に長益す』。猶、彼の蓮花の茂葉の甚だ愛欲す可きが如し。此も亦是の如し。所造の衆行甚だ愛敬す可し』。猶、彼の當に熟すべき時のごとし。此も亦是の如し。子熟せんと欲する時、髮毛爪齒及び五根、皆當に捨離すべし。六情衰耗し、意根解散して、此の身を捨つ。猶、彼の華の必ず當に大熟すべきが如し』。猶、日光の色香甚だ微妙にして、蜂王の遊行する所、甚だ愛敬す可きが如し。此も亦是の如し。初生の時、四大、日光に照されて、勇猛の胎の覺する所、彼と相類するを[一七一]得て、是の故に憍慢にして皆共に相依り、甚だ愛敬す可し』。飢渴生死して、欲を謂つて樂と爲す。彼の愚癡なる者に、是の如きの顚倒の想有り。此も亦是の如し』。一切の時節に老死を脫せず。猶、彼の時節の力勢有ること無く、熱風に炙られ、盡く之を捨離して、華實各離れ、亦所緣無く、亦復蜂無く、亦鮮色無く、彼を樂します者無きがごとし。此も亦是の如し。漸漸に耗減し、此の生の中に於て、力勢有ること無し。誰か命有りて存せん。內外皆損減し、少壯の力無く、皆當に喪逝すべし。萎節有ること無く、齒髮無く、見無く、聞無く、味無く、香無く、[一七二]細滑無く、亦[一七三]更樂無し。身體壞敗し、所有の憍慢皆除盡し、亦味著無く、熾盛無く、意已に色を越え、皮緩み、面皺ばみ、少壯の力無し。已に是の老有れば、種種の色の壞敗するを愛せず、男女衆の所に彼に愛著するを害す』。猶、彼の枯朽して亦香有ること無

【一七〇】大人之相不可毀壞、如是性所造猶如蓮華子生萠芽、是故此無數亦不有生者。

【一七一】得。麗本には德に作る。今三本に從ひて得と改む。

【一七二】細滑。觸の舊譯なり。

【一七三】更樂。また觸の舊譯なり。見・聞・味・香・細滑は、五境なり。細滑は五境の觸に用ひ、更樂は十二因緣の觸に用ひらるゝを慣習とせり。

せらる。此の世は、少味なり、猶、蜂の華を採るがごとし。此の世は、所依無く、便ち當に壞敗すべし。此の世は、遠遊なり、輪に乘りて而して行く。此の世は、繫縛なり、生死に處る。此の世は、衆惱あり、生老病死至る。此の世は妙に非らず、必ず當に壞敗すべし。此の世は、救護無し、[一六三]痛の爲めに逼らる。此の世は、己の所作に非らず、必ず之を捨てて去る。此の世は、機關なり、展轉して相依る。此の世は、種種の行あり、惡處に將引す。此の世は、幻化の如くにして、色像を現ず。此の世は、益する無し、彼の壞敗の器を生ず。此の世は、輕擧なり、所依成ぜず。此の世は、[一六四]境界有ること無しと覺悟し難し。是に於て、便ち此の偈を說く、

[一六五]衆生苦惱に遭ふも、　世を觀ずるに世有る無し。　智慧を以て道を求め、　當に彼處に親近すべし。　漸漸に小從り益し、　其の命を愛するを得んと欲す。　此れ必ず當に壞敗すべし、　是の故に滅を樂と爲す。

四十二、度脫生死

[一六六]云何が此の生に於て、泥塗を度する。猶、彼の池水の蓮華の子の、其の中間に於て、萠芽生じ、漸漸に長益するが如し。此亦是の如し。[一六七]五味皆死し、識處を以て往生し、有爲行の所造圍繞し、風火の成ずる所と爲す、憍慢の水の溉ぐ所と爲り、死を受けて、其の中間に於て、萠芽を生ず』。猶、彼の萠芽生ずるが如し。此も亦是の如し。萠芽生ず。是の故に斷滅と常住とに非らず』。猶、彼の先づ萠芽を觀るが如し。此も亦是の如し。彼の衆生縛著す。是の故に斷滅と有常とに非らず』。猶、彼の地の風に吹かるゝがごとし。此も亦是の如し。四大牢固にして、諸の苦惱を受く。此も亦是の如し』。[一六八]是の故に一切自然なり。猶自然の壞せずして、蓮華の萠芽を生ずるが如し』。是の故に一切は、[一六九]自然の一義の習ふ所に非らず』。猶、彼の外の四大の、風に吹かれ、更に復此の四大を造らざるが如し。此も亦是の

【一六三】痛。受の舊譯にして、苦樂の感受をいふ。
【一六四】無有境界。滅の意味なり。
【一六五】此の二句の意は、衆生は世を實有と謂つて苦惱に遭ふも、智慧眼を以て觀ずれば、無常苦空なりと謂ふなり。
【一六六】此一節は、欲を滅して、この生を度るべきを叙す。
【一六七】五味識處。五蘊を色法と受想行識とに分ち、而して色法を色聲香味觸の五境として之を五味と云ひ、受想行識の主體を識處と云へるなり。
【一六八】是故一切自然猶如自然不壞蓮華生萠芽。一切自然なりとは、自然不壞蓮華生萠芽より見れば、識處の永續を意味すべし。此の一節は識の斷滅を排せるが如し。
【一六九】一切非自然一義所習。一義所習の自然に非ずの意か。然らば、識の常住を排せるなり。

[一五五]根は境界の中に滿ち、惡の爲めに將御せらる。彼の心常に熾然す、猶、熱鐵丸の如し。如來の教は善なる哉、將いて安隱處に至る。諸根の患有る無し、況んや、當に境界有るべきをや。

四十、覺知心

[一五六]爾の時、世尊、云何が心を覺知する。所謂境界に依りて生じて、便ち長益す。此心は、亂想不定なり。此の心は猶、疾風の如し。此の心は、疲厭せず、惡に緣りて殃を招致す。此の心は遠馳す、猶夢想の如し。此の心は、境界に貪著す、猶、彼の獼猴のごとし。此の心は、自然に種種に貪著を行ずる、猶彼の孔雀翅の常に自ら影を顧るがごとし。此の心は馳走し、遠く財業を思惟す。此の心は、諸の陰蓋を起す。亦[一五七]野馬の疲厭し得ざるが如し。此の心は、制御し難く、境界に於て、住せず。此の心は、猶、王の常に[一五八]自在を得るが如し。是に於て、便ち此の偈を說く、

第一甚深妙なり、[一五九]心知に限有る無し、夜叉も[一六〇]須揵沓も、三世に覺る能はず。彼、是の自在を得、自然に是の念有り。世間に明有る無し、我爲めに法光と作らん。

四十一、覺悟世間

[一六一]爾の時、世尊、云何が世間を覺悟することを[一六二]布現する。所謂世間は恃怙する所無し、己が身に貪著す。此の世は、心に依る所無し、境界に貪著す。此の世の惡業は、種種の邪見に依ること是の如し。此の世は、自然の所造なり。此の世は、邪道に墮し、流轉して惡に趣く。此の世は惡趣に處ること、猶、獼猴の如し。此の世は、照明有ること無く、五陰蓋の爲めに覆はる。此の世は、盲冥にして、智慧眼を起さず。此の世は、飢渴して、渴愛厭く無し。此の世は、熾然して、種種の結に縛

【一五五】根滿境界中。五根が一切の境界に對して作用するを云ふ。

【一五六】この一節は、如來心の如何なるものなるかを覺知せるを叙す。

【一五七】野馬。陽炎なり。

【一五八】常得自在。心の動搖して制御し難きを云ふ。

【一五九】心知の知、三本に智に作り、限の字、麗本に根に作る、今、三本に從つて限と爲す。

【一六〇】須揵沓(Sukandha)。

【一六一】この一段は、世尊が世間を覺悟せるを叙す。

【一六二】布。麗本に希とあれど、宋元明三本によりて布と改む。

彼の衆生に依りて、亦陰蓋無し。三昧の證通を得、右脇を以て地に著く。久しく睡眠せず、尋いで起ちて經行して、而して道を修行す。無覺三昧を以ての故に、右脇地に著く。怨敵を降さんと欲するが故に、[一五〇]師子座に昇る。[一五一]五細綵の現色を著するは、眞の沙門の色形に非ず。染著する所無くして、而して梵行を修す。彼の衆生に依りて、解脱心を求む。是に於て、便ち此の偈を說く、

無善根の衆生も、　釋種の功德も、　心所造の善行も、　心に皆自覺知す。　善い哉大法義、
能く勝を得る者無し。　今如來の衆に於て、　草を以て欲愛を除く。

三十九、覺知諸根

[一五二]爾の時、世尊、云何が諸根を覺知する。所謂、曩昔、是の如きの[一五三]根を作して、氣味と與に相應す。道を以ての故に、此の[一五四]根を生じて、顚倒の欲使を降伏す。諸根は、順流し、生死と相應す。此の諸根は、不淨行を起して、而して餘の緣に依る。此の諸根は、世間に貪著し、亦樂に於て深著す。此の諸根は、諸の力勢を起して、一切の結使熾盛なり。此の諸根は、身を驅逐して、流轉息まず。此の諸根は、大義を成就せず。此の諸根は、迷惑して、諸の境界を經歷す。此の諸根は、猶、彼の劍刺の傷害するがごとし。此の諸根は苦惱なり。此の諸根は、猶、彼の瘡痍のごとし、諸の結使を漏らず。此の諸根は、猶、疾病の如く、力勢有ること無し。此は、厭足有ること無く、恒に求めて止まず。此の諸根は、休息せず、數數結使を起す。此の諸根は、猶、毒藥の如し、苦の本を斷ぜず。此の諸根は訓誨を被らず、諸惡と相應す。此の諸根は、境界を藏匿せず、劍刺に縛せらる。此の諸根は、護る所無く、氣味具足せず。此の諸根は、心有ること無く、境界に流馳す。斯の諸根は、修行せず、欲火の然ゆる所、境界長益す。此の諸根は、諸の苦惱有り、他の境界に遊び、一切身心に苦有り。是に於て、便ち此の偈を說く、

【一五〇】師子座（Siṃhāsana）。佛は人中の師子なれば、佛の坐する所を師子座と云ふ。
【一五一】五細綵。比丘の衣は正色を忌むを以て、かゝる五色を以て綵りたる衣は、比丘の著すべき物に非ず。
【一五二】この一節は、如來が諸根の如何なるものかを覺知するを敍す。
【一五三】如是根の根は流轉門の根。
【一五四】生此根の根は還滅門の根なり。

が故に、其の病を長養して、火をして起らざらしめ、皆悉く除棄して、亂想を生ぜず、甘露を布現し、梵行を修行せんとてなり。故に[147]痛壞敗して、新痛を造らず。是を以ての故に、世尊、彼の信施を受け、彼の果を食す。身に所造の報、世人を安隱ならしめ、擁護せんと欲す。是に於て、便ち此の偈を說く、

　處處の家家に乞ひて、正法を得しめんと欲したまふ。彼の園觀の處に於て、六足(蜂也)の味を食するが如し。食の好醜を擇ばず、善惡の意を生ぜず、彼、沮壞す可らず、心、解脫を味ははんと欲す。

(二十六) 臥　床

[148]爾の時、世尊、是の如きの臥床有り。山巖穴處に露坐す。園觀・水側・泉源の種種の華果茂盛する處、快樂無比なり。無人の處に、解脫を欲求し、彼に於て止住し、諸惡を解脫して、亦陰蓋無し。人の到らざる所の處、恐畏無し。色著を去離して、常に寂靜を樂しむ。衆生の與めに說法すること、廣く說くこと契經の如し。是に於て、便ち此の偈を說く、

　樹木の花果を生ずる、[149]漫那花の園觀、分別して閑靜を樂しむ、青靑の花皆敷く。彼に於て解脫を求む、　是を以て彼の處に依る。　若、閑居に詣るの時、聲無く亂想無し。

　是の時、世尊、草を以て地に布く。塵垢有ること無く、裝飾を著せず。極細軟滑にして、善生微妙なり。若、彼の影を見れば、觀るに厭足無し。皆悉く觀察して、高ならず、下ならず。是の思惟を作して、展轉して相依る。名色六入は、彼の盡くる有ること無きを現ず。或は草を以て地に布く。數、彼を降伏すること有るが故なり。草を布いて而して坐し、欲想有ること無し。草を以て蓐と爲し、亦結使無く、皆悉く淸淨なり。古昔、諸佛所造の功德、亦所攝無く、貪著無く、證通を得て、迴轉する所多し。亦衆惱の、諸の結使の草を生ずること無し。齊整にして亦錯亂せず。

【一四七】痛。古譯に受を痛と爲す。食より受くる感覺なり。

【一四八】この一節、如來の臥床を叙す。

【一四九】漫那花(Mandārava ?)。

[一三七]爾の時、世尊、是の如きの衣有り。高ならず、下ならず、時に隨ひて衣を著すれば、生死原の草穢を滅す。衣服を著せざるも、境和悅す。至到する所の處、皆悉く歡喜す。是の如きの果實有り。是の故に、尊者難陀、[一三八]衣常に鮮明に、及び諸の比丘、世尊の側に在りて[一三九]僧伽梨を著するも、能く如來の衣を汚す者有ること無し。是の時、尊者[一四〇]難陀、未曾有と嘆ず。往いて世尊に白して、著衣の法を知らんと欲す。世尊告げて曰はく、「云何ぞ難陀、本如來の長夜に出世すること無くば、云何ぞ、衆生の婬怒癡の垢を除きて、永く盡きて、餘すこと無からしめん。便ち彼の教に隨ひて、設、當に是の成就を作すべくば、[一四一]隨藍風も、此の衣を動かす能はず、塵垢も染せず」。是に於て、便ち此の偈を說く、

如來所著の衣は、　自ら身の形體を覆ふ。　蓮華の垢を著せざるがごとく、　此の衣も亦是の如し。
若、隨藍風起れば、　力勢制す可きこと難し。　如來の衣を動かさんと欲するも、
誰か十力に勝る者ぞ。

（二十五）　乞　求

[一四二]爾の時、世尊、是の如く諸豪尊家に乞求す。卑賤を擇ばず、皆悉く周遍して、[一四三]邪命有ること無し。俯食せず。星宿を瞻、卜問して仰食せず。信使を受けて、彼に往いて食せず。四方を觀て食せず。呪術幻惑して食せず。田業に依倚して食せず。乞ふ所以の者は、彼を救濟せんとするが故なり。希望の意無く、食に染著せず。爾の時、世尊、食に[一四四]更樂有ること無し。所有の染著に、是の如きの業を觀じて、而して彼の食を受け、亦貪著せず。婬怒癡無く、亦迷惑無し。迷惑の心を除き、皆染著の心を捨離して、與共倶ならず。彼の欲愛を捨てたるを以て、沮む可らず。常に彼を愛樂して、[一四五]禪を以て食と爲す。亦我想の苦無く、皆悉く捨離して、非の義を現ず。此の身必ず盡きて、以て[一四六]三事を捨離し、清淨にして婬怒癡無きを知る。今、云何ぞ食して、此の身を現ぜんと欲する。牢固無き

【一三八】衣常。三本には衣裳に作る。
【一三九】僧伽梨(Saṃghāṭi)。比丘の三衣の中最大なるもの。
【一四〇】難陀(Nanda)。
【一四一】隨藍(Velamba)。毘嵐。吠藍婆。また隨藍にも作る。迅猛風と譯す。速力迅急にして、一切悉く壞散せしむ。劫災の時に、吹くといふ。
【一四二】この一節は、如來の行乞を叙す。
【一四三】邪命。比丘が如法に乞食して生活せず、不如法の事を爲して生活するを云ふ。以下に種々の邪命を列擧せり。
【一四四】更樂。吳支謙は觸を譯するに、更樂の語を以てせり、舌に食を更て、心に之を樂しむの義を取る。「食に更樂なし」とは、食に味欲あるの謂なり。
【一四五】禪食。覺者は、禪三昧を以て食と爲す。
【一四六】三事。次に出る婬怒癡即ち貪瞋癡の三毒なり。

[129]爾の時、世尊、是の如く笑みたまふ。是の如きの因緣を作すは、本行の造す所、彼の衆生を愍むが故に、便ち是の如きの笑を現ず。是の時、世尊笑む時、[130]是の第一柔軟極淨微妙の所聞有りて、耳を經。佛の笑むを見るに、塵垢無く、清淨にして瑕無し。本修行する所、亦虛言無し。猶、優鉢・[131]瞻伏華の種種の香有るが如し。甘露の語と、種種の光とを布現す。第一微妙にして、心能く分別す。爾の時、世尊の身、黃金色を作す。猶、高山の峻なるがごとし。彼を繞ること三匝にして、[132]阿迦膩吒の所に生ず。彼の天宮に於て、諸の信を得る者、如來の敎誡を承受して、違失する所無し。展轉して相告げて、便ち如來に於て歡喜す。爾の時、世尊、本所造の行なり。是に於て、便ち此の偈を說く、

青黃種種の色あり、口に禁戒の光を演べたまふ。出要せる如來の身は、天人の供養する所なり。如來の眉間の相、三因緣もて無比なり。阿迦膩吒に至るまで、如來の所に來至す。

(二十三) 光明

[133]爾の時、世尊、是の如きの光有り。皆是本行の所造なり。身後に是の光有り、極妙善なり。解脫光、最第一なり。身體に光有り、見る者歡喜す。種種の光明、其の身を瓔珞す。諸有の塵煙、[134]羅睺阿須倫の障ふる能はざる所なり。[135]五結解脫し、愚癡を除去す。爾の時、世尊、甘露を現じ、彼の衆生をして、此の味に遇ふことを得しむ。自然の[136]神足、不可思議なり。是に於て、便ち此の偈を說く、

身體善く解脫して、能く沮壞する有るもの無し。十力に此の光有り、愚者の見ざる所なり。如來に神足有り、衆生に示現すること等し。大光、日明を蔽ふ、是の故に光に歸命[137]しまつる。

(二十四) 衣服

【一三〇】有是第一柔軟極淨微妙所聞經耳。

【一三一】瞻伏華。前出の瞻匐花に同じ。

【一三二】阿迦膩吒(Akaniṣṭha)。色究竟天なり。色界の最上所なれば、有頂天といふ。

【一三三】この一節、如來の光を叙す。

【一三四】羅睺阿須倫(Rāhu-asura)。羅睺阿修羅王。前出。

【一三五】五結。貪・恚・慢・嫉・慳の五。結は煩惱の異名。人を迷界に結びつくるを以てなり。

【一三六】神足。神通に同じ。

【一三七】この一節、如來の衣を叙す。

一二六 爾の時、世尊、是の如きの遊步を作す。先づ右足を擧げて、地を蹈むに、遲からず、疾からず、行步平正にして、亦卒暴ならず。猶、彼の象王のごとくにして、異ること有ること無く、行步堅固なり。世尊の身、搖動せず。猶、那羅延天のごとし。是の時、世尊、諸有の高なる者を下と爲し、下なる者を高と爲す。諸有の小戸なるもの、自然に廣大なり。如來の身體、未だ曾て屈申せず。皆是前世に憍慢心無ければなり。諸有の樂器鼓せずして自ら鳴る。諸有の蠕動の類、皆安穩を獲。皆是前世に、慈心を修行すればなり。是に於て、便ち此の偈を說く、

彼、大神妙有り、　無畏にして此の德有り、　住處に善色を受け、　剛強なる者を破壞す。
彼已に憍慢を捨てたり、　最覺の自ら覺する所、　愛欲無くして微妙なり、　住處に行報を受けたまふ。

(二十一) 行　迹

一二七 爾の時、世尊、是の如きの迹有り。千輻相の輪、極微妙を現じ、諸根具足し、色甚奇にして比無し。人中に於て、最第一なり。諸の歡喜を生ず。百千劫の所作の行福の致す所なり。塵穢無く、婬怒癡を除去す。本所作の行に、僞諂有ること無く、衆惡有ること無し。癡と相應せず、癡行を造らず。是の如きの名稱有り。志性質直にして、所作に悕望無く、狐疑を懷かず、意に所滅有り。悕望を除去し、行に缺漏無く、心に彼此無し。功德遍ねく具足し、十力成就して、一切の患を除く。是に於て、便ち此の偈を說く、

最勝、此の德有り、　種種の行の所作なり。一二八 分別して地を行くの業は、　日出でて照明するが如し。　彼の輪、地に隱れて現ずるは、　心意の觀察する所なり。　當に自ら佛に歸命し、　是の如く以て地に印すべし。

(二十二) 微　笑

【一二七】この一節、如來の迹を叙す。

【一二八】分別行地業、如日出照明、彼輪隱地現、心意所觀察。

【一二九】この一節、如來の笑を叙す。

世人の爲めの故に、之を度脱せんと欲す。其の音を聞く有る者は、猶、彼の龍王の[一一七]善く眠りて移動せざるが如し。彼の[一一八]三耶三佛に於て、所行の功德は、功德百千倍し、瓔珞微妙にして、光影無比なり。此從り以來、是の如きの功德有るが故に、拜手して偈を說く、

愛念害す可らず、今、世尊の足を禮しまつる。亦如來の頂を禮しまつる。如來、衆を解脫せ(しめた)まふ。其れ此の信を彼の最勝の前に得る有るもの、[一一九]白分極めて細滑なり。

是の故に尊に歸命しまつる。

(十九) 輪　相

[一二〇]爾の時、世尊、是の如きの[一二一]輪有り。極圓にして、亦雜穢無く、亦麤獷無し。甚深にして、千輻輪有り。其の嚮柔和なり。身具足し、諸根を滿して、缺けず。大行業を造すに、[一二二]四方事の聖轉輪の相を以てす。[一二三]境界具足す。[二]怯弱の心無し。[三]猶、[一二四]須輪の手を以て月を障へ、而して光有ること無きが如し。[四]設、輪を放てば、便ち大光有り。猶、春時の塵埃有ること無く、虛空の中に、亦雲塵無きが如し。爾の時、夜半に於て、結使(月病)有ること無ければ、月、大光を放つ。此も亦是の如し。轉輪聖王は、本より如來の相無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

人生の壽百年、常に其の時節を滅※す。是の聖輪の相有り。猶、彼の蓮華の敷くがごとく、

亦安明山の如し、第一にして比有る無し。種福の致す所、如來の修行したまへる所なり。彼の釋宮殿に於て、來告すらく、今已に至ると、諸天の嗟嘆する所、如來應に輪を轉じたまふべし。[一二五]若し能く此を覺知し、彼の少處所を觀ずるに、各各一心有り、能く佛に過ぐる有る無し。志性甚だ牢固にして、放光悉く徹照す。日輪所照の處、善く衆生の類を度したまふ。

(二十) 遊　步

【一一七】善眠。麗本には善眼に作る。今、三本に從つて善眠と作す。

【一一八】三耶三佛(Samyak-sambuddha)正等正覺と譯し、又正徧知と譯す。

【一一九】白分極細滑。白分を明本に白爪に作る。白分は黑分に對して善法を意味す。

【一二〇】この一節、如來の輪を叙す。

【一二一】輪。三本に輻輪に作る。

【一二二】四方事。四事にて可ならん。方は錯簡なるべし。次に四事を列す。

【一二三】境界具足。宋元明三本にはこゝに夾註一の字あり。

【一二四】須輪(Rāhusura)。須輪は修羅に同じ。羅睺羅阿修羅、常に帝釋と戰ふ。時にその前衞なる日月を、手を以て障蔽す。

※滅 減の誤ならん。

【一二五】若能覺知此、觀彼少處所。

【一二六】この一節、如來の遊步を叙す。

能く害する者無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

百劫に於て行を造り、人中の上と爲るを得たまへり。今此の色身を得て、今亦與に等しき者無し。婬怒癡を滅するを以て、諸惡永く以て息む、是の故に今稽首しまつる。我が後をして亦爾ならしめよ。設ひ婬怒癡を起すとも、尋時に能く滅ぜしめん。今佛の顏色を觀ずるに、身に衆の惱患無し。

(十六) 腨脾相

二四 爾の時、世尊、是の腨脾有り。上下倶に等しく、善生徵妙にして比無く、不平の處無し。人をして歡喜せしむ。身と相應す。是に於て、便ち此の偈を說く、

腨脾清淨にして妙なり、第一にして比有る無し。其の觀見する者、諸の瑕穢有る無し。徵妙にして軟毛を生じ、善住して金色の如し、更に餘の趣を受けず。此の最妙色を觀ぜよ。

(十七) 蹲腸相

二五 爾の時、世尊、此の蹲腸有り。是の如く生圓にして、漸漸に纖細なり。身と相稱ひ、鹿の蹲腸の如く、善光清淨にして、與に等しき者無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

如來の蹲徵妙なり。色亦此有る無し。當に一切の相を觀ずべし、一一稱量し難し。當に彼れ是の如しと覺すべし、一切世の稱する所なり。設、當に滅度の後は、是の故に蹲に歸命しまつるべし。

(十八) 足相

二六 爾の時、世尊、是の如きの足有り。行歩安詳として、善住して移らず、亦搖動せず、極めて徵妙なり。細足指長、百福の相具はる。是の如きの苦行を作して、然る後之を得たり。道場に往詣して

【二四】この一節は、如來の腨脾を叙す。腨はひとし、脾はもゝ、上下のふとさのひとしきをいふ。

【二五】この一節は、如來の蹲腸を叙す。蹲腸とは、脛のこむらのこと。廉蹲は三十二相の一なり。

【二六】この一節は、如來の足を叙す。

きて、諸の善行を修せ(しめん)と欲して、衆生に告げて曰はく、「一切皆苦なり」。彼の塵垢を受くる莫く、生死を厭患し、衆生淸淨にして、悕望を得しむ。彼の幻惑を除かんと欲して、[一〇六]若は、彼、坐禪する時、一切の魔衆、皆彼の所に趣く。種種の車乘・騾・驢・駱駝・象・馬・犛牛・禽獸・師子・狗・猪・羊、或は馬頭を作し、種種の形狀あり、刀を帶び、弓を張り、箭を執り、或は鐘を撞き、鼓を鳴らし、盡く魔衆の形を作し、來りて[一〇七]三佛を害せんと欲す。是の時、世尊、[一〇八]指を以て地を按ず。「此の地、[一〇九]太だ好し」。山林・城郭・泉源・浴池・種種の泉源、皆珍寶有りて、彼の浴池に滿ち、或は金鉢中に盛る。[一一〇]有力の人、彼の鉢を扣けば、便ち聲有りて出で、手に法輪の極妙無比なるを撫づ。是に於て、[一一一]佛に拜手しまつる。便ち此の偈を說く、

第一淸淨の業、　無上の法輪を轉ずる、　如來の手は微妙にして、　極妙なること上有る無し。[一一二]彼の手、應に法輪を撫轉する處、一に在るべし。　彼の住處を見ず、　試みる者有るを見ず。　若法輪を轉ずる時、　彼の衆生の義に隨ふ。　此の法輪を轉ずるを以て、　衆生安隱を得。

(十五)　身相

[一一三]爾の時、世尊、是の如きの身有り。極めて方正にして、缺漏無く、禁戒成就す。師子の臆の如く、功德纏絡して、上下相稱ふ。優鉢華の色の如く、亦壞敗せず。甚深に行く時、右旋し、高ならず、下ならず、極軟微妙なり。皮毛皆右旋す。倍微妙にして比無し。猶、瞻匐迦の極香の如し。亦少ならず、亦老ならず。彼と相應せざるもの有ること無きも、瞋恚と相應せず。諸根具足して、世に未曾有なり。漸く牢固にして、極めて微妙なり。緩ならず、急ならず、金剛の體なり。善く衆生を分別す。其の見ること有る者、皆歡喜心を發して、觀るに厭足無し。圓光七尺なり。猶、安明山の大衆中に在るがごとし。猶、象王の、象衆中に於て、最第一爲るが若し。猶、那羅延王のごとく、一切

【一〇六】若彼坐禪時。この條下に降魔を說く。
【一〇七】三佛。後の如來の足を敍せる條下より見るに、三佛は三耶三佛なり。Sambuddha 等正覺、
【一〇八】以指按地。觸地之印又は降魔の印といふ。
【一〇九】太好。宋元明三本共に、太を大に作る。
【一一〇】有力人扣彼鉢便有聲出手撫法輪。次の拜手佛と共に脫落、又は字句の錯雜あるべし。次の偈より見るに、こゝは轉法輪を敍するなり。
【一一一】拜手佛。手の字、宋元明の三本首に作る。
【一一二】彼手應撫轉、法輪處在一。
【一一三】この一節は、如來の身を敍す。

ごとし。彼の處所、金色と相類す。彼の相最微妙にして、善色極妙なり。一切罣礙無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

滿足して最も微妙なり。　漸漸彼の行に緣り、　如來に此の頭有します、　釋種の幢無比なり。　一切能く害する無く、　如來に於て發意し、　三界衆生の類、　彼の如來の德を歎ず。

（十三）臂　相

[九七]爾の時、世尊、是の如きの臂有り。善生無比なり。彼の須彌山の如し。肩亦微妙にして、與に等しき者無し。高無く、下無く、極めて軟細なり。猶、彼の[九八]娑盧樹王の、軟細にして、害す可らざるがごとく、[九九]瞻匐華の、軟細にして麤ならざるが如し。所生の軟毛、色極めて靑し。各各右旋して極めて軟細なり。一切の觀る者、皆歡喜を獲ること、極めて微妙なり。[一〇〇]手を申べて魔を降伏し、地、我を證知す。是に於て、便ち此の偈を說く、

猶[一〇一]世伽鳩樹のごとし。　諸の魔衆を降伏す、　譬へば[一〇二]金剛杵の如し。　是の故に佛に歸命しまつる。　三界の爲めに唱導し、　法の光照する所と爲る、　彼の意量有る無し、　最勝の前に歸命しまつる。

（十四）手　相

[一〇三]是の時、世尊、是の如きの手有り。極めて自ら柔軟にして、善生無比なり。亦壞敗せず、缺漏無し。[一〇四]泄具足滿して、猶、高山の峻なるが如し。手に千輪の相有り、指間に膜を連ぬ。爪極めて白淨にして、日の光を放つが如く、優鉢華の皆悉く華を敷き、葉の軟細なるが如し。若、說法する時、衆生の聞く者、度を得ざるもの無し。[一〇五]言、常に時に隨ひ、本所造の生處に於て、光明徹照して、手に解脫を掌る。若、慈悲を得て、光明を尋ねて來るもの、皆悉く度を得。善く衆生を分別して、惡に遠かり、善に就き、衆生の與めに說法して、本生處に於て、慈悲喜護を得たり。不善の行を除

【九七】この一節は、如來の臂を叙す。

【九八】娑盧樹。（？）

【九九】瞻匐華（Campaka）。

【一〇〇】申手降伏魔地證知我。申手降魔とは、右手を右趺に垂れて、地を指す、所謂降魔の印相をいふものにして、此時大地は佛の成道を證せるなり。

【一〇一】世伽鳩樹。（？）

【一〇二】金剛杵（Vajra）。もと兵器なりしが、轉じて、惡魔を降伏する智業を表はすに用ふ。

【一〇三】この一節は、如來の手を叙す。

【一〇四】泄。宋元二本には舌に作り、明本には手に作る。

【一〇五】言常隨時於本所造、生處。

する所無し。息心、味と相應し、數數息心して、厭足無く、亦相違せず、瞋恚と相應せず。此れ皆行報の功德の致す所なり。故に樂と曰ふ。沙門に是の如きの心有り。彼の心に依りて、是の如きの五種有り。曾て、水流の聲を聞き、聞き已りて歡喜せり。況んや、當今、如來の言教を聞きて、善根を長益し、音響を聞きて、歡喜して解脫を長益するをや。是に於て、便ち此の偈を說く、

聲響は柔和にして好く、　佛音に息心の樂あり。　善勝なり、來りて教を聽き、　功德量有る無きこと。[九〇]諸の音響を聞くこと有るもの、　本行の所生として、　已に能く彼が、　五百の孔雀を降すを覺知す。

（十一）面　相

[九一]爾の時、世尊、是の如きの面有り。甚だ清淨にして、瑕穢無く、極めて端正なること比無し。善眼觀るに厭く無し。[九二]耳、垂睡す。唇、朱火の如し。色、天の眞金の如し。齒、極白にして微妙なること極なく、平滿にして、點汚無し。亦瘡瘢無く、亦愁憂無く、衆惱有ること無し。覩る者皆歡喜す。其の功德稱量す可らず。第一香有り。本所造の行なり。猶、月の滿ちたるが如く、極淨にして、瑕穢無く、最尊第一なり。若は[九三]結加趺坐して、大衆の與めに說法するに、前後に坐する者、皆其の面を見る。若は禪從り起ちて先づ衆の與めに說法す。是に於て、便ち此の偈を說く、

一切歡喜して樂しみ、　如來の色を覩んと欲す。　以て如來を見ることを得、　猶、彼の月の盛滿なるがごとし。　利を得て第一樂なること、　如來の衆に過ぐる無し。　三五の月の盛滿なる（がごとしと）、　等しく如來の樂を說く。

[九四]（十二）頭　相

是の時、世尊、是の如きの頭有り。善生牢固にして、極めて[九五]端政なること比無し。高下有ること無く、自身の相と相稱ひ、色最第一なり。猶、彼の[九六]那羅延天の八臂の力の、盡滅す可らざるが

【九〇】諸有聞音響、本行之所生、已能覺知彼、降五百孔雀。

【九一】この一節は、如來の面を叙す。

【九二】耳垂睡。

【九三】結跏趺坐。左右の足の背を交叉して左右の髀上におくこと。入定の坐法。

【九四】この一節は、如來の頭を叙す。

【九五】政。宋元明三本には正に作る。

【九六】那羅延（Nārāyaṇa）。又天の力士なり。又八臂天と名く。

（九）言教

[八三]如來、是の時、是の如きの言教有り。有漏の行を說き、善の音響に、麤獷無し。言辭に功德等しく具足して、功德無量なり。有常無常の行に、志性怯弱無く、甚深にして底無く、色最第一なり。所說の言教、終に煩有ること無し。義義相應して、本緣起を現じ、善く法を分別して、方便時に隨ひ、衆生を敎化して、瞋恚有る無し。自ら身を莊嚴し、息意を樂と爲す。智者を供養し、名稱を嘆譽し、各與に相類すること、猶、鴻鳥の彼の淵池を樂しむが如し。諸の百千苦惱に遭ふこと有る者、皆之を救濟し、衆生の類をして、悉く歡喜を得しむ。生老病死に於て、彼の岸に度到す。悕望の想無く、最勝行を得、心に衆結無く、諸の善行を現じて、未曾有の行を得。船を以て、水を渡り、恐怖有ること無し。一切の生死を度し、禪德の功德微妙なるを嘆譽す。壽命滅して、心意涅槃界に至り、甘露の法を得て、一切生死の原を滅して、善惡を指授す。聞く者怖を懷かず、光の蔽ふ可らざるが如し。是に於て、便ち此の偈を說く、

[八四]法を以て御して示現したまふ。佛の所行を供養しまつる。忍の力勢を以てすること、彼の華の開敷するが如し。[八五]甘露の味を飽食せよ。盲冥も彼に度せ(られ)さらんや。能く此の甘露を食すれば、生死の地を度るを得ん。

（十）梵音

[八六]爾の時、世尊、是の如きの響有り。所說の功德、亦麤獷無し。猶、[八七]鶡鵯鳥の音の、極めて微妙なるが如し。聲四方に徹し、展轉して教を聞く。衆生の類に於て、是の力勢有り。亦衆の外に出です、皆悉く淨聲を聞く。悉く是本行の所作なり。[八八]梵音の如く、哀鸞の如し。爾の時、[八九]五種の聲有るを聞く、甚深にして無底なり。所有の言教、外衆を降伏す。猶、彼の龍の本の所習を改むるが如し。往古、是の如きの色有り、極妙にして怯弱無し。若、眼を以て觀察して、而して之を知れば、染着

【八三】この一節は、如來の言教を叙す。

【八四】以法御示現、供養佛所行。御の字、宋元明の三本に禦に作る。

【八五】飽食甘露味、盲冥不度彼。前の句を甘露味を飽食したまふと訓ずれば、佛を讃せることゝなる。

【八六】この一節は、如來の梵音を叙す。

【八七】鶡鵯鳥。羯毗伽羅、羯隨とも云ひ、迦陵頻伽(Kalavinka)のこと。

【八八】梵音。大梵天王の音聲。

【八九】五種の聲。極微妙の鶡鵯鳥音と、力勢ある音と、淨聲と、梵音と哀鸞となるべし。

微妙にして雜穢無し、　如來の鼻は第一なり。　猶、鸚鵡の嘴の如し、　是の故に之に歸命したまつる。　常りて面門中に在り、　衆生の宗仰する所、　彼の鼻是の如く妙なり、　[七六]賴頻陀花(鸚鵡に似たり)の如し。

(七)　齒○　相

[七七]是の時、世尊、是の如きの齒有り。缺漏無く、平正にして高下無し。猶、白雪の螺の色の如く、亦彼の　[七八]拘文陀羅花の色の如し。此の微妙色有り、　極淸淨の行具足す。光明有りて、悉く諸の惡行を脫す。猶、金剛の如く、沮壞す可らず、牢固たり。如來の齒四十にして、上下各四牙あり。齒上に千輻輪の相有り。是に於て、便ち此の偈を說く、

如來の齒平正にして、　說法極めて微妙なり、　缺くる無く落墮無し、　猶、彼の　[七九]提勒華の如し。　眼淨く極めて微妙にして、　善色に變易無し。　釋種此の德を種ゑて、　方齒四十具しぬ。

(八)　舌○○○　相

[八〇]是の時、世尊、是の如きの廣長舌有り。未だ曾て虛有らず、善色の壞す可らざること、[八一]阿舒伽樹華(無憂)の如し。猶、蓮華葉の極軟細滑なるがごとし。亦麁言獷語無く、婬怒癡の患を除去し、安詳處に生ず。歡喜愛樂し、禁戒成就す。宣說する所有れば、度を得ざる者無し。[八二]法智を以て、貧窮を想味より濟拔す。婬怒癡に解脫を得るは、皆是本行の所造なり。如來の舌相、皆悉く面を覆ひ、甚奇甚特なり。是に於て、便ち此の偈を說く、

百福所造の行は、　如來の舌第一なり。　齒脣悉く平正にして、　常に甘露の法を吐きたまふ。　若、若干の味を得れば、　妙色と及び不妙と、　悉く能く味を分別して、　次第して序を失ひたるはず。

【七六】賴頻陀花。(?)

【七七】この一節は、如來の齒を敘す。

【七八】拘文陀羅花。前の拘文陀花と同じ。

【七九】提勒華。(Tilaka?)

【八〇】この一節は、如來の廣長舌を敘す。

【八一】阿舒伽(Asoka)。

【八二】以法智濟拔貧窮於想味婬怒癡得解脫。

七二爾の時、世尊、是の如きの微妙淸淨の眼有り。猶、彼の百葉の華の色の如し。華葉各離るゝも、幽として照さざる無し。猶、虛空の優鉢の靑、文陀羅花の色の如し。眼睫極めて白きこと、猶、鴈王の如くにして、異ること有ること無く、極白無比にして、最第一爲り。四方の刹を觀じて、皆悉く之を見、其の中間に於て、皆悉く彼の刹の、有形の類を見て、皆悉く分別す。彼、欲有ること無く、亦卒暴ならず、瞋恚有ること無く、亦瞋恚と相應せず。彼の刹土の善惡の行、所有の微妙の事を觀じて、亦能く觀察し、亦恐懼驚怖の心無し。七三慈悲を修行して、不邪視を得たり。一切衆生に於て、亦喜を修して、厭足有ること無し。諸の善法を守護するを以て、一一に法を分別す。一切刹に遍滿して、彼、是の如きの知覩を作し、惡有ること無く、懈怠無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

　眼淨くして、極微妙なり、　一切沮む可らず、　百福の造る所、　然して後如來を成じたまへり。　善法極めて淸淨にして、　亦衆惱有る無し。　面色は天王の如し、　是甘露の出現なり。　法相亦具足し、　亦衆惱の患無し。　亦彼の明鏡の、　面像を中に於て現ずるが如し。　彼の衆生の處を觀じて、　之を視て厭足無し。　然して後正覺を成じ、　甘露法を演說したまふ。

（六）　鼻　相

七四是の時、世尊、是の如きの微妙の鼻有り。本、無數百千劫の生中、是の種種の智慧を起して、皆悉く分別す。生死の處に於て、情愛の刺を拔く。彼岸に度到せんと欲し、一切の愛刺を拔かんと欲して、世の人民の爲めに、是の如きの苦行を勤行し、以て人に惠施す、或は戒を以て、人を度脫す。皆是本造す所、一切の義具足して、雜穢無く、瘡痍を療治すること、猶、金聚の色の最第一明なるが如し。七五彼處に到るを得んと欲する者は、心の愛樂する所にして、亦欺詐無く、彼に於て、一切取要行の所造を布現す。是に於て、便ち此の偈を說く、

【七三】麗本に修行慈得悲不邪視とあれど、今は宋元明三本の修行慈悲得不邪視に依る。慈悲喜護を四等心といふ。

【七四】この一說は、如來の鼻を叙す。

【七五】欲得到彼處者、心所愛樂、亦無欺詐、於彼布現一切取要行所造。

無し。處所充滿し、所行の業缺漏せず。見る者歡喜して、害意無し。眼淨くして瑕無く、衆人の見る者、一切吉祥なり。無數百千行の成辦する所、然る後、如來の額を得たり。爾の時、便ち此の偈を說く、

微妙極清淨にして、　盡く諸の惡行を脫したまふ。　佛額不思議なり。　象牙の水に在るが如し。　彼の所說の言敎と、　如來の額と無比なり。　虛空の淸淨なるが如し。　人見て皆歡喜す。

（四）眉間相

[七〇]是の時、如來、眉間相有り。最も明曜にして、面門中に處る。猶、牛乳の色の、極めて軟細なるがごとく、猶、白縞練の白雪色なるが如し。日の初めて出づるが如く、拘文陀花の如し。色極めて白きこと比無く、秋時の月の極清明淨なるが如し。右旋して、亦太だ高からず、亦太だ下からず。一切罣礙無し。其れ相を覩る有れば、衆病有ること無し。長きこと肘と等しく、極めて微妙の色にして、不思議なり。光を放ち已りて、復其の處に還る。皆是本行の造す所なり。猶、此の如きの面、微妙にして、大衆の中に於て、而して法敎を說く。是に於て、便ち此の偈を說く、

種種の百行、　如來の眉間相を造る。　此は是、福良田、　亦是本行の報なり。　麤ならず亦細ならず、　右旋して色微妙なり、　出相肘と等しく、　三世見ざる無し。　如來の眉間相、淸淨にして衆瑕無し。　猶　安明山[七一]の　衆山に於て第一なるが如し。　諸法に於て自在にして、　能く衆生の類を淨くす。　是の如きの面滿の相は、　眉間の相に過ぐる無し。　彼の色は行の造る所にして、　解脫して比有る無し。　已に意垢の火を滅すれば、　衆生其の淨を同じくす。

（五）眼相[七二]

【七〇】この一節は、如來の眉間毫相を叙す。

【七一】安明山。須彌(Sumeru)の譯。

【七二】この一節は、如來の眼を叙す。

六三 是の時、世尊、是の如き微妙の首有り。牢堅にして缺漏無く、之を視るに厭く無し。沮壞す可らざること、猶、圓蓋の如し。六三肉髻の相を觀ずるに、比無く、能く其の六四頂を見る者有ること無く、能く其の相を攝するもの有ること無し。彼、微妙の眉髮の善く生ずる有り。善く分別せば、髮は細く青色にして、極めて微妙なり。是に於て、便ち此の偈を說く、

六五釋梵及び世人、悉く集りて生時を觀、皆悉く其の上に在れども、能く其の頂を見る無し。
本、輕慢を起さずして、釋師子と爲るを得たまへり。此の行報に由るが故に、是の頂上の相を得たまへり。

(二) 髮 相

六六 爾の時、世尊、是の微妙の髮有り。善生して頂上に在り、各各軟細にして而して生ず。參差有ること無く、亦亂錯せず。各各齊等にして、六七螺文右旋す。諸相具足して、善住すること是の如し。色相極めて軟細にして、光耀の光生じ、其の光、徹照して、彼と等しき者無し。猶、六八藕莖の絲の如し。極めて軟細にして、能く其の上を度る者無く、亦沮壞す可らず。其の眼有りて見る者、皆安隱の福を獲ること、最も第一と爲す。善香種種に熏ず。皆是衆行具足して、是の如きの相有り。行の所行を滿たして、無上等正覺を成ず。是の於て、便ち此の偈を說く、

軟細にして長短無く、髮は紺青色の如し。如來の額清淨にして、夜の淸月の現るるが如し。
種種の香遠く布き、香を聞いて悉く分別す。細軟の風香を吹く、猶、彼の羅栴檀の如し。

(三) 額 相

六九 爾の時、世尊、是の如きの額有り。牢固なること金剛の如し。極めて平生にして、亦皺有ること無く、方正なり。其の覩ること有る者、皆歡喜を懷きて、而して厭足無し。亦點汚ならず、亦白黑

【六三】肉髻。(uṣṇīṣa)。佛の頂上に肉の團ありて髻の如し、故に名く。
【六四】其頂。三十二相中の無見頂相なり。
【六五】釋梵。帝釋と梵天。帝釋(Śakra devānām Indra)忉利天の王なり。梵天。大梵天王(Mahābrahman)なり。
【六六】この一節、如來の髮を叙す。
【六七】螺文右旋。如來の髮のちぢれて右巻きに渦をまいてゐること。
【六八】藕莖。蓮の根。
【六九】この一節は、如來の額を叙す。

彼の智、怯弱無く、清淨にして瑕無し、彼に於て道場に坐して、意を起す無く、滅する無し。

三十七、制　戒

〔六一〕爾の時、世尊、戒を布現す。諸の村落城郭の人民を起して、皆禁戒を奉持して具足せしむ。其の犯す有る者は、彼と相應せず。惡心を消滅すれば、彼と相應し、十善行と相應す。衆生を淨くして、盡く功德を同じくせしむ。是の如きの衆德成就す。衆に在りて、是の功德有り、衆の亂想無し。中に於て、勤行を力め、前に誓願する所、皆果を獲しめ、歡喜せざる者には、皆歡喜せしむ。前に諸佛の所に於て功德を造りて歡喜を得る者に、重ねて修行せしむ。未曾有の出世は、外道を降伏し、解脫功德は、慚愧を爲す者(をして)皆之を安穩にす。已に威儀禮節の故に、現法の中に於て、而して有漏を盡し、其の根本を斷じ、更に餘漏を盡して、而して復生ぜしめず、道と相應す。是の如きの說を爲す、「梵行をして久しく住して、天人をして安隱を得しめん」。彼の敎誡の語、皆悉く受誦す。諸の比丘、其の所犯に隨ひて、皆悉く之を避く。是の如きの說を作す、「已に盡く擁護す。猶、孔雀の毛を擁り、犛牛の尾を護るが如し」。是に於て、便ち此の偈を說く、

如來は禁戒を結し、　法の爲めにして布現したまふ。　第一に奉行を樂しむ、　猶、好んで天冠を戴くが如し。　設、彼に住する者有りて、　此の三昧の意を得ば、　此を犯す有る者無きこと、海の際を過ぎざるが如し。

三十八、佛　身　相

(一) 首　相

【六一】この一節は、如來の制戒を叙す。

【六二】この一節は、如來の首を叙す。

彼の魚龍等の解脫のごとく、顏色比無し。等方便は、猶、彼の優鉢・拘文陀華のごとく、親するに厭くこと有る無し。等念智慧は、猶、彼の重雲のごとし。世俗の三昧は以て心を經ず。大衆圍繞して、若し彼の浴池を得れば、甚愛歡喜す。彼、法の浴池の中に於て、浴洗す。若飮めば、所有の婬怒癡永く餘有ること無く、亦衆患無く、亦飢渇無し。此の如きの法を成就し、復斯の法を以て、衆生に惠施して、涅槃所に至らしむ。所作已に辦じて亦恐畏無く、安穩解脫處に到り、無餘涅槃界に至らんことを念樂す。復善法を以て、衆生をして共ならしむ。是の時、佛世尊、坐して移動せず。是に於て、便ち此の偈を說く、

日夜所造の行は、　衆生をして安からしめんと欲す。　究竟して歡喜を懷き、　若干の苦だも有る無し。[五六]　況んや當に長く世に在りて、　衆患常に已に逼るべきをや。　苦盡智を以てせずんば、　俗を離れて彼の道に至らんや。

三十六、無　生　智

[五七]爾の時、世尊、無生智有り。所謂彼の無生智とは、我、苦を知るを以て、更に復苦を盡さず。[五八]習を盡すを以て、更に復習を除かず。盡を以て證と爲し、更に復證を作さず。道を行修するを以て、更に復道を修せず。是を以ての故に、名けて無生智と曰ふ也。[五九]是の故に、無生智は、彼の智に大功德の大事(あり)、六末を興滅す。猶、穀子を種うるが如し。時に隨ひて漑灌し、與共に相應して、稍稍長大に、時に隨ひて茂盛し、或る時は生ぜず。世尊亦復是の如し。識子、智火の爲めに燒かれ、各各與に相應して、生死の原を除く。識處無欲にして亦常住ならず。諸行已に盡き、其の中間に於て起す所の心垢、不可思議なり。心の造る所更に亦造らず。是に於て、便ち此の偈を說く、

諸の無生智を起せるは、　諸佛の擁護する所。　苦の原本を覺知し、　諸の惱患を[六〇]超ゆ。

【五六】況當長在世、衆患常逼己、不以苦盡智、離俗至彼道。

【五七】この一節は、如來の無生智を叙す。

【五八】習。煩惱の餘氣を云ふ。又習氣とも云ふ。

【五九】是故無生智彼智大功德大事興滅本末。

【六〇】超。麗本に起とあれど、宋元明三本に依りて超と改む。

中に明らかなるが如く、晝と夜と異る無く、常住にして移動したまはず。既に解脫法を得たまへり、智慧彼を照現す。

三十五、盡智

[五〇]爾の時、世尊、是の盡智有り。[五一]智盡を分別するに、我、已に苦を知り、[五二]習は已に除き、盡を以て證を爲し、而して道を修行するなり。歎說の如きを作すは、本所造の行なり。彼の疾を療治し、婬怒憍慢は、其の原を究盡し、等智を以て婬欲を滅す。此は是涅槃の智にして、如實不虛なり。譬へば、人有りて、衆の苦惱を受けて、能く度すること無きが如く、彼の人亦現病の原本を療治す可らず。便ち是の念を作す、「境界微妙なり、是の如きの所生、皆悉く修行せん」。陰蓋を除去し、諸の結使を斷ず。譬へば、有力の士の如し。諸の病根を種ゑ、能く當る者無し。未だ方便の意を起さずば、彼亦療治す可らず。是の如きの患――婬怒癡――有り。盡智を以て、歡喜を得しむ。猶、人有りて、常に嶮難の處を畏るる如く、彼、種種の苦惱疹疾有り。彼、若し一浴池を見れば、清淨にして塵垢有ること無し。池を挾んで、兩邊に清涼の風有りて起る。魚龍遊戲し、水を視るに底を見る。虛空清淨にして、亦[五三]雲曀無し。優鉢・拘文陀華悉く其の中に滿ち、枝葉華實皆悉く水中に在りて生ず。是の種種微妙の樹有りて、其の中に生ず。若、見ること有る者は、皆歡喜心を懷く。然るに、此の人、彼の浴池に於て、苦惱を除去して、亦飢渴無く、是の歡樂を得て、所爲已に辦ず。彼の浴池の底に於て、微風有りて起る。是を觀察する時、若は彼に於て、若は坐し、若は臥す。彼の世尊も、亦復是の如し。本所造の婬怒癡を、皆悉く除去し、生死の原に於て、是の如きの浴池を現ず。何となれば、三界所生の衆生に於て、苦惱を拔濟し、皆悉く成就し、以て橋梁と爲る。[五四]復[五五]等見を以てすること、猶、彼の清涼の浴池のごとし。等三昧清淨にして、未だ曾て移動せず。等志は、猶、

【五〇】この一節は、如來の盡智を說く。盡智とは、一切の煩惱を斷盡して、我已に苦を知り、我已に集を斷じ、我已に滅を證り、我已に道を修せりと知る智慧をいふ、以下この事を說く。

【五一】分別盡智我已知。

【五二】習。集の古譯なり。苦集滅道を四諦と云ふ。この苦習盡道は、四諦をいへるなり。

【五三】雲曀。曀とは風雲の日光をおほふをいふ。

【五四】復以等見猶彼清涼浴池等三昧清淨・未曾有移動等志・猶彼魚龍等解脫・顏色無比等方便・猶彼優鉢拘文陀華觀無有厭等念・智慧猶彼重雲。

【五五】等見・等三昧・等志・等方便・等念。順序の如く、正見・正定・正思惟・正精進・正念なり。

に等しきもの無し。大道の生ずる有り、亦[四五]辟支佛[四六]に依らず。不等を等しくする處に、是の如きの生有り。猶、日の出でて、坑渠を擇ばずして悉く照すが如し。是の如きの大智慧有りて、而して極淨の福田を照らす。是の如く天衆を增益することを生ず。善行の致す所なり。是の如く出世して、衆生の類を益し、教誡を布現す。無明の闇蔽永く盡きて餘す無し。道を布現して、生死を解脫せんと欲して、各各相依倚す。猶、彼の衆生有形の類の皆悉く莊嚴するが如し。是の時、衆生極めて潤澤を被り、第一衆成ずるを得て、解脫と相應す。道迹に因りて、諸惡已に息む。衆生の類を思ひて、與に法味を說き、諸の橋梁を作りて、彼の人民を度す。是に於て、便ち此の偈を說く、

其れ衆生の類有りて、　如來を觀察する者は、　皆歡喜心を發して、　即、世患を離るることを得。　第一微妙の福は、　親屬の衆を娛樂し、　涅槃道に發趣して、　寂然として解脫を得。

三十四、解　脫

[四七]爾の時、世尊、此の解脫有り。彼の愛欲の諸蓋に於て、心與に相應せず、故に解脫と曰ふ也。彼、精進にして、亦懈怠せず。所生の根本を、數數修習し、清淨にして瑕無く、功德限量す可らず。解脫の境を斷ぜず、因緣を分別して、亦法想を起さず。所願充滿して、亦嫉妬の心有ること無し。諸垢永く盡きて、諸塵結を度す。智を以て生死に處らず、亦之を捨てず。智慧もて解脫を分別すること、猶、秋月の幽冥處を照明して、皆光有らしむるが如し。猶、流水(によりて)、樹木潤澤して、時に隨ひて華を敷くが如し。猶、[四八]彼の水の駛きや、流沫は水の迴轉して生ずる所に隨つて至到する處、皆悉く充滿するが如し。世尊も亦復是の如し。[四九]無餘涅槃の解脫駛流す。是に於て、便ち此偈を說く、

佛、能く衆惡を滅したまふ。　解脫最も妙たり。　闇を除きて照曜を現じたまふ、　月の星の

【四五】亦不依辟支佛等不等處有如是生。
【四六】辟支佛。(Pratyeka-buddha)。緣覺、獨覺と譯す。無佛の世に出世して、內外の緣を觀じて得道すれば緣覺と云ひ、無佛獨悟すれば獨覺と稱す。
【四七】この一節は、如來の解脫を叙す。
【四八】猶彼水駛流沫隨水迴轉所生至到處皆悉充滿。
【四九】無餘涅槃。(Anupadhi-śeṣa-nirvāṇa)。身智共に滅する涅槃。

娛樂するが如し。或は天眼を以て、色を觀て、衆想亦移動せず。諸結已に滅し、已に非義を現す。[四〇]苦の誓願を以ての故に、亦悕望を造らず、休息して淸淨なり。彼の智、識處に堅住せず、欲已に盡きたり。彼、般涅槃の義を以て、世間に流布し、內自ら依猗す。是に於て、便ち此の偈を說く、

意に愚癡有る無く、　寂然衆行無し。　佛は意業を覺したまふ所、　是の故に、我、歸命しまつる。　彼の人の爲めに法を說き、　淸淨にして瑕穢無し。　彼の園觀の間、　及び諸の隱學處に遊びたまふ。

三十三、福田

[四一]爾の時、世尊は是[四二]福田なりと謂ふ。彼の福田に依りて、悕望する所有り。猶、麥に依りて、麥田稻田と謂ふが如し。彼の佛世尊も亦復是の如し。福田に依るが故に、故に福田と曰ふ。是を以ての故に、號して[四三]福田と曰ふ。若干百千の行、此の福田を成就す。智慧根の所生なり。思惟等の業、已に度して彼岸に到る。彼に依りて說法し、起滅の想無く、亦彼此の心無し。斷滅等の見を除去し、等志にして、彼の等の見想無し。等志にして妙言を吐き、身は等善にして惡無し。響も亦染汚有ること無く、等成就す。身も亦疾患無く、等見生じて等語成就し、命成就す。歡喜界を以ての故に、彼、一切時盡く微妙にして、上有ること無し。衆會の上に於て、最第一と爲す。是に於て、便ち此の偈を說く。

福を第一田と爲す、　無數劫に淸淨なり。　愚者は觀察せず、　彼は則、盲冥に墮す。　諸の好信ある者は、　施を受けて能く消滅す。　今以て安じて處住す。　必ず安穩處に還らん。

世の最希有の出現なりと說く。猶、[四四]優曇鉢の甚奇甚特なるが如し。衆勞を荷負す。未曾有なりと歎ず。世の中間に出現し、此の如きの勤勞有り。此の未曾有の世に出現する有り、甚奇なること與

【四〇】已現非義。

【四一】この一節は、如來の福田たるを說く。

【四二】福田。田に於て麥稻が生長する如く、福善を生ずるが故に、福田と云ふ。

【四三】福田。麗本には福とのみ作り、三本には福田と作す。

【四四】優曇鉢。(Udumbara)、靈瑞と譯す、花の名。輪王出世の時、三千年に一度開くと傳へらる。

きたまふ。

三十一、說法

[三五]爾の時、世尊、云何が法を說く。所謂前の所求に隨ひて、皆悉く充足す。解脫の德義を說んが爲めに、如實不虛にして、味盡く具足し、其の時節に隨ひて、漸漸に與に義に相應し、中間皆悉く分別して、前後與共に相應す。[三六]種種若干の界、如意に隨ひて說く。前人の器に應じて、諸法の義に、勇猛の意有り、諸智の變化あり、果實有り。法界を分別して、限量有ること無し。一切智の爲す所、是の如きの法を起して、亦猗る所無し。悕望を除去し、法・行・業を覺りて、亦自ら稱譽せず。衆生の與めに法を說き、諸病の本末を解す。[三七]三意止成就して、悕望を懷かず、攝取（せらるゝ）彼の衆、未曾有と嘆じ、天人の供し恭敬する所なり。善く彼處に住す。是に於て、便ち此の偈を說く、

彼が如き永滅の法は、　最勝の口に宣したまふ所なり。　善く牢固の行を說き、　智慧は等無量なり。
彼は是甘露の味なり、　外、塵垢を受けず、　已に諸の瑕穢を練り、　亦雜惡の患無し。

三十二、知他心智

彼、穢惡有ること無し。愚癡を除去して、意性清淨なり。以て外事を捨てて、當に佛眼を成ずべし。意に所著無く、亦瘡瘢無し。[三八]愚の心意を以て、過去を造らず。彼、休息するを以て、皆悉く平正にして、心移動せず、第一義を得。一身に苦行し、[三九]彼彼の若干身に、亦衆想無し。聲聞中に於て、或は天耳を以て、聲を聞く。彼に所持無く、世俗の中に於て、知他人心智を起す。種種の有爲行も、以て勞と爲さず、衆生を以ての故に、自ら無數の宿命の事を知ること、今の一切色行を

【三五】この一節は、如來の說法を說く。

【三六】種種若干界隨如意說應前人器、諸法義有勇猛意、有諸智變化有果實。

【三七】三意止。四念處を古くは四念住とも、四意止とも譯せり。身・受・心・法に對して、不淨・苦・無常・無我なりと念ずるをいふ。三意止とは、初の三なるべし。

【三八】以愚心意不造過去。愚の字、麗本には過に作り、明本に愚と作す。

【三九】彼彼。麗本に彼行造と爲し、宋元二本には、彼彼と作す。今後に從ふ。

らんと欲して、神足の力を以てし、五根亦所畏無し。涅槃の處を以て、彼に於て止住す。解脱・禪・三昧の衆華茂盛し、[25]無爲を出でざる者、覺知分別す。是の時、世尊、契經を爲すとは、[26]錠光佛の印せる[27]一切華無上（佛名）・[28]毘婆施（隨葉佛）にして、彼の種姓の家に生れて、說法するに堪任す。是に於て、便ち此の偈を說く。

有力の限り有る無し。當に恐懼心を懷くべし。灰河深くして底無く、愚者彼に樂遊す。

爾の時、世尊の力、彼の沒溺者を度し、已に安穩處に到り、人の爲めに其の要を說きたまふ。

三十、辯才

大商人の本誓願成就す。志性柔和にして、種種の功德に依りて、而して自ら身を嚴り、時に隨ひて、適化す。衆生の類の爲めに、結使の根本を觀じ、智慧を獲て、彼の惡使を降伏す。善に就き、時に隨ひて、智成就す。善く諸根を觀じて、法、常に微妙なり。善く彼の智に依りて、善問智成就して、忍を恭敬す。善く第一法の彼の義を說きて、說法義辯、善く成就し、賢聖究竟智成就して、[29]法辯成就す。所謂義辯とは、[30]名身・[31]句身・[32]味身、皆悉く若干種の聲を分別するなり。彼の辯才義、善く猶此の如く、名身・句身・味身、皆善に趣かしめ、音響辯才善し。此の三辯才に於て、與共に解脱三昧に相應し、道に於て迴轉して、善く他心を知り、智成就して、彼、[33]授決する所有りて、亦移動せず。先づ其の義を問ひ、無礙法を說きて、一智慧道に趣かしむ。彼、皆成就し、授決成就し、無處智成就して、善く一切諸法に趣かしむ。是に於て、便ち此の偈を說く、

智慧寶を現ずる有り、亦諸の義辯を說く、淡泊、佛に等しき無く、功德亦無雙なり。

[34]本去心に來なく、安んじて淨慧を作さしめ、以て世俗の業を救ひ、世の爲めに甘露を開

【二五】不出無爲者覺知分別、是時世尊爲契經者、錠光佛之印一切華無上（佛名）毘婆施（隨葉佛）。古譯、生硬にして、訓じ難し。

【二六】錠光佛、(Dīpaṃkara)。

【二七】一切華無上(？)。

【二八】毘婆施、(Vipaśyin)。

【二九】法辯等。法・義・辭・樂說の無礙なるを、四無礙辯といふ。音響辯とは辭辯に當り、說無礙法は樂說辯に當るべし。

【三〇】名身。體に名くるを名と云ふ。例へば諸行の如し。身とは合集の義なり。二名以上を名身と云ふ。

【三一】句身。義を詮はすを句と云ふ。例へば諸行無常の如し。

【三二】味身。二句以上を句身と云ふ。

【三三】授決。佛と作るべしと云ふ記を授けること。

【三四】本去心無來、安使作淨慧。

結、盡きて恐畏無く、長夜、其の中に樂しむ。種種の色形變じ、種種の色窮なし。是の如きの變を起すは、亦、本、所造の業なり。手に智慧の刀を執りて、卽ち能く之を降伏す。

二十九、聖道

[一七]是の時、世尊、云何が灰何を度す。所謂灰河を度する時、悕望及瞋恚を除去す。彼の灰河の皆悉く不淨なるを思惟して、種種の想皆悉く除捨す。彼の若干種永く盡きて餘す無きに緣りて、觀察する所微妙なり。時に、生死の海を過度す可らず、合會の度し難きは、皆是古昔所造の行なり。意の愛樂する所は[一八]伽捨・救捨(二種の草)の水に順ひて流る(るが如し)。[一九]其の悕望を斷ちて、愁樹を除去するなり。岸邊の饒草、是の如きは身の所造の行なり。樹木茂盛は、種種の啼哭にして、百千種の不善行の所造なり。手に石を執るは、亦是不善行の所爲なり。猶、彼の海中に蟲有り。復往いて樂處を求むるに、欲の爲めに廻轉せられて、[二〇]境界を傷害し、瞋恚熾盛にして、眼、赤銅の如く、心に淸淨を修せども、欲想盈滿して、灰河及び諸の坑渠を成して、峻難なり。色・聲・香・味・[二一]細滑は、皆是有漏なり。劍戟悉く彼の地に布き、大幽冥有りて、亦光澤無し。彼に依りて、流に隨ひ、是の如きの河を上下す。爾の時、世尊菩薩、無量の生死中に、皆遠離せんと欲して、便ち是の心を起す。此の灰河は甚だ嶮難と爲す。刺其の地に布き、極めて幽冥にして、光明有ること無し。此の如き人衆は流に順ふも、彼に於て、我、今當に其の流を斷つべし。是の如きの誓願を作し已りて、而して方便を求む。法忍を以て、世の爲めに軌と作し、倍復方便を作し、等しく禁戒地に度りて、此を以て安處す。四賢聖諦を以て、四方を觀察し、分別決了し、[二二]無漏[二三]等見の山を以て、生死の岸に踞す。已に彼の生死の岸に踞して、[二四]善業・等業・等方便・娛樂三昧に至り、八賢聖道、皆悉く分別す。已に彼の岸に至

【一七】この一節は、如來の度生死河を叙す。

【一八】伽捨 kāśa 光輝ある白草。救捨 kuśa 草。

【一九】斷其悕望除去愁樹岸邊饒草、如是身所造行樹木茂盛種種啼哭、百千種不善行所造手執石亦是不善行所爲。その意味を解し難し。

【二〇】境界。麗本には場界に作る。今は三本に從ふ。

【二一】細滑。觸の古譯なり。色聲香味觸を合して、五塵(五境)とす。

【二二】以無漏等見山踞生死岸。

【二三】等見、等業、等方便、三昧は八聖道中の四なり。

【二四】至善業等業等方便娛樂三昧。二二、二四、共に其意を通じ難し。

く解脫門に至る。善無上の言敎等と、與に住し止宿して、名稱遠く聞ゆ。慚愧の衣を著し、空・無願・無相、以て寶冠と爲す。忍力具足し、顏常に和悅なり。面、滿ち充盈して、賢聖の八道を布現す。種種の香薰じ、若干種の衣を著す。本已に結使の穢爲るを覺し、禁戒の車に乘じて、等見し導引す。前に功德圍繞し、智慧力を以て、彼の車を御して、專念移らず。善を以て、彼の衆生を覺悟し、三界其の敎を聞く。皆本行の[七]追逐する所なり。意止を以て鎧と爲し、手に法幢を執り、智慧の刀を揮ふ。善想を以て[八]拂と爲し、十力無畏を以て、彼の法螺を吹き、神足の力を以て、三千世に於て而も自在を得。善く[九]七財[一〇]四辯才を分別して、窮盡す可らず。若結使起れば、卽能く滅せしむ。惠施の財業、百千萬倍にして稱計す可らず。猶、大象の其の身を莊嚴するが如し。衆生を攝取して、善業に安處す。師子奮迅、意に怯弱無くして、而して法門を開く。[一一]或は驚怖を現じ、或は剛强を現ず。[一二](內に瞋恚無く、大財寶を獲。)猶、羅刹鬼の牙爪を露現するが如し。是の如きの形狀有りて、眷屬を別たず。或は猫狐を現じ、或は魔衆を現じ、或は師子頭虎身。或は七步の蛇。或は躊立して相傷害せんと欲して、瞋火熾然す。或は山を擔ひて火を吐き、若干種其の中に變ず。或は狗犬なる者有り、憍慢を懷く。或は一身兩頭なるあり、或は弄舌張目するあり、或は身長頸短なるあり。或は金翅鳥の形なるあり。手に刀杖を執り、或は輪杵を執り、或は師子吼す。人を傷害せんと欲して、是の如きの變怪を作す。或は犛牛の形狀なる者あり、[一三]鳩槃茶形にして手に大火焰を執る。皆鎧を著、眼、赤光にして大火焰を出擊す。其の方便を求めて、相傷害せんと欲す。彼の[一四]羅刹なる者は、皆兩翅有り、種種に皷を鳴し、聲若干種にして、虛空中に滿つ。此の如きの鈴の[一五]頸に嬰る有ること、猶、[一六]厭鬼の如し。或は童子の形にして、手に鐵輪を執り、種種惡行し、若干種の狀あり。猶、海神の手に日月を執るが如し。智慧の刀を以て、彼の怨を降伏す。是に於て、便ち此の偈を說く、

住。

【七】追逐。麗本に追逮と作すも、今は三本に從ふ。

【八】拂。拂子。

【九】七財、(Saptadhāna)。信・戒・慚・愧・多聞・智慧・捨離の七なり。

【一〇】四辯才。法無礙辯。義無礙辯。辭無礙辯。樂說無礙辯。

【一一】或現驚怖。これより降魔に說き入る。

【一二】內無瞋恚獲大財寶。此二句こゝにありては、意味通ぜず。恐らくは或現驚怖の二句の前に置かれしならん。外境の如何に關らず、瞋恚を以て之を迎へざる時は、功德の大財寶を獲るの意なり。

【一三】鳩槃茶、(Kumbhāṇḍa)。鬼の名。

【一四】羅刹、(Rākṣasa)。鬼なり。

【一五】嬰頸。三本纓項に作る。鈴のかゝれる頸なり。

【一六】厭鬼。(?)

卷の中

二十七、觀察生死

[1]爾の時、世尊、如何が生城を分別する。所謂、盡生無生なり。壍を斷ち、血岸及び諸の木柵を度る。愛欲の由る所、牢固として愚癡に染著す。愚癡を城と爲す。無慚無愧、圍遶して迹に缺漏無し。[2]五蓋を門と爲し、衆生を覆蔽す。種種の愛欲、瞋恚の車に充滿し、無數の種種の衆圍繞す。憍慢の幢を竪て、闇冥の螺を吹き、東西に遊行す。種種の邪見、其の身に纏絡し、自ら相を受持す。是の如き、諦かなる思惟を作す。衆生の種種の園觀、極めて微妙にして、心其の中に娛樂す。彼處に到るを樂しみ、或は飢饉の處に到る。是れ樂を求むる所の商人の所行なり。已に境界を度り、行いて彼處に到る。[3]利養と解脫と後世に果有り。盛熱・寒暑・風雨、此の苦厄に遭ひ、生老病死、是の苦惱有り。當に死生に屬して、一切趣に向ふべし。猶、彼の船の水に隨ひて東西するが如し。彼の中に於て、是の意を作す、「狐疑は入る可きこと難し、與共に合はず、亦與に鬪ふ可からず」。爾の時、世尊、三昧を以て、是の力の沮壞す可きこと難きを觀じ、彼の境界に到るに、彼の死處悉く滅盡す。一切吉利にして、有爲の行無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

生國に衆想有り、　已に度して、河を拔濟す、　彼の塹に、血、中に滿ちて、　猶、海の深くして底無きが如し。[4]三世に聲響を聞いて、　愚城に圍繞せらる。　世尊彼を觀ずる時、　權智を以て往いて壞したまふ。

二十八、降魔

[5]爾の時、世尊、云何が魔衆を降伏する。所謂[6]八解の浴池に於て洗ひ、善行、染著無くして、漸

【一】この一節は生死に對する觀相を說く。
【二】五蓋。
一、貪欲蓋。
二、瞋恚蓋。
三、睡眠蓋。
四、掉悔蓋、（心の躁しきと惱めると）
五、疑法。
此の五は清淨心を覆ふ故に五蓋と云ふ。
【三】利養解脫後世有果。此の一句は恐らくは錯簡なるべし。
【四】三世聞聲響、愚城所圍繞、意味通ぜず。愚癡を城に喩へたるを以て、生死界に於ける愛欲瞋恚憍慢等の雜亂の聲響は、愚癡を本として起るを意味するならん。
【五】この一節は、降魔を說く。
【六】八解。八種の解脫觀、又八背捨といふ。この觀によつて無漏の智慧を起し、三界の惑を斷じ、解脫羅漢果をさとるが故に、解脫といふ。
一、內有色想觀外色解脫。
二、內無色想觀外色解脫。
三、淨解脫身作證具足住。
四、空無邊處解脫。
五、識無邊處解脫。
六、無所有處解脫。
七、非想非々想處解脫。
八、滅受想定解脫身作證具足

二十六、十力・四無畏

〔一八八〕彼、如實にして、愛欲有ること無く、彼の〔一八九〕愛欲と相應せず。亦瞋恚及び殺害の意無し。亦愚癡無く、彼の病を覺知す。亦諛諂無く、常に柔和を懷く。亦自ら嘆譽せず、語りて善教を出す。亦有想無くして、悕望の想を除去す。亦彼此の心無くして、彼の人を傷害せず。自ら解脱を得て、適莫する所無し。慈哀心有りて、所爲皆悉く辦ず。〔一九〇〕慈心無しと爲すに非らず。悲心有りて、雜穢想無し。亦護心有りて、等しく衆生を度護せんと欲す。故に、〔一九一〕空心有りて、禁戒具足し、無願心有りて智慧潤澤なり、無想心有りて、亦所染無く、亦調戲無し。世の人民の調戲を離れざるが爲めに、諸の惡業を避けて、法教を説く、〔一九二〕禁戒成就して、缺漏する所無く、三昧成就して、定んで移動せず、智慧成就して、皆悉く彼岸に至る。〔一九三〕十力具足して、能く勝る者無く、〔一九四〕四無所畏を得て、怯弱の心無し。三界を獨歩し、大衆中に於て、師子吼す。是に於て、便ち此の偈を説いて言ふ、

猶、此の大海の如し、　廣博にして極めて微妙なり。　十力一切の德は、　智者の觀ずる所なり。　猶、此の大海の如し、　瀾波搖動する時、　人有りて彼の岸に立つに、　其の功德を究めず。

【一八八】この一節は、一切智を成じて、十力・四無畏を得たるを叙す。

【一八九】愛欲・瞋恚・愚癡は、三毒なり。

【一九〇】非爲無慈心有悲心無雜穢想。調じ難し。玆に慈悲喜護の四無量心の中、喜心を脱するに似たり。

【一九一】空心。下の無願心・無想心と合して三脱門といふ。

【一九二】禁戒。下の三昧と智慧とを合して三學といふ。

【一九三】十力。如來の持したまふ十力。
一、是處非處智力
二、業報智力
三、諸禪解脱三昧智力
四、諸根勝劣智力
五、種々解智力
六、種々界智力
七、一切至處道智力
八、天眼無礙智力
九、宿命無漏智力
十、永斷習氣智力

【一九四】四無所畏。
一、一切智無所畏
二、漏盡無所畏
三、說障道無所畏
四、說盡苦道無所畏

り。

二十五、三明六通

[一八三]諸の緣起を觀じ已りて、智は[一八四]十二因緣を度る。塵垢牢固にして、愛著の智を起し、意其の心中に馳せ、或は有漏智を起して、諸の苦行を造る。而も出要の道の知を得たり。諸の結使を滅せんと欲するが故に、苦樂の想、休息の想有ること無し。智は無我を以ての故に、增益することを得。智と與共に相應して、身・心の空なるを識る。智は少壯の意を降伏せんと欲し、其の心に染著して、依猗智を起す。自ら省み、決了して諸の結使を滅せんとして、明慧智を起す。結使を降伏せんと欲して、伏息智を起す。彼岸に度せんと欲するが故に、輕擧智を起す。[一八五]自ら其の身を稱り、衆生、諦を以て[一八六]敎授せんと覺して、滅盡智を起す。彼の諦の思惟に緣りて、諸の微妙禪有り。彼の思惟を以ての故に、度彼岸智を起し、彼の心に悕望を得、餘者亦悕望を得て、悉く其の迹を同じくす。[一八七]意の猗つて逮ぶ所有りて智慧四大の休止する處に、思惟と與に相類して、彼岸に趣到し、天耳智を得。等しく彼の境界に度り、其の一行を同じくし已つて、等しく彼岸に度ることを得て、天鼻智を得。彼の識に依りて、分別智有らんと欲して、知他人心智あり。所念悉く清淨にして、修行する所有り、衆生を化せんと欲するが故に、便ち自識宿命智を得。彼の善色の爲めの故に、四大を敷示して、便ち天眼智を得。心に覺する所有り、戒の清淨なるを觀察して、誓願智・大神仙功德を得。彼の三昧の種子の生ずる所、諸の三昧界を度し、彼を長益せんと欲するが故に、衆生歡喜して、便ち究竟知を得。是に於て便ち此の偈を說く、

　種種人の思念、　親近して現在前し、　種種法を分別して、　以て大神仙を示す。　當に彼の業を覺知し、　以て諸の塵蓋を捨て、　悉く心を觀察するに達すべし。　善い哉、人中の上。

【一八三】この一節は、十二因緣を觀じて、智慧を得るを叙す。

【一八四】十二因緣。
無明(Avidyā)
行(Saṃskāra)
識(Vijñāna)
名色(Nāmarūpa)
六處(入)(Ṣaḍāyatana)
觸(Sparśa)
受(Vedanā)
愛(Tṛṣṇā)
取(Upādāna)
有(Bhava)
生(Jāti)
老死(Jarāmaraṇa)
　無明と行とは過去の因、識・名色・六入・觸は現在の果、これ一重の因果なり。受・愛・取・有は現在の因、生・老死は未來の果なり。是一重の因果なり。十二因緣を以て、三世兩重の因果を現はす。或は刹那生滅の規定を明かにせるものとも解せらる。

【一八五】自稱其身覺衆生以諦敎授起滅盡智。その意通じ難し。假りに上の如く訓む。

【一八六】敎授。麗本には挍授に作る。三本によりて敎授とす。

【一八七】意有所猗而逮智慧四大休止處、思惟與相續趣到彼岸。訓じ難し。

於て、意の流轉せるが、(今は)移動す可らず、染著無ければ、意も亦亂れず。智慧無量にして、亦智慧を捨てず。意、善く分別し、境界の裏に遊びて、其の方便を求む。果報無量にして、智慧悉く具足し、一切罣礙有ること無し。是に於て、便ち此の偈を說く、

一切の物を覺して、　亦量有る無く、　來往周旋して、　罣礙する所無し。　悉く一切の、
最勝の所觀を覺し、　三界の苦を除き、　當に世間を照すべし。　誰か能く分別せん、　唯佛
のみ能く解したまふ。　微妙を求めんと欲せば、　當に如來を求むべし。　如來、時に隨ひて、
彼と相應す。　當に成就すべき所、　退轉有る無し。

二十四、無師獨悟・轉法論

[一七九]爾の時、世尊獨遊して、侶無く、亦師有る無し。功德無量にして、衆生を訓誨せんと欲す。佛法衆に於て皆悉く成じ、[一八〇]一切智成就し、等正覺を成ず。最尊微妙にして、等しき者無し。一切塵勞の所趣の根本を覺知し、一切皆悉く成ず。念移動せず、智を以て一切法を分別し、[一八一]度するに一切結使を以てす。微妙なること最第一なり。一切行を暢說するが故に、一切智と曰ふ。已に一切智有り、其の一心を專にして一切法を解し、一切の結使を斷ずるが故に、一切滅と曰ふ。有を除去して、愛有ること無く、亦伴侶有ること無し。一切の功德智成就し、等しく一切衆生を擁護すること、父母の子を愛するが如し。展轉して功德力成就し、貪・憍慢無きが故に、最勝と曰ふ。[一八二]八賢聖道を布現して、法輪を轉ず。彼の喩に、影の日前に在らずして、闇前に在るが如し。此亦是の如し。一切の結使は、道と共に相應せず。是の故に、法輪を轉ず。是に於て、便ち此の偈を說く、

一一の功德具ありて、　彼限量す可らず。　況んや色不思議にして、　一切相具足せるをや。
猶、月光明かにして、　幽冥の中を照すが如し。　衆寶は海に集る。　釋種の德も亦爾な

【一七九】この一節は、無師獨悟・轉法輪を說く。

【一八〇】一切智。麗本には一智とあり、宋元明三本に依り、切の字を加ふ。

【一八一】度以一切結使。度以は以度の誤ならん。然らば「以て一切結使を度す」なり。

【一八二】八賢聖道。
正見(Samyak-dṛṣṭi)
正思惟(Samyak-saṁkalpa)
正語(Samyak-vāc)
正業(Samyak-karmānta)
正命(Samyak-ājīva)
正精進(Samyak-vyāyāma)
正念(Samyak-smṛti)
正定(Samyak-samādhi)

後に斯の（一七三）三更樂有らんと。是の時、菩薩、高床從り下る。爾の時、亦是の意を起す。此れ最是高廣の床なりと。菩薩、城門を出づる時の如き、是の時、便ち是の念を作す、我、道を得ずんば終に歸還せじと。猶、菩薩、瓔珞を解きて、以て車匿に授くるが如し。爾の時、復是の念を作す、計るに此の寶衣は、（一七四）最是我が後の所有なりと。若は復、菩薩、馬を以て車匿に授く。是の時、亦此の念を作す、此は是我が(最)後に乘る所の馬なりと。是の時、菩薩、右手に刀を執りて、自ら頭髮を剃る。是の時、菩薩、復是の念を作す、最是我が遺餘の鬚髮なりと。是の時、菩薩、寶衣を以て鹿皮に貿へ、用て袈裟と作す。是の時、菩薩、復是の念を作す、最是我が應に著るべき所の衣なりと。若は復、菩薩、道場に在りて坐す。是の時、復是の念を作す、我、加趺坐を解かじ、一切智に逮ばずば、座より起たじと。是に於て便ち此の偈を說く、

積德は小從り起りて、當に無量の福を獲べし。猶、小渧の漸く（一七五）長じて、必ず大江河を成すが如し。此の若干の類を觀ずるに、有爲行の所造なり。應に甘露味を食して、諸惡毒を消滅すべし。

二十三、成等正覺

（一七六）一切智の等正覺を成ずる時、世は無常・苦・空なりと觀ず。彼已に等正覺を成じて、衆惱有ること無し。（一七七）所可の因緣もて、等正覺を成ず。起る者、皆盡く滅に歸す。一切の死者が彼の生と相應するを知りて、皆盡く覺知す。是の時、分別の眼識、是の如きの覺知を作す。（一七八）高下ともに衆生の所爲、境界の所有に隨つて、智已に辦じて、狐疑有ること無し。彼に於て、本因緣を覺知して、等正覺に邊幅有ること無し。爾の時、衆智の生ずる有り、道有りて世間に流布すと覺知し、道の移動す可らさるを覺知す。是の時、盡く一切苦、一一分別の境界を越ゆ。若は一劫、若は百劫、若は百千劫に

【一七三】三更樂。吳支謙は、了本生死經の中に於て、十二因緣中の觸を更樂と譯す。こゝの三更樂は天樂・禪樂・涅槃樂の三樂ならんか。

【一七四】最是我後所有。最の字、我の後に移して、最後所有とするを可とすべし。

【一七五】長。麗本には漲に作り、宋元明の三本に長に作る。

【一七六】この一節は成等正覺を說く。

【一七七】所可因緣成等正覺。所可の二字、解し難し。

【一七八】高下隨衆生所爲境界所有。意義通徹ならず。

彼の時、菩薩、兜術天從り降神する時、梵天衆皆悉く侍從す。若は世尊を人民天衆の圍繞する時、此は是第一相なり。若は菩薩、兜術天從り降神して、地爲めに大いに動き、若は世尊、衆生の[一六五]塵勞を覺悟して、雜穢有る無き、此れ初瑞應なり。地爲めに大いに動き、彼の衆生の類の塵勞永く生ぜざるは、最第一樂なり。最初瑞應なり。若は菩薩、兜術天從り降神する時、大光明有りて世間界を照す。是智慧光明の相の初瑞應なり。諸の幽冥の處皆悉く明を見る。亦是智慧の相なり。若は菩薩、初生の時、足を擧げて行くこと七歩す。此れ[一六六]七覺意の瑞應なり。是の時、菩薩、四方を觀察する時は、此は[一六七]是四賢聖諦の瑞應なり。是の時、菩薩、大いに笑ふ時は、度人の瑞應を現ぜるなり。是の時、菩薩[一六八]夢に、此の世界を以て床と爲し、須彌山を[一六九]枕と爲し、手脚四海の外に垂るを見る。此は是世の有常の想なり。此は是甘露法味の瑞應なり。復、[一七〇]緹隷迦樹の[一七一]齊上に生じ、三千世界を覆ふと夢む。此は是道場の瑞應、天人の尊敬する所なり。(復)夢に、衆多の飛鳥の、周匝圍繞するが、皆同一色なるを見る。(此は是)衆成就の瑞應を現ぜるなり。(復)夢に、蟲の頭黑身白なるを見る。(此は是)優婆塞衆成就の瑞應を現ぜるなり。復夢に、山の頂上を行くを見る。(此は是)得利不慳の瑞應を現ぜるなり。是に於て、便ち偈を說いて曰はく、

瑞應未曾有なり、　彼に大功德有り。　起る者必ず當に滅すべし、　苦樂の更る所なり。
彼を見て皆歡喜す、　必ず當に佛有りて出づべし。　日の雲霧を除くが如く、　復衆塵有ること無けん。

二十二、剃髮・坐場

[一七二]是の時、菩薩の志性迴轉す可からざること、所說の如し。月の初めて幽冥の處を出でて、衆人の歡ふ所となるが如し。即、座從り起ちて、出家を得んと欲す。是の時、便ち此の心を起す、此の最

【一六五】塵勞。心を勞する塵。煩惱のこと。

【一六六】七覺意。七覺支又は七菩提分に同じ。古譯なり。

【一六七】四賢聖諦。苦集滅道の四諦なり。

【一六八】夢。夢に五あり。この五夢、方廣大莊嚴經・佛本行集經に、菩薩が出家の前夜に見たりとせらるゝものと大同なり。莊嚴經・本行集經には、その意味を解釋せず。また過去現在因果經に、本生の善慧比丘の見たる五夢を說く。その中、最初の二夢は同じ。因果經には、その意味を解釋す。これによれば、大海に臥すは、生死の海中にある相なり。須彌に枕するは、生死を出でゝ般涅槃を得るの相なり。以て此經の說相を解すべし。

【一六九】枕。麗本には机と作すも、宋元明の三本には枕と作す。後に從ふ。莊嚴經・本行集經に、枕と作すによれるなり。

【一七〇】緹隷迦樹(Tilaka)。方廣大莊嚴經も、佛本行集經も、建立草と作す。

【一七一】齊。莊嚴經・本行集經には、臍に作る。

【一七二】この一節は、出家・剃髮・坐場を說く。

の如きの法を愛樂して、福田に穢有る無し。彼の世の人民を愍みて、故に是の如きの業を說く。

二十、降神下生

[一五七]是の時、菩薩、恐怖を懷かず、[一五八]兜術天從り降神す。[一五九]有爲行の無常なるを觀じて、心に亂想無し。常に自ら觀察して、從りて生ずる所の處を知り、亦復自ら更に胎を受けざるを知る。是の眞諦有り、其の原を究竟して、心に染著無し。母胎中に降り、彼の處所に住して、亦亂想無し。彼に於て、犯戒の惡行たり、持戒の淸淨たるを觀じて、亦染著無し。胎の中に於て、不淨の行無きこと、猶、蓮花の水に染著せざるが如く、彼に於て、多く道意を起す。已に此の智慧有り、諸天子常に衞護し、兜術の諸天遞に來りて宿衞す。婬の不淨行たるを現じて、梵行を修するを樂しむ。菩薩が母胎中に降りてより、夫人の身未だ曾て穢有らず。菩薩の戒行極めて淸淨たり、心に傷害の意無し。施行立誓して、審諦至誠なり。[一六〇]家を出でんと欲するに、[一六一]大尊妙神天子、皆悉く扶持し、胎淨にして惱無し。若は足を擧げて行くこと七步し、時に、出家の意を懷きて、即四方を觀ず、「今當に何れの方に向つてか、便ち衆苦無かるべき」。香汁浴洗して、自然に香池有り。皆是前世の功德の致す所なり。天、[一六二]優鉢・[一六三]拘文羅花を雨して、如來に供ふ。是に於て便ち偈を說いて言はく、

無數の世に勞勤したまふは、彼の衆生を救はんが故なり。轉輪すること量有る無くして、
天人安穩なるを得たり。諸天の伎樂有り、皆歡喜心を得たり。香輪前に在りて轉じ、
衆魔の怨を降伏す。

二十一、瑞應・五步

作す。釋尊の本生としての最後身なり。

【一五七】この一節は、釋尊の降神下生を說く。

【一五八】兜術天(Tuṣita)。欲界六天中の第四天にして、菩薩身の託すべき最後の地なり。こゝより下生して、必ず成佛すべし。

【一五九】有爲行。因緣によりて生滅する事物を云ふ。

【一六〇】欲出於家。家は胎の誤ならん。こゝは降神、出胎を敍する一段なれば、出家あるべきにあらず。

【一六一】大尊妙神天子。(?)

【一六二】優鉢(Utpala)。青蓮花。

【一六三】拘文羅(Kumuda)。黃蓮花。

【一六四】この一節は、上の降神下生に伴へる瑞應の意義を說き、而して出家前夜の五步に說き入る。

喜ばず。常に空處に伏して、飢うれば亦瞋り、飽けば亦瞋り、眼に不善を視る。是の如きの變有り。彼は、猶、火の山澤を焚燒するが如し。此の瞋恚の火も、亦是の如し。是を以ての故に、瞋恚を苦と爲す」。爾の時、菩薩、甚深の智もて、此を思惟し已りて、便ち此の偈を說く。

一切皆悉く苦なり、　[146]親近なる其の顏色も、　生者に必ず苦有り、　我が今の所說を聽け。
猶、此の大患の、　苦惱、限り有る無きが如し、　一切は是生根なり、　是の故に、生は眞に非ず。

十九、菩薩行（總結）

[147]若、必ず菩薩道を成ずる者有らんに、生死に流轉しつゝ、[148]慈悲喜護を以て、一切衆生を愍み、捷疾の智を以て、罣礙する所無く、勇猛の意有り、一切智を修して、懈惓の心無く、敎化して、狐疑有ること無く、常に等見を懷き、志性牢固にして、沮壞す可らず。彼の氣味を得るも、其の志を失はず。力有りて諸法を分別するに堪任して、亦毀漏せず。彼、大智慧を成じ、施意解脫して、變悔の心無し。一切惠施すること、[149]濕鞞國王の如し。常に淨行を修して、未だ曾て懈惓せざること、[150]摩訶提披王の如し。忍力具足すること[151]忍神仙の如く、戒の缺漏せざること、[152]布賴多學士の如し。常に出家を樂しみ、顏色和悅なり。若、復、愛敬の中に於て、意に染著無きこと、[153]大須達施那王の世俗に遊化し、[155]瞿頻陀王の法を愛樂するが如し。[154]欝多羅摩納の如く、閑靜處を樂しみ、伎樂を爲して聲響の淸徹なること、[156]善覺菩薩の大衆中に在りて、師子吼を爲すが如し。皆、解脫を得て、泥洹界に至り、諸の功德具足し、必ず道を成じ、倍諸德を益して、菩薩行を成ず。是に於て、便ち此の偈を說いて曰はく、

倍、傷害の意無く、　菩薩の功德淨し。　已に志性牢固なり、　日の光明を放つが如し。　是

【一四六】親近其顏色。其意不明なり。蓋、共意、親近なるものゝ顏色は、頗る愛すべきも、生るる以上は、病死の苦を免れざれば、一切皆苦なりといふにあらん。
【一四七】この一節は、本生を總結して、成菩薩行を說く。
【一四八】慈悲喜護。慈悲喜捨の四無量心（又は四等心）の別譯。慈は、拔苦なり、悲は與樂なり、喜は隨喜なり、捨は護ともいひ、心の平等にして、怨親なきなり。是等を全世界に滿たしむるを無量心といふ。
【一四九】濕鞞國王。尸毘迦王（Sibika）なり。釋尊、因位に尸毘迦王たりし時、鴿の爲めに身を以て鷹に與へたり。
【一五〇】摩訶提披王（Mahādeva?）。
【一五一】忍神人。忍辱仙なり。前出。
【一五二】布賴多學士。（?）
【一五三】大須達施那王（Mahāsudarśana 大善見）。
【一五四】瞿頻陀王（Kupphina）。釋尊因位の時、瞿頻陀王となりて、閻浮提の地を七等分して諍なからしめたり。
【一五五】欝多羅摩納（Uttaramana）。婆羅門の名。
【一五六】善覺菩薩（Sumedha）。過去現在因果經に善慧比丘と

爾の時、菩薩、生死の爲の故に、菩薩生れんと欲する時、衆生を救濟せんとて、生苦の本を觀ず。

曾て聞けり。空靜なる山林の中に、烏・鹿・鴿・蛇有り、彼に在りて止まる。彼に於て、仙人菩薩有り。常に其の中に處り、果を食ひ、水を飲む。爾の時、烏、往いて、彼の仙人の所に詣り、一面に在りて立つ。(仙人)、便ち是の說を作す、「世に何の苦か有る」。爾の時、烏、便ち是の言を作す、「飢を最苦と爲す。何の因緣に由りてか、此の苦を生ずる。我等各各自ら當に陳說すべし。身體疲極し、煩熾にして、諸根定らず、口言ふこと能はず、耳聞く所無きも、常に思想を懐く。是の故に、飢を最苦と爲す。此の苦患の身火に燒かれ、此の飢饉に由りて、此の病、療し難し。共に相牽連して、皆是の如きの苦有り」。是の時、鹿、便ち是の語を作す、「驚怖を苦と爲す。所謂驚怖とは、身、獨處に在りて、獵師を見て、常に驚怖を懐く。[一四一]身心の穢に、常に、此の身無からんを恐れ、復、獵師の己を殺害せんと欲するを畏る。此の身、何の[一四二]牢要か有らん。無常處に住して、東西に馳走す。此の驚怖は何に由りてか生ずる。常に此の念有り、[一四三]「彼の一切は是の行有りて、一切身を捨離す」。我等此の身有り、常に驚怖を懐き、須臾も寧からず。皆是本造す所の壞敗の苦なり。是の如きの驚怖有り。是を以ての故に、驚怖を苦と爲す」。是の時、鴿、便ち是の語を作す、「欲を最苦と爲す。[一四四]更に其の中を樂しんで、心の境界は淨し(とするも)、思惟の所處、此の欲の患を脫する無し。此の欲は、猶、火の如し。亦脂酥の器に著せるが如し。然れば則ち、熾狂なれば其の心を染著すと說く所あり。欲火も亦復是の如し。其の心を染著し、其の形を消盡し、諸縛を增益す。無數劫に、欲の爲めに[一四五]惑せられ、會合熾然にして、人の形體を燒く。是を以ての故に、欲を最苦と爲す」。時に、蛇、便ち是の語を爲す、「瞋恚を最苦と爲す。所謂瞋恚とは、便ち人命を傷害して、尊卑有ること無く、諸の罪根を增す。身體顏色常に變易し、動もすれば殺意有り、頻蹙せる眼赤く、牙齒長利にして、人の惡み見る所。頭を搖かし、身を動かし、長息して毒を吐く。身體肌皮、純ら瞋恚の火有り。一切の世人、皆見るを

【一四一】身心之穢。穢とは、無常變遷をいふ。
【一四二】牢要。かたき約束。
【一四三】彼一切有是行、捨離一切身。すべてのものは、無常遷流のものにして、やがて捨離すべきものゝ意。
【一四四】更樂其中、心境界淨、思惟所處、無脫此欲患。欲の中に溺るるものは、これを以て至極のものとするも、之を思惟するに、いづこか欲の患なからんの意か。
【一四五】爲欲所惑。麗本には所の字なし。宋元明三本にあり。今後に從ふ。

曾て聞けり、世尊、行道の時、無數の比丘、前後に圍遶す。火、園觀を焚燒せる時、比丘、大火煙の起るを見、各馳走して世尊に向ふ。或は世尊を嘆譽する者有り、如來の前に於て住する（あり）。彼の諸比丘、如來の前に住して觀る者あり。是に於て、便ち此の偈を說きたまふ。

我が如きは[138]儔匹無く、　三世の功德具はる。　此の至誠語を以て、　惡をして速に休息せしめん。

是の偈を說き已るや、是の火聚の火、即休息す。是の時、諸の比丘嘆ず「未曾有なり、皆是世尊の恩力なり」。如來を歡喜し、各各此の偈を嘆說して、「未曾有」なりと言ふ。世尊告げて曰はく、「諸の比丘。一閑靜處に在り。種種の境界、若干種の色あり。爾の時に當りて、我未だ等正覺を成ぜず。爾の時、我、[139]栕梏羅翟爲たり。彼、生れて從り已來、年少にして自在、好んで人に施し、微妙の行を求む。爾の時に當り、[140]褰荼國界、人民熾盛にして、土地豐熟に、竹林葦多く、樹木高峻なり。時に、火に燒かる。極めて熾盛にして、漸く山澤に及ぶ。是の如きの變有り」。廣說すること、契經の如し。「爾の時、群鳥衆有り。各各產乳して翅羽未だ生ぜず。或は翅の始めて生ずる者有り、或は地に墮つる者有り、或は頭尾を破る者有りて、亦飛ぶに堪任せず。或は飢餓する者有り。彼の火の熾盛なるを見て、各飛び去らんと欲す。我、爾の時、此の火を見已つて、亦身を護らず。無數百千劫の功德にて、是の如きの護心有り。我、爾の時、彼に於て淸淨にして、便ち此の心を發す、「此の衆生をして、此の不患を脫れしめん。」爾の時、我、便ち此の火を滅するに、火即時に滅す。我、爾の時、彼の園に於て、此の火を滅して、此の悲心を行ぜり。況んや、我、今日、大悲を成ぜるをや。今日、火當に滅すべし」。是に於て、世尊、便ち此の偈を說きたまふ。

少の所生由り、　本一切變を觀ずるに、　一切皆悉く壞する（を以て、）　衆生を慈哀す。

彼の火、即滅するを得たり。火滅して未だ久しからず、智慧の明を以て、世人の火を滅す。

【一三八】儔匹。麗本には疇匹に作り、元明二本には儔匹に作る。今、後に從ふ。
【一三九】栕梏羅翟。翟の字元明二本には翟に作る。
【一四〇】褰荼國(Gandhāra?)。

十七、慈心修行

[一三四]爾の時、菩薩、此の親友の心有り。常に慈心を懷き、自ら[一三五]所生を省みて、實の所生の如くし、所聞の如く、山林中に有り。廣說すること契經の如し。便ち是の念を作す、「此の山林に、衆果有ること無し。諸法の解脫は、忍法を以て解脫す。」是の時、菩薩、長夜の中に、此の慈心有り。諸法解脫して、彼の人民に於て、觸嬈する所無し。彼に於て端坐し、思惟して移動せず。鳥、頂上に巢くふ。是の時、鳥の頂上に在りて乳するを覺知し、恒に恐怖を懷き、卵の墮落せんことを懼れて、身移動せず。是の時、便ち觀察して、便ち捨身を行じて、彼處を動かず。善く慇懃に力め、樂を生じて彼を攝す。是の時、鳥已に翅を生ず。已に翅を生ぜるも、未だ飛ぶこと能はざれば、終に捨て去らず。今、此の慈を行じて、竟に何の奇ありとも、亦恐怖せず。衆生亦未だ曾て爲さざるを、是の如く自ら知り、便ち此の偈を說く、

　彼能く此の事を辦ず、　故に人中に于いて大なり。　亦彼を觸嬈せず、　此の德や上有る無し。
　是の故に、彼の世尊を、　最第一神と爲す。　故に道場處に在まして、　功德自ら備具したまふ。

十八、悲心修行

[一三六]是の時、菩薩悲を行ぜる時、自ら力勢有りて重擔を負ふに堪へ、一處所を求めたり。一切衆生は、我當に之を度脫し、功德を增益すべしとて、[一三七]諸の苦惱に於て力なき者には、世の愁憂を除き、救護無き者には、爲めに護救と作り、悕望無き者には、爲めに悕望と作り、力勢無き者には、爲めに力勢と作り、諸の疾病者には、爲めに醫王と作り、老者の爲めには、少壯の意を示現し、少者の爲めには、力有るを示現せり。

【一三四】この一節は本生の慈忍を說く。
【一三五】所生。衆生の意味なるべし。
【一三六】この一節は、悲行を說く。釋尊の口をかりて本生を說く。
【一三七】諸苦惱。麗本に惱の字を脫するも、今、宋元明三本によりて惱とす。脫とする時は「諸苦に於て脫するに力なき者」となる。

人に語りて言はく、

「人身世間に處り、極妙にして比有る無し。已に人身に生るゝを得たり、應に山林園に處るべし。善い哉此の仙人、善色なり、面り親近するに、衆の瑕惡有る無く、心自ら能く降伏す。殺害の起る所、自ら知りて、[一三〇]齊しく限量し、能く自ら心を降伏して、境界の想有る無し。

[一三一]已に境界の食ふ可きを捨でたり。我、出家の爲めの故に、解脫道を求む。心意決了して、甘露を捨つる莫し。彼の悕望を去り、功德を意ひて、同じく山林に處る。是の如きの三昧有り、意に衆亂無し。已に此の山林に處る、當に此の山林を樂しむべし。夜を月は照明し、日は晝を照すが如し。

[一三二]能仁、恩慈有り、應に此の山林に住すべし。然るに仙人や少壯の時、彼の山林中に於て居住せるに、今、年已に老いて、何に緣りてか此を捨てて去る。」時に是の仙人、便ち是の語を作す、「自ら其の心を伏す。」(兎)倍復歡喜して、是の語を作す、「若仙人去らば、誰か當に此の住を樂しむべき」。菩薩兎、便ち此の偈を說く、

我今此の豆、粳米及餘穀無きも、心能く自ら降伏す、願くは此の山林に住せん。

爾の時、阿惟三佛を成じて、遂に彼に住す。世間を照明し、彼の閑居を樂しむ。是を以ての故に、當に彼の山林に住すべし。便ち此の偈を說く、

境界甚だ庠序たり、山林に苦業を行ぜば、常に樂んで閑靜に居て、當に自ら思惟して行ずべし。[一三三]懈脫身功德は、心意常に和悅して、智慧極めて微妙なり、當に山林に親近すべし。

【一三〇】齊。宋元明三本、齋に作る。

【一三一】已捨境界可食。後の偈を見るに、兎の食すべき豆米等を捨てたる意なり。

【一三二】能仁。釋迦牟尼の釋迦の譯語なれども、こゝは仙人を敬稱する第二人稱なり。

【一三三】懈脫身功德。懈脫は解脫の誤ならん。

曾て聞けり。過去の三耶三佛、園觀に遊在するに、花果茂盛なり。出家を得んと欲す。彼の園中に於て、人民遊行す。佛の出世有り、觀るに厭足すること無し。人民熾盛なるも、彼の園中に於て、衆普有ること無し。袈裟の三色清明なるを著け、[一二五]耳響解脫し、聲音柔和なり。壽に限齊有るが、一切自ら歸す。一切の苦の爲の故に、瞋恚を降伏す。[一二六]色の赤銅の如きは、力を盡し、息を喘ぎて、煙風起るなり。色を見已つて、便ち是の說を作す、「然も、我が心と相應す。此の心を起すは、是我が解脫なり。」是の時、袈裟を護りて、衆の功德有り、彼の瑕穢の緣を捨つ。是の故に、便ち此の偈を說く、

[一二七]亦自ら名を識らざるも、　彼と相應す。　亦善く浴洗せず、　降伏の故に此に來る。　速に彼の果を降伏し、　己を割きて惜む所無し。　口に善言教を作すも、　必ず當に自ら壞敗すべし。

復此の觀を作して、我が與めに是の義を說くと雖も、我當に彼に惠施して、此の苦惱の業を忍ぶべし。

已に自ら己を割き、其の心を降伏す。便ち是の語を作し、而して此の偈を說く、

苦惱の患を作し、　是の如きの慳嫉有ること莫れ。　此の果復小なりと雖も、　惡報限り有ること無けん。

十六、閑居修行

[一二八]爾の時、菩薩、閑居を樂みて、彼の園觀に靜處す。清淨にして衆亂無く、亦衆事無し。行きて彼に到る者、皆恐怖を懷く、心の愛樂する所なり。

曾て聞けり、仙人有り、所居の處、極微無比なり。廣說すること、上の仙人の所住處の如し。彼の所有の衆事、皆盡きて餘無きに、此の園觀を遠かりて去る。爾の時に當りて、未定の[一二九]阿惟三佛たる菩薩、兎身と爲る。是の時、兎、仙人に依りて住す。時に、兎、仙人の下山するを見、便ち偈を以て仙

【一二五】響。聖本には嚮に作る。今は三本に隨ふ。

【一二六】色如赤銅、盡力喘息、煙風起。其意を知り難し。袈裟の色の赤銅の如くなるは、盡力喘息せしむる煙風の起るに似たりの意か。煙風とは火事の事ならん。然らば、火宅を想起せしむる袈裟の色こそは、我が瞋恚を降伏せしむるに相應して、こゝに解脫あらしむるといふなり。

【一二七】亦不自識名、與彼而相應、亦不善浴洗、降伏故來此、速降伏彼果、割己無所惜、訓じ難し。

【一二八】この一節は、本生の閑居の德を說く。

【一二九】阿惟三佛（Abhisam-buddha）。現等覺と譯す。佛の正覺成ずること。

ごと能はじ。

是の時、菩薩鸚鵡、彼の天に語りて言はく、

我此の山中に處り、未だ曾て其の恩を失はず、云何ぞ當に捨て去りて、火をして此の林を燒かしむべき。今、我に此の力有り、意に此の火を滅せんと欲す、空しく此の山に居らず、其の恩に報ゆるを得んと欲す。

爾の時、樹神復是の說を作す、

此の鳥や恩慈有り、其の色甚だ端正なり。此は是應に[一二二]人法なるべし、世の希有とする所なり。

爾の時、天神是の思惟を作し、便ち彼の鸚鵡菩薩に語りて言はく、

汝の恩慈有るを知る。汝の爲めに當に火を滅すべし。相愍みて此の心有り、我當に速に火を滅すべし。爾の時大雲有り、彼の鸚鵡を愍むが故に、今當に此の火を滅して、彼の願をして果を獲しむべし。

況んや當に等正覺を成ずべきをや。是に於て、便ち此の偈を說く、

如來彼に在します時、此の恩慈心有り、諸有歡喜を發し、天人の供養する所なり。以て能く彼岸に到り、生老病を遠離し、篤信已に牢固にして、十方の國を統攝したまふ。

十五、著袈裟行

[一二三]爾の時、菩薩袈裟を著する時、世人の軌則と爲り、衆生等の爲めに、俗を變じて道に就く。此は是[一二四]大幢蓋なり。是の如く國王妻子を捨て、出家學道して、以て諸の狐疑を度す。是の時、菩薩、袈裟を著する時、是の如きの增益功德有り。

【一二二】人法。恩慈を感ずる心、端正の風ある色。人類に見らるべきものの意。

【一二三】この一段は、袈裟を著する功德を說く。

【一二四】大幢蓋。袈裟は三世諸佛の解脫幢相の意。幢も蓋も、佛陀を莊嚴する具なり。

皆是方便の起す所なり。是に於て、便ち此の偈を說く、

〔二八〕彼、若干の響を聞く、「其の色變有る無きも、牢固久しく存せず、況んや我が今日の身をや。」最初此の法を受け、〔二九〕世尊を信ずるあり、便ち大智慧を生じて、諸の結使を除去せり。

十四、慈恩修行

〔三〇〕爾の時、菩薩、恩を行ずる時、其の恩德を知りて、亦忘失せず。便ち是の智慧有り。其の恩に報いんと欲して、少功德を造して、永く以て忘失せず、亦永く盡きず。猶、少穀子を種ゑて、終身忘失せざるが如し。昔、菩薩、無上道を求めんと欲せる時、一閑靜の處に在り。鸚鵡菩薩有りて、常に彼の樹に處る。爾の時、風有り、彼の樹木を吹きて、相切磨し、磨して便ち火有りて出で、火漸く熾盛にして、遂に山巖に及び、諸の生ける靑靑たる樹木を、火は悉く梵燒して、鬱烟の起る有り。色極めて、自ら熾んにして、亦時に滅せず。猶、日光と塵烟と俱起するが如し。大小の樹木、皆悉く燒かれて、遺餘有ること無し。猶、天地融爛の時の如し。須臾の間、聞見する者、皆恐怖を爲す。梵燒する所の物、時に隨ひて便ち盡き、諸の樹木皆悉く盡く。爾の時、菩薩、鸚鵡の身と爲り、一夜の中、便ち是の思惟を作す。猶、飛鳥の此の樹木に止まるに、當に返復の心有るべきが如し、彼と相應して、便ち恩意を起すなり。況んや、當に我等長夜其の中に處るべきをや。亦此の火を滅するを得ること能はざらんや。我、今〔三一〕正に是の時なりとて、其の威力を現はして、大海中に往詣し、兩翅を以て、其の水を取り、彼の火上に在りて、其の火に灑ぐ。或は翅を以て灑ぎ、或は口を以て灑ぎ、東西に馳奔す。是の時、神有りて、便ち此の偈を說く、

此の火甚だ熾盛にして、煙雲や近づく可からず。此の善心有りと雖も、亦滅するを得る

【二八】彼聞若干響。若干の響とは次の三句の說法なるべし。次の句に最初受此法とあるに依りて、之を察すべし。

【二九】世尊。釋尊にあらず。本生の菩薩として奉事せる世尊なり。

【三〇】これより、本生の行恩を說く。

【三一】正。麗本には政とあり。今は三本に隨ふ。

是の如き苦行を爲す。草上に於て臥し、或は灰を以て自ら擁き、彼に樂著して、三宿の中、顏色變易せず。九日の中、禮跪して火を祠る。諸の放逸なる者、彼の言敎に隨ふ。或る時は天を祠る。頭目漸く羸へ、兩臂露現す。或は一足を翹げ、身體僂曲す。亦盜竊せず、法を以て自ら彼の苦行して道を求むるを樂む。亦飲食せず、皮骨相連り、身日日に極まる。身黑くして面色萎黃に、[二三]猶、箜篌の內、實有ること無きが如し。肋脊悉く現はれ、形百變有りて觀省すべからず、少壯の貌、永く復有ること無し。猶、老象の任へ施す所無きが如し。坐臥に行步に、力有ること無く、亦語ること能はず。復命を貪ると雖も、久しく世に在らざらん。爾の時に當りて、天使、已に彼の所住の處に至り、爲めに方便を設けて、是の如きの若干の變化有り。彼、法の爲めの故に、寤寐に其の節を失はず。是の如く解脫を求めて、其の身を顧みず。是に於て、便ち偈を說いて言はく、

[二四]設、我、當に融爛すべし。　人身を分つて百を爲すとも、　又瞋恚の想無けん。　衆生異る無きに至らん。　彼の意何ぞ貪る可き、　苦惱無數に變ずるを。　吾我の想を計する有らば、　眠と死と何ぞ異らん。

十三、多聞修行

[二五]是の時、菩薩、[二六]多聞の時、所謂名を聞くとは、[二七]自ら其の德を稱揚するを、最第一と爲す。息心は衆人の敬侍する所、志性亂れず、所聞能く持す。聞持具足して、亦忘失せず。其の義を觀察して、憍慢を除去す。是の如きの業有りて、智と相應す。今悉く聞知し、智を以て懈惓すること無く、師長を恭敬して、所願自在なり。若飢虛なる者には、大慈悲を起す。大外道を降伏して、罣礙する所なく、亦塵垢無し。異刹土に於て、其の道行を現じて、愛欲の染著する所と爲らず。方便の意を起し、世の人民の爲めに、解脫せしめんと欲す。爾の時、菩薩是の如きの慈心有り、一切智の因る所、

【二三】箜篌。くだらごと、胴の屈曲したる二十三絃の琴なり。こゝは琴の胴の空なるに喩ふ。

【二四】こゝの偈は、左の八句なり。設我當融爛、人身分爲百、又無瞋恚想、衆生至無異、彼意何可貪、苦惱無數變、有計吾我想、眠與死何異。その意味を解し難し。第四句を第一句に續くる時は、幾分解し得べきに似たり。斯くする時は、次の如くなる。設、我當に融爛して、衆生異るなきに至るべし。人身分ちて百と爲すも、又瞋恚の想無けん。

【二五】この下、本生の多聞修行を說く。

【二六】多聞の上に行の一字を脫するが如し。

【二七】聞名者、自稱揚其德。多聞は、世尊の名をたゝへ、德を揚ぐる事を、第一條件とする意ならん。

ば恕されよ。

彼の深山中に於て、食せず、飢渇して、必ず當に命終すべし。甚痛甚苦毒なり。各當に共に別離すべし。是の愁憂を以て、亦食する能はず、亦水を飲まず。果蓏の我が母に與ふる者有ること無し。二人倶に當に死すべし」。是の如きの辛酸の語を作し已る。時に、獵師、便ち歡喜を懷き、放ちて去らしむ。

〔一〇二〕彼の〔一〇三〕拘薩羅國に、一止住處の隱學士あり。名けて〔一〇四〕睒と曰ふ。十善を施行して功德備に具はる。瓶を持ちて、行いて水を取る。是の時、拘薩羅國王、出行して遊獵す。麋鹿を追逐し、山中に於て、〔一〇五〕便ち箭を射て誤りて睒に中つ。睒、喚呼して便ち父母を憂ふること、猶、飛鳥の兩翅有ること無きが如し。「父母年老ひ、目盲して見る所無し。今、毒箭を被りたり。倶に亦當に死すべし。父母〔一〇六〕四等心を修せるを」。便ち此の偈を說く、

「惟ふに我が父母老いたり、　目冥くして覩る所無し。　父母子を生む時、其の力を蒙るを得んと欲す。　我百年の中に於て、　父母を擔負して行かんも、　我が所願を充して、　能く父母の恩に報いじ」。〔一〇七〕「已に得ば彼を將護せん。　父母の處を指授せよ。　能く覺知すること是の如きは、世の悕有とする所なり」。

十二、堅固心修行

〔一〇八〕是の時、菩薩、堅固心を行ずる時、解脫を收攝せんとて、是の如きの方便有り。彼、勇猛の意有りて、爲す所、罣礙無く、人の制持する所と爲らず。是の故に、當に方便して求むべし。

昔聞けり〔一〇九〕阿蘭迦蘭、諸の禪定を起せり。彼の禪を捨て已りて、更に〔一一〇〕三耶三佛の無上道を求め、便ち南に行くこと半〔一一一〕由旬中、彼の空閑處に詣り、種種の苦行を作す。果を噉ひ、水を飲み、純黑の皮衣を著し、樹下に在りて、〔一一二〕結加趺坐す。或る時は水を飲み、或る時は果蓏を食ひ、或る時は氣を服す。

【一〇二】睒の因緣は、六度集經にあり、異譯に佛說睒子經あり。

【一〇三】拘薩羅(Kosala)。城名によつて、又舍衞國といふ。

【一〇四】睒。睒子經に對照し、又後の部分を見るに、學士の名は、睒なるべきを以て、施を後に屬せしめたり。

【一〇五】射著。宋元明三本には二字の代りに便射箭誤中睒睒と作す。今。これに從ふ。

【一〇六】四等心。慈悲喜捨の四無量心を云ふ。

【一〇七】已得將護彼以下の四句は、之を睒子經に對照するに、王の語なるべし。王は睒子の悲嘆を聞きて、自己の所行を悔い、睒子に代りて、盲父母を愛護せんを誓へり。

【一〇八】この下、堅固心修行を說く。この一段中には、悉達太子としての修行を交へ說く。

【一〇九】阿蘭迦蘭(Ārāḍakālāma)。佛の出家後、始めて就いて學べる仙人なり。

【一一〇】三耶三佛(Samyaksaṁbuddha)。正徧知又は正等正覺と譯す。佛智なり。

【一一一】由旬(Yojana)。四十里とし、或は三十里とす。

【一一二】結加趺坐。左右の兩脚を交叉し、足背を腿上に置いて坐すること。

勇猛の意、海の如く、柔和にして麤獷[99]ならず、頭面に稽首して、無著にして世の希有なるに禮しまつる。

十一、慈孝修行

[100]是の時、菩薩、父母に慈孝なる時、性に報恩有り、恭敬して事を承く。惡を遠ざけて善に就き、時に隨ひて供給す。夙に起き、夜に寐ね、父母の意を贍、事として辦ぜざる無し。所約の教訓、未だ曾て違失せず。是の如きの柔和の心有り、是を以ての故に、是の如きの事有り。心に修行する所、常に自ら觀察して、當に何れの事をも辦ずべし。所聞の教誡は尋ねて卽之を知り、常に歡喜を懷き、一切愛敬す。念じて父母の心を盡知し、常に念じて、報恩せんと欲して、麤獷の言無く、此れに處所無し。

又聞けり、昔未だ菩薩と成らざる時、大象王と爲りて、端正無雙なり。頭眼肌毛皆悉く端正にして觀るに厭足すること無し。耳滿充備して、衆象中の長なり。牙爪[101]方政にして、娛樂の心有り。脣齒純赤にして頭耳滿具す。形體方圓にして、極大高廣なること、猶高山の峻なるが如し。行步庠序、七處滿足すること、猶靑蓮花の如し。行步庠序として、罣礙する所無し。龍女の所生なり。山澤中に遊ぶに、色白雪の如し。便ち獵者の爲めに獲らる。彼を將いて去る時、是の時、山野の樹木皆悉く屈申し、水自ら涌沸して、將に所止に至らんとす。種種の甘饌飲食を與ふるも、亦肯て食せず。是の時、象師前に在り、長跪叉手して、彼の象に白して言ひ、便ち此の偈を說く、

「我、本、善本を造り、此の神象を降し來る。何すれぞ肯て食せず、怨恨の心有るが如きか」。

是の時、彼の神象、便ち偈もて答へて言はく。

「我が母目有る無し。羸瘦して愁惱を懷かん。彼を憶ひて食する能はず。」是の故に願はく

【九九】獷－麗本に穬に作り、三本獷に作る。次も同じ。

【一〇〇】この下、本生の慈孝修行の一段なり。

【一〇一】政。宋元明三本に正に作る。

ん。　宿福もて王族に生れ、　德を觀るに比有る無し。　勇猛にして實に虛ならず、　相に應じて國主と爲る。　我、今、當に尊敬して、　王に從ひて、復殺さず、　往を改めて善行を修すべし。　衆生、所樂に隨はん。

十、柔和修行

[九五]是の時、菩薩、柔和を行ずる時、彼の心柔和にして、此の名聲あり。言ふに卒暴ならず。法を求めんと欲するが故に、常に彼の意を護る。未だ曾て怨惡を起さず、悕望を生ぜず。口に惡言を吐かず、愚癡の爲めの故に、其の智慧を現じ、心垢を除くが故に、皆悉く名を稱す。若干の吾我の想有ること無く、幻に隨はず。諸佛の擁護する所、此に於て、是の如きの德を獲たり。亦姦僞無く、是の如きの穢は、皆悉く之を避く。中に於て柔和の心を得、善の根本具足して、人の愛念する所なり。身命を惜まざるは、神仙の嘆譽する所なり。是の如く柔和にして、彼の善惡の報を觀ず。彼の智の功德の具足すること、所說の如し。善本斷ぜず、貧窮の者には、施すに金銀珍寶を以てし、諸穢を除去す。壽十歲の時、厄難に遭遇し、所欲自在なるも、亦殺生せず、善身業を造る。心の所生の財と、口の所傳の教と、行の所造の業とは、穢惡に覆蓋せらるゝ者を除去す。爾の時、諸の比丘、「[九六]世間の有身、已に休息を得たり。已の所有に非らざるは、悉く盡して餘なし。是の如く已に盡せり、是を以ての故に、當に染著を去離すべし。前世に造る所の者は、彼、已に盡して、更に復造らず。[九七]已に[九八]根本苦を斷じて、壞敗を休む」。是の如く說き已りて、是の法を作し、此の深妙の法中に住すること、手に輪を執りて、六月懈らざるが如し。諸佛世尊、皆悉く覺知し、皆悉く成就したまふ。是に於て、便ち偈を說いて言ふ。

諛諂の意を造さず、　邪法の業を覺知し、　本亦此を造さず、　當に是の如きの觀を作すべし。

【九五】これより本生の柔和修行の一段なり。

【九六】成道偈と傳へらるゝものに似たり。

【九七】已斷根本、苦休壞敗。苦休壞敗を壞敗苦休とせば、一層解し易し。

【九八】苦。宋本には若に作る。

中に娯樂して、亦彼此無く、數數彼を樂しむ。寤寐の中、未だ曾て調戲せず、亦妄語せず。

又聞けり、昔、王有り、[九一]須陀摩と名く。王宮に生れ、四域を統領し、法皷遠く振ひて、羣臣人民の聞かざる者無し。生れて此の如きの有德の人なり。池水に往詣して浴洗せんとて、羽寶の車に乘りて、城門を出でんと欲す。時に、[九二]婆羅門有り、顏色[九三]端政にして、聰明にして智慧あり、來つて寶を乞はんと欲す。婆羅門、卽、王に白して自ら姓名を稱し、手を擧げて乞ふて言ふ。是の時、王、乞匃の言聲を聞きて、便ち歡喜を懷き、卽報へて言はく、「止みね、止みね。尊者よ、我國に還るを須て。當に相救濟すべし。夫れ王の法たる、言に二有ること無し」。卽、彼の池に詣りて浴洗し、洗ひ已に竟りて、便ち國に還らんと欲す。是の時、翅飛鬼有り、羯摩沙波羅と名く。其の恐怖を現じて、手に王身を執る。是の時、彼の王、卽自ら涕零つ。是の時、彼の鬼、彼の王の意を觀じて(言ふ)、「云何ぞ大王、何ずれぞ啼哭して、此の愁憂の心有るや」。時に、菩薩、報へて言はく、「我、此の[九四]身想有ること無し。唯、我、婆羅門に財寶を許せり。是を以ての故に、便ち愁憂を懷く」。是の時、彼の鬼、卽、王に報へて言はく、「我、未だ曾て此の甚奇甚特の事を聞かず。世に希に聞く所なり。彼の人民の爲めの故に、來つて相試みたるなり。若、今、設王を放ち去らば、當に復還るべきや不や」。時に、王、甚だ喜悅を懷く。是の時、彼の鬼、身に兩翅有り、飛びて虛空に在り。其の所說を觀じて、卽放ちて去らしむ。是の時、菩薩、國に還り、歡喜しつゝ財を以て彼の婆羅門に與ふ。實にして虛有る無く、施して悔あらず、是の審諦の言有り。是の時、國王、卽彼の鬼の所に詣り、自ら姓名を稱すらく、「今已に、此に到る」。是の時、彼の鬼、王の形貌を見て、卽便是の實言有つて、王の顏色變ぜざるを驚怖し、瞋怒を除去して、殺害の意無し。便ち是の語を作さく、「甚奇甚特なり、未だ曾て聞く所あらず」。此の偈を說いて言ふ。

　我は惡毒を飮むに堪ふ。　洋銅を口中に灌ぎ、　利刀其の體を割くとも、　誰か敢て法王を害せ

【九一】須陀摩(Sudh-man)。これ菩薩の本生行を爲せる時の名なり。
【九二】婆羅門(Brahmaṇa)。印度四姓の最高階級に屬するもの。梵天に仕へ、祭式を司る。
【九三】政。三本に正に作る。
【九四】身想。身に對する愛著の想、乃至、身に對する寸毫の意あること。

に所欲有るも、心亦移轉せず。境界の水を斷ぜんと欲す。[八二]皆是[八一]根門の行なり。[八二]

八、智慧修行

[八三]菩薩復、菩薩智慧を行ずる時、所知を以ての故に、名けて智慧と曰ふ。數數彼の行中及び諸の衆生に於て深義を解せず、長夜に勤勵し、分別して智慧を決了す。此の深、此の淺、清淨にして[八四]甚利なり。此の惡、此の醜、善知識に親近す。彼の法は亂れず、無量無限にして、亦增損無し。猶、劍戟の截る所皆斷ずるが如し。彼の智慧も、亦復是の如し。第一義を現ずるが故に、[八五]其の慧明有り、己の意、闇閉なるが故に、彼の見明を開き、共に與に相應す。諸行を以ての故に、根門具足し、怯弱無きが故に、其の威力を現ず。不善の財業を斷ぜんと欲して、其の財業有るを現ず。珍寶の得可らざるを以ての故に、是の如く珍寶を現ずる也。斷命するを以て、其の壽命を現じ、諸の結使を斷ずるが故に、是の力もて遠事を觀察し、彼の與に分別し、皆決了せしめて、彼の脆命を救ふ。彼の愁憂を以ての故に、歡喜の心を起す。意を息めて起らざるが故に、惡法を去離して、善法を成就し、邪を去りて、正に就く。是を以ての故に、其の智慧力を成す。生死を以ての故に、[八六]妄見を斷じて[八七]出要の處に至らんと欲す。世間に[八八]遊歩するが故に、一切境界に遊び、一切智原を究竟して、無爲に至らしむ。

善住して移動せず、生死の畏有ること無し。即[八九]不還處に逮り、三界の趣を消滅す。百劫に造し行ふ所は、衆生の類を淨めんと欲す。三世の想有ること無く、爾も能く悕望無し。

九、審諦修行

[九〇]是の菩薩、諦を行ずる時、彼の諦とは、心に虛妄有る無く、言に二有ること無きなり。常に其の

【八一】根門。眼耳鼻舌身意の六根を云ふ。
【八二】皆是根門行。自覺而覺人より、こゝに至るまで、麗本には慈考修行の後にあれども、今は宋元明三本の順序に從つて、之を最初に移せるなり。
【八三】これより本生の智慧修行の一段なり。
【八四】甚利。麗本には其利に作る。今は三本に從ふ。
【八五】其慧明。麗本には共慧明に作るも、今は三本に從ふ。
【八六】妄見。麗本には望見に作るも、今は三本に從ふ。
【八七】出要。生死を出づる要道。
【八八】遊歩。麗本には猶歩に作るも、今は三本に從ふ。
【八九】不還處。不還果(Anāgāmin)なり。欲界九品の惑を斷じて、再び欲界に還り來らざる位を云ふ。
【九〇】これより本生の審諦修行の一段なり。

て、怯弱無し。一心に其の氣味を解して、心に著する所無し。志性を降伏して、未だ曾て懈惓せず。其の所行を成じて、三昧の歡喜を得。[七三]根精進にして、移らず、念錯亂せず。一劫に修し覺知する所の道品、[七四]念猗歡喜し、勇猛の獲る所、皆智に依猗して、漸漸に歡樂の處を得。然るに菩薩、彼の三昧の行を行ずる時、三昧の善行を起す。已に三昧の善行を辦ずれば、若は行、若は住、未だ曾て之を失はず。彼、此の行有るを以て、善法具足し、諸の善行を起して、諸の求むる所、皆悉く現在前す。設、心に愁憂有るも、漸く其の意を降伏して、[七五]忘失せざらしめ、思惟増益して、善を増益す。若心放逸なれば、復善法を思惟し、若心に愁憂を懷き、縛に縁つて繫がるゝも、即能く彼の解脫の善を思惟す。己の境界に於て、威儀悉く善くし、人の爲めに亂想穢病及び餘種を演說し、三昧の諸の功德具足す。三昧は彼の處なり。彼、三昧に處る行報の果、實に最善行なり。猶、靑靑の樹木、淨解脫を現じ、及び餘の靑黃白黑、皆彼の三昧に隨つて來往し、罣礙する所無きが如し。三昧力の火聚、日光を以て、照さざる所無からんと欲す。彼の[七六]天眼を得て、亦復是の如く、晝夜徹照す。亦復天耳を得て徹聽す。是の如きの力有り。彼の菩薩、是の三昧を得て、無限無量、稱計す可らざるは、盡く三昧の力に由り、亦思惟に由り、懈怠せざるに由り、[七七]智慧明に由る。卷を知り舒を知るは、亦三昧を悕望するに由り、惡相を去離するに由り、[七八]逆順の三昧力に由る。是の如きの衆想は、是彼の三昧の所生なり。彼彼[七九]總持門、三昧を成ず。所適の處亦疲惓すること無く、其の方便を求む。不堅固三昧なるが故に三昧を行ず。一切の欲の爲めの故に、心意を降伏す。善く思惟を擁護して、亦錯亂せず。隨意自在に人の過を說かず、無量無限にして、窮盡有ることなし。今の三昧に於て、諸の狐疑を斷じ、種種の光明を放つ。一切の善法に依りて、諸の結使淨らかなり。數數三昧を習ふは、一切の善法に依る。是に於て、便ち此の偈を說く。

此の解脫心を獲て、　三昧に罣礙無し。　[八〇]新頭の大海に趣くや、　駛流制すべき難し。　若意

【七三】　根精進。三十七道品中に五根あり。信・精進・念・定・慧これなり。今この中の精進根をいふなり。

【七四】　念猗の猗も、次の依猗の猗も、宋本には倚に作る。一劫所修覺知道品念猗歡喜勇猛所獲。

【七五】　不妄失。善法を妄失せずの意ならん。

【七六】　天眼。天人界の眼にして、人界の視力に超越し、遠近麁細の諸色を見るを得。

【七七】　智慧明。三本には智慧眼に作る。

【七八】　逆順の三昧。順逆の諸法に於て、自在を得る禪定なり。

【七九】　總持(Dhāraṇī)。善を持し、惡を起らしめざること。念定慧所生の功德なり。

【八〇】　新頭(Sindhū)。印度河なり。Sindhu 轉じて Hindhu となり、更に轉じて India となれり。

行する時、此の大忍辱の力有らば、當に爾の時に於て、瞋恚の意を起さざるに(由りて)、此の[六五]血色の、亦變易せざるを觀るべし」。是の時、護世の[六六]四天王、彼の仙人の住處に往詣す。是の時、[六七]提頭賴吒、頭面に禮を作し、便ち此の問を作さく、「我、今、迦藍浮王を殺さんと欲す。爾る可しと爲すや不や」。是の語を作し已るに、是の時、仙人默然として對へず。時に[六八]第二天王、復是の問を作さく、「我、今、當に彼の男女大小、及び城郭の人民を殺して、皆悉く蕩盡すべし」。是の語を作し已るに、是の時、仙人默然として對へず。是の時、[六九]毘樓波叉王、復是の問を作さく、「我、彼の境界國土の、所有の人民を取りて、盡く之を取殺せん。願はくば聽許せられよ」。是の時、仙人默然として對へず。是の時、[七〇]毘沙門王、復是の問を作さく、「我、彼の境界國土を取りて、他方に移著せんと欲す。願はくば聽許せられよ」。是の時、仙人歡喜して、忍辱の德を歎譽し、便ち此の偈を說く。

頭目手足を截るも、　怨惡の意を起さず、　所有盡く彼に施す。　[七一]況んや　當に世間に於てすべきや。

是の時、護世の天王、復是の問を作さく、「云何が仙人、何等の道をか求めんと欲する」。是の時、仙人答へて曰はく、

彼の王の身をして、　惡行の報有ること無らしめんと欲す。　彼の王兇暴なりと雖も、　彼を憂へて自を憂へず。

七、三昧修行

[七二]若菩薩、三昧を修行する時、設、彼の三昧に入るや、所緣の心有りて、未だ曾て忘失せず。亦放逸ならず、其の一心を專にす。若復慇懃に方便を求めず、亦諸行を受けず。諸の法味を解して、法に於て著せず。彼の地中に於て、亦結使無し。彼の三昧の中、清淨にして瑕穢無し。外敵を伏し

【六五】血色。宋元明三本には面色に作る。
【六六】四天王(Catur-mahārājikā)。欲界に六天あり、その最初を四天王と云ふ。須彌山の山腹の四方に、各々一天ありて、各一天下を護る。故に護世の四天王と稱す。
【六七】提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭra)。持國天。東方の天王なり。
【六八】第二天王。Virūḍhaka。增長天。南方の天王なり。
【六九】毘樓波叉王(Virūpākṣa)。廣目天。西方の天王なり。
【七〇】毘沙門天(Vaiśravaṇa)。多聞天。北方の天王なり。
【七一】況當於世間。自已の一切を擧げて、世に施す。彼王をすら怨まず、況んや世間の餘人を怨らんやの意。
【七二】以下、本生の三昧修行の一段なり。

[六二]六、忍辱修行

若復、菩薩、忍を行ずる時、畏無く、所懼無く、所染無く、彼の果報を觀ぜず。其の力勢有りて、衆生を擁護し、常に惡數を遠離し、志性剛强にして、自ら己の過を省る。一切衆生皆恐怖を懷く、恐怖無らしめんとして彼の戒律を示す。亦一切衆生の爲めに麤獷を降伏す。不善の語を去りて、衆生を慈愍す。彼の無量無限は、衆生に依りて語る。設聞及する所有りて、諸の[六三]道迹に至るもの、微妙第一なり。猶、華果の未だ常ならず、華を敷かざるに、風の爲に吹動せられ、山巖處の穴の、諸花の香味を採取するが如し。種種の色處行の福德の音響は、衆生の類、皆悉く聞くを喜ぶ。猶、蜂王の諸花の味を採り、以用て蜜を作り、及び諸の小蜂の蜜を作る者の如し。及び諸の泉源の處處に流溢し、及び諸那陀園の快樂無比(なるが如し。)罵詈の爲す所成辦する有り。諸の呪術を求むる(もの)、彼の爲めに慚愧を示す。衆生の道を修行する者、厄難ある者の爲めに、而も救護を作すを名けて忍辱仙人と曰ふ。是の時、[六四]迦藍浮王往いて深山に入り、麋鹿を獵せんと欲す。適、山中に入りて、此の忍辱仙人を見、便ち前んで跪いて問ふ、「此の深山に在りて、何の道をか求むると爲す。」忍、答へて曰く、「忍を求む」。是の時、大王自ら觀察せず、亦行を觀察せずして、試みる所有らんと欲す。即時に便ち是の說を作さく、「我今當に汝の手脚を截るべし。」即彼の仙人の手脚を截る。復、是の問を作さく、「汝、今何の道をか求むると爲す」。是の時、忍答へて言はく、「我、忍辱の道を求む」。即時に忍辱の德を咏謦す。是の時、大王、倍、瞋恚を懷き、其の命を傷害せんと欲す。是の時、仙人已に手脚を截られ、便ち誓願を作して言はく、「我をして世世に瞋恚を懷くこと勿く、亦彼の大王に於て、瞋恚有らず、諸法の皆悉く虛空なるを解知せんことを」。復異仙人有り。彼の仙人の所に往至して、是の問を作さく、「云何が神仙、瞋恚を彼の王に起さざるや」。(忍答へて曰はく、)「若此の忍辱を

【六二】これより本生の忍辱修行の一段なり。

【六三】道跡。聲聞の初果にして、預流果に同じ。

【六四】迦藍浮王。忍辱仙人の名、金剛經に見え、王名を歌利(Kaliṅga)と爲す。此本生譚は頗る有名にして、當時普行せり。

曾て變悔せず。況んや、復菩薩にして禁戒の成就せるをや。是に於て、便ち、此の偈を說く、

上下及四方の、　諸有は、戒香を聞きて、　皆悉く等しく具足す。　欲を遠かるを最要と爲す。　善知識に親近せよ、　善は功德を作し、　善色は比有ること無し。　戒香は第一福なり。諸穢悉く休息し、　我を覺して我有ること無し。[五八]最勝たる後の第七を、　我今當に自ら禮すべし。

五、精進修行

[五九]若復、菩薩、[六〇]精進を行ずる時、然るに彼の心に所緣有るも、心亦懈倦無し。出家すること、障斷すべからず。衆生の爲めの故に、出家す。移動せざるが故に、其の力緣有り。種種の衆生(の爲に)、其の精進有り。勝ふ可らざるが故に、其の忍有り。長益する所有るが故に、世に示現す。其の功德有るが故に、衆生に示現す。其の心意を攝するが故に、彼の意移動せず。船師と爲るが故に、彼岸に到ることを得。定を以ての故に、亂せず。發意躊步すれば、則所度有り。彼の衆生を以ての故に、其の所願を成ず。成道を欲するが故に、象馬寶車を施す。是の時、菩薩、彼の衆生に於て、是の精進有り。其の精進の名を聞くこと有る者、道に發趣す。一身の中に作す所の功德、限量す可らず。況んや、復如來の、無數[六一]阿僧祇劫に、作す所の功德をや。道場に端坐する時、外道を降伏す。生死を經歷して、精進の意を以て愁憂を除去す。

精進は最第一なり、　法王主に歸命しまつる。　佛、善く自覺したまへるに於て、　今、無等に歸命しまつる。　彼の尊を第一と爲す、　法鼓の聲遠く布き、　覺に於て自覺したまふ、是の故に無著に歸しまつる。

【五八】最勝後第七。過去七佛中の最後最勝たる第七佛の意ならん。

【五九】これより本生に於ける精進修行の一段なり。

【六〇】精進。惡法を斷じ、善法を修行するを云ふ。

【六一】阿僧祇劫(Asaṃkhya-kalpa)。阿僧祇。無數と譯す。劫。算數の及ばざる遠大の時を云ふ。

及天金、色を最第一と爲す。能く施して和顏の色あり、解脫者に歸命しまつる。車寶を第一と爲す、珍寶の瓔珞する所。顏色皆和悅せる、妻子をも及男女をも、金鉢に盛滿せる銀をも、或は盛滿せる碎金をも、彼歡喜を以て施す、誰か[四九]毘沙門に勝るぞ。和悅して以て自ら施すこと、果の茂盛して好きが如し、歡喜し惠施して、彼、[五〇]三世界を滿たす。男女の極端政なる、婦身及頭目だも、世の爲めに惠施す、誰か此の施と等しき。檀施此に過ぐる無し。天人の及ばざる所、猶、彼の上人の、意は、大海の底無きが如し。

四、持戒修行

[五一]彼の菩薩、戒を修行する時、[五二]彼の戒に於て、[五三]無戒と爲すに非ず。及身口に行ずる所、心の起す所の甘露の法なり。彼の花果の、其の根を擁護すれば、必ず果實を生ずること、彼に於て得るが如し。皆是人の行ずる所、猶[五四]彼の士の如し。[五五]殺生と、不與取と、婬泆及諸の放恣と、菩薩は不飮酒にして、諸戒智慧に於て、皆悉く具足し、非戒を除去す。道場に於て、常に三昧にして、犯戒を遠離す。亦殺意有らず、物性皆清淨なり。彼の信施を受け、數數厚味なるも、亦犯す所無く、内に缺くる所なし。[五六]有を去つて有に就かず、亦花を敷かず。[五七]見に依りて腐敗せず、穢無く、新しき穢果を造らず。種うる所新善有り、眠悟に愁無し。彼の衆生、色は最第一なり、彼の功德に由るが故に、善香遠く布く。信施を受くるが故に、意常に牢固たり。諸根具足するが故に、壞敗する所無し。智慧住して移らざるが故に、壞せざる所無し。彼の人に緣るが故に、增益する所有り。彼の人の爲めの故に、苦惱を擔負す。善法に因るが故に其の處所有り。愁惱無く亦所染無し。形貌を以ての故に、服飾有り。彼の人の爲めの故に、其の財寶有り。無限無量にして、窮盡有ること無し。初發意從り、未だ

【四九】毘沙門(Vaiśravaṇa)。又は多聞天とも云ひ、四天王の一にして、護法と施福の神なり。
【五〇】三世界。欲・色・無色の三世界なり。
【五一】これより本生に於ける持戒修行の一段なり。
【五二】戒(Śīla)。身心の過失を止むること。優婆塞・優婆夷(在家の信者)の持するを五戒と云ひ、不殺生戒・不偸盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飮酒戒なり。比丘・比丘尼(出家)の持するを具足戒と云ひ、二百五十戒と五百戒となり。
【五三】於彼戒非爲無戒。
【五四】彼士。宋本には信士に作り、元明二本には俗士に作る。菩薩の戒を行ずること、清信士の如しの意。
【五五】殺生以下不飮酒まで、五戒に相當す。但、妄語を放恣とするの差あるのみ。殺生等の四戒には不を加へず。これをすべて不飮酒の不にてあらはす。原文左の如し。「彼士殺生不與取婬逸及諸放恣菩薩不飮酒。
【五六】去有不就有。有の字麗本には無し、宋元明本に從ひ「有を去る」とす。
【五七】依見不腐敗。

多く衆生の類有りて、生死の淵に流轉す。此の艱難苦を觀じて、涅槃に安處し至（らしむ）。陰雲に覆蓋せられ、光無くして幽冥に處る。智者皆世に現れ、雲を除きて光を出でしむ。

三、布施修行

[四四]爾の時、菩薩、此の[四五]檀を行ず。最初始の時、法想を興起し、甘饌香美にして衆生を饒益し、時に隨つて相應し、第一義と相應す。心に愛味を悕む無く、成就充滿して、衆結を除去し、亦遠離する所無し。[四六]乞者に逆はず、施し已りて變悔の心無し。皆、是、曩昔の施行の功德、彼をして結著無らしむ。衆人の爲めに重擔を荷負して、皆結使を棄つること、今日の施の如し。其の所願を成じ、衆生をして欲する所、皆獲しめんと欲す。小より已來、種種の害意無く、諸の種種の穢患を忍び、功德を施して漸漸に厚く、人民を導引して、船師と作る。數數施を廢せず、常に惠施を好み、內自ら清淨にして、外に穢相を現じ、一切に[四七]違せざる者なり。謂く一切衆生に、憍慢を除去し、懈惓の心無く、施心遂に增し、顏色和悅して、怨恨有ること無し。自ら稱譽せず、亦自ら下らず。衆生を愛樂して、一切の所有皆悉く惠施す。義の成辦する所、人民を合集し、數數惠施して、變悔の心無し。心意喜悅して、布施を嘆譽し、果報遠く徹る。金銀・珍寶・車璖・馬瑙・車乘・男女・城郭、皆悉く惠施す。內に慳嫉無く、彼の信施を愛す。彼の悕望を充滿し具足せんと欲し、彼の施果をして皆悉く牢固ならしめんと欲し、彼をして乘船し得度せしめんと欲す。彼の施を以ての故に、此の義を具足す。施果を觀察し、諸結を捐棄して、衆生の貪著除去し、邪見無からしめ、慳貪を除去すること、時に隨つて生ず。法雨の雨れるに依る。是の故に歸命しまつる。

金銀珍寶の施、車璖馬瑙の珠、彼の厭足無きを瞻る、今[四八]釋師子を禮しまつる。象馬

地獄趣(Naraka-gati)。餓鬼趣(Preta-gati)。畜生趣(Tiryagyoni-gati)。阿修羅趣(Asura-gati)。人趣(Manugya-gati)。天趣(Deva-gati)。

【四一】至。麗本には獄とあれど、三本に至とあり。

【四二】結使。結も使も共に煩惱の異名。

【四三】法數。五蘊・十二處・十八界・六度・四諦等の如き諸法の數を云ふ。

【四四】これより本生に於ける布施修行の一段なり。

【四五】檀(Dāna)。檀那。譯して布施と云ふ。菩薩の行ずる六波羅蜜の中、第一の行法なり。

【四六】乞者に逆はずとは、乞者の望のまゝに、吝む所なく與ふるなり。

【四七】違。麗本に達に作り、三本に違に作る。

【四八】釋師子。釋尊の德號なり。獅子の百獸に於けるが如く、無畏なるを以て、かく名く。

觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を發す。』衆生の類、賢聖諦[三九]を照見究竟見せず、能く賢聖諦を見しむる者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、長夜、流滯に處り、能く此の流滯を脱する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、閑靜有ること無く、種種の趣[四〇]と相應し、能く此の閑靜處に[四一]至る者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、結使[四二]に貪著し、長夜、染著して能く此の結使を滅する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、苦難に遭遇して、志性荒亂し、能く解脱處に至らしむる者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、欲を謂つて淨と爲し、內に臭處を盛りて、能く此の愛欲を脱する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、欲を謂つて樂と爲し、諸陰の苦患あり、能く第一義を曉りて、涅槃に至る者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す』。衆生の類、有常の想に著して移動せずと謂ひ、是に能く涅槃の路を示す者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、吾我の想を計して法數[四三]を解せず、能く法を分別する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、救護を得ず、涅槃を厭患すること、猶、大狗の常に死屍を守り、東西に馳走して休息有ること無きが如し。愚癡の爲す所、今亦是の如し。彼の狗と異ること無く、自ら性行無く、東西に馳走して、涅槃の義を解せず。陰蓋に覆はれて、悉く觀察せず。菩薩勇猛の意を起して、彼の道に至らしむ。便、是の偈有り。

に作る。

【二八】無爲(Asaṃskṛta)。生住異滅に亘らざるを云ひ、涅槃に名く。

【二九】有常の想。一切が常住不變易なりとする謬見。

【三〇】猶豫。心の定まらずしてためらふこと。

【三一】著。三本に所著に作る。

【三二】彼岸(Pāra)。生死を此岸とし、涅槃を彼岸とす。彼岸に度るとは、即生死を脱して涅槃に至るを云ふ。

【三三】三種の火。三毒とも云ふ。貪瞋癡の煩惱なり。一切煩惱の根本とす。

【三四】行苦。行とは遷流を義とす。生滅變遷の苦をいふ。

【三五】桑虫子。元明二本に桑蠶子に作る。

【三六】爲行。自已の爲せる行の爲になり。

【三七】使流。使とは煩惱の異名。心を驅使するが故なり。使流とは、煩惱海中に流浪するをいふ。

【三八】由無有。宋元明三本には無由に作る。この方解し易し。

【三九】賢聖諦。四聖諦即ち苦集滅道の眞理をいふ。

【四〇】趣(Gati)。衆生の趣く所。業因の差別によりて總じて六所あり。之を六趣とも六道とも云ふ。

苦惱を脫する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、常に[三〇]猶豫を懷き、悕望して、正に遠かり邪に就き、能く其の狐疑を斷ずる者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、若干の見趣有り、能く此の見趣を拔く者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、塵垢に[三一]著(せられ)[三二]、彼岸に度らず、能く彼岸に度ることを得る者無し。其の智者を除く。是く如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す』。衆生の類、[三三]三種の火盛んにして、爲めに焚燒せられ、能く此の法を脫する者有ること無く、亦法雨を以て滅する能はざる者なり。其の知者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、生死に輪轉して、休息有ること無く、亦能く彼岸に度る者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、衆生の類に於て、大慈を起す』。衆生の類、[三四]行垢に染著せられて、生本を增益し、能く此の生死を脫する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、身大嶮に處り、手もて脆繩を攀ぢて、能く此の脆繩を脫する者無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、猶し[三五]桑虫子の[三六]行の爲に、驅逼せらるゝが如し、亦能く此の[三七]使流を脫する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、大生死に發趣して、常に悕望を懷き、亦能く還止せしむる者無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、惡道に發趣して、常に欲行の想を懷き、能く正道に安處する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、長夜、自ら幽冥無智の所に處り、[三八]由、能く此の邪道を脫して、正智に處らしむる者無し。其の智者を除く。是の如く菩薩

あらんか。

【二八】知己身縛。自已の身を制して、和親の爲めに犧牲となるなり。

【二九】一切苦本。一切苦本の意義通ぜず。假りに一に苦本を斷ち切ると譯ず。

【三〇】意無所念不捨有故。これを前の全體にかけて見るべきか。

この次に麗本從つて大正大藏經は、一二頁の若復菩薩行智慧之時より一六頁の欲得蒙其力までを挿入するも、文の構造より見るに、之を自覺向覺人より皆是根門行の三千七百九十五字の後に廻すを可とするを以て、今は三本に從ひ、順序を轉倒せしめたり。

【三一】如彼色聲聞智者自息意。譯じ難し。

【三二】人。宋元明三本には彼に作る。

【三三】以下、上の總叙を細說す。先づ大慈修行につきて述ぶるなり。

【三四】無明(Avidyā)。一切法の理に於て、明かならざるを云ふ。

【三五】大慈。佛の廣大なる慈悲なり、與樂を慈と云ひ、拔苦を悲とす。

【三六】陰(Skandha)。色聲等の有爲法を云ふ。

【三七】因病。宋元二本に困病

無明を、皆有明に至らしめ、能く無明を除く有ること無き者に、有明の智慧の、修行する所を現ぜんと欲す。其の所覺者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、[二五]大慈を行ず。』世間を愍むが故に、道に發趣す。皆是れ愛著なり、亦自ら力勢に任へず。其の所覺者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生、色の所縛と爲り、欲愛の縛著と爲りて、能く色を解する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生、[二六]陰の怨憎二念に相撃縛せられて、能く此を覺ること有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生、苦の重擔の爲めに、苦の害する所と爲り、能く此の苦擔を度する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く、菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を發す。』衆生の類、常に恐懼を懷き、百苦并び至りて、能く其の恐畏を除く者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、飢饉に遭遇して、渇愛厭くことなく、能く此の飢饉を脱する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、[二七]因病の爲めに逼られ、一病動きて、百病增し、能く此の病を脱する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、生老病死、常に自ら身を追ひ、而も之を厭患するも、能く此の生老病死を脱し、[二八]無爲に至らしむる者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』衆生の類、衆事總猥にして、[二九]有常の想に著し、能く此の總猥を除く者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時、衆生の類に於て、大慈を起す。』若は衆生の類、爲す所の事辦ぜず、志性荒亂して、能く其の事を究竟する者有ること無し。其の智者を除く。是の如く菩薩觀察して、是の時衆生の類に於て、大慈を起す』。衆生の類、少味に貪著して、衆苦を經歷し、能く此の

【七】　三昧(Samādhi)。定、等持と譯す、心を一處に專注して不動ならしむること。
【八】　金剛智慧。智慧の堅利なること金剛の如きに云ふ。佛智に名く。
【九】　調戲。嘲戲なり。あざ笑ひ戲れること。
【一〇】　眞諦(Paramārthasatya)。俗諦に對す。第一義諦勝義諦等と云ふ。虚妄を離れたる眞實の理なり。
【一一】　意垢。無明煩惱。
【一二】　慈孝父母故。この一節、或は脱字あり、或は文句の轉倒あるべく、意義の通徹せざる所あり。
【一三】　誓願。諸佛菩薩には、總別の誓願あり。總願とは、四弘誓願（衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成）を云ひ、別願とは、彌陀の四十八願の如きを言ふ。
【一四】　聞饒。多聞なり。
【一五】　解脱(Mokṣa)。繋縛を離れて自在を得ること。
【一六】　袈裟(Kaṣāya)。比丘の衣服にして、これに大中小の三種あり。色は正色を避けて、赤黑色なるを以て通途とせり。
【一七】　行者。行苦の誤にても

先師の故迹に非さらん乎。

法和、對共校定とあり。以て像すべし。出三藏記集第十に此の序を出して、未詳作者と云ふは、未だ之を究めざるなり。同集また此の經の後記を出して、沙門道安、朝賢趙文業の爲めに、法の傳を贊す。また未詳作者と爲すも、恐らくは竺法和の記なるべし。

僧伽羅刹[一]比丘所集佛行[二]首

*一、菩薩行（總叙）

[三]爾の時、[四]菩薩[五]始めて行ずる時、世間を愍むが故に、道に發趣す。彼出家するが故に、[六]忍を行ず、相應せざるが故に、心[七]三昧なり。無知を斷ずるが故に、[八]金剛智慧を行ず。[九]調戲を除捨し、[一〇]眞諦を行ずるが故に、[一一]意垢を除棄す。直行の爲めの故に、苦行を爲す。[一二]父母に慈孝なるが故に、心堅牢固にして、[一三]誓願を捨てず。離欲の故に、[一四]聞饒を爲す。已に報恩を念ず。[一五]解脫を求むるが故に、[一六]袈裟を著す。應に林間に息住すべきを欲するが故に、[一七]行者を觀ぜず。知親を求むるが故に、[一八]己の身縛を知る。口に欺くこと無きを行ずるが故に、[一九]一に苦本を切る。意に所念なし、有を捨てざるが故に。[二〇]

自ら覺して[二一]人を覺し、一切自相に同じくす。[二二]如、彼の色聲を聞けば、智者自ら意を息む。最勝、萌類を愍んで、皆彼の道場に至ら（しむ）。起る者盡く滅度するは、是、世の最妙の義なり。

二、大慈修行

[二三]最初の發意を菩薩と名くるは、是の如きの衆行ありて、[二四]無明の諸覆蓋を消滅すればなり。一切の

出三藏記集第十四、梁高僧傳第一跋澄の傳の中に、安公、

【一八】 裏容。裏容仲、兵を起して、符堅に叛き、關中擾動せるを云ふ。

【一】 比丘（Bhikṣu）。乞士と譯す。衣食住を社會に仰ぐを以てなり。後世、出家して具足戒を受けたるものの通稱となれり。宋元明三本にはなし。

【二】 宋元明三本には首の字を經第一卷とせり。

＊ 此の見出しは、全經を通じて、譯者の假に挿入せるものにして、原本には無し。

【三】 菩薩の本生修行の總叙なり。

【四】 菩薩（Bodhisattva）。道心衆生、大覺有情と意譯す。佛果を求むる大乘の修行者なり。

【五】 始行時。以下の叙述に準ずるに、行と時との間に脫字あるが如し、大慈の二字ありしならんか。

【六】 忍（Kṣānti）。二忍三忍等、種種の經論の所說、多少內容を異にすれど、總じて云へば、種種の苦に耐へて瞋らず、無生の法に安住するを云ふ。

[一]僧伽羅刹所集經

卷の上幷序

符秦　[二]罽賓三藏　[三]僧伽跋澄等譯

僧伽羅刹は[四]須賴國の人也。佛世を去りたまひて後七百年、此の國に生れ、出家學道し、諸邦に遊教して、[五]犍陀越土に至る。[六]甄陀罽膩王これを師とす。高明世に絕し、述作する所多し。此の土の[七]修行大道地經は其の集むる所也。又此の經を著はして、世尊を憲章す。始めて成道したまひて自り、淪虛に迄び、行は巨細無く、必ず事に因りて而して演べ、遊化と夏坐と曲備せざる莫し。[八]普曜・[九]本行・度世の諸經、佛の起居を載せて至りて密爲りと謂ふと雖も、今斯の經を覽るに、悟る所復多し。傳ふらく、其の將に終らんとするや、「我、若、立根得力の大士たること、誠に虛ならずば、斯の樹の下に立ち、手に其の葉を援りて而して此の身を棄てんに、[一〇]那羅延の力、大象の勢をして、能く余を移すこと、毛髮の如きだも無らしめん。正に[一一]耶維に就かしむとも、當に此の葉を燋さざるべし。」[一二]言つて然る後、便卽、立ちながら終る。罽膩王自ら臨みて、而も動かすこと能はず。遂に巨絙の象を以て挽けども、未だ始て搖かす能はず。卽耶維に就くに、葉を炎せども、傷かず。尋いで[一三]兜術に昇り、[一四]彌勒大士と、彼の宮に高談し、將に佛處に補して、[一五]賢劫の第八たらんとす。建元二十年を以て、罽賓沙門僧伽跋澄、此の經本を齎して、長安に來詣す。武威の太守趙文業、請うて出さしむ。佛念譯を爲し、曇嵩筆受す。正に[一六]慕容の難を近郊に作すに値ふ。然れども、譯出[一七]襄らず、[一八]余、法和と對檢して、之を定む。十一月三十日、乃ち了る。此の年、中阿含六十卷・增一阿含四十六卷を出す。伐鼓擊柝の中に、而も斯の一百餘卷を出す。窮通其の恬を改めざるは、詎んぞ、

【一】僧伽羅刹(Saṁgharakṣa)。衆護と譯す。
【二】罽賓(Kipin or Kophene or Kubhā)。現今のカブール邊。
【三】僧伽跋澄(Saṁghabhūti)。衆現と譯す。
【四】須賴國。又、須賴拏に作らる。シーラセーナ(Śūrasena)、或はスラーシトラ(Surāṣṭra)ならん。
【五】犍陀越土(Gandha-vati?)ガンダーラのこと。
【六】甄陀罽膩王(Candāna Kaniṣka)。
【七】修行大道地經(Yogācārya-mahābhūmi-sūtra)。
【八】普曜(Lalitavistara)。
【九】本行(Pūrva-cārya)。
【一〇】那羅延(Nārāyaṇa)。天の力士なり。
【一一】耶維(Jhāpeta(p.))の音譯、荼毘に同じ。
【一二】言然之後。或は言了然之後の了を脫せるか。
【一三】兜術(Tuṣita)。知足天なり。
【一四】彌勒大士(Maitreya-bodhisattva)。
【一五】賢劫(Bhadra-kalpa)。現在時なり。
【一六】不襄。襄は讓に通用せるものなるべく、拒辭せざる意なり。
【一七】余。彌天の道安なり。

下に國譯せるを修正し、然して後、短篇なるに關はらず、數日に亙りて、難解の個所を共同研究し、相當の苦心を費したのである。然し古譯に關する一般の研究が、まだ頗る閑却せられて居るので、他に示唆を得ること少く、爲に未だその意義の通徹を得ぬ部分がある。不十分なる點は、大方の示教を得て、他日修正する時あらんを期するのである。

昭和六年一月四日

譯者　常盤大定識

提は西出して、行く所を知らずといひ、更にその次に、

僧伽羅刹集經三卷 建元二十年十一月三十日出

晋の孝武帝の世、罽賓の三藏法師僧伽跋澄、舊婆羅門の梵本を誦して、甚だ熟利なり。曇摩難提が先に錄して梵文と爲せるを、佛圖羅刹傳譯し、沙門慧嵩・沙門智敏・秘書郎趙文業、筆受して秦言と爲すと言つて居る。

「大唐内典錄」は第三の中に、全くそのまゝに之を襲用し、更に第七卷の中には

僧伽羅刹集 三卷八十四紙 前秦沙門曇摩難提譯

といひて、跋澄譯を揭げて居らぬ。難提譯を三卷とし、八十四紙と紙數までも數へて居る以上は、當時現存して居たものとせねばならぬ。

然るに「開元釋敎目錄」には、第三卷の中に、僧伽跋澄譯の條に、

僧伽羅刹所集經三卷 或云僧伽羅刹集、初出、或五卷、建元二十年出、十一月三十日訖、佛念傳譯、慧嵩筆受。見僧祐錄、於長安石羊寺出、亦云佛護傳譯

といひ、他の二部と併せて、三部二十七卷共本幷在と斷じ、次に曇摩難提の條に、

僧伽羅刹集二卷 佛去世後七百年、僧伽羅刹造、初出、見寶唱錄

といひ、他の三部と併せて、前四部一百一十三卷闕本と斷じて居る。「開元錄」は、佛圖羅刹を以て、佛護として居るが、恐らく佛念であらう。

是に於て、集二卷と所集經三卷とは、同本異譯なりや、異本なりや、或は果して集二卷がありしや如何の問題が起る。「開元錄」が兩者に初出として居るのは、之を異本とするものであり、更に「内典錄」は集三卷の現存を傳へて居るが、この難提譯の集二卷を如何に考へてよいか。蓋、是等の目錄には一長一短があつて、その記事をそのまゝに受け入れる事が出來ぬ。元來、難提譯の集二卷なるものは、「三寶記」に初めて出で、「三寶記」は「寶唱錄」に據つたものである。寶唱錄は現存せぬから、之についていふ事は出來ぬが、三寶記の記事は、恐らくは唱錄に依準したものであらう。之を熟讀して見るに、跋澄譯の所集經三卷なるものは、難提が口誦し、佛念が之を梵文と爲せるを、更に跋澄が口誦して、佛念が傳譯したものであつて、もと〱集といふも所集經といふも、同じものであつたのである。「内典錄」が三寶記のまゝを襲用した所に、何の誤もないが、後に難提譯の集のみ見存すといつて居るのが、誤りの初である。而も前に二卷とせるものを、こゝには三卷として居る矛盾に、自ら氣付かない。「開元錄」はまた之に迷はされて、兩者を異本と見たのである。蓋、集二卷とは梵本であり、所集經三卷とは、その飜譯であつたと見るべきであらう。

附　言

本經の國譯については、文學士龍池淸君の手を煩はした事を、こゝに附言して謝意を表する。當初君の周到なる注意の

盡を存して、遂に留連するに至り、二十一年二月九日に至りて方に訖る、と言つて居る事にても、保證せらるゝのである。この後序の作者も、未詳とせられて居るが、最後に余既に衆末に預る、聊か卷後に記して、釋趙の爲法の至を知らしむと言へるにて、法和の作なる事が知られのである。後序中の佛圖羅刹とは、竺佛念の梵名であるだらう。

されば本經は、僧伽跋澄の口誦、佛念の譯傳、曇嵩の筆受であつたが、跋澄や佛念は秦言に精しからぬと、近郊に難ありしとの爲に、頗る難解の譯となつたので、道安と法和とが、後に之を研究修正したものである。後序に每に妙盡を有すと言つて居るが、然し猶未だ難解の域を脫せなんだのである。

建元二十年に曇摩難提の譯出せる、「中阿含」・「增一阿含」は、本經と同じく、竺佛念の傳譯、曇嵩の筆受で、而して道安・法和の對校に成つたものであるが、「高僧傳」の僧伽提婆(Saṅghadeva)の傳に、

初僧伽跋澄出婆須蜜、及曇摩難提所出二阿含毘曇廣說三法度等凡百餘萬言。屬二慕容之難一、戎敵紛擾、兼譯人造次未二善詳悉一、義旨句味、往往不レ盡。(中略)後山東淸平、提婆乃與二冀州沙門法和一俱適二洛陽一四五年間、研二講前經一。居レ華稍積、博明二漢語一方知二先所出經、多有二乖失一。

とあるのを見れば、道安・法和の研覈に依つても、每に妙盡を存する域に入ることが出來なかつたのみならず、更に難提の硏講によつても、現存經の程度にしか達せなんだ事を知らしめられる。

要之、本經の難解なる理由は、一は外來僧の漢語に通ぜず、譯出の人亦梵語に明かならざる等、飜譯の準備に缺くる所があつたことゝ、他は、適々近郊に慕容沖の叛亂が起つた爲に、關內が擾然として居て、譯出に專念なることを得なかつたことゝに由るのである。然し、かくの如き外患あるに拘はらず、本經を始め二阿含・婆須蜜菩薩所集論の如き、大部の飜譯が、踵を接して成つたことは、譯場に參した人々の不惜身命の熱情を證して餘りあるものである。

さて、隋の「歷代三寶記」は、第八の中に、本經の外に僧伽羅刹集二卷があつた事を傳へて居るが、これは如何なるものであらうか。之について、一應の研究を爲す必要がある。卽ち「三寶記」は、初に

僧伽羅刹集二卷（佛滅後七百年、僧伽羅刹造、見寶唱錄）

晋の孝武帝の世に、兜佉勒國の三藏法師曇摩難提が、建元の初を以て長安に至り、四阿含の梵本を誦して口授し、竺佛念が寫して梵文を爲し、二十年に至つて苻主の爲に譯して、五十九卷と作したが、時に慕容沖及び姚萇が反亂するに及びて、關內危阻にして、未だ委悉を過ぎず、難

昧經」を譯した弘始四年（西暦四〇二）より十八年前に當る。羅什以前を、古譯時代と稱するならば、本經はその末期に屬し、中に、十二因緣中の觸を更樂とし、五塵の觸を細滑とし、四念處を四意止とし、受を痛とするが如き特有の譯語を有する。是等の中に於て、細滑や痛やは、羅什譯の「坐禪三昧經」にも用ひられて居るが、然し羅什以後になれば、法相が明了となり、その語の內容が判明して來るから、了解し易くなるけれど、本經に於て、突然として現はれて來る是等の譯語に對すれば、更樂や細滑やは、果して嚴密に觸に該當するや否や、頗る覺束ないのである。本經を了解せんには、古譯の全般に亘りて、當時の譯風や譯語を整理して、而して後にせねばならぬ事となる。この譯語の古風も、また本經を難解ならしむる一原因である。これを、前二者に比すれば、その程度が低いけれども、然しこれを一言して置く必要はあると思ふ。

七、本經の譯者及譯時

本經は、罽賓（Kipin or Kaphene）の沙門なる僧伽跋澄（Saṁghabhūti、衆現）が、苻秦の建元二十年（西曆三八四）に、長安に於て譯出せるものである。僧伽跋澄は、三藏を備習し、特に禪に優れ、阿毘曇・毘婆沙を誦してゐたと傳へられてゐる。彼が關中に入つたのは、建元十七年であつた。時に苻秦の祕書郞趙正は、西域に阿毘曇・毘婆沙の硏究が盛んで、跋澄が之を諷誦せるを聞き、請うて譯經に從事せしめたのが、建元十九年である。翌建元二十年に「婆須蜜菩薩所集論」が譯せられ、同年十一月三十日に、本經の譯出が成つたのである。本經の序には、建元二十年に、僧伽跋澄が、此經本を齎して、長安に來詣したので、武威太守趙文業の發願により、竺佛念が譯をなし、慧嵩が筆受した、正に慕容が難を近郊に作すに値ふも、然も譯出して襄らず、余と法和と、對檢してこれを定め、十一月三十日にすなはち了ると言ひ、更に此年に中阿含六十卷、增一阿含四十六卷を出した、伐鼓擊柝の中に、この一百餘卷を出して、窮通にその恬を改めざるは、詎ぞ先師の故迹に非ざらんやと言つて居る。此序文の作者を、「出三藏記集」には、未詳として居るけれど、道安作の「增一阿含」の序に、趙文業の發願、佛念の譯傳、曇嵩の筆受に次ぎて、余と法和と共に之を考正すと言つて居るに徵して、道安である事を知らしむる。然らばその先師といふのは、佛圖澄であらねばならぬ。此事は、「出三藏記集」の中に保存せらるゝ本經の後序に、僧伽跋澄が、長安石羊寺に於て、本經及び毘婆沙を口誦し、佛圖羅刹が飜譯したが、秦言に未だ精しからぬので、沙門釋道安・朝賢趙文業が、理趣を硏覈し、每に妙

便告耆婆、見已便作是語、汝不活我耶。
五、是時王須臾間。
十、顏色端政無比、出人之上、花果茂盛、亦無衆塵。
十二、三部具足、猶蜂王音響不善生。
十一、於彼園觀、比丘僧前後圍繞。
七、遠來欲見如來。
二十、見已數數顧視耆婆、告耆婆曰、處其中者、爲是何物、時耆婆奏彼王言、此名肉髻、時王復問、此自然耶、爲非自然、耆婆白王言、行果所種、非今所造、王報言、復以何果成於菩薩、於本所生、於本受胎、本所造行、本所造身、廣說如契經、時王便說是頌。

猶彼日明光、或有若干種、頂髻無有上、況復及餘相、顏貌已和悅、能仁無怯弱、已出此光明、照徹十方刹。

十三、時王便至佛所、(佛—削除) 告耆婆曰。
十七、云何當作是說。
十六、耆婆白王言。
十八、於是天王能降伏憍慢者、便得豪貴處、憍慢者、便生卑處、是時王便自息。
廿一、思惟是言、便作是語、此是福田我當行此業耶。
十五、如我豪尊、云何當向彼禮拜、彼無服飾、我今著王服天冠。
十四、彼人雖端正心、以休息、衆相具足、無有醜陋、彼相甚微妙、猶如山不可移動。
十九、便往至門、生歡喜心、衣毛皆竪、以出要心故、無欲之相、頭面禮世尊足、便作是說、猶如世尊、有如是色、心意得正、皆悉成就。
廿二、佛及比丘僧、使我優陀耶波陀維太子、亦復如是、便問是義、歡喜如是

一二

語、亦說此偈、

如海無有邊、風吹水則動、聖尊不可移、今觀人中上、帝釋來拜手、及諸梵天衆、我今當尊敬、自歸命世尊。

本經中の肉髻に關する問答は、他の經に無いから、どこに挿入してよいか分らぬし、又、あまりに斷片的で、他との連絡に都合の惡いものもあるが、大體に於て、上に加へた數字の如くに見て行けば、趣意が一貫する。若し是等が錯簡によつて玆に至つたものとすれば、その程度の甚しきに驚かさるゝのである。然し又これが錯簡で無く、當初より斯るものであつたとすれば、吾人はその飜譯の生硬なるに、更に大なる驚きを感ぜしめらるゝのである。

八、古譯特有の譯語あること

僧伽跋澄が本經を譯したのは、苻秦の建元二十年(西曆三八四)で、羅什が「坐禪三

があり、三句なるがあつて、若し之を第二段に對照するにあらねば、いづこで切れるやらも判斷しがたいものである。恐らくは概ね四字一句の二句づゝあつたものが、誤脫に誤脫を累ねて、遂に現形を取るに至つたものであらう。斯くて錯簡か又は誤脫があるので、この短文の間にも、不親行者や、知已身縛や、一切苦本や、意無所念不捨有故やの語句に、意義の明瞭を闕くものがある。

第三、他の經典との比較によつて、本經の錯簡を知り得る場合は、第六十章の阿闍世王歸佛の段の如きが、其の適例である。同王歸佛の物語は、その事自身が人性の機微を寫し出した悲劇であると云ふばかりではなく、同時に、佛陀に對する唯一の反逆者であつた調達と關係してゐる爲に、特に經典中の重要な主題となり、後世大乘的な色彩を帶びるに至つたのであるが、その原形は、「長阿含」の沙門果經や異譯寂志果經に保存せられてゐる。その大要は、月明の夜に當り、阿闍世王は諸臣を顧みて、此夜に於て何を爲すべきかを問ひ、六人の臣は、各々その事ふる所の師に至るべきを勸めた。其師といふのは、六師である。皆王の意に稱はぬ。耆婆、獨り默然たるを以て、王は之に尋ぬれば、耆婆は偏へに釋尊に至るべきを勸めたので、王は初めて象に乘りて、耆婆と共に釋尊に至らんとし、その途上、戰々競々として畏るゝ所あり、屢々耆婆を顧みて、危難なきやを問ひ、辛くも釋尊の在す森林に至り、千二百五十の弟子のこゝにあつて、端然として靜坐するを見て、初めて靜寂なる所以を知り、釋尊の善來大王と言へるに感激し、父を殺せる罪を懺悔し、その子優陀耶を出家せしむる事としたといふのである。本經の物語も、それ等と大同であるから、對照するに好都合である。左に本經の原文を掲ぐる如く、其の叙述に前後があり錯誤があつて、到底一貫した事實を知り難いのであるが、前記の諸書を參考して、其の順序を轉倒し、上部の數字に從つて訓讀すれば、大いに解し易くなる事を發見するのである。

二、是時王、猶如月虛空、無有衆塵、息心事皆辦。七神仙皆爲瓔珞、亦無有塵垢。星自瓔珞、猶如伊羅鉢所至處、雲隨其後、種種瓔珞、莊嚴其身、於彼聞已。

四、猶彼神象遊行、珍寶亦無狐疑、四部之兵、人民自圍遶、於彼象上擧火、象鼻攝持。

一、爾時世尊在羅閱祇城。

三、欲得見如來、便往至世尊所。

九、是時世尊、見王斯須出頃、無數衆圍繞。

六、王便作是念。

八、從遠來、我宜當自護、便生是念已、

第二段の詳説の部分では、智慧[4]、審諦[5]、柔和[6]、慈孝[7]、菩薩道[1]、布施、持戒、精進、忍辱[2]、三昧[3]、堅固心[8]、多聞[9]、(下略)として居る。

第二段を總叙に比較して見ると、冒頭に置かるべき菩薩道以下三昧までの部分が、誤つて柔和(總叙の苦行)、慈孝と堅固心(總叙の心牢固)との間に挿入せられた。又は三昧の次に來るべき智慧乃至審諦が、菩薩道の前に置かれたのである。されば、之を總叙の順序に從つて改めれば、

菩薩道、布施、持戒、精進、忍辱、三昧、智慧、審諦、柔和、堅固心、多聞、(下略)

とならねばならぬ。この順序に從へば、先づ菩薩道章に於て大慈を敍し、以下六波羅蜜を説くことになつて、敍述の形式が整備せられるのである。宋元明の三本には、今訂正したやうな順序になつてゐるので、麗本の誤謬なることが、益〻明白となるのである。

第二、同時に、又、第二段に對照する事によつて、總序の中に大なる誤脱が存する事を氣付かしめられる。即ち總序には、菩薩が世間を愍れむ(大慈)が爲に道に發趣す(菩薩行)といひて、直に忍・三昧・智慧に移つて居るが、第二段から推す時は、忍の前に、當然施・戒・進の三波羅蜜が無ければならぬのであるから、こゝに大なる誤脱のある事を決定してよい。猶、短いこの總序は、之を第二段に對校しても、意義の通ぜぬ部分があるがそは必ず錯簡か誤脱の爲であらうと思ふ。試みに、之を解剖すれば、左の如くである。

爾時菩薩始行時、愍世間故、發趣於道。

(こゝに施・戒・進を脱す)

彼出家故、行レ忍。

不ニ相應一故、心三昧。

斷ニ無知一故、行ニ金剛智慧一。

除ニ棄調戲一、行ニ眞諦一故、除ニ棄意垢一。—第二段の行諦に當る。

爲ニ直行一故、爲ニ苦行一。—第二段の行柔和に當る。

慈ニ孝父母一。

心堅牢固、不レ捨ニ誓願一。

離レ欲故、爲ニ聞饒一。—第二段の多聞に當る。

已念ニ報恩一。—第二段の行恩に當る。

求ニ解脱一故、著ニ袈裟一。

欲レ應ニ息ニ住林間一故不レ觀ニ行者一。—第二段の樂閑居に當る。

求ニ知親一故、知ニ己身縛一。—第二段の親友之心に當る。

口行ニ無欺一故、一切ニ苦本一。—第二段の行悲に當るべきであるが、適當には配當せられぬ。

意無ニ所念一、不レ捨レ有故。

以上の如く、一句なるがあり、二句なる

譯者が晋語に通ぜず、此方の佛者は梵語に達せず、爲にその意義する所を適當に表現するを得ず。これによつて、譯文が生硬なること、二には錯簡誤落が甚しくして、今日に於ては、到底譯時のまゝのものに還元するを得ざること、三には古譯特有の譯語があつて、その語に如何なる內容を與へてよいか分らぬこと、以上の三點に歸するのである。左にその各各について、簡單に說明する事とする。

イ、譯文の生硬なること

譯文の生硬なるが爲に、全經を通じて難解であるが、特に第七十七章の如きは、その適例である。此の章は、世尊が一切世間は草木の如しと觀ぜられたことについて述べてゐるのであるから、假りに世間虛假と云ふ章名を附して置いた。卽、外の草木は、種より生じ、水に漬られ、火に煮られ、風に吹かれ、その風の吹くに隨ひて來往するのである。內の衆生も亦然り。身風の觸る所、耳に聞があつて識知する。それを細滑といふのである。外の草木が、同一根より生じて、種々の色を呈し、若干の實を結び、秋になれば、果實が墮つる如く、生死の樹も、亦身を本とし、根を枝葉となし、識に依つて若干の果(六色)を攝するのである。外が無常苦空無我なるが如く、衆生も亦然り。木種を滅ぼす時は木生じ、身心も法に依つて往來周旋する。壽・煖・命・識、皆是の如く終止あることとなしと云ふのであるが、詳細にその意義を捕促しがたいから、徹底的には理解することが出來ないのである。第七十一章の四無畏の前半も訓讀し難く、第二十九章の聖道にも、不可解の點が少くない。其等の箇所は、何れも、下註に本文を引用して置いた。古譯研究が進んだなら、その幾分は理解せらるゝ時期が到來するだらうと思ふ。

ロ、錯簡誤落があること、

本經の訓讀し難い所以の一大原因は、錯簡誤落の少からざる爲であらう。然しこれを決定せんが爲には、比較考證すべき多くの文獻を具備せねばならぬので、全體に亙りて之を整理する事が出來ぬ。中に於て、多少とも參照すべき手掛のある三箇所を例證して見やう。この三箇所の整理によつて、本經が如何に錯誤に滿ちてゐるかが判り、これには何人も一驚を喫するであらうと思ふ。

第一、大正藏經の底本たる麗本には、冒頭の菩薩行に先づ大なる錯簡がある。この菩薩行には、概說と詳說の二段があるので、之を決定する事が出來る。先づ兩者中に說かれてゐる德目を、順序に從つて擧げて對照すれば、次の如くである。

總叙には、[1]菩薩道、[2]忍、[3]三昧、[4]智慧、[5]眞諦、[6]苦行、[7]慈孝、[8]心牢固、[9]聞饒（下略）として居り、

供養し廣布すべしと聞きて、大いに驚き、比丘の勸めに依りて、八日八關齋を受け、羅閱城に於て佛舍利を得んとして、金劵を得た。それに、童子が土を供養する圖が現はれて居り、その中に佛陀が阿育王の出世を懸記せられたる文があつたと、本經は述べてゐるが、これは他本には無く、全く本經獨特の叙述である。金劵の懸記とは、「阿育王傳」等に揭げらるゝ、毘闍耶に對する佛の豫言に外ならぬだらう。

五、本經の特色

斯の如き性質の佛傳であるに關はらず、本經の最も著しき特色は、第七十十章に佛陀の四十五年說法地を盡く擧げて居ることで、著者が十五年前に於て、「釋迦牟尼傳」の中に於て、既に指摘せる所である。僧伽羅刹が、如何なる材料によりて蒐集探錄したのであるかは、之を決定することが出來ないが、兎に角かくの如き試は、全く他經典に類を見ないことであつて、特筆大書して置く必要がある。本經に舉げらるゝ四十五年の說法地は、左の如くである。

第一年、波羅奈國（Bārāṇasī）に於て初めて法輪を轉じ、摩竭國（Magadha）王を益す。
第二年、靈鷲（Gijjhakūṭa）山頂に於て、
第三年、同處、
第四年、同處、
第五年、毘舒離（Vesāli）
第六年、母の爲めに、摩拘羅（白善）山（Makula）に於て、
第七年、三十三天に於て、
第八年、鬼神界に於て、
第九年、拘苦毘國（Kosambi）に於て、
第十年、枝提山中に於て、
第十一年、鬼神界に於て、
第十二年、摩迦陀（Magadha）閑居處に於て、
第十三年、鬼神界に於て、
第十四年、舍衞國（Sāvatthi）祇樹給孤獨園に於て、
第十五年、迦維羅衞國（Kapilavatthu）釋種村中に於て、
第十六年、迦維羅衞國に於て、
第十七年、羅閱城（Rājagaha）に於て、
第十八年、羅閱城に於て、
第十九年、柘梨（Cāliya）山中に於て、
第二十年、羅閱城に夏坐す。
自第二十一年、——至第二十四年、四年間、柘梨山中に還り、鬼神界に於て夏坐す。
自第二十五年——至四十三年、十九年間、舍衞國に夏坐し、餘處を經歷せず。
第四十四年——最後に跋祇（Vajji）境界毘將村中に於て、

この特色は、事實としての佛傳に粗漏なる點を、多分に補足し得るものであると思ふ。

六、本經の難解なる理由

本經は、古譯なるが爲に、實に難解である。卒讀して意義通ぜず、三讀して尙通徹せざる箇所が、二三にして止らない。訓讀しても、意義の捕捉し難い處、或は訓讀すら出來ない處も、往々にしてある。しかく難解である所以は、一には

た事柄であるから、便宜佛身相の一章にまとめた。其の中、遊歩・行迹・微笑・衣服・乞求・臥床等は、嚴密には佛身の相好でないが、便宜上これも含ませた。然しこれ等を除いて、直接に佛身に關係した部分に於ても、所謂三十二相とは稍異つたものを含んでゐる。即第十六項の臚脾相と第十七項の蹲腸相とは、三十二相八十隨好にも含まれてゐないものである。「無量義經」の第三十二相に鹿臑腸と云ふのがあるが、これが蹲腸相である。一見して明瞭なる如く、之を佛傳としての立場より見る時は、如何にも亂雜で、首尾一貫せる組織もなく、其點に於て、他の佛傳に比すべくもない。最初の降神下生・瑞應五夢・剃髮坐場・成等正覺と、最後の舍利弗入滅以後は之を可とするも、佛陀が最初に化度せる五比丘の物語が、阿闍世王歸佛の後に在るが如きは、如何。而して第三十八章の佛身の相好と、第四十三章より第五十一章に至る各種の譬喩とは、各々能く纏められて居るが、是等の中に、佛陀の事跡と、其の覺悟の內容とが隱顯して居り、如何にも經名の所集經たるに似つかはしい感じがする。要するに所集であつて、體系を與へたものが無い。斯くて佛傳といふ見地よりする時は、僧伽羅刹と同時代と推定せられる馬鳴の大著「佛所行讚」が、年代に隨ひ、事迹を逐うて、如何にも整然と佛傳を叙述してゐるのとは、大いにその體裁を異にする。思ふに、本經は事實に卽して佛陀を觀察すると云ふのが、その趣意ではなくして、佛陀のあらゆる美點を擧げて嘆譽するのが、主眼であつたが爲に、事實に卽して按配することに無關心であつたのであらう。然し方面をかへて、佛身觀の發達を見る見地よりすれば、極めてよき資料である。斯の如き佛身觀が、次第に進展して、遂に方便示現としての大乘佛傳を成すに至つたのである。

八、阿育王傳について

阿育王の傳記は、古くは「雜阿含經」第二十三卷にあり、又「阿育王經」、「阿育王傳」ありて、三本とも頗る詳細にその事蹟を傳へてゐる。本經の王傳は、是等に比して頗る簡略で、八萬四千の塔を起し、一日にして成るとのみ述べてゐる。然し王の出世の因緣に至つては、四本とも同一であるが、童子の名を異にし、金券云云の點に於て、異つた記事を爲して居る。即三本に於ては、闍耶 (Jaya)・毘闍耶 (Vijaya) の二童子が、沙上に在つて遊戲せる時、毘闍耶が佛陀に沙を供養せるその功德に依りて阿育王となり、佛舍利を供養し、佛教を弘布するに至つたと云ひ、本經にあつては、二童子を脾闍耶蜜多羅・波修達多なりとし、前者の父を波羅蜜多羅とし、後者の父を波修波陀羅と云つてゐる。又、阿育王が、夢の告に佛舍利を

は、正しく菩薩行を貫く大精神である。本經が菩薩行の最初に大慈修行を力說して、次に六波羅蜜の修行に說き至る所以は、かゝる點に考慮を拂つた爲で無ければならぬ。

六波羅蜜の修行に次いで、審諦・柔和・慈孝・堅固心・多聞・慈恩・著袈裟・閑居・慈心・悲心の種々の修行が說かれてゐるが、此等の德目は、阿含の經典に於て、隨所に散見するのであつて、その中には慈孝・慈恩の如き、世間道德的なものもあれば、著袈裟・閑居の如き出世間道德的なものもある。而も慈孝・慈恩は、慈悲喜護の四無量心を內容とする慈心・悲心と合して、之を六波羅蜜中の布施に含ましめる事が出來やうし、著袈裟・閑居は、持戒の中に含めて然るべく、柔和は忍辱に屬せしめる事が出來るし、堅固心は精進又は禪定に屬せしめて然るべく、多聞・審諦は智慧の一方面を成すに過ぎない。斯くて本經に見らるゝ如き種々の德目が、次第に六波羅蜜の組織中にまとめられたものと見るべきである。

本經は、此等の敍述を爲す際に、適當なる本生譚を交へて、平板な臚列に終り、又は無味乾燥な理窟に陷るのを避けてゐる。例へば、忍辱修行の項に於ては、迦藍浮王に手脚を截斷せられても瞋らず、尙その國の人民を愍んだ忍辱仙人の話を述べ、審諦修行の條下に於ては、婆羅門との約を果して、身を惜まざりし須陀摩王の物語を敍してゐる如きが、それである。若し透徹せる飜譯であるならば、頗る觀るべきものであつたと思はれるが、羅什の如き大譯者以前のものとて、頗る生硬な、從つて難解なものと爲り終つたのは遺憾である。

ロ、佛傳について

本經は、先づ降神下生・瑞應五夢・剃髮坐場・成等正覺・無師獨悟を述べ、次に佛の覺悟せる十二因緣・三明六通・四無量心・十力・四無所畏を說き、辯才・說法・知他心智・解脫等の德目に及び、一轉して佛身の相好を表はし、更に佛陀が衆生の諸根・心・或は世間を覺悟し、その生死の泥塗を度せんがために出世せることを敍し、次いで佛陀を海・船・日等の比喩を以て嘆じ、その敎法を法雨なり法城なりと云つてゐる。而して此等の諸德による、鴦崛鬘及び鬼神の化度や、阿闍世王の歸佛や、闍提蘇尼梵志及び五比丘の濟度やを述べ、其の間に提婆達兜の背佛を敍し、更に苦諦・四法印を明し、鉢摩迦比丘の持戒を述べ、衆寶功德・獅子吼說法・七覺支・四無所畏を論じ、大迦葉の得度と舍利弗の入滅とを說いて、後に佛の入涅槃に及び、最後に遺敎を述べ、四十五年の說法所を並べ擧げてゐる。

是等の中に於て、第三十八章の首相より臥床に至る二十六項は、佛身に關係し

の各項目について詳細に叙述し、最後に總結を以て終つてゐる。其の三段の中、最初の總叙には、約十二の德目が數へられるが、文に錯誤があり、脱落があつて意義の通じない所がある。而してそれ等の項目は、何れも第二段に於て、詳細に述べられ、又總叙には缺けてゐて、而も重要な德目もあるから、總叙を後として、先づ第二段の思想について見る事とする。

第二段の中には、大慈に始り、布施・持戒・精進・忍辱・三昧・智慧・審諦・柔和・慈孝・堅固心・多聞・慈恩・著袈裟・閑居・慈心・悲心の十七項目が論述せられてゐるが、其の中の布施・持戒・精進・忍辱・三昧・智慧の六は、六波羅蜜(六度)である。後世、上求菩提下化衆生の菩薩行とし云へば、何人も先づ指を屈する六波羅蜜が、本經に取まとめて擧げられてゐると云ふことは、小乘より大乘への過渡期の菩薩行を表現してゐるのである。而も本經を通じて六波羅蜜と云ふ名目がないことは、その思想が未だ搖籃期にあつたと云ふことを示してゐると推せられる。本經の所々に散見する十力・四無所畏の如き、一々その內容を論じなくとも、その名目だけで概念が明かであるのとは異り、六波羅蜜は、其內容が次第に整備せられつゝあるに關はらず、未だ六波羅蜜てふ組織に依つて、菩薩行を整理するまでに至らなんだのであらう。さて此等の德目が、阿含部の聖典に於て、如何に取扱はれてゐるかといふに、「增一阿含經」第十六卷高幢品第二十四之三には、布施・修戒・忍辱・精進・三昧の諸目が並んで現はれて居り、同經第八卷安般品之二には、信・戒・聞・施・智慧、或は精進・持戒・三昧・智慧と見えて居る。又「中阿含經」第一卷城喩經第三卷には、信固・持戒・布施・多聞・智慧・堅固の諸德が擧げられて居り、「雜阿含經」第三十三卷には、戒・施・聞・空・慧を以て根本とすると見えて居る。卽此等の中には、六波羅蜜の思想が含まれては居るが、完全には揃つてゐないし、又それ以外の多聞・空等の名目が加つて居る。かゝる種々の材料から、佛敎思想の發展に伴ひ、常途の布施・持戒・忍辱・精進・禪定(三昧)・智慧の六波羅蜜の組織が形成せられたものであつて、本經の如きは、正にその過度期のものであつたらうと思はれる。

菩薩が、かくの如き六波羅蜜の修行をなす所以は、その大慈悲心に出づるのである。一切の衆生が、生老病死の苦を擔ひ、生々死々して苦より苦に出入するも、渇愛して厭く所なきが爲に、永遠にこの重擔を脫すること能はず、具さに衆苦を經歷するを愍みて、大慈を發し、道に發趣する菩薩に依つて、正に六波羅蜜の修行が成就せられるのであるから、大慈こそ

首尾一連に叙述せられてゐる。時に例外はあれど、概して長行に依つて一段の叙述をなし、偈文を以て之を歎擧すると云ふのが、本經の形式である。而も各段の間には關係があり、首尾を一貫して、一定のシステムがある。即、概括して次の三部分に分つことが出來る。第一段では菩薩行の如何なるものであるかを説明して、其の裡に釋尊の本生、菩薩としての修行を述べ、第二段では降神下生に始り、入涅槃に及ぶ降生の佛傳を叙し、第三段では、滅後唯一の事跡として、阿育王出世の因緣と其の事跡を描いてゐる。之を覩易からしめんが爲に、假りに科段を設け、見出しを附したのが、目次である。

本經の著者僧伽羅刹は、迦膩色迦王(Kaniṣka)　の師であつて、彼と馬鳴(Aśvaghoṣa)とは同時代の人であつた。從つて本經と馬鳴作の「佛所讃」(Mahākāvya Buddhacarita)とは、大體同時の作であると考へてよい。然るに「佛所讃」が、あくまで事實に立脚して、佛陀の生活を描き出さんとしてゐるのに對して、本經は、その點には意を用ひずして、菩薩行の闡明と佛陀の自覺の表現とに努めたのである。正に兩者は、對蹠の地位に立つもので、道安が序の中に、佛傳の詳細なものとしては、普曜や、本行や、度世やの諸經があるけれども、斯經を覽れば、また悟らしむる所が多いと言つて居るのは、その當を得て居る。若し「所行讃」を降生後の佛傳とすれば、本經は本生を主とする佛傳といふべきである。

四、本經の內容

本經は「僧伽羅刹所集經」と云ふ題名が示してゐる如く、僧伽羅刹が、蒐集編纂したものである。その材料が、阿含部の聖典中の處々に散見してゐる點から考へて、僧伽羅刹が、それ等を基本として、菩薩行と、佛傳と、阿育王傳に關するものを取捨選擇して、本經を成したといふべきである。從つて本經と阿含部の聖典とを比較すれば、其の三種のもの、就中菩薩行に關する思想の消長を、十分に觀察することが出來る。而して彼が西暦一世紀の人であると云ふことが略推定せられ、且つ又その時代が大乘思想の芽ばえんとしてゐる時代であると考へられてゐるから、本經に於ける菩薩思想の開展については、特に興味を感ずるのである。又逆に本經の思想內容が、小乘より大乘への過渡期のものであると見らるゝから、本經こそ、僧伽羅刹その人の思想を語るものと決定することが出來るのである。以下、菩薩行・佛傳・阿育王傳の三項に分つて、概説して見やう。

イ、菩薩行について

先づ冒頭に成菩薩行の總叙を置き、その中に菩薩修行の種々相々擧げ、次にそ

の關中出禪經序を見れば、羅什が西域の諸師の禪觀に關する說を編輯したものである。その中、僧伽羅叉(僧伽羅剎)の所說と稱せられるのは、治貪欲法門、治瞋恚法門、治愚癡法門の三門である。先づ治貪欲法門に於て、婬欲多き人は、我が身の足より髮に至るまで、悉く不淨なりと觀じ、次いで之を捨する淨觀をなすこと、初習より已習に至り、竟に久習に及べば、身體柔軟にして、白骨光を放ち、心靜住を得べしと說き、第二の治瞋恚法門に於て、瞋恚偏多なる者、慈心法門を習ひ、久しく行じて三昧を得れば、怨憎を捨てて親愛を得、大心清淨にして無量の衆生を同一心を以て見るを得んと云ひ、第三治愚癡法門に於て、愚癡偏多なる者は、十二因緣を觀じて、思惟法門を習行すべしと說いてゐる。此等の所說と、本經の思想とは、あまり關係が無いやうに考へられる。然し第二の治瞋恚法門の所說は、「修行道地經」の慈品の所說と大同であり、又「修行道地經」の分別相品の中には、情欲熾盛なる者は不淨觀を修し、愚癡多き者は、十二因緣を觀ずべしと述べてゐるから、此の點に於て、二經は關係があると思はれる。

要するに、彼の出世の時代、隨つて迦膩色迦大王の時代は、大乘小乘未分の時代であつた。小乘より大乘へ移らんとする時代であつた。前揭の「修行道地經」や、「坐禪三昧經」を參照して、本經を省察するに、旣に大乘思想が、著々と開展しつゝありしを察する事が出來る。彼は、本經に於て六波羅蜜てふ名目は擧げてないが、その思想を高調せる處、正にこの澎湃たる大乘運動の最尖端に立つ者であつたかの觀がある。「坐禪三昧經」や「修行道地經」に現れてゐる彼の思想が、未だ大乘的の色彩を帶びてゐないのは、經の性質によるものであらう。此等二經を通じて觀察すれば、彼は專ら修禪の人であつて、而してその終局觀は、兜率往生にあつたものと推せられる。

三、本經の性質及びその結構

本經は、佛傳の一種である。道安作の序の中に、「又、此經を著はして世尊を憲章す。成道を始めてより、論虛に迄ぶまで、行、巨細となく必ず事に因つて演べ、遊化夏坐曲に備はらざるなし。普曜・本行・度世の諸經に、佛の起居を載する、至つて密と爲すと謂ふと雖も、今、斯の經を覽るに、悟る所復多し」と言つて居る。佛傳の數甚だ多いが、各々その特色を有して居る中に於て、本經の佛傳は、一層特殊なものである。

本經の結構を見るに、三卷より成り、第一卷菩薩行の總叙に始り、第三卷阿育王興敎の事跡に至るまで、章節を分たず、品名を附せず、單に卷數を分つのみで、

くは、大王の佛典結集に對して、直接か間接かの影響を與へた事と察せられる。

僧伽羅刹の撰述には、本經の外に、「修行道地經」があり、猶、「坐禪三昧經」中に含まるゝ禪要三門があつて、是等は四回に渡つて漢譯せられた。第一回は、建和元年（西曆一四七）に洛陽に來た後漢の安世高によつて、「道地經」一卷が譯せられた。第二回は、西晋の竺法護によつて、太康五年（西曆二八四）に、「修行道地經」七卷が譯せられた。第三回は、本經である。第四回は後秦の羅什によつて、弘始四年（西曆四〇二）に、「坐禪三昧經」中のものとして譯せられた。さて、第一回の翻譯者たる安世高は、前揭の如く、建和元年（西曆一四七）に洛陽に來たのであるから、從つて僧伽羅刹は、その最下限が安世高と同時の人でなければならぬ。而も安世高が西域を離るる時には、既に「道地經」なる著作があつたのであるから、最大限度にまで彼の出世年代を後らせても、尙一世紀末を下らぬと推定してよい。然るに本經の序文に依れば、彼は甄陀罽膩王の師である。甄陀罽膩王とは、北方佛敎の大保護者たりし大月氏國王迦膩色迦である。王の年代は、まだ決定的の域に入らぬと思はるゝが、僧伽羅刹との關係から見れば、西曆第一世の王者であつたらしく思はれる。

二、僧伽羅刹の思想

その撰述を通して、彼の思想を摸索して見やう。これは、同時に彼の時代の佛敎思想を知るべき標準となるのである。「道地經」は、僧伽羅刹の著作の中では、最も早く支那に紹介されたものである。經の撰號には、僧伽羅刹を三藏とのみ云つて、特に敬語を用ひてないから、その出世は、恐らくは、安世高を左までに上らぬ人であると推せられる。從つてこの道地經を、僧伽羅刹の著とすることに誤はないと見てよい。本經は散種章、知五陰慧章、隨應相具章、五陰分別現止章、五種成敗章、神足行章、五十五觀章の七章から成つてゐるが、大乘的な思想に乏しく、所集經に比較すべき點が無い。「出三藏記集」第十卷所載道安の撰になる「道地經」の序に依れば、僧伽羅刹の著は一部二十七章の者で、安世高はその中の七章を選譯したのでなる。竺法護譯の「修行道地經」には、道地經の七章を含んでゐるが、その表現には、進步の跡が見える。而して修行道地經と本經とは、その敍述の形式に可成り似よつた所があるから、「修行道地經」を以て僧伽羅刹の著作なりとした方が、一見妥當のやうに考へられる。但、この「修行道地經」には三十章あり、後部の三章は、後世新に附加せられたるものらしい。

羅什譯の「坐禪三昧經」について、僧叡

僧伽羅刹所集經解題

一、本經の著者僧伽羅刹の時所

本經は、僧伽羅刹比丘所集佛行首と題せらるゝ如く、僧伽羅刹（又、僧伽羅又 Saṁgharakṣa衆護）の撰述である。本經に加へられて居る釋道安の序（道安作たる理由は譯者の下に讓る）によれば、彼は佛の世を去つて後七百年に、須賴國に生れ、出家學道して、諸邦に遊教し、揵陀越土に至つて、甄陀罽膩王の師となつた。高明世に絕して、述作する所多く、此土の修行大道地經は、その集むる所である。又此經を著はして世尊を憲章し、終らんとするに臨みて、一樹の下に立ち、手に其の葉を援つていふ、「我若し立根得力の大士たること、誠に虛しからずば、斯の樹下に立つて、此の身を棄てん。那羅延天の力、大象の勢を以てするも、我が身を動かすこと能はじ。また荼毘に就かしむるとも、此の葉を燋さざるべし」。かく云ひ了つて、立ちながらに命終したのであつた。然るに其の言に果して證があつて、罽膩王の威力を以てするも、遂に如何ともなし得なかつた。尋いで兜術天に昇り、彌勒大士と、彼宮に高談したと傳へられてゐる。これは、「尊婆須蜜菩薩所集論」の序文に、婆須蜜菩薩が兜術天に於て、彌妬路と、彌妬路刀利と、僧伽羅刹と、彼天宮に邂逅したと云ふ記述と類似してゐる。此後序にも、余と法和と、對校修飾すとあるが、本經の序や、「增一阿含」の序と對比する事によつて、これまた道安の作たる事を推せしむるのである。以上は、僧伽羅刹の事跡について、知らるゝ全體である。その生國の須賴國は、「道地經」には、天竺須賴拏國としてある。恐らくは中印度のシーラセーナ(Śūrasena)では無いかと思ふ。その遊教せる揵陀越土といふのは、Gandha-vastu(?)であつて、ガンダーラ文化の中心地を指すと思はれる。甄陀罽膩王とは、元魏吉迦夜譯「付法因緣傳」の月氏國王旃檀罽呢吒、同人譯「雜寶藏經」の月氏國王栴檀罽呢吒、羅什譯「大莊嚴論經」の栴檀罽呢吒王、拘沙種中の王眞檀迦膩吒と同人であつて、Candana Kaniṣka の音譯なるべければ、有名なる迦膩色迦大王であらうと推定せられる。然らば、僧伽羅刹は、迦膩色迦大王の師と仰がれた大德となり、他の多くの論據より大王の友であつたと見らるゝ馬鳴菩薩と同時の人となるのである。然らば是等二大士は、共に佛傳の著があり、共に迦大王の師友であつた事となるので、二大士の佛教に對する施設は、恐ら

臥具等を以て、諸の如來を供養すとも、獲る所の諸の功德は、一人有つて、能く日夜の中に於て、此の經典を讀誦するには如かず。　若し人、無數の、百千萬億劫を過ぎて、種種の香花・衣服・臥具等を以て、前に說ける如き、無數の聲聞衆・一切辟支佛・及び彼の諸の如來を供養すとも、獲る所の諸の功德は、一人有つて、此の經典を受持し、乃至、四句の偈を分別して、他の爲に說くには如かず。　我が說きし所の諸の經に、此の經は最も勝れ爲り。　一切の諸の如來は、皆此の經より出でたまへり。　是の經の所住の處に、卽ち如來有りと爲す。」　若し書寫し持して、處處に廣く流布し、卽ち能く一句を演ぶる有らば、劫を歷て窮盡すること無く、福惠自ら莊嚴し、盈滿して大海の如くならん。　若し是の經を聞かん者は、應に當に常に修習すべし。　功德量有ること無けん。』

佛、此の經を說き已りたまふ。　彌勒菩薩摩訶薩・大迦葉・長老阿難・淨居の諸天・摩醯首羅・及び諸天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、皆大に歡喜して、信受奉行せり。

方廣大莊嚴經（終）

を抜くが故に。三には大喜心を得、衆生の憂惱を滅するが故に。四には大捨心を得、衆生の貪恚を滅するが故に。五には[九]四禪心を得、欲界中に於て心自在なるが故に。六には[一〇]四定心を得、無色界に於て心自在なるが故に。七には五神通を得、佛土に往來するが故に。八には能く諸漏を斷ず、[一一]首楞嚴三昧を得るが故に。若し國土城邑聚落、所在の處に、此の經卷有らば、當に知るべし、其の處は八種の畏を離る。何等をか八と爲す。一には敵國の畏を離れ、二には賊盜の畏を離れ、三には惡獸の畏を離れ、四には飢饉の畏を離れ、五には諍訟の畏を離れ、六には戰鬪の畏を離れ、七には夜叉の畏を離れ、八には一切の怖畏を離る。汝等當に知るべし。正しく如來をして[一二]戒・定・慧・解脫・解脫知見よりする無礙辯才を以て、一劫中に於て、日夜に常に此の經の功德を說か令むとも、亦盡すこと能はじ。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、受持し讀誦し、書寫し解說せば、當に知るべし、是の人の得る所の功德、亦盡す可からず』と。

爾の時世尊、彌勒菩薩摩訶薩・及び大迦葉・長老阿難に告げて言はく、『我れ無數百千億劫に於て、佛道を修習し、今、阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たり。諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に、此の經を演說す。是の如き等の經を、汝に付囑す。汝等受持し、廣宣流布せよ』と。

爾の時世尊、重ねて偈を說いて言はく、

『我れ佛眼を以て觀じ、盡く諸の衆生を見るに、假使諸の衆生をして、皆舍利弗の如くならしめむ。人有り、億劫に於て、種種の香花・衣服・臥具等を以て、是の如きの[一三]衆を供養すとも、獲る所の諸の功德は、一日夜、一辟支佛を供するに如かず。假使諸の世間をして、皆辟支佛の如くならしめむ。人有り、億劫に於て、種種の香花・衣服・臥具等を以て、是の如きの衆を供養すとも、獲る所の諸の功德は、淨心を以て、一たび[一四]南無[一五]佛と稱するには如かず。假使諸の世間をして、皆佛世尊の如くならしめむ。人有り、億劫に於て、種種の香花・衣服・

【九】 四禪心—色界四禪の果報を得べき禪定なり。前に出づ。欲界中に於て、心自在といふは、四禪は、欲界にも通ずるを以てなり。

【一〇】 四定心—四無色定をいふ。

【一一】 首楞嚴三昧(Śūraṃgama-samādhi)。首楞嚴は健相、健行と譯す。健相とは幢旗の堅固に譬ふ。以て佛德の堅固、諸魔の能く壞するなきに比す。

【一二】 戒・定・慧・解脫・解脫知見—五分法身といふ。佛の功德にして、この五種の功德によつて、佛身あるを以て、之を五分法身といふなり。初の三は因によつて名づけ、後の二は果によつて名づく。慧は根本智なり、解脫は涅槃の德なり、解脫知見は後得智なり。

【一三】 衆—三本に等に作る。衆とせば、全世界の衆生を、舍利弗の如くならしむる一大僧伽なり。但、聲聞衆なり。

【一四】 南無佛—舍利弗・辟支佛・佛の順序に從ひ、次第に之を供養す。功德の大小を說くは、三乘思想を背後に有するを知らしむ。

五には聲、加陵頻伽の如し、衆生を悅樂するが故に。六には聲、殷雷の如し、外道を摧伏するが故に。七には梵音聲を得、世間を超過するが故に。八には佛音聲を得、衆生の根に應ずるが故に。

若し善男子善女人有つて、此の經を書寫し、四方に流通せば、其の人當に八功德藏有るべし。何等をか八と爲す。一には念藏、忘失無きが故に。二には惠藏、善く能く諸法の相を分別するが故に。三には智藏、能く諸經の義を了するが故に。四には[四]陀羅尼藏、聞く所皆能く持するが故に。五には辯藏、能く衆生の歡喜心を發すが故に。六には得正法藏、佛法を守護するが故に。七には菩提心藏、三寶の種を斷ぜざるが故に。八には修行藏、無生法忍を得るが故に。

若し善男子善女人有つて、此の經を讀誦し、句義を受持して忘失せずんば、其の人當に八種の圓滿を得べし。一には施圓滿、慳悋無きが故に。二には戒圓滿、願具足を得るが故に。三には多聞圓滿、無著智を得るが故に。四には[五]奢摩他圓滿、一切の三昧現前するが故に。五には[六]毘鉢舍那圓滿、三明を具足するが故に。六には福德圓滿、三十二相八十種好を具足して佛土を淨むるが故に。七には妙智圓滿、諸の衆生の所有意樂に隨つて具足を得しむるが故に。八には大悲圓滿、衆生を成就して勞倦無きが故に。

若し善男子善女人有つて、是の如きの念を發さん。云何が當に一切衆生をして、此の法門に入ら令むべきと。是の念を作し已つて、人の爲に演說せん。此の善根を以て、當に八種廣大の福德を得べし。何等をか八と爲す。一には[七]轉輪聖王の福德。二には護世天王の福德。三には帝釋の福德。四には夜摩天王の福德。五には兜率天王の福德。六には化樂天王の福德。七には他化自在天王の福德。八には大梵天王、乃至、如來所有の福德なり。

若し善男子善女人有つて、此の經典を聞きて、信心逆はずば、是の人當に八種の淨心を得べし。何等をか八と爲す。一には[八]大慈心を得、衆生に樂を與ふるが故に。二には大悲心を得、衆生の苦

【四】陀羅尼(Dhāraṇī)。總持と譯す。智慧の一種なり。

【五】奢摩他(Śamatha)。止と譯す。禪定に同じ。

【六】毘鉢舍那(Vipaśyanā)。觀と譯す。止によつて起る觀照なり。すべての執を離れたる智見なり。

【七】轉輪聖王は人間なり。護世天王、乃至、大梵天王は、天なり。その中、護世の四天王より他化自在天王に至るを、六欲天といふ。欲界の天なり。大梵天王は色界の天なり。一々の解說は、前に出づ。

【八】大慈心—大慈・大悲・大喜・大捨を四無量心又は四等心といふ。委說は前に出づ。

に道を得たり。群臣萬姓、後宮の婇女、咸く戒法を奉じて、梵行を淨修す。是の時、國內安靜にして、萬邦來賀せり』と。

[1]屬累品第二十七

爾の時世尊、淨居天・難陀・蘇難陀等に告げて言はく、『菩薩始め兜率より、閻浮に下生し、乃至、出家して魔怨を降伏し、法輪を轉ず。汝等諸天、皆悉く贊助せり。今、復、我に利益を請へり。世尊。斯の如きの大嚴經典、菩薩所行の如來境界、自在神通遊戲の事を演說したまへと。汝等、若し能く受持し讀誦して、他の爲に說かば、我が此の法[2]印は、當に增廣することを得べし。若し菩薩乘の人、此の經を說くことを聞かば、必ず大に歡喜して、未曾有なることを得、堅固精進の心を發して、阿耨多羅三藐三菩提を求めん。是の故に、汝等の福德、無量にして稱計す可からず。

若し善男子善女人有つて、是の經を聞くことを得て、合掌信受せば、其の人、當に八種の功德を獲べし。何等をか八と爲す。一には端正好色なり。二には力勢强盛なり。三には心悟通達す。四には辯才を逮得す。五には諸の禪定を獲。六には智慧明了なり。七には出家殊勝なり。八には眷屬强盛なり。

若し善男子善女人有つて、願樂して是の如き等の經を聞かんと欲し、說法師の與に、高座を敷置せば、身を轉じて當に八種の坐處を得べし。何等をか八と爲す。一には長者の坐處。二には居士の坐處。三には輪王の坐處。四には[3]護世の坐處。五には帝釋の坐處。六には梵王の坐處。七には菩薩が菩提を得る時に坐する處。八には如來が正法輪を轉ずるに坐する處なり。

若し善男子善女人有つて、是の經を聞くことを得て、稱揚讚美せば、是の人當に八種の淨語を得べし。何等をか八と爲す。一には言行相應す、違諍無きが故に。二には所言衆を伏す、遵承す可きが故に。三には所言柔軟なり、麁獷ならざるが故に。四には所言和美なり、衆生を攝するが故に。

【一】屬累品(Nigama-parivarta)。

【二】法印。三本は法眼に作る。法印は妙法の印璽なり。斯の法眞實にして不動不變なれば、稱して印といふ。又玉印の如く、通達無礙なれば、印といふ。又是れ佛の正法たることを證明するものなれば、印といふ。法印の方可なるべし。

【三】護世—四天王のこと。

の、須彌山に在るが如く、摩尼珠を、水精の器に置くが如くなり。佛の弟【四〇】難陀、亦沙門と爲る。難陀の使へる所を、【四一】優波離と名く。前みて佛に白して言さく、「世尊。人身は得難く、佛法は遇ひ難し。諸の尊貴の者も、皆世榮を棄てぬ。我が身卑賤なり、何の貪樂する所あらん。惟、佛、慈悲をもつて、願はくは救度せられ、許して沙門と爲したまへ」と。佛言はく、「善來比丘」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、便ち沙門と成り、比丘中に在りて、列に隨つて坐す。難陀後に至り、次第に禮を作し、優波離に到りて、卽ち止みて禮せず。心に自ら念言すらく、「是れは我が家僕なり、當に禮を設くべからず」と。爾の時世尊、難陀に告げて言はく、「佛の法は、海の如く、百川を容れ納む。四流之に歸すれば、皆同一味なり。戒の前後に據つて、貴賤に在らず。四大合するが故に、假に名けて身と爲す。中に於て空寂にして、本より吾我無し。當に聖法を思ふべし、憍慢を生ずること勿れ」と。爾の時難陀、自らの貢高を去り、心を執りて卑下し、優波離を禮す。是に於て、大地之が爲に震動す。時に佛、宮に入りて殿上に坐す。王及び臣庶、日日に百種の甘饌を供養す。佛、爲に法を說きて、無數の衆を度せり。

耶輸陀羅、【四二】羅睺耶羅を携ふ。年已に七歲なり。佛所に來至し、佛の足を稽首して、瞻對問訊し、佛に白して言さく、「久しく侍奉に違して、供養を曠廢しぬ。諸の眷屬、皆疑心有り。太子、國を去りたまひて十有二載。何に從つてか懷孕して、羅睺羅を生めるかと。」佛、父王及び諸の群臣に告ぐらく、「耶輸陀羅、節を守る貞白にして、瑕疵無きなり。若し信ぜずんば、今、當に證を取るべし」と。爾の時世尊、諸の比丘を化して、皆悉く佛の如くならしむ。相好光明、等しくして差異無し。時に耶輸陀羅、卽ち指環を以て羅睺羅に與へ、之に語つて言はく、「是、汝が父ならば、此を以て之に與へよ」と。【四三】羅睺羅、指環を持ち取りて、直ちに前みて佛に奉ぐ。王及び群臣、咸く皆歡喜して、歎じて言はく、「善い哉。羅睺は眞に是れ佛子なり」と。爾の時世尊、王の爲に法を說くや、卽時

【四〇】難陀(Nanda)。佛の親弟なり。牧牛難陀に簡ぶため、孫陀羅難陀といふ。

【四一】優波離(Upāli)。釋種に事へし賤種。後出家して持律第一の比丘たり。

【四二】羅睺羅(Rāhula)。執日又は障蔽の義。佛の嫡子。出家して佛弟子中密行第一と稱せらる。

【四三】羅睺羅……誤植によつて、釋睺羅に作る、

爾の時如來、七日に到り已つて、諸の弟子と、衣鉢を整持し、威儀詳序として、迦毘羅城に向ひたまふ。梵釋四王、佛が國に還りますと聞き、皆來つて導從す。梵王は右に侍し、帝釋は左に侍し、四王諸天は、前後に導從し、諸天龍神は、花香伎樂、以て供散し、寶幢幡蓋、道の側に羅列す。天は香水を雨らして以て地に灑ぐ。如來行かんと欲して、先づ瑞相を現はし、十方世界の三千國土、六反震動す。一切の枯樹、還つて花葉を生じ、竭涸せる溪澗、自然に泉を流す。王、瑞を見已つて、諸の釋種の大臣百官に勅し、幡蓋を嚴持し、香を燒き花を散じ、衆の伎樂を作して、以て佛を迎ふ。王、遙に佛を見るに、大衆に處して、星中の月の如く、日の初めて出づるが如く、樹の花を開けるが如し。巨身丈六にして、端嚴熾盛なり。既に佛を見已つて、悲喜交ゝ集る。稽首して禮を作し、佛に白して言さく、「世尊。離別して多年、今相見ゆることを得たり」と。大臣百官、一切の人民、皆稽首して禮し、佛に隨つて城に入る。

爾の時世尊、足、門の閫を踰えたまふに、地、爲に大に動く。天は妙花を雨らし、樂器自ら鳴る。盲者は視ることを得、聾者は聽くことを得、躄者は能く行き、病者は愈ゆることを得、瘂者は[38]能く言ひ、狂者は正しきことを得、傴者は伸びることを得、毒害自ら銷せり。禽獸相和して、其の聲淸亮に、環珮相觸れて、皆悉く響を流す。珍藏より自然に衆寶出現し、異心を苞匿するもの、皆共に和合す。一切衆生に、婬怒癡無く、展轉相視ること、父の如く母の如く、兄の如く弟の如く、子の如く身の如し。地獄は休息し、餓鬼は飽滿し、畜生は身を捨てば當に人天に生るべし。父王、佛の巨身を覩るに、丈六にして紫磨金色なり。星中の月の如く、亦金山の如し。梵釋四王、皆悉く奉侍す。[39]諸の比丘を見るに、曾つて外道と爲りて、久しく苦行を修し、形體羸劣なるが、親近侍從す。猶、黑き烏の紫金山に在るが如くにて、如來の德を顯發すること能はず。便ち國内の豪貴の釋種の、顏貌端正なるに勅して、五百人を選び、度して沙門と爲し、佛の左右に侍せしむ。金翅鳥

【三八】瘂者能言―能の字、誤植によつて瘂と作れり。

【三九】この以下、諸釋の出家を叙述す。

せり。不死の鼓を鳴らしたまふに、其の音、[三四]三千に徹し、啓授して皆明悟し、一切咸く欣悅す」と。「我が子何の國に王たりや。[三五]隄封は廣しと爲んか、狹しとせんか。所化は幾何人かある。悉く當に歸伏すべきや不や」と。●「佛、三千界を領して、諸の[三六]群生を化導したまふに、十方、數ふ可からず。饒益を蒙らざるは靡し」と。「我が子家に在りし時は、政を聽きて吾が化を助け、勸導するに禮節を以てし、奉順して敢て違すること莫かりき」と。「佛は諸法の空を悟つて、[三七]四顚倒を捨てたまひ、歸伏せざる者無く、寂靜にして業を爲すもの無し。佛の法には愛憎無く、一切皆通達したまふ。化、諸の衆生に及びて、饒益を蒙らざるもの無し。假使一人有りて、其の人に無量の首あり、一の首に無量の舌あり、舌に無窮の辯有りて、此の如き恒沙の人、恒沙の劫數を以て、佛の一切の德を歎ずとも、猶尙、盡すことは能はじ。況んや我は螢燭の如し。何ぞ能く日光を演べん」と。

時に輸檀王、此の偈を聞き已つて、歎じて言はく、「善い哉。阿斯陀仙の言に、虛妄無かりき」と。優陀夷に問へらく、「佛來らんと欲するや不や」と。優陀夷言はく、「却後七日、如來當に至りたまふべし」と。王、是の語を聞きて、歡喜踊躍し、諸の大臣に語るらく、「吾當に佛を迎ふべし。導從の儀式は、轉輪王に法れ。先づ所司に勅して、道路を平除し、香水を地に灑ぎ、繒の幡蓋を懸け、種種の嚴飾は、其の所宜を盡せ。我、當に城を出でて、四十里外に、如來を奉迎すべし」と。優陀夷言はく、「本より佛の敎を承け、來つて大王に報ぜり。今は請ふ、佛に向つて王の意を說かん。欽渴積年、如來を覩たてまつらんことを願ひ、幷に及び萬性、咸く福祐を希へり」と。王言はく、「善い哉。願はくは速かに佛を見よ」と。時に優陀夷、還つて佛の所に詣り、佛の足を稽首して、佛に白して言さく、「世尊。王及び國人は、日を計り時を度つて、佛を見たてまつることを得んと願ふ。我、已に王に告げき。劫後七日、世尊當に至りたまふべし」と。

【三四】三千。三千大千世界のこと。
【三五】隄封。麗本、隄の字提に作り、宋本、隄と作す。
【三六】群生。多くの衆生。
【三七】四顚倒。四種顚倒の妄見なり。之に二種あり。生死の無常無樂無我無淨に於て、常樂我淨を執するを、有爲の四倒と云ひ、涅槃の常樂我淨に於て、無常無樂無我無淨を執するを、無爲の四倒とす。有爲の四倒を斷ずるを二乘とし、無爲の八倒を斷ずるを菩薩とす。今の四倒は、前者なり。

呪願して、世世安隱なら令めたまふ」と。「我が子家に在りし時、寢臥常に安から使め、絃歌清音を奏でて、爾して乃ち寐より起きたりき」と。我れ時に王に答へて言はく、「禪定は明晤に非ず。諸佛は睡眠したまふこと無し。帝釋常に服膺し、梵王來りて勸助す」と。「我が子家に在りし時は、澡浴するに香湯を以てし、芬馥として室中に滿ちき。今は何等の香を用ふるか」と。我れ時に王に答へて言はく、「[30]八解・三脱の門もて、澡浴して諸の垢を除く。

心寂として憂惱無く、猶、淨き虛空の如し」と。「我が子、家に在りし時は、雜香以て塗り熏じ、淸淨にして塵穢無く、郁烈にして香潔なりき」と。我れ時に王に答へて言はく、「戒・定・慧・解脱あり、道德以て香と爲す。十方の八難の處も、普く熏じて至らざる無し」と。「我が子家に在りし時は、四種の妙寶の床に、重疊して茵褥を敷き、臥起して安悅なりき」と。

我れ時に王に答へて言はく、「四禪を床座と爲し、[31]等持の心自在なり。煩惱の泥に染せられず。淸淨なること蓮花の如し」と。「我が子家に在りし時は、兵衞甚だ嚴肅に、出入常に擁護して、目に諸の惡を見ざりき」と。我れ時に王に答へて言はく、「千二百の羅漢、菩薩無央の數、倶に弟子衆と爲りて、左右に恭侍す」と。「我が子家に在りし時は、象馬牛羊の車、周旋して四方に往き、意に隨つて遊觀せりき」と。我れ時に王に答へて言はく、「五通を駿駕と爲して、空を飛ぶに罣礙無し。一切の心を洞見し、遊踐して生死を超えたまへり」と。「我が子家に在りし時は、旌旗・羽衞を列ね、人、諸の兵仗を執りて、前後に導從を爲しき」と。我れ時に王に答へて言はく、「[32]四等を防護と爲して、普く衆の厄難を濟ふ。恩慧仁愛敬、此を以て嚴衞と爲す」と。「我が子家に在りし時は、鐘鼓もつて前路を導き、雜ふるに衆の伎樂を以てし、觀る者每に衢に盈ちき」と。我れ時に王に答へて言はく、「道樹に正覺を成じて、五跋陀羅を度したまひ、八萬四千の天、皆已に法眼を得、[33]九十六種の道、摧伏して歸命

【三〇】八解三脱。八解脱三解脱のこと。註は共に上に出づ。

【三一】等持。梵語、三摩地(Samādhi)の譯。定の別名なり。心を一境に住して平等に維持するをいふ。

【三二】四等。慈悲喜捨の四無量心なり。所緣の境に從へて無量と云ひ、能起の心に從へて等といふ。平等に此の心を起せばなり。

【三三】九十六種の道。經論の中に西域外道の總數を擧ぐるに九十五種と九十六種とあり。九十六種を解するに、九十六種悉く邪道と爲す說と、九十五種の外道に一の正道を加へて、正邪合說せるものとする說とあり。九十六種全て外道とするを隱當とす。而して九十六種とは、六師外道の各に十五の弟子あり、合せて九十となる。之に師の六を加へて、九十六種外道とするなり。

慇したまへばなり。　本より菩薩道を行じて、今、願滿足することを得たまふ。　菩提樹に坐して、大魔怨を降伏し、生死の因を破壞して、諸の煩惱を銷滅したまひ、已に成正覺を得て、無上法を演說したまふ。　我れ本より王の敎を奉じて、國を出でて太子を迎へ、王の愁念の久しきを說きて、　言辭甚だ悲しむ可し。　佛、本生の地を顧みて、尋で當に親族に見ゆべしといふ。　我れ時に佛の命を承けて、將に迦毘羅に入らんとし、佛を辭して神通を御し、忽ち大王の所に至る。　變化すること若干種なり。　譬へば淨き蓮花の如し。　父王、神變を見、心に大たる恐懼を生して、二八借問すらく、「所從と爲んや。未だ曾つて是の變を覩ず。」「太子本より國を棄て、道を求めて衆生を度したまひ、勤苦すること無量劫にして、今乃ち成佛を得たまへり。　王、今、驚懼すること勿れ。　宜しく應に心を悅豫すべし。　我已に生死を度して、王の太子の使と爲れり」と。　王、時に、子の問を聞き、涙落つること雨星の如し。「我自ら十二年、愁念窮り已むこと無かりき。　忽ち吉祥の至るを聞き、人の死して復蘇るが如くなり。

我が子國位を捨てて、成道して何等と名く」と。　我時に王に答へて言さく、「太子、六年を經て、勤苦して成道を得たまへり。　號けて天中天と曰ふ。　三界に最第一なり」と。　「我が子家に在りし時、爲に諸の時殿を造り、刻雕して績飾を陳ねき。　今は何の所に居するや」と。「我、時に王に答へて言ふ、「佛、微妙の法を得、處りたまふ所、安からざるは無し。常に樹下に在すに、諸天來つて供養す」と。　「我が子家に在りし時は、坐臥、綩綖を敷きて、皆、綺飾を以て成り、柔軟にして光澤ありき」と。　我れ時に王に答へて言はく、「天帝は衣服を貢し、龍妃は寶床を獻ずるに、佛の心に美惡無く、未だ嘗つて喜慍したまふを見ず」と。「我が子家に在りし時は、盛饌せる衆の甘美ありき。　今、膳御する所の者は、何等の食をか施設する」と。　我れ時に王に答へて言はく、「鉢を持ちて從つて　二九分衞するに、福業に增減無く、　彼の施人を

【二八】借問爲所從未曾覩是變—爲所從の語に誤あらん。或は爲何從の誤ならんか。然らば「何によれりとか爲す」の意なり。

【二九】分衞（Piṇḍapāta）。或は乞食と飜し、或は團墮と飜ず。乞食とは比丘行きて食を乞ふなり。團墮とは乞得せる食に就いていふ。印度の法多く食を團團に摶つて鉢中に墮墜するを以てなり。

は、汝と與に從事しき。汝が學べる所は、我悉く知り已れり。請ふ復言ふこと無かれ」と。是の時目連、舍利弗に告げて言はく、「仁者の智慧は、本より我に踰えたり。今の教ふる所、豈相誤らんや」と。是の語を作し已り、舍利弗に隨つて、佛所に往詣し、佛の足を稽首して白して言さく、「大聖に違遠して、煩惱に沈沒せり。今、親奉することを得たり、願はくば沙門と爲らん」と。即ち澡瓶・鹿衣・杖具を捨つ。佛言はく、「善來」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、便ち沙門と成れり。佛、爲に法を說くに、漏盡意解して、阿羅漢を得たり。時に舍利弗、目犍連、及び二百五十の弟子、皆出家して盡く羅漢と成るを得たり。

〔二五〕爾の時輸檀王、子、道を得て、已に六年を經たるを聞き、中心に欣喜し、欽渴彌積る。〔二六〕優陀夷に語つて言はく、「汝、今、往きて、國に還つて起居を問訊せんことを、佛に請ず可し。離別已來、十有二載、夙夜悲感して、自ら已むこと能はず。一たび相見ゆることを得ば、還つて更生するが如くならん」と。優陀夷、王の教を受け已りて、佛所に往詣し、佛足を稽首して、具に王の意を述ぶ。乃ち諸天梵釋の、咸く來りて歸命するを覩て、佛に白して言さく、「願はくば沙門と爲らん」と。佛言はく、「善來」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、便ち沙門と成り、阿羅漢道を得たり。爾の時世尊、是の思惟を作さく、「本より父王と要誓せり、成佛せば、爾らば乃ち國に還つて、當に父母を度すべしと。今、佛道を得たり、本誓に違はじ」と。即ち優陀夷比丘に語つて言はく、「汝、宜しく先に往きて、汝の神足を顯はすべし。十八變を作さば、吾が道の成れることを知りたまはん。弟子だも尙ほ爾り、況んや佛の威德をや」と。優陀夷、佛の教を奉じ已り、飛行して往き、還つて本國に到る。迦毘羅城の上に於て、虛空の中に十八變を現ず。王及び臣民、驚懼せざるは莫し。而して優陀夷、是の偈を說いて言はく、

〔二七〕「如來は甚だ希有なり。　値遇を得可きこと難し。　勤苦すること無量劫なるは、諸の衆生を哀

【二五】これより歸國して、父王を化導する一節なり。
【二六】優陀夷(Udāyin)。人の名。譯、出現。
【二七】この偈、父王の問と優陀夷の答とを以て織り成す。

是の偈を說き已りて、舍利弗に告ぐらく、「我が事ふる所の師は、天上人中の最尊最勝なり。功を積み德を累ぬること、稱載す可からず。兜率天より閻浮に降生し、初め生るる時、能く十方に於て、各ゝ行くこと七步、手を擧げて唱へて言はく、天上天下に、唯我れ最尊にして、唯我れ最勝なり。三界の苦惱を、吾當に之を度すべしと。釋・梵・四天、咸く來つて供事せり。佛の功德は、具に述ぶ可からず」と。時に舍利弗、此の語を聞き已つて、暗中より日の光明を覩るが如し。比丘に語つて言はく、「善い哉、善い哉。吾少うして學を好み、八歲にして師に從へり。年甫めて十六にして、該綜せざるは靡し。自ら謂うて達せりと爲しき。今、無上正覺に値ふことを得たり、眞に我が師爲り。汝が言ふ所の佛は、今、何處に在りや」と。比丘答へて言はく、「今、迦蘭陀の[二二]竹園精舍に在します」と。時に舍利弗、諸の弟子を將ゐて、如來の所に至り、稽首して足を禮し、前みて問訊し已り、佛に白して言さく、「我れ長夜に處して、恒に愚迷を履みき。幸ひに佛に値ひたてまつることを得たり。願はくは正路を開きたまへ。沙門と爲つて、禁戒を成就することを得ん」と。佛言はく、「善來比丘」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、便ち沙門と成れり。佛、爲に、法を說くに、漏盡意解して、阿羅漢を得たり。前みて佛に白して言さく、「世尊。我れ同學[二三]大目犍連と、道を得る時は、必ず相開示せんことを要めき。今、彼に往かんと欲す、願はくは聖旨を承けん」と。佛言はく、「宜しく是の時を知るべし」と。

時に舍利弗、王舍城に入り、目犍連を訪ひ、遙に目連が、諸の弟子と、里巷に遊行するを見る。爾の時目連、舍利弗の形狀變改せるを覩、逆へて之に問ふ、「何の異見有つて、容服乃ち[二四]爾るや」と。答へて言はく、「學に常の師無し。惟道の在る所のみ。法を求めて、積年大聖に遇はず。今、値ふことを得て、身心遍ねく喜ぶ。故に來つて相求む。願はくは法味を同じうせんことを」と。目連答へて曰く、「此は小事に非ず、宜しく共に籌量すべし」と。舍利弗言はく、「我が昔行ぜし所

【二二】竹林精舍(Veṇuvana)。天竺五精舍の一。王舍城に在り。迦蘭陀長者佛に歸して、竹園を奉じて精舍を建つ。是れ印度僧園の嚆矢なり。

【二三】大目犍連(Mahā-maudgalyāyana)。略して目連といふ。新稱、摩訶沒特伽羅。姓なり。譯、大採菽。十大弟子の一人にして、神通第一と稱せらる。佛の入滅に先ちて、執杖梵志の爲に殺さる。

【二四】爾。麗本に耳の字に作るも、三本に從つて爾とす。

比丘、更に親奉せん」と。王及び群臣、佛を遶ること三匝して、辭退して去る。王、宮に至り已つて、群臣賀を上る。「古昔の諸王、悉く佛を見ざりき。惟獨り大王のみ、如來に値ひたてまつることを得たり」と。王益〻欣喜して、復、群臣を慰む。「卿等、夙福ありて、今、幸に佛の世に出興したまふに遇ふ」と。因つて後宮の妃嬪、婇女、及び國内の人民に勅し、長く[一五]齋戒を修して、盡く法を奉ぜ令む。

時に摩伽陀國に、一長者有り。[一六]迦蘭陀と名く。佛、國に入るに、未だ[一七]精舍有らざるを見て、好竹園を以て如來に奉上し、前みて佛に白して言さく、「世尊。大慈をもつて、一切を憐愍したまふこと、父の如く母の如し。能く世榮を棄てて、今、成佛することを得たまへり。未だ精舍有らず。我れ竹園を以て、如來に奉上せん」と。佛、時に、呪願して、爲に之を受けたまひ、恒に聖衆と、遊びて其の内に處る。

[一八]彼の時、摩伽陀國の人民殷盛にして、俗樂に耽著し、喧呼歌舞、晝夜を捨てず。佛、適、國に入り、化するに法言を以てするや、齋戒修心して、皆俗樂を捨てぬ。佛に弟子有り、[一九]舍婆耆と名く。城に入りて[二〇]分衞す。威儀法有りて、行步安詳なり。路人之を見て、欣悅せざるは無し。時に[二一]舍利弗、此の沙門を見て、心に自ら念言すらく、「我れ道を學ぶこと久しく、頗る法式を知れども、未だ曾つて是の如きの人有ることを見ず。必ず異聞有りて、威儀乃ち爾らん。試に往きて、之に問はん、事ふる所は何の道ぞ」と。時に舍利弗、卽ち比丘に問へらく、「汝が師は是れ誰ぞ。願はくは其の志を聞かん」と。爾の時比丘、偈を以て答へて曰く、

「吾が師は相好を具したまひ、三界に於て最尊爲り。五陰・十二緣は、空・有に住せず。我、今、年尙少くして、學業、猶、未だ深からず。[二二]言辭を以て、佛の諸の功德を說く可からず」と。

【一五】齋戒。心の不淨を濟むるを齋と云ひ、身の過非を禁ずるを戒といふ。

【一六】迦蘭陀(Karaṇḍa)。佛に竹林精舍を奉りし長者。

【一七】精舍。寺院の異名なり。精行者の所居なるを精舍といふ。

【一八】これより舍利弗、目連の化導なり。

【一九】舍婆耆(Aśvajit)。譯、馬勝。五比丘の一人。

【二〇】分衞(Piṇḍapāta)。譯、乞食。行く〳〵乞うて食するなり。

【二一】舍利弗(Śāriputra)。舍利は母の名。弗は弗多羅の略、子の義なり。舍利女の子なれば、舍利弗といふ。舍利につきて、古來二釋あり。一は鳥の名と爲し、鶖鷺、鶖鷺子、鶖等と譯して、舍利弗を鶖鷺子、鶖子といひ、二は身又は珠と譯し、舍利弗を身子、珠子といふ。目連と共に、佛弟子中最重要なる一人にして、智慧第一と稱せらる。

王言はく、「此の國有りてより來、七百餘代なり。」「所領の王、盡く識れりや以不や。」答へて曰く、「我が父を知るのみ。」佛言はく、「世間は須臾なり、惟道のみ恃む可し。應に來福を修すべし、空しく過ぐることを爲すこと無かれ。大王當に知るべし。人の生るる時の如し。父母に因つて其の身を生ずと雖も、父母に由つて其の果報を招かず。善惡美醜は、先業の所爲なり。若し諸善を造らば、命終の後、天人の中、十方の佛の前に生ぜん。若し諸惡を造らば、命終の後、地獄・餓鬼・畜生に生ぜん。一切の諸法は、緣合すれば卽ち生じ、緣散ずれば卽ち滅す。

大王當に知るべし。無明は行に緣たり、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六處に緣たり、六處は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老死憂悲苦惱に緣たり。大王。無明滅するが故に、則ち行滅し、行滅するが故に、則ち識滅し、識滅するが故に、則ち名色滅し、名色滅するが故に、則ち六處滅し、六處滅するが故に、則ち觸滅し、觸滅するが故に、則ち受滅し、受滅するが故に、則ち愛滅し、愛滅するが故に、則ち取滅し、取滅するが故に、則ち有滅し、有滅するが故に則ち、生滅し、生滅するが故に、則ち老死滅し、老死滅するが故に、則ち憂悲苦惱滅す。大王。十二因緣は、盡く坦然として跡無し。猶、虛空の如し。本無を分別せば、法忍を逮得せん。」と。是の法を說きし時、八萬四千の諸天、及び人、遠塵離垢して、法眼淨を得、無央數の衆は、阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。

爾の時頻婆娑羅王、法眼淨[一三]を得、欣然として佛を請じ、五戒[一四]を受けんことを願ひ、大臣・百官・國内の人民、皆悉く佛に歸して、亦五戒を受けたり。既に戒を受け已つて、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、佛に白して言さく、「世尊。乃ち能く轉輪王の位を棄捨して、出家し道を爲したまへり。我、昔日に於て、輒ち先に奉請せりき。若し道を得たまはん時に、願はくは前に我を度せられよと。今に於て、宿願成滿して、幸に佛の恩を蒙りて、道跡を履むことを得たり。國務殷繁なり。

【一三】法眼淨—分明に眞諦を見るをいふ。大小乘に通ず。小乘にては、初果をいひ、大乘にては、初地をいふ。
【一四】五戒。不殺生戒・不偸盜戒・不邪婬戒・不妄語戒・不飮酒戒をいふ。此の五は、在家人の持する所。これを持す。男子を優婆塞といひ、女子を優婆夷といふ。

爲りや、佛を師とせりや」と。佛、其の意を知り、卽ち偈頌を以て、迦葉に問うて言はく、

「汝常に山川を祀り、水火風、日月、衆梵天に歸依せり。夙夜勤めて精進し、事へ來つて幾何の時かありし。其の心懈廢すること無かりき。汝が奉ずる所の神祇は、寧、福を致すこと有りしや不や」と。

爾の時迦葉、偈を以て答へて曰く、

「自ら念ふに、祠祀してより來、已に八十載を經たり。風・水・火・梵天・山川・及び日月を、夙夜に常に精進して、祈る心、懈廢せざりき。畢竟獲る所無くして、佛に値ひて乃ち安きことを得たり」と。

是の偈を說き已る。王及び群臣、國中の人民、乃ち迦葉が佛の弟子爲ることを知れり。佛、迦葉に告ぐらく、「汝起つて、宜しく應に汝の羅漢神通を現ずべし」と。迦葉、卽時に佛の敎を承け已りて、踊つて虛空に在り、身上より火を出し、身下より水を出す。或は身上より水を出すに、其の身濡れず。或は身下より火を出すに、其の身灼けず。虛空を飛行して、七たび現じて七たび隱る。地に入ること水の如く、水を履むこと地の如し。須彌を穿過して、罣礙する所無し。佛前の地に於て、西沒東現し、東沒西現し、南沒北現し、北沒南現す。既に變化し已つて、佛前に還り、長跪叉手して、佛に白して言さく、「我れは是れ弟子、佛は是れ我が師なり」と。王及び臣民、重ねて迦葉は是れ佛の弟子なることを明めたり。

爾の時世尊、頻婆娑羅王に告げて言はく、「大王。色は、是れ無常苦空無我なり。受想行識も、亦是れ無常苦空無我なり。色は聚沫の如し、撮摩す可からず。受は水泡の如し、久しく立つことを得ず。行は芭蕉の如し、中に堅想有ること無し。所夢の如し、虛妄の見爲り。識は幻化の如し、顚倒より起る。三界は不實にして、一切無常なり。大王。此の國有りてより來、幾何の時とか爲す」と。

他人の心を知る。三には善く煩惱を知り、病に應じて藥を授けたまふ」と。二弟聞き已つて、心に恭敬を生じ、顧みて弟子に謂へらく、「汝が意云何ん」と。五百の弟子、聲を同じうして發言すらく、「願はくは師の敎に從はん」と。卽ち皆稽首して沙門と爲らんことを求む。佛言はく、「善來比丘」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、皆沙門と爲れり。

爾の時如來、千の比丘と倶に、波羅奈國に往き、林の下に在り。諸の弟子の爲に、或時は變現し、或時は法を說き、或は復戒を說く。佛の威神を覩て、欣喜せざるは莫く、盡く羅漢と成れり。

〔八〕爾の時世尊、波羅奈國より優婁頻螺迦葉兄弟三人及び千の羅漢と、摩伽陀國に至る。時に〔九〕頻婆娑羅王、菩薩が、佛道を成ずることを得て、巨身〔一〇〕丈六にして、紫磨金色に、三十二相八十種好あり、十號具足して、已に知見を得、五眼を成就し、六通を證獲して、梵釋四王、皆悉く奉事するを久しく聞き、今、我が國に入れりとて、心に甚だ歡喜す。「吾れ本より共に成佛して相度せんことを要めき。乃ち忽ち遺れずして、我が所願に從へり」と。卽ち國內に勅して、道路を嚴淨し、王は寶車に乘じ、大臣百官、前後に導從して、千騎萬騎、城を出でて佛を迎ふ。爾の時世尊、王舍城に近づき〔一一〕遮越林に在り。大樹の下に於て、千の比丘衆に、圍遶せられて坐す。王、遙かに佛を見るに、星中の月の如し。日の初めて出づるが如し。旣に帝釋の如し。亦梵王の天宮に處るに似たり。儼かなること、金山の巍巍として超絕するが如し。王心に歡喜して、車を下りて歩み進み、〔一二〕五威儀を去つて、稽首して佛を禮す。自ら其の號を稱して、是の如きの言を作さく、「久しく尊の德に服し、欽渴時を積めり」と。如來、卽ち梵音を以て、王を慰問して言はく、「大王。四大常に安隱なりや不や。人務を統理して、乃ち勞すること無きや」と。王曰く、「祐を蒙りて、幸に安隱なることを得たり」と。爾の時頻婆娑羅王、及び諸の臣民、咸く迦葉が佛の邊に於て坐するを覩、心に自ら念言すらく、「迦葉は耆舊、衆仙の宗なり。豈に應に道を棄てて、佛の弟子と作るべけん。是佛の師

【八】これより以下は、王舍城頻王の化導なり。

【九】頻婆娑羅王（Bimbisāra）。影勝と譯す。

【一〇】丈六。身の丈け一丈六尺、是れ通常化身佛の身量なり。

【一一】遮越林。普曜經には、有大社樹、名曰遮越と作す。他に杖林(Yaṣṭivana)と作すものと、同處なるべし。

【一二】五威儀—普曜經第八に、之を說明して、一、蓋。二、履。三、扇。四、冠幘。五、刀仗と爲す。

無し」迦葉、復、言はく、「是の大沙門神は則ち神なり。猶、我が羅漢道には如かざるなり」と。

佛、迦葉に語るらく、「汝、羅漢に非ず、何爲れぞ貢高して自ら羅漢と稱する」と。是に於て迦葉、心驚き毛竪ち、慚懼稽首す。「今此の大聖、乃ち我が心を知れり。惟願はくば大聖、我を攝受して、聖法の中に在つて、沙門と爲したまへ」と。佛、迦葉に語るらく、「汝旣に耆舊にして、多く眷屬有り。又、國王臣民の歸敬する所と爲る。今、道を學ばんと欲せば、其は自ら輕んず可し。宜しく弟子と、更に熟ゝ詳議すべし」と。迦葉言はく、「善い哉、聖の敎ふる所の如し。然れども我が內心は、自ら決せざるに非ず。且く當に還つて弟子と論ずべきのみ」と。迦葉還來し、諸の弟子を集む。「我れ已に彼の沙門の法を信解せり。其の得し所の道は、是を眞正と爲す。我今歸趣せり、汝が意如何」と。弟子答へて言はく、「我等も亦願はくは隨從し歸依せん」と。

是の時迦葉、諸の弟子と、其の衣服を釋き、火に事ふるの具を取りて、悉く水中に棄つ。倶に佛所に詣り、佛足を稽首して、佛に白して言さく、「我れ及び弟子、聖法の中に於て、願はくば沙門と爲らん」と。佛言はく、「善來比丘」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、皆沙門と成る。迦葉の二弟、一を〔六〕難提と名け、二を〔七〕伽耶と名く。各ゝ二百五十の弟子有り。先より水邊に住す。諸の梵志の衣帔・什物・火に事ふるの具、水に隨つて下り流るるを見て、皆悉く驚愕して、其の兄及び諸の門徒が、人の害する所と爲りしかと恐畏し、卽ち五百の弟子と、流に泝りて上る。兄の師徒の、皆沙門と成れるを見、怪みて問うて曰く、「兄は今耆舊にして、年百二十なり。智慧深遠にして、國內に遵崇せらる。我が意に言はく、兄は已に羅漢を證したまへりと。今、淨業を棄てて、彼の沙門を學ぶ。其の道勝れたりや」と。迦葉答へて言はく、「佛道は最も優れ、其の法、無上なり。我れ昔より來未だ曾つて神通道力の、佛と等しき者有るを見ず。其の法、淸淨にして、當に無量を度すべし。能く三事を以て、衆生を敎化したまふ。一には道力なり、神通變化あり。二には智慧なり、

【六】難提(Nadī-kāśyapa)。三迦葉の一。難提の譯、河。
【七】伽耶(Gayākāśyapa)。三迦葉の一。伽耶の譯、象城。

りて【四】閻浮果を取り、西のかた拘耶尼に至りて【五】呵梨勒果を取り、北のかた欝單越に至りて、自然粳米を取り、盛りて鉢の中に置き、空を飛びて還り、迦葉より先んじて至り、其の床上に坐す。迦葉、後に到りて佛に問へらく、「沙門、何れの道より來れるか」と。佛、迦葉に語るらく、「汝去りし後、我、四方に往き、及び忉利に上りて、是の名果及以美飯を取れり。汝之を食ふ可し」と。

時に摩伽陀國の國王・大臣・吏人・官屬・長者・居士・婆羅門等、當に迦葉に就いて七日の會を爲すべし。迦葉念じて言はく、「彼の大沙門は、威德巍巍として、相好無上なり。衆人見ば、必ず當に我を捨てて、之に奉事すべし。寧ろ此の沙門、七日の中、我が所に來らざれ」と。佛、其の念を知り、隱れて現ぜず。七日滿じ已る。迦葉念じて言はく、「節會已に訖り、餘饌甚だ多し。彼の大沙門、今若し來らば、我れ當に之に飯すべし」と。佛、其の意を知り、忽然として至る。迦葉、驚喜して問へらく、「如來七日の中、何爲ぞ棄てられし」と。佛言はく、「汝、先に念を起せり、是を以て現ぜざりき。今、汝、相憶ふが故に、復來れるのみ」と。

爾の時、迦葉の五百の弟子、將に火を祀らんと欲して、倶に共に薪を破る。各各斧を擧ぐるに、皆下すことを得ず。遽に師に告ぐ。師言はく、「是れ大沙門の所爲ならん故のみ」と。卽ち往きて佛に問へらく、「我が諸の弟子、向に共に薪を破らんとし、各各斧を擧ぐるに、皆下すことを得ず」と。佛言はく、「當に下るべし」と。聲に應じて卽ち下る。既に下りて後、斧皆薪に著きて擧ぐ可からず。復、來つて佛に問ふ。佛言はく、「去る可し、自ら當に擧ぐべきのみ」と。時に應じて卽ち擧ぐ。

尼連禪河、湍流箭激なり。佛、神力を以て、水を涌起して、人上を過ぎ令む。佛、其の下を行けば、步步に塵を生ず。迦葉、遙に望みて、佛の漂溺せんことを恐れ、卽ち弟子と與に、船に乘りて佛を救ふ。水涌起して、佛其の下を行くに、步步塵を生ずるを見る、迦葉。佛を喚ぶ、「沙門。船に上らんと欲するや不や」と。佛言はく、「甚だ善し」と。卽ち水中に於て、船底より船に入るに、穿漏

【四】閻浮果。閻浮(Jambu)。譯、穢。樹の名。閻浮提の名は、其の洲の中心に此の樹林あるが故なり。
【五】呵梨勒果(Haritaki)。譯、天主將來。五藥の一。果の名。

と雖も、我が羅漢道を得たるには如かざるなり」と。
爾の時如來、移りて迦葉所住の處に近づき、一樹の下に在り。夜分の中に於て、四天大王、皆來りて法を聽く。光明甚だ盛にして、大火炬の如し。迦葉夜見て、佛、火に事ふると謂ひ、明旦、佛に白して言さく、「沙門の法中、亦火に事ふるや」と。佛の言はく、「不なり。昨夜四天、下り來つて法を聽けり、是れ其の光のみ」と。後に於て、帝釋、下り來つて法を聽く、其の光轉た盛なり。迦葉、明日、復、問へらく、「沙門も亦火に事ふるや」と。佛言はく、「不なり。此は是れ帝釋、來つて法を聽きしのみ」と。後に於て、梵王、下り來つて法を聽くに、其の光益ゝ盛なり。迦葉、明日、復、問へらく、「沙門も亦火に事ふるや」と。佛言はく、「不なり。此は是れ梵王、來つて法を聽きしのみ」と。

迦葉及び五百の弟子人、三火に事ふ。旦に火を然さんと欲するに、火終に著かず。怪みて以て師に問ふに、師の言はく、「此は是れ沙門の所爲の故なり」と。俱に來つて問へらく、「我が事ふる所の火、然すに乃ち著かず」と。佛言はく、「然さ使めんと欲するや。當に然すことを得令むべし」と。火卽ち然ゆ。既に然えて後、迦葉火を滅せんとするも、復、滅す可からず。五百の弟子、相助けて之を滅せんとするも、亦滅する能はず。各ゝ自ら念じて言はく、「復、是れ沙門の所爲の故なり」と。共に往きて佛に問へらく、「火既に然すことを得しかども、今滅す可からず」と。佛言はく、「滅せ使めんと欲するや。當に滅することを得せ令むべし」と。火卽ち滅す。

迦葉、佛に白して言さく、「惟願はくば沙門、恒に此に住して、共に梵行を修したまへ。我れ當に家に勅して、常に供養せ使むべし」と。毎に日時を以て佛を請じ、俱に行きて其の家に詣りて食す。佛言はく、「汝、先に去る可し。當に後に隨つて至るべし」と。迦葉適に去る。佛、神力を以て忉利天に上り、彼の天果を取る。東のかた弗婆提に至つて、菴摩勒果を取り、南のかた閻浮界に至

【三】菴摩勒果（Āmra）。譯、無垢清淨。印度藥果の名。

卷の第十一

轉法輪品 二十六の二

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、「如來、五人、を化し竟りて、是の念を作して言はく、「優樓頻螺迦葉は、大名稱有りて、五百の弟子と倶なり。國王奉事し、臣庶宗仰す。我れ當に彼に詣りて、敎ふるに正法を以てすべし」と。卽ち往いて之を尋ぬ。迦葉、佛を見て、迎へ前みて問訊すらく、「善く安隱なりや不や」と。爾の時如來、迦葉に報じて言はく、「無病知足にして、寂滅清信あり、是を安隱と爲す」と。迦葉、佛を請ずらく、「日既に將に暮れんとす。惟、願はくは沙門、幸に此に留まつて、意の所處に隨ひたまへ」と。佛、迦葉に語る。「石室に寄つて止住し、一宿せんと欲す」と。迦葉言はく、「我れ室を愛せず、中に毒龍有り、恐らくは相犯さんのみ」と。乃し三語に至る。迦葉報じて言はく、「中に於て止まるに任す」と。

爾の時如來、手足を洗ひ已つて、前みて石室に入り、座を敷いて坐す。龍便ち瞋怒し、身中より煙を出すや、佛も亦煙を出す。龍大に瞋怒して、身中より火を出すや、佛も亦火を出す。二火倶に熾んにして、石室を焚燒す。迦葉、夜起きて室の盡く然ゆるを見、驚怖歎惜すらく、「此の大沙門は、端正尊貴なれども、我が語を取らずして、火の害する所と爲れり」と。遽かに弟子人をして、一瓶を持ち、水を汲みて救は令む。所有瓶水、悉く變じて火と爲る。師徒益〻恐れて、皆言はく、「龍火是の沙門を殺せしならん」と。如來、爾の時、神通力を以て、毒龍を制伏して、鉢の中に置く。明旦、鉢を持ち、龍を盛りて出づるに、迦葉大に喜びて、未曾有なりと怪しみ。「今、此の沙門は、乃ち復、活けりや。器中に何有る」とて、是の毒龍を見る。佛、迦葉に告ぐらく、「我已に之を伏して、禁戒を受け令めたり」とか。迦葉甚だ慚ぢ、顧みて弟子に謂へらく、「是の大沙門は神力有り

【一】此一品の中に、王舍城の化導と歸國父王諸釋の化導を合説す。前諸品の諸相と頗る異りて、略説の形式を爲す。此一品、普曜經にあり、梵本になし。

【二】優樓頻螺迦葉（Uruvilvā-kāśyapa）。譯、木瓜林。三迦葉の第一。歸佛前より、五百の弟子を有する外道論師なりしが、佛、毒蛇窟に止宿して害を蒙らざるに驚き、二弟及び弟子と共に歸佛出家す。これ以下は、三迦葉の化導なり。

夢幻と陽炎、水月及び谷響の如く、皆自性有ること無しと、是の如きの法輪を轉ず。諸の因緣の法に入り、斷ならず亦常ならず、諸の惡見を遠離すと、是の如きの法輪を轉ず。無有を遠離して、法に非ず非法に非ず、本より自ら生滅せずと、是の如きの法輪を轉ず。實際非實際、眞如非眞如は、諸法の體性を示すと、是の如きの法輪を轉ず。眼耳鼻舌身、及び意皆實ならず、體性は空にして思無しと、是の如きの法輪を轉ず。是の如きの法輪を以て、諸の未だ覺せざる者を覺す。一切法の體性は、我自ら已に覺知せり。他從り覺悟せず。名けて自然人と曰ふ。法に於て自在を得たり。故に說いて法王と爲す。理を知り非理を知る。故に名けて導師と爲す。應に隨つて法を演說し、諸の群生を敎化して、能く彼岸に到らしむ。故に名けて敎主と爲す。諸の路に迷へる者の爲に、眞實の法を演說し、之を彼岸に度らしむ。故に[九四]無上師と名く。四攝及び智を以て、普く諸の世間を攝し、生死の稠林を越えしむ。故に名けて商主と爲す。法に於て罣礙無し。故に法自在と名く。正法輪を轉ず。故に名けて法王と爲す。師と名け、持法と名け、無上法主と名く。亦大德主と名け、亦戒願滿と名け、亦施無畏と名け、亦示涅槃と名け、亦能降伏と名け、亦能自解と名け、亦能悟心と名く。智慧の大光明、普く一切を照し、無明の黑暗を破す。世の爲に醫王と作り、能く煩惱の病を除き、善く諸の毒箭を拔けば、無上導師と名く。三十二相有り、八十種好を具ふ。身分皆微妙にして、衆生に隨順す。十力・四無畏・十八不共法、大乘の勝牟尼は、是の如きの廣德を具す。無上の正法輪、如來の勝功德、若し廣く說かんと欲せば、劫を窮むるも盡すこと能はず。佛智は邊有ること無し。廣大なること虛空の如し」と。

【九四】 無上師(Anuttara)。佛十號の一、無上の士夫なり。人中最勝之に過ぎたる者なければ無上士といふ。

解說し、法の如く修行す。故に[九二]肉髻無能見頂と名く。長夜に於て、父母諸尊沙門婆羅門を頂禮し、香油を以て其の足下に塗り、及び爲に髮を淨む。一切來る者には、皆花鬘を以て其の頂上に繫ぐ。故に[九三]眉間白毫右旋淸淨光明と名く。長夜に於て、恒常に門を開きて大に施し、普ねく衆生を請じ意に隨つて與ふ。亦衆生を勸めて、是の如きの施を行じ、善友に親近して、恒に捨辨せず。法を求めて師を重んじ、艱劬を憚らず、心に懈怠無し。聲聞・緣覺・菩薩・如來・父母・師長の所に於て、種種の香油を以て燈を然し、及び妙好端正なる如來の形像を造り、妙寶を以て莊嚴す。又、白寶を以て眉間に安置し、如來の相好を作つて、諸の衆生を勸めて菩提心を發し、無量の諸の善行を修せ令む。故に得大勢と名く。成就那羅延力と名け、成就如來無畏願力と名け、說法不錯亂と名け、覺悟無言說と名け、願力能令一切衆生隨類各解と名け、無失念と名け、無異想と名け、如實了知諸衆生心と名け、非擇滅捨と名け、欲行三昧不斷と名け、精進不退と名け、念不退と名け、智不退と名け、解脫不退と名け、解脫知見不退と名け、從智出一切身語意業隨智慧行と名け、過現未來智障無礙と名け、得無礙解脫と名け、善入衆生之行と名け、如應說法と名け、善能超過一切音聲相彼岸と名け、善對答一切異類音聲と名け、迦陵頻伽聲と名け、天鼓聲と名け、天樂聲と名け、地大振動聲と名け、大海王聲と名け、大龍王聲と名け、大雲聲と名け、隨諸衆生類聲と名け、無著無礙令諸衆會生歡喜心と名け、梵釋天王之所供養と名け、阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽・歡喜心・瞻仰目不暫捨と名け、聲聞衆之所承事と名け、菩薩衆之所恭敬讚歎と名け、無悕求說法と名け、說一字一句皆不唐捐と名け、說法以時と名く。彌勒。我、今、略して如來の功德を說けり。若し廣く說かば、劫を窮むるとも盡きじ』と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

『處無く戲論無く、生も無く亦滅も無し、　體性、空寂靜なりと、　是の如きの法輪を轉ず。　出でず亦入らず、　因も無く、亦相も無し。　一切の法、平等なりと、　是の如きの法輪を轉ず。

【九二】肉髻。三十二相中の第一。

【九三】眉間白毫右旋。三十二相中の第四。以上、三十二相中の二十五相と八十種好中の一相を說く。

し、貧窮下賤に於て、心に輕欺せず、常に憐愍を生じ、是の如き等の願力堅固に在つて、捨棄せざるが故に、[八一]踝骨不現と名く。長夜に於て、常に己が過を省みて、彼の短を訟はず、永く鬪諍を離れ、身語意業恒常に清淨なるが故に、[八二]兩肩平滿と名く。長夜に於て、沙門婆羅門に在りて恭敬心を生じ、來るを迎へ去るを送る。善く諸教を解して、無所畏を得、鬪訟者有れば、教へて諍はざら令む。又、諸王臣佐及び一切の衆生を教へて、忠孝を修し、善行を修行し、佛法を增長せ令む。故に[八三]師子頷と名く。長夜に於て、諸の衆生の所有樂欲に隨つて、一切施與し、善言をもつて、安慰して皆歡喜せ令め、願力堅固なれば、[八四]具四十齒と名く。長夜に於て、兩舌鬪諍せず。鬪諍有る處には、其の兩邊を和して、各〻歡喜せ令む。故に[八五]齒不踈缺と名く。長夜に於て、常に善事を修して惡法を遠離し、常に衆生に乳酪及び淨き衣服を施す。白土を以て泥と爲して佛塔を掃拭し、衆の白花を以て佛塔を供養す。是の如き等の功德を具するが故に、[八六]齒白齊密と名く。長夜に於て出す所の語言、諸の衆生をして、心に喜樂を生ぜ令め、他の過を求めず、平等心を以て、諸の衆生に勸めて、正法を演說す。故に[八七]於諸味中得最上味と名く。長夜に於て、衆生を惱まさず、病苦の者有れば、其の所應に隨つて之を療除し、求むる所の美味は、意に隨つて之を與へ、心に悋を生ぜず。故に[八八]梵音聲と名く。長夜に於て、妄語せず、麁獷語せず、惡語せず、常に慈悲喜捨の四梵住の處に住し、柔軟音聲を以て、衆生の爲に法を說きて、皆歡喜心を生ぜしむ。故に[八九]眼靑紺色と名く。長夜に於て、父母師長に在つて常に恭敬を生じ、一切衆生を觀ること、猶、一子の如し。來り求むる者有れば、恒に慈悲を起して、諸の衆生を勸めて、佛像塔廟を觀ぜしむ。故に[九〇]眼睫如牛王と名く。長夜に於て、心下劣ならず、意常に廣大なり。諸の衆生を勸めて、無上法を修せしめ、顰蹙を遠離して、恒常に微笑し、善友に親近して、先言慰喩す。故に[九一]舌廣大と名く。長夜に於て、一切の語過を遠離し、恒常に聲聞・辟支・菩薩・如來及び諸の法師を讃歎し、經典を受持し讀誦し書寫して、人の爲に

【八一】踝骨不現。八十種好中の第十四。

【八二】平肩平滿。三十二相中の第十四。

【八三】師子頷。三十二相中の第十三。但、彼には頷を頰と作す。

【八四】具四十齒。三十二相中の第七。

【八五】齒不疎缺。三十二相中の第八の不疎。

【八六】齒白齊密。三十二相中の第九の齒白と、第八の齒密とを合す。

【八七】諸味中上味。三十二相中の第十一。

【八八】梵音聲。三十二相中の第十。

【八九】眼靑紺色。三十二相中の第六。

【九〇】眼睫如手王。三十二相中の第五。

【九一】舌廣大。廣長舌相といふ。三十二相中の第十二、舌軟薄は、これに相當す。

に、諸の法を聞く者、心に希有を生ず。故に[七〇]蹲如[七一]伊尼鹿王と名く。長夜に於て正法を聽聞し受持し讀誦し、說の如く修行し、他の爲に解說し、方便をもつて善く甚深の句義を知る。老病死する苦惱の衆生に於て、爲に依止と作つて妙法を演說し、輕慢を生ぜず。故に[七二]陰藏隱密と名く。長夜に於て沙門婆羅門を恭敬し、衣服を布施し、梵行の德を顯はし、及び十善を顯はし、自ら慚愧を具へ、及び他を敎へて修行等の事を堅固ならしむ。故に[七三]臂𦟛長と名く。長夜に於て、衆生を惱害せず、身語意業、慈と相應す。故に[七四]身如尼拘陀樹と名く。長夜に於て、飲食常に自ら量を知り、多からず少からず。病者を見ては種種の湯藥を施し、下劣の衆生に於て、常に慈愍を生ず。壞塔を修理し、及び新塔を營み、怖畏ある衆生には、其に無畏を施す。故に[七五]身體柔澤と名く。長夜に於て、父母師長及び應供者を供養し、蘇油を以て身に塗り、其の溫凊に適ひて、澡浴熏香す。上妙の室宅・衣服・飲食・臥具・湯藥を布施して、安隱を得せ令め、香水を以て如來の塔廟を灑掃す。又、香花幢幡寶蓋を以て、佛塔を莊嚴す。故に[七六]眞金色と名く。長夜に於て、衆生を惱害せずして、常に慈忍を修し、諸の衆生に勸めて、十善を修行せしむ。金を以て如來の形像を造り、及び塔廟を造り、或は金彩を以て如來及以塔廟を圖畫す。或は[七七]金末を生じて、佛の形像及以塔廟に散じ、或は幢幡寶蓋を以て、佛塔及び佛の形像を莊嚴す。或は衣服・飲食を以て、衆生に惠施す。故に[七八]一一毛孔一一毛生皆悉光澤分明顯現と名く。長夜に於て、常に智者に親近し、何の法か是れ罪なる、何の法か罪に非る、何の法か修す可く、何の法か修す可からざる、何の法か上と爲し、何の法か中と爲し、何の法か下と爲すかを請問して、其の善き者を擇びて、之を修行し、及び佛塔を掃灑す故に。[七九]七處高と名く。長夜に於て父母及び應供・沙門・婆羅門の遵崇す可き者には、皆悉く供養し、貧窮下賤にて、悕求する所有れば、皆彼の意に隨つて、衣服・飲食・臥具・湯藥を施與す。又、園池林井を修めて、彼の須ふる者に給す、故に[八〇]身上分如師子と名く。長夜に於て、父母及び應供の處に常に能く供養恭敬

【七〇】蹲如伊尼鹿王。三十二相中の第二十六。
【七一】伊尼(Aiņeya)。鹿の梵名。
【七二】陰藏隱密。三十二相中の第二十四。
【七三】臂𦟛長。三十二相中の第二十五。但、三十二相中には髀𦟛長と作す。
【七四】身如尼拘陀樹。三十二相中の第二十一。
【七五】身體柔澤。三十二相中の第十八、上半。
【七六】眞金色。三十二相中の第十八、下半。
【七七】或生金末散佛形像生の字或は以の誤ならん。
【七八】一一毛孔毛生。三十二相中の第二十二。
【七九】七處高。七處平滿相ともいふ。兩足・兩掌・兩肩並に項中の處、皆平滿にして、缺陷なきをいふ。之を三十二相中に加ふる經あり。
【八〇】身上分如師子。三十二相中の第十六。但、三十二相中には身上分を前分と作す。

名け、如清淨地と名く。三十二相を具足するが故に、永斷一切習氣障と名け、隨好を具足して身を莊嚴するが故に、最上妙色無上と名け、丈夫調御士の故に、四無畏と名け、十八不共の佛法を圓滿するが故に、[五九]天人師と名け、一切事を成就するが故に、身口意業無譏嫌と名け、一切相清淨智を成就するが故に、空住と名け、善く能く諸の緣起性平等を了悟するが故に、無相住と名け、一切に於て願求して染著無きが故に、無願住と名け、一切の境界を捨離するが故に、無功用行と名け、眞如法界虛空相無相智境界の故に、如語不虛妄語不異語と名け、幻・陽炎・夢みる所・水月・谷響・鏡像の如しと觀ずるが故に、捨[六〇]阿蘭若と名け、擧足下足衆生を調伏するが故に。行步不空過と名け、一切の無明煩惱愛を斷除するが故に、法城と名け、涅槃の因爲るが故に、見聞皆益と名け、欲界を超過するが故に、出淤泥と名け、色界を超過するが故に、摧魔幢と名け、無色界を超過するが故に、建智幢と名け、是れ法身智身の故に、出過一切世間無邊功德寶と名け、智花開發して解脫の果を成就するが故に、大樹と名け、値ひ難きが故に、優曇華と名げ、心に隨つて願求すれば皆圓滿を得るが故に、[六一]摩尼珠王と名け、諸の業行を成就するが故に、[六二]手足網鞔と名け、長夜に於て、梵行、堅固に護持して動ぜざるが故に、[六三]足下有千輻輪衆相莊嚴と名く。長夜に於て、法の如く供養して父母尊長及び應供者を衞護し、依怙無き者には爲に依怙と作りて命を殺さざるが故に、[六四]手足長と名く。長夜に於て、誓つて殺さず、不殺の功德を演說し、諸の衆生に不殺を勸め、諸の衆生を救護するが故に、[六五]手足柔軟と名く。長夜に於て、父母を供養し、尊上應供の人に承事し、蘇油を以て身を潤し、自ら手に塗り摩して、歡喜して懈ること無ければ、[六六]手足網鞔と名く。長夜に於て、善く能く[六七]布施・愛語・利益・同事をもつて、衆生を攝受するが故に、[六八]足下安平と名く。長夜に於て、恒常に勝上の法を增長するが故に、[六九]身毛右旋及以上靡と名く。長夜に於て、如來塔所に、自ら手をもつて修營し供養し灑掃す。如來の法を聞けば、身毛爲に竪ち、心に希有を生ず。復、衆生の爲に正法を演說する

【五九】天人師(Devamanusyā-śāstṛ)。如來十號の一。天と人との教師なれば、天人の師と名く。

【六〇】阿蘭若(Āranya)。譯、無諍聲、閑寂、遠離處。比丘の住處。

【六一】摩尼(Maṇi)。譯、珠、寶、離垢、如意。珠の總名。

【六二】手足網鞔。三十二相の一にして、次にも重ねて出づ。

【六三】足下有千輻輪相。三十二相中の第三十一。

【六四】手足長。三十二相中の第二十七。

【六五】手足柔軟。三十二相中の第二十九。

【六六】手足網鞔。三十二相中の第三十。

【六七】布施等。四攝法といふ。

【六八】足下安平。三十二相中の第三十二。

【六九】身毛右旋上靡。三十二相中の第二十三。

名け、離貪と名け、離瞋と名け、離癡と名け、盡漏と名け、心淨解脫と名け、智淨解脫と名け、宿命智と名け、大龍と名け、所作已辦と名け、離重擔と名け、逮得己利と名け、遠離生死結縛と名け、正智心善解脫と名け、善到一切心自在彼岸と名け、到施彼岸と名け、到戒彼岸と名け、到忍彼岸と名け、到精進彼岸と名け、到禪定彼岸と名け、到智慧彼岸と名け、願成就と名け、住大慈と名け、住大悲と名け、住大喜と名け、住大捨と名け、精勤攝衆生と名け、得無礙辯と名け、與世間作大依止と名け、大智と名け、念慧行覺成就と名け、得正念・正斷・正神足通・五根・五力・菩提分法[五六]奢摩他毘鉢舍那と名け、渡生死大海と名け、住彼岸と名け、住寂靜と名け、得安隱處と名け、得無畏處と名け、摧伏煩惱魔と名け、丈夫師子と名け、離毛竪怖畏と名け、無垢と名け、智者と名け、得三明と名け、度四河と名く。制多を持するが故に刹利と名け、一切の罪垢を遠離するが故に婆羅門と名け、無明藏を破壞するが故に比丘と名け、染著を超過するが故に沙門と名け、諸漏を盡すが故に清淨者と名け、十力を持するが故に大力者と名け、身語意を修むるが故に[五七]婆伽婆と名け、是れ法王の故に王中の王と名く。轉勝法輪と名け、利益衆生と名け、不變壞說法と名け、受一切智位と名け、成就七菩提寶と名け、得一切法寶境界と名け、衆會瞻仰と名け、能調伏未調伏者と名け、善能與諸菩薩受記と名け、得七淨財と名け、成辦一切樂と名け、隨一切意悉捨と名け、與一切衆生安樂と名け、持金剛勝智と名け、普遍眼と名け、見一切法無障礙と名け、普智作大神通と名け、演大法と名け、一切世間無有厭足と名け、光大清淨と名け、一切世間親近者と名け、知衆生器と名け、大嚴と名け、[五八]有學無學圍遶と名け、普照と名け、大幢王と名け、遍光明と名け、大光普照と名け、無雜對諸問難と名け、無分別と名け、光明遍照と名け、甚深難知難見難解般若波羅蜜光明場と名け、大梵と名け、寂靜威儀と名け、成就一切勝行と名け、持妙色と名け、見無厭足と名け、諸根寂靜と名け、資糧圓滿と名け、得調柔と名け、得勝調柔寂靜と名け、諸根調伏藏と名け、如闘象王と

【五六】奢摩他(Samatha)、毘鉢舍那(Vipaśyanā)。前者は止なり、後者は觀なり。

【五七】婆伽婆(Bhagavat)。世尊と譯す。

【五八】有學無學。小乘四果の學者中、前の三果を有學といひ、第四果を無學といふ。前三果は、尙學修すべき道あればなり。

有らば、乃ち名けて佛と爲し、[五四]正遍知と名け、自然悟と名け、法王と名け、導師と名け、大導師と名け、商主と名け、自在と名け、法自在と名け、轉法と名け、法施主と名け、大施主と名け、善行圓滿と名け、意樂滿足と名け、說者と名け、作者と名け、安慰者と名け、安隱者と名け、勇猛者と名け、戰勝と名け、作光と名け、破暗と名け、持燈と名け、大醫王と名け、療世間と名け、拔毒刺と名け、離障智と名け、普觀見と名け、普觀察と名け、普眼と名け、普賢と名け、普光と名け、普門と名け、端嚴と名け、無所著と名く。大地の如くなるが故に、名けて平等と爲し、須彌山王の如くなるが故に、名けて不動と爲し、諸の功德を成就して、世間を出過するが故に、最尊と名け、一切の法に達するが故に、無見頂と名け、世間の煩惱黑暗を出過するが故に、明燈と名け、最極甚深にして底を窮むること難きが故に、大海と名け、一切菩提分の法寶具足するが故に、寶所と名け、繫無く著無く心解脫するが故に、無染と名け、諸法に通達するが故に、不退轉と名け、衆生を利益して處を擇ばざるが故に、如風と名け、一切の煩惱を焚燒するが故に、如火と名け、一切の分別煩惱を滌除するが故に、如水と名け、平等法界は中無く邊無く礙無く神通慧の所行なるが故に、如空と名け、一切の法障を除くが故に、住無障智と名け、世間眼所行の境を超過するが故に、遍一切法界と名け、身世間一切の境界に染せられざるが故に、最勝人と名く。無量智と名け、演說世間師と名け、[五五]制多と名け、出世間と名け、不染世法と名け、世間勝と名け、世間自在と名け、世間大と名け、世間依止と名け、到世間彼岸と名け、世間燈と名け、世間上と名け、世間尊と名け、利益世間と名け、隨順世間と名け、一切世間了知と名け、世間主と名け、世間應供と名け、大福田と名け、最上と名け、無等等と名け、無比と名け、常正實と名け、一切法平等住と名け、得道と名け、示道者と名け、說道者と名け、超過魔境と名け、能摧伏魔と名け、出生死獲得淸涼と名け、離無明黑暗と名け、無疑惑と名け、離煩惱と名け、離悕求と名け、除諸見惑と名け、解脫と名け、淸淨と

【五四】正遍知。梵語三藐三佛陀(Samyak-sambuddha)。佛十號の一。眞正に遍く一切法を知るをいふ。

【五五】制多(Caitya)。積聚の義なり。義翻して靈廟といふ。塔婆のこと。

らん」と。

爾の時、[50]彌勒菩薩、前みて佛に白して言さく、「世尊。無量の諸の來れる大菩薩衆は、如來の法輪を轉じたまへる所有功德を聞きたてまつらんと願へり。唯願はくば世尊。唯願はくば世尊。略して爲に法輪の性を宣說したまへ」と。

佛、彌勒及び諸の菩薩に告げて言はく、「善男子。法輪は甚深なり、取る可からざるが故に。法輪は見難し、二邊を離るるが故に。法輪は悟り難し、作意及び不作意を離るるが故に。法輪は知り難し、識を以て識る可からず、智を以て知る可からざるが故に。法輪は雜ならず、[51]二障を斷除して、方に能く證するが故に。法輪は微妙なり、諸の喩を離るるが故に。法輪は堅固なり、金剛の智を以て方に能く入るが故に。法輪は沮み難し、本際無きが故に。法輪は戲論無し、攀緣を離るるが故に。法輪は盡きず、退失すること無きが故に。法輪は普遍なり、虛空の如くなるが故に。

彌勒。法輪は、一切諸法の本性を顯示す。寂靜にして不生不滅なり。處所有ること無く、分別に非ず分別せざるに非ず、實相に到り、彼岸に昇る。空無相無願無作なり。體性淸淨にして、諸の貪欲を離る。[52]眞如に會し、法性に同じ、實際に等し。不壞不斷にして、無著無礙なり。善く緣起に入りて、二邊を超過し、中間に在らず。能く傾動する無く、諸佛に契ひ、無功用行なり。不進不退・不出不入なり。而も所得無く、言說す可からず。性は唯是一にして、諸法に入る。是を不二と爲す、安立す可きに非ず。第一義に歸し、實相の法に入る。法界平等にして、數量を超過し、言語の路斷ち、[53]心行の處滅す。譬喩す可からず。平等なること、空の如し。斷常を離せず、緣起を壞せず。究竟寂滅にして、變易有ること無し。衆魔を降伏し、諸の外道を摧き、生死を超過して、佛の境界に入る。聖智の行ずる所、辟支の證する所、菩薩の趣く所、諸佛咨嗟す。一切如來に、同じく是の如き無差別の法有り。彌勒よ、轉ずる所の法輪の體性は、是の如し。若し是の如く法輪を轉ずる者

【五〇】彌勒菩薩(Maitreya)。釋迦如來の佛位を紹ぐ、補處の菩薩なり。これより以下、此品の終りまで、普曜經になし。梵本にあり。

【五一】二障。煩惱障と所知障なり。業を發し、生を潤して、有情を縛して三界五趣の生死の中に在らしめ、以て涅槃寂靜の理を障ふるを、煩惱障と名け、愚癡迷闇にして、諸法の事相及び實性を了知せず、以て菩提の妙智を障ふるを、所知障と名く。前者は我執より生じ、後者は法執より生ず。

【五二】眞如・法性・實際。眞如は諸法の體性なれば、また法性といふ。眞如・法性は、諸法の際極なれば、實際といふ。

【五三】心行處滅。心行とは心念のこと。心は刹那に遷流するを以て、心行といふ。究竟の法輪は、心念の處滅して、思念すべからざるをいふ。

す。行滅すれば、即ち識滅す。識滅すれば、即ち名色滅す。名色滅すれば、即ち六處滅す。六處滅すれば、即ち觸滅す。觸滅すれば、即ち受滅す。受滅すれば、即ち愛滅す。愛滅すれば、即ち取滅す。取滅すれば、即ち有滅す。有滅すれば、即ち生滅す。生滅すれば、即ち老死憂悲苦惱滅す。若し能く是の如く蘊界處に於て、因緣を了語せば、爾の時、[43]多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を成ずることを得ん。是の如き甚深微妙の法は、諸の異道の能く了悟する所に非ず」と。

爾の時世尊、憍陳如の爲に、三たび[44]十二行法輪を轉じ已る。憍陳如等悉く諸法の因緣に了達し、[45]漏盡意解して阿羅漢と成る。即ち是の時に於て[46]三寶出現す。[47]婆伽婆を佛寶と爲し、三たび轉ぜられたる十二行法輪を法寶と爲し、五跋陀羅を僧寶と爲す。佛、法輪を轉ぜし時、六十拘胝の欲界の諸天、八十拘胝の色界の諸天、八萬四千の人、皆悉く[48]遠塵離垢して[49]法眼淨を得たり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『如來、妙梵の音を以て法輪を轉ずれば、其の聲遍ねく十方の佛土に至る。彼の諸の如來、各〻三轉十二行の妙梵の聲を聞き、咸く世尊が波羅奈鹿野苑の中に住して、法輪を轉ずるを見たまふ。

是の時十方の諸佛、皆悉く默然として、法を說きたまはず。彼の土の菩薩、各〻座より起ちて、佛に白して言さく、「世尊。如來、今、何が故に默然として、法を說きたまはざるや」と。爾の時彼の佛、諸の菩薩に告げて言はく、「汝等應に知るべし。釋迦如來、無量劫に於て、勤苦して德を累ね、勇猛精進して、菩薩道を行じたまへること、無量の菩薩の行に超過し、娑婆世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。一切を利益せんとて、大慈悲を起して、法輪を轉じたまふ。其の佛の梵音、遍ねく十方無邊の刹土に至る。我、今、彼の說法の聲を聞く。是の故に默然たり」と。諸の菩薩衆、佛の語を聞き已つて、皆、阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、是の誓を作して言はく、「願はくば我れ當來に速かに佛道を成じ、無漏の法眼を以て、衆生を開悟すること、彼の佛に同じか

【四三】　多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀(Tathāgatārhānsamyaksaṃbuddha)。譯、如來、應供正徧知。如來十號中の三なり。
【四四】　十二行法輪(Dvādaśākāra-dharmacakra)。四諦を說くに、一々に示勸證の三轉をなし、以て十二の敎法となるをいふ。示轉とは、「此は是苦なり、此は是集なり」等と、四諦の法相を示すなり。勸轉とは、「苦は當に知るべし、集は當に斷ずべし」等と、諦の修行を勸むるなり。證轉とは、「苦は我已に知り、集は我已に斷ぜり」等と、佛自ら己を擧げて證と爲すなり。前に既に其下に之を說けり。
【四五】　漏盡意解。一切の煩惱斷盡して心意解脫するなり。是れ小乘阿羅漢の證果なり。
【四六】　三寶(Ratnatraya)。
【四七】　婆伽婆(Bhagavat)。多義あれども、多くは單に世尊と譯す。
【四八】　遠塵離垢。塵垢を遠離するなり。塵垢とは煩惱の總名なれども、今は八十八使の見惑を指す。八十八使の見惑を斷じて正見を得るを、遠塵離垢得法眼淨といふ。是れ小乘初果の得益なり。
【四九】　法眼淨。初果に於て分明に四眞諦の理を見るをいふ。

我れ先に他從り聞かず。善く隨順して、理の如く思惟せしに由つて、智を生じ眼を生じ明を生じ遍を生じ慧を生じ光を生ぜり」と。

復、比丘に告ぐらく「我れ先に未だ四聖諦を見ず、未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざりし時、正智未だ現ぜざりき。我れ四聖諦の法輪を證見し已りてより、心、解脫を得、慧、解脫を得て、復、退失せず。而して正智を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。我が生已に盡き、梵行已に立し、所作已に辦じて、後有を受けず」と。爾の時世尊、梵音聲を出す。是の如きの梵音は、無量の功德より成就せし所なり。無量劫來、眞實を修習し、師を假らずして自然に悟れり。是の妙聲を發し、憍陳如等に語つて言はく「眼は是れ無常なり、苦なり、空なり、無我なり、無人なり、無衆生なり、無壽命なり。猶、腐草の、雜土を牆と爲して、危脆不實なるが如し。眼耳鼻舌身意の如きも、亦復是の如し。憍陳如。一切の法は、因緣より生じて、體性有ること無し。常を離れ斷を離れて、猶、虛空の如し。作者及以受者無しと雖も、善惡の法は敗亡せず。憍陳如。[三八]色は是れ無常・苦・空・無我なり。[三九]受・[四〇]想・[四一]行・[四二]識も、亦復是の如し。愛を水と爲して、潤漬せる因緣に由つて、衆苦增長す。若し聖道を得て、諸法の體性皆空なることを證見せば、卽ち能く永く是の如きの衆苦を滅せん。憍陳如。彼の分別の正しからざる思惟に由つて、無明を生ず。更に餘の無明の因と爲るもの有ること無し。而して此の分別は無明に至らず。復、無明に由つて諸の行を生ず。而して此の無明は諸の行に至らず。乃至、行は識に緣たり、識は名色に緣たり、名色は六處に緣たり、六處は觸に緣たり、觸は受に緣たり、受は愛に緣たり、愛は取に緣たり、取は有に緣たり、有は生に緣たり、生は老死憂悲苦惱に緣たり。是の如き等を、世間の因と爲す。更に餘の能く其の因と爲るもの有ること無し。諸の法を生ずと雖も、而も因は法に至らず。竟に我・人・衆生・受者無し。此の身を捨てて彼の蘊に至り、理の如く思惟して分別する所無くんば、卽ち無明を滅す。無明滅するに由つて、卽ち行滅

【三八】色。以下五蘊なり。色とは五根五境等の有形の物質を總該す。
【三九】受。境に對して、事物を受けこむ心の作用。
【四〇】想。境に對して、事物を想像する心の作用。
【四一】行。其の他、境に對して、瞋り貪る等の善惡に關する一切の心の作用なり。
【四二】識。境に對して、事物を了別識知する心の本體なり。

の二邊を捨つべし。我、今、汝が爲に[28]中道を說かん。汝應に諦に聽きて、常に勤めて修習すべし。何をか中道と謂ふ。[29]正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定、是の如きの八法を、名けて中道と爲す」と。

佛、諸の比丘に告ぐらく、[30]「四聖諦有り。何等をか四と爲す。所謂、苦諦・苦集諦・苦滅諦・證苦滅道諦なり。[31]比丘、何等を名けて、苦聖諦と爲す。所謂、生苦・老苦・病苦・死苦・[32]愛別離苦・[33]怨憎會苦・[34]求不得苦・[35]五盛蘊苦、是の如きを、名けて苦聖諦と爲す。何等をか名けて、苦集聖諦と爲す。所謂、愛と取と有と喜と、貪と倶に勝樂を悕求す。是の如きを、名けて苦集聖諦と爲す。何等をか名けて苦滅聖諦と爲す。所謂、愛と取と有と喜と、貪と倶に勝樂を悕求する、此の一切を盡す。是の如きを名けて苦滅聖諦と爲す。何等をか名けて證苦滅聖道諦と爲す。即ち八聖道なり。所謂、正見、乃至、正定、此を卽ち名けて證苦滅聖道諦と爲す」と。

復、比丘に告ぐらく、「是の如きの苦の法は、我れ先に他從り聞かず。善く隨順して、理の如く思惟せしに由つて、智を生じ明を生じ遍を生じ慧を生じ光を生ぜり。比丘よ、是の如き苦集の法は、我れ先に他從り聞かず。善く隨順して、理の如く思惟せしに由つて、智を生じ眼を生じ明を生じ遍を生じ光を生ぜり。比丘よ。是の如きの苦集の滅の法は、我れ先に他從り聞かず。善く隨順して、理の如く思惟せしに由つて、智を生じ眼を生じ遍を生じ慧を生じ光を生ぜり。比丘よ。是の如きの苦滅の證道は、我れ先に他從り聞かず。善く隨順して、理の如く思惟せしに由つて、智を生じ眼を生じ明を生じ遍を生じ慧を生じ光を生ぜり」と。復、比丘に告ぐらく、[36]「苦は應に知るべく、集は應に斷ずべく滅は應に證すべく道は應に修すべし。是の如きの四法は、我れ先に他從り聞かず。善く隨順して、理の如く思惟せしに由つて、智を生じ明を生じ遍を生じ慧を生じ光を生ぜり」と。復、比丘に告ぐらく、[37]「我已に苦を知り、已に集を斷じ、已に滅を證し、已に道を修せり。是の如きの四法は、

【二八】中道(Madhyama-pratipad)。

【二九】正見(Samyagdṛṣṭi)。正思惟(〃-saṃkalpa)。正語(〃-vāc)。正業(〃-karmānta)。正命(〃-ājīva)。正精進(〃-vyāyāma)。正念(〃-smṛti)。正定(〃-samādhi)。

【三〇】四聖諦(Catur-āryasatya)。

【三一】比丘何等名爲苦聖諦以下は、三轉法輪中の示轉なり。

【三二】愛別離苦。自己の愛するものに別るゝ苦痛。

【三三】怨憎會苦。我の怨み憎む人にも、又忌み嫌ふ事物にも、會せざるべからざる苦なり。

【三四】求不得苦。物を求めて得ること能はざる苦なり。

【三五】五盛蘊苦。人の一身は色受等の五蘊より成り、其五蘊の勢用盛なれば、盛蘊と云ひ、盛蘊一切に受くる苦を、五蘊盛苦といひ、又五盛蘊苦といふ。卽ち心身の總苦なり。生老病死の四苦に、以上の四苦を加へて、八苦と稱す。

【三六】苦應知以下は、三轉法輪中の勸轉なり。

【三七】我已知苦以下は、三轉法輪中の證轉なり。

て、右遶三匝し、合掌して佛に向ひ、如來に法輪を轉ぜんことを勸請す。是の諸の衆會、咸く是の言を作さく、「唯願はくは世尊、諸の衆生を利益し、安樂にし、愍念したまふが故に、大法雨を雨らし、大法幢を建て、大法螺を吹き、大法鼓を擊ちたまへ」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時、衆中に一菩薩有り。名を轉法[二六]と曰ふ。衆寶の輪[二七]を持つ。備に千輻有り。莊嚴綺麗、稱比す可からず。千の光明を放つ。又、花鬘・寶鈴・微妙の繒綵、無量の寶具を以て、以て嚴飾を爲す。是の菩薩の先の願力に由るが故に、此の輪の生ずるを感じ、如來を供養するなり。過去の諸佛、皆此の輪有りて、然る後に法を轉じたまひしなり。時に彼の菩薩、是の輪寶を持ち、如來に奉獻して偈を說いて言はく、

「尊、憶ふに、過去の時、然燈佛、記を授けたまひき。當に正覺を成することを得たまふべし。號けて名を牟尼と曰はんと。我も亦、彼の時に於て、此の弘誓の願を發しき。導師、佛を成ずることを得たまはゞ、當に此の輪寶を奉ずべしと。一切の人天等、及び諸の菩薩衆、其の數量有ること無し。皆法輪を轉じたまはんが爲に、各ゝ己が神力を以て、種種の供具を齎す。寶臺・花蓋等、劫を窮めて、說くも盡きず。三千大千界の、天・人・阿修羅・諸の龍神衆等、咸悉く一心に請ふ」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來、初夜の時に於て、默然として中夜分を過ぎ、大衆を安慰して、歡喜を生ぜ令む。後夜に至り已つて、五跋陀羅を喚び、之に告げて言はく、「汝等應に知るべし。出家の人に、二種の障有り。何等をか二と爲す。一には、心、欲境に著して離るること能はず。是れ下劣の人なり。無識の凡愚なり。聖の所行に非ず。道理に應ぜず。解脫の因に非ず。離欲の因に非ず。神通の因に非ず。成佛の因に非ず。涅槃の因に非ず。二には、正しく思惟せず、自ら其の身を苦しめて出離を求め、過現未來に皆苦の報を受くるなり。比丘よ。汝等當に是の如き

【二六】轉法（Dharmacakravartin）。
【二七】輪（Cakra）。輪寶。

き。十方に行くこと七歩、曾つて迷惑の心無かりき。　即ち梵音の詞を以て、而も是の如きの唱を作せり。　我、今、一切に於て、最尊最勝爲り。　轉輪王の位を捨てて、當に衆生を利益すべしと。　六年苦行已りて、卽ち菩提の座に詣り、諸の魔軍を降伏して、疾く無上道を成ぜり。　梵釋諸の天衆、法輪を轉ぜんことを勸請するや、諸の世間を哀愍して、嘿然として請を受けぬ。　堅固の願力を以て、鹿苑の中、仙人墮せる所の處に向ひ、無上法を演說せん。此の法は、無數劫に修習して證せる所、汝等、聞かんと樂はん者は、速かに應に來つて聽受すべし。　人天の身は得難く、佛の出世は甚だ難し。　法を聞いて信心を起す、斯の人亦復難し。　汝八難に生れず。　今、人天の身を獲たり。　佛に値ひて、正法を聞かば、而も能く淨信有らん。　汝、百千劫に於て、未だ曾つて正法を聞かざりき。　今、値遇することを得たり。　宜しく應に善く修習すべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「光明網中に、是の如きの偈を說き、三千大千世界の一切の人天等の衆を覺悟すらく、『汝、速かに來る可し。今、佛世尊、法輪を轉ぜん』と。諸の天・龍、是の語を聞き已つて、其の本宮より佛所に來詣す。爾の時、地神、神通力を以て、此の道場をして、縱廣正等にして、七百由旬なら令め、種種に莊嚴し、周遍して清淨なり。虛空の天神、復、種種の幢幡寶蓋を將ち、以て嚴飾を爲す。欲界・色界の諸天子等、八萬四千の寶師子座を將て、道場の中に置き、各ゝ自ら請言すらく、「世尊、我を哀愍したまふが故に、爲に此の座に坐して、正法輪を轉じたまへ」と。

諸の比丘よ。爾の時、東西南北四維上下、十方の刹土の、無量拘胝の諸の菩薩衆の、德本を宿植せるもの、佛所に來至し、佛足を頂禮し、右遶三匝し、合掌恭敬して、如來に法輪を轉ぜんことを勸請す。十千三千大千世界の、所有釋・梵・護世、及び餘の無量の諸天子衆、皆悉く佛足を頂禮し

世の聖種智を證したるべきや」と。

爾の時世尊、五人に語つて言はく「汝等應に如來を稱喚して、長老と爲すべからず。汝の長夜をして、利益する所無から令めん」と。又、五人に語るらく、「我れ已に甘露の法を證得せり。我れ今能く甘露の道に向ふことを知れり。我は即ち是れ佛にして、[二二]一切智を具せり。寂靜無漏にして、心に自在を得たり。汝等須く來るべし。當に汝に法を示して、汝を教授すべし。汝應に聽受して、說の如く修行すべし。即ち現身に於て諸漏を盡すことを得て、智慧明了に、解脫に住し、梵行成就し、所作皆辦じて、後有を受けざらん」と。又、五人に告ぐらく、「汝、昔、我を嫌ひて、倶に是の言を作せり。長老瞿曇、世樂に耽著して、堅く戒を持せず。煩惱を斷ぜんと欲して、便ち即ち退墮せりと。我適、汝に近づくに、各〻自ら安んぜざりき。是の故に當に知るべし、如來を稱呼して長老と爲すを得ざることを」と。五跋陀羅、倶に佛に白して言さく、「世尊。我、今、願はくは佛法の中に於て、沙門と爲ることを得ん」と。佛言はく、「[二三]善來比丘」と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きて、便ち沙門と成りぬ。鬚髮の長短は、剃りて七日を經たるが如し。威儀整肅にして[二四]百臘の比丘の如し。即ち座より起ち、佛足を頂禮して、先罪を懺悔し、即ち如來に於て大師の想を爲し、尊重瞻仰して歡喜心を生ず。

爾の時世尊、池に入りて澡浴す。浴し訖つて、復、一處に於て、靜坐思惟すらく、「過去の諸佛は、當に何の座に於て、法輪を轉じたまひしや」と。是の念を作す時、忽ち是の處に於て、千の寶座有つて、地より涌出す。如來爾の時、本座より起ち、恭敬圍遶して、三の高座より初めて、第四の座に至りて、結加趺坐す。時に五跋陀羅、佛足を頂禮して、佛前に坐す。諸の比丘よ。爾の時世尊、大光明を放てり。其の光遍ねく三千大千世界を照す。光明網中に於て、頌を說いて曰く、

「彼の兜率宮より、[二五]龍毘園に降生す。　梵釋咸く承け捧ぐるに、威の猛きこと師子の如くなり

【二二】一切智。佛智の名。一切の法を知了すること。

【二三】善來比丘。善來とは、印度の比丘、來人を歡迎ずる辭なり。當人の願力と佛の威神力とに由て、出家を願ふ人に向つて、佛、善來比丘と稱すれば、便ち沙門と爲りて、剃髮染衣の相自ら備はり、身に具足戒を成ぜり。

【二四】百臘。臘は又﨟と作す。比丘受戒の後に、三旬の安居終るを、臘と名く。出家の年歲は、俗に異り、受戒以後の安居の數を以て、年次となす。百臘とは、長年月の間修道せる耆宿のことなり。

【二五】龍毘園(Lumbini)。迦毘羅城の東にありて、摩耶夫人が佛を生みし園なり。

し、彼の船人に問ふ。答へて言はく、「我に價直を與へば、當に相濟すべきのみ」と。

爾の時世尊、船人に報じて言はく、「我に價直無し」と。船人言はく、「若し價直無くんば、終に相濟さじ」と。如來爾の時、虚空に飛騰して、彼岸に達す。船人、佛の是の神通を現ぜるを見て、乃ち自ら責めて言はく、「我れ識る所無し。云何ぞ是の如き聖人を渡さざりしや」と。心に憂惱を生じ、悶絶して地に躃れ、良久しうして乃ち蘇る。[一七]頻婆娑羅王に詣りて、具に所見を陳ぶ。王、是の事を聞き、即ち船人に勅すらく、「自今已往、沙門の濟を求むるに、價直を受くること勿れ」と。

諸の比丘よ。如來、波羅奈に至り、晨朝の時に於て、衣を著、鉢を持ちて、城に入りて食を乞ひ、還つて本處に至り、飯食し訖つて、鹿野苑の中に詣る。時に五跋陀羅、遙に世尊を見、共に相謂つて言はく、「沙門瞿曇。放逸貪著にして戒を持すること能はず。煩惱を斷ぜんと欲して、尋いで復退墮し、便ち禪定を失へり。先に苦行を修して、尚能くする所無し、何に況んや、今日、恣に美食を受けて、安樂に住するをや。是の懈怠の人は、明かに[一八]道器に非ず。我等、今、敬問することを須ひじ。坐處を敷置し、水を給して足を洗ひ、飯食を施設する、一切爲すこと莫らん。其の自ら來るに隨ひ、應に爲に起つべからず。彼若し坐せんと欲せば、當に卑座を指して、其をして坐に就か令むべし」と。唯[一九]阿若憍陳如のみ、衆の心に同ぜず。爾の時世尊、漸く五人の居る處に近づく。是の時五人、皆自ら安んぜず。鳥の籠に在りて、火の爲に逼らるるが如し。比丘當に知るべし。世間の衆生にして、佛を覩て安坐し得る者有ること無し。是の時五人皆本要に違ひ、覺えず忽然として倶に起つて佛を迎ふ。或は坐具を敷置する有り。或は水を給して足を洗ふ有り。或は履を[二〇]提ぐる有り、或は衣を持つ有り。皆言はく、「善く來れり、長老瞿曇。請ふ勝座に坐せ」と。爾の時世尊、彼の座に坐し已る。五人前に於て、禮拜問訊し、一面に在りて立ち、佛に白して言さく、「[二一]長老瞿曇。面目端正にして、諸根寂靜なり。身相光明は、閻浮金及び瞻波花の如し。瞿曇。今、應に出

【一七】頻婆娑羅王（Bimbisāra）。摩揭陀國の大王。佛と同年同日に生る。影勝と譯す。

【一八】道器。佛道を修するに堪ふる器量なり。

【一九】阿若憍陳如（Ājñānakauṇḍinya）。五比丘の上首なり。

【二〇】提—麗本・宋本は選に作り、元明二本は提に作る。提の字、意味を取り易し。

【二一】長老瞿曇（Āyuşman Gautama）。長老は、道高く臈長ぜる比丘の通稱。

を見て、即ち前みて問訊し、一面に在りて立ち、佛に白して言さく、「長老〔一〇〕瞿曇。諸根、恬靜にして、端正愛す可し。身色の晃燿は、閻浮金及び瞻波花の如し。仁者。何かなる梵行を修し、師は是れ誰とか爲す、誰に從ひて出家して、進止威儀の安隱なること、乃ち爾るや。今何くより來り、復、何の所に往くか」と。

爾の時世尊、偈を以て答へて曰く、

「我れ本より師有ること無く、世に我と與に等しきものなし。　法に於て自ら能く覺して、清淨
　無漏を證せり」と。

阿字婆言はく、「瞿曇。汝は自ら是れ〔一一〕阿羅漢と謂ふや」と。爾の時世尊、重ねて偈を以て答ふらく、

「我れは世間の、無上導師爲り。當に一切を度すべき、眞の阿羅漢なり」と。

阿字婆言はく、「瞿曇。汝は自ら〔一二〕佛と爲れりと謂ふや。」如來答へて言はく、「我れは世間に於て最も殊勝爲り。一切煩惱の惡法を滅除せり。我を正覺と爲す。」阿字婆言はく、「長老瞿曇。汝今に於ては何の所に往くと爲すや。」世尊答へて言はく、「我れ、今、波羅奈鹿野苑中に往きて、諸の盲冥の衆生の爲に、大光明と作らんと欲す」と。而して偈を說いて言はく、

「我れ波羅奈に往き、鹿野苑の中に於て、盲冥の衆生の爲に、甘露の法鼓を撃ちて、未だ曾つて
　轉ぜざりし所の、無上の勝法輪を轉ぜん」と。

時に阿字婆、佛を辭して南に行き、如來は北に逝きて、伽耶城を經たり。城の中に龍有り。名を〔一三〕善見と曰ふ。　齋を設けて、如來を奉請す。如來食し訖りて〔一四〕盧醯多婆蘇都村に往く。次に、復、〔一五〕多羅聚落に至る。次に、復、〔一六〕婆羅村を經。是の如く遊歷して、皆長者居士の爲に、飲食を奉獻せらる。次第に行きて、恒河の邊に至る。是の時、河水瀑集して、平流岸に彌る。世尊渡らんと欲

〔一〇〕瞿曇(Gautama)。釋種の姓。

〔一一〕阿羅漢(Arhān)。譯、一に殺賊。煩惱の賊を殺す意。二に應供。人天の供養を受くべき意。三に不生。永く涅槃に入つて、再び生死の果報を受けざる意。

〔一二〕佛。佛陀(Buddha)の略。譯、覺者。

〔一三〕善見(Sudarśana)。

〔一四〕盧醯多婆蘇都村(Rohita-vastu)。

〔一五〕多羅聚落梵本(Apāla)。

〔一六〕娑羅村(Sārathipura)。

我が所說に於て、忽ちに忘るること無からん。能く示教して、劬勞を生ぜざら令めん。若し所聞有らば、永く退失すること無からん」と。是の念を作し已つて、彼の外道〔六〕阿羅邏仙人を觀ずるに、聰明にして智有り。煩惱を具すと雖も、三垢微薄なり。若し我が法を聞かば、速かに能く證知せん。今所在爲りやと。佛眼を以て觀見するに、其の命終つて已に三日を經たり。又、是の時に於て、虛空の諸天、是の如きの言を作さく、「彼の仙命終りて、三日を經たり。如來の菩薩爲りし時、已に能く先より如來の大智力有らんを知れり。其の人若し命終せざりしならば、正法を受くるに堪へしならん」と。』復、諸の比丘に告げたまはく、『彼の阿羅邏は、我が法を聞かずして、遂に便ち命終せり。若し命終せざりしならば、我れ當に最初に其が爲に說法せしなるべし。彼れ若し聞き已りなば、卽ち能く證知せしならんと。爾の時世尊、復、是の念を作さく、「誰か應に最初に我が法を受くるに堪ふべき。根性淳熟せば、調柔す可きこと易し。所聞の法に於て、速かに能く開悟せん。清淨にして染を離れ、貪瞋癡薄くば、我が所說に於て、忽ち忘るること無からん。能く示教して劬勞を生ぜざら令めん。若し所聞有らば、永く退失無からん」と。是の念を作し已り、五跋陀羅を觀見するに、根性已に熟して、調柔す可きこと易し。所聞の法に於て、必ず能く開悟せん。清淨にして染を離れ、三垢微薄なり。我が所說に於て、忽ちに忘るること無からん。能く示教して劬勞を生ぜざら令めん。若し我に於て正法を聞くことを得ずんば、復當に退失すべし。我が昔苦行せし時に、謹心をもつて我に事へたりき。我れ當に最初に、彼の五人の爲に、正法輪を轉ずべし。彼れ能く了知せん。具足して戒を施し、善法圓滿せば、解脫前に現じて、諸の障礙を離れんと。卽ち佛眼を以て、五跋陀羅を觀見するに、波羅奈鹿野苑中に在り。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時如來、是の念を作し已つて、菩提樹より〔七〕迦尸國波羅奈城に向ふに、三千大千世界を振動す。是の時〔八〕伽耶城の傍に一外道有り。〔九〕阿字婆と名く。遙かに世尊

【六】阿羅邏仙人(Ārāḍakālāma)。

【七】迦尸(Kāśi)。國の名。迦尸は本と竹の名、此の國、此の竹を出せば、迦尸と名く。今のベナレスの地方なり。

【八】伽耶城(Gayā)。

【九】阿字婆(Ājivaka)。

卷の第十一

[一]轉法輪品第二十六の一

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來は所作已に辦じ、重擔を棄捨して、煩惱の根を拔き、諸の塵垢を淨め、外道を摧滅し、魔軍降伏せり。佛の甚深微妙の理に入り、已に知見を得て、[二]十力・四無所畏・十八不共一切の佛法を成就して、具足せざる無し。[三]五眼淸淨にして、世間を觀察して、是の思惟を作さく、「誰か應に最初に我が法を受くるに堪ふべき。根性淳熟せば、調柔す可きこと易く、所聞の義に於て、速かに能く開悟せん。淸淨にして染を離れ、貪瞋癡薄くば、我が所說に於て、忽ちに忘るること無からん。能く示敎して、劬勞を生ぜざら令めん。若し所聞有らば、永く退失無からん」と。是の念を作し已つて、彼の外道[四]羅摩の子を觀ずるに、聰明にして智有り。煩惱を具すと雖も、三垢微薄なり。若し我が法を聞かば、速かに能く證知せん。彼は非想非非想定を得て、常に弟子の爲に、演說し修習しゐたりき。今何の處に在りや。[五]佛眼を以て觀見するに、其の命終りて、已に七日を經たり。時に諸天有つて、我が足を頂禮し、我に白して言さく、「世尊。彼の人命終つて、七日を經たり。如來の菩薩爲りし時、已に能く先より如來が大智力有らんを知れり。其の人若し命終せざりしならば、正法を受くるに堪へしならん」と。』復、諸の比丘に告げたまはく、『彼の羅摩の子は、我が法を聞かずして、遂に便ち命終せり。若し命終せざりしならば、我れ當に最初に、其が爲に說法せしなるべし。彼れ若し聞き已りしならば、即ち能く證知せしならん。

爾の時世尊、復、是の念を作さく、「誰か應に最初に我が法を受くるに堪ふべき。根性淳熟せば、調柔す可きこと易し。所聞の法に於て、速かに能く開悟せん。淸淨にして染を離れ、貪瞋癡薄くば、

【一】轉法輪品(Dharmacakrapravartana-parivarta)。

【二】十力等。十力、四無所畏、十八不共法の註は、前出。

【三】五眼。肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼、一に肉眼とは肉身所有の眼、二に天眼とは色界の天人所有の眼、人中禪定を修して之を得べし、遠近內外晝夜を問はず能く見ることを得。三に慧眼とは二乘の眞空無相の理を照見する智慧をいふ。四に法眼とは菩薩衆生を度する爲に一切の法門を照見する智慧をいふ。五に佛眼とは佛陀の身中前の四眼を具備するもの。

【四】羅摩の子(Rāmaputra)。

【五】佛眼。五眼の一。佛を覺者と名く。覺者の眼を佛眼と云ふ。諸法實相を照了する眼なり。前四眼、佛に至れば總じて佛眼と名く。

は、文物鮮少にして、林泉は勝に非ず。然るに無量の諸餘の城邑の、土地豐饒に、人民殷盛にして、園林池沼の、清淨にして樂しむ可き有り。何が故に如來、鹿野苑中に於て、法輪を轉じたまふか」と。

爾の時世尊、諸の天子に告げて言はく、「仁者應に是の如きの說を作すべからず。所以は何ん。我れ念ふに、往昔、此の波羅奈城に於て、六十千億那由他の諸佛如來を供養しき。要を以て之を言へば、九萬一千拘胝の諸佛、皆是の處に於て、正法輪を轉じたまへり。一切甚深微妙の法、皆中より出でき。是の故に、此の地は、常に天龍・夜叉・乾闥婆・羅刹等の守護する所と爲れり。是の義を以ての故に、如來は彼の鹿野苑中に於て、法輪を轉ずるなり」と。

之を見るが如し。如來の、諸の衆生の上中下根を觀ずるも、亦復是の如し。如來、爾の時、是の思惟を作さく、「我れ若しは法を說き、若しは法を說かさるも、邪聚の衆生は畢竟知らさらん」と。復、更に、思惟すらく、「我れ若しは法を說き、若しは法を說かざるも、正聚の衆生は、皆能く了知せん」と。復、更に思惟すらく、「我れ若し法を說かば、不定の衆生も亦能く了知せん。我れ法を說かずんば、卽ち了知せざらん」と。諸の比丘よ。如來、爾の時、不定聚の衆生を觀じて、大悲心を起し、是の如きの言を作さく、「我れ本より此等の衆生の爲に、法輪を轉ぜんと欲するが故に、世に出でたり」と。又、大梵天王の請の爲の故に、卽ち偈頌を以て、梵王に告げて言はく、

「我れ、今、汝の請の爲に、當に甘露を雨らすべし。一切諸の世間、天・人・龍神等、若し淨信
　有る者は、是の如きの法を聽受せん」と。

爾の時、大梵天王、是の偈を聞き已つて、歡喜踊躍し、未曾有なることを得、佛足を頂禮し、遶ること無數匝にして、卽ち佛前に於て、忽然として現ぜず。諸の比丘よ。爾の時、地神、虛空神に告げて、是の如き言を唱ふらく、「如來、今、梵王の勸請を受けて、法輪を轉ぜんと欲したまふ。無量の諸の衆生を哀愍するが故に、無量の諸の衆生を利益せんが故に、無量の諸の衆生を安樂にせんが故に、天人を增長して惡趣を損減せんが故に、諸の衆生をして涅槃を得せしめんが爲の故に、當に法輪を轉じたまふべし」と。地神、是の語を作し已るや、一念の頃に於て、虛空神聞きて、展轉して傳へ、阿迦尼吒天に至る。

諸の比丘よ。爾の時、四の護菩提樹天有り。一を〔二一〕受法と名け、二を〔二二〕光明と名け、三を〔二三〕樂法と名け、四を〔二四〕法行と名く。是の四天子、佛足を頂禮して、佛に白して言さく、「世尊。當に何の處に於てか、法輪を轉じたまふべき」と。爾の時、如來、彼の天に告げて言はく、「我れ〔二五〕波羅奈國〔二六〕仙人墮處〔二七〕鹿野苑中に於て、正法輪を轉ぜん」と。彼の天子言はく、「世尊。此の波羅奈鹿野苑中

【二一】受法(Dharmamati)。
【二二】光明(Dharmaruci)。
【二三】樂法(Dharmakāma)。
【二四】法行(Dharmacārin)。
【二五】波羅奈國(Vārāṇasī)。今のベナレスを中心とせる地方なり。
【二六】仙人墮處(Ṛṣipatana)。
【二七】鹿野苑(Mṛgadāva)。又仙人墮處、仙人住處、仙人鹿園、施鹿林などといふ。中天竺波羅奈國に在り。佛成道の後、初めて此に來て、四諦の法を說き、憍陳如等五人の比丘を度す。

「摩伽陀國に、諸の異道多し。　邪見に因るが故に、種種に籌量す。　惟願はくば牟尼、爲に甘露の、最清淨法を開きて、其をして聞くことを得せ令めたまへ。　佛の所證の法は、清淨にして垢を離れ、彼岸に到り、增無く減無く、三界中に於て、超然として特尊なり。　須彌山の、大海に顯はるるが如し。　當に衆生に於て、哀愍の心を起し、之を救濟したまふべし。　云何ぞ棄捨したまへる。　如來は、一切の功德、力・無畏等を具足したまへり。　惟、願はくば、苦惱の衆生を拔濟したまへ。　世間の人天は、煩惱の病の、逼迫する所と爲れり。　請ふ、佛、慈悲をもつて、之を救濟したまへ。　惟、如來のみ有りて、歸依處と爲りたまふ。　昔より天人、如來に隨逐し、此等純ら善くして、悉く解脫を求めき。　是れ若し法を聞かば、皆能く領受せん。　惟願はくば如來、其が爲に敷演したまへ。　故に、我、今、大精進に請ひたてまつる、妙法を開示して、正路を見せ令めたまへ。　譬へば大雲の、一切に雨らすが如く、如來の法雨も、亦復是の如し。　一切の、枯槁せる衆生を潤洽したまへ。　彼の諸人等の、邪見の毒刺、生死の稠林、無始の流轉、未だ拔濟を蒙らず。　盲ひて慧目無く、將に深坑に墮ちんとす。　惟、願はくば導師、正道を開きて、其に甘露を施したまへ。　佛は値遇し難きこと、[17]優曇花の如し。　惟願はくば、依止無き者を度脫したまへ。　如來は往昔、弘誓の願を發し、自ら既に度し已りたまふ。　當に衆生を度したまふべし。　幸に慧光を以て、諸の冥暗を除きたまへ。　惟、佛、大慈をもつて、本願を捨てたまふこと勿れ。　師子の吼ゆるが如く、天雷の震ふが如く、衆生の爲の故に、法輪を轉じたまへ」と。

爾の時、世尊、佛眼を以て、諸の衆生の上中下根を觀見するに、或は[18]邪定聚あり。　或は[19]正定聚あり。　或は[20]不定聚あり。　比丘よ。　譬へば人有つて淸淨の池に臨み、彼の池中の所有草木を見るに、或は未だ水を出でさる、或は水と齊しき、或は已に水を出づる、是の如きの三種、分明に

【一七】優曇花(Udumbara)。花の名。譯、瑞應。多時に一度開く。希有なるに喩ふ。

【一八】邪定聚。衆生の畢竟證悟することなきもの。

【一九】正定聚。衆生の必ず證悟するに定まれるもの。

【二〇】不定聚。二者の中間に在つて、緣あれば證悟し、緣なければ證悟せざるもの。以上の三聚は、一切衆生を該收す。

て言はく、「憍尸迦。應に是の如くにして勸請を爲すべからず」と。是に於て大梵天王、即ち座より起ち、遍ねく右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を以て請ひて曰く、

「如來、今、已に塵怨を降して、智慧の光明、一切を照したまふ。　世間に、根熟して度するに堪ふる有り。　惟願はくば世尊、定より起ちたまへ」と。

爾の時、世尊、梵天に告げて言はく、「我れ甚深微妙の法を證せり。最極寂靜にして、見難く悟り難し。分別思惟の能く解する所に非ず。惟、諸佛のみ有りて、乃ち能く之を知りたまふ。所謂、五蘊を超過して第一義に入り、處無く行無く、體性淸淨なり、取らず捨てず、了知す可からず。顯示する所に非ず。爲無く作無く、六境を遠離す。心の所計に非ず。言の能說に非ず。聽聞す可からず。觀見す可きに非ず。罣礙する所無し。諸の攀緣を離れて、究竟處に至る。空にして所得無く、寂靜涅槃なり。若し此の法を以て、人の爲に演說せば、彼等皆悉く了知する能はざらん。然るに我れ常に是の二の偈頌を思念す。

我れ[一五]逆流の道を證せり。　甚深にして見る可きこと難し。　盲者は能く覩ること莫し。　故に默して說かず。　世間の諸の衆生、　彼の[一六]五塵の境に著して、　我が法を解すること能はず。　是の故に今默然たり」と。

爾の時、梵王・帝釋、及び諸の天衆、是の如きの偈を聞きて、心大に憂惱し、即ち是の處に於て、忽然として現ぜず。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「復、一時に於て、大梵天王、摩伽陀國を觀ずるに、諸の外道等多く、地水火風空に於て、橫さまに計度を生じ、邪見に封著して、以て正道と爲す。而して彼の衆生に、應に度すべき者有り。而るに世尊、今に、猶、固く默然たるを知り、復、佛所に詣りて、頭面に足を禮し、圍遶三匝し、右膝を地に著けて、合掌恭敬し、偈を以て請うて曰く、

【一五】逆流の道。生死の流に背きて、涅槃に入るの道。
【一六】五塵。色聲香味觸の五境なり。此の五能く眞性を染汚すれば、塵と名く。

言はく、「我れ甚深微妙の法を證せり。最極寂靜にして、見難く悟り難し。分別思量の能く解する所に非ず。惟諸佛のみ有りて、乃ち能く之を知りたまふ。所謂五蘊を超過して、第一義に入り、處無く、行無く、體性淸淨なり。取らず、捨てず、了知す可からず。顯示する所に非ず。爲無く、作無く、六境を遠離す。心の所計に非ず。言の能說に非ず。聽聞す可からず。觀見す可きに非ず。罣礙する所無し。諸の攀緣を離れて、究竟處に至る。空にして所得無く、寂靜涅槃なり。若し此の法を以て、人の爲に演說せば、彼等皆悉く了知すること能はず、其の功を唐捐にして、利益する所無からん。是の故に我應に默然として住すべし」と。

爾の時大梵天王、佛の威神を以て、復、如來の默然たる旨を知り、釋提桓因の所に往詣して、之に語つて言はく、「憍尸迦[八]。汝今應に知るべし。世間の衆生は、處して生死黑暗の稠林に在り。善法損減して、惡法增長せん。何を以ての故に。如來之を棄てて、法輪を轉じたまはず。憍尸迦。我等當に共に佛所に往詣して、如來を勸請すべし。何を以ての故に。諸佛如來は、若し勸請せずんば、皆悉く默然としたまふ。是の故に、今、我れ、汝等と與に、佛所に往詣して、如來に法輪を轉じたまはんことを勸請せん。世間をして法を敬重せ令めんが爲の故に」と。爾の時大梵天王、及び釋提桓因・四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・樂變化天・他化自在天・梵衆天[九]・梵輔天[一〇]・光音天[一一]・廣果天[一三]・遍淨天[一二]・淨居天[一四]、乃至、阿迦尼吒天、光明照耀し、夜分の中に於て、多演林に至り、佛を頂禮し已つて、右遶三匝し、却いて一面に住す。爾の時釋提桓因、合掌して佛に向ひ、即ち偈頌を以て、如來に法輪を轉じたまはんことを請ひまつる。

「世尊、諸の魔怨を降伏したまひ、其の心淸淨なること滿月の如し。願はくば衆生の爲に、定より起つて、智慧の光を以て世間を照したまへ」と。

釋提桓因、是の偈を說き已る。如來爾の時、猶、故らに默然たり。螺髻梵王、釋提桓因に語つ

【八】憍尸迦(Kauśika)。釋提桓因即ち帝釋が、本、人たりし時の族姓。
【九】梵衆天以下、色界天なり。之に十八天あり。現藝品の中に、其の名稱見ゆ。
【一〇】梵衆天(Brahma-pāriṣadya)。梵輔天(Brahma-purohita)の二天は、初禪三天中の二なり。
【一一】光音天(Ābhāsvara)は、第二禪三天中の第三なり。
【一二】遍淨天(Śubhakṛtsna)は、第三禪三天中の第三なり。
【一三】廣果天(Bṛihatphala)は、第四禪九天中の第三なり。
【一四】淨居天(Śuddhāvāsa)は、第四禪第四無想天以上の五天をいふ。

生は、今當に損減すべし。何を以ての故に。如來は、諸の衆生の爲に、無上覺を求めたまひしに、今、成佛することを得て、默然として住し、法輪を轉じたまはず。是を以ての故に、衆生損減せん。善い哉、世尊。善い哉、善逝。願はくば衆生の爲に、哀愍の心を起して、法輪を轉じたまへ。世尊、多く衆生有つて、能く甚深の法に悟入するに堪へたり。惟願はくば世尊、法輪を轉じたまへ」と。

爾の時大梵天王、偈を以て讃じて曰く、

「如來の勝智は、最極圓滿なり。大光明を放ちて、普く世界を照したまふ。當に慧日を以て、人花を開きたまふべし。何が故に之を棄てて、默然として止みたまへる。佛、法財を以て、諸の衆生に施したまへ。百千劫に於て、已に曾つて世間の親しき者を攝受したまへり。寧ぞ衆生を捨てたまはんや。惟願はくば世尊、大法螺を吹き、大法鼓を撃ち、大法燈を然し、大法雨を雨らし、大法幢を建て、諸の衆生を將ゐて、生死の海を超えたまへ。煩惱の重病は、爲に療して之を除き、煩惱の猛火は、其を止息せ令めたまへ。憂惱無き、涅槃の路を示して、眞實の法を説き、解脱の門を開きたまへ。諸の生盲をして、淨き法眼を得て、生老と、病死との患を斷除せ令めたまへ。天に非ず、人に非ず。亦帝釋に非ず。而も能く、生死の煩惱を斷除したまふ。我れ及び天衆、如來を勸請したてまつる。法輪を轉じたまへ。此の勸請の、所生の功德を以て、世尊に同じく、法輪を轉じて、衆生を度脱せん」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時世尊、默然として住す。大梵天王、諸の天衆と倶に、天の栴檀香の末及び沈水香の末を以て、佛を供養し已り、忽然として現ぜず。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時如來、世間をして法を尊重せ令めんが爲の故に、甚深の妙法をして、開顯することを得せ令めんが爲の故に、深禪定に入つて世間を觀察し、是の念を作して

爾の時世尊、偈を說いて言はく、

「我れ甘露無爲の法を得たり。甚深寂靜にして、塵垢を離る。一切衆生、能く了する無し。是の故に靜處に默然として住す。此の法、言說を遠離して、猶、虛空の如く、染する所無し。思惟心意、皆行はれず。若し人能く知らんこと、甚だ希有なりとす。此の法性は、文字を離る。孰か能く其の義理に悟入せんや。多劫中に於て、佛を供養して、方に能く聞いて信解を生ずることを得ん。有と說き非有と說く可からず。有に非ず無に非ざること亦復然り。我れ、昔、無量劫に修行せしかども、未だ[五]無生忍を究竟することを得ざりき。我れ今に於て究竟することを得たり。常に諸法を觀ずるに、生滅無し。一切諸法は、本性空なり。然燈如來、我に記を授けたまひき。汝、來世に於て、正覺を成じ、佛と作つて、名を[六]釋迦文と號けんと。彼の時に於て、已に法を證すと唯も、今、我が得る所、方に究竟せり。諸の衆生の、生死に處するを見るに、是法及び非法を知らず。世間の衆生、度す可き有り。故に大悲を起して、之を度せん。梵王若し來つて我を勸請せば、或は當に爲に微妙の法を轉ずべし」と。」

佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來、是の偈を說き已つて、眉間の白毫より、大光明を放ち、遍ねく三千大千世界を照す。爾の時娑婆世界の主[七]螺髻梵王、佛の威神を以て、即ち如來の默然たるの旨を知り、是の思惟を作さく、「我れ應に彼に往きて、如來に法輪を轉じたまふことを勸請すべし」と。諸の梵衆に告げて、是の如きの言を作さく、「仁者、世間の衆生は、善法損減して、惡法增長せり。何を以ての故に。如來、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、默然として住し、法輪を轉じたまはざればなり。我等宜しく往きて、如來を勸請すべし」と。是の時梵王、六十八拘胝の梵衆と與に、佛所に來詣し、佛足を頂禮し、右遶三匝し、却いて一面に住し、佛に白して言さく、「世尊。世間の衆

【五】無生忍。無生無滅の理に安住して動かざるをいふ。

【六】釋迦文。釋迦牟尼(Śākyamuni)の音譯。

【七】螺髻梵王(Śikhin)。梵天王の頂髻螺形を作せば、螺髻梵天といふ。他經に尸棄と音譯す。

に還り、塔を起して供養す。其の塔、今に至るまで諸天、香花をもつて、供養して絕えず。爾の時世尊、商人を呪願し、偈を說いて言はく、

「汝等の向ふ所は皆吉祥なり。一切の財寶悉く充滿す。吉祥は汝が左右の手に遍ねく、總べて汝が身形は是れ吉祥なり。求むる所の財寶は自然にして至り、吉祥の鬘を以て首飾と爲す。日月星宿諸天等、帝釋四王皆擁護す。去りし處は既に吉祥なり。迴還して、亦、復、安樂を獲ん。此の施食の功德を以て、當來に無上道を成ずることを得ん。名けて末[六一]度三幡佛と爲すと。商人記を蒙つて心歡喜せり。」

佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來、最初に二の商主及び諸の商人の爲に、記莂を授けしに、諸の商人、受記[六二]を聞き已つて、未曾有なることを得、皆悉く合掌して、是の如きの言を作さく、「我、今より、如來に歸依せん」と。』

大梵天王勸請品第二十五[一]

佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來、初めて正覺を成じて、多演林中に住し、獨り一處に坐せり。深禪定に入り、世間を觀察して、是の思惟を作さく、「我れ甚深微妙の法を證せり。最極寂靜にして、見難く悟り難し。分別思量の、能く解する所に非ず。惟、諸佛のみ有りて、乃ち能く之を知りたまふ。所謂五蘊を超過し、第一義[二]に入り、處無く行無く、體性清淨なり。取らず捨てず、了知す可からず。顯示する所に非ず。爲無く作無く、六境[三]を遠離す。心の所計に非ず。言の能說に非ず。聽聞す可からず。觀見す可からず。罣礙する所無し。諸の攀緣を離れて、究竟處に至る。空にして所得無く、寂靜涅槃なり。若し此の法を以て、人の爲に演說せば、彼等皆悉く了知すること能はず。其の功を[四]唐捐にして、利益する所無からん。是の故に我れ應に默然として住すべし」と。

【六一】 末度三幡佛（Madhusambhava）。

【六二】 受記。受字、明本は授に作る。二字通用す。佛よりせば授なり。商人よりせば受なり。記とは、直前にある記莂にして、將來に關する豫言なり。

【一】 大梵天王勸請品（Adhyeṣaṇā-parivarta）。

【二】 第一義（Paramārtha）。究竟の眞理に名く。是れ最上なれば、第一といひ、深く理由あれば義と云ふ。

【三】 六境。色聲香味觸法の六法は、次第の如く、眼耳鼻舌身意の六根所對の境界なれば、六境といふ。

【四】 唐捐—むなしきなり。

て一器と成す。四際分明なり。如來爾の時、過去を憶念し、偈を說いて言はく、

「我れ、昔、花を以て鉢を盛滿し、無量の諸の如來に奉施しぬ。是の故に、今、四天王、我に堅牢清淨の鉢を施せり」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に彼の商衆、大群牛を駈り、路に循つて行く。晨朝の時に於て、牧人、乳を搾る。凡て搾る所化して[五九]醍醐と爲る。心に希有を生じ、速かに醍醐を將ち來つて、商主に白さく、「今搾る所の乳は、知らず、何が故に悉く醍醐と爲れる。是れ吉祥とや爲ん。是れ不祥とや爲ん。我れ今決せず」と。商衆の中に、婆羅門有り。貪愛を懷くが故に云く、「是れ不祥なり。應に大施を作すべし」と。商主の遠祖、已に梵世に生ぜり。是の時、身を現じて婆羅門と作り、商衆の中に於て、是の偈を說いて言はく、

「汝等往昔弘誓を發せり。如來若し菩提を證し已りたまはば、我れ當に食を以て佛に奉獻すべし。我が食を受け已つて、法輪を轉じたまはんと。今、如來、正覺を成じたまへり。汝の所願も、亦滿足せん。世尊應に汝の美食を受けて、當に無上の大法輪を轉じたまふべし。

汝、今、乳を搾りて醍醐を得たるは、此の大仙の威力に由れり。好辰・善宿・吉祥の兆あり。是の故に一切皆吉祥ならんと。梵天此の偈を演說し已り、還つて其の形を隱して、天上に反る。」

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に諸の商人、此の偈を聞き已つて、皆大いに歡喜し、卽ち醍醐を取つて、上の粳米を選び、煮て以て糜と爲す。好香の蜜を和し、盛るに栴檀の鉢を以てし、多演林に詣つて、如來に奉上し、佛に白して言さく、「世尊。惟願はくば哀愍して、我が此の食を受けたまへ」と。爾の時世尊、商人の食を受け已り、彼の栴檀の鉢を持ちて、擲ちて空中に置く。其の鉢、栴檀の一分の價、百千の珍寶に直す。時に梵天有り。名を[六〇]善梵と曰ふ。栴檀の鉢を接して、梵宮

【五九】醍醐(Sarpimaṇḍa)。五味の一。牛乳より製したる味中第一、藥中第一なり。

【六〇】善梵(Subrahma)。

四天王各〻自宮に還り、諸〻の眷屬と與に、彼の石鉢を持ち、盛るに天花を滿し、香を以て之に塗り、諸の天の樂を奏して、石鉢を供養し、佛所に來詣して、各各鉢を以て如來に奉上す。而して佛に白して言さく、「世尊。惟願はくば如來、我等獻ずる所の石鉢を哀受して、商人の食を受け、我をして長夜に大安樂を獲て、法器と成ることを得せ令めたまへ。我を憐愍したまふが故に」と。

爾の時世尊、是の念を作して言はく、「四大天王、淨き信心を以て、我に鉢を施せり。然れども我れ四鉢を受持す合からず。若し惟一のみを受けて、餘の三を受けずんば、彼の三王、必ず嫌恨を生ぜん。是の故に我れ今總べて四王獻ずる所の鉢を受けん」と。爾の時世尊、北方の毘沙門天王の鉢を受けて、偈を說いて言はく、

「汝、善逝に鉢を奉じぬ。　當に上乘の器を得べし。　我れ今汝の施を受けたり。　汝をして
　[五五]念慧を具せ令めん」と。

爾の時世尊、[五六]提頭賴吒天王の鉢を受け、偈を說いて言はく、

「鉢を以て如來に施しぬ。　念慧增長することを得ん。　生生に快樂を受けて、　速かに佛菩提を
　證せん」と。

爾の時世尊、[五七]毘婁博叉天王の鉢を受け、偈を說いて言はく、

「我れ淸淨の心を以て、　汝の淸淨の鉢を受けぬ。　汝をして淸淨なるを得て、　人天の供養する所
　とならしめん」と。

爾の時世尊、[五八]毘婁勒叉天王の鉢を受け、偈を說いて言はく、

「如來の戒には瑕無し。　汝が施も瑕無き鉢なり。　汝が心に瑕無きが故に、　報を得るにも、亦
　瑕無からん」と。

爾の時世尊、四天王の鉢を受け已る。是の如く次第に相重ねて安置し、右手に之を按じて、合し

【五五】念惠—惠の字、三本に慧に作る。念と慧となり。念とは正法を憶念するなり。慧とは眞理を思惟するなり。次の偈にもあり。
【五六】提頭賴吒天王（Dhṛtarāṣṭra）。持國天。四天王の一。
【五七】毘婁博叉天王（Virūpākṣa）。廣目天。四天王の一。
【五八】毘婁勒叉天王（Virūḍhaka）。增長天。四天王の一。

初めて出づるが如し。既に佛を見已つて、咸く希有恭敬の心を生じて、皆是の言を作さく、「此を梵王とや爲ん。是れ帝釋とや爲ん。是れ四天王とや爲ん。是れ日月天とや爲ん。是れ山神とや爲ん。是れ河神とや爲ん」と。

世尊爾の時、微かに袈裟を擧げて、彼の商人に示す。商人見已つて、卽ち如來は是れ出家人なるを知り、心に歡喜を生ず。各相謂つて言はく、「出家の法は、時に非ざれば食せず。宜しく應に諸の美味・酥蜜・甘蔗・乳糜の屬を辦じて、時に及んで奉施すべし」と。諸の商人等、種種の飮食美味を營辦して、如來の前に至り、右遶三匝して、却いて一面に住し、是の如きの言を作さく、「世尊。我を哀愍するが故に、是の微供を受けたまへ」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來爾の時、將に彼の商人の食を受けんと欲して、是の思惟を作さく、「過去の諸佛、皆悉く鉢を持ちたまひき。我、今、當に何の器を以てか、斯の食を受くべき」と。是の念を作し已る。時に四天王、各〻金鉢を持ちて、如來に奉上し、是の如きの言を作さく、「惟願はくば世尊。我が此の鉢を用ひて、商人の食を受けたまへ。我を憐愍するが故に、長夜に於て、大安樂を獲せ令めたまへ」と。

爾の時世尊、四天王に告げて言はく、「出家の法は、汝の是の如きの金鉢を受く合からず」と。乃至、展轉して、七寶の鉢を奉ずれども、皆悉く受けたまはず。

是の時、北方の[五二]毘沙門天王、餘の天王に告げて言はく、「我れ念ふに、昔、[五三]靑身天有りき。四の石鉢を將ち、來りて我等に與へぬ。復、一天有りき。名を[五四]遍光と曰ふ。來つて我に白して言はく、愼みて此の石鉢を用ふること勿れ。宜しく應に供養して塔の想を作すべし。何を以ての故に。未來に佛有りて、世に出興したまはん。釋迦牟尼と名く。當に此の鉢を以て、彼の佛に奉上すべし」と。

爾の時毘沙門天王、餘の天王に語つて言はく、「石鉢を施さんと欲せば、今正に是れ時なり」と。

【五二】毘沙門天王(Vaiśravaṇa)。四天王の一。
【五三】靑身天(Nīlakāyika-devaputra)。
【五四】遍光(Vairocana)。

罪垢を遠離して、世間に著せず、永く我慢の心を斷ぜり。是を最も安樂と爲す」と。

爾の時世尊、第七の七日に於て、[四六]多演林中に至つて、一樹の下に在り。結跏趺坐して、衆生の、生老病死の逼迫する所と爲るを觀察し、高聲に唱へて言はく、

「世間の諸の衆生、恒に五欲の爲に燒かる、應に常に愛を捨てんと思ふべし。愛の故に便ち増盛す」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に北天竺國の兄弟二人、衆商の主爲り。一を[四七]帝履富娑と名け、一を[四八]婆履と名く。智慧明達にして、極めて世法を閑へり。其の性調柔にして、善く能く將導す。興販貿易して、息利尤も多し。五百乘の車を以て、其の珍寶を載せ、還つて本國に歸る。是の諸の商侶に、二の調牛有り。一を[四九]善生と名け、一を[五〇]名稱と號く。巧に前路を識り、能く安危を知る。示すに優鉢羅花を以てすれば、杖捶を勞せず。餘牛濟さずして、方に乃ち之を用ふ。行きて[五一]乳林に至るや、路甚だ平正なるに、牛足地を拒り、輪轅摧折す。是の時五百乘の車、路傍に礙き、二牛導を爲せども、亦進むことを得ず。諸の杖捶を加ふれども、亦前むこと能はず。時に諸の商人、心に恐懼を懷き、共に相謂つて言はく「二牛行かず、前途必ず怖る可きの事有らん」と。即ち馬騎を遣はし、器杖を執持して、路を前みて巡らしむ。彼の使還り已つて、商主に白して言はく「我が行の前路に、諸の險難無し。何の爲にか二牛亦前むこと能はざるか」と。時に護林の神、忽ち其の形を現はして、商人に語つて言はく「汝諸の商人、恐懼を懷くこと勿れ。汝、長夜に於て、生死に流轉す。今、大利を得ん。所以は何ん。佛世尊有りて、世に出現したまへり。初めて正覺を成じて、此の林中に住したまひ、食はざること已來、四十九日なり。汝等應に種種の飲食を將つて、以て之を上つるべし」と。時に二の調牛、便ち佛に向ひて行き、而して諸の商人は、牛に隨つて往く。路を行くこと遠からずして、遙かに如來を覩るに、三十二相八十種好あり。身光赫然として、日の

【四六】多演林(Talāyanamūla)?

【四七】帝履富娑(Trapuṣa)。

【四八】婆履(Bhallika)。

【四九】善生(Sujāta)。

【五〇】名稱(Kīrti)。

【五一】乳林(Kṣīrikavana)。

惑亂せり。 人我を見る者有れば、欲盛にして便ち血を嘔く。 今、微妙の質を現ぜしも、彼の心を動かさず、仍ほ大神通を以て、我を化して老母と爲しぬ。 願はくば王、威力を以て、本形の如きを得せ令めたまへ」と。

爾の時魔王、諸女に報じて言はく、「我れ若しは天若しは人の、能く佛を制する者有るを見ず。汝自ら往きて、前の罪を懺悔す可し。彼れ神力を攝して、方に汝等をして本形に復せ令めんのみ」と。是に於て魔女、如來の所に至つて、偈を說いて言はく、

「我等、智慧無くして、如來を幻惑し、[四二]田と非田とを知らず、未だ善と不善とを識らず。 我、今、極めて悔を生ぜり。 冀はくば罪を銷滅することを得ん。 惟願はくは慈悲力をもつて、本形に復せ令めたまへ」と。

爾の時如來、慈悲を以ての故に、卽ち神通を攝し、彼の魔女をして、還復して本の如くなら令む。第五の七日に於て、[四三]目眞隣陀龍王の居せし處に住す。是の時、寒風霖雨、七日霽れず。 龍王心に念じて、風雨の、上如來を損ぜんことを恐畏して、其の自宮を出で、前んで佛所に詣り、身を以て佛を衞り、纏遶七匝し、頭を以て蓋と爲して、佛の上を蔽覆す。 四方に復無量の龍王有り、皆來つて佛を護る。 龍の身、委積して須彌山の如し。 是の諸の龍等、佛の威光を蒙り、身心安樂にして、未曾有なることを得たり。 七日を過ぎ已つて、風雨止息す。諸の龍王等、佛足を頂禮し、右遶三匝して、其の本宮に還る。

爾の時世尊、第六の七日に於て、[四四]尼倶陀樹の下に往き、[四五]尼連河に近づく。是の處、諸の外道多し。彼の外道の衆、皆來つて親覲し、世尊を慰問すらく、「七日の風雨、愁惱無くして、安樂に住することを得たまひしや」と。 爾の時世尊、偈を以て答へて曰く、

「寂靜にして足るを知り、思惟して法を證れり。 諸の衆生を饒益して、一切を慈悲す。 衆の

[四二] 田非田—福田と非福田となり。福田とは、之を供養すれば、福德の果を得るをいふ。田は穀を生ずるの義を取り、以て聖者に喩ふ。

[四三] 目眞隣陀龍王 (Mucilinda-nāgarāja)。譯、解脫。龍王の名。法を聞いて龍苦を脫する故に名く。金剛座の側の池中及び目眞隣陀山の目眞隣陀窟の中に住す。

[四四] 尼倶陀樹(Nyagrodha)。樹の名。榕樹なり。

[四五] 尼連河。尼連禪那河(Nairañjanā)のこと。佛成道の前に沐浴せし所。

へ。惟願はくば、善逝[四〇]、涅槃に入りたまへ」と。佛言はく、「波旬。我れ、本、願を發し、諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に、大菩提を求め、無量劫を經て、勤苦して德を累ねたり。一切衆生、我が法中に於て、未だ義利を獲ず。云何ぞ速かに我をして涅槃に入ら令むるや。又、世間に於て、三寶[四一]未だ具せず、衆生未だ調はず、未だ神通を現ぜず、未だ妙法を說かず、無量の菩薩は、未だ阿耨多羅三藐三菩提の心を發さず。云何ぞ我をして涅槃に入ら令むるや」と。爾の時魔王、是の語を聞き已つて、退いて一面に坐し、杖を以て地に畫いて、是の念を作して言はく、「此の欲界の中や、今より已去、我が所有に非ず」と。心に憂惱を生ず。是の時魔王の三女、父の愁苦するを見て、其の父に白して言はく、

「大王何すれぞ、心に極憂苦を生じたまへる。今大王を惱ます者は、請ふ說きたまへ、是れ何人なりや。我當に欲を以て牽き、繩の象を制するが如くして、其をして染著を生ぜ令め、將ゐて自在宮に歸るべし」と。

爾の時魔王、偈を說いて其の女に報じて言はく、

「世間の染を離れたるの人は、貪の境も制すること能はず。彼は欲を超過せるを以て、是の故に我れ憂惱す」と。

此の諸の魔女は、如來が菩薩たりし時、已に妖姿を作して菩薩を擾亂せしも、種種の幻惑、能く便を得ること無かりき。女人は貪染の煩惱、深重なり。是に於て三女、更に其の形を變へ、一は童女の形と爲り、一は少婦の形と爲り、一は中婦の形と爲つて、佛所に來至す。爾の時世尊、神通の力を以て、彼の三女をして皆老母と成ら令む。是に於て三女、還つて其の父の所に至り、偈を說いて言はく、

「王の說きたまひし離欲の人、貪の境も染すること能はず。我れ復變化と爲つて、彼の沙門を

【三六】三愛。人命終の時に於て三種の貪愛を起す。一に境界愛、二に自體愛、三に當生愛なり。

【三七】牙。元明二本は芽に作る。

【三八】經行。一定の地を直線に往復すること。

【三九】般涅槃(Parinirvāṇa)。譯、滅度。生死の因果を滅し、生死の瀑流を渡るなり。

【四〇】善逝(Sugata)。佛十號の第一。善逝とは、如實に彼岸に去つて、再び生死海に退沒せざる義なり。

【四一】三寶。一切の佛陀は佛寶なり。佛陀の說ける敎法は法寶なり。その敎法に隨つて修行するものは僧寶なり。合はせて三寶といふ。

かる。　我は今此の處に於て、實の如くに能く了せり。　我は無量劫に於て、無上菩提を求め、大慈を修行し、慈心を修するに緣るが故に、魔衆を降伏せり。　我は無量劫に於て、大悲を修行し、悲心を修するに緣るが故に、諸の惱患を滅除せり。　我は無量劫に於て、大喜を修行し、喜心を修するに緣るが故に、無上道を證せり。　我は無量劫に於て、無上菩提を求め、大捨を修行し、捨心を修するに緣るが故に、甘露の法を證得せり。　我れ、適ゝ魔の前に於て、是の如きの誓言を發しぬ。　若し佛道を得ずんば、終に此の坐を解かじと。　我れ金剛の智を以て、無明等を滅除して、十種の力を獲得せり。　今、故に、斯の坐を解く。　未だ得ざるを今悉く得、諸漏皆已に盡きて、魔軍悉く破散せり。　今、故に、斯の坐を解く。　五蓋[三五]の門盡く破し、三愛[三六]の[三七]牙悉く除けり。是の故に、今に於て、方に跏趺の坐を解かんと。爾の時勝丈夫、金剛の座より起ち、復、寶座に坐して、諸天の澡浴を受く。　諸天寶瓶を以て、中に滿てゝ香水を盛り、佛天中の天の與に、身體を澡浴し已る。　是に於て諸の天衆、幷に諸の婇女等、天の伎樂を擊奏し、以て供養を申べぬ。　汝諸の天子等、應に當に是の如く知るべし。

　我れ故らに七日の中、此の座を起たざることを。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『如來、何が故に初め正覺を成じて、七日の中に於て、座を起たざる。此の處に居して、無始無終の生老病死を斷除せんが爲の故に、七日に於て、樹を觀じて起たざりき。第二七日に至つて、三千大千世界を周匝[三八]經行し、以て邊際と爲せり。第三の七日に至つて、菩提樹を觀じて、目暫くも捨てず。亦此に居して、生死を斷除せんが爲に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。第四の七日に至つて、如來近きに隨つて經行し、大海を以て邊際と爲す。

　爾の時魔王、世尊の所に至つて、是の如きの言を作さく、「世尊。無量劫來、苦行を精勤して、方に成佛を得たまふ。[三九]般涅槃に入りたまへ。今正に是の時なり。惟願はくば如來涅槃に入りたま

【二八】無相定。滅諦の滅・靜・妙・離の四行相と相應する三昧なり。涅槃は色聲香味觸の五法、男女の二相、及び三有爲相の十相を離るれば、無相と名け、無相を緣とすれば、無相定又無相三昧と名く。以上の三を三解脫門といふ。

【二九】摩竭魚(Makara)。譯、鯨魚。魚の王なり。

【三〇】無畏の城 (Abhayapura)。

【三一】蘊界處。五蘊十二處十八界をいふ。此三門共に凡夫實我の執を破せんがために施設せるもの。

【三二】剎那(Kṣaṇa)。譯、一念。時の最少なるもの。

【三三】乾闥婆城。譯、尋香城。彼天の樂人を乾闥婆と名く。彼の樂人、巧に樓閣を幻作して、人に觀しむるを、之を乾闥婆城と稱す。以て物の幻有實無に譬ふ。

【三四】菴摩勒果(Āmalaka)。譯、無垢清淨。果の名。林檎の如しといふ。掌中の菴摩勒果と云へば、一目瞭然なることに譬ふ。梵文には Drumaphala といふ。

【三五】五蓋。蓋は卽ち蓋覆の義。五法ありて、能く心性を蓋覆して、善法を生ぜざらしむ。卽ち貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑法の五なり。

我れ此の處に於て、解脫の冷水を以て、彼の境界の木に於ける、貪の火煙を滅除せり。又、我れ此の處に於て、大精進の風を以て、煩惱の雲、及以、分別の雷を除滅せり。又、我れ此の處に於て、慈三昧、諸の大功德藏を獲得し、衆の魔軍を降伏せり。又、我れ此の處に於て、[二七]空、[二六]無願定、諸の大功德藏を獲得して、一切の煩惱を斷ぜり。又、我れ此の處に於て、[二八]無相定、諸の大功德藏を獲得して、一切の分別を斷ぜり。又、我れ此の處に於て、三解脫、神通智慧力を獲得して、戲論を滅除せり。又、我れ彼の、無常に常想を作し、苦に於て樂想を作し、無我に我想を作すを永斷せり。我れ精進力を以て、渡つて生死の海を越え、諸の愛網を蹴壞して、生死の網を決除せり。

我れ精進力を以て、渡つて生死の海を越え、諸の愛網を蹴壞すること、猶、[二九]摩竭魚の如くなり。我れ此に於て、一切の貪瞋等は、猶、大火聚の、諸の飛蛾を燒爇するが如しと覺悟せり。自ら我は長夜の、無量無邊劫に於て、生死の中に劬勞して、流轉して休み已むこと無かりき。今は止息することを得て、憂無く亦懼無し。我が覺悟せし所の者、外道は覺ること能はず。是は甘露の句義なり、能く憂惱等を除く。我れ[三〇]無畏の城に入りて、諸の[三一]蘊界處を除けり。愛等皆滅盡して、復、後身を受けじ。我れ菩提の爲の故に、無量億劫に於て、廣く衆の善行を行じ、身肉手足をも施して、功德皆圓滿せり。是の故に、此の處に於て、勝甘露、無上大菩提を獲得せり。諸佛如來の證したまひし所の眞實の法を、諸の衆生の類に隨つて、分別して演說したまへるに同じく、我も、今、亦、復然り。是の如きの妙法を得て、能く一[三二]剎那に於て、諸の世間は、因緣和合して生じ、空寂にして所有無く、[三三]乾闥婆城の如く、虛空・陽焰の如しと證知せり。我が得し所の法眼は、普く無邊の剎を見ること、猶、掌中に於て、[三四]菴摩勒果を視るが如くなり。我が得し所の三昧、一切皆通達し、無量劫を憶思して、夢中より悟るが如くなり。世間の諸の天人は、顚倒の想の爲に燒

り。色界に七有あり。四禪天及び初禪中の大梵天、並に第四禪中の淨居天と無想天となり。無色界に四有あり。四空處これなり。三界を通じて、二十五の果報あり。二十五有と名く。

【一九】二十重塵(Viṃśati-rajastum)。

【二〇】二十八種世間怖(Aṣṭā-viṃśati-jagavitrāsa)。

【二一】如來五百吼(Pañcaśata-buddhanardita)。

【二二】百千圓滿法(Paripūrṇa-śatasahasra-dharma)。

【二三】九十八使(Aṣṭānavati-anuśaya)。使とは又隨眠といふ。共に煩惱の異名なり。小乘俱舍には、見思の惑を以て、九十八使を立つ。

【二四】隨眠。煩惱の異名。

【二五】梵聖。梵の字三本凡に作る。

【二六】無願定。苦諦の苦・無常の二行相、集諦の因・集・生・緣の四行相と相應する三昧なり。總じて之を願樂せざれば、之を緣として起すを、無願定又無願三昧といふ。

【二七】空定。苦諦の空・無我の二行相と相應する三昧なり。諸法は因緣生にして、我なく我所有なしと觀じ、此の我我所の二を空ずれば、空定又空三昧といふ。

を制し[7]已るが如き、便ち即ち降す所の衆を思惟す。是の如く諸佛も、衆魔を降せば、七日跏趺して起たざるなり。三毒の煩惱及び我慢、此等は皆能く衆生を損ず。一切の煩惱、[8]有漏の因を、我是の處に於て皆除斷す。無漏智の火、斯より起つて、三毒を焚燒して悉く餘無し。我、此の處に於て、[9]智力を以て、生死の堅牢の網を決除し、正しく蘊體の皆實ならず、祇無始の妄惑に由つて生ずるを知る。[10]我と我所の執、[11]二の無明、幷びに及び邪見、皆銷滅す。諸障の稠林、[12]四顚倒を、善見の智火もつて咸く燒盡す。妄覺を蔓と爲す、想より生ず。菩提を獲得して、悉く[13]六十五種の無明の險・[14]四十の不善・[15]三十の垢・[16]十六の放逸・[17]十八界、[18]二十五有を捐棄して、悉く餘無し。[19]二十の重塵、皆遠離し、[20]二十八種世間の怖、我此の處に於て、精進を以て、是の如き一切を、悉く超過せり。[21]如來の五百吼を證り獲て、幷びに[22]百千圓滿の法を得たり。[23]九十八使の諸の[24]隨眠・罪樹の枝葉・將根本を、我れ智慧を以て火と爲し、此に於て焚燒して、悉く餘す無し。愛疑積集して瀑河の如く、諸見の水は常に盈滿せり。我れ此の處に於て、智の日を以て、威光之を曝して空竭なら使めたり。邪僞・諂曲・慳・嫉等、是の如きの過患・煩惱の林、我、今、此に於て、智の火を以て、一切を焚燒して、悉く滅せ令む。[25]梵・聖を誹謗し、諸罪を生ずる根本は、能く惡趣に墮せ令む。我れ智藥を以て之に投じ、彼をして吐き盡くして、餘有ること無から令む。又、我れ此の處に於て、定慧の衆德を獲、憂悲苦惱の衆を、除き盡くして餘有ること無し。又、我れ此の處に於て、眞實の理を獲得し、諸結我慢の箭を、之を拔きて餘有ること無し。又、我れ此の處に於て、智慧の利刀を以て、我・我所、生死の根本を斷截せり。亦、彼の帝釋の、修羅の衆を破壞する如し。又、我れ此の處に於て、清淨の智眼を得たり。而るに諸の衆生等、癡翳に覆はるる、我れ智慧の藥を以て、之を洗ひて除くことを得令めたり。又、

【七】已。誤つて已に作らる。
【八】有漏。漏とは煩惱の異名。煩惱を含有する事物を有漏と云ふ。
【九】智力—三本に智刀に作る。
【一〇】我と我所。我所は我所有の略。自身を我とし、自身外の萬物を我所有といふ。
【一一】二の無明。普通に根本無明と枝末無明とをいへども、こゝは我と我所となるべし。
【一二】四顚倒。四種顚倒の妄見なり。之に二種あり。生死の無常無樂無我無淨に於て常樂我淨を執するを、凡夫の四顚倒となし、涅槃の常樂我淨に於て無常無樂無我無淨を執するを、二乘の四顚倒となす。
【一三】六十五種無明險(Pañcaṣaṣṭi-durgamoha)。
【一四】四十不善(Catvāriṃśat-agha)。
【一五】三十垢(Triṃśati-malina)。
【一六】十六放逸(Ṣoḍaśa-naṃvṛta)。
【一七】十八界(Aṣṭādaśa-dhātu)。六根六境六識をいふ。凡夫實我の執を破せんが爲に施設せしもの。
【一八】二十五有(Pañcaviṃśati-kṛcchra)。三界を開きて二十五有となす。欲界に十四有あり。四惡趣・四洲・六欲天な

所に來詣し、如來を澡浴し、幷に菩提の樹を洗ふ。爾の時如來、澡浴し竟る。復、無數の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽等有り。競うて如來の澡浴せる水を取り、以て自ら身を灑ぎ、皆、阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。時に諸の天子、如來を浴し已つて、倶に天宮に還る。將てる所の餘の水、香氣滅せず。惟、佛の香を聞きて、餘の香を聞かず。心に歡喜を生じ、未曾有なることを得たり。皆、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得たり。時に天子有り。名を普花[三]と曰ふ。座より起ちて、佛の足を頂禮し、佛に白して言さく、「世尊、世尊。何の三昧に住したまへば、七日中に於て、結跏趺坐[四]して、身心動じたまはざるや」と。諸の比丘よ。我れ彼の時に於て、普花天子に告げて言はく、「如來は、喜悅三昧を以て、食と爲して住す。此の定力に由つて、七日中に於て、結跏趺坐す」と。是の時、普花天子、卽ち佛前に於て、頌を說いて曰く、

「世尊の足に千輻輪有り。　猶、蓮華の如く、甚だ淸淨なり。　恒に諸天の寶冠の爲に接せられたまふ。　是の故に、我、今、稽首し禮したてまつると。　爾の時天子、佛を禮し已つて、重ねて伽他[五]を說いて讚揚す。　彼の天人の疑を除かんと欲するが爲に、歡喜合掌して、前みて問へらく、如來は釋氏に降生して、彼の釋種をして皆歡喜せ令め、能く三毒一切の疑を滅したまへり。　願はくは天人の惑ふ所を解きたまへ。　何が故に、十力、正覺を成じて、七日中に於て、樹王を觀じたまへる。　人中の師子、靑蓮の眸もて、樹を觀じて跏趺[六]して動じたまはず。　一切の諸佛も、皆是の如きや。　獨り世尊のみ樹王を觀じたまふと爲んや。　面貌端嚴にして二言無し。　齒白く齊密にして、口香潔なり。　請ふ天人を利益せんが爲の故に、歡喜を生ぜ令めて、如實に說きたまへと。　爾の時如來、天子に告げたまはく、汝が問へる所の者、今略して說かん。　猶、世法の如き、王位に登るに、亦、七日に於て、遷移することを忌む。　是の如く、諸佛は法王爲り。　俗に順じて、七日移動すること無し。　又、猛將の勝

【三】 普花（Samantakusuma）。

【四】 結跏趺坐。佛陀の坐法なり。左右の足背を交結して左右の䏶上に置くをいふ。

【五】 伽他（Gātha）。諷、句、頌、孤起頌。

【六】 跏趺。結跏趺坐のこと。

來、彼の供を受けたまひて、一切、心、平等なり」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『虚空の天衆、佛を供養し已り、頂禮圍遶して、却いて一面に住す。是の時、[二六]地神、佛を供養するが故に、其の地を淨掃し、灑ぐに香水を以てし、散ずるに名花を以てして、菩提場に遍ねく、皆悉く清淨なり。又、寶幔を以て、其の上に彌覆す。即ち偈頌を以て、如來を讃歎すらく、

「如來是の大千界に坐したまふ。　此を堅固金剛の座と爲す。　假使身肉盡く乾れ銷くとも、未だ菩提を得ずんば、終に起たじと。　如來の神通力を以てせされば、我が此の居する所、當に碎裂すべし。　此の諸の來れる菩薩衆を見て、我等今は咸く安隱なり。　世尊、此の地に經行したまふ故に、三千世界並に光を蒙る。　佛の光至る所皆是れ塔あり。　何に況んや身此に居して道を成じたまふをや。　我が統領する所の諸の土地、並に世尊の用ひたまふ所たらんことを願ふ。　是れ諸の佛子及び聲聞、並びに所說の法の功德なり。　願はくば一切の衆生をして、等しく、皆無上の佛菩提を證せ令めん」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『地神此の偈を說き已り、佛の足を頂禮し、合掌恭敬して、却いて一面に住す。』

[一]商人蒙記品第二十四

佛、諸の比丘に告げたまはく、『世尊、初めて正覺を成じたまふに、無量の諸天、皆、悉く、如來の功德を稱讃せり。爾の時世尊、菩提樹王を觀じて、目暫くも捨てず。[二]禪悅を食と爲して、餘の食想無し。坐より起たずして、七日を經たり。欲界の無量の諸天子等、十千の寶瓶に盛滿せる香水を捧げて、佛所に來詣す。復、色界の無量の諸の天子有り。十千の寶瓶に盛滿せる香水を捧げて、佛

【二六】地神（Bhuma-deva）。欲界の中、地に居する神なり。

【一】商人蒙記品（Trapusa-bhallika-parivarta）。

【二】禪悅。禪定に入りて心神を快樂するをいふ。

復、十力の果を具足したまふ。　我觀ぬ、佛の菩提に坐したまひし時、魔王の軍衆害を加へんと欲せしに、諸天或は憂懼する者有りしも、如來は身心驚動したまはざりき。　世尊手を以て垂下したまひし時、魔軍是に於て皆退散しき。　在昔、諸佛は正覺を成じたまへり、尊、今、道を得たまふも、亦是の如し。　福智や、一切皆異無し。　是を人天の應供者と爲す」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『釋提桓因、是の如き等の偈を以て、佛を讃じ已り、頭面に足を禮し、却いて一面に住す。是の時[一四]四大天王、諸天の婇女と與に、皆薝波花、婆利師等の種種の香花を持つて、天の妓樂を奏して、佛所に來詣し、佛を供養し已る。偈を說いて讃じて曰く、

「如來美音聲を以て、能く一切の意を悅ばしたまふ。　善く精進・戒を行じて、心淨く常に微笑し、衆生を愛樂せ令めたまふ。　故に、我、今、頂禮したてまつる。　彼の微妙の言を以て、衆生の煩惱を除き、能く無量の樂を與へたまふ。　罪を離れて心淸淨に、無漏智を獲得して、世間與に比する無し。　平等にして動じたまはざること、猶、須彌山の如し。　世間に示現したまふこと、蓮華の水を出づるが如し」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『四天王、佛を讃歎し已り、頂禮圍遶して、却いて一面に住す。是の時、[一五]虛空の諸天、亦、種種の香花・寶蓋・幢幡・鈴網を以て、虛空を彌覆す。又、半身を出し、各々種種の寶珠瓔珞を持ちて、如來を供養す。偈を以て讃じて曰く、

「我れ常に虛空に處して、善惡を悉く皆觀るに、惟如來の身のみ有りて、淸淨にして諸の過無し。　又、菩薩衆の、種種の寶臺を持ちて、虛空の中に遍きを見る。　其の數量有ること無し。　又、菩薩衆の、如來を供養して、彼の微妙の花を散するに、積つて大千界に滿てるを見る。　又、菩薩衆の、無量の供具を將つを見る。　花鬘、諸の瓔珞、傘蓋及び耳璫あり。　花香極めて盈滿し、悉く皆雜亂無し。　流の大海に歸するが如く、雲集して虛空に遍ねし。　如

【一四】四大天王（Catur-mahārājā）。四王天ともいふ。六欲天の第一。持國天（東）、增長天（南）、廣目天（西）、多聞天（北）をいふ。

【一五】虛空の諸天（Antarikṣa-devā）。欲界にありて、六欲天の下に在り。虛空に居す。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『兜率天王、是の偈を說き已り、佛の足を頂禮し、退いて一面に坐す。是の時、〔一〕夜摩天王、諸の天衆の與に、恭敬圍遶せられて、佛所に來至し、種種の香花・塗香・末香・幢幡・寶蓋を以て、佛を供養す。偈を以て讃じて曰く、

「佛を無上士と爲す。世間に誰か與に等しき。戒・定・慧・解脫あり。故に、我、今、頂禮したてまつる。我れ諸の天衆を觀るに、此の菩提場に於て、妙寶臺閣を以て、尊者を供養したてまつる。餘の人天の、斯の如きの供を受くるに堪ふる者有ること無し。佛、世間の爲に出でて、長時に苦行し已り、魔の軍衆を降伏して、無上道を成ずることを得たまへり。無明の暗を滅除して、智光、十方を照し、世の與に法眼と爲つて、一切を利益したまふ。設ひ無量劫に於て、佛世尊の、一毛孔の功德を讃歎するも、猶、尙、盡すこと能はず。名聞十方に遍し。故に、我、今、頂禮したてまつる」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『夜摩天王、佛を讃歎し已り、諸の天衆と與に、恭敬圍遶して、佛足を頂禮し、却いて一面に住す。是の時〔二〕釋提桓因、三十三天及び諸の天衆の與に、恭敬圍遶せられて、佛所に來詣し、種種の寶幢・幡蓋・香花・衣服を以て、佛を供養し已り、如來を頂禮す。偈を以て讃じて曰く、

「如來の功德は甚だ清淨なり。身心動じたまはざること須彌の若し。智慧の光明、十方を照し、名稱普ねく一切に聞ゆ。世尊、往昔、多劫に於て、無量の諸の如來を供養したまふ。故に魔を降し、正覺を成ずることを得て、人天の勝供養を受くるに堪へたまへり。尊は、是れ多聞・定・慧の者、彼の無上智の法眼を開きたまふ。我、今、釋勝幢、一切世間の大法主に歸依したてまつる。尊は、菩提の爲に、多劫に於て、廣く無量の諸の苦行を行じたまへり。慈悲喜捨及び方便、精進・智慧の〔三〕大梵福、已に是の如き等の功德を得たまひ、今、

【一】夜摩天(Suyāma)。欲界六天中の第三天の名。譯、時分。善く時分を知つて五欲の樂を受くるが故なり。

【二】釋提桓因(Śakradevānām Indra)。忉利天即ち三十三天の主なり。三十三天は、欲界六天中の第二なり。

【三】大梵福。梵は清淨の義。清淨なる大福德なり。

却いて一面に住す。是の時 八化樂天王、諸の天衆の與に、恭敬圍遶せられて、佛所に來至す。種種の花鬘・珍寶・繒綵を以て、如來を供養し、偈を以て讃じて曰く、

「如來、智慧の光をもつて、三垢を滅盡し、煩惱皆已に斷じて、吉祥悉く成就したまへり。世間の諸の衆生、邪慢に執著す。尊、今、之を攝取して、甘露の道に致したまふ。是の故に世間に出でて、天人に供養せられ、能く煩惱の病を除いて、說いて大醫王と爲りたまふ。日月摩尼の火も、帝釋梵王等も、若し世尊の前に於ては、其の光悉く現ぜず。智慧の照燭する所、是の處咸く吉祥にして、一切皆希有なり。故に、我、今、頂禮したてまつる。世尊は實義を知り、亦虛妄の法を知りたまへり。此の二法の中に於て、實の如く說くに非る無し。言詞甚だ微妙にして、心意極めて調柔なり。天人の導師と爲りたまふ。故に、我、今、頂禮したてまつる。尊、大智慧有つて、諸の群生を覺悟し、三明 九八解脫あつて、能く彼の三毒を除きたまふ。善く衆生の根を識つて、受くるに堪ふると、受くるに堪へざると、各々其の意樂に隨ひたまふ。故に、我、今、頂禮したてまつる」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『化樂天王、是の偈を說き已つて、諸の天衆と與に、佛の足を頂禮し、却いて一面に住す。是の時、一〇兜率天王、諸の天衆の與に、恭敬圍遶せられて、佛所に來至し、種種の天の妙衣服・珠網・寶蓋を以て、以て佛の上を覆ふ。偈を說いて讃じて曰く、

「往昔、兜率宮に、廣く清淨の法を說きたまひき。遺敎、今、猶在り。諸天、咸く戀慕す。是の如きの功德海、世の爲に明燈と作りたまふ。見たてまつるもの厭足すること無し。故に、我、今、頂禮したてまつる。尊、彼の天より沒して、八難皆銷盡し、而して菩提場に坐したまひ、世間は安樂を獲たり。佛、衆生の爲の故に、大菩提心を起し、今已に魔怨を降して、無上道を成ずることを得たまへり。請ふ速かに未度を度せんと、大法輪を轉じたまへ」と。

【八】化樂天王(Sunirmita)。六欲天の第五。又樂變化天ともいふ。自ら五塵を化して自ら娛樂す。梵語、前に Nirmāṇaratayaとあり。

【九】八解脫。現本、八解訛と誤寫す。八解脫は又八背捨ともいひ、三界の煩惱に違背し、之を捨離して、其の繫縛を解脫する八種の禪定なり。一に內に色想ありて外色を觀ずる解脫、之は初禪によりて起る。二に內に色想無くして外色を觀ずる解脫、之は二禪によりて起る、以上の二は不淨觀なり。三に淨解脫身作證具足住、之は第四禪によつて起る。可愛の淨色を觀じて貪を生ぜず、具足圓滿して此の定に安住するをいふ。之は淨觀なり。四に空無邊處解脫、五に識無邊處解脫、六に無所有處解脫、七に非想非非想處解脫、以上の四は四無色定によつて起る。八に滅受想定身作證具住、之は滅盡定なり。

【一〇】兜率天(Tuṣita)。欲界六天中第四天の名。譯、上足。知足など。業を受けて足ることを知る。內院は、菩薩最後身の住處にして、外院は天衆の欲樂處なり。

り。我、今、稽首し禮したてまつる。　一切皆圓滿なる、無上大牟尼、魔衆は恒沙の如くなるも、本より傾動すること能はざりき。　偉、菩提の爲の故に、無量劫に檀を行じて、妻子等を捨施したまひ、身肉及び手足も、一切皆悋みたまふこと無かりき。　故に勝莊嚴を得たまへり。　偉、廣大の願を發して、無上道を成ずることを得たまへり。　當に諸の群生を度したまふべし。　定慧を甲冑と爲し、淨法を船筏と爲し、意樂圓滿し已つて、方に諸の群生を度したまはん。　我れ歡喜心を以て、佛の諸の功德を讃ず。　願はくは我れ來世に於て、無上道を成ずることを得ん。　又、此の功德を以て、衆の魔怨を降伏し、速かに一切智を證せん」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく『淸白魔子、是の如きの偈を說きて、佛を讃歎し已り、如來を頂禮して、恭敬圍遶し、却いて一面に住す。是の時、復、他化自在天王（七）有り。無數の天子の與に、恭敬圍遶せられて、佛所に來至す。妙閻浮檀金の天花を將つて、如來の上に散じ、偈を以て讃じて曰く、「如來の所說は皆眞實なり。　覆藏有ること無く、雜亂無し。　癡冥及び罪垢を遠離して、甘露の大菩提を證得したまひ、光明遍ねく十方を照したまへり。　是の故に我、今、稽首し禮したてまつる。　世尊、慈悲ありて、一切に於て、善く諸根を別ち、外道を摧きたまふ。　智慧の殊勝なる十力者、能く衆生の微妙の行を顯はしたまふ。　身、虛空に處して神變を現じたまふこと、猶、地を履むに罣礙すること無きが如し。　彼の生死廣大の愛を見て、惟れ妄苦と知つて之を棄てたまふ。　當に天人の諸の意樂に隨つて、敎化して皆解脫を得せ令めたまふべし。　十方を利益すること日光の如く、復、三界に於て、猶、眼の如し。諸の世間の爲に依止と作つて、其の心曾つて貪著を生じたまはず。　遊戲神通自在を得たまへり。　世間に於て與に等しきもの無し」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく『他化自在天王、佛を讃歎し已り、諸の天衆と與に、頂禮圍遶し、

【七】他化自在天王（Paranirmitavaśavartī）。欲界第六天の第六、依つて第六天と稱す。欲界の主なり。此の天快樂をなすに、自ら樂具を變現するを要せず、下天の化作せし他の樂事を假つて自在に遊戲すれば、他化自在といふ。四魔中の天魔にして、正法に害をなす魔王なり。

りたまふ。　能く衆生の諸の毒箭を拔きて、復、世間の大醫王と作りたまふ。　尊は、昔、然[四]燈佛に値遇して、大慈心を發して、一切を潤したまへり。　尊は世間の淨蓮華の如く、三界の淤泥の爲に染せられたまはず。　其の心堅固にして、能く沮む無し。　高廣にして動じ難きこと、須彌の如し。　又金剛の如く壞す可からず。亦舍秋の淨滿の月の如し」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『遍光天子、如來を讃じ已り、合掌恭敬して、一面に於て立つ。是の時梵衆天子、無量の摩尼莊嚴の寶網を以て、菩提道場を覆ひ、世尊を供養す。佛の足を頂禮し、右遶三匝して、偈を以て讃じて曰く、

「世尊能く明智の光を持ち、及び三十二の勝相を持ちたまふ。　念慧功德皆圓滿し、諸の結使諸の過惡を離れ、淸淨無垢にして三毒を斷じたまふ。　是の故に我等今敬禮したてまつる。　名聲普く聞え、三明を證し、諸の衆生に三解脫を施したまふ。　諸の濁穢を淸うして、心調伏し、大慈悲を起して、世間を利したまふ。　三業寂靜にして、世を出でたまひ、[五]三疑を蠲除して、染著無し。　諸の世間の爲に、苦行を行じ、[六]四聖諦を以て、衆生を化したまふ。　菩行を勤修して、諸行に超え、自ら度を得已つて、當に彼を度したまふべし。　魔王、諸の魔衆を將ゐて來りしに、尊は慈悲をもつて悉く降伏したまへり。　已に甘露菩提の道を得たまふ。是の故に我等咸く歸命したてまつる」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『梵衆天子、是の如く種種に佛を讃歎し已つて、退いて一面に住す。是の時、右面の魔王子淸白の部、世尊の所に至り、衆妙の寶蓋を以て、如來に奉上す。偈を以て讃じて曰く、

「我自ら如來の、菩提座に端坐したまふを見る。　魔軍極めて熾盛なれども、超然として驚悸したまはず。　而も一念の頃に於て、降伏して悉く餘したまふこと無し。　既に是の如きの德有

【四】然燈佛（Dīpaṅkara）。釋迦如來の因行中に、未來成佛の記莂を授けし佛なり。又錠光とも譯す。

【五】三疑。自を疑ひ、師を疑ひ、法を疑ふ。

【六】四聖諦（Catur-āryasatya）。苦集滅道の四諦のこと。聖者所見の眞理なればなり。

讃歎品第二十三[1]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に淨居天子、天の妙香花を以て、遍ねく佛の上に散ず。佛世尊の如き眞實の功徳を、偈を以て讃じて曰く、

「衆生煩惱の暗は、智慧能く銷除す。　如來出でて、世の光明者と爲りたまふ所以は、諸の魔軍を降伏して、功徳皆圓滿したまへばなり。　當に大法雨を雨らして、以て普ねく群生を治したまふべし。　世間の最勝の人なり。　智力の踰ゆる者無し。　世に處して染著無し、猶、淨蓮華の如し。　衆生、長夜に在りて、煩惱の病に纒縛せらる、佛、大醫王と爲つて、之を療して愈ゆることを得せ令めたまふ。　尊、今、出に世でたまひて、八難咸く空寂なり。　一切の人天等、佛に遇ひて安樂を蒙る。　若し此の人中の勝丈夫を覩見するもの有らば、百劫中を經て、諸の惡趣に墮せざらん。　若し佛の、微妙甚深の法を聞くことを得ること有らば、速かに煩惱の患を除き、苦蘊[2]も亦皆盡きて、當に殊勝の果、解脱涅槃の樂を得て、諸の世間の中に於て、應供者と爲ることを得べし。　若し供養を勸むるもの有らば、亦大福利を獲て、當に勝妙の果、乃至、涅槃を得べし」』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『淨居天子、如來を讃じ已り、合掌恭敬して、一面に於て立つ。是の時、遍光天子[3]、復、種種微妙の香華と、塗香末香とを以て、香を燒き華を散じ、幢幡寶蓋もつて、如來を供養す。　圍遶三匝し、合掌して佛に向ひ、偈を以て讃じて曰く、

「牟尼は、深智にして聲和美なり。　無上大菩提を獲得したまひ、諸聲の中に於て、最も第一なり。　是の故に我等今敬禮す。　諸の世間に於て慈を起すが故に、爲に燈明と作り、依止と作

【一】讃歎品（Saṃstava-parivarta）。

【二】苦蘊。人身をいふ。人身は五蘊より成り、三苦八苦等の苦を免れざれば苦蘊といふ。

【三】遍光天子（Ābhāsvara）。

禮す。此は是れ佛世尊、神通遊戲を現じたまふ。身に百千種の、光明を放ちて、十方を照す。三惡の衆生に逮んで、苦を息めて安樂を獲しむ。是の時【四一】八難の處、一衆生として、貪瞋癡等の一切の諸の煩惱を懷くもの有ること無し。此は是れ師子王の、大神通遊戲なり。日月摩尼の光も、雷等の諸の光明も、佛が光明を放つに由つて、之を蔽うて皆現ぜず。諸の天人世間、能く佛の頂を見るもの無し。師子の座に坐して、遊戲神通を作す。佛、指を以て地を按ずれば、卽ち時に六種に動ず。魔の軍衆を降伏すること、【四二】兜羅綿を制するが如し。魔王、憂惱を懷き、杖を以て地を畫く。此は是れ佛世尊の、遊戲大神通なり」と。

【四一】八難。見佛聞法に就て障難ある八處なり。一に地獄、二に餓鬼、三に畜生、四に欝單越、五に長壽天、六に聾盲瘖瘂、七に世智辯聰、八に佛前佛後。

【四二】兜羅綿。兜羅(Tūla)。譯、絮、野蚕の繭、綿など。細輭の義を喩ふ。

に身相の眞金色を得たまへり。　尊は多劫に於て勤めて精進し、故に能く諸の魔怨を降伏したまへり。　尊は多劫に於て禪定を修し、故に斯の如き勝供養を獲たまへり。　尊は歷劫に於て多聞を習ひ、速かに無上大菩提を證したまへり。　尊は能く【三六】蘊魔、【三七】死魔、【三八】煩惱及び【三九】天魔を降伏したまひ、一切の諸魔皆斷滅せり。　是の故に今は憂惱無し。　天中の天にして最尊爲り。　三界人天の供養する所なり。　是に由つて福田を種うること有る者は、所得の福に失壞無からん。　眉間の毫相極めて光明あり。　普ねく十方の諸の國土を照したまふ。　世間の諸の日月を掩蔽し、一切衆生饒益を蒙る。　如來の身色甚だ端嚴にして、相好顏容極めて清淨なり。　三界の應供者爲るに堪へ、普ねく一切諸の群生を利す。　目は淨くして遍ねく十方を觀じ、普ねく衆生の身業の事を見なはす。　耳は淨くして遍ねく一切を聞きたまふに、天人の言音に、佛法の聲あり。　【四〇】廣長舌相は妙音を演べたまひ、解脫を求むる者は甘露を聞く。　魔軍加へず、但、慈心を以て之を降伏したまふ。　染無く著無く、諸の過無し。　魔怨を摧壞するに力を興害するも驚懼したまはず、天人供養するも喜惱したまふこと無し。　身心安隱にして傾動したまはず。　今、無上天人師有り。　一切衆生善利を蒙る。　正法を聞くに逮んで、當に信受すべし。　願はくは速かに尊の如く正覺を成ぜん」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『如來、菩提樹の下に於て、初めて正覺を成じ、佛の神通を現ず。遊戲自在なること、勝げて載す可からず。若し說かんと欲せば、劫を窮むるも盡きじ』と。爾の時世尊、略して偈を說いて言はく、

『普く一切の地を變じて、平正なること、猶、掌の如し。　妙蓮花を涌出す、一一皆千葉あり。　無量の諸天衆、各〻衆の妙花を雨し、復、世尊の前に於て、合掌して瞻仰す。　世尊初めて佛を成じ、種種の神通を作す。　須彌諸の山王、草木叢林等、一切皆稽首し、菩提の座を頂

【三六】蘊魔。以下の四を名けて四魔といふ。蘊魔とは色等の五蘊能く種種の苦惱を生ずれば魔と名く。
【三七】死魔。死能く人の命根を斷てば魔と名く。
【三八】煩惱魔。貪等の煩惱能く身心を惱害すれば魔と名く。
【三九】天魔。具には自在天魔といふ。欲界の第六天卽ち他化自在天の魔王能く人の善事を害すれば魔と名く。
【四〇】廣長舌相。三十二相の一。舌廣くして長く、柔軟にして紅薄、能く面を覆うて髮際に至る。

大慈悲心を起して、雲の如く遍ねく充滿したまふ。當に大法雨を雨らして、衆生を潤洽したまふべし。能く諸の善牙[三四]をして、一切皆增長せしめ、敎法を受くるに堪ふる者をして、解脫の果を成就せ令めたまはん」と。

爾の時諸天、偈を以て頌して曰く、

「人中の師子、衆魔を降し、諸定現前して甘露を證したまへり。三明及び十力を獲得して、威神震動して十方に遍ねし。即ち坐より起ちて佛の足を禮し、如來を讃歎して、是の言を作す。世尊疲勞無きことを得たまへりや。我等親り魔衆を摧きたまひしを見ぬ。善い哉、丈夫、三界の尊、當に無邊の大法雨を雨したまふべし。十方の諸佛、皆蓋を施し、復、迦陵微妙の音を出したまふ。我が得し所の淨菩提の如く、仁者の所證も亦是の如し」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『欲界の諸の天女等、如來が菩提の座に坐したるを見る。一切智を獲て、大願滿足し、魔怨を降伏して、勝幢を建立す。大醫王と爲つて、善く衆病を療し、師子王の如く、諸の怖畏無し。清淨に垢を離れて、一切智を得、三明を具足して、四流[三五]を超越す。一法蓋を持ち、三界を覆護して、婆羅門と稱す。諸の垢を遠離し、稱して比丘と爲し、無明の藏を除き、稱して沙門と爲す。諸の不善を離れて、知足者と稱し、煩惱を斷ずるが故に、勇猛者と稱し、能く魔幢を壞して、大力者と稱す。猶、寶洲の如し。一切の法寶、其の中に充滿す。時に諸の天女、即ち偈を說いて言はく、

「此の菩提樹王の下に於て、一切の大魔軍を降伏したまふ。不動に安住して須彌の如く、身心堅固にして驚畏無し。尊は多劫に於て布施を修し、故に一切皆圓滿するを得たまへり。尊は多劫に於て戒行を修し、釋梵諸の天衆を暎蔽したまへり。尊は多劫に於て忍辱を行じ、故

ずる智なり。漏とは煩惱のこと。前に天眼明、宿命明を說きて、生老死の據りて來れる因を推し究めて、これを無明に結歸し、一念相應慧によつて、成正覺せる所に、漏盡明あり。

【三〇】成道偈なり。

【三一】愛見。人に執着して愛を起すをいふ。生死の迷界は、遠くは無明、近くは愛見に據りて起る。

【三二】記莂。佛が弟子の成佛することを記し、委しく劫數國土佛名壽名等の事を分別するを記莂といふ。

【三三】如來藏。普通に佛性眞如の煩惱中にあるを如來藏といふも、こゝは次の智慧城に對照するに、如來の寶藏などの意に解すべし。

【三四】牙。元明二本芽に作る。

【三五】四流。見流・欲流・有流・無明流。有情此の四法の爲に、漂流して息まざれば、名けて流となす。一に見流とは、三界の見惑なり。二に欲流とは、欲界の一切諸惑なり、但だ見及び無明を除く。三に有流とは、上二界の一切の諸惑なり。但だ見及び無明を除く。有とは生死の果報亡びざる義。三界に通ずれども、今は別して色無色の二界に名く。四に無明流とは、三界の無明なり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、後夜分の明星出づる時に於て、佛、世尊、[二八]調御丈夫、聖智の應に知るべき所、應に得べき所、應に悟るべき所、應に見るべき所、應に證すべき所、彼の一切と一念に相應する慧もて、阿耨多羅三藐三菩提を證し、等正覺を成じて、[二九]三明を具足したまふ。諸の比丘よ。是の時諸天衆中の無量の天子、是の如きの言を作さく、「我等應に香花を散じて、如來を供養すべし」と。復、天子有り。曾つて先佛の成正覺の時を見たりき。卽ち是の言を作さく、「汝等未だ花を散ず可からず。如來當に瑞相を現じたまふべし。往昔、諸佛、正覺を成じたまひし時、皆瑞相を現じたまへばなり」と。諸の比丘よ、如來彼の天子の思を知つて、瑞相を見はし、虛空に上昇すること、高さ七多羅樹なり。佛の所證の如き、偈頌を以て曰く、

[三〇]「煩惱悉く已に斷じ、諸漏皆空しく竭きたり。更に復生を受けず。是を盡苦の際と名く」と。

爾の時彼の諸の天子、心に歡喜を生じ、微妙の天花を以て、遍ねく佛の上に散ず。是の時に當つて、香花彌布して、積つて膝に至る。如來、無明の黑暗及び[三一]愛見の網を遠離して、煩惱の河を竭くす。毒刺を、拔除して、諸の纒縛を解く。魔幢を摧壞して勝幡を建立す。能く善く諸の衆生界を安處し、衆生に[三二]記莂す。根性を觀察して、其の病の本を知り、甘露の藥を施して大醫王と爲る。諸の衆生をして、皆度脫を得せ令め、涅槃寂靜の樂に安置す。[三三]如來藏に住して、解脫の繒を結び、智慧の城に入りて、諸の如來の淸淨法界に同ず。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『一切如來、我が成道を見、皆悉く讚じて言はく、「善い哉、善い哉」と。咸く寶蓋を以て、我を覆ひたまふ。其の諸の寶蓋、合して一蓋と成り、遍ねく十方の三千大千世界を覆ふ。寶蓋の中に於て、妙光明を出す。其の光明の網、遍ねく無量無邊の世界を照す。彼の世界の中の諸の菩薩衆、佛の功德を讚じて、偈を說いて言はく、

「彼の波頭摩の、地より踊出して、開敷し、甚だ淸淨にして、淤泥の爲に染せられざるが如く、

れる時、そこに解脫の經路を發見して、之を觀ぜるなり。

【二三】　これより四諦に說き入る。四諦とは現實の果・因と、理想の果・因となり。

【二四】　苦(Duḥkha)。以下四諦なり。苦とは三界六趣の苦報なり。是れ迷の果。

【二五】　集。具には苦集(Duḥkhasamudaya)といふ。貪瞋癡等の煩惱及び善惡の諸業なり。此の二、能く三界六趣の苦報を集起すれば、集諦と名く。卽ち是れ迷の因。

【二六】　苦集の滅(Duḥkhanirodha)。涅槃なり。涅槃は惑業(集)を滅し、生死の苦を離れて、眞空寂滅なれば、滅と名く。是れ悟の果なり。

【二七】　苦集を滅するの道(Duḥkhanirodhagāminī)。八正道なり。涅槃に通ずれば道と名く。是れ悟の因なり。

【二八】　調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)。佛十號の一。佛能く一切の可度の丈夫を調御して、修道に入らしむるをいふ。

【二九】　三明。智の法を知ること顯了なれば、明と名く。一に宿命明、自身他身の宿世の生死の相を知る。二に天眼明、自身他身の未來世の生死の相を知る。三に漏盡明、現在の苦相を知つて一切の煩惱を斷

六處は觸に因たり、觸は受に因たり、受は愛に因たり、愛は取に因たり、取は有に因たり、有は生に因たり、生は老死に因たり、憂悲苦惱、相因つて生ずることを知る。復、更に思惟すらく、「何の無に因るが故に老死無く、何の滅に因るが故に老死滅せん」と。卽ちの時に能く知る。無明滅するが故に、卽ち行滅す。行滅するが故に、卽ち識滅す。識滅するが故に、卽ち名色滅す。名色滅するが故に、卽ち六處滅す。六處滅するが故に、卽ち觸滅す。觸滅するが故に、卽ち受滅す。受滅するが故に、卽ち愛滅す。愛滅するが故に、卽ち取滅す。取滅するが故に、卽ち有滅す。有滅するが故に、卽ち生滅す。生滅するが故に、卽ち老死滅す。老死滅するが故に、卽ち憂悲苦惱滅すと。」[二三]復、更に思惟すらく、「此は是れ無明、此は是れ無明の因、此は是れ無明の滅、此は是れ無明を滅するの道、此は是れ行、此は是れ行の因、此は是れ行の滅、此は是れ行を滅するの道、更に餘有ること無し。此は是れ識、此は是れ識の因、此は是れ識の滅、此は是れ識を滅するの道。此は是れ名色、此は是れ名色の因、此は是れ名色の滅、此は是れ名色を滅するの道。此は是れ六處、此は是れ六處の因、此は是れ六處の滅、此は是れ六處を滅するの道。此は是れ觸、此は是れ觸の因、此は是れ觸の滅、此は是れ觸を滅するの道。此は是れ受、此は是れ受の因、此は是れ受の滅、此は是れ受を滅するの道。此は是れ愛、此は是れ愛の因、此は是れ愛の滅、此は是れ愛を滅するの道。此は是れ取、此は是れ取の因、此は是れ取の滅、此は是れ取を滅するの道。此は是れ有、此は是れ有の因、此は是れ有の滅、此は是れ有を滅するの道。此は是れ生、此は是れ生の因、此は是れ生の滅、此は是れ生を滅するの道。此は是れ老死、此は是れ老死の因、此は是れ老死の滅、此は是れ老死を滅するの道。此は是れ憂悲苦惱、是の如きは大苦蘊の生乃至滅なり。是の如く應に知るべし。此は是れ[二四]苦なり、此は是れ[二五]集なり、此は是れ[二六]苦集の滅なり、此は是れ[二七]苦集を滅するの道なり。應に是の如く知るべし」と。」

【一〇】老病死。以下十二因緣なり。老死の梵語は Jarāmaraṇa といふ。
【一一】生(Jāti)。
【一二】有(Bhava)。有とは業なり。業能く當來の果を有すれば、有と名く。
【一三】取(Upādāna)。愛欲盛にして諸境に馳驅し、所欲を取求する位をいふ。
【一四】愛(Tṛṣṇā)。種々の强盛なる愛欲を生ずる位をいふ。
【一五】受(Vedanā)。苦樂を識別して、之を感受する位をいふ。
【一六】觸(Sparśa)。未だ苦樂を識別することなく、只物に觸れんとする位をいふ。
【一七】六處(Ṣaḍāyatana)。六根のこと。六根具足して、將に胎を出でんとする位をいふ。
【一八】名色(Nāmarūpa)。胎中に在つて漸く身心の發育する位をいふ。名は心法、色は眼等の身なり。
【一九】識(Vijñāna)。業に依つて受けし受胎の一念をいふ。
【二〇】行(Saṃskāra)。煩惱によつて作りし善惡の行業をいふ。
【二一】無明(Avidyā)。無始の煩惱をいふ。
【二二】以上は十二因緣の順觀にして、これより以下は、その逆觀なり。流轉の經過を知

皆悉く了知す。是の諸の衆生、身語意に縁りて、諸の惡業を造り、聖人を誹謗す。邪見業の故に、身壞し命終つて、便ち惡趣に生ず。菩薩、復、諸の衆生を觀見するに、身語意に縁りて、諸の善業を造る。正見業の故に、身壞し命終つて便ち天上に生ず。」中夜分に於て、一心を攝持し、過去を憶念する宿命智を證得して、過去の自他所受生の事を通觀す。皆悉く一生・二生・乃至・十生・百生・千生・萬生・億生・百億生・千億生を了知し、乃至、無量百千那由他拘胝數生を照過す。乃至、成劫[八]壞劫、無量無邊の成劫壞劫を、皆悉く憶知す。一一の住處の、若しは名若しは姓、若しは色相、若しは飲食、若しは苦樂、若しは受生、若しは死沒、所有色相の住處・事業、若しは自若しは他を、皆悉く了知す。」菩薩是の念を作して言はく、「[九]一切衆生は生老病死險惡趣の中に住して、覺悟すること能はず。云何ぞ彼をして生老病死の苦蘊の邊際を了知せしめん」と。是の思惟を作さく、「此の[一〇]老病死は、何に從つて有りや」と。卽ちの時に能く知る、[一一]生に因るが故に有り。生有るを以ての故に、老病死有りと。是の如きの生は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一二]有に因るが故に有り。是の如きの有は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一三]取に因るが故に有り。是の如きの取は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一四]愛に因るが故に有り。是の如きの愛は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一五]受に因るが故に有り。是の如きの受は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一六]觸に因るが故に有り。是の如きの觸は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一七]六處に因つて有り。是の如きの六處は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一八]名色に因つて有り。是の如きの名色は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[一九]識に因るが故に有り。是の如きの識は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[二〇]行に因るが故に有り。是の如きの行は、復、何に因つて有りや。卽ちの時に能く知る、[二一]無明に因つて有りと。

[二二]爾の時菩薩、既に無明は行に因たり、行は識に因たり、識は名色に因たり、名色は六處に因たり、

で第三禪に入れば、喜受をも離れて、捨あり、念あり、想(新に慧)あり、意識の樂あり。最後の第四禪には、第三禪の樂をも捨てゝ、念のみあり。以上、禪定の進趣によつて、心の純化せらるゝ順序を說けるなり。

【三】離生喜樂―前のも、こゝのも、離生と爲す。「喜樂を生ずるを離る」にあらざるを以て「離生の喜樂なり。」梵本、Vivekaja.

【四】定生喜樂―前には離生喜樂とあり。定の方可ならん。定生の梵語、Samādhija.

【五】隨煩惱。一切の煩惱に名く。一切の煩惱皆心に隨逐して惱亂の事を爲せばなり。

【六】天眼通。六通の一。色界天趣の清淨の四大を以て造れる眼根を以て、遠近粗細の形色及び六道衆生の死此生彼を知りて、通達無礙なるもの。

【七】宿命智。宿世の生命を知る智なり。

【八】壞劫。四劫の一。三千大千世界の破壞する時をいふ。此の中に二十小劫ありて、初の十九小劫には有情世間を壞し、第二十小劫の一劫に器世間を壞するなり。

【九】この以下長々しく十二因緣、四諦を說きて、漏盡明を示す。

て言はく、「汝魔波旬、速かに疾く起ちて、此の處を去れ。當に種種の兵杖有り、來つて汝を害せんと欲す」と。

爾の時魔王の長子、菩薩の前に於て、頭面に足を禮して、是の如きの言を作さく、「大聖、願はくば聽したまへ、我が父懺悔を發露す。凡愚淺劣にして、猶、嬰兒の如く、智慧有ること無し。諸の魔衆を將ゐて、大聖を恐怖す。我先に諮諫せしかども、我が語を受けざりき。今乞ふ、大聖、我が父を恕寛したまへ。惟願はくば大聖、速かに阿耨多羅三藐三菩提を證したまへ」と。

爾の時大梵天王、釋提桓因、無數の天子、虚空に側塞して、咸く菩薩の、魔の軍衆を破するを見て、皆大に歡喜し、天の伎樂を作す。天の[六四]曼陀羅華・[六五]摩訶曼陀羅華・[六六]曼殊沙華・[六七]摩訶曼殊沙華・[六八]優鉢羅華・[六九]拘物頭華・[七〇]波頭摩花・[七一]芬陀利花を雨らし、天の栴檀細末の香を以て、菩薩の上に散じ、各偈頌を以て、菩薩を稱讃す。是の時魔王波旬、其の眷屬と與に、退散して去り、其の自宮に還れり。」

[一]成正覺品第二十二

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、魔怨を降伏し、其の毒刺を滅して、法幢を建立す。[二]初め欲惡を離れて、覺有り觀有り、[三]離生の喜樂あつて、初禪に入る。內一心を靜めて、覺觀を滅し、[四]定生の喜樂あつて、二禪に入る。喜受を離れて、聖人捨に住すと說く。念有り想有り、身に樂を受けて、第三禪に入る。憂喜を離れ、苦樂を捨て、念清淨にして、第四禪に入る。

爾の時菩薩、正定に住す。其の心清白にして、光明ありて染無く、[五]隨煩惱を離れ、柔軟調和にして、搖動有ること無し。初夜分に至つて、智を得、明を得て、一心を攝持し、[六]天眼通を獲。菩薩卽ち天眼を以て一切衆生を觀察して、此に死し彼に生じて、好色惡色、勝劣貴賤、業に隨つて往くを、

【六四】曼陀羅華(Mandārava)。
【六五】摩訶曼陀羅華（Mahā-mandārava)。
【六六】曼殊沙華(Mañjuṣaka)。
【六七】摩訶曼殊沙華（Mahā-mañjuṣaka)。
【六八】優鉢羅華(Utpala)。
【六九】拘物頭華(Kumuda)。
【七〇】波頭摩花(Padma)。
【七一】芬陀利花(Puṇḍarīka)。

【一】成正覺品(Abhisambodhana-parivarta)。
【二】初離欲惡以下四禪を說く。大同小異の文、前の觀農務品の下にあり。初禪以上は、分段食なきを以て、鼻舌二識なく、眼耳身三識と意識とのみあり。初禪には覺觀（新に尋伺）あり、眼耳身三識の樂受と意識の喜受あり。第二禪に至れば、更に意識の一のみとなり、覺觀を滅し、樂受なくして、喜受のみあり。こゝの樂は意識の輕安をいふ。進ん

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時、菩提樹の神は、十六種の言詞を以て、魔王を毀呰し、淨居の諸天は、無量の妙音を以て、菩薩を讃歎す。是の時、魔王の瞋、猶、解けず。是の如きの言を作さく、「今此の比丘、彼岸に度することを得ば、當に無量無邊の衆生を敎へて、我が境を遠離せしむべし」と。更に魔衆を勵まし、駈けて菩薩に逼る。而も得ること能はず。

爾の時菩薩、魔王に語つて言はく、「魔王波旬、汝當に諦かに聽くべし。我、今、此に於て、汝の怨讎を斷じ、汝の惡業を滅し、汝の嫉妬を除きて、阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。汝宜しく廻心して、大歡喜を生ずべし」と。復、波旬に告ぐ、「汝、微善を以て、今天報を獲たり。我、無量劫來に於て、聖行を修習し、今、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。時に魔波旬、菩薩に語つて言はく、「我、昔、善を修せしは、汝の能く知る所なり。汝の德を累ねしことは、誰か汝を信ずる者ぞ」と。爾の時菩薩、徐ろに右手を擧げて、以て大地を指し、偈を說いて言はく、

「諸物何に依つてか生長することを得る。　大地能く平等の因爲り。　此れ應に我が與に證明と作るべし。　汝、今、當に如實の說を觀ずべし」と。

爾の時地神、形體微妙なり。種種の眞珠瓔珞を以て、其の身を莊嚴し、菩薩の前に於て、地より踊出す。躬を曲げて恭敬し、七寶の瓶を捧げ、香花を盛り滿てて、以て用ひて供養す。菩薩に白して言はく、「我れ證明を爲す。菩薩、往昔、無量劫に於て、聖道を修習したまへり。今、成佛を得たまはん。然るに、我が此の地は、金剛の(六二)際なり。餘方は悉く轉ずれども、此の地は動ぜず」と。是の語を作す時、三千大千世界、六種に震動し、大音聲を出し、十八の相有り。

爾の時魔衆、皆悉く退散す。憒亂して據を失ひ、顚倒狼藉して、縱橫に走る。先時變ぜし所の雜類の體、形を復すること能はず。魔王是の時、神氣(六三)挫恧して、復、威勢無し。大地の聲を聞いて、心に惶怖を生じ、悶絕して頓に躃る。時に地神有り。卽ち冷水を以て、魔王の上に灑ぎ、之に告げ

【六二】際。麗本齊に作り、元明二本際に作る。

【六三】恧—はづ。

皆悉く化して[五九]拘物頭華と爲し、所有弓を彎きて菩薩を射んとする者には、其の箭、絃に著きて皆發することを得ず、或は發する者有れば、停めて空中に住し、其の鏃上に於て、皆蓮花を生じ、火勢猛熾なるは、化して五色の拘物頭花と爲ら令む。

爾の時波旬、猶、故らに瞋忿し、毒心止まず。劍を[六〇]拔きて前に趣り、菩薩に語つて言はく、「汝釋比丘、若し此の坐に安んじて速かに起たずんば、吾自ら汝を殺さん」と。是に於て、東西に馳走して、菩薩に近づかんと欲すれども、前進すること能はず。是の時魔王の長子、前みて其の父を抱き、是の如きの言を作さく、「大王。今は、會、自ら彼の沙門を殺したまふこと能はじ。徒らに惡念を生じたまはば、必ず罪咎を招かん」と。魔、諫を受けず、菩薩に向つて走る。

是の時淨居天子、虚空中に在つて、波旬に語つて言はく、「汝自ら量らずして菩薩を害せんと欲するも、終に得ること能はじ。猶、猛風も、須彌山王を傾動すること能はざるが如し」と。卽ち波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「地水火風の性、堅濕煖に違ふ可きも、菩薩の志は牢固たり。終に退轉する時無けん。在昔弘誓を發して、永く諸の煩惱を離れたまふ。彼の生死の病に於て、當に大醫王と作りたまふべし。人多く邪路に墮す。方に正見の眼を開かん。衆生黑暗に處す。將に智慧の燈を然さん。生死の海を濟はんと欲して、能く爲に船筏と作りたまふ。此は是れ大聖主なり。方に解脫の門を開きたまはん。忍辱を柯幹と爲し、信・進を花葉と爲して、諸の大法[六一]果を生じたまふ。汝應に毀るべからず。汝は今癡縛有り。彼は已に解脫を得たまへり。當に汝の煩惱を破りたまふべし。障礙の因を爲すこと勿れ。復、此の人に於て、惡念を生ずること莫かれ。無量劫に法を習ひて、今は皆圓滿したまふ。還つて昔の諸佛の如く、此に於て菩提を證したまはん」と。』

【五九】拘物頭華(Kumuda)。黃蓮花。

【六〇】拔—麗本には仗に作り、三本には拔に作る。

【六一】果。、宋元二本は菓に作る。

ば青く、半ば白く、半ば青き有り。或は煙熏の色を作し、或は死灰の色を作す。或は復身毛針の如く、或は毛より火焔を出す。或は口を張り目を閉ぢ、或は口より白き沫を吐く。或は身上に於て百千の面を現ず。一一の面狀、甚だ怖畏す可し。或は眼耳鼻口より、諸の黑蛇を出して、之を噉食す。或は融銅を飲み、或は鐵丸を呑む。或は別の手足をもつて、肘膝にして行く。或は身より煙焰を出し、象頭に山を戴く。或は髮を被りて形を露はす。或は青・黃赤・白の服を衣、或は師子・虎狼・蛇豹の皮を著る。或は頭上に火然え、目を瞋らして奮怒し、交橫衝擊す。虛空に遍滿し、及び地上に在るの形狀變異、勝げて載す可からず。

是の諸の天鬼、或は黑雲を布きて雷電霹靂す。或は沙土瓦石を雨らし、或は大山を擎ぐ。或は猛火を放ち、或は毒蛇を吐く。或は爪を[五七]怒らする有り。或は劍を揮ふ有り。或は弓を彎く有り。或は矟を舞はす有り。或は鉞を揮ふ有り。或は脣頷を搖動する有り。或は口を張りて噬まんと欲する有り。或は哭し、或は笑ふ。或は飛び、或は走る。或は隱れ、或は顯はる。哮吼叫呼の惡聲震裂す。是の如きの兵衆、無量無邊百千萬億あり。菩提樹の邊を[五八]側塞塡咽す。煙焰鬱蒸し、狂風衝怒す。山岳を震動し、河海を蕩覆す。天地は色を掩ひ、星辰光無し。魔軍の集れる時、其の夜正に半なり。

是の時無量の淨居天衆、是の如きの言を作す「菩薩今は大菩提を證したまふ」と。復天有り。言はく「魔衆熾盛なり。此に由つて、或は能く菩薩を損害せん」と。爾の時菩薩、彼の天に報じて言はく「我、今、久しからずして當に魔軍を破して、悉く退散せ令むること、猶、猛風の微細の花を吹くが如くならしむべし」と。是に於て端坐し、正念にして動ぜず。諸の魔軍を觀ること、童子の戲るるが如し。魔益忿怒し、轉戰力を增す。菩薩慈悲をもつて、石を擧ぐる者には擧ぐるに勝ふる能はず、其の擧ぐるに勝ふる者には又墮落せず、刀を揮ひ劍を擲てば、停めて空中に在り、或は地に墮する有れば、悉く皆碎折し、惡龍毒を吐けば、變じて香風と成し、沙礫・瓦石・雨雹亂下すれば、

【五七】怒爪—麗本に努爪に作り、三本に怒爪に作る。

【五八】側。麗本には畟に作り、宋本は側に作り、元明二本は[illegible]に作る。

す可からず」と。

時に魔波旬、是の語を聞き已つて、惡心轉熾んにして、憤を發して瞋吼する、其の聲雷の如し。諸の夜叉に語るらく、「汝等速かに宜しく諸の山石を擎ぐべし。諸の弓弩・刀劍・輪矟・干戈・斧鉞・矛矟・鈎戟・種種の器仗を將て、諸の毒龍を喚びて、黑雲・雷電・霹靂を放つに擬せよ」と。是の時夜叉大將、自部の夜叉[五二]・羅刹[五三]・毘舍遮鬼[五四]・鳩槃荼[五五]等を統率し、其の形を變化して、種種の形と作る。復、四兵の象馬車步を嚴しむ。或は阿修羅・迦婁羅・摩睺羅伽に似て、無量百千萬億の種類あり。一身に能く多身を現ず。或は畜頭人身あり。或は人頭畜身あり。或は復頭無くして身有り。或は半面有り。或は半身有り。或は二頭一身有り。或は一身三頭有り。或は復一身多頭あり。或は復面無くして頭有り。或は復面有つて頭無し。或は復面無くして三頭有り。或は復多頭にして面有ること無し。或は復多面にして、頭有ること無し。或は復眼無し。或は唯、一眼・二眼・三眼、乃至、多眼あり。或は復耳無し。或は唯、一耳・二耳・三耳、乃至、多耳あり。或は復手無し。或は唯、一手・二手・三手、乃至・多手あり。或は復足無し。或は唯、一足・二足・三足、乃至、多足あり。或は全身唯骸骨を現ずる有り。或は頭は髑髏を現じ、身は肉肥滿す。或は唯頭に肉有つて、身は是れ骸骨なり。或は身體長大にして、羸瘦して肚無し。或は復纖長にして、其の腹横に大なり。或は長脚大膝にして、牙爪鋒利なり。或は大面傍に出で、或は頭胸前に在り。或は脣垂れて地に至り、或は上褰して面を覆ふ。或は身より黑煙を出だし、或は口より猛焰を吐く。或は血肉枯竭して皮骨相連なる。或は身より膿血を出して更相飮吮す。或は自ら支節を截りて、撩亂委擲す。或は眼目角睞[五六]し、或は口面喎斜す。或は舌の形廣大に、或は縮まりて塼石の如し。或は人の頭を持ち、或は死人の手足・骨肉・肝膽・腸胃を執りて、之を噉食す。或は毒蛇を執りて食ひ、或は蛇を以て頸に纏ふ。或は手に髑髏を擎げ、或は髑髏の鬘を著く。或は復面色全く赤く、全く白く、全く青く、全く黃なり。或は半ば黃に、半

【五二】夜叉(Yakṣa)。
【五三】羅刹(Rākṣasa)。惡鬼の總名。
【五四】毘舍遮鬼(Piśāca)。持國天の所領の鬼の名稱。
【五五】鳩槃荼(Kumbhāṇḍa)。增長天の所領の鬼の名稱。人の精氣を噉ふ。
【五六】睞—よこめをつかふ。

さず。假使人有り、大海を浮渡するも、亦未だ難しと爲さず。四方の風を繋ぐも、亦未だ難しと爲さず。一切衆生をして、同じく一心と作さ令めんと欲するも、亦未だ難しと爲さず。菩薩を害せんと欲するは、甚だ難しと爲すなり」と。是の時魔王波旬、子の諫を受けず。菩提樹に詣つて、菩薩に告げて言はく、「汝應に速かに起つて、此の處を離るべし。必定して當に轉輪聖王を得て、四天下に王たり、大地主と爲るべければなり。汝、往昔の諸仙の記を憶はざる可けんや。汝は當に轉輪聖王と作るべし。汝若し起つて轉輪王の位を受けなば、自在主と作つて、威德無上に、法の如く國を理めて、一切を統領せん。今此の曠野は、甚だ怖畏す可し。獨りにして、伴侶無し、恐らくは汝が身を害せん。速かに當に宮に還つて、恣に五欲を受くべし。菩提は得難し、徒らに自ら形を勞せん」と。是の語を作し已つて、默然として住す。

爾の時菩薩、波旬に語つて言はく、「汝今應に此の如きの說を作すべからず。我が意は、五欲の事を樂はざるが故に、四方及以七寶を捨てぬ。波旬、譬へば人有り、既に食を吐き已りたる如し。豈、復、更に能く取つて之を食はんや。我、今、已に是の如き果報を捨てぬ。必定して無上菩提を證得し、生老病死の患を盡さん。波旬、我、今、已に金剛の座に坐す。當に菩提を證すべし。汝宜しく速かに去るべし」と。是に於て波旬、目を瞋して憤を發し、菩薩に向ひて言はく、「汝、今、何が故に獨り此に坐す。豈に我が[五一]夜叉の軍衆を見ずや」と。卽ち利劍を拔き、來つて菩薩に就き、是の如きの言を作さく、「我當に劍を以て汝を斬截すべし。速かに疾く起ち去つて、復、安坐すること勿れ」と。

爾の時菩薩、波旬に語りて言はく、「假使世間一切の衆生、盡く汝の身の如く、悉く刀杖を持ち、來つて我を害せんとも、我は終に起つて此の座を離れじ。波旬、寧ろ四大海水及び此の大地を以て、餘處に移し、日月星辰は空より隕墜し、須彌山王傾倒せ令む可くとも、而も我が是の身は、終に移

【五一】夜叉（Yakṣa）。新に藥叉に造る。譯、能噉鬼、勇健など。空中を飛騰して人を食ふ。

三匝し、禮を作して去る。魔王の所に歸り、魔王に告げて言はく、「大王、我等、昔より來、未だ曾つて是の如きの士有るを見ず。欲界の中に於て、我が姿容を覩、而も心動かざるなり。我れ媚惑を爲せば、能く人の意を竭くす。譬へば旱苗の日を見て燋枯するが如く、亦、春蘇を日の下に置けば、自然に銷融するが如し。今、此の丈夫は、何に緣つて乃ち爾るか。惟、願はくば大王、此の人の與に、共に嫌隙を爲す莫れ」と。卽ち偈を說いて言はく、

「其の身は、猶、蓮花藏の如く、其の面は、猶、淸淨なる月の如し。其の光は、猶、猛火焰の如く、其の色は、猶、紫金山の如し。百千生中に正行を修して、所有誓願、皆成就せり。

自ら生死を度して、能く他を度す。衆生を救濟して、懈倦無し。善い哉、願はくば王、彼を瞋らしたまふこと莫れ。天上にも人間にも、最も尊勝なり。眼目淸淨にして、蓮花の如し。熙怡微笑して、貪著無し。須彌は崩壞し、日月は落つとも、其の人は、而も傾動す可からず」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『是の時、白部の魔子の導師、其の父に啓して言はく、「菩薩は、淸淨にして三界に超過せり。神通道力、能く當るもの有ること無し。諸天龍神、咸く共に稱讚す。必ず大王の、能く摧屈したまふ所に非ず。惡を造るを煩はされ、自ら禍患を招きたまはん」と。是に於て波旬、其の子に告げて言はく、「咄。汝、愚小にして、智慧淺劣なり。未だ曾つて我が神通道力を見ざるなり」と。導師復言はく、「大王。我は實に無知にして、智慧淺劣なり。大王が、彼の釋子と與に共に怨對と爲りたまふことを願はず。所以は何ん。若し衆生有り、惡心を以て、來つて彼を害せんと欲するも、以て恨と爲さず。復、衆生有り、善心を以て、來つて彼を供養するも、以て欣と爲さず。此の二間に處して、心に平等を生ず。大王、假使人有り、能く虛空に畫きて、衆の色像を作るも、未だ難しと爲すに足らず。手に須彌を捧げて、以て遊行するも、亦未だ難しと爲

「我れ五欲を觀るに、過患多し。是の煩惱に由つて、神通を失ふ。譬へば火抗及び毒匳の如し。衆生之に赴きて、而も覺らず。我久しく已に諸の煩惱を離れ、自心覺り已つて、方に他を覺らしめんとす。世間の五欲は、衆生を燒く。猶、猛火の乾草を焚くが如し。亦焰幻の如く、實有る無し。亦、泡沫の如く久しく停まらず。彼の嬰孩の、糞中に戲るるが如し。彼の愚人の、蛇首に觸るるが如し。一切皆、實法有ること無し。是の身虛妄なり、業より生ず。[45]四大[46]五蘊、假に合成し、筋骨相纒ひて暫く有り。智者誰か應に此に耽著すべき。凡夫は迷ふが故に欲心を生ず。是の如きの諸幻、我已に知れり。是の故に中に於て貪著せず。畢竟自在の樂を求めんと欲す。今當に此に於て菩提を證すべし。我已に世間を解脫せり。空中の風の、繋ぐ可きこと難きが如し」と。

爾の時菩薩、身は融金の如く、面は滿月の如く、深心寂定して須彌山の如く、安處して動ぜず。猶、明珠の如く、瑕疵有ること無し。日の初めて出でて、天下を照すが如く、猶、蓮花の淤泥に染まざるが如し。心に所著無く、亦增損無し。是の時魔女、復、柔軟の言詞を以て、菩薩に白して言さく、「仁者は道德尊重なり。天人の敬ふ所、應に給侍有るべし。天我を遣はし來つて、仁者を供養せしむ。我等年少くして、色は[47]優鉢羅花の如し。願はくば晨夜の興寢に、左右に[48]親昵することを得ん」と。菩薩報じて言はく「汝、昔、福有つて、今、天身を得たり。無常を念はずして、斯の幻惑を造る。形體好しと雖も、心は端しからず。譬へば畫瓶に諸の穢毒を盛るが如し。行くゆく當に自ら壞すべし。何ぞ矜る可きに足らんや。汝、不善を爲して、自ら其の本を忘る。當に三惡道の中に墮すべし。脫せんと欲すとも、甚だ難からん。汝等故らに來つて、人の善事を亂す。革囊糞を盛る、淸淨の物に非ず。而も來りて、何するぞ。去れ、吾は喜ばず」と。其の諸の魔女、菩薩を媚惑せんとして、旣に得ること能はず。卽ち[49]建尼迦花及び[50]詹波花を以て、菩薩の上に散じ、右遶

【四五】 四大。大（Mahābhūta）。地水火風の四なり。一切の有形有質の物、四大の所造ならざるなく、四大の和合ならざるなきが故に、大といふなり。

【四六】 五蘊。蘊（Skandha）。舊には陰と譯す。陰又蘊は積聚の義。是れ數多積聚する有爲法の自性を顯はす。大別して五あり。色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊なり。之を一有情に徵すれば、色蘊の一は卽ち身にして、他の四蘊は卽ち心なり。

【四七】 優鉢羅（Utpala）。靑蓮花。

【四八】 親昵—麗本に親暱に作り、三本に親昵に作る。

【四九】 建尼迦花（Kaṇṇikāra）。

【五〇】 詹波花（Campaka）。

五には、戀慕有る如し。六には、互に相瞻視す。七には、脣口を掩斂す。八には、媚眼斜に眄る。九には、[四二]嫈嫈として細かに視る。十には、更相謁拜す。十一には、衣を以て頭を覆ふ。十二には、遞ひに相[四三]拈掐す。十三には、耳を側てて佯り聽く。十四には、前に迎へて[四四]躞蹀す。十五には、髀膝を露現す。十六には、或は胸臆を現はす。十七には、昔時、恩愛戲笑して眠寢せし事を念憶して、欲相を示す。十八には、或は鏡に對して、自ら姿態を矜るが如し。十九には、動轉して光を遣る。二十には、乍ち喜び乍ち悲しむ。二十一には、或は起ち或は坐す。二十二には、或は時に氣を作して、干す可からざるに似たり。二十三には、塗香芬烈なり。二十四には、手に瓔珞を執る。二十五には、或は項領を覆藏す。二十六には、幽閉せる如きを示す。二十七には、前却して行き、菩薩を瞻顧す。二十八には、目を開き目を閉ぢ、察する所有るが如し。二十九には、步を廻して直往し、佯つて見ざるが如し。三十には、欲事を嗟歎す。三十一には、美目をもつて諦かに視る。三十二には、顧步流眄す。是の如き等の媚惑の因緣有り。復、歌詠言詞を以て菩薩を嬈鼓す。偈を說いて曰く、

「初春和暖にして好き時節なり。衆草林木盡く敷榮す。丈夫樂を爲す、宜しく時に及ぶべし。一たび盛年を棄てなば、再びす可きこと難し。仁、端正にして、美はしき顏色なりと雖も、世間の五欲、亦求め難し。斯の勝境に對して、歡娛す可し。何爲ぞ彼の菩提の法を樂ふや。我等諸女、天報を受けたり。其の身微妙、咸く觀る可し。是の如きの天身は求む可からず。仁、今、果報あり、宜しく應に受くべし。諸仙も我を見ては、猶、染を生ぜり。況んや、復人能く染心無からんや。彼の禪定を修して、竟に何にか爲ん。菩提の法は、甚だ懸遠なり」と。

爾の時菩薩、彼の妖惑の言を聞きて、心に哀愍を生ず。卽ち妙偈を以て、其の魔女を化すらく。

【四二】嫈嫈—こむすめ。麗本には嫈嫇に作り、宋本に嫈嫈に作る。
【四三】拈掐—拈(テン)ひねる。掐(タウ)たゝく。
【四四】躞蹀—躞(セフ)蹀(テフ)連なり行く貌にいふ。

「大王、諸子の言を聞きたまはざれ。其の聲、哮吼すれば、皆摧裂せん。幷に勇健迅捷の力有り。疾く彼に往きて、沙門を滅せん」と。

右面の魔子、[三八]師子吼と名く。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「野干の、大澤の中に群鳴するは、秖だ未だ師子吼を聞かざるが爲なり。若し一たび師子吼を聞か使めば、自ら當に奔馳して十方に走るべし。是の如く一切無智の魔、未だ人中の師子の吼を聞かず。徒らに自ら競辯して、休み止むこと無し。若し聞か使め已らば、皆銷滅せん」と。

左面の魔子、名を[三九]惡思と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「豈、吾が軍衆を見ざる可けんや。我れ惡思有りて、能く速かに成ず。若し世間無智の者に非ずんば、何ぞ速かに起つて奔走せざらんや」と。

右面の魔子、名を[四〇]善思と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「彼れ無知にして、勢力乏しきに非ず。汝自ら凡愚にして、勝能を闕く。汝今未だ彼の[四一]善權を悉くさず。彼當に智を以て汝を降伏すべし。我等魔子恒沙の衆、是の如きの雄勇、三千に遍きも、菩薩の一毛をだも動かさざらん。豈獨り惡思、能く損を致さんや。能く我に於て惡念を生ずる無かれ。應に當に尊重して淨心を起すべし。是即ち三界に法王爲り。汝宜しく退還して、戰鬪すること勿かるべし」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『魔王爾の時、又諸の女に命じて、是の如きの言を作さく、「汝等諸女、共に彼の菩提樹の下に往きて、此の釋子を誘ひ、其の淨行を壞す可し」と。是に於て、魔女、菩提樹に詣つて、菩薩の前に在り。綺言妖姿、三十二種をもつて、菩薩を媚惑す。一には、眉を揚げて語らず。二には、裳を襃げて前進す。三には、顏を低れて笑を含む。四には、更相戲弄す。

【三八】師子吼(Simhanādi)。

【三九】惡思(Acramati)。

【四〇】善思(Brahmamati)。

【四一】善權。善巧の權謀。方便といふ如し。

右面の魔子、名を[三二]楽法と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「激矢も石に中れば復前まず。烈火も水に遇へば必ず銷滅す。霹靂地に至らば、竟に何にか去らん。若し菩薩を見ば、當に自ら歸すべし。大王乍ち虛空を盡くす可く、或は衆生の心をして一と作ら使めん、或は能く繩を將つて日月を繫がん。此の如きの事、皆爲す可し。唯、菩薩有り、菩提に坐するのみは、大王傾動す可からず」と。
左面の魔子、[三三]不寂靜と名く。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「我が眼、毒有り、若し看使めば、須彌を崩倒し、渤澥も竭きん。當に知るべし、沙門と及び道樹と、纔に之を視る時は、盡く灰と成らん」と。
右面の魔子、[三四]一切利成と名く。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「假使彼の三千界を以て、其の中を盡く猛毒と成すも、功德の藏若し之を視ば、能く衆毒をして無毒と爲さ令めん。諸毒、豈、復、三毒に過ぎんや。三毒も、其の身心を累はす無し。菩薩は、本より自ら虛空に同じ。大王、愼しみて輕しく往きたまこと勿れ」と。
左面の魔子、名を[三五]喜著と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「莊飾せる萬億の諸の天女、百千の妙絃歌を鼓奏して、之を誘うて將つて自在宮に入り、欲を恣にして、其をして永く貪著せ令めば、大王、是に由つて自在を得たまはん。唯願はくば、此を以て憂を爲したまふこと勿れ」と。
右面の魔子、名を[三六]法慧と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「彼楽ふ所は、非法に非ず。唯、解脫及び諸禪のみ有り。衆生の爲の故に、楽つて慈を行ふ。爾の五欲に於て、貪著無し」と。
左面の魔子、[三七]旃陀羅と名く。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

【三二】楽法(Dharmakāma)。
【三三】不寂靜(Anupaśānta)。
【三四】一切利成(Siddhārtha)。
【三五】喜著(Ratilola)。
【三六】法慧(Dharmamati)。梵本 Dharmarati に作る。
【三七】旃陀羅(Sarvacaṇḍāla)。

せ令めん。今當に菩提樹を摧折し、并に沙門を取つて、十方に擲つべし」と。
右面の魔子、名を[二三]有信と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「假令、力、三千界を碎かん。是の如きの大力、[二四]恒沙に滿たんも、菩薩の一毛をだも動かさじ。何ぞ能く智慧者を傷つくるに足らん」と。
左面の魔子、名を[二五]可怖と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「此の如きの沙門畏るるに足らず。彼れ朋黨無くして獨り居す。今當に之を恐らして十方に走らすべし。大王の兵強し、何ぞ以て怖れん」と。
右面の魔子、[二六]一緣慧と名く。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「日月師子に寧ぞ兵有らん。輪王の威勢は衆を假らず。一切の菩薩に軍旅無きも、一身一念に魔軍を破る」と。
左面の魔子、名を[二七]求惡と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「惟願はくば大王、愁惱したまふこと莫れ。我今諸の器仗を持たず。鼻を以て彼の沙門を卷取り、是に於て之を樸ちて碎滅せ令めん」と。
右面の魔子、[二八]功德莊嚴と名く。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「其の人、身力甚だ堅固なり。[二九]那羅延の如く、壞す可からず。況んや忍辱を持して鎧と爲し、勤行精進以て刄と爲し、[三〇]三解脫を以て所乘と爲し、復、智慧を以て調御と爲す。菩薩斯の福德の力に由り、必ず能く我が魔軍を摧伏せん」と。
左面の魔子、名を[三一]不退と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、
「譬へば激矢は、自ら歸らず、山火は風に從つて定んで止まり難きが如し。霹靂金剛は必ず反る無し。未だ釋子を摧かずんば終に還らじ」と。

【二三】有信（Prasādapratilabdha）。
【二四】恒沙。恒河沙（Gaṅgāvālika）の略。恒河の砂の數にて、物の多きに譬ふ。
【二五】可怖（Bhayaṃkara）。
【二六】一緣慧（Ekāgramati）。
【二七】求惡（Avatāraprekṣya）。
【二八】功德莊嚴（Puṇyālaṃkāra）。
【二九】那羅延（Nārāyaṇa）。天上の力士なり。
【三〇】三解脫。空・無相・無願の三解脫門をいふ。
【三一】不退（Anivartya）。

無けん」と。

左面の魔子、名を[一五]百臂と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「我れ、今、一身に百臂有り。一一、皆、能く百箭を放つ。大王、但、去りたまへ、憂ふるを假らじ。此の如きの沙門、何ぞ害するに足らん」と。

右面の魔子、名を[一六]妙覺と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「縱ひ汝一毛を一臂と成し、一一に皆能く百箭を放たんに、汝自ら此を以て殊勝と爲んも、豈に菩薩の一毛をだも損ぜんや。牟尼に定力出世の慈あり。毒火兵刃も能く害する無し。刀杖を執持して惡を爲さんと圖るも、空中に散在して盡く花と成らん。復、天、人・阿修羅・夜叉・羅刹に、大力有りと雖も、終に[一七]忍辱の制する所と爲り、能く威勢をして羸劣と成ら令めん」と。

左面の魔子、名を[一八]嚴威と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「我、今能く比丘の身に入り、火と爲りて焚燒し、盡く滅せ令めん。譬へば山火の枯木を焚くに、一切の叢林悉く餘無きが如けん」と。

右面の魔子、名を[一九]善目と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「世界の須彌は燒盡す可きも、金剛の慧は實に焚き難し。山移り海竭き、大地は銷し、日月空より皆墮落すとも、衆生を利益せんとて[二〇]道樹に坐す。未だ菩提を證せずんば、終に移らじ」と。

左面の魔子、名を[二一]傲慢と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「我今此に住して手を以て摩せば、日月の宮殿も盡く碎か令めん。又、能く彼の[二二]四の大海を吸ひ、中に於ける所有を、皆空竭ならしめん。當に沙門を海水に擲つべし。大王此を以て憂を爲したまふこと勿れ。兵衆もて之を降伏するを假らじ。我れ獨りにして能く彼を銷滅

【一五】百臂(Śatabāhu)。

【一六】妙覺(Subuddhi)。

【一七】忍辱。梵語(Kṣānti)の譯。諸の侮辱惱害を忍受して恚恨なきをいふ。

【一八】嚴威(Ugrateja)。

【一九】善目(Sunetra)。

【二〇】道樹。菩提樹の譯。

【二一】傲慢(Dirghabāhurgarvita)。

【二二】四大海。須彌山の四方にある大海なり。

まはずや。三十二相は、必ず佛を成ぜんと。眉間の光明、白毫の相、普ねく十方諸佛の國を照す。況んや、復、王の此の軍衆の如き、彼れ豈に之を降伏する能はざらんや。〔九〕無見の頂相極天に過ぎたり。諸天畢竟して能く覩る無し。行きて當に彼の微妙の果を成じて、世間未だ聞かざるを今聞くことを得べし。須彌及以諸山等、皆悉く菩提の樹に稽首す。施・戒・忍・進・禪定・慧、歷劫以來修習して成ず。而して能く獨り坐して王の軍を破せん。皆是れ熏修せる善根の力なり」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『是の時波旬、彼の大臣の是の如きの偈を聞き已つて、其の心悶亂す。復、千子を召す。其の五百の子は、淸白の部なり。魔王の右に在つて、菩薩に歸依す。其の五百の子は、冥黑の部なり。魔王の左に在つて、魔王に贊助す。是に於て波旬、諸子に告げ語るらく、「汝等宜しく應に一心に籌量すべし。何の方計を以てか、能く彼を摧伏せん」と。右面の魔子、名を〔一〇〕導師と曰ふ。波旬の前に於て、偈を說いて言はく、

「睡龍・醉象・師子の王、三獸暴猛にして、猶、觸れ難し。況んや復斯の禪定の力有り。誰か能く彼の大〔一一〕牟尼を犯さんや」と。

左面の魔子、名を〔一二〕惡慧と曰ふ。亦波旬に向ひ、偈を說いて言はく、

「我れ若し人を視れば、人必ず破る。吾今樹を看れば樹も亦摧く。目を怒らして向ふ所、全き者無し。如し命を伺ふに値はゞ、終に活くること難けん」と。

右面の魔子、名を〔一三〕美音と曰ふ。復、波旬に向ひ、偈を說いて曰く、

〔一四〕「人は是れ堅からず、何ぞ破るに足らん。樹は危脆と稱す、能く摧くに任せん。縱ひ汝目を瞋らせば須彌崩るとも、何ぞ能く眼を擧げて菩薩を瞻んや。設ひ善く浮びて大海を過ぎ使めん、復、能く一氣に滄溟を吸はん、是の如きの事自ら爲す可きも、能く惡を懷きて菩薩を觀る

【九】無見頂相。佛の三十二相の中に、頂上肉髻相といふあり。頂上の肉塊隆起して髻の形をなせるものをいふ。此の相中に於て、一切の人天見ること能はざる頂點あり、之を無見頂相と名く。

【一〇】導師(Sārthavāha)。

【一一】牟尼(Muni)。譯、寂。身口意の三業を靜止する學道者の尊號。

【一二】惡慧(Durmati)。

【一三】美音(Madhuranirghoṣa)。

【一四】人是不堅何足破、樹稱危脆任能摧―人は容易に破るを得べく、樹は隨意に摧くを得べしの意。

空にせん。汝等軍衆、宜しく其の所に往きて、之を摧伏すべし」と。即ち偈を說いて言はく、

「汝當に大兵衆を率ゐ領して、菩提樹下に沙門を制すべし。諸君如し能く我を愛敬せば、彼と戰鬪して速かに去ら令めよ。彼の志は方に我が境界を空しくせん。[5]緣覺及び聲聞爲ら使めよ。若し之を滅して永斷せ令めずんば、世間に佛を成ずること休み已むこと無からん」と。

爾の時魔王の主兵大臣、波旬を諫めて、頌を說いて曰く、

「大王の領したまへる所の四天の主、及以、八部の諸の龍神、欲色諸天の梵釋に隨へる、皆悉く頂禮して彼に歸依す。王の諸子の勝智の者は、勇力、世間に等倫無し。王の軍は八十由旬に滿てり。夜叉、羅刹幷に諸の鬼、復、王に近づいて左右に居すと雖も、恒に常に無過の人を敬ひ、皆悉く合掌して尊重を生じ、私に香花を以て奉獻す。我れ斯の如きの事相を覩已つて、定んで菩薩が、王の軍に勝たんことを知る。王の兵衆の居する所の處は、[6]鵂鶹、[7]野干、怪響を爲す。菩提樹の下は甚だ清淨にして、善禽瑞獸、和音を送る。是の如きの吉相あり、彼定んで強し。我れ菩薩を觀ずるに、誰か能く勝たん。又、王の軍衆の住する所の處は、常に沙礫及び埃塵を雨らす。菩提樹の下、聖の居する所は、天香花を雨らして、悉く盈積す。王の軍の處る所は地に高下あり。砂礫瓦石皆充滿す。菩提樹の下は坦然として平かなり。復、七寶を以て嚴飾す。若し斯の如きの前相を見已らば、有智の者定んで須く還るべし。是の如き莊嚴悉く周遍す。菩薩必ず當に正覺を成ずべし。大王若し臣の諫に從ひたまはずば、夢に見たまひし所の如き、終に虛しからざらん。大王仙人を犯す可からず。宜しく且く兵を收めて本處に還りたまふべし。古昔王有り、仙に觸れしが故に、一國を呪禁せられて、悉く灰と成れり。過去に王有り、淨德と名づく。羅闍大仙の意に違忤せしかば、彼れをして年を彌りて亢旱に遭は令め、叢林稼穡咸く登らざりき。王豈に[8]圍陀論を聞きた

【五】緣覺及び聲聞。緣覺が辟支佛果を證し、聲聞が阿羅漢果を證するは、共に自利の爲にして、菩薩が、利他の六度を行じて、佛果を證し、以て衆生を濟度すると同じからず。

【六】鵂鶹(Ulūka)。梟鴟の類。

【七】野干(Sṛgāla)。狐の類。

【八】圍陀論(Veda)。

には、其の自心の熱惱するを見る。九には、其の園中の樹木枝葉の枯落するを見る。十には、其の池井の皆竭くるを見る。十一には、其の宮中の鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の諸鳥の、羽翮摧殘するを見る。十二には、其の宮中の鍾鼓・琴瑟・簫笛・箜篌・種種の樂器、悉く皆斷壞して、地に委擲せるを見る。十三には、其の親族憂惱し、手を擧げ頭を拍つて、悵然として立つを見る。十四には、自ら其の身床下に墜墮して、頭面を損するを見る。十五には、其の諸子の威力有る者、菩提場に詣りて、菩薩を頂禮するを見る。十六には、其の諸女の悲哭懊惱するを見る。十七には、自ら其の身の衣服の垢膩せるを見る。十八には、自ら其の身羸瘦し顦顇して、頭の塵土に坌るるを見る。十九には、其の樓閣・窓牖、悉く皆崩摧せるを見る。二十には、其の軍將・鬼神・夜叉・羅刹・鳩槃荼等の、悉く皆首を刎ねられ、狼藉して地に在るを見る。二十一には、其の珠寶・瓔珞の、火の燒く所と爲るを見る。二十二には、欲界の四天大王・釋提桓因、乃至、他化自在の諸天、菩薩の前に向ひ、佇立して瞻仰するを見る。二十三には、其の自身敵に對して鬪戰し、刀を拔かんとするに、出でざるを見る。二十四には、其の自身惡む可く、復、惡聲を出すを見る。二十五には、其の左右及び己の眷屬、皆悉く背逆し、之を捨てて去るを見る。二十六には、吉祥の瓶、皆悉く破壞するを見る。二十七には、那[四]羅天の、不祥の音を唱ふるを見る。二十八には、歡喜神の、不歡喜を稱するを見る。二十九には、虛空の中黑暗にして、煙霧處處に彌滿するを見る。三十には、護宮の神、聲を擧げて大哭するを見る。三十一には、自在の處、咸く自在ならざるを見る。三十二には、自ら其の宮の震動して安からざるを見る。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『魔王波旬、夢より寤め已つて、遍體戰慄して、心に恐懼を懷く。其の大臣を召して、之に語つて曰く、「我れ空中の聲言を聞くに、釋種の太子、家を出で道を學んで、苦行すること六年、菩提の座に坐して、當に正覺を成ずべしと。其の道若し成ぜば、必ず我が境を

【四】那羅天（Nārada）。

巻の第九

降魔品第二十一[一]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『比丘當に知るべし。菩薩、菩提の座に坐し已つて、是の思惟を作さく、「我今に於て、當に正覺を成ずべし。魔王[二]波旬は、欲界の中に居して、最尊最勝なり。應に召して此に來して、之を降伏すべし。復、欲界の諸天及び魔波旬の所有眷屬有りて、久しく善業を積めり。當に我が師子遊戲して、阿耨多羅三藐三菩提心を發すを見ることを得せしむべし」と。是の念を作し已つて、眉間の白毫相の光を放つ。其の光を名けて[三]降伏魔怨と爲す。遍ねく三千大千世界を照して、傍に魔宮を燿らす。魔王波旬、光明中に於て、是の如きの偈を聞く。

「世に最勝清淨の人有り。多時を經歷して修行滿ちぬ。是れは彼の釋種なり、王位を捨てて、今現に菩提場に坐す。汝は身に大勇猛有りと稱す。當に樹下に往きて共に相挍ぶべし。其の人已に彼岸に達せり。既に自ら能く度し、當に他を度すべし。應に三惡を滅して悉く餘無く、彼の人天をして、轉、充滿せ令むべし。若し菩提を證し已ることを得使めば、久しからずして汝の境界を空虛にせん。愚癡黑暗瞋恚の伴、悉く當に銷散して盡きて餘無かるべし。彼定んで廣く甘露の門を開かん。汝等、今、何の計をか爲す」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に魔波旬、是の偈を聞き已つて、復、夢の中に於て三十二不祥の相を見る。一には、其の宮殿、悉く皆黑暗なるを見る。二には、其の宮中に沙礫、塵土の、處處に飛揚するを見る。三には、其の宮殿破壞して、荊棘を生じ、糞穢盈滿せるを見る。四には、自ら驚怖して安からず、東西に馳走するを見る。五には、自ら寶冠墮落して、頭髮解散するを見る。六には、其の園中、樹木花果有ること無きを見る。七には、自ら頭破れて腦の地に流るるを見る。八

【一】降魔品(Māradharṣaṇa-parivarta)。

【二】波旬。梵音 Pāpīyas の轉訛なり。惡魔の名。殺者、惡者と譯す。

【三】降伏魔怨(Sarvamāra-maṇḍalavidhvaṃsanakarī)。

如し。一切の天人修羅等、見聞して皆悉く厭足無し。無量の菩薩空より來り、其の身堅固にして金剛の如し。大地を震動して水際に至り、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、光明照耀日月の如し。衆生の煩惱の苦を滅除して、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、其の身は皆是れ衆寶より成る。無邊の佛刹土に遍して、普く雜寶の妙花香を雨す。一切衆生悉く歡喜して、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、各々能く四種の藏を總持す。其の身一一の毛孔の中より、無數の諸の經典を演說し、辯才大智慧を具足して、惛醉せる諸の群生を覺悟せしむ。無量の菩薩空より來り、天鼓の須彌の如きを執持し、美妙の大音聲を擊出して、拘胝億の佛刹に遍滿し、普ねく一切諸の人天に告げて、娑婆[三九]世界に甘露を雨す」と。』

【三九】娑婆(Sahā)。新に索訶と云ふ。堪忍の義なり。依つて忍土と譯す。此界の衆生、十界に安忍して出離を肯ぜざる故に、忍と名く。其他諸說あれど、此三千大千世界の總名にして、一佛攝化の境土なり。

る。　無量の菩薩空より來り、身色の美艷なること、虹蜺の如し。　福慧の資糧悉く圓滿して、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、手より摩尼衆寶の網を出だし、幷に曼陀・蘇曼陀・婆利師花・瞻波花を散じ、及び是の如き等の花鬘を持ちて、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、神通力を以て大地を震はす。　而も諸の衆生驚怖せず。　一切歡喜せざる者靡し。　無量の菩薩空より來り、手に須彌大山王を接するも、花鬘を持てる如くにて、重しと爲さずして、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、頂に四大香水の海を戴き、遍ねく大地に灑ぎて、皆嚴淨ならしめて、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、各ゝ殊勝の衆の寶蓋を持ち、諸の菩薩をして皆覩見せ令めて、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、現じて梵王と爲つて寂定に住し、一一の毛孔より妙法を演べて、大慈悲及び喜捨を說く。　無量の菩薩空より來り、示して帝釋微妙の形と爲り、一切天人に共に圍遶せられて、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、示して護世の形像と爲り、一切天人に共に圍遶せられて、各各散ずるに天の花香を以てし、緊那羅・乾闥婆の、美妙の音聲を以て、菩薩を讃す。　無量の菩薩空より來り、各ゝ芬香妙花の樹を持つて、枝葉花果遍く莊嚴し、菩提道場の所に至る。　其の樹の花臺に菩薩有り。　彼の花の中に於て半身を出す。　悉く皆相三十二を具して、各各諸の妙花、拘物頭花・波頭摩・優鉢羅花・芬陀利を執持す。　無量の菩薩空より來り、手に淸淨蓮華の沼を持つ。　其の身廣大にして須彌の如く、淨妙の諸の花鬘を變爲し、三千大千界を遍覆して、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、各ゝ眼中に於て[三七]劫燒を現じ、復此に於て[三八]成劫を示す。　身の一一の支節中に遍して、無邊の諸佛の法を演出す。　所有衆生皆聞くことを得、聞ける者悉く諸の貪欲を斷じて、菩提道場の所に至る。　無量の菩薩空より來り、其の身端正甚だ愛す可し。　衆の寶具を以て莊嚴す。　其の聲、猶、緊那羅の

【三七】劫燒。壞劫の時の大火災ゝ云ふ。

【三八】成劫。四劫の一。二十增減あり。初の一增減の間に初禪天より下地獄まで成立し、後の十九增減に、光音天より有情次第に降生して、無間地獄に一人の有情の生ずるを最後とす。卽ち器世間有情世間の成立するを成劫とす。

りて、一切の功德を具したまふ。皆、應に清淨戒圓滿にましますを、恭敬し禮したてまつるべし」と。

爾の時上方の世界に國有り。[三三]殊勝功德と名く。其の佛を號けて[三四]德王と曰ふ。彼に菩薩摩訶薩有り。[三五]虛空藏と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提道場に來詣し、供養の爲の故に菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、虛空の中に於て、普く十方世界の諸佛の刹土に、昔より見ざる所、昔より未だ聞かざる所の、衆寶・花鬘・塗香・末香・燒香・繒綵・衣服・幢幡・寶蓋・摩尼・衆寶・金銀・琉璃・車渠・馬惱・象馬・車乘・輦輿・兵衆・花樹・果樹・童男・童女を雨らす。爾の時、梵・釋・護世・天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦婁羅・緊那羅・摩睺羅伽、人非人等の一切の群生、皆悉く見ることを得て、歡喜心を生じ、驚怖有ること無かりき』と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

『一切の世間を利益する者、無上菩提を證せんと欲する時、十方無量の諸の菩薩、皆悉く雲の如くに集會せり。彼の諸の菩薩の所來の事、我、今、喩を以て略して說かん。無量の菩薩空より來り、猶、密雲の震吼の聲の如し。各各寶瓔珞を執持す。明珠垂懸して甚だ嚴飾なり。無量の菩薩空より來り、首に寶冠を飾つて鬘髮を垂る。花の如き妙臺觀を擎捧して、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、猶、師子の震吼の聲の如く、[三六]空無相及び無願を說きて、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、猶、牛王の哮吼する聲の如し。未曾有微妙の花を雨して、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、美聲、猶、孔雀の王の如し。身光より千種の相を出現して、菩提道場の所に至る。無量の菩薩空より來り、光明、猶、淨滿月の如し。妙音聲を以て、菩薩の無量の諸の功德を讚歎す。無量の菩薩空より來り、光明照耀、猶、日の如し。一切の魔の宮殿を暎蔽して、菩提道場の所に至

【三三】殊勝功德（Varaguṇa-pā）。
【三四】德王（Gaṇendra）。
【三五】虛空藏（Gaganagañja）。
【三六】空・無相・無願——三解脫門といふ。

して、菩提道場に遍布す。諸天の衆會、皆歡喜奇特の心を生じ、共に相謂つて言はく、「何の因縁を以て、斯の瑞應有りや」と。其の香雲の中に、妙頌を出して曰く、

「法雲一切を覆ひ、普く法雨を雨らし、衆生の煩惱を滅して、涅槃を得せ令む。神通、定根力の功德もて莊嚴を爲し、甘露の菩提を證せん。故に斯の如きの供を獲たり」と。

爾の時、東北方の世界に國有り、[27]金網と名く。其の佛を[28]寶蓋光明と號く。彼に菩薩摩訶薩有り。[29]金網莊嚴と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、彼の諸の來菩薩の供養の具の中に於て、無量無邊の大菩薩衆を化出す。皆殊勝なる三十二相有つて、其の身を莊嚴し、花鬘を執持し、躬を曲げて稽首す。一一の菩薩、偈を以て頌して曰く、

「昔、無邊劫に、深く信じて尊敬を極め、微妙の音聲を以て、諸の如來を讃歎したまひしに由り、今、菩提の座に坐したまふ。是の故に我頂禮す。願はくば讃歎の業を以て、當に無上果を得べし」と。

爾の時、下方の世界に國有り[30]普觀と名く。其の佛を號けて[31]普見と曰ふ。彼に菩薩摩訶薩有り。名を[32]寶藏と曰ふ。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、一一の菩薩の前に、廣大の妙金蓮花を化出す。而して花中に於て、皆婇女有り。半身を出現して、端正姝妙なり。咸く寶莊嚴の具を以て、其の身を嚴飾し、手に種種の金珠瓔珞を執り、躬を曲げて稽首す。而して諸の人天、更ゝ相謂つて言はく、「何の因縁を以て、是の如き微妙の婇女を感得せるか」と。是の諸の婇女、偈を以て頌して曰く、

「昔、無邊劫に、諸の如來・辟支、及び聲聞・父母・并に尊者を頂禮し、質直にして過患無かりしに由

【二七】金網 (Hemajālapraticchannā)。
【二八】寶蓋光明 (Ratnacchatrābhyudgatāvabhāsa)。
【二九】金網莊嚴 (Hemajālālaṃkṛta)。
【三〇】普觀 (Samantavilokita)。
【三一】普見 (Samantadarśina)。
【三二】寶藏 (Ratnagarbha)。

して曰く、

「昔、無邊劫の、福智資糧滿せるに由りて、身口意淸淨にして、慚愧及び慈悲あり。無上[17]能仁尊は、衆善具せざる無くして、今、菩提の座に坐す。故に斯の如きの福を獲たり」と。

爾の時、東南方の世界に國有り、[18]德王と名く。佛を[19]功德光明王と號く。彼に菩薩摩訶薩有り。[20]功德慧と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、無量の功德莊嚴せる衆寶樓觀を化作す。諸の來れる天龍夜叉等の衆、未曾有を見て、奇特の心を生ず。更ゝ相謂つて言はく、「何の因緣を以て斯の瑞有りや」と。樓觀中に於て、頌を說いて曰く、

「衆德の生ぜる所の、功德を具足せる者、能く功德を成就して、天龍咸く恭敬す。德海もて道場に詣り、功德の香普く熏す。今、菩提の座に坐して、斯の如き供養を感ず」と。

爾の時、西南方に國有り[21]出寶と名く。其の佛を[22]寶幢と號く。彼に菩薩摩訶薩有り。[23]出衆寶と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、無量阿僧祇の衆寶圓光を化作す。其の中の諸天、未曾有を見て、奇特の心を生じ、更ゝ相謂つて言はく、「何の威力を以て、是の如き衆寶圓光を現ぜるか」と。其の圓光の中に、妙頌を出だして曰く、

「衆寶宮殿と、花果と園林と、頭目髓腦等と、身胸及び手足と、是の如き種種を施し、諸の功德を積習せるを以て、今、現に菩提を證せんとて、斯の如き供養を感ず」と。

爾の時、西北方の世界に國有り、[24]雲と名く。其の佛を號けて[25]雲王と曰ふ。彼に菩薩摩訶薩有り。[26]雲雷震聲と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通を以て、沈水の香雲及び栴檀の香雲をを化作

【一七】能仁。釋迦牟尼(Śākyamuni)の釋迦を、一に能仁と譯す。
【一八】德王(Guṇākarā)。
【一九】功德光明王(Guṇarājaprabhāsa)。
【二〇】功德慧(Guṇamati)。
【二一】出寶(Ratnasambhavā)。
【二二】寶幢(Ratnayaṣṭi)。
【二三】出衆寶(Ratnasambhavā)。
【二四】雲(Meghavatī)。
【二五】雲王(Megharāja)。
【二六】雲雷震聲(Meghakūṭābhigarjitasvara)。

爾の時、南方の世界に國有り。[八]寶莊嚴と名く。其の佛を號けて[九]光明と曰ふ。彼に菩薩摩訶薩有り。[一〇]現寶蓋と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、一寶蓋を持ち、周遍して此の菩提の場を覆ふ。大梵天王・釋提桓因・護世四王、更相謂つて言はく、「何の報を以て、此の如き寶莊嚴の蓋を現ぜる」と。寶蓋の中に於て、妙頌を出して曰く、

「在昔億千劫に、三世の佛を供養して、慈心をもつて捨施を行ぜり、故に相莊嚴を得たり。那延の力を成就して、導師、是の報を感じ、一切を利益せんとて、菩提場に端坐す」と。

爾の時、西方の世界に國有り[一一]瞻波と名く。其の佛を號けて[一二]開敷花王智慧神通と曰ふ。彼に菩薩摩訶薩有り。名を[一三]寶網と曰ふ。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、一勝妙の寶網を取つて、菩薩道場を彌覆す。十方より諸の來れる天衆龍神八部、更ゝ相謂つて言はく、「何の因緣を以て、斯の寶網を感ぜるか」と。寶網の中に於て、妙頌を出して曰く、

「能く衆寶の因を爲して、衆寶の所依の處たり。三界皆歸趣し、名聞十方に遍ねし。大菩提を證して、淸淨の法に住せんと欲し、精進の力もて、佛を成ぜん。能く斯の如きの供を感ず」と。

爾の時、北方の世界に國有り、[一四]日轉と名く。其の佛を號けて、[一五]捲蔽日月光と曰く。彼に菩薩摩訶薩有り。[一六]莊嚴王と名く。斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、十方無邊刹土の功德莊嚴の臺をして、皆此の菩提道場に現ぜ令む。諸の來れる衆會、心に奇特を生じ、一切の人天、更ゝ相謂つて言はく、「何の因緣を以て、此の殊勝莊嚴の妙臺を感ぜるか」と。妙臺の中に於て、妙頌を出だ

【八】寶莊嚴(Ratnavyūha)。
【九】光明(Ratnārciṣa)。
【一〇】現寶蓋(Ratnachatra-kūṭa-saṃdarśana)。
【一一】瞻波(Campakavarṇā)。
【一二】開敷花王智慧神通(Puṣpā-vilivanarājikusumitā-bhijña)。
【一三】寶網(Indrajāla)。
【一四】日轉。日字、麗本日に作る。明本が日に作るは可なり。(Sūryāvartā)。
【一五】捲蔽日月光(Candra-sūrya-jihmīkaraprabha)。
【一六】莊嚴王(Vyūharāja)。

を降伏し、諸の外道を摧く。是の如きの種種の功徳を具足し。將に菩提を證せんとして、面、東に向ひ、淨草の上に於て、結跏趺坐す。端身正念にして、大誓を發して言はく、

「我今若し、無上大菩提を證せずんば、寧ろ是の身を碎く可し、終に此の座を起たじ」と。

爾の時菩薩、菩提の座に昇り、卽ち[四七]方廣神通遊戲大嚴の定を證す。是の定を得已つて、身を現じて、各各彼の師子の座に坐す。一一の身上に、皆衆妙の相好莊嚴を具す。其の餘の菩薩、幷に諸の天人、各各皆謂へらく、「菩薩獨り其の座にのみ坐したまへり」と。又定力に由つて、能く地獄・餓鬼・畜生・閻羅王界[四八]、及び諸の人天をして、皆、菩薩の菩提の座に坐せるを見せ令めたり。』

嚴菩提場品第二十[一]

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、菩提場に坐す。[二]六欲の諸天、障難有らんことを恐れて、卽ち東面に於て、恭敬して住す。是の如く、南西北方四維上下にも、皆無量の諸天有りて、恭敬して住す。是の時菩薩、大光明を放つ。其の光を名けて開發菩薩智と爲す。盡虛空界の一切十方の諸佛刹土に周遍照耀す。爾の時、東方世界に國有り。[三]離垢と名く。其の佛を號けて[四]離垢光明と曰ふ。彼に菩薩摩訶薩有り。[五]遊戲莊嚴と名く、斯の光に遇ひ已つて、無央數の菩薩の與に圍遶せられて、菩提場に來詣し、供養の爲の故に、菩薩の前に住す。爾の時菩薩、神通力を以て、十方の盡虛空界の一切の佛刹を變現して、一清淨の琉璃道場と成す。一切佛刹の五道の衆生、展轉して指示し、各ゝ相謂つて言はく、「此は是れ何人の神通遊戲なれば、莊嚴威德色相、乃ち爾るか」と。是の時菩薩、一一の衆生の前に於て、菩薩を現化し、頌を說いて曰く、

「能く諸の垢濁と、貪・瞋・癡と　[六]習氣とを斷じ、身、十方の　[七]刹を照して、衆の光明を映蔽す。
福智及び三昧より、積劫に轉增長せる、一切諸の莊嚴は、最勝牟尼の力なり」と。

【四七】方廣神通遊戲大嚴の定。(Lalitavyūham nāma bodhisattvasamādhi)。

【四八】閻羅王。閻羅は閻摩羅闍(Yama-rāja)の略。譯、縛、雙世、雙王など。地獄の總司なり。

【一】嚴菩提場品(Bodhimaṇḍavyūha-parivarta)。

【二】六欲の諸天。四天王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天の六天は、欲界にあるが故に、六欲天と稱す。

【三】離垢(Vimala)。

【四】離垢光明(Vimalaprabhāsa)。

【五】遊戲莊嚴(Lalitavyūha)。

【六】習氣。惑の現行を、伏し、且つ惑の種子を斷ずるも、尙惑の氣分ありて、惑相を現ずるを習氣といふ。

【七】刹。梵語、Kṣetra。譯、土、田、國、處など。

提を授けて、然る後に淨草を受けたまへ」と。菩薩、吉祥に報ずらく、「唯だ淨草を施すのみにて、卽ち大菩提を獲るには非ず。應に無量の德を修して、方に諸佛の記を蒙るべし。吉祥、汝、應に知るべし。菩提は妄に授けず。菩提妄に授く可くば、我當に菩提を以て、一切衆生に授くべし。吉祥、汝、應に知るべし。我れ菩提を證し已らば、諸の世間に分布せん。汝當に我が所に於て、甘露の法を聽受すべし」と。菩薩、淨草を受けて、菩提場に往詣し、足を擧げて行かんと欲する時、其の地大に震動せり。諸の天龍神等、皆歡喜の心を生じ、恭敬し合掌して言さく、「菩薩は今に於て、必ず衆魔を降伏し、定んで甘露の法を獲て、無上道を證したまはん」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、菩提場に向ふ時、無量の菩薩幷に諸天衆、各各菩提の樹を莊飾す。其の菩提の樹は、八萬四千有り。一一、皆、菩薩が其の樹下に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまはんことを願ふ。其の菩提樹、或は高顯殊特にして、百千由旬なる有り、純ら花をもつて成ずる所なり。或は菩提樹の、高顯殊特にして二億由旬なる有り、純ら香をもつて成ずる所なり。或は菩提樹の、高顯殊特にして百千由旬なる有り、純ら栴檀を以て成ずる所なり。或は菩提樹の、高顯殊特にして五億由旬なる有り、純ら繒綵を以て成ずる所なり。或は菩提樹の、高顯殊特にして百億由旬なして十億由旬なる有り、純ら珠寶を以て成ずる所なり。或は菩提樹の、高顯殊特にして百億由旬なる有り、純ら七寶を以て成ずる所なり。是の如き八萬四千の菩提の樹あり。一一の樹下に、各〻色類に隨つて、師子座を敷く。或は師子の座有り、花を以て莊嚴す。或は師子の座有り、香を以て莊嚴す。或は師子の座有り、栴檀を以て莊嚴す。或は師子の座有り、珠寶を以て莊嚴す。或は師子の座有り、雜寶を以て莊嚴す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、示現して草を取り、周遍敷設して、師子王の如し。勢力を具足し、精進堅悩にして、諸の過失無し。貴盛自在にして、智慧覺悟し、大名稱有り。衆魔

の時菩薩、復自ら思惟すらく、「誰か能く我に是の如き淨草を與へん」と。時に釋提桓因、即ち其の身を變じて、草を刈る人と爲り、菩薩の右に在つて、近からず遠からず、草を持つて立つ。其の草、青紺にして孔雀の尾の如し。柔軟愛す可く、[四三]迦尸迦衣の如し。宛轉右旋して、香氣芬馥たり。爾の時菩薩、既に化人の斯の妙草を執るを見て、漸く其の所に向ひ、徐に之に問ふ。汝の名字は誰ぞ」と。其の人答へて曰く、「我が名は吉祥なり」と。菩薩思惟すらく、「我、今、自身、吉祥を求めんと欲す。復、他をして吉祥を得せ令めんと欲す。人の名吉祥なるが、我が前に於て立つ。我今定んで阿耨多羅三藐三菩提を證せん」と。

爾の時菩薩、化人より[四四]淨草を求めんと欲して、是の語を出す。時に梵聲微妙にして、所謂、[四五]眞實の聲、周正の聲、清亮の聲、和潤の聲、流美の聲、善導の聲、不謇の聲、不澁の聲、不破の聲、柔軟の聲、[四六]愶雅の聲、分析の聲、順耳の聲、合意の聲、迦陵頻伽の如き聲、命命鳥の如き聲、殷雷の如き聲、海の波の如き聲、山の崩るる如き聲、天の讃ずる如き聲、梵天の如き聲、師子の如き聲、龍王の如き聲、象王の如き聲、不急疾の聲、不遲緩の聲、解脱の聲、無染著の聲、依義の聲、應時の聲、八千萬億の法門を宣說するの聲、一切諸佛の法に順ずるの聲なり。菩薩、此の美妙の聲を以て、化人に語つて言はく、「仁者、汝能く我に淨草を與ふるや以不や」と。是に於て頌して曰く、

「吉祥、汝、今の時、宜しく速かに淨草を施すべし。我當に是の草に坐して、彼の魔軍を降伏すべし。若し寂滅の法を證せば、即ち無上道を得ん。我れ菩提の爲の故に、無量劫に、施戒精進忍、禪定智慧力解脱と意樂と、福德及び神通を修行せり。彼の諸の行に緣るが故に、今、圓滿の果を獲ん。淨草を施すに因るが故に、必ず當に導師を成ずべし」と。吉祥此の言を聞いて、心に大歡喜を生じ、手に淨妙の草を持ちて、菩薩の前に住す。即ち歡喜心を以て、菩薩に白して言さく、「若し草を施すを以ての故に、能く大菩提を獲たまはば、幸に先に菩

【四三】迦尸迦衣。梵本(Kāçi-lindaka)と作す。

【四四】淨草—浮草とあるは、誤植なり。

【四五】眞實の聲。以下三十二聲を出だす。寶積經、如來不思議秘密大乘經、大乘莊嚴經論等にも此の類あり。

【四六】愶雅—愶の字、三本に惔に作る。

醫王と爲りたまはん。　凡そ是れ遊履したまへる所、蓮華、歩に隨つて起る。　尊は、今、世間に於て、必ず應供者と爲りたまはん。　導師の道場に坐したまふや、無量拘胝數の、一切の魔軍衆、皆當に自ら摧伏したまふべし。　日月墮落す可きも、須彌崩壞す可きも、若し未だ菩提を得ずんば、終に移動したまふ可からず。　願はくは我れ眷屬と、此の龍身を捨つることを得ん。　功德自ら莊嚴したまへり。　當に菩提の座に往きたまふべし」と。

是の偈を說き已る。其の龍王の妃を[四二]金光と曰ふ。無量の龍女の與に、恭敬圍遶せられ、衆の寶蓋・衣服・瓔珞・人天の妙花を持し、復、寶器を持して、衆の名香を盛る。諸の伎樂を奏して、是の妙偈を說き、菩薩を讚じて曰く、

「能く貪瞋癡、世間の諸の過患を斷じて、生死の海を渡りたまへる者、故に、我、今、頂禮す。尊は大醫王爲り。　善く煩惱の箭を拔きたまふ。　衆生の未だ調伏せざるは、當に之を調伏したまふべし。　衆生、世間に處して、恒に煩惱の爲に覆はる。　尊、當に慧日を以て、之を照して除くことを得せ令めたまふべし。　世間、依怙無し。　今當に依怙を得べし。　而して虛空中に於て、種種の衣食を雨し、諸天龍神等、皆歡喜心を生ず。　辯才の大導師、願はくは速かに道場に坐したまへ。　衆の魔怨を降伏して、當に無上道を成じたまふべし。　昔の諸の如來の、證したまへる所の菩提の法は、無量劫に修習して、諸の群生を利益したまへるに似たり。

願はくば速かに道場に坐して、無上菩提を證したまへ」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩爾の時、是の思惟を作さく、「古昔、諸佛は、何の座に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を證したまひしか」と。是の念を作す時、即ち過去の諸佛は、皆淨草に坐して、正覺を成じたまひしことを知る。是の時、淨居天子、菩薩の心を知つて、菩薩に白して言さく、「是の如し、是の如し。過去の諸佛は、菩提を證せんと欲して、皆淨草に坐したまへり」と。爾

【四二】　金光(Suvarṇaprabhā)。

「過去の三佛、皆已に、智慧光明の眞金色を現じたまへり。是に於て還つて無垢光を觀る。斯に出るに、定んで佛の興世したまふ有らん。其の光淸淨にして、日月に踰えたり。螢に非ず、燭・星・電等にも非ず。亦、梵・釋・阿修羅の、一切の威光の能く及ぶ所に非ず。我れ先業に不善を行ぜしを以て、處る所の宮殿常に昏暗なり。恒に熱沙を雨して、以て身を燒く。自ら念ずるに長時に斯の苦を受けたり。忽ち光明に遇ふに、日の照すが如く、身心淸涼にして遍く歡喜す。億劫に衆行を修行したまへる者、今の時定んで菩提の場に坐したまふならん。我れ汝等諸の親眷と、衣服・香花・幷に伎樂・及び種種莊嚴の具を以て、世間を利益したまふ者を供養せん」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「龍王爾の時、其の眷屬と、歡喜踊躍して、四方を瞻顧し、乃、菩薩を見るに、身相巍巍として須彌山の如し。梵・釋・四王・龍神・八部、皆悉く圍遶せり。心に大に歡喜して、頭面に足を禮して、恭敬尊重す。卽、種種の香花衣服瓔珞を以て、衆の伎樂を作して、菩薩を供養す。合掌して躬を曲げ、偈を以て讃じて曰く、

「面の淨きこと滿月の如し。世間の大導師なり。我、昔、諸佛に値ひたてまつりしも、瑞相皆是の如くなりき。今、尊、魔を破し已つて、行きて當に菩提を證したまふべし。曾つて過去劫に於て、廣く内外に施し、持戒・及び忍辱・精進・禪・智慧・方便・大慈悲・願力・喜捨等を修したまへり。是の諸の功德を以て、當に佛道を成ずるを得たまふべし。一切諸の叢林は、枝を低れて佛樹を禮し、千の吉祥の瓶有つて、圍遶して虛空に在り。衆鳥は和音を吐き、翻翔して競つて隨逐す。身色は眞金色にして、遍ねく十方を照す。惡趣は苦惱を停め、世間は快樂を蒙る。尊は、今、三界に於て、定んで大導師と爲りたまはん。梵王及び帝釋、[四一]欲色の諸の天子、咸く微妙の樂を捨て、皆來つて供養を申ぶ。尊は、今、世間に於て、必ず大

【四一】欲色の諸の天子。欲界及び色界の諸天子をいふ。

の如く母の如く、姉の如く妹の如く、兄の如く弟の如し』と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

『地獄の痛苦に逼らるるは、一切皆休息す。　畜生の相食み噉へるは、各各慈心を起す。　八難皆閉塞し、三惡悉く寂靜なり。光明に照さるゝ處、咸く微妙の樂を受く。　眼耳鼻舌等の諸根完具せざるは、皆悉く具足を得たり。　煩惱に擾さるる者は、便大安樂を得たり。　狂亂は正念を得、貧賤は富貴を得、病苦は痊除を得、禁囚は解脫を得。　一切忿競無く、展轉して慈心を起す、父母の子を愛するが如し。　菩薩の光明の網は、十方に遍滿して、普く恒沙の界を照し、無邊の土を暎蔽す。　鐵圍大鐵圍、及び餘の諸山等、皆悉く復現ぜず。　變じて一[三九]佛刹と爲り、衆寶を以て成ぜられ、嚴飾甚だ微妙なり。　光の照燭するに由るが故に、一切掌を觀るが如し。　是の如き等の莊嚴は、菩薩を供養せんが爲なり。　菩提場を護る神に、十六天子有り。　面、八十由旬にして、種種の嚴飾を現す。　菩薩の大威力、面の八十由旬に、亦無邊の刹を現じて、各各皆嚴淨なり。　天龍八部衆、是の如きの事を覩已つて、還つて自ら本宮を思ひ、塚墓の想を生じ、咸く奇特の心を起して、諸の功德を頌歎す。　善い哉、福は思ひ難く、乃ち斯の如きの果を感じたまへり。　唯、身語意のみ、是の如きの莊嚴を起すに匪す。　本願力を以ての故に、一切皆成就して、諸の衆生の業に隨つて、皆悉く滿足を得せしめたまふ。　四護菩提の神、菩提樹を嚴飾すること、歡喜園にも、帝釋の殊妙の林にも勝過せり。　此の神の嚴飾する所、端正甚だ愛す可し。　一切天人等、稱讚して窮まり已むこと無し。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩の清淨の光明、普ねく世界を照し、一切衆生の煩惱を滅除す。斯の光に遇ふ者、皆欣喜を生ぜり。此の光又[四〇]迦利龍王の宮を照す。時に彼の龍王、斯の光明に遇ひ、龍衆の中に於て、偈を說いて言はく、

【三九】 佛刹(Buddhaksetra)。刹は土の義。佛刹は佛土佛國なり。

【四〇】 迦利(Kaliya)。

し、諸の寶鈴を垂れ、覆ふに寶網を以てす。[三〇]閻浮檀金、以て蓮花と爲して、地に遍滿す。一一の花上、各〻七寶を以て之を嚴飾す。復、種種上妙の天香を燒く。十方世界人天の、中の所有妙樹、悉く中に於て現ず。又、十方世界一切の水陸の、勝妙の香花、悉く中に於て現ず。又、十方世界の諸佛菩薩、各〻本土に於て、無量の資糧をもつて、廣博嚴飾し、福德智慧ある菩提道場を現ず。是の如き種種の事業、皆悉く此の道場の中に現ず。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『十六天子、是の如き等の神通瑞相種種莊嚴を見て、踊躍歡喜す。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦婁羅・緊那羅・摩睺羅伽等、此の道場を見て、未曾有なりと歎じ、各〻自宮を、猶、塚墓の如しと想ひ、皆、無量に功德を讃述する有り。復、[三一]四の護菩提樹神有り。一を[三二]毘留薄翟と名け、二を[三三]蘇摩那と名け、三を[三四]烏珠鉢底と名け、四を[三五]帝珠と名く。各〻神力を以て、菩提樹を變じて、高廣嚴好なり。各〻長さ八十多羅の樹にして、根莖・枝葉・花果茂盛し、端正愛す可く、莊嚴比無し。見る者歡喜す。帝釋歡喜園中の[三六]波利質多羅樹・[三七]拘鞞羅樹にも踰えたり。菩薩坐する所の菩提を成ぜん處は、則ち三千大千世界の中心なり。此の樹の下の地は、純ら金剛を以て成ぜられ、沮壞す可からず。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、菩提樹に往かんと欲する時、大光明を放ちて、遍ねく無邊無量の世界を照す。地獄の衆生は、皆苦を離るることを得、餓鬼の衆生は、皆飽滿を得、畜生の衆生は、慈心をもつて相向ひ、諸根不具の衆生は、皆具足するを得、病苦の衆生は、皆痊愈するを得、怖畏の衆生は、皆安樂を得、獄囚の衆生は、皆釋然を得、貧窮の衆生は、皆財寶を得、煩惱の衆生は、皆解脫を得、飢渴の衆生は、皆飮食を得、懷孕せる衆生は、皆難を免るゝを得、羸瘦せる衆生は、皆充健なることを得たり。此の時に於て、一衆生として、貪恚癡の逼惱する所と爲れるもの無し。人天は死せず、亦胎を受けず。是の時一切衆生、更に相[三八]慈愍して、利益の心を生ず。父

【三〇】閻浮檀金(Jambunada-suvarṇa)。金の名。其の色、赤黃にて、紫焔氣を帶ぶ。閻浮は樹の名、檀は譯、川。閻浮樹の下に河あり、閻浮檀といふ。此河中より金を出すが故に、閻浮檀金といふ。

【三一】四の護菩提樹神(Catur bodhivṛkṣadevatā)。

【三二】毘留薄翟。梵文は之を Veṇu と Valgu に分ち第四の帝珠なし。

【三三】蘇摩那(Sumanā)。

【三四】烏珠鉢底(Ojapati)。

【三五】帝珠。梵文之に當るものなし。

【三六】波利質多羅樹(Pāricitraka?)。忉利天上の樹の名。譯、香遍樹。梵本は Pārijātaka とす。

【三七】拘鞞羅樹(Kovidāra)。譯、地破。

【三八】慈。三本慇に作る。

三千世界の主、釋梵及び日月、一切與に等しきもの無し。見る者咸く歡悅す。諸の魔軍を降伏し、必ず當に正覺を成じたまふべし。身相三十二、最勝に自ら莊嚴したまへり。梵音甚だ淸徹にして、心淨く諸の過を離れたまふ。或は人有つて、梵世に上生せんと樂欲し、或は人有つて聲聞果を證得せんと樂欲し、或は人有つて、辟支佛を成ずることを得んと樂欲し、或は人有つて、當に無上果を獲べしと樂欲せん。是の如き諸人等は、應に導師を供養すべし」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に大梵天王、菩薩を供養せんが爲の故に、神通力を以て、三千大千世界をして皆悉く淸淨なら令む。諸の砂鹵・瓦礫・荊棘を除き、地平かなること掌の如く、丘墟有ること無し。金銀・琉璃・硨磲・馬碯・珊瑚・虎魄・眞珠等の寶を以て、之を嚴飾す。又、三千大千世界に、遍ねく諸の瑞草を生じ、靑綠右旋して、柔軟愛す可きこと[二七]迦陵陀衣の如し。又、諸の巨海變じて平地と爲る。又、彼の魚鼈・黿鼉・水性の屬を隱さず。所有十方刹土の梵王・帝釋・護世四王・咸く此の間の三千大千世界の、是の如く嚴淨なるを見て、各〻本土に於て、皆悉く莊嚴し、遙かに供養を申ぶ。又、十方無邊の刹土の一切の菩薩、供養せんが爲の故に、人天に超過せる殊勝の供具を以て、各〻本國に於て、供養を申ぶ。皆、無邊の世界を見るに、一佛土の如し。諸の須彌山、鐵圍山の間の幽冥の處、日月威光の及ぶ能はざる所も、咸く菩薩の光明、普く照すを見る。

十六の天子有り。此の菩提の場を守護す。是の諸の天子、皆無生法忍を證し[二八]阿惟越致を得たり。其の名を轉進天子・無勝天子・施與天子・愛敬天子・勇力天子・善住天子・持地天子・作光天子・無垢天子・法自在天子・法幢天子・所行吉祥天子・無障礙天子・大莊嚴天子・淸淨戒香天子・蓮花光明天子と曰ふ。是の如き等の天子、各〻四萬八十由旬を化して、廣く無量寶莊嚴の具を設く。其の地の四邊に、皆七重の寶路有り。一一の寶路、皆悉く[二九]寶多羅樹を行列す。一一の樹間、金繩をもつて交絡

【二七】迦陵陀衣（Kācilinda-ka）。陵字、三本は隣に作る。迦隣陀と稱する瑞鳥、身に細軟の毛あり。之を用ひて造りたる衣を、迦隣陀衣と云ふ。

【二八】阿惟越致。又阿毘跋致に作る。(Avaivarti)。譯、不退轉。成佛の進路を退轉せざる義。菩薩の階位の名。一大阿僧祇劫の修行を經て此の位に至る。

【二九】寶多羅樹(Tāla)。譯、岸樹、高竦樹。

梵天王、諸の梵衆に告げて、是の如きの言を作さく、「仁者當に知るべし。[二二]菩薩摩訶薩、精進の甲を被り、智慧堅固にして心劬勞せず。一切菩薩の行を成就し、[二三]一切の波羅蜜門に通達し、一切菩薩地に於て大自在を得たまへり。諸菩薩の清淨意樂を獲、一切衆生の諸根の利鈍を、皆悉く了知したまふ。如來祕密の藏に住して、諸の魔境を超え、一切善法、皆能く自覺したまへり。他人に由らずして覺悟を得、諸如來大神通力の護念する所と爲りたまふ。當に衆生の爲に、解脫の道を說きたまふべし。亦、衆生の爲に大商主と作つて、一切諸の魔軍衆を摧伏したまはん。三千大千世界の中に於て、唯佛のみ獨り尊し。大醫王と爲り、「法藥を調和して、衆生の苦を救ひたまはん。大法王と爲り、智慧の明を以て十方を照し、大法幢を建てたまはん。[二四]世間の八法の染する所と爲りたまはざる、猶、蓮花の水に著かざるが如し。能く無量眞實の法寶を積みたまふこと、猶、大海の諸の奇珍を蘊むが如し。怨親平等にして、須彌山の安住して動ぜざるが如く。心意淸淨にして、摩尼珠の如く諸の垢穢を離れたまふ。三千大千世界に於て、大自在を得たまへり。菩薩摩訶薩は、是の如き等の無量の功德を以て、菩提の場に詣りたまへり。衆の魔怨を降伏せんと欲するが爲の故に。阿耨多羅三藐三菩提を成ずるが故に。十力、四無所畏、十八不共佛法を圓滿せんと欲するが故に。正法輪を轉ずるが故に。大師子吼を震はんと欲するが爲の故に。大法雨を施し、諸の衆生をして滿足を得せ令むるが故に。諸の衆生をして、淸淨の法眼を得せ令むるが故に。諸の外道をして、諍論を息め令むるが故に。本願をして圓滿を得せ使めんと欲するが故に。一切法に於て自在を得るが故に。仁者。汝等應に當に發心して往詣し、親近し供養すべし」と。卽ち偈を說いて言はく、

「無量百千劫に、慈悲喜捨と、禪定智慧通とを具して、今に於て涅槃を證したまふ。若し[二五]三惡に遠ざかり、及び[二六]八難を離れ、天の妙樂の報を受け、乃至、涅槃を得んと欲せば、應に上の供具を持ちて、菩薩を供養すべし。六年苦行を修して、菩提場に詣らんと欲したまふ。

【二二】菩薩摩訶薩（Bodhisattva mahāsattva）。具には菩提薩埵摩訶薩埵といふ。菩提薩埵は道衆生（新、覺有情）と譯し、摩訶薩埵は大衆生（新、大有情）と譯す。道果を求むる衆生なるが故に、道衆生といひ、聲聞緣覺に簡んで大衆生といふ。

【二三】一切波羅蜜門（Sarva-pāramitā）。

【二四】世間の八法（Aṣṭaloka-dharma）。利・衰・稱・譏・毀・譽・樂・苦の八をいふ。

【二五】三惡。地獄・餓鬼・畜生の三惡道をいふ。

【二六】八難。見佛聞法に就いて障難ある八處なり。地獄・餓鬼・畜生・欝單越・長壽天・聾盲瘖瘂・世智辨聰・佛前佛後。此中欝單越とは、新に北拘盧洲といひ、樂報殊勝にして、總て苦なきが故なり。長壽天は、色界無色界の長壽安隱なる所をいふ。佛前佛後は、二佛の中間、佛法なき時をいふ。

香華を雨らして、遍ねく其の地を覆ふ。三千大千世界に於て、所有大小の諸樹、皆悉く枝を低れて菩提樹に向ふ。三千大千世界の須彌山等の、大小の諸山、皆悉く峯を低れて菩提樹に向ふ。欲界の諸の天子等、各々種種微妙の香花を散す。一一の妙花、縱廣一拘盧舍、以て花臺を爲す。復、齊路を現じて、脩遠際無し。路の左右に於て、七寶の欄楯、皆悉く嚴好なり。其の量高下、七多羅樹の如し。衆寶幡蓋、處處に莊嚴す。復、七寶の多羅の樹を化し、一一の樹間、絡むに金繩を以てす。其の繩の上に於て、皆珍鐸を懸け、明珠琉璃、其の中に間廁す。其の樹の兩間に、七寶の池有り。彼の池の內に於て、金沙遍布し、香水盈滿す。[六]優鉢羅花・[七]拘[八]勿頭花・[九]波頭摩花・[一〇]芬陀利花、是の如き等の花、池の中に充滿す。其の池の四邊に、七寶の階道あり。周匝莊嚴す。其の階道に於て、則ち迦陵頻伽・鳧鴈・鴛鴦・[一一]命命の諸鳥有つて、和雅の音を出す。八萬四千の天の諸の婇女有りて、衆の香水を以て前路に灑ぐ。復、八萬四千の天の諸の婇女有りて、衆の天花を散す。一一の樹下に、復、衆寶の妙臺有り。是の諸臺の上に、各々八萬四千の天の諸の婇女有り。皆寶器を捧げて、妙なる栴檀・沈水の香を盛る。復、五千の天の諸の婇女有り。天の伎樂を奏し、歌舞頌歎して、和雅の音を出す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、菩提樹に詣りし時、其の身より普く無量の光明を放ち、又遍ねく無邊の刹土を震動す。復、無量百千の諸天有り。天の伎樂を奏し、虛空中に於て、衆の天花を雨し、又、無量百千の天の妙衣服を雨す。復、無量の象馬牛等有り。菩薩を圍遶して、聲を發して哮吼する、其の音和暢なり。又無量の[一二]鸚鵡・[一三]舍利・[一四]拘枳羅鳥・[一五]迦陵頻伽・[一六]鳧鴈・[一七]鴛鴦・[一八]孔雀・[一九]翡翠・[二〇]共命の諸鳥有り。翻翔圍遶して、和雅の音を出す。菩薩、[二一]菩提場に往きし時、是の如き等の無量の希有吉祥の相有りき。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩將に菩提の座に坐せんと欲す。其の夜、三千大千世界の主大

【六】優鉢羅花(Utpala)。青蓮花。
【七】拘勿頭花(Kumuda)。黃蓮花。
【八】勿。三本、物に作る。
【九】波頭摩花(Padma)。赤蓮花。
【一〇】芬陀利花(Puṇḍarīka)。白蓮花。
【一一】命命鳥—次に出る共命鳥に同じ。
【一二】鸚鵡(Śuka)。
【一三】舍利(Sārikā)。
【一四】拘枳羅鳥(Kokila)。
【一五】迦陵頻伽(Kalaviṅka)。
【一六】鳧鴈(Haṃsa)。
【一七】鴛鴦(Cakravāka)。
【一八】孔雀(Mayūra)。
【一九】翡翠(Krośa)。
【二〇】共命(Jīvaṃjīvaka)。
【二一】菩提場(Bodhimaṇḍa)。佛の菩提を成就せし道場なり。摩竭陀國尼連禪河の邊、菩提樹下の金剛座是なり。

卷の第八

詣菩提場品第十九[一]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、身體を澡浴し、復、乳糜を食ひて、氣力平全なり。方に[二]十六功德の地た。[三]菩提樹げ下に往詣せんと欲す。彼の魔怨を降伏せんと欲するが爲の故なり。大人の相を以て、西面して行く。所謂徐徐安隱にして行く。容止美好、虹蜺の如くにして行く。雅步閑詳、須彌山の如く巍巍として行く。忽遽ならずして行く。遲慢ならずして行く。沈重ならずして行く。輕躁ならずして行く。濁亂せずして行く。垢を離れて行く、淸淨にして行く。過失無くして行く。愚癡無くして行く。染著無くして行く。師子王の如くに行く。龍王の如くに行く。那羅延の如くに行く。地に觸れずして行く。[四]千輻輪相、印文して行く。足指網鞔甲は赤銅の如く、地を照して行く。大地を震動して行く。山の相撃つが如く、大音聲を出して行く。坑坎堆阜、自然に平正にして行く。足下の光明、罪の衆生を照し、善趣に歸せしめて行く。踐む所の地、皆蓮花を生じて行く。過去の諸佛に隨順し、師子座に就いて行く。心金剛の如く、沮壞す可からずして行く。諸の惡趣を閉ぢ、諸の善門を開いて行く。一切衆生を安樂にして行く。魔力を銷滅して行く。諸の邪論を摧いて行く。無明の翳障を除斷して行く。生死の翅羽を絕ちて行く。釋・梵・護世・自在天王を暎蔽して行く。三千大千世界に於て、唯我獨尊にして行く。自ら聖道を證し他に由らずして悟つて行く。將に一切智を證して行く。念慧相應して行く。生老病死を除かんと欲して行く。方に寂滅に趣き、垢を離れ、死せず、畏無く、涅槃の城に向つて行く。

爾の時菩薩、正念に彼の菩提の樹に向ひ、直視して行く。時に便ち是の如き無量の威儀有り。時に風天・雨天有り。尼連河より[五]菩提樹に至り、周遍掃灑して、盡く嚴淨なら令む。又無量殊勝の

【一】 詣菩提場品(Bodhimaṇḍagamana-parivarta)。
【二】 十六功德之地— Ṣoḍaśākāra sampannapṛthivī.
【三】 菩提樹 (Mahābodhidruma)。
【四】 千輻輪相(Sahasracakra)。
【五】 菩提樹 (Bodhidruma 又は Bodhivṛkṣa)。 釋尊此樹下に成道したれば菩提樹と名け、譯して道樹又は覺樹といふ。西域記は、此樹の本名を畢鉢羅樹(Pippala) なりといふ。

すべき」と。河中の龍妃、卽ち賢座を持して地より涌出し、淨處に敷置して、菩薩を請じて坐せしむ。菩薩坐し已つて、彼の乳糜を食ひ、身體相好、平復して本の如し。卽ち金鉢を以て、河中に擲ち置く。是の時龍王、大歡喜を生じ、金鉢を收め、取つて宮中に供養す。時に釋提桓因、卽ち其の形を變じて〔二〇〕金翅鳥と爲り、彼の龍王より金鉢を奪ひ取り、將つて本宮に還り、塔を起して供養す。爾の時菩薩、座より起つ。龍妃還つて獻ぜし所の賢座を持ち、本宮に歸つて塔を起し供養す。諸の比丘よ。菩薩の福慧力に由るが故に、乳糜を食し已れば、三十二相、八十種好、圓光一尋あつて、轉赫奕を增せり。』と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

『六年苦行せる時、身體極めて羸瘦せり。　天の神力を以て、彼の菩提の場に往かず。　衆生を愍むが爲の故に、還つて諸佛の法に依り、須く美食を食して、方に大菩提を證すべし。　女有り、往昔に於て、善を行して、善生と名く。　佛の六年の苦の(時)、廣く八百の衆に施せるが爲に、夜半天語を聞き、晨朝に乳牛を𣪊り、彼の千牛の乳を練り、糜を作つて、持つて奉獻す。　菩薩衣を著已つて、巡行して其の舍に至り、彼の乳糜を受け取つて、往きて尼連河に詣る。　菩薩無量劫に、廣く諸の善行を修し、身心倶に寂靜にして、進止極めて調柔なり。　彼の連河の岸に至るに、天龍悉く圍遶す。　菩薩河に入つて浴すれば、諸天香花を散す。　將に河岸に昇らんと欲すれば、神來つて寶樹を低れたり。　善女は金鉢を施し、龍女は妙床を奉ぐ。　行步師子の如くにして、菩提の座に往詣せり。』

【二〇】金翅鳥。梵語、迦樓羅(Garuḍa)。八部衆の一。翅翮金色なれば、金翅鳥と名く。須彌山の下層に住し、常に龍を取つて食となす。

乳糜の上に於て、一八千輻輪の波頭摩等の吉祥の相を現ず。時に善生女、此の相を見已つて、卽ち自ら思惟すらく、「是れ何の瑞應ぞ」と。時に仙人有り、善生に語つて言はく、「此の如きの乳糜、若し食する者有らば、必ず當に無上菩提を成ずることを得べし」と。是の時善生、乳糜を煮已つて、所居を灑掃して極めて清淨なら令め、妙座を安置して、種種に施設し、一九優多羅女に告げて言はく、「汝宜しく往きて、梵志の倚に來らんことを請ふべし」と。優多羅女、既に命を奉じ已つて、東に向つて行き、唯菩薩を見て、梵志を覩ず。南西北行するも、但、菩薩を覩て梵志を見ざること、亦復是の如し。淨居天、梵志の身を隱すに由つて、優多羅女をして、永く見ることを得ざら令めしなり。優多羅女、歸つて善生に白して言さく、「我が去る所、處として唯沙門瞿曇を見るのみ。復、諸の餘の梵志有るを見ず」と。善生女言はく、「此を最勝と爲す、我故らに彼の爲に是の乳糜を辦ぜり。汝宜しく速かに往きて、我が爲に延き請ずべし」と。優多羅女、菩薩の所に至り、頭面に足を禮して、是の如きの言を作さく、「善生、我をして來つて聖者を請ぜ使めたり」と。菩薩聞き已つて、其の所に往詣し、殊勝の座に坐す。時に善生女、卽ち金鉢を以て乳糜を盛滿し、持して以て奉獻す。菩薩受け已つて、是の思惟を作さく、「此の乳糜を食はゞ、必定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん」と。復、善生に告ぐらく、「我若し食し已らば、是の如きの金鉢、當に誰にか付與すべき」と。善生女言はく、「願はくは此の鉢を以て、尊者に奉上せん、隨意に所用したまへ」と。爾の時菩薩、彼の乳糜を擎げ、優婁頻螺聚落を出でて、尼連河に往き、鉢を岸上に置きて、鬚髮を剃除し、河に入りて浴す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『「菩薩の澡浴せし時、百千の諸天、天の香花を散じて、河中に遍滿す。菩薩浴し竟れば、競つて此の水を收め、將つて天宮に還る。剃る所の鬚髮は、善生得已つて、塔を起てて供養す。菩薩既に河岸を出でて、是の思惟を作さく、「當に何の座を以て、此の美味を食

【一八】千輻輪波頭摩等吉祥之相―Śrīvatsa-svastika-nandyāvarta-padma-vardhamānādini maṅgalyāni.

【一九】優多羅(Uttara)。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「菩薩、復、是の念を作さく、「六年勤苦して、衣服弊壞せり」と。〔一二〕屍陀林の下に於て、故き破れたる〔一三〕糞掃の衣有るを見て、將に之を取らんと欲す。時に於て地神、虛空神に告げて、是の如きの言を作さく、「奇なる哉、奇なる哉。釋種の太子、轉輪王の位を捨てて、是の棄てられたる糞掃の衣を拾ふ」と。虛空の神、此の語を聞き已つて、三十三天に告げ、是の如く展轉して、一念の中に於て、乃至、〔一四〕阿迦尼吒天に傳聞せり。爾の時菩薩、手に故衣を持ちて、是の如きの言を作さく、「何處に水有つてか、是の衣を洗浣せん」と。時に一天有り、菩薩の前に於て、手を以て地を指さし、便ち一池を成ず。爾の時菩薩、復更に思惟すらく、「何處に石有つてか、以て是の糞掃の衣を洗ふ可き」と。時に〔一五〕釋提桓因、卽ち方石を以て、池中に安處す。菩薩石を見、持ち用ひて衣を浣ふ。爾の時帝釋、菩薩に白して言さく、「我當に尊の爲に此の故衣を洗ふべし。惟願はくは聽許したまへ」と。然るに菩薩、將來の諸の比丘衆をして、他人に故衣を洗浣せ令めざら使めんと欲し、卽便ち自ら洗ひて、帝釋に與へず。衣を浣ひ已り訖つて、池に入つて澡浴す。是の時魔王波旬、其の池の岸を變じて、極めて高峻なら令む。池の邊に樹有り、阿斯那と名く。是の時樹神、樹を按じて低れ令む。菩薩枝を攀ぢて、池の岸に上ることを得、彼の樹の下に於て、自ら故衣を納む。時に淨居天子〔一六〕無垢光と名く。沙門應量の袈裟を將つて、菩薩を供養せり。

爾の時菩薩、袈裟を受け已つて、晨朝の時に於て、〔一七〕僧伽梨を著け、村に入つて食を乞ふ。其の聚落の神、昨夜中に於て、善生に告げて言はく、「汝常に彼の清淨の人の爲に、大施食を設けたり。彼の人、今は苦行を捨て已り、現に美食を食ふ。汝先に發願せり。彼の人我が食を受け已りて、速かに阿耨多羅三藐三菩提を得んと。今正しく是の時なり。宜しく速かに營辦すべし」と。時に善生女、神の語を聞き已りて、卽ち千頭の牸牛を取りて、其の乳を搆り、七度煎じ煮て、唯だ其の上極精純なる者を取りて、新器の內に置き、香粳の米を用ひ、煮て以て糜と爲す。之を煮る時に當つて、

【一二】屍陀林。屍は三本、尸に作る。又尸多婆那(Sīta-vana)といふ。尸多は寒と譯し、婆那は林と譯す。死屍を棄つる處を寒林といふ。

【一三】糞掃の衣(Paṃśukūla)。

【一四】阿迦尼吒天(Akaniṣṭha)。譯、色究竟。色界十八天の最上天にして、形體を有する天處の究竟なれば、色究竟天といふ。

【一五】釋提桓因(Śakradevānāṃ Indra)。須彌山の頂なる忉利天、卽ち三十三天の主。略して帝釋ともいふ。

【一六】無垢光(Vimalaprabhā)。

【一七】僧伽梨(Saṃghāṭī)。比丘三衣の一。譯、重或は合。割截して更に之を合重すればなり。三衣の中に、最も大なれば、大衣とも稱す。其他、雜碎衣、入王宮聚落時衣などの稱あり。

の園中、[七]閻浮樹下に於て、初禪を修得せり。我爾の時に於て、身心悅樂して、是の如く、乃至、四禪を證得せり。往昔曾つて證得せし者を思惟するに、是れ菩提の因なり、必ず能く生老病死を除滅せん」と。菩薩、復、是の念を作さく、「我今此の羸瘦の身を將つては、道を受くるに堪へず。若し我即ち神力及び智慧力を以て、身を平復なら令めて、菩提場に向はば、豈是の如きの事を辦ずること能はざらんや。(是の如きは、)即ち一切衆生を哀愍するに非ず。是れ諸佛の菩提を證したまへる法に非ず。是の故に我今應に美食を受けて身に力有ら令め、方に能く菩提の場に往詣すべし」と。時に諸天有り、心に常に苦行を修する者を愛樂す。已に菩薩の美食を食はんと欲するを知り、菩薩に白して言さく、「尊者、美食を受くること莫れ。我今方便して、神通力を以て、尊の氣力を平復して本の如くにし、食せると異ること無から令めん」と。菩薩思惟すらく、「我實に食はずして、已に多時を經たり。[八]四輩の人民、亦皆我が苦行を修行せるを知れり。若し我彼の天神の力に因つて、而して食はずんば、便ち妄語を成さん」と。時に五跋陀羅、既に菩薩の美食を受けんと欲するを聞き、咸く是の念を作さく、「沙門瞿曇、是の如く苦行して、尙ほ出世の勝智を得ること能はず。況んや復今は美食を食ひ、樂を受けて住せんと欲す。是の無智の人、禪定を退失せり」と。便ち菩薩を捨てて、波羅奈・仙人墮處・鹿野苑中に詣れり』と。佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩の苦行已來、優婁頻螺聚落の主、名を[九]斯那鉢底と曰ふ。十の童女有り。昔、五跋陀羅と、常に糜麥を以て菩薩を供養せり。爾の時諸女、既に菩薩の苦行を捨置せるを知り、即ち種種の飲食を作して奉獻す。未だ多日を經ざるに、色相光悅なり。是に於て衆人、復相謂つて言はく、「沙門瞿曇は、形貌威嚴にして、大福德有り」と。十童女の中、其の最も小なる者は、名を[一〇]善生と曰ふ。昔、菩薩苦行の時に於て、恒に飲食を以て、八百の梵志を供養し、梵志を供養するの福に因つて、菩薩を資益し、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成就せ[一一]令めんを願ぜり。』

【七】閻浮樹(Jambu)。樹の名。

【八】四輩。人天龍鬼の四衆なり。

【九】斯那鉢底(Senāpati)？梵文は(Grāmika)に作る。

【一〇】善生(Sujātā)。

【一一】令—今と作すは誤。令と作すべし。

まつて煩惱を除く。時に魔王波旬、菩薩の所に到り、詐つて柔軟の語を以て、菩薩に向つて言へらく「世間の衆生、皆悉く壽命を愛す。汝、今、體枯竭せり、千死して一全無し。當に[四]事火の法を修すべし。必ず大果報を獲ん。宜しく徒らに命を捨てて、人の憐愍する所と爲ること無かれ。心性本と伏し難し、煩惱は斷ずべからず。菩提誰か能く證せん。自ら苦みて何をか爲さんと欲する」と。菩薩波旬に告げて、是の如き言を作さく「貪瞋癡に[五]惛醉し、汝と眷屬と爲り、汝を將ゐて此に至り、汝と共に善根を壞せん。我は世福を求めず。此を以て相擾すこと勿れ。我今畏るる所無し。死を以て邊際と爲す。志願して解脫を求め、決して退轉の心無し。諸の痛惱有りと雖も、我が心は恒に寂靜なり。[六]斯の堅固定に住し、精進し樂欲等して、我寧ろ智を守つて死すとも、無智を以て生きじ。譬へば義勇の人の如し。寧ろ勝を決せんが爲に沒すとも、怯弱の者の、活を求めて人に制せらるるが如きには非ず。是の故に、我今に於て、當に汝が軍衆を摧くべし。第一貪欲の軍、第二憂愁の軍、第三飢渴の軍、第四愛染の軍、第五惛睡の軍、第六恐怖の軍、第七疑悔の軍、第八忿覆の軍、第九悲惱の軍、及び自ら讃じて他を毀り、邪稱供養等の、是の如きの諸の軍衆は、是れ汝の眷屬なり。能く天人を摧伏す。我今恒に彼の正念正知等に住して、汝波旬を銷滅せんこと、水の坏器を漬すが如くせん」と。菩薩是の言を作せば、魔王便ち退屈せり』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく『菩薩是の思惟を作さく「過現未來の所有の沙門、若しは婆羅門の苦行を修する時、身心を逼迫して痛惱を受くるは、應に知るべし、是等は但自ら己を苦めて都べて利益無し」と。復是の念を作さく「我今此の最極の苦を行ぜり。而も出世の勝智を證すること能はず。卽ち知る、苦行は菩提の因に非ず、亦苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修するに非ざるを。必ず餘法有つて、當に生老病死を斷除することを得べし」と。復是の念を作さく「我、昔、父王

【四】事火の法。外道の法、火に事ふるをいふ。三迦葉は、もと此の種の外道なり。

【五】惛。三本昏に作る。

【六】住斯堅固定、精進樂欲等—第二句「精進と樂欲と等し」とも、訓ぜられど「精進し樂欲等し」といふを可とすべし。

爲に、大苦行を勤修せり。乃ち空閑の地を擇びて、加趺して三昧に坐し、是の節食の時に當つて、日に一麻米を食す。寒を履みて煖に就かず。熱に處して涼を求めず。亦蚊虻を逐はず、亦風雨を避けず。童牧來りて觀看し、戲るるに草莚の刺を以て、耳鼻口に通じ、草木瓦石を以て、我が身を打擲せしも、亦損を致す能はざりき。一切皆忍受して、身亦低昂せず、亦疲極を生ぜず。涕唾便痢等、諸穢皆已に絕ち、唯、皮骨を餘して在るのみ。血肉盡く乾枯して、形體極めて羸瘦し、[三]阿斯迦樹の如し。[四]阿那婆定に住して、身心寂として動ぜず。亦禪樂を味はず。而して大悲心を起し、普く諸の衆生の爲に是の如きの定を修行しぬ。此の定を修するを以ての故に、速かに疾く成佛を得、外道衆を滅除し、諸の異學を摧伏せり。亦、迦葉等、菩提有ることを信ぜず、是の如きの大菩提は、無量劫にも得難きを以て、是の諸人等の爲に、阿那婆定に入れり。」此の定に坐する時に當つて、十二洛叉の、諸天人衆等有り。三乘の路に住しぬ。諸天龍神等、恒に日夜の中に於て、菩薩の身を供養し、各々自ら弘願を發せり。願はくば那婆定に住して、諸の衆生を利益して、其の心虛空の如くならんと。』

[一]往尼連河品第十八

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、六年苦行す。[二]魔王波旬、常に菩薩に隨ひて、其の過を伺求すれども、得ること能はず。厭倦の心を生じて、悒然として退けり』と。爾の時世尊、偈を以て頌して曰く、

『菩薩の居する所、林野甚だ清淨なり。東のかた尼連の水に望み、西のかた[三]頻螺の池に據る。初め精進の心を起して、來つて寂靜の地を求め、彼の極めて閑曠なるを見て、此に止

【三】阿斯迦樹(Aśoka?)。

【四】阿那婆定(Ānāpāna)。譯、數息觀。出息入息を數へて、心を鎭る觀法の名。梵文には (Dhyāyatyās-phanaka-dhyāna)といふ。

【一】往尼連河品(Nairañjanā-parivarta)。

【二】魔王波旬。梵語 Māra pāpīyan の轉訛なり。惡魔の名、殺者、惡者と譯す。

【三】頻螺の池。優樓頻螺池の略。

草[三九]莛を以て我が鼻を刺し、或は我が口に刺し、或は我が耳に刺せり。我、爾の時に於て、身心動ぜず、常に天龍鬼神の供養する所と爲りて、能く十二[四〇]絡叉の天人をして、[四一]三乘の路に住せ令めき」と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

「菩薩、往昔に於て、位を捨てて出家し已り、衆生を利せんが爲の故に、諸の方便を思惟したまふ。「我れ濁惡の世に出でて、此の閻浮提に生じたり。多くの諸の邪見の人、法を破つて異道を行ず。愚者は解脫を求め、自ら其の身心を苦しませ、生死の因を怖ると雖も、恒に出離の果に迷へり。或は有り火聚に赴く。自ら高巖より墜つ。五熱以て身を炙り、灰を塗りて自ら毀つ。日に常に一掬の食にて、劣に以て身命を濟ふ。他門に乞食して、主喜べば方に受く。顏色少しく恪を懷けば、朝を終ふるも食はず。或時には杵臼、及以狗吠の聲を聞き、卽ち止まつて乞を行ぜず。乃ち喚ぶも亦受けず。蘇油及び美味、乳酪沙糖等、一切皆御せず。唯麁惡の食、糠汁及び油滓、[四二]狩糞并びに藕根、草木諸の花葉を食ひ、以て解脫を求む。或は淨水を服する有り。或は日に一麻を食ひ、或は止だ一米を進む。或は自ら餓死して、以て解脫を求むる有り。或は皮革、糞掃及び鳥羽、樹皮毛毼等、種種の弊衣服を著る有り。或は常に形を露はして、以て解脫を求め。編椽の上、棘刺灰土の中、板杵瓦石の間に坐臥して、以て解脫を求むる有り。或は常に兩手を擧げ、或は一足を翹げ。散髮し及び鬈髻し、日を逐うて迴轉し、以て解脫を求むる有り。或は常に日月、河海及び山川、高原の諸の樹林を禮し、以て解脫を求む。此の諸の外道等、勤修して利無きに苦む。虛妄の業に執著し、堅く受けて未だ嘗つて捨てず。是の如き邪見の人は、死して當に惡趣に墮つべし。我、是の如き等の爲に、昔、六年の中に於て、示現して彼を摧伏し、大苦行を勤修せり。諸の無智の人有つて、外道の邪苦を見て、竊に以て眞實と爲し、便ち隨喜の心を生ぜり。亦彼を成熟せんが

【三九】莛。宋本莛に作る。
【四〇】絡叉(Lakṣa)。數量の名。十萬なり。
【四一】三乘。人を乘せて、各其の果地に到らしむる教法を乘と名く。聲聞乘・緣覺乘・菩薩乘の三をいふ。
【四二】狩。三本、獸に作る。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩爾の時、諸の出入の息、一切皆止まる。內風强盛にして、兩〔三三〕肋の間に於て、旃迴婉轉して、大音響を發す。譬へば屠人の、刀を以て牛を解くが如し。是の苦の事を受けて、都べて懈倦無かりき。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩爾の時、內風動ぐが故に、遍身熱惱す。譬へば人有り、力弱くして制を受け、大火聚に於て、身を擧げて炙らるるが如し。斯の苦極を受けて、更に勇猛精進の心を增し、是の念を作して言はく、「我れ今彼の不動三昧に住して、身口意業、皆正受を得たり。〔三四〕第四禪に入りて、喜樂を遠離し、分別を遣りて、飄動有ること無し。猶、虛空の、一切に遍くして能く變異すること無きが如し。此の定を名けて、〔三五〕阿娑婆那と爲す」と。菩薩爾の時、是の如き等の最極の苦行を修す。諸の比丘よ。菩薩復是の念を作さく、「世間の若しは沙門・婆羅門、斷食の法を以て苦と爲す。我も今復彼を降伏せんと欲するが故に、日に一麥を食せん」と。比丘、當に知るべし。我昔唯一麥を食せる時は、身體羸瘦して〔三六〕阿斯樹の如く、肉盡き肋現じて、壞れたる屋椽の如く、脊骨連り露はれて、笻竹の節の如く、眼目欠陷して、井底の星の如く、頭頂銷枯して、暴せる乾瓠の如く、所坐の地は、馬蹄の跡の如く、皮膚の皺趨は、割胸の形の如くなりき。手を擧げて塵を拂へば、身毛焦落し、手を以て腹を摩すれば、乃ち脊梁に觸れぬ。又、一米乃至一麻を食するや、身體羸瘦して前に過ぐること十倍なり。色は聚墨の如く、又死灰の若し。四方聚落の人、來り見る者、咸く歎恨して言へり、『釋種の太子、寧ぞ自ら苦を爲すや。端正の美色、今何處に在りや』と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩六年苦行せし時、〔三七〕四威儀に於て曾つて失壞せざりき。盛夏の暑熱にも淸涼に就かず。隆冬の嚴寒にも、厚煖を求めざりき。蚊虻體を唼れども、亦拂除せず。結加趺坐して、身心動ぜず。亦〔三八〕頻申せず。亦洟唾せず。放牧の童竪、常に來つて覩見し、戲れて

【三三】肋。宋本脇に作る。

【三四】第四禪(Catur thadhyāna)。この禪は、初・二・三の三禪を經て、後に入るものにして、不苦不樂・捨・念・一心の四支を具す。

【三五】阿娑婆那(Āśvāsa-praśvāsa)。定の名。數息觀。偈には阿那婆定(Ānāpāna)といふ。

【三六】阿斯樹。偈には阿斯迦樹とあり。阿輸伽樹(Aśoka)なり。

【三七】四威儀。行住坐臥の四種の作法なり。

【三八】頻申(Vijṛmbha)。あくびすること。

を帶ぶ。或は五熱に身を炙りて、煙を以て鼻に熏し、自ら高巖より墜ち、常に一足を翹げて日月を仰観し、或は編椽・棘刺・灰糞・瓦石・板杵の上に臥し、以て解脫を求む。或は唵聲[一八]・婆娑聲[一九]・蘇陀聲[二〇]・婆婆訶聲[二一]を作し、呪術を受持し、韋陀を諷誦し、以て解脫を求む。或は諸の梵王・帝釋・摩醯首羅・突伽[二二]・那羅延・拘摩羅[二三]・迦旃延[二四]・摩致履伽[二五]・八婆蘇[二六]・二阿水那[二七]・毘沙門・婆婁那[二八]・阿履致[二九]・旃陀羅[三〇]・乾闥婆・阿修羅・迦婁羅・摩睺羅伽・夜叉・歩多[三一]・鳩槃荼、諸天鬼神に依つて、以て解脫を求む。或は地・水・火・風・空、山川・河池・溪壑・大海、林樹・蔓草・塚墓・四衢・養牛の處・及び堙肆の間に歸依し、或は刀劍・輪矟、一切の兵器に事へて、以て解脫を求むる有り。是の諸の外道、生死を怖るるが故に、出離を勤求して、苦行を修習するも、都て利益無し。非歸依の處を歸依と作し、非吉祥の事に、吉祥の想を生ずればなり」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩爾の時、復、是の念を作さく、「我今爲に外道を摧伏して、希有の事を現じ、諸の天人をして、清淨心を生ぜ令めんと欲す。又、彼の因緣を壞する者をして、業の果報を知ら令めんと欲す。又、功德智慧の、大威神有るを示現して、諸定の差別の相を分拼[三二]せんと欲す。又大勇猛精進の力有ることを示現せんと欲す」と。便ち是の處に於て、結加趺坐し、身口意業、靜然として動ぜず。初め心を攝する時、一境に專精し、出入の息を制して、熱氣體に遍し。腋下より汗を流し、額上より津出でて、譬へば雨滴の如し。斯の苦を忍び受けて、疲極を生ぜず。便ち勇猛精進の心を起す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩爾の時、出入の息を制し、兩耳の中に於て、大音響を發す。譬へば風の吹くを引きて、鞴囊を鼓つが如し。此の苦事を受けて、疲倦を生ぜず。諸の比丘よ。我爾の時に於て、耳鼻口中に出入の息を斷つに、內風は頂を衝いて、大音聲を發すること、譬へば壯士が、彼の利刄を揮ひて、上、腦骨を破るが如し。是の苦の事を受けて疲極退轉の心を生ぜざりき。』

【一八】唵聲(Oṃkāra)。
【一九】婆娑聲(Vaṣaṭkāra)。
【二〇】蘇陀聲(Svadhākāra)。
【二一】婆婆訶聲(Svāhākāra)。
【二二】突伽(Durgā)。濕婆の配偶たる女神。
【二三】拘摩羅(Kumāra)。譯、童子。初禪天の梵王にして其の顏童兒の如くなるが故に名く。
【二四】迦旃延(Kātyāyana)。天神の名。
【二五】摩致履伽(Mātṛkā)。母神。
【二六】婆蘇(Vāsu)。初は諸神の異稱なりしが、後には特に火天及毘紐天の異名とせらる。
【二七】阿水那(Aśvin)。曙光神。
【二八】婆婁那(Varuṇa)。水神。
【二九】阿履致(Āditya)。光明神。
【三〇】旃陀羅(Candra)。月。
【三一】歩多(Bhūta)。精靈神。
【三二】拼。三本析に作る。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「菩薩、伽耶山を出で已り、次第に巡行して、[一二]優樓頻螺池側の東面に至り、尼連河を視見す。其の水清冷にして、湍洄皎潔なり。涯岸は平正にして、林木扶疎たり。種種の花果、鮮榮愛す可し。河邊の村邑は、處處豐饒にして、棟宇相接し、人民殷盛なり。爾の時菩薩、漸く一處に至る。寂靜閑曠にして、丘墟有ること無し。近に非ず遠に非ず、高からず下からず。卽ち是の念を作さく、『今止此の地のみ、神を安んず可きこと易し。往古已來、聖行を修する者、多く此に於て住せり』と。

復、是の念を作さく、『我今[一三]五濁惡世に出でたり。彼の下劣の衆生、諸の外道等の、我見に著する者を見るに、諸の苦行を修すれども、無明に覆はれて、虛妄に推求し、自ら身心を苦めて、用つて解脫を求む。所謂或は器を執り、巡り乞ひ行きて、之を食ふ有り、或は唯一掬の食を以て、一日を濟ふ有り、或は乞食せずして、彼の來り施すに任せ、或は求請を受けず、自ら往きて乞ふを須ちて、以て解脫を求むる有り。或は恒に草木・根莖・枝葉・花果・蓮藕・狩糞・糠汁・米泔・油滓を食する有り。或は沙糖・蘇油・石蜜・淳酒・甜酢・種種の美味を食はず、以て解脫を求むる有り。或は一家に食を乞ひ、若しは二若しは三、乃し七家に至る有り。或は一日に一食し、二日に一食し、乃至、半月一月に一度食して、以て解脫を求むる有り。或は所食の漸頓多少を、月に隨つて增減する有り。或は日に一撮、乃至、七撮を食する有り。或は日に一麥一麻一米を食する有り。或は唯淨水を飲むで、以て解脫を求むる有り。或は名稱ある神の所に、自餓して死し、已の意に隨つて天人の中に生ずと謂ふ有り。或は[一四]鵂鶹の毛羽を紡績し、以て衣服と爲し、或は樹皮を著け、或は牛羊の皮革[一五]糞掃[一六]毯毼を著け、或は一衣乃至七衣を著く。或は黑或は赤、以て衣服と爲し、或は復形を露はす。或は手に三杖を提げ、或は[一七]髑髏を貫きて、以て解脫を求む。或は一日に一浴し、一日に二浴し、乃至七浴し、或は常に浴せず。或は灰を塗る有り、或は墨を塗る有り、或は糞土に坌れ、或は萎花

【一二】優樓頻螺(Uruvilvā)。譯、木瓜。村の名、苦行林のある地。
【一三】五濁惡世(Pañcakaṣāyakāla)。五濁とは、住劫中の人壽二萬劫已後に於て、渾濁不淨の法五種あり。劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁をいふ。是の如き不淨の法、次第に增長する世なれば、惡世といふ。一に劫濁。二萬歲以後に至つて、見等の四濁起る時をいふ。二に見濁。身見邊見等の見惑。劫濁時の衆生盛に之を起す。三に煩惱濁。貪瞋痴等の一切修惑の煩惱。劫濁時の衆生盛に之を起す。四に衆生濁。劫濁時の衆生は、見濁煩惱濁の結果として、人間の果報漸く衰へ、心鈍く體弱く、苦多く福少きをいふ。五に命濁。又前二濁の結果として、壽命漸く縮少して、乃至、十歲に至るをいふ。
【一四】鵂鶹(Ulūka)。梟鴟の類。晝間見ること能はざるもの。
【一五】糞掃(Pāṃsukūlika)。塵巷野に棄てられたる衣を、浣洗縫潤して、着するなり。糞を拭ひし穢物に同じければ、糞掃衣と名く。
【一六】毯毼。毯字、三本氈に作る。
【一七】髑髏。人の頭骨なり。

等久しく學すれども、尙ほ未だ彼の定の淺深を測ること能はざるに、云何ぞ太子、少時の間に於て、已に能く大仙の法を證得し、未だ究竟せざるを嫌つて、更に勝者を求めたまふぞ。斯の義に由るが故に、必ず當に無上菩提を證り獲たまふべし。彼れ道を得たまふ時、我等五人も亦應に[八]分有るべし」と。是の念を作し已つて、卽ち仙人を捨てて、還つて菩薩に從ふ。

爾の時菩薩、王舍城を出で、五跋陀羅と次第に遊歷して、尼連河に向ひ、伽耶山[九]に次す。山頂の上に於て、一樹の下に在りて、草を敷いて坐し、是の思惟を作さく、「世間の若しは沙門、若しは婆羅門の、身心を放逸にし、貪欲に住し、熱惱に隨ふは、苦行を行ずと雖も、道を去ること甚だ遠し。譬へば人有つて、火を求めんが爲の故に、便ち濕木を取つて之を水中に置き、燧を鑽つて火を索むるが如し。是の人の、能く火を求め得ること有らんや不や。若し人貪欲等に住すれば、苦行を行ずと雖も、出世の勝智を證得する能はざること、亦復是の如し」と。

復、是の念を作さく、「世間の若しは沙門、若しは婆羅門の、身を制御して貪欲を行ぜざるも、境界の中に於て心猶愛著すれば、苦行を修すと雖も、道を去ること尙ほ遠し。譬へば人有つて、火を求めんが爲の故に、猶、濕木を取つて之を陸地に置き、燧を鑽つて火を[一〇]索むるが如し。是の人、能く火を求め得ること有らんや不や。若し復人有つて、貪愛等を起し、心未だ寂靜ならざれば、苦行を行ずと雖も、[一一]出世の勝智を證得する能はざること、亦復是の如し」と。

復、是の念を作さく、「世間の若しは沙門、若しは婆羅門、身心を攝衞し、貪欲を離れ、諸の熱惱を除き、最上寂靜にして、苦行を修行せば、卽ち能く出世の勝智を證得せん。譬へば人有つて火を求めんが爲の故に、彼の燥木を取つて乾ける地に置き、而して之に鑽燧するが如し。當に知るべし、是の人定んで火を求め得んを。若し復人有つて、貪欲に處せず、身心寂靜にして、苦行を勤修せば、卽ち能く出世の勝智を證得すること、亦復是の如し」と。

【八】分—その分にあづかる。その利益を分有するなり。

【九】伽耶山。新稱、羯闍尸利沙山(Gayāśīrṣa)。譯、象頭山。二處あり。一は靈鷲山の近にあり、一は菩提道場の近にあり。これは菩提道場に近きものなり。

【一〇】索—麗本責に作り、三本には索に作る。

【一一】出世の勝智(Uttarimanuṣya-dharmālaṃkārajñāna)。世間を超出して、涅槃に入るの聖智をいふ。

苦行品第十七[一]

佛、諸の比丘に告げたまはく、「王舍城の邊に、一仙人有り。[二]摩羅の子にして[三]烏特迦と名く。七百の弟子と倶なり。常に[四]非想非非想定を説く。爾の時菩薩、彼の仙人の、大會の中に於て、多聞聰慧にして、衆に宗仰せらるるを見て、是の思惟を作さく、「我若し其の所に至つて、其の苦行に同ぜずんば、云何ぞ能く彼の修行する所の諸定の過失を顯はさんや。我、今、方便をもつて、彼をして自ら其の修習する所の、究竟爲るに非ざることを知ら令めん。又我の定慧を開顯して、一切を利益し、彼の衆會をして、希有の心を生ぜ令めんと欲す」と。是の念を發し已つて、仙人の所に至り、是の如きの言を作さく、「仁者。誰か汝の師爲る。汝の修行する所は、復是何の法ぞ」。仙人答へて言はく、「我れ本、師無し、自然にして悟れり。」菩薩告げて言はく、「我れ今故らに來つて汝の所證を求む。願はくば爲に演説せよ。我當に之を行ずべし。」仙言はく、「意の所欲に隨ひ、當に爲に宣説すべし」と。

爾の時菩薩、彼の教を受け已り、一靜處に於て專精に修學し、昔慣習せる定慧の因緣に由つて、即ち世間百千の三昧を得たり。彼の諸の定に隨ひ、所有差別、種種の行相、皆前に現在せり。是の時菩薩、復定より起ちて、仙人に謂つて言はく、「此の定を過ぎ已つて、更に何らの法有りや。」仙言はく、「此を最も勝れたりと爲す。更に餘法無し」と。菩薩、是の思惟を作さく、「我に[五]信進念定慧有り。速かに能く彼の仙の法を[六]證得せんも、其の得たる所の者は、正路爲るに非ず。厭離の法に非ず。沙門の法に非ず。菩提の法に非ず。涅槃の法に非ず」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「菩薩、彼の諸仙をして、其の邪道を捨て令めんと欲するが爲に、上の如き事を説く。時に[七]五跋陀羅、先に彼の所に於て、梵行を修行す。竊に相議して言はく、「我

【一】苦行品(Duṣkaraṇaryā-parivarta)。

【二】摩羅の子(Rāmaputra)。摩羅は羅摩の誤寫か。

【三】烏特迦(Udraka)。梵文は Rudraka に作る。欝頭藍弗(Udraka Rāmaputra)とも書く。

【四】非想非非想定(Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana)。非想非非想天を享有すべき禪定なり。

【五】信進念定慧—五根又は五力なり。三十七道品の中に數へらる。

【六】證得。證字、麗本勝に作り、三本證に作る。次下に證得の語あるによつて今、三本に從つて、證得とす。

【七】五跋陀羅。梵本には、Pañcaka-Bhadravargiya に作る。五群の賢士の義。佛出城の時、王の命により、大臣の中より、太子に隨從せんが爲に、選ばれて出家せる五人のもの。前出。

宮室と爲す。豈に復牛跡に於て、而も愛著心を生ぜんや。大王應に當に知るべし。五欲に無邊の過あり。能く地獄・餓鬼及び畜生に墮せ令む。智者は當に之を遠ざけて、棄捨すること涕唾の如くすべし。欲は、果の熟し已りて、將に墜んとして自ら久しからざるが如し。又、空中の雲の、須臾にして變滅するが如し。風馳飄鼓の、時として暫くも停まること無きが如し。若し五欲に著すれば、卽ち解脫の樂を失ふ。誰か智慧有る士にして、大苦の因を求めんや。若し人未だ欲を得ざれば、貪火極めて熾然なり。若し已に之を得れば、轉、復、厭足無し。得已つては愛に別離して、便ち大苦惱を生ず。天上の微妙の樂や、人中の殊勝の果や、假ひ世間の人をして、盡く二種の報を受け使むとも、心亦未だ足ることを知らず。此を得れば、更に餘を求む。譬へば熱乏の人の、渴に逼まられて鹹水を飲むが如し。五欲も亦是の如し。悕求して息む時無し。常に生死の中に在つて、輪轉して恒に無し。若し智慧有る者は、必ず淨く諸根を攝し、無漏の聖道を證せん。爾るを乃ち知足と名く。王、今、應に身を觀ずべし。無常にして堅固ならず。九孔恒に流溢し、衆苦、機關を作す。我れ五欲を受くと雖も、而も貪著を生ぜず。寂滅の樂を求めんが爲に、是の故に今出家せり」と。頻婆娑羅言く、「善い哉、大導師、我れ本汝に臣事せり。汝は是れ帝王の子にして、能く五欲の榮を棄てぬ。我、今、俗利を勸めたり。必ず無量の罪を獲ん。唯願はくば大慈悲をもつて、哀愍して我が過を捨てよ。當に此の境界に於て、佛菩提を證得すべし。願はくば我を遺れさら使めよ。我當に大利を獲べし」と。是に於て座より起ち、菩薩の足を頂禮し、百千の衆に圍遶せられて、還つて自宮に返れり。菩薩調伏の心をもつて、世間の依止と爲り、隨つて益して去住して、當に尼連河に往くべし。」

【三二】九孔。兩眼・兩耳・兩鼻及び口・大小便の九處を云ふ。

【三三】尼連河（Niraṅjanā）。河の名。佛成道せんとして、先づ此河に浴し、後に菩提樹下に坐す。

の言を作す有り。或は是れ天帝釋か、夜摩か、兜率の天か、化樂か、他化の主か、四天、及び日月か、或は是れ[一六]羅睺等か、[一七]韓留質多羅か、[一八]薄離の諸天の衆かと。復、王に白して言ふ有り。此は是れ[一九]靈山の神なり。大王應に當に知るべし。王今大利を獲たまはんと。

時に王、此の語を聞き、心に大喜悅を生ず。自ら高樓の上に陟り、遙かに菩薩の身を觀るに、相好甚だ端嚴なり。譬へば眞金聚の如し。王因つて左右に勅して、菩薩に食を奉獻し、幷に所住を尋ねて、隨逐して之を觀遣む。使者、菩薩に隨ふに、靈鷲山に往くを見、歸り來つて、大王に白し、所見の事を具に陳ぶ。王、是の事を聞き已りて、益々希有の心を增し、彼の晨朝の時に於て、駕を嚴しめて躬ら親しく謁す。遙かに巖石の中に、光相極めて清淨にして、威容甚だ嚴好なるが、動ぜざること須彌の若くなるを覩る。諸の侍從を屛除して、徒步して前に進み、菩薩の足を頂禮し、種種に慰問し已りて、菩薩に白して言はく、「大士何れより來れるか。鄕邑は何處に在りや。父母は是れ誰とか爲る。是れ婆羅門とや爲ん。是れ刹帝利とや爲ん。或は是れ諸仙聖か。仁者實の如く說け」と。菩薩、王に答へて言はく、「我が父は輸檀王なり。雪山の下に居住す。城を迦毘羅と名く。人民甚だ安樂なり。無上道を求めんが爲に、是の故に今出家せり」と。王重ねて稽首して言さく、「仁、今、盛にして少年なり。容顏甚だ端正なり。應に五欲の樂を受くべし。何の爲にか乃ち乞を行ずる。我當に此の國を捨てて、汝と共に之を治むべし。今幸に相見えて、中心甚だ欣喜す。願はくば親友と作つて、共に王位に莅むことを得ん。何爲ぞ、空山林野の中に獨り處ることを樂ふや」と。菩薩是の時に於て、柔軟の音句を以て、徐ろに大王に答へて言はく、「我は今甚だ、世間の諸の榮位を戀はず。寂滅を求めんと欲するが故に、之を捨てて出家せり。況んや乃ち王國に於て、而も復貪羨を生ぜんや。譬へば[二〇]婆竭龍の如し。大海を

【一六】羅睺(Rāhu)。阿修羅の名。
【一七】韓留質多羅。留は摩の誤ならん。(Vemacitri)。阿修羅の名。
【一八】薄離(Bali)。
【一九】靈山。靈鷲山の略。
【二〇】婆竭龍。婆竭羅(Sāgara)。海に住める龍なり。

に厭倦せず。少時を經て、皆已に證することを得たり。既に定を得已つて、仙人の所に往き、是の如きの言を作さく、「大仙、汝は唯此を證するのみなりや、更に餘法有りや。」仙言はく、「瞿曇、我唯此を得るのみ、更に餘法無し。」菩薩報じて言はく、「是の如きの法、我已に現證せり。」仙言はく、「我が所證を以て、汝も亦能く證せり。我と汝と、宜しく應に共に住して、弟子を教授すべし」と。諸の比丘よ。是の時仙人、甚だ相尊重し、即ち最上微妙の供具を以て、我を供養し、諸の學徒の中に、我一人を以て、其の等侶と爲せり。比丘よ。我れ時に仙人の所說を思惟するに能く苦を盡くすに非ず。何の法か能く苦を離るるの因と爲さんと。即ち彼の時に於て、毘舍離を出でて、漸次に遊行し、[11]摩伽陀の[12]王舍大城に往き、[13]靈鷲山に入りて、獨り一處に住す。常に無量百千の諸天の守護する所と爲る。晨旦に衣を著け、應器を執持して、溫泉門より王舍城に入り、次第して乞食す。行步詳雅にして、諸根寂然たり。前を觀ずること五肘、心に散亂無し。城中の諸人、菩薩の來るを見て、心に希有を生じ、悉く是の言を作さく、「此は是れ何人ぞ。是れ山神とや爲ん。是れ梵王とや爲ん。是れ帝釋とや爲ん。是れ四天王とや爲ん」と。爾の時世尊、偈を說いて言はく、

「菩薩淸淨の身、光明、量有ること無し。威儀悉く具足し、心靜極にして、調柔なり。靈鷲山に處在して、自ら出家の法を守る。彼の晨朝の時に於て、衣を著け鉢を持ち已りて、身心を調伏するが故に、城に入りて食を乞ふ。身は融けたる金聚の如く、相好以て莊嚴す。路傍の若は男も女も、覩る者厭足すること無し。城中居民の輩、是の勝人の來るを見て、皆希有の心を生じ、奔馳して競ひて瞻仰す。斯の人甚だ奇特なり。今何所より來れるやと。

諸の綵女等有つて、咸く妙樓閣に昇り、彼の窓牖の間に於て、[14]闚望して暫くも捨てず。街衢盡く充滿し、闤闠悉く空虛なり。作す所の業を棄捨して、俱に來つて菩薩を候ふ。人有り遽かに往きて、[15]頻婆娑羅王に告ぐ。今、梵天有つて來り、城に入つて食を乞ふと。復、是

【一一】摩伽陀(Magadha)。中印度の國名。
【一二】王舍大城(Rājagṛha)。摩伽陀國に在つて、頻婆沙羅王が、上茅城の舊都より新に都せし所なり。王舍城を圍んで五山あり。五山の第一は即ち靈鷲山なり。
【一三】靈鷲山(Gṛdhrakūṭa)。舊稱、耆闍崛。山の名。山形鷲に似たり。又は山上鷲鳥多きを以て名くといふ。王舍城の東北十里の地に在り。梵本には、Pāṇḍava と作す。
【一四】闚。三本窺に作る。
【一五】頻婆娑羅王(Bimbisāra)。佛在世の時の摩伽陀國王の名。深く佛法に歸し、善根を積むこと多かりしも、終に逆子阿闍世王の爲に幽囚せられ、幽中佛の光明に照らされて、阿那含果を證して死せり。

巻の第七

頻婆娑羅王勸受俗利品第十六[1]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『車匿、菩薩の敎を奉じて、大王及び摩訶波闍波提、耶輸陀羅、諸の釋種等を安慰して、憂惱を離れ令む。諸の衆生を饒益せんと欲するが爲の故に、鬚髮を剃除して、獵師の邊に向ひ、憍奢耶衣を以て袈裟清淨の法服に貿易す。是に於て[2]鞞留[3]梵志苦行女人の所に詣る。時に彼の女人、菩薩を奉請して、明日齋を設く。既に請を受け已りて、次に[4]波頭摩梵志苦行女人の所に往く。時に彼の女人、亦菩薩を請じて、明日齋を設く。既に請を受け已りて、復[5]利婆陀[6]梵行仙人の所に往く。時に彼の仙人、亦菩薩を請じて、明日齋を設く。既に請を受け已つて、復、光明調伏二仙人の所に往く。其の仙、亦菩薩を請じて、明日齋を設く。諸の比丘よ。菩薩は次第して[7]毘舍離城に至れり。城の傍に仙有り。[8]阿羅邏と名く。三百の弟子と倶なり。常に弟子の爲に[9]無所有處定を說く。時に彼の仙人遙かに菩薩を見て心に希有を生じ、諸の弟子に告ぐらく、『汝等應に是の勝上の人を觀るべし』と。諸弟子等、仙人に白して言はく、『我、是の人を見るに、形貌端正なり。昔より未だ有らざる所、何れより來れりと爲んや』と。比丘、我、爾の時に於て、阿羅邏に問うて言はく、『汝が證せし所の法聞くことを得可きか。今修行せんと欲す、願はくば我が爲に說け』と。仙言はく、『[10]瞿曇、我が證せし所の法は、甚深微妙なり。若し能く學ばん者には、常に爲に宣說して、修習することを得せ令むべし。若し清信の善男子有つて、我が敎を受くる者は、皆無所有處微妙の定を成就することを得ん』と。諸の比丘よ。我れ仙人の所說を聞きて、此の念を作して言はく、『我、今、自ら精進念定有りて、信慧を樂欲す。獨り一處に在つて、常に勤めて修習し、心に放逸無くんば、必ず彼の仙所得の法を證せん』と。是に於て、精勤修習して、心

【一】頻婆沙羅王勸受俗利品(Biṃbisāropasaṅkramaṇa-parivarta)。

【二】鞞留。Uruvilvā を略せるものか。梵本には Sākya とあり。

【三】梵志(Brahmacārin)。梵天の法を志求す者をいふ。又一切外道の出家するものを梵志といふ。

【四】波頭摩(Padmā)。

【五】利婆陀(Raivata)。

【六】梵行。梵は清淨の義。婬欲を斷ずる法を梵行となす。

【七】毘舍離城(Vaiśālī)。譯、廣嚴。中印度にあり。六大城中の一大城。

【八】阿羅邏(Ārāḍakalāpa)。佛出家の始め就きて學びたる仙人の名。

【九】無所有處定。無色四處の第三處なる無所有處(Ākiñcanyāyatana)に生ずる爲の禪定なり。

【一〇】瞿曇(Gautama)。新譯、喬答摩。釋種の姓なり。

十方を開化したまはんと。定んで知る、我が子必ず肯て還へらざらん」と。普く大臣を召して、之に告げて曰く、「卿等家に在りて、皆子息有り。共に相娛樂して、目前に慰有り。吾が憂を念はざらん。吾に一子有りて、奇相聖達なり。當に轉輪聖王と爲りて、四天下に主爲るべかりき。一旦にして離別し、深山窮谷、絕險無人の處に入りぬ。飢渴寒熱、誰をして悉くす所なら令めん。卿等の子弟、宜しく五人を擇び、追つて之に侍せしむべし。若し中道にして還らば、卿の五族を滅せん」と。大臣勅を奉じて、卽ち五人を簡び、山に入りて侍せんことを求む。是の時五人、追へども及ぶこと能はず。心に自ら念言すらく、「是逸人爲り。[四二]行くに路を擇びたまはず、何の道か之有らん。我若し歸還せば、必ず吾が族を滅せられん。住す可き處を選んで、隨意に住するには如かじ」と。是に於て、五[四三]跋陀羅、山林に遁る。」

【四二】行不擇路、何道之有—逸人とは常規を逸するの意なり。行くに路を擇ばずとは、如何なる開展を爲すか豫知し難しといふものなれども、よき開展を豫想せざるは、次に何の道か之あらんといへるにて明白なり。斯くて五士は、太子の將來に希望を有せず。さはれ歸らば族滅の災あり。進退維谷まりて、隨意修行に決意せるなり。

【四三】跋陀羅(Bhadra)。譯、賢。五人の賢人。

世間に染せられたまはず。慇懃に切諫せしも、都て迴りたまふ意無かりき。即ち我に語りて言はく、汝、我を諫むること莫かれ。我、今、一切の欲樂を須ひず。願はくば國位を捨てて、此の山林に樂しまんと。」

時に輸檀王、重ねて車匿の是の如く語るを聞き已り、涙を流して懊惱し、車匿に語つて言はく、「我、今、窮せり。復、氣勢無し。手足悉く折れ、猶、朽ちたる株の如し。亦、大樹の枝葉有ること無きが如し。敵境或は當に我を輕侮すべし。我、今、單已、能く爲す所無し。嗚呼我が子は、最勝の丈夫なり。何が故ぞ、家を棄てて我が願に違離せる。嗚呼我が子は、諸相滿足し、百福莊嚴し、一一の相中、皆悉く備具せり。諸の婇女の睡眠して覺めざるを伺ひて、忽然として出でぬ。嗚呼我が子は、善巧多智なり。昔、宮内に在るや、我は憂愁無かりき。今我を捨て去りて、復、依倚無し。嗚呼我が子は、上族中に生れて、恒に衆人の尊重する所爲りき。寶位、及以、四方一切の眷屬を棄捨し、單已にして去れり。譬へば白象の大木を摧折するが如し。我が子去る時、所有城門の開き難く閉ぢ難くして、開閉の時に、其の聲遠く徹せるを、云何ぞ此の夜、人皆聞かざりしぞ。必ず是れ天神の、聲響無から令めしならん。嗚呼我が子寶位を捐捨すること、涕唾を棄つるが如し。我、先に、汝が爲に、三時殿を造りて、寒暝を調適しき。云何ぞ一朝にして之を棄てて去れる。曠野に娛樂して、山林に遊處し、甘んじて禽獸と伴侶と爲る。今より已往、護城の諸神、皆悉く此の城を棄捨して去らん。嗚呼我が子、愛念の心我が骨髓に徹す。何が故に、我を棄てて山林に入りしぞ」と。

爾の時輸檀王、菩薩を憶念して晝夜を捨てず。還ら令めんと欲抑す。復思ふ、仙人昔日、記せる有り。若し家に在らば、當に轉輪聖王と爲つて、七寶自然に、四天下に主となりて、千子具足し、端正勇健にして、能く怨敵を伏したまふべし。若し出家せ令めば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得て、

生まるることを願はず。亦自ら人間の妙樂を求めず。願はくば我が主と與に、生生の處、恒に夫婦と作つて、還つて向の時の如く、勝れたる果報を受けん」と。此の語を作し已つて、悲哀啼哭す。又言はく、「車匿。我が主、今何處に在りや。我をして端無く遂に孤寡に同ぜ使む。今より已往、好衣を衣じ、美食を食はじ。香華瓔珞を、我身永く絕たん。復、家に居すと雖も、恒に常に山林の想を作さん」と。耶輸陀羅、無數千言を以て車匿を責む。車匿、前に進み諫めて言はく、「大妃、是の如き懊惱を生じたまふこと莫かれ。所以は何ん。太子出でたまひし時、諸天翊從せり。東方の天王及び乾闥婆主、南方の天王及び鳩槃茶主、西方の天王及び大龍主、北方の天王及び夜叉主、其の身悉く金剛の鎧甲を被、或は弓刀を執り、或は矛戟を持ち、或は復前に導き、或は復後に隨へり。梵王帝釋及び日月天、皆眷屬を將ゐて、欲界の天子は[四一]摩那婆の身を化作し、天人寶女の無數千億、皆大に歡喜し、天の妙華を將つて、太子の上に散ぜり。太子觀見したまひ、取らず捨てず、貪らず高ぶらず。猶、虛空の罣礙する所無きが如くなりき。我、今、一一具に說く可きこと難し」と。爾の時輸檀王、遙かに宮內に哀哭の聲を聞き、便ち自宮より、蒼忙として出づ。是の時車匿、菩薩の寶冠・珠瓔・繖蓋を齎し、彼の乾陟を牽き來りて、王の前に至り、一一具に陳べて、頭面に禮を作す。

時に輸檀王、旣に菩薩の莊嚴の具を見、兼ねて車匿所說の言詞を聞き、聲を失して大に喚び、是の如きの言を作さく、「嗚呼嗚呼、我の愛子、一旦にして我に背き、今何處に去れりや」と。自絕宛轉し、號咷して哭く。是の時、迦毘羅城の所有居人、悉く皆哀哭して、聲天地に震ふ。諸釋眷屬、各各悲戀し、自ら持すること能はず、相視て淚を流す。咸く來つて諫喩し、王を扶けて坐せ令む。王暫く穌ると雖も、少時にして還絕つ。良久しうして醒悟し、車匿を責めて言はく、「汝、我が子を將ゐて、何處に棄擲せるか」と。車匿惶怖し、白して言さく、「大王、太子は、五欲を棄捨して、

【四一】摩那婆（Mānavaka）。譯、儒童、年少。

爾の時耶輸陀羅、聲を發して哀哭し、車匿を責めて言はく、「車匿太子去りたまひし時、我、彼の夜に於て、睡眠惛重して、覺えず知らざりき。汝、太子を將ゐ、送りて何の處に在りや。今去ること近きか遠きか。汝獨り歸り來るも、車匿、汝に利益無し。是れ我が怨讐なり、我を損害す。汝惡業を作して、今已に備足せり。虚啼するを假らざれ。車匿。此の馬の常時や、嘶く聲數里に聞ゆ。爾の夜に當つて、何を以てか寂然として、今日悲鳴して、但だ哀感を增すや。汝と乾陟と、倶に不善を爲せり。我に主無く、城邑をして空虛なら令めしは、此の乾陟と及び汝車匿とに由る」と。是に於て車匿、悲哀啼哭し、耶輸陀羅に報じて言はく「妃よ、今は應に乾陟を瞋罵したまふべからず。亦復當に我に責め及びたまふべからず。我と乾陟と、初より過罪無し。所以は何ん。乾陟去る時、疑難無きに非ざりき。悲鳴して地を蹋り、前却して行かず。嘶く聲は、半由旬に徹し、蹄の聲は、一拘盧舍に聞えき。但、諸天の神力を以て、妃をして悟ら令めざりしのみ。我と乾陟と、何の愆過有らん。大王先に嚴勅有りて、一切の左右に、善く用心を加へて、太子を守護したまへるに、諸の城門の禁、兵衞の人、咸く睡眠に著して、覺了する所無かりき。太子初出でたまふや、日の天に昇るが如く、大光明を放ちて、普く世界を照せり。行路の際には、我最も前を引くを、初出でたまひし時、我は反つて贊助せり。諸城の門戸、自然にして開けり。乾陟是の時、足地を踐まず、剃髮を空に擲てる、衣服を貿易せる、種種の事業、皆是れ諸天神力の爲せし所なり」と。爾の時耶輸陀羅、苦惱逼切し、忽然として地に躃る、淚を流して言はく「苦なる哉、苦なる哉。何が故に太子、我を棄てて去りたまへるや。豈に〔四〇〕韋陀論に說けるを聞きたまはざる可きや。古昔王有り、深山に入る。其の妃后を携へて、同じく聖行を修せしと。何が故に、今日、獨り我を捨てて去りたまふや。車匿、太子若しは天に生れんが爲に、諸の苦行を修して、諸の天女を求めたまふか。然るに彼の天女は、何ぞ必ずしも求む可けん。乃し王位を捨て、及び我等を棄てたまへり。車匿、我は實に獨り自ら天に

【四〇】韋陀論（Veda）—ウパニシャッドの中に、王がその后と共に出家修道せるものあり。

時は、衣るに憍奢耶衣を以てせるを、今は云何ぞ麁弊の服を著るや。嗚呼太子、家に在りし時は、百品香潔の膳を調和せるを、今は云何ぞ能く無味麁澁の食を噉はんや。嗚呼太子、家に在りし時は、坐臥・茵褥、細軟に非るは無かりしを、今は云何ぞ荊棘を藉履して、能く之を受くるを忍ばんや。嗚呼太子、家に在りし時は、富貴の人も、心を盡して汝に事へ、猶ほ失有らんことを恐れしを、今日は云何ぞ貧賤の人だも、或は能く汝を欺かん。嗚呼太子、家に在りし時は、端正の婇女、恒常に娛樂して五欲を恣ならしめしを、今は云何ぞ自ら山林に放ちて、獨り行き獨り住まへる」と。摩訶波闍波提、種種の言詞をもつて、悲哭懊惱し、地より起ち、重ねて車匿に問ふ、「我が子去るの時に當つて、汝に向つて何を囑せしか。我が子の頭髮は、今誰の邊に在りや。復、誰か剃りしや」と。車匿啼哭して、自ら勝ふる能はず。夫人に報じて言はく、「太子、我に囑したまへり。汝、宮に至る時、我が母を再拜して、慇懃に勸請し、憂念を生ぜしむる莫れ。道へ、我は久しからずして、阿耨多羅三藐三菩提を得ば、還つて當に相見るべしと。即ち寶劍を執つて、自ら頭髮を剃り、虛空に擲置きたまひしに、諸天接して取り、將ち還りて供養せり」」と。摩訶波闍波提、重ねて復悲泣し、是の如きの言を作さく、「嗚呼太子は、頭髮甚だ長く、柔軟青紺にして、一毛孔に於て、一毛旋り生じ、王冠を冠りて、王位を受くるに堪へたりき。汝今何ぞ割截して棄て擲てるや。嗚呼太子は、兩臂傭長にして、踝現ぜず。行步の詳雅なること、師子王の如くなりき。目は青蓮の如く、身は眞金色に、言音隱隱として、鼓の如く雷の如くなりき。此の如きの人、何ぞ道を修するに堪へん。審かにするに其れ是の地當に聖王有るべし。此の盛德の人、應に其の主と爲るべし」と。即ち偈を說いて言はく、

「若し此の地福處に非ずと言はば、應に是の勝德の人を生ずべからず。既に希有功德の身を現じぬ。　自ら當に世の爲に聖王と作りたまふべし」と。

交ゝ流る。車匿、時に漸く城に到り已る。譬へば人有つて空宅に入るが如し。其の城の內外の[三八]苑園泉林は、菩薩去りしを以て、皆悉く枯竭す。城中の所有大小の居人、菩薩を覩ず、唯車匿のみを見る。並に其の後に隨ひて、之に問うて言はく、「悉達太子は、今何處に在すや。」車匿報じて言はく、「太子今は五欲を棄捨して、獨り山林に處りたまふ」と。衆人聞き已つて、未曾有なりと怪しみ、人人各各相視て、涙を流す。共に相謂つて言はく、「我等當に太子に隨つて、去つて彼の山林に住すべし。所以は何ん。聖太子を離れて、何の存活する所ぞ」と。城闕蕭條として、愛樂す可き無し。是の時車匿、彼の乾陟を牽き、幷に瓔珞及び無價の寶冠、諸の莊嚴の具を齎して、將に王宮に入らんとす。其の馬の嘶く聲、宮內に聞ゆ。是の時、摩訶波闍波提、耶輸陀羅、及び後宮の婇女、皆來り集聚して、共に相謂つて言はく、「乾陟の聲、今乃ち遠からず。將太子が廻つて宮に還るに非ざるか」と。是の時車匿、宮門に入り已れば、姨母及び妃幷に諸の婇女、渴望して見んと欲し、爭ひて宮門に趣く。唯車匿を覩て、菩薩を見ず。同時に啼哭して、車匿に問ふ、「太子、今、何處に在つて、汝獨り歸來せるや」と。車匿答へて言はく、「太子は五欲を棄捨して、道を求むるが爲の故に、彼の山林に在りて、壞色の衣を著け、鬚髮を剃除したまへり」と。摩訶波闍波提、是の語を聞き已つて、悲泣懊惱し自ら勝ふる能はず。聲を發して大に哭く。車匿を責めて言はく、「我今何をか汝に負きたれば、我が聖子を取つて、彼の山林に送れる。猛獸毒蟲甚だ怖畏す可し。而るに今獨り往く將何の依る所ぞ。」車匿言はく、「太子、我に、馬王及び諸の寶具を付して、我を逼促し、我をして速かに還ら令めたまへり。夫人の橫さまに愁惱を生じたまはんことを恐畏したまへばなり」と。是の時、宮中の諸の婇女等、染欲の因緣の故に、愛著を深くし、身心を苦惱して、悲涕哽咽す。

摩訶波闍波提、涙を銜みて言はく、「嗚呼太子、汝が身は、本、[三九]栴檀を以て塗拭し、威德光大なりき。今は云何ぞ山野に顚頓する。蚊虻膚を唼ふ、能く斯の苦に安んぜんや。嗚呼太子、家に在りし

【三八】苑園。三本苑囿に作る。

【三九】栴檀(Candana)。香木の名。譯、與樂。

より摩尼の劍を取り、即ち自ら剃髮す。既に剃髮し已つて、空中に擲ち置く。時に天帝釋、希有の事を見て、心大に歡喜し、即ち天衣を以て、空に於て承け取り、三十三天に還つて、禮事供養す。

爾の時菩薩、鬚髮を剃り已つて、自ら身上に猶寶衣を著くるを覩じ、即ち復念言すらく「出家の服は、當に是の如くなるべからず」と。時に淨居天、化して獵師と作り、身に[三四]袈裟を著け、手に弓箭を持ちて、菩薩の前に於て、默然として住す。菩薩、獵師に語つて言はく「汝が著る所は、乃ち是れ往古の諸佛の服なり。云何ぞ此を著けて、而も罪を爲すや。」獵者言はく「我、袈裟を著けて、以て群鹿を誘ふ。鹿此の服を見れば、便ち來つて我に近づく。我此に因るが故に、方に之を殺すことを得。」菩薩言はく「汝袈裟を著て、專ら殺害を爲す。我今若し得ば、唯解脫を求めん。汝能く我に此の袈裟を與へんや不や。汝若し我に與へなば、我當に汝に[三五]憍奢耶衣を與ふべし。汝何ぞ彼の麁弊の服を惜しむか。」獵師報じて言はく「善い哉、仁者。是の如きの弊衣、實に惜しむ所無し」と。即ち袈裟を取りて、菩薩に授與す。菩薩時に心に歡喜を生じ、即便ち彼に憍奢耶衣を與ふ。時に淨居天、神通力を以て、忽ち本形に復し、飛びて虛空に上る。一念の如き頃にして、還つて梵天に至る。菩薩見已つて、此の袈裟に於て、倍殷重を生ず。爾の後、衆人、此に在つて塔を起つ。時に菩薩、鬚髮を剃除し、身に袈裟を著け、儀容改變して是の如きの言を作さく「我今始めて眞の出家と名くるなり」と。是に於て車匿を發遣し、乾陟を將ゐて還らしむ。流涙目に盈ち、以て車匿に別る。車匿に別れ已つて、安詳として徐に歩み、彼の[三六]跋渠仙人の苦行林の中を經たり。」

佛、諸の比丘に告げたまはく「車匿、既に菩薩の志意の迴らざるを見、彼の乾陟を牽き、悲哀して返る。爾の後衆人、此に於て塔を起す。是に於て車匿、既に辭別し已つて、遙かに菩薩の頭に[三七]天冠無く、身に瓔珞無く、種種の寶服一切都べて無きを望み、手を擧げ胸を椎ちて、悲哀啼哭し、復、冀望無くして、哽咽して徘徊す。乾陟は悲鳴し、首を擧げて局顧し、瞻望躑躅して、涙下つて

【三四】 袈裟（Kaṣāya）。譯、不正、壞、染など。青黃赤白黑の五正色を避けて、他の雜色を用ふれば、色に從つて袈裟と云ふ。比丘の法衣なり。

【三五】 憍奢耶（Kauśeya）。絹衣の名。野蚕の繭より取りたる絲にて作りたる衣。

【三六】 跋渠（Vaga）。佛出家、求道の時最初に師事せし仙人。苦行婆羅門なり。

【三七】 天冠。殊妙の寶冠人中の所有にあらざれば天といふ。

諸の轉輪聖王有り、國を捨て道を求めて、山林に詣り、中途に還つて五欲を受くること無かりき。我が今の私心も、亦復是の如し。若し未だ無上菩提を獲得せずんば、終に還へらざらんなりと。內外の眷屬、皆當に我に於て恩愛の情有るべし。我が意を以て、善く爲に開解す可し」と。又復、身に著くる所の瓔珞を脫して、以て車匿に授く。「汝、此を持つて摩訶波闍波提に奉じて道ふ可し。我諸の苦の本を斷ぜんと欲するが爲に、今故に出家して、此の願を滿さんことを求む。憂念を生じたまふこと勿れと」。又諸の餘の嚴身の具を脫ぎ、耶輸陀羅に與へ語つて言へ、「人の世に生るる、愛には必ず別離あり。我今此の諸の苦を斷ぜんが爲の故に、出家して道を學ぶ。戀著を以て、橫さまに憂愁を生ずること勿れ」と。及び宮中の諸の婇女等に語り、幷に釋種の時年の童子に告げよ、「我今無明の網を破らんと欲す。故に方に智明を得、所爲の事畢らば、還つて當に相見るべしと。」是の時車匿、既に菩薩の苦切なる語を聞き、悲泣懊惱して、自ら地に投じ、是の如きの言を作さく、「我、既に力の能く太子を王宮に還ら令めたてまつる無し。若し我、此より獨り自ら歸りなば、王及び姨母、幷に諸の釋種、會ず當に瞋忿して、我を笞撻し、我を詰責して言ひたまふべし。汝、太子を將ゐ、棄てて何處に在るかと。我必ず辭無し、將何んが酬答せん」と。菩薩報じて言はく、「車匿、此の慮を爲すこと勿れ。所以は何ん。世間若し愛する所の人の言語を持して、委曲に彼に向つて陳說する有らば、克く眷念を蒙り、或は賞錫に當らん。但憂ふること莫れ。車匿、汝疾く宮に還つて、大王をして愁惱を生ぜ令むること無かれ」と。是に於て車匿、地より起き、聲を擧げて大いに哭く。乾陟は、前頭を低れ、前に雙脚を屈して、菩薩の足を舐め、淚下つて悲み鳴く。爾の時菩薩、手を以て乾陟の頂を摩して、之に語つて言はく、「乾陟、汝の所作已に畢れり。復、啼哭すること莫れ。當に大に汝に報ゆべし」と。

諸の比丘よ。菩薩是の思惟を作さく、「若し鬚髮を剃除せずんば、出家の法に非ず」と。乃ち車匿

言を作さく、「嗚呼、嗚呼、我の愛子、今何所にか去れる」と。是の語を作し已つて、悶絶して地に躃る。傍臣、卽ち冷水を以て面に灑ぐ。良久しうして醒悟し、卽ち所有防衛の臣を喚び、之に勅して曰く、「汝等諸將、已に自ら謹まず、我が子を失ふことを致す。汝、當に我が爲に、內外に分れ行きて、速かに疾く求め覔むべし。若し見ることを得ば、善言をもつて誘喩し、迎へ將ゐて宮に還れ」と。是の時群臣、王の勅を奉じ已つて、展轉して相告げ、命を銜みて行き、菩薩を訪ね覔むれども、諸天の神力をもつて、永く見ることを得ず。

爾の時菩薩、迦毘羅城を去りて、彌尼國[三]に至り、其夜已に曉けて、行く所の道路、六由旬に過ぐ。彼の諸の天・龍・夜叉・乾闥婆等、扈從して此に至り、所爲の事畢りて、忽然として現ぜず。菩薩、既に行きて、彼の往古に仙人の苦行せし林の中に至り、卽便ち馬より下りて、車匿を慰喩す。「善い哉、車匿。世間の人、或は心從つて形隨はざる有り。或は形隨つて心從はざる有り。汝は今、心形皆悉く我に隨へり。世間の人は、富貴の者を見れば、競ひ來つて奉事すれども、貧賤の者を覩れば、棄てて之を遠ざく。我、今、國を捨てて此に來至するに、唯汝一人、獨り能く我に隨へり。善い哉、車匿。甚だ希有と爲す。我、今、既に閑曠の處に至ることを得たり。汝便ち乾陟を將ゐて、俱に還る可し」と。卽ち自ら髻を解き、摩尼寶を取りて、以て車匿に付す。告げて言はく、「車匿、汝此の寶を持ちて、宮內に還り、大王に奉上して、是の如きの言を作せ。太子、今は、世間の法に於て、復、希求無し。天に生まれて、五欲の樂を受けんが爲にあらず。亦、不孝に非ず。亦、瞋恚嫌恨の心無し。又、亦、財位封祿を求めず。但、一切衆生の正路に迷ひ、生死に沒在するを見て、拔濟せんと欲するが爲の故に出家するのみ。唯願はくば大王、憂慮を生じたまふこと勿れ」と。大王、若し、我は今年少なり、未だ應に出家すべきにあらずと謂ひたまはば、汝、我が言を以て、方便して諮啓せよ。生老病死、豈に定まれる時有らんや。人少く盛なりと雖も、誰か能く獨り免れん。往古に

【三】彌尼國(Maineya)。

の中に於て、車匿に告げて言はく、「車匿、速かに疾く嚴りて乾陟を鞁けて將ゐ來り、菩薩の心をして憂惱を生ぜ令むること勿れ。所以は何ん。汝豈見ずや、無量百千の大菩薩衆・釋提桓因・及び四天王・諸天・龍神・乾闥婆等、各ゝ其の衆と與に、恭敬供養し、光明赫奕として、遍く虚空を照すを」と。車匿、此の語を聞き已つて、乾陟に告げて言はく、「乾陟、太子今は當に汝に乘りて出でたまふべし」と。卽ち最上の金勒寶鞍、諸の莊嚴の具を取つて、用つて馬王に鞁つけ、悲泣流涙して、持ち以て奉進し、菩薩を讃じて言はく、「伏して願はくば太子、悕求したまへる所有らば悉く皆成滿し、一切の障礙は咸く銷除することを得て、當に世間をして安隱の樂を獲せ令めたまふべし」と。菩薩、此に於て、馬王に乘り已り、初めて步を擧ぐる時、十方の大地、六種に震動す。虚に昇つて行くに、四天大王馬の足を捧げ承け、梵王帝釋は寶路を開き示す。爾の時菩薩、大光明を放ちて、一切無邊の世界を照燭す。度す可き所の者は皆度脫を得、苦有る衆生は皆苦を離るることを得たり。

爾の時菩薩、迦毘羅城を迴眄俯視して、是の如きの言を作さく、「若し我今より生死の邊際を盡すことを得ずんば、終に再び迦毘羅城を見ざらん。況んや復中に於て行住坐臥せんや」と。爾の後衆人、此に於て塔を起せり。

諸の比丘よ。是の時菩薩、既に宮を出で已つて、宮中の婇女皆悉く覺悟し、處處に求め覓めて、菩薩を見ず。耶輸陀羅は、聲を發して大に哭し、地に婉轉す。自ら頭髮を拔き、身の瓔珞を絕ち、悲哭して言はく、「一に何ぞ痛ましき哉。一に何ぞ苦しき哉。我、今に於ては何をか依怙する所ぞ。太子は、我を棄てて去りたまへり。復活くるを用ふることを爲ん」と。悲啼懊惱して、自ら勝ふる能はず。宮女總べて集まりて、號叫哀戀すること、魚の水を失ふが如く、樹の根を斷たるるが如し。悲哭の聲、宮外に聞ゆ。是の時、宮女、父王に奏す、「今夜睡寤めて太子を見ず」と。其の廐に當る臣、亦言さく、「今は彼の乾陟を失へり」と。王此を聞き已つて、聲を發して大に喚び、是の如きの

諸見の羅刹は、常に人を伺候せり。我是の中に於て、六度を繕修して、以て船筏と爲し、智を舟檝と爲し、信を堅牢と爲し、自ら旣に濟ひ已らば、復當に一切衆生を攝取して、彼岸に到ら令むべし」と。是の時車匿、菩薩に白して言さく、「太子今は心決定したまへるや」と。菩薩、車匿に報じて、偈を說いて言はく、

「車匿汝當に知るべし。我今已に決定せり。自利利他の故に、精進の心を起し、動ぜざること須彌の若く、終に能く退轉すること無し。假ひ金剛の雹、刀劍及び干戈、電火熱鐵團をして、墜ちて我が頂上に在ら使むとも、終に俗境に於て、戀著の心を生ぜじ」と。

爾の時、無量百千の諸天、虛空の中に於て、歡喜踊躍し、衆の天華を雨す。而して頌を說いて曰く、

「最勝淸淨にして虛空の如し。煙雲塵霧も染する能はず。一切の境界に所著無し。善利を具足して、菩提を成じたまはん」と。

是に於て靜慧天子及び莊嚴遊戲天子、迦毘羅城に於て一切の人民をして、皆悉く惛睡せ令む。爾の時菩薩、車匿に告げて言はく、「車匿、汝今我をして憂憒を生ぜ令むること莫れ。宜しく應に速かに疾く乾陟に鞁けて來るべし」と。是の時車匿、菩薩に白して言さく、「今始めて中夜なり、未だ是れ行きたまふ時にあらず。一切の宮城、悉く皆防衞せり。誰か應に此に於て諸の關鑰を開くべき」と。時に釋提桓因、神通力を以て、諸の門戶をして皆自然に開か令む。車匿旣に宮城の開けるを覩已つて、徬徨愁戀し、轉復悲啼して、是の如きの言を作さく、「我に伴侶無し。此の城の内外の所有四兵・釋種群臣・王及び王子・耶輸陀羅・後宮の婇女、一切惛睡して、知覺有ること無し。今何こにか去らんと欲したまひ、當に復誰にか語るべき。太子の心決定したまへること是の如きも、我今懇切に啓請して從ふこと莫からん。自らは惟力無し、豈能く遮り止めんや」と。是の諸天衆、虛空

はんことを恐畏すればなり。謂はざりき、太子猶ほ斯の事を憶したまはんとは」と。菩薩語つて言はく、「車匿、我昔彼の兜率より下生の時、在胎の時、乃至、出づる時、所有諸の事悉く皆忘れず。況んや復仙人我に[二九]記莂を授けたるに、忘るることを得んや。車匿、諸天復我に勸めて言はく、菩薩速かに疾く出家したまへ。定んで阿耨多羅三藐三菩提を得て、當に法輪を轉じたまふべしと。是の故に應に知るべし。必ず成佛することを得ん。車匿。我今寧ろ肢體を割截せられ、雜毒の食を食ひ、大火聚に入り、彼の高巖より投ずとも、家に在りて五欲の事を受くること能はず。是の如き世間の五欲の境界は、皆悉く無常にして、甚だ怖畏す可し」と。卽ち偈を說いて言はく、

「我、昔は五欲を受けぬ。今は實に苦の因を畏る。無始より[三〇]愛流を積みて、猶、海の滿し難きが如し。焰を逐ひて、轉渴を増せり。夢に處して、未だ覺知せざりき。坏器は堅牢ならず。盛饌に諸の毒を和せり。浮雲は必ず銷散し、泫露は久しく停ること無し。幻事彼の心を惑はし、水泡暫く起滅す。芭蕉は堅實ならず。虛拳小兒を誑かす。蛇首親しむ可からず。毒蔓終に觸ること難し。智者は當に遠離すること、猶、深坑を避くるが如くすべし」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、此の偈を說き已りて、又車匿に告ぐ、「我亦曾つて四天王天、乃至、六欲の諸天と作りき。亦曾つて彼の[三一]色究竟天[三二]非想非非想處に生れたりき。我憶ふに、往昔の無量生中、愚癡惑亂して、麁弊の欲の爲に、備に衆苦打罵繫縛を受け、身命を損害して、死して惡道に入りにき。今は此に於て、深く厭離を生ず。正しく諸天の勝妙の境界にすら、尙ほ貪染無から使む。何に況んや此の人間の五欲に就りて、戀著を生ぜんや。轉輪聖王は、自在を得と雖も、終に未だ生死の患を免れず。我世間の煩惱の曠野を觀ずるに、甚だ怖畏すべし。歸依有ること無く、恃怙する所無し。又常に生死の河中、憂悲の險溜、瞋忿の奔浪、嗜欲の驚洄、恚恨の旋洑に淪沒す。

【二九】記莂。將來の事を豫記するをいふ。

【三〇】愛流。貪愛の流。貪愛能く人心を沈溺せしむれば、暴流に譬ふ。

【三一】色究竟天。梵名阿迦尼吒天(Akaniṣṭha)。色界十八天の一、色界天の最頂なれば、色究竟と名く。依つて有頂天ともいふ。

【三二】非想非非想處(Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana)。無色界に四天ある中の第四天にして、三界の最頂なり。非想非非想とは、此天の禪定に就て名けしなり。此の天の定心は、至極靜明にして下地の如き麁想なければ、非想と云ひ、尙細想なきに非ざれば、非非想といふ。

有ること無く、諸の所作の事、必ず其の時を擇びたまへり。今は何の爲に乾陟を索めたまふか」と。虚空の諸天、神通力を以て、彼の一切をして都べて覺知せざら令む。爾の時菩薩、密かに偈頌を以て車匿に語つて言はく、

「車匿、汝當に知るべし。我、今、此の處を觀ずるに、一切怖畏す可きこと、猶、塚墓の間の如し。[二七]羅刹と共に居するが如し。亦、疸蟲の穴に似たり。又、受胎の水に類す。縱横に狼藉して眠る。我れ五欲の苦を見るに、心意至つて安からず。此の宮に處ることを願はず。園林に於て遊觀し、彼の老病の苦を覩、并に死屍を見ぬ。我定んで出家せんと欲す。

汝、速かに乾陟を取れ」と。

是の時車匿、菩薩に白して言さく、「太子、昔、嬰孩に在り。相師占ひ已つて、王に白して曰へり。王の太子は、相好具足したまへり、當に轉輪聖王と作りたまふべしと。我、又、曾つて聞きぬ、世間の智人、諸の苦行を修するに、或は爪を剪らず、或は倒懸する有り。或は衣るに樹皮を以てす。或は自ら頭髮を拔き、或は牛鹿等の禁を受け、或は[二八]五熱をもつて身を炙る。此の苦因を修して、樂報を願求すと。況んや復、太子、當に轉輪聖王と爲つて、四天下を統べ、七寶具足したまふべし。一切世間悉く謂へり。太子は必ず當に此の轉輪王の位を得たまふべしと。仙人の記する所、應に虚妄無かるべし。是の如きの寶位、云何ぞ之を棄てたまふや」と。爾の時菩薩、車匿に語つて言はく、「昔日、仙人は、但だ轉輪王と爲ると記せしのみならんや。亦、復當に佛道を成ずべしと記する有りき。二記の中に於て、何者をか定と爲さん。愼みて妄語すること勿れ」と。車匿言さく、「昔日、阿斯陀仙、合掌して言へり。大王當に知るべし。王の太子は、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまふべし。終に家に在りて輪王と作りたまはざらん。何を以ての故に。佛の相は明了なり、轉輪聖王の相は明了ならずと。但、諸の釋種隱して傳ふること勿し。太子の出家學道したま

【二七】羅刹(Rākṣasa)。具に羅刹娑と云ふ。惡鬼の總名なり。暴惡、可畏などと義譯す。

【二八】五熱。外道の苦行。五體を火に熱すること。

香・衣服・寶蓋・無數の幢幡及以瓔珞を持ち、迦毘羅城に至り、圍遶三匝して空に依つて住し、合掌低頭して、菩薩に向つて禮す。

日月天子、左右よりして至り、亦種種の供養の具を齎し、空に依つて住し、合掌低頭して、菩薩に向つて禮す。

爾の時菩薩、十方を觀見して、虛空及び諸の星宿を仰瞻し、井に護世・四大天王・乾闥婆・鳩槃茶・諸天・龍神井に夜叉等を覩、復、天主釋提桓因を見る。各〻百千の自部の眷屬を領し、前後導從して、虛空に遍滿す。弗沙の星、正に月と合す。時に諸天等、大聲を發して言はく、「菩薩勝法を求めんと欲したまふ。今正に是れ時なり。宜しく速かに出家したまふべし。必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、大法輪を轉じたまふべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩是の思惟を作さく、「今夜の靜かなるに於て、出家の時到れり」と。卽ち車匿に就いて、之に語つて言はく、「車匿、汝宜しく我が爲に[二五]乾陟に[二六]鞁けて來るべし」と。爾の時車匿、旣に此の言を聞き、竊に自ら思念すらく、「今始めて夜半なり、何ぞ乾陟を用ひたまはん」と。菩薩に白して言さく、「內外甚だ安らかなり。急難好惡の事有ること無し。不審なり、太子何ぞ乾陟を用ひたまふや」と。爾の時菩薩、車匿に告げて偈を說いて言はく、

「我が身已に、一切吉祥の事を具足せり。當に出家して去らんと欲す。汝今我に違すること莫れ」と。

是に於て車匿、復、菩薩の是の如き偈を聞き已りて、身を擧げて戰掉し、自ら持すること能はず。爾の時菩薩、重ねて車匿に語らく、「我、今、一切衆生の爲に、煩惱結使の賊を降伏せんと欲するが故に、彼の乾陟を須ふ。我が意に違すること莫く、速かに鞁けて將來せよ」と。車匿是の時、故らに大語を發して、宮內をして皆悉く聞知せ使めんを望み、菩薩に白して言さく、「太子、恒常に錯謬

【二五】乾陟(Kaṇṭhaka)。悉達太子王宮出走の時乘りし馬の名。

【二六】鞁—麗本に被に作り、元明二本に鞁に作る。鞍をつくるなり。今、元明二本に從ふ。

るに似たり。所以は何ん。我、菩薩が婇女を觀視したまひしを見るに、或は熙怡として微笑し、或は頻慘として樂しみたまはず、將に菩薩が戀著を生じたまへるに非ざるや。然れども彼の心は、猶ほ大海の如し。我等は凡淺にして測量する能はず」と。法行天の言はく、「菩薩は、無量劫に於て、一切の頭目髓腦國城妻子を捐捨し、發願して無上菩提を求めて、心、退轉したまはざりき。何に況んや今は是れ最後身なり。弊欲に於て戀著を生じたまはんや」と。

爾の時菩薩、卽ち座より起ち、七寶所成の羅網帷帳を褰げ、安詳として徐に出で、合掌して立ち十方一切の諸佛を正念す。是の念を作し已つて、卽ち天主釋提桓因・及び四大天王・日月天子が、各〻所統を率ゐるを見る。東方の[二一]提頭賴吒天王は、乾闥婆主を領して東より來り、無量百千の乾闥婆衆を將ゐ、諸の伎樂を奏して、鼓舞絃歌しつゝ、迦毘羅城に至り、圍遶三匝して、空に依つて住し、合掌低頭して、菩薩に向つて禮す。南方の[二二]毘婁勒叉天王は、鳩槃荼主を領して南より來り、無量百千の鳩槃荼衆を將ゐ、各〻寶瓶を執り香水を盛滿して、迦毘羅城に至り、圍遶三匝して、空に依つて住し、合掌低頭して、菩薩に向つて禮す。

西方の[二三]毘婁博叉天王は、諸の龍神主を領して西より來り、無量百千の諸大龍衆を將ゐ、各各手に諸種の珍寶・眞珠・瓔珞、種種の花香を持ち、復香雲花雲及び諸の寶雲を散じ、亦微妙輕靡の香風を動かして、迦毘羅城に至り、圍遶三匝して、空に依つて住し、合掌低頭して、菩薩に向つて禮す。

北方の[二四]毘沙門天王は、夜叉主を領して北より來り、無量百千の大夜叉衆を將ゐ、手に寶珠を捧ぐ。其の光照曜すること、世間の百千の燈炬に過ぎたり。身に鎧甲を著け、手に弓刀・矛戟・干戈輪稍・叉弩を執り、迦毘羅城に至り、圍遶三匝して、空に依つて住し、合掌低頭して、菩薩に向つて禮す。

爾の時、天主釋提桓因、三十三天より、其の眷屬の一切諸天百千萬衆と與に、天の花鬘・末香・塗

【二一】提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭra)。持國天の梵名、四天王の一。

【二二】毘婁勒叉(Virūḍhaka)。增長天の梵名。四天王の一。

【二三】毘婁博叉(Virūpākṣa)。廣目天の梵名。四天王の一。

【二四】毘沙門(Vaiśravaṇa)。又、多聞天ともいひ、四天王の一。

虚誑にして愛す可き有ること無し。猶ほ畫瓶に諸の穢毒を盛るが如し。此の處、越え難し、自ら出づること能はず。猶、老象の彼の深泥に溺るるが如し。此の處、劇しき苦あり。猶、屠肆の能く諸の命を斷つが如し。此の處、不淨なり。猶、群豕の溷厠の中に在るが如し。此の處、無味にして妄に味想を生ず。猶、餓[一七]狗の其の空骨を囓むが如し。此の處、自ら燒く。猶、飛蛾の明燭に赴くが如し。此の處、困竭なり。猶、水族を乾地に曝すが如し。此の處、窮迫なり。猶、乏鹿の火の害する所と爲るが如し。此の處、怖る可し。猶、死囚の都市に詣るが如し。此の處、沈沒す。猶、海を渉るに船舫破壞するが如し。此の處、危懼なり。猶、盲人の深谷に墜つるが如し。此の處、利無し。猶、[一八]蒲博して財物都べて盡くるが如し。此の處、潤無し。猶、大旱にして草木乾燋するが如し。此の處、能く傷く。猶、利刀之に塗るに蜜を以てするに、愚人無智にして舐めて味を求むるが如し。此の處、損耗す。猶、[一九]黑月の漸漸に將に盡きんとするが如し。此の處、諸の善法を滅して遺餘有ること無し。猶、[二〇]劫火の一切を焚燒するが如し」と。是の如きの說を作し、種種の譬喩をもつて、審諦に籌量す。次に已身に於て、頭より足に至り、循環觀察すること、亦復是の如し。卽ち偈を說いて言はく、

「我愛、業田を潤し、緣に從つて生死を受く。衆の不淨を積集し、和合して此の身を成ず。
脾腎肝肺心、腸胃生熟藏、皮肉將た骨髓、毛髮及び爪牙あり。運動は機關の如し。諸虫の窟穴なり。
糞穢常に盈滿し、膿血恒に流注す。生死憂惱に侵され、老病飢渇に逼らる。
智者は此の苦を觀じて、一切怨讐の如し。當に虛妄の身を棄つべし。云何ぞ取著を生ぜん」
と。

菩薩、是の如く自身を觀じ已つて、念を現前に繫け、寂然として久しく默す。虛空中に於て、諸の天衆有り。法行天子に告げて言はく、「菩薩將に出家せんと欲し、今は遲迴して疑悔を生じたまへ

【一七】拘―藏本猗に作り、三本狗に作る。
【一八】蒲博―樗蒲・博奕。
【一九】黑月。又黑分(Kṛṣṇa-pakṣa)と云ふ。大陰曆の下半月をいふ。
【二〇】劫火。壞劫の末に起りて世界を蕩盡する火災。三災の一。

爾の時、法行天子及び淨居天衆、神通力を以て、諸の綵女の形體姿容を、悉く皆變壞し、處る所の宮殿をして、猶ほ塚間の如くなら令む。是の現を作し已つて、虛空中に於て、菩薩に告げて言はく、

「面貌清淨にして蓮華の如く、功德智慧能く比する無きもの、女人を觀察して、當に遠離すべし。云何ぞ此に於て著心を生ぜん」と。

爾の時菩薩、偈を以て答へて曰く、

「我今此の婬欲の境を觀ずるに、一切變壞して臭屍の如し。願はくば永く諸の愛纏を出づることを得て、復、中に於て執著を生ぜざらん」と。

爾の時菩薩、宮內に於ける所有美女の形相變壞するを見る。或は衣服墜落して、形體を醜露する有り。或は頭髮蓬亂し、花冠毀裂する有り。或は容貌枯槁し、瓔珮散壞する有り。或は脣口喎斜する有り。或は眼目角[一五]睞する有り。或は呀喘して將に絕えんとす。或は涕唾交ゝ流る。或は欬嗽止まず。或は手を揮ひ足を擲ぐ。或は面色青白にして、怪狀人を恐れしむる有り。或は皮膚坼裂して、膿血穢汚す。或は悲啼する有り。或は大笑する有り。或は復齧齒し、或は復讇語す。或は壁に傍ひて倚り立ち、或は床に憑れて危坐す。或は鼓を枕にして臥し、或は箏を抱いて寢ぬ。或は睡りて簫管を含み、謳して以て聲を作す有り。或は諸の樂器を取つて、撩亂委擲す。或は[一六]瞢然として睡り、或は面を覆うて地に在り。或は口を張る有り。或は目を閉づる有り。或は便痢を失して、臭氣熢烋たり。或は頭を蓋ふ有り。或は首を露はす有り。顚倒狼藉して、縱横に臥す。先時の所有美容を、天の諸の神力をもつて、悉く皆變壞す。是の如き等の種種相を見已つて、靜念に思惟す、「女人の身形は、不淨にして弊惡なり。凡夫は、此に於て妄に貪愛を生ず。」大悲心を起して是の如きの言を發す、「咄なる哉世間。苦なる哉世間。甚だ怖畏す可し。凡夫は、無知にして解脫を求めず。此の處、

【一五】睞―よこめ。

【一六】瞢―くらし。

に、則ち天の諸の婇女有りて、鼓舞絃歌して翊從を爲さん」と。復、諸大龍王有り。【一〇】婆婁那王を上首と爲す。是の如き言を作さく、「我等當に栴檀の香雲及び沈水の香雲を吐き、栴檀の末及び沈水の末を雨し、妙香芬馥として虚空に遍滿せしむべし」と。

復、【一一】法行天子有り。是の如きの言を作さく、「我今當に宮中の、所有端正の女人をして、形貌變壞して附近す可からざら遣むべし」と。

復、【一二】開發天子有り。是の如きの言を作さく、「我當に中夜の時に於て、菩薩を覺悟すべし」と。釋提桓因、是の如きの言を作さく、「我も今亦當に彼の菩薩の爲に道路を開示すべし」と。是の如く天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦婁那・緊陀羅・摩睺羅伽等、其の所應を盡くして、菩薩を護助す。

爾の時菩薩、音樂殿中に於て、端坐思惟す。過去の諸佛、皆四種の微妙の大願を發したまひき。何等をか四と爲す。

一には、願はくば我未來に、自ら【一三】法性を證し、法に於て自在にして、法王と爲ることを得、精進智を以て、一切牢獄の愛縛苦惱を救拔し、衆生をして皆解脱せ令めん。

二には、諸の衆生有つて、此の生死黑暗の稠林に癡り、彼の愚癡無明の翳目を患へば、空無相無願を以て燈と爲し藥と爲して、諸の暗惑を破り、其の重障を除き、是の如きの方便智門を成就せん。

三には、諸の衆生有つて、憍慢の幢を竪て、我、我所を起し、心想見倒にして虚妄に執著せば、爲に法を説き其をして解悟せ令めん。

四には、諸の衆生を見るに、處として寂靜ならず。三世に流轉すること【一四】旋火輪の如く、亦蠒絲の如し。自ら纏ひ自ら遶る。彼の爲に法を説きて、其をして縛を解か令めんと。是の如き四種の廣大の誓願、正念に現前す。

【一〇】婆婁那(Varuṇa)。水神なり。梵文は大龍王を Erā-vaṇa と云ふ。而して大象王なし。

【一一】法行天子 (Dharmacā-rin)。

【一二】開發天子(Samcodaka)。

【一三】法性。又實相と名け、眞如、法界、涅槃等と名く。異名同體なり。性とは體の義、不改の義。眞如が萬法の體となり、染に在るも淨に在るも、有情數に在るも非情數に在るも、其性不改不變なれば、法性といふ。

【一四】旋火輪。火を旋轉して輪の形を爲すもの。輪形有に似て實ならず、以て一切事法の假相に譬ふ。

べし。四面の珠、瓔珞、亦大光明を發し、宮殿の中を照曜して、日の如く咸く覩見せん。

彼の天の伎樂を奏して、絃より微妙の音を出せ。花の髻、半月の垂、寶鬘師子の飾、臂璫及び環玔、種種に以て身を嚴れ。戸牖には重關を設け、堅牢にして管鑰を持て。出入に悉く親しく覩、進止悉く當に知るべし。汝等侍奉の人、宜しく應に兵器を執るべし。――闘輪將た羂索、矛戟及び戈鋋、――慢怠の心を生ずること莫く、階闥を周衛せよ。汝等太子を守ること、人の自らの眼を護るが如くにせよ。世間を棄つること、猶ほ象王の去るが如くなら使むること勿れ。寶位、繼嗣を絶たば、國土威光無からん」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「時に二十八[三]夜叉大將有り。[四]般遮迦王を上首と爲す。先に住して彼の[五]毘沙門宮に在り。共に相議して言はく、「菩薩、今、出家せんと欲したまふ。我、汝等と、何の供養をか作さん」と。時に四天王、夜叉衆に告げて言はく、「菩薩將に出家せんと欲したまふ。汝等應に當に馬の足を捧げ承くべし」と。

時に釋提桓因、三十三天衆に告げて言はく、「菩薩今夜將に出家せんと欲したまふ。汝等宜しく應に營護佐助すべし」と。時に彼の衆中に、一天子有り。名を[六]靜慧と曰ふ。是の如きの言を作さく、「我當に迦毘羅城の、所有一切の軍士婇女、菩薩を守る者に於て、悉く惛睡して覺知する所無から令むべし」と。

復、[七]莊嚴遊戲天子有り。是の如き言を作さく、「我今當に彼の城の內外の所有象馬及び諸の雜類をして、寂然として聲無から令むべし」と。復、[八]嚴慧天子有り。是の如きの言を作さく、「我當に彼より虛空の中に於て化して寶路を爲り、皆金・銀・瑠璃・硨磲・馬瑙・眞珠・玫瑰の衆寶を以て廁塡し、諸の名花を散じて其の上に彌布し、繒の幡蓋を懸けて道の側に羅列すべし」と。復、諸の大象王有り。[九]伊鉢羅王を上首と爲す。是の如きの言を作さく、「我れ鼻端に於て化して樓閣を爲らん。其の中

【三】夜叉大將（Mahāyakṣasenāpati）.
【四】般遮迦（Pañcika）。譯、玩五。夜叉主なり。
【五】毘沙門（Vaiśravaṇa）。又、多聞天といふ。四天王中の一。
【六】靜慧（Śāntamati）。
【七】莊嚴遊戲（Lalitavyūha）。
【八】嚴慧（Vyūhamati）。
【九】伊鉢羅（Erāvaṇa）。

を斷つべし。一には衰老せざらんことを願ふ。二には恒に少壯ならんことを願ふ。三には當に病無からんことを願ふ。四には恒に死せざらんことを願ふ」と。王是の語を聞き已つて、菩薩に告げて言はく、「此の事甚だ難しと爲す。我が力の能く辦ずるに非ず。諸仙は劫壽なりと雖も、終に壞滅に歸す。誰か生老死を離れて、獨り常住の身を求めんや」と。菩薩、王に答へて言はく、「四願若し得難くんば、今は但一願を求めん。更に後身を受けざらん」と。王、菩薩の言を聞き、愛心稍〻微薄なり。而して是の如きの說を作す。「我も今亦隨喜す。諸の衆生を利益して、汝の願を滿足せ令めん」と。是の如き語を發すと雖も、心には猶ほ熱惱を懷けり」と。

爾の時菩薩、是の語を聞き已り、歡喜して退く。復往來すと雖も、人知る者無し。既に明旦に至り、王、親族及び諸の釋種を召して、是の如きの言を作さく、「太子、昨、中夜に於て、來りて出家を請へり。我若し之を許さば國に繼嗣無からん。汝等今は何らかの方便を作して、其をして心を息め令めよ」と。時に諸の釋種、大王に白して言さく、「我等當に共に太子を守護すべし。太子何の力あつてか、能く強ひて出家したまはんや」と。是の時父王、諸の親族に勅して、迦毘羅城の東門の外に於て、五百の釋種の童子を置く。英威勇健にして、勝を制すること前無し。一一の童子に、五百兩の鬪戰の車有り。以て嚴衞を爲す。一一の車の側に、五百の力士戟を前に執る。南西北門にも、各〻五百有り。上の所說の如し。其の城の上に於て、刀杖を持てる人を周匝して分布す。復、宿舊の諸釋、大臣有り。四衢に列坐し、咸悉く營備す。王自ら五百の壯士を簡練し、甲を擐き矛を持ちて、皆象馬に乘ぜしむ。城の四面に於て、晝夜巡警して、暫くも休息すること無し。是の時、國の大夫人摩訶波闍波提、王宮の內に於て、諸の婇女を集め、偈を說いて言はく、

「汝等今夜に於て、睡眠に著せ令むること無かれ。當に妙高幢を建て、燭すに摩尼寶を以てす

卷の第六

出家品第十五[1]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、「菩薩、靜夜の中に於て、是の思惟を作さく、「我若し父王に啓さずして、私に自ら出家せば、二種の過有らん。一には法教に違し、二には俗理に順ぜず」と。既に思惟し已つて、其の所住より父王の宮に詣り、大光明を放つ。一切の臺殿・樓閣・園林・嚴飾を倍增し、光明照曜す。王、光に遇ひ已つて、尋いで便ち覺悟し、侍者に謂つて曰く、「此を何の光と爲す。夜分未だ盡きず。豈日光ならんや」と。侍者答へて曰く、「日光に非ざるなり」と。重ねて偈頌を以て王に白さく、

「臺亭及び樓閣、牆壁と園林と、衆影悉く生ぜず。故に日の出す光に非ず。鴛鴦及び翡翠、孔雀と迦陵伽[2]と、群鳥未だ翔けり鳴かず。故に日の出す光に非ず。此の光甚だ希有なり。昔より未だ曾つて見ざる所なり。能く心をして喜悅せ令め、熱を除きて清涼を得しむ。應に是れ勝德の人の、光を垂れて此を照すなるべし」と。時に王、臥より起き、詳かに十方を觀じて、乃ち菩薩の身を見るに、威德上有ること無し。深心に極めて尊重し、將に恭敬を申べんと欲す。菩薩神力を以て、固く王を起さ令めず。長跪して合掌し、前みて父王に白して言はく、「大王愁惱すること莫れ。我が與に障を爲したまふこと勿れ。今は願はくは出家せん。唯哀許せらるゝことを垂れたまへ」と。王時に此の言を聞き、何の計を設けんを思惟し、涕泣して菩薩に向ひ、而して是の如き言を作さく、「大位及び國財、一切悉く能く捨てん。出家の事を除去しては、餘は皆惜しむ所無し」と。菩薩妙音を以て、重ねて父王に白して言はく、竊に四種の願有り、未だ本心に稱はず。大王若し賜はらば、當に出家の望

【一】出家品（Abhiniṣkramaṇa-parivarta）。

【二】迦陵伽。迦陵頻伽（Kalaviṅka）のこと。鳥の名。譯、好聲、和雅。

見る。二には、夢に草有り、名を建立と曰ふ。臍より出でて、其の杪、上阿迦膩吒天に至るを見る。三には、夢に四鳥四方より來り、毛羽斑駮なるが、菩薩の足を受けて、化して白色と爲れるを見る。四には、夢に白獸の、頭は皆黑色なるが、咸く來つて膝を屈し、太子の身を舐むるを見る。五には、夢に一糞山有りて、狀勢高大なり、菩薩の身其の上に在りて、周匝遊踐すれども、汚す所と爲らざるを見る。」

す。菩薩問ひて言はく、「何の恐懼する所ぞ。」耶輸陀羅啼哭して言はく、「太子、我れ向に夢に一切の大地、周遍震動せるを見る。復、一鮮白の大蓋常に庇蔭するものを、[二]車匿輒ち來りて、我より奪ひて將ち去れるを見る。復、帝釋の幢有り、崩壞して地に在るを見る。復、身上の瓔珞、水の漂す所と爲れるを見る。復、日月星宿、悉く皆隕墜するを見る。復、我が髮、寶刀を執る者の爲に割截して去られしを見る。復、自身の微妙端正なるが、忽ち醜陋と成れるを見る。復、自身の手足皆折れたるを見る。復、形容、故無くして赤露なるを見る。復、坐する所の床、地に陷入せるを見る。復、恒時太子と共に坐臥せし床の、四足倶に折れたるを見る、復、一寶山の四面高峻なるが、火の燒く所と爲りて、崩摧して地に在るを見る。復、大王の宮内に一寶樹有り、風に吹かれて臥すを見る。復、白日隱蔽して天地黑暗なるを見る。復、明月空に在りて衆星環拱せるが、此の宮中に於て、忽然として沒するを見る。復、大明燭有りて、迦毘羅より出づるを見る。復、此の城を護る神の、端正にして喜ぶべきが、住して門下に立ち、悲號大哭するを見る。復、此の城變じて曠野と爲るを見る。復、城中の林木泉池、悉く皆枯渇するを見る。復、壯士手に器仗を執りて、四方に馳走するを見る。太子、我が夢や是の如し、心甚だ安からず。將我身殀喪有らんと欲するに非ずや。將恩愛の我と別離せんとするに非ずや。此は是れ何の徵ぞ、凶なりとや爲ん、吉なりとや爲ん」と。

爾の時菩薩、是の語を聞き已つて、心に自ら思惟すらく、「出家の時到りて、是の徵祥を表はし、乃し此の妃をして斯の如き夢を見せ令めぬ」と。耶輸陀羅を慰喩して言はく、「妃、今應に此の恐懼を懷くべからず。所以は何ん。夢想は顚倒にして實法有ること無し。設令夢に帝幢崩れ倒れ、日月隕落するを見るも、妃の身に於て何の傷損する所ぞ。車匿蓋を持ち去るも、既に夢に奪ふと曰ふ、皆虛妄と爲す。但自ら安らかに寢ね、假にも憂愁せされ」と。其の夜菩薩、自ら[三]五夢を得たり。一には、夢に身、大地を席とし、頭、須彌を枕として、手には大海を攬げ、足には渤澥を踐むを

【二】車匿(Chaṇḍaka)。譯、樂欲。佛出城の時の馭者なり。

【三】五夢―これが解釋、僧伽羅刹所集經上にあり。曰く、「此世界を床とし、須彌山を枕とし、手脚四海の外に垂るゝは、世界有常の想と、甘露法味の瑞應なり。提隷迦樹の齊上に生じて、三千世界を覆ふは、道場の瑞應なり。衆多の飛鳥の周匝圍繞して、皆同一色なるは、衆成就の瑞應を現はす。蟲の頭黑身白なるは、優婆塞衆成就の瑞應を現はす。山の頂上を行くは、得利不慳の瑞應を現はすなり。」この說明によつて見る時は、第一夢は、生死の大海中にあつて、彼岸の涅槃に昇るの瑞應なり。第二夢は、道場に坐して、降魔成道し、人天の眼目となるの瑞應なり。第三夢は、四沙門果の僧伽あらしむる瑞なり。第四夢は、信男信士の僧伽あらしむる瑞なり。第五夢は、生死中にありて、その染する所とならず、以て一切を化するの瑞なり。

大王、當に知るべし。夢みたまひし所の太子、駟馬車に乘りて城の西門より出でたまふとは、此は是れ太子、既に出家し已りて、阿耨多羅三藐三菩提、及び〔九〕四無畏を得たまふの像なり。

大王、當に知るべし。夢みたまし所の寶輪、城の北門より出づるとは、此は是れ太子、既に出家し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を證し法輪を轉じたまふの像なり。

大王、當に知るべし。夢みたまひし所の太子、四衢道の中に在りて桴を揚げ鼓を撃ちたまふとは、此は是れ太子、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ已つて、諸天傳聞し、乃し梵世に至るの像なり。

大王、當に知るべし。夢みたまひし所の高樓、太子、上に於て寶物を棄擲したまふに、無數の衆生競ひて持ち去るとは、此は是れ太子、阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ已つて、諸の天人八部の中に於て、當に法寶の所謂、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道の種種の諸法を雨したまふべきの像なり。

大王、當に知るべし。夢みたまひし所の、城を去ること遠からずして、忽ち六人有り、聲を擧げて號哭すとは、此は是れ太子、既に出家し已つて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべければ、〔一〇〕外道の六師、心に憂惱を生ずるの像なり」と。

爾の時化人、輸檀王の爲に彼の夢を解き已つて白して言さく、「大王、宜しく應に欣慶して愁惱を生じたまふこと勿かるべし。所以は何ん。此の夢は吉祥なり、大果報を獲たまはん」と。是の語を作し已つて、忽然として現ぜず。

時に輸檀王、婆羅門が夢の因縁を解きしを聞き、太子の出家して道を學ばんことを恐畏す。是に於て更に五欲の具を增す。

是の時耶輸陀羅、亦二十種の畏る可きの事を夢みて、忽然として覺悟し、中心驚悸惶怖して自失

【九】四無畏。註は序品第一の下無畏の條に在り。

【一〇】外道六師。佛と世を同じくし、自ら稱して一切智と稱せしものに、六師あり。一に富蘭那迦葉(Pūraṇa Kāśyapa)。一切の法は斷滅性空にして、君臣父子忠孝の道なしと立つるもの。二に末迦梨拘賒梨子(Maskarī Gośālīputra)。衆生の苦樂は因緣に由らず、自ら然るのみと計するもの。三に刪闍夜毗羅胝子(Sañjaya Vairaṭīputra)。道を求めざるも、生死の劫數を經る間、自ら苦際を盡すこと、縷丸を高山に轉ずるに、縷盡くれば自ら止むが如しと計するもの。四に阿耆多翅舍欽婆羅(Ajitakeśakambala)。身に弊衣を著け、五熱身を炙り、苦行を以て道となすもの。五に迦羅鳩馱迦旃延(Kakuda Kātyāyana)。諸法は亦相あり亦相なしと計し、物に應じて見を起すもの。六に尼犍陀若提子(Nirgrantha Jñātiputra)。苦樂罪福悉く宿世に出る。必ず當に償ふべし。今道を行ふも、能く斷ずる所にあらずと計するもの。

所を知らず」と。時に輸檀王、此の語を聞き已つて、心に自ら念言すらく、「阿斯陀仙の言は虚謬無し」と。是に於て更に微妙の五欲を增して、之を娛樂せしむ。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に淨居天、菩薩をして速かに疾く出家せ令めんと欲して、重ねて父王の與に、七種の夢を作す。一には、夢に帝釋の幢有り、衆多の人舁きて迦毘羅城の東門より出づるを見る。二には、夢に太子が大香象に乘りて、徒馭に侍衞せられ、迦毘羅城の南門より出づるを見る。三には夢に太子が駟馬車に乘りて、迦毘羅城の西門より出づるを見る。四には、夢に一寶輪有りて、迦毘羅城の北門より出づるを見る。五には、夢に太子四衢道の中に在りて、桴を揚げて鼓を擊つを見る。六には夢に迦毘羅城中に一高樓有り、太子上に於て四面に種種の珍寶を棄擲し、無數の衆生競ひて持ち去るを見る。七には、夢に城を離るること遠からずして、忽ち六人有り、聲を擧げて號哭するを見る。時に輸檀王、是の夢を作し已つて、心に大に恐懼し、忽然として覺む。諸の大臣に命じて、之に告げて曰く、「我夜中に於て、是の如き夢を作せり。汝宜しく我が爲に、占夢の人を喚びて、斯の事を解か令むべし」と。

時に淨居天、化して一婆羅門と作り、鹿の皮衣を著、立ちて宮門の外に在り。是の如き言を唱ふ、「我能く善く大王の夢を解かん」と。諸臣聞き、奏して召して宮中に入る。時に輸檀王、具に夢る所を陳べて、婆羅門に語る、「此の如きの夢は、是れ何の祥ぞや」と。婆羅門言はく、「大王當に知るべし。夢みたまひし所の帝幢を、衆人舁きて城の東門より出づるとは、此は是れ太子、當に無量百千の諸天の爲に圍遶せられて、出家したまふべきの像なり。

大王、當に知るべし。夢みたまひし所の太子、大香象に乘りて徒馭に侍衞せられ、城の南門より出でたまふとは、此は是れ太子、旣に出家し已りて、阿耨多羅三藐三菩提、及以、十力を得たまふの像なり。

【八】香象(Gandhahasti)。青き色に香氣を帶る象。

菩薩、復馭者を召して、之に告げて言はく、「今日園林に往きて、遊觀せんと欲す。汝駕を嚴る可し。我當に暫く出づべし」と。馭者又父王に奏す。王是を聞き已つて、馭者に謂つて曰く、「太子前には三門を出で、老病死を見て、愁憂して樂しまざりき。今は宜しく北門より出で令むべし。道路を嚴飾し、香花幡蓋は、前よりも勝れ使めよ。更に老病死等、非吉祥の事有つて、路の側に在るを得ること勿れ」と。所司勅を受けて、嚴好すること、前に過ぎたり。爾の時太子、諸の官屬と、前後導從して、城の北門を出づ。時に淨居天、化して比丘と作り、壞色[四]の衣を著、鬚髮を剃除し、手に錫杖[五]を執りて、地を視て行く。形貌端嚴にして、威儀庠序たり。太子遙かに見て問ふ、「是れ何人なりや」と。

時に淨居天、神通力を以て、彼の馭者をして報ぜ令めて言はく、「是の如きを、名けて出家人と爲すなり」と。太子即便ち車より下り、禮を作し、因つて之に問ふ、「夫れ出家は、何の利益する所ぞ。」比丘答へて言はく、「我、在家の生老病死を見るに、一切無常なり。皆是れ敗壞不安の法なり。故に親族を捨てて、空閑に處し、勤求方便して、斯の苦を免るることを得んとす。我が修習する所は、無漏[六]の聖道なり。正法を行じて、諸根を調伏し、大慈悲を起して、能く無畏を施す。心行平等にして、衆生を護念し、世間に染せずして、永く解脱を得。是の故に名けて出家の法と爲す」と。是に於て菩薩、深く欣喜を生じ、讃じて言はく、「善い哉、善い哉。天人の中唯是を上と爲す。我當に決定して此の道を修學すべし」と。既に是を見已つて、車に登つて還る。時に輸檀王、馭者に問うて言はく、「太子出遊して、寧ろ樂有りしや不や。」答へて言はく、「大王當に知るべし。太子向に出でて中路に至りたまひしに、皆悉く嚴好にして諸の不祥無かりき。忽にして一人有り。壞色の衣を著、鬚髮を剃除し、應器[七]を執持し、錫を杖して行く。容止端嚴にして、威儀詳審なり。太子、即便ち車より下つて禮を作し、言語既に畢つて、駕を嚴つて歸りたまへり。竟に亦何の論說したまひし

【四】壞色。梵語、袈裟(Kaṣāya)。青黃赤白黑の五正色を避けて、他の不正色を以て染壞すれば、壞色といふ。以て法衣を作る。

【五】錫杖。梵語、喫棄羅(Khakkhara)。錫とは振る時、錫の聲を作すに取る。乞食又は驅蟲の爲なり。

【六】無漏(Anāsrava)。漏は煩惱の異名なり。煩惱を離れたる法を、無漏といふ。

【七】應器。鐵鉢のこと。比丘の食器。梵語、鉢多羅(Pātra)。譯、應器。又、應量器。法に應ずる食器の義。人の供養を受くべき者の用ふる食器の義。腹の分量に應じて食ふ食器の義。

前よりも勝れて、老病死等不祥の事、道の側に在ら使むること勿かるべし」と。所司勅を受けて、嚴飾すること前に倍す。爾の時菩薩、諸の官屬と、前後導從して、城の西門を出づ。時に淨居天、化して死人と作り、輿の上に臥して、香花布散す。室家號哭して、隨つて之を送る。菩薩見已つて、心に慘惻を懷き、馭者に問うて曰く、「此は是れ何人なれば、香花を以て其の上を莊嚴し、復衆多の眷屬有つて、之を哀泣するか」と。

時に淨居天、神通力を以て、彼の馭者をして、菩薩に報ぜ令めて言はく、「此れ死人なり。」又問ふ、「何をか謂つて死と爲すか。」答へて曰く、「夫れ死と言ふは、神識、身を去つて、命根已に謝す。長く父母・兄弟・妻子眷屬の恩愛と別離し、永く重ねて覩ること無し。命終の後、精神獨り行きて、異趣に歸す。恩愛好惡、復相知るに非ず。此の如く、死は誠に悲しむ可きなり。」又問ふ、「唯此の人のみ死するや、一切當に然るべきや。」菩薩に報じて言はく、「凡そ是れ生有るものは、必ず死に歸す」と。菩薩聞き已つて、轉自ら安んぜず。而して是の言を作さく、「世間には乃ち此の如き死の苦有り。云何ぞ中に於て、放逸を行ぜん。我今何の暇あつてか、園林に詣らんや。當に思ひて方便し、此の苦を離れんことを求むべし」と。即便ち駕を廻して、還つて宮中に入る。

時に輸檀王、馭者に問うて言はく、「今日太子園苑に出遊して、歡樂せりや以不や。」馭者答へて言はく、「大王當に知るべし。太子城を出でたまひしに、忽ち路の側に於て、一の死人有り。床の上に臥し、四人輿を擧げ、眷屬悲號せり。太子見已つて、慘然として樂しみたまはず、遂に中路に於て、即便ち宮に還りたまへり」と。時に輸檀王、是の思惟を作さく、「此れは是れ我が子出家の相なり。阿斯陀仙に虛謬無し」と。是に於て、更に五欲を增して、之を娛樂せしむ。

諸の比丘よ。復一時に於て、淨居の諸天、既に太子の宮內に還つて、五欲に處在するを見て、是の思惟を作さく、「我れ今應に菩薩の爲に、更に事相を現じて、速かに出家せ令むべし」と。爾の時

路の側に在り。又馭者に問ふ、「此は何の人と爲すか。」菩薩に報じて言はく、「此れ病人なり。」又問ふ、「何をか謂つて病と爲す。」答へて曰く、「所謂病とは、皆飲食節せず、嗜欲度無きに由り、四大乖張して、百一の病生ず。坐臥安からずして、動止危殆なり。氣息綿惙して命須臾に在り。是の因縁を以ての故に、名けて病と爲す。」又問ふ、「此の人獨り爾るや、一切當に然るべきや」。馭者答へて言はく、「一切世間、皆悉く是の如し。」又言はく、「我が此の身の如きも、亦當に爾るべきや。」馭者答へて言はく、「凡そ是れ生有るものは、若は貴も若は賤も、皆此の苦有り」と。爾の時菩薩、愁憂して樂しまず。馭者に謂つて曰く、「我れ今何の暇あつてか、園林に詣つて縱逸に遊戲せんや。當に方便して、斯の苦を免離せんことを思ふべし」と。卽便ち駕を迴して、還つて宮中に入る。

時に輸檀王、馭者に問うて言はく、「今日太子、城を出でて遊觀し、歡樂せりや以不や。」馭者答へて言はく、「大王當に知るべし。太子城を出でて、行きて中路に至りたまひしに、忽にして道の側に於て、一の病人を見る。氣力綿惙して、大苦惱を受く。太子見已つて、卽便ち宮に還りたまへり」と。時に輸檀王、是の思惟を作さく、「此は是れ我が子出家の相なり。阿斯陀仙の言虛しからざるなり」と。是に於て、更に五欲を增して、之を娛樂せしむ。諸の比丘よ。復、一時に於て淨居の諸天、既に太子の還つて五欲を受くるを見て、是の思惟を作さく、「我れ今應に更に、菩薩の爲に、事相を示現して、覺悟を得せ令め、速かに出家せ令むべし」と。

爾の時菩薩、復、馭者を召して、之に告げて言はく、「我れ今園林に往きて、遊觀せんと欲す。汝駕を嚴る可し、我當に暫く出づべし」と。馭者又大王に奏す。王是を聞き已つて、馭者に謂つて曰く、「太子前に東南二門を出で、老病を見已つて、還來し憂愁せり。今は宜しく西門より出で令むべし。我は心に其の還つて喜悅せざるを慮る。宜しく內外に遣はして道路を莊嚴し、香花幡蓋は倍よ

【三】 四大。地水火風の四なり。一に地大、堅を性とし、物を支持す。二に水大、濕を性とし、物を收攝す。三に火大、煖を性とし、物を調熟す。四に風大、動を性とし、物を生長す。此の四、以て一切の色法を造作すれば、能造の四大と云ふ。四大乖張とは、身體の構造に不調和の起るをいふ。

や、一切皆然るや。」馭者答へて言はく、「一切世間皆悉く是の如し。」菩薩又問ふ、「我が此の身の如きも、亦當に爾るべきや。」馭者答へて言はく、「凡そ是れ生有るものは、若は貴も、若は賤も、皆此の苦有り」と。爾の時菩薩、愁憂して樂しまず。馭者に謂つて曰く、「我れ今何の暇あつてか、園林に詣つて縱逸に遊戲せんや。當に方便して斯の苦を免離せんことを思ふべし」と。即便ち駕を迴して、還つて宮中に入る。

時に輸檀王、馭者に問うて言はく、「今日太子園林に、遊戲して歡樂せりや以不や。」馭者答へて言はく、「大王當に知るべし。太子城を出でて、行きて中路に至りたまひしに、忽ち道上に於て一老人有り。氣力衰微に、身體困極す。太子見已つて、即便ち宮に還へりたまへり」と。時に輸檀王、是の思惟を作さく、「此は是れ我が子出家するの相なり。阿斯陀仙の言へる所實に殆し」と。是に於て更に五欲を増して、之を娛樂せしむ。

諸の比丘よ、復一時に於て、淨居の諸天、既に菩薩の還つて五欲に處するを見て、是の思惟を作さく、「我れ今應に當に菩薩の爲に、事相を示現して、覺悟を得使め、速かに出家せ令むべし」と。爾の時菩薩、復馭者を召して、之に告げて言はく、「我れ今園林に往きて、遊觀せんと欲す。汝速かに我が爲に大王に啓奏して、車從を嚴辦せよ。我當に暫く出づべし」と。王是を聞き已つて、諸臣を召集して、之に告げて曰く、「太子前には城の東門を出でて、道に老人に逢ひ、中路にして反り、愁憂して樂しまざりき。今復出でんことを求めて、園林に詣らんと欲す。宜しく應に城より園に至るまで、悉く清淨なら令むべし。繒と幡蓋を懸け、香を燒き花を散じて、糞穢不淨及び諸の不吉祥をして、衢路に在ら使むること勿れ」と。所司、勅を受けて嚴麗なること前に過ぎたり。爾の時菩薩、諸の官屬と、前後導從して、城の南門を出づ。時に淨居天、化して病人と作り、困篤萎黃し、上氣喘息す。骨肉枯竭し、形貌虛羸にして、糞穢の中に處し、大苦惱を受く。二人瞻侍して、

時に輸檀王、菩薩の爲の故に、三時殿を造る。一は溫煖以て隆冬に御し、二は淸涼以て炎暑に當り、三は中に適ひて寒からず熱からず。更に重門を造りて、開閉し難から使む。開閉の時には、五百人を須ひ、開閉の聲は四十里に聞ゆ。所有善く天文を知り、極めて相法を閑ひ、及び五通ある[三]仙を皆悉く窮問して、其の先記を遣はさしむ。是の如き等の人皆云ふ、「太子は、吉祥の門より、城を踰えて出でたまはん」と。王、是を聞き已つて、轉、憂惱を增す。

諸の比丘よ、後、一時に於て、菩薩卽便ち出でて遊觀せんと欲し、乃ち馭者に命ずらく、「汝駕を嚴る可し。我當に暫く出づべし」と。馭者王に奏す。「今日太子出でて遊觀せんと欲したまふ」と。王是を聞き已りて、卽時に使を遣はして園林を掃飾せしむ。復、所司に勅して、道路を平除し、香水を地に灑ぎ、衆の名花を散じ、寶樹の間に於て繒幡蓋を懸け、眞珠瓔珞をもつて次第に莊嚴す。金銀寶鈴は處處に垂れ下り、和風搖動して微妙の音を出す。城より園に至るまで、周匝して瑩飾し、精麗淸淨なること、猶ほ天宮の若し。復、路邊に、諸の惡む可きもの無から使め、衰老・疾病・及以死屍・聾盲・瘖瘂・六根不具、吉祥に非る事は、並に駈逐せ令む。

爾の時菩薩、諸の官屬の與に、前後に導從せられて、城の東門を出づ。時に淨居天、化して老人と作り、髮白く體羸れ、膚の色枯槁なり。杖に扶けられ、傴僂喘息して、頭を低る。皮骨相連り、筋肉銷耗す。牙齒は缺落して、涕唾交ゝ流る。或は住し或は行き、乍ち伏し乍ち偃る。菩薩見已つて、馭者に問うて言はく、「此を何人と曰ひ、形狀是の如きぞ」と。

時に淨居天、神通力を以て、彼の馭者をして菩薩に報ぜ令めて言はく、「此れは老人なり。」又問ふ、「何をか謂つて老と爲すや。」答へて曰く、「凡そ老と言ふは、曾つて少年を經て、漸く衰朽に至り、諸根萎熟し、氣力綿微なり。飮食銷せず、形體枯竭す。復、威勢無く、人の輕んずる所と爲る。動止苦劇しく、餘命幾も無し。是の因緣を以ての故に、名けて老と爲す。」又問ふ、「此の人獨り爾る

【三】五通仙。五神通を得たる仙人をいふ。天竺の外道にて、有漏の禪定を修して、五通を得るもの多し。三乘の證果を極めしものは、五通の上に漏神通を得て、六通を具ふ。六通につきては、序品第一の下に註せり。

宮中の諸の婇女を成就せんと欲するが爲の故に、即ち是の時に於て、大神通を作し、諸の婇女をして樂音を解悟せ令む。出す所の言詞は、百千の法門なり。所謂、廣大心・愍衆生心・求菩提心・發起深心なり。而して佛法に於て淨信を生じて、憍慢を遠離し、正法を尊重し、善と不善とを知つて、諸佛の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・六神通・四攝法・四無量・四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七菩提分・八聖道分を憶念し、奢摩他・毘鉢舍那・無常・苦・空・無我・不淨・無貪・寂滅・無生盡智・乃至、涅槃を一一に分別せしむ。菩薩、神通をもつて、音樂の中に是の如き聲を出さ令む。諸の婇女等、是の聲を聞き已つて、希有の心を生じ、歡喜踊躍して、未曾有なることを得たり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、王宮に處する時、能く八萬四千の諸の婇女等をして、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さ令めたり。復、無量百千の諸天有り。是の如きの法を聞き、阿耨多羅三藐三菩提に於て不退轉を得、微妙の偈を說いて菩薩を勸請す。「速かに疾く出家したまへ」と』。

感夢品第十四

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『諸天、菩薩を勸發し已るや、菩薩、是の時、夢に輸檀王に現ず。王、夢の中に於て、乃ち菩薩が鬚髮を剃除し、行きて宮門を出で、無量の諸天に圍遶せられて去ると見る。時に王、夢より寤め已つて、內人に問うて言はく、「太子、今、宮に在りと爲んや、遊觀に出でたりと爲んや。」內人答へて言はく、「太子は宮に在り、遊觀する所無し」と。王、心に尙菩薩已に去れるを疑ひ、悵然として憂惱すること、箭の心に入りたるが如し。是の思惟を作さく、「我が夢みる所の如き、事相既に爾り。定んで知る、太子は必ず當に出家すべし」と。復、是の念を作さく、「今より以往、更に復太子に遊觀を許すこと勿く、諸の婇女をして、誘ふに五欲を以てせしめ、其に愛著を生ぜ令めん」と。

り。

【四七】無生盡智―盡智、無生智なり。盡智とは、無學果に至りて起る無漏智なり。無生智とは、その後に起る無漏智なり。「我既に苦を知り、我已に集を斷ぜり」と知るは盡智なり。「我已に苦を知る、更に復知るべからず、我已に集を斷ず、更に復斷ずべからず」と知るは、無生智なり。

【一】感夢品(Svapta-pari-varta)。

を設けて福德を增長し、慳貪を遠離して、施して報を望まず。長夜の中に於て、勇猛精進して、善く能く貪瞋・憍慢・慳嫉・煩惱を降伏し、未だ曾つて暫くも一切智心を忘れず。大施の甲を著け、精進の鎧を被、大悲心を以て衆生を度脫す。智力堅强にして、恒に退失無く、等心に、衆生を、其の意樂に隨つて皆滿足せ令む。時と非時とを知り、法と非法とを悟つて、菩提に迴向す。惠施の中に於て、[三九]三事清淨なり。金剛智を以て、[四〇]四魔を除斷し、戒行成就して、善く能く身語意業を守護す。乃至、小罪にも大なる懼を懷く。心常に清淨にして、諸の垢濁・惡言・毀呰・輕弄・誹謗・打辱・繫縛に於て、曾つて濁亂無し。忍辱を具足して、心性調柔なり。所作の事業、常に能く堅固にして、一切の善に於て、心に退轉無し。念智具足して、恒に正定を修し、智慧の明を獲て、能く諸の暗を破す。心に常に苦・空・無常・不淨の法を觀見し、已に能く[四一]四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七菩提分・八聖道分を修習す。又常に[四二]奢摩他・[四三]毘鉢舍那に安住す。深く緣起に入りて、眞實を覺悟し、恒に自ら了知して、他に因つて解らず。[四四]三脫門に遊びて、諸法は幻の如く、夢の如く、影の如く、水中の月の如く、鏡中の像の如く、熱したる時の焰の如く、呼べる聲の響の如しと了知す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩は多劫より來、[四五]四威儀に於て恒に住す。是の如き智慧あり。是の如き功德あり。是の如き精進あり。是の如く十方を利益す。諸佛、復、宮中の婇女の樂器をして、微妙の聲を出さしめて、菩薩を勸發したまふ。又諸の宮中の婇女を化して、即時に[四六]四種の法門を證得せしめんと欲す。何等をか四と爲す。一には方便・布施・愛語・利行・同事もて、之を攝取するなり。二には三寶の種を紹ぎて、能く一切智の性を絕やさず壞せず、願力を退せざら使むるなり。三には智力堅固、大慈大悲あつて、衆生を捨てさるなり。四には殊勝の智慧資粮の力有りて、一切の菩提分法を分別するなり。大嚴法門、現前することを得るが故なり。此の四種を以て、

【三九】三事清淨—三輪清淨ともいふ。施者と、受者と、施物との三者に於て、意なきをいふ。

【四〇】四魔—煩惱魔・陰魔・死魔・他化自在天子魔をいふ。一に煩惱魔。貪等の煩惱、能く身心を惱害すれば、魔と名く。二に陰魔。新譯に蘊魔といふ。色等の五陰、能く種種の苦惱を生ずれば、魔と名く。三に死魔。死能く人の命根を斷てば、魔と名く。四に他化自在天子魔。新譯に自在天魔と云ふ。欲界の第六天、即ち他化自在天の魔王、能く人の善事を害すれば、魔と名く。

【四一】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、八聖道を合はせて、三十七道品と稱す。涅槃に到る道路の資糧なり。一一の註は、兜率天宮品第二の下を見るべし。

【四二】奢摩他(Samatha)。譯、止、寂靜。心を攝して緣に住し、散亂をはなるゝなり。

【四三】毘鉢舍那(Vipasyana)。譯、觀。事理を觀見するなり。

【四四】三脫門。空、無相、無願の三を云ふ。

【四五】四威儀。行住坐臥の四、各儀則ありて、威德を損せざるをいふ。

【四六】四種の法門(Catur dharmamukha)—四攝事な

無し。尊、往昔に於て、然燈佛に値ひたまひ、已に最勝、眞實の妙法を證したまへり。願はくば、尊、今に於て、衆生の爲の故に、甘露の法を雨らして、充足することを得せ使めたまへ」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩是の偈を聞き已りて、専ら菩提に趣き、正念にして惰らず。何を以ての故に。菩薩は、長夜の時に於て、正法及び說法師を尊重し、恭敬し供養せり。深く淨信を生じて、正法を求め、好んで正法を樂ひ、正法に住せり。聽聞する所に隨つて、心に厭足無く、衆生を開悟し、法施の主に於て深く尊重を生ぜり。他の爲に演說して、希望する所無く、亦法に因つて財寶を求めず。衆の爲に說法して、未だ曾つて慳悋ならず。勇猛精進、一心に勤求し、法を依止と爲し、法藏を守護し、忍辱に住し、[三七]波若を修行し、方便に通達せり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩は多劫より來、世間の五欲の過を遠離し、衆生を成就せんが爲に、貪欲の境界に處するを示現して、一切の善根殊勝なる福德資糧の力を積集増長し、廣大微妙なる五欲の境界を受用するを示現して、而も其の中に於て、心の自在なるを得たり。菩薩是の時、往昔發す所の誓願を憶念し、是の昔の願に由つて、佛法を思惟するに、皆悉く現前す。而して大悲を起して、世間の富貴熾盛なるも、會ず磨滅に歸することを觀察す。又、生死は諸煩惱の險惡怖畏多きことを觀じ、速かに除斷して大涅槃に入らんと欲す。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩は久しく已に生死の過患を了知し、取らず著せず、如來眞實の功德を樂求す。[三八]阿蘭若寂靜の處に依つて、其の心常に自他を利樂せんことを樂ひ、無上道に於て、勇猛精進す。一切衆生をして安樂を得せ令めんが故なり。利益を得んが故なり。寂靜を得んが故なり。涅槃を得んが故なり。常に大慈大悲を起し、能く四攝を以て、諸の衆生を攝して、厭倦有ること無し。諸の衆生を觀ずるに、猶、一子の如く、諸の境界に於て、心に所著無し。大施會

【三七】波若。波字三本般に作る。

【三八】阿蘭若(Araṇya)。譯、無諍聲、閑寂遠離處、人里を五百弓離れたる處。比丘の住處。

音と爲す。是の諸の有爲は、皆當に壞滅すべし。空中の電の如し。暫くも停息すること無し。亦坏器の如く、假借せる物の如し。腐りたる草牆の如く、亦砂岸の如し。因緣に依止して、堅實有ること無し。風中の燈の如く、水の聚沫の如し。水上の泡の如し。猶、芭蕉の、中に堅實無きが如し。幻の如く、化の如く、猶、空拳の如し。展轉して相因る。

愚人は了せずして、妄に計著を生ず。譬へば人功と、及以[三五]麻枲と、木輪と、和合して、以て其の繩を成ずるが如し。是の和合を離れては、卽ち繩を成さず。十二因緣は、一一分析すれば、過去未來に、體性有ること無し。求めて得可からざること、亦復是の如し。譬へば種子の、能く[三六]牙を生じ、牙と種子と、卽せず離せざるが如し。無明より、能く諸行を生じ、無明と行と、亦復是の如く、卽せず離せず。體性空寂なり。因緣中に於て、求むれども得可からず。譬へば印泥の如し。泥中に印無く、印中に泥無きも、要ず印に因つて、文像觀る可し。根と境とに依止して、眼識の生ずる有り。三事和合するを、說いて能見と爲す。境は識に在らず、識は境に在らず。根境識の中に、本、見有ること無し。分別妄計して、境界の相生ず。智者觀察するに、曾つて相狀無し。幻夢等の如し。譬へば鑽火は、木と鑽と人の功と、三種和合して、火有つて生ずることを得るが如し。三法の中に於て、本、火有ること無し。和合して暫く有り。名けて衆生と曰ふ。第一義中には、都べて不可得なり。譬へば咽喉、及以脣舌の、擊動して聲を出すが如し。一一の分の中に、聲は不可得なり。衆緣和合して、此の聲有るのみ。智者聲を觀ずるに、念念相續して、實法有ること無し。猶、谷の響の如く、聲は不可得なり。譬へば箜篌と、絃器と及び手と、和合して聲を發するが如し。本、去來無し。諸緣中に於て、聲を求むるも得ず。緣を離れて聲を求むるも、亦不可得なり。內外の諸蘊、皆悉く空寂なり。我無く人無く、壽命者

【三五】麻枲―枲、あさ。

【三六】牙。三本芽に作る。

戈戟の刃の如く、糞穢の瓶の如し。捨離すること能はざるは、猶ほ餓狗の、其の枯骨まで囓むが如し。五欲は實ならず、妄見より生ず。水中の月の如く、谷中の響の如く、焔の如く幻の如く、水上の泡の如し。分別より生じ、實法有ること無し。年、盛時に在れば、愚癡愛著して、爲に常に有りと謂ひて、厭捨すること能はず。考病死至つて、其の少壯を壞すれば、一切之を惡む。財寶有る者は、遠離することを知らず。〔三〇〕五の家散失すれば、便ち苦惱を生ず。猶、樹木の如し。花果茂り盛なれば、衆人之を愛し、枝葉彫零せば、棄てて顧みず。老弱貧病も、亦復是の如し。亦鵂鶹の如し。世間之を惡む。霹靂の火の、大樹を焚燒するが如し。亦朽屋の久しからずして崩壞するが如し。法有り、能く生老病死を離る。願はくは尊出家して、諸の衆生の爲に、斯の如きの法を說きたまへ。生老病死は、衆生を纏縛す。〔三一〕摩婁迦の、尼拘樹を遶るが如し。能く勢力を奪つて、諸根を損壞す。猶ほ嚴霜の、諸の叢林を〔三二〕彫むるが如し。盛年の妙色も、因つて變壞す。譬へば山火の、四面より倶に至れば、野獸中に在りて、周慞し苦惱するが如し。生死に處する者も、亦復是の如し。願はくは速かに出家して、而して之を救脫したまへ。尊、病苦を觀ずるに衆生を損惱すること、猶、花林の、霜の爲に彫めらるるが如し。尊、死苦を觀ぜよ、恩愛永く絕ちて、眷屬分離すれば、復重ねて覩ること無し。猶、逝ける川の如く、亦花の落つるが如し。能く有力を害して、自在ならざら令む。獨り行きて伴無く、業に隨つて去る。一切の壽命は、死の呑む所と爲る。〔三三〕金翅鳥の、能く諸の龍を食ふが如し。亦象王の、師子の爲に食はるるが如し。〔三四〕摩竭魚の能く一切を呑むが如し。亦猛火の、叢林を焚燒するが如し。願はくば尊、昔、弘誓の願を發せるを憶ひたまへ。今正に是の時なり。宜しく速かに出家したまふべし。綵女は伎樂をもつて、菩薩を惑はさんと欲し、諸佛は神力をもつて、變じて法

〔三〇〕五家—五蘊を喩えたるものならん。

〔三一〕摩婁迦(Māruka)。草の名。藤の類なり。蔓生にして樹に纏繞し、死に至らしむ。

〔三二〕彫—凋と通用す。

〔三三〕金翅鳥。梵語、迦樓羅(Garuḍa)。須彌山の下層に住し、常に龍を取つて食となす。

〔三四〕摩竭(Makara)。譯、鯨魚。魚の王なり。

て、施すに衆の妙香を以てしたまひき。　又(39)大光佛に値ひて、身を捨てて供養したまひき。又(40)尚花佛に見えて、寶莊嚴の具を獻じたまひき。　又(41)法幢佛に値ひて、散ずるに衆の妙華を以てしたまひき。又(42)作光佛に見えて優鉢羅花を奉じ、心を盡くして供養したまひき。是の如き及び餘の無量の佛に、一一皆諸の供具を以て、供養承事して空しく過ぎたまふこと無かりき。　願はくば尊、過去佛を憶ひたまへ。　及び諸の如來を供養したまへると、衆生の苦惱して依怙無きことを憶念したまへ。　請ふ尊憶念して速かに出家したまへ。　尊、憶ふに昔

(二九)然燈佛に値ひて、清淨無生忍を獲得したまひ、及び五神通に退失無かりき。　此より卽ち能く諸刹に往き、一念に遍く諸の如來に事へたまひき。　有爲の諸法は悉く無常なり。　五欲の王位は皆不定なり。　苦の爲に逼まらるる諸の衆生を、願はくは速かに出家して之を救濟したまへ。　婇女の絃歌淸音を奏して、欲を以て將に菩薩を惑はさんとす。　十方の諸佛は、威神力をもつて、出だす所の衆聲、法言を演べたまふ。

三界の煩惱は、猶ほ猛火の如し。　迷惑して離れざれば、恒に燒く所と爲る。　猶ほ浮雲の如し。　須臾にして滅す。　合し已れば還り散ずること、衆戲場の如し。　念念に住せざること、空中の電の如し。　遷滅の迅速なること、水の瀑流の如し。　愛と無明に由りて、五道に輪轉し、循環して已まざること、　陶家の輪の如し。　五欲に染著するは、網せられたる禽の如し。　欲は怨賊の如く、甚だ怖畏す可し。　五欲に處する者は、猶ほ刃を履むが如し。

五欲に著する者は、毒樹を抱くが如し。　智者は欲を棄つること、猶ほ糞坑の如し。　五欲は昏冥して、能く念を失せ令む。　常に怖る可しと爲す。　諸苦の因は、能く生死の枝條をして增長せ令め、彼に由つて、生死の河中に漂溺す。　聖人は之を捨つること、涕唾を棄つるが如し。　狂犬を見て、疾走して避くるが如し。　蜜を塗りたる刀の如く、毒蛇の首の如し。

【二九】　然燈佛(Dīpaṅkara)。

(4)梅檀佛に遇ひて、草炬を以て供養し、又佛城に入りたまひし時、金末を以て地に散じたまひき。(5)法自在佛に逢ひ、法を說くを善い哉と讃じ、(6)普光如來に值つて、一たび南無佛と稱したまひき。(7)大聚光佛に見えて、供養するに金花を以てし、(8)光幢如來に值ひて、奉獻するに掬豆を以てしたまひき。 (9)又智幢佛と、(10)無憂花如來に見え、粥を持ちて以て供養し彼に於て弘願を發したまひき。又 (11)寶髮佛に值ひて、供養するに明燈を以てし、(12)花光如來に見えて、供養するに良藥を以てしたまひき。 (13)又無畏佛に值ひ、施すに寶瓔珞を以てし、(14)婆伽羅佛には波頭摩寶を施したまひき。 (15)娑羅王佛に見えて、供養するに純乳を以てし、(16)名稱如來に施して、奉ずるに師子座を以てしたまひき。(17)又眞實佛、及び、(18)高智如來に見え、曾つて頂禮圍遶したまひき。 又(19)龍施佛に見えて、供養するに衣服を以てし、(20)增上行佛に見えて、施すに梅檀香を以てしたまひき。 又(21)致沙佛に見えて、供養するに妙鉢を以てしたまひき。 又(22)大嚴佛に見えて、優鉢羅花を施したまひき。又(23)光王佛に值ひて、妙寶を以て供養したまひき。又(24)釋迦佛に見えて、施すに金蓮華を以てしたまひき。又(25)宿王佛に值ひて、如來の德を讃歎したまひき。 又(26)日面佛に見えて、施すに[二七]莊耳花を以てしたひき。又(27)妙意佛に值ひて、散ずるに[二八]眞頭を以てしたまひき。 又(28)降龍佛に見えて、施すに摩尼寶を以てしたまひき。 又(29)增益佛に值ひて、衆の寶蓋を奉上したまひき。 又(30)藥師佛に見えて、奉ずるに勝妙の座を以てしたまひき。 (31)師子幢佛に值ひて、奉ずるに衆の寶網を以てしたまひき。 又(32)持德佛に見えて、音樂を以て供養したまひき。 又(33)迦葉佛に值ひて、奉ずるに衆の末香を以てしたまひき。 又(34)放光佛に見えて、妙花を以て供養したまひき。 又(35)阿鞞佛に值ひて、奉ずるに妙勝臺を以てしたまひき。 又(36)世供佛に見えて、奉ずるに妙花鬘を以てしたまひき。 又(37)多伽佛に值ひ、曾つて天王の位を捨てたまひき。 又(38)難降佛に見え

dana 5. Dharmeśvara 6. Samantadarśi 7. Mahārciskandhi 8. Dharma dhvaja 或は Arciketu に當らん。9. Jñānaketu 10. Aśokapuṣpa 11. Ratnaśikhin 12. Padmayoni に配すべきか。13. Sarvābhibhū 14. 梵本には Sāgara に作る 15. Sālendrarāja 16. Yaśodatta 17. Satyadarśi 18. Jñānameru 19. Nāgadatta 20. Atyuccagāmi 21. Tikṣṇaloha 22. Mahāvyūha 23. Raśmirāja 24. Śakyamuni 25. 梵本は Indraketu に作る。26. Sūryānana 27. Sumati 28. Nāgābhibhū 29. Puṣya 30. Bhaiśajyarāju 31. Siṃhaketu 32. Guṇāgradhāri 33. Kāśyapa 34. Arciketu に當らん。意味は、寧、光幢なり。35. 梵本の Akṣobhyarāja に當るべし。36. Lokapūjita 37. Tagaraśikhi 38. Durjaya 39. Mahāpradīpa 40. Padmottara 41. Dharmaketu 42. Dīpakāri.

【二七】 莊耳花(Vataṃsa kohi)。

【二八】 眞頭(Tinduka?)。

き。　尊、憶ふに多劫に諸忍を修し、忍を修するに因るが故に、衆苦を受けたまひき。[二四] 尊、憶ふに昔日熊身と爲り、人の凍餓せるを見て、溫養したまふ。　彼、歸路に畋獵の者に逢ひ、將來して共に居るに、心に恨みたまはざりき。　尊は精進堅固の力を以て、菩提の爲の故に諸行を修したまへり。　當に魔王及び軍衆を伏したまふべし。　今正に是れ時なり、宜しく出家したまふべし。　尊、憶ふに昔[二五]駿逸の馬と爲りたまひ、空に騰つて諸の世間を利益し、夜叉の國に於て衆生を濟ひ、之を無畏の處に安置したまひき。」　是の如く精進すること無邊劫にして、神通智力もつて煩惱を除きたまひ、心極めて調柔にして寂定に坐し、此を以て諸の衆生を利益したまへり。　尊、昔に於て國王と爲り、普く衆生をして、十善を行ぜしめたまふ。　是の諸の衆生、善を行ぜしが故に、命終つて皆梵世に生ずることを得たりき。　尊は智能く善不善を知り、及び衆生の諸の根性を了し、智慧能く諸の理趣に入りたまへり。今正に是れ時なり、速かに出家したまへ。　尊は、衆生が邪見、生老病死の苦海の中に墮せるを愍れみ、生死險惡の道を淨除して、涅槃眞實の路を示現したまへりと。　是の如く一切十方の佛、菩薩の諸の功德を讚歎し、皆婇女の弦歌の曲を變じて、菩薩を勸請す、速かに出家したまへ。」尊、昔王と爲りて、(1)勝福、(2)尸利、(3)尼彌、(4)訖瑟吒、及び(5)鷄薩梨、(6)千耶若、(7)法思、光明、堅强弓、戒月、光明、進德光、智恩、能捨、大威德、王仙、月形及び、猛寶と名け、菩提を增長して妙法を求めたまひき。　善住、月光、殊勝行、地塵、勇施、諸方主、惠施、寶髮、淸淨身、是及び餘の無量の王と作り、皆悉く捨て難きを捨て、諸如來の爲めに法雨を雨らしき。　尊、昔、恒沙の佛に値遇したまひ、悉く皆承事して空しく過ぎず、菩提を求めんが爲に衆生を度したまひき。　今正に是れ時なり、速かに出家したまへ。」初、[二六](1)不空見に事へ、(2)堅固花佛に値ひ、一念淸淨を以て、(3)毘盧舍那に見えたまひき。又、

【二四】尊―麗本に請に作り、三本に尊に作る。

【二五】駿馬―大唐西域記第十一、僧伽羅國の下に、この因緣を揭ぐ。

1. Adinnapuṇya 2. Viśruta-śriya 3. Nimindhara 4. Kṛṣṇa 5. Keśari 6. Sahasrayajña 7. Dharmacinti

【二六】不空見。以下諸佛の梵名。
1. Amoghadarśi 2. Śālapuṣpa 3. Virocana 4. Candra-

たまひし時は、父母と山に居りて同じく苦行し、王、毒箭を以て誤つて中てしに、慈を抱いて恨無く、歡喜して死にたまひき。[一二]尊、憶ふに昔金色の鹿と爲りたまひ、人の河を渡つて漂はさるるを見、因つて慈心を起して以て之を救ひしに、後反つて害を加へられしも、瞋恨したまふこと無かりき。[一三]尊、憶ふに昔仙人と爲りたまひ、寶珠誤つて大海に墮ちしかば、精進心を起して彼の海を抒みたまひしに、龍王驚怖して寶珠を還したてまつりき。[一四]尊昔に於て大仙と爲りたまひ、慈心をもつて彼の歸命の鴿を護り、人有り尊に從つて是の鴿を索めしに、自ら身の肉を割きて之を稱り、鴿の輕重と乃ち齊等にして、畢に命終に至るまで擁護を爲したまひき。[一五]又尊、昔、奢摩仙と爲りたまひ、人來つて樹に幾葉有るかを問ひしに、善く多少を知つて酬答したまふ。其の人信ぜざりしかば、天來つて證したりき。尊、昔曾つて鸚鵡鳥と爲りたまひしに、釋化し人と爲つて來り詰問す。「依る所の樹既に枯れ折れたり。何爲れぞ之を守つて離れざるや」と。答へて云く「此に依つて成長せり」と。帝釋便ち希有の心を生じ、即ち枯れたる樹をして重ねて榮茂せ令めたりき。尊は、是れ功德を受持したまへる者、世間の諸の衆生を安處して、佛の無邊功德海に置きたまへりと。是の如く十方の佛、威神をもつて、菩薩の諸の功德を讃歎し、諸の婇女の絃歌の曲を變じて、菩薩を勸請す、速かに出家したまへ。[一六]尊憶ふに、往昔無邊劫に、金銀等の衆の珍寶・頭目・王位、及び妻子を以て、來り求むる者を見ば、歡喜して施したまひき。昔[一七]首鞞幢牙王[一八]月燈[一九]珠髻及び[二〇]大悲・[二一]堅猛[二二]妙目の諸王等と爲りたまひ、皆威力有つて、能く施を行じたまひき。尊は、多劫に於て能く戒を持ちたまひ、其の戒清淨なること明珠の如し。堅持守護したまひて、纖過も無きこと、亦犛牛の自ら尾を愛するが如し。[二三]尊憶ふに曾つて大象王と爲りたまひ、獵師箭を以て其の身に中てしに、而も慈心を起して報ゆる所なく、彼の六牙を捐てて、而も戒を守りたまひ

【一二】金色鹿。九色鹿經は、この因緣を說く。

【一三】抒海。法苑珠林の中に、大志經にあるものとして、この本生を揭ぐ。

【一四】護鴿。尸毘王の因緣なり。

【一五】奢摩仙。前揭の奢摩仙と異る所出不明。

【一六】布施太子の因緣なり。

【一七】首鞞幢牙王。恐らくは二名にして、首鞞は Śivi、幢牙は梵本の Śaśiketu に配當すべきか。

【一八】月燈王 (Candrapradīpa)。

【一九】珠髻(Maṇicūḍa)。

【二〇】大悲(Karuṇākarṇamanāmen)。

【二一】堅猛(Sudurgra)。

【二二】妙目(Sunetra ならん。此王名、梵本になし)。

【二三】大象王。六度集經第四、戒度無極章中に、象王本生あり。

ば、救濟して之をして苦惱を離れ令めんと。　昔の諸佛の所行の如くに行じて、獨り空山林野の間に處し、如來の一切智を證得して、諸の貧乏を見ては、財寶を施したまへり。　尊、昔、已に大施を行じ、一切の財寶、皆能く捨てたまへり。　諸の衆生の爲に法雨を雨すは、今正に是れ時なり、宜しく出家したまふべし。　尊は、淨戒に於て缺減無く、昔より多劫常に修習したまへり。　衆生の諸の煩惱を解脱するは、今正に是れ時なり、宜しく出家したまふべし。　尊は百千諸の忍辱を修して、世間の惡言、皆忍受したまへり。　常に忍辱を以て調伏するは、今正に是れ時なり、速かに出家したまへ。　尊は、精進を行ずること極めて堅強に、長時に修習して、魔衆を摧きたまへり。　一切の三惡趣を滅除するは、今正に是れ時なり、宜しく出家したまふべし。　尊は、勝定を以て諸の垢を除き、甘露の雨を灑ぎて、群生を洽ほしたまへり。　世間に諸の渇乏充滿す。　今正に是れ時なり。　宜しく出家したまふべし。　尊は、無邊の大智慧を以て、邪見愚癡の惑を斷除したまへり。　尊應に昔の[七]弘願を思惟したまふべし。　今正に是れ時なり、速かに出家したまへ。

尊は、昔已に無量億の慈悲喜捨諸の勝行を行じたまひ、此の一切の諸の勝行を以て、世間の諸の衆生に分布したまへり。　婇女の絃歌甚だ微妙にして、欲を以て菩薩を[八]惑はすも、十方諸佛は、威神力をもつて、一切皆法音と爲さ令めたまふ。　尊、憶ふに往昔國王と爲りたまひ、人有り、前に於て從つて乞へば、我が王位と及び國土とを與へ、歡喜して之を捨て悔恨したまふこと無かりき。　尊、昔曾つて婆羅門と爲りたまひ、名を[九]輪迦と曰ひ、極めて精進なり。　慈孝にして父母を供養し、無量の婆羅門、及び餘の衆生を成熟して、善道に歸せしめ、是の身を捨て已つて、天上に生じたまひき。　尊、憶ふに往昔仙人と作りたまひ、[一〇]歌利王瞋つて支節を斷ぜしも、大慈心を起して惱恨無く、所傷の處皆乳を流したまひき。　昔、[一一]奢摩仙の子と作り

慧を以て現在世の所有一切法を照知して無碍なるをいふ。

〔五〕三轉十二行無上法輪。三轉とは小乘四諦の法を說くに、示勸證ノ三轉あるをいひ、十二行とは三轉の一一に、眼智明覺の四種の智を生ずるをいふ。

〔六〕露幔。堂塔の外に露出せる幔幕なり。

〔七〕弘願。弘大なる誓願。

〔八〕惑。麗本に感に作る。今は元明二本に從つて、惑と改む。

〔九〕輪迦(Syaku)。

〔一〇〕歌利王(Kali)。譯、鬪諍、惡生。歌利王の因緣は金剛般若經にあり。

〔一一〕奢摩仙(Syamu-rsi)。前に睒とあり。睒子經なるあり、この因緣を說く。

邊阿僧祇世界の諸佛如來の神通の力有りて、其の宮內の鼓樂絃歌をして、「微妙の音を出さしめ、菩薩を勸請して、偈を說いて言ふ、

「宮中の婇女の絃歌の聲は、欲を以て菩薩を惑はす。　十方諸佛の威神力は、此の音聲を變じて法言と爲したまふ。」　尊、昔、諸の苦の衆生を見、發願して彼の與に依怙と爲りたまへり。善い哉、若し昔の諸行を記したまはば、今正に是れ時なり、宜しく出家したまふべし。」　尊憶ふに昔衆生の爲の故に、身肉手足をも悋みたまふこと無かりき。　持戒・忍辱・及び精進・禪定・智慧、皆修行したまへり。　菩提の勝福を求めんが爲の故なり、一切世間に能く及ぶもの無し。　是の諸の衆生の瞋恚癡を、尊は慈悲を以て皆攝伏したまふ。　尊は、愚癡邪見の者に於ても、能く廣く大悲心を起したまふ。　福智を積集したまへること、已に無邊なり。　禪定神通は極めて淸淨なり。」　身光能く十方に至り、月の雲無くして普く照すが如し。　無數の音樂、聲微妙にして、菩薩を勸請したてまつる、速かに家を出でたまへ。」

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、最勝微妙の宮中に住す。一切の所須、皆悉く備具す。殿堂樓閣は、衆寶をもつて莊嚴し、幢幡・寶蓋・處處に羅列す。寶鈴寶網之を嚴飾し、無量百千の綺綵、衆寶の瓔珞を垂懸す。一切の橋道は、衆寶の板を以て合成する所なり。處處に皆衆寶の香爐有りて、衆の名香を焼き、珠交の露幔、其の上に張施す。諸の池沼有り、其の水淸冷なり。時非時の華、周遍して開發す。其の池の鳧鴈・鴛鴦・孔雀・翡翠・迦陵頻伽・共命鳥、和雅の音を出だす。其の地は、純ら瑠璃を以て成ずる所なり。光明あつて愛すべきこと、猶明鏡の如し。莊嚴綺麗なることは、以て喩と爲す無く、人天見る者歡喜せざるは莫し。

復た一時に於て、諸の婇女等の樂器の音、十方の佛の威神力に由るが故に、頌を說いて曰く、

「尊、憶ふに往昔弘願を發したまへり。　諸の衆生の依怙無きを愍み、若し甘露の大菩提を證せ

欲し、心に厭足なきをいふ。八に精進無滅。佛の身心精進滿足し、常に一切衆生を度して、休息なきをいふ。九に念無減。佛、三世諸佛の法、一切の智慧相應し滿足し退轉なきをいふ。十に慧無減。佛、一切の智慧を具し、無量無際不可盡なるをいふ。十一に解脫無減。佛、一切の執著を遠離して、有爲無爲二種の解脫を具するをいふ。十二に解脫智見無減。佛、一切の解脫の中に於て、知見明了分別無碍なるをいふ。十三に一切身業隨智慧行。佛、諸の勝相を現じて衆生を調伏し、智に稱ひて一切諸法を演說し、各解脫證入せしむるをいふ。十四に一切口業隨智慧行。佛、微妙淸淨の語を以て、智に隨つて轉じ、一切衆生を化導利益するをいふ。十五に一切意業隨智慧行。佛、淸淨の意業を以て智に隨つて衆生心に轉入し、爲に法を說いて、無明痴惑の障を除滅するをいふ。十六に智慧知過去世無碍。佛、智慧を以て過去世の所有一切若は衆生法若は非衆生法を照知し、悉く能く遍く知つて無碍なるをいふ。十七に智慧知未來世無碍。佛、智慧を以て、未來世の所有一切を照知して無碍なるをいふ。十八に智慧知現在世無碍。佛、智

卷の第五

音樂發悟品第十三[一]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、深宮に處在して將に出家せんと欲す。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦婁羅・緊那羅・摩睺羅伽・梵釋・四王、常に種種の供具を以て、菩薩を供養し、歡喜讃歎す。又異時に於て、諸天・龍神・乾闥婆等、各々自ら思惟すらく、「菩薩は、長夜に衆生を成就したまひ、[二]四攝の法を以て、之を攝受したまふ。是の諸の衆生、根機已に熟せり。菩薩何が故に久しく深宮に處し、出家成道して彼を度したまはざる。若し及ばざる時は、恐らくは遷移を致して、善心保ち難く、後に正覺を成じたまふとも、度す可き無からん」と。是の念を作し已つて、菩薩の前に至り、頂禮希望して、是の如きの言を作さく、「云何が當に菩薩の、出家、學道して、菩提の座に坐し、衆魔を降伏し、等正覺を成じて、[三]十力四無所畏、[四]十八不共佛法 [五]三轉十二行無上法輪を具足し、大神通を現じて、諸の衆生の所有意樂に隨つて、皆滿足せ令めたまふを見たてまつるべき」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩は、長夜に於て他に由つて悟らず、常に自らを師と爲して、世間及び出世間の一切の善法を了知し、所行の行に非と非時とを知り、神通に遊戲して未だ嘗つて退失せず。衆生の根に應ずること、猶ほ海潮の時に錯謬すること無きが如し。神通の智を以て、諸の衆生の、攝益すべき時、摧伏すべき時、度脫すべき時、棄捨すべき時、說法すべき時、默然たるべき時、修智すべき時、誦念すべき時、思惟すべき時、獨處すべき時、刹利の衆會に往くべき、婆羅門の衆會に往くべき、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦婁羅・緊那羅・摩睺羅伽・釋梵・護世・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等の衆會に往く可きの時を知る。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『一切最後身の菩薩の將に出家せんと欲するや、法爾として十方無

【一】 音樂發悟品（Saṃcodana-parivarta）。

【二】 四攝法。布施攝・愛語攝・利行攝・同事攝の四法をいふ。此の四法によつて衆生を利益し、之によつて親愛の心を生ぜしめ、道を受けしむ。故に四攝法といふ。倘兜率天宮品第二の下に於ける註を見るべし。攝法を、他所には攝又は攝事（Saṃgraha-vastu）に作る。

【三】 十力四無所畏。序品第一の下に註せり。

【四】 十八不共佛法。佛に限る十八種の功德法なり。佛に限りて他の二乘菩薩に共同せざれば不共法（Aveṇikadharma）といふ。一に身無失。佛、一切の煩惱皆盡きたるを云ふ。二に口無失。佛所說の法、衆の機宜に隨ひて、皆證悟を得しむるをいふ。三に念無失。佛、諸の甚深の禪定を修し、諸法に於て第一義の安穩を得るをいふ。四に無異想。佛、一切衆生に於て平等に普く度し、心に簡擇なきをいふ。五に無不定心。佛の行住坐臥、常に甚深の勝定を離れざるをいふ。六に無不知已捨。佛、一切諸法に於て、一法として了知して而も之を捨てざるものあることなきをいふ。七に欲無滅。佛、常に諸の衆生を度せんと

以て、自ら莊嚴す。草衣、故弊の服を衣ると雖も、其の體に累する無く、唯美麗を增すのみ。若し人惡を懷きて、外其の容を飾らば、猶ほ毒缾の、之に塗るに蜜を以てするが如し。是の如き等の人や、甚だ怖畏す可し。譬へば毒蛇の附近す可からさるが如し。若し復人有り、惡知識を棄てて、善友に親しめば、衆生の罪を除く。三寶を建立する、功、唐捐ならず。身口意業、皆悉く清淨なり。諸の大仙人、能く他心を知る。自ら當に明鑒して、覆蔽を假ること無かるべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「爾の時輸檀王、耶輸陀羅の能く是の如き智慧辯才有るを聞き、心大に歡喜す。卽ち上妙の衣服・寶珠・瓔珞の價直無量なるを以て、耶輸陀羅に賜ひ、偈を以て讚じて曰く、

「太子衆德を具す。而して汝甚だ相稱ふ。今二清淨の者、蘇[六一]と及び醍醐[六二]との如し」と。

【五九】優陀夷(Udāyin)。譯、出現。出家して後、人を勸發化導すること、佛弟子中優陀夷を以て第一とす。
【六〇】高幢(Dhvajāgra)。
【六一】蘇。明本酥に作る。酥(Navanīta)。牛乳を精製せし酪より作りし油。
【六二】醍醐(Sarpimaṇḍa)。牛乳より製す、味中第一、藥中第一なり。

い哉。太子生年未だ曾つて習學したまはざりしも、乃ち能く斯の如き伎藝を具有したまへり」と。

虚空の諸天、偈を說いて曰く、

「今菩薩の射を觀ずるに、未だ希有と爲すに足らず。當に先佛の座に坐して、大菩提を證し、禪定を以て弓と爲し、空・無我を箭と爲して、諸の見網を決除し、煩惱の怨を射て破りたまふべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「是の如き、權捷騰跳・競走越逸・相扠[五六]相撲・書印算數・射御履水・騎乘巧便・勇健鉤索・皆妙に能く辨じ、[五七]末摩・博戲・占相畫工雕鏤・管絃歌舞・俳諧按摩、諸の珍寶を變ずる幻術占夢、諸の六畜を相する種種雜藝、通達せざるは無し。[五八](1)鷄吒論、(2)尼建圖論、(3)布羅那論、(4)伊致訶娑論、(5)韋陀論、(6)尼盧致論、(7)式叉論、(8)尸伽論、(9)毘尸伽論、(10)阿他論、(11)王論、(12)阿毘梨論、(13)諸の鳥獸論、(14)聲明論、(15)因明論を善くし、人間、一切の伎能、及び過人上の諸天の伎藝皆悉く通達す。是に於て執杖大臣、輸檀王及び諸釋種の一切の衆會に白して言さく、「我れ今女を以て太子の妃と爲さん」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、世法に隨順して、宮中に處するを現じ、八萬四千の婇女、娛樂して住す。耶輸陀羅を第一の妃と爲す。初めて宮中に至るに、婦人の淺近の儀式を修めず。俄然首を露はし、未だ曾つて覆面せず。時に輸檀王及び[五九]優陀夷、竊に是の事を怪しむ。後宮の婇女、咸悉く宣言すらく、「妃今初めて來る。應に羞恥を示すべし。何爲ぞ顯異して、愧容有ること無く、輕慢淺薄、乃し是の如きに至るや」と。耶輸陀羅、此の語を聞き已り、諸の宮女の爲に、頌を說いて曰く、

「但瑕疵無し。何ぞ覆藏を用ひん。行住坐臥、皆悉く淸淨なり。摩尼寶を[六〇]高幢に置くが如し。光彩照曜し、一切表に見はる。若は默し若は語るに、常に私匿無し。諸の功德を

【五六】扠。音サイ、又はタイ。うつ、たゝく。

【五七】末摩（Marmavedhitva)。巧妙なる武藝なり。

【五八】鷄吒論以下諸論の名。
一、鷄吒論(Kaiṭabha?)。祭式書なり。
二、尼建圖論(Nirghaṇṭa)。語彙なり。
三、布羅那論(Purāṇa)。歷史文學なり。
四、伊致訶娑論(Itihāsa)。叙事詩なり。娑の字は屢々婆と誤らる。
五、韋陀論(Veda)。
六、尼盧致論(Nirukta)。語源論なり。
七、式叉論(Śikṣa)。音韻論なり。
八、尸伽論(Vaiśika)。欲論なり。
九、毘尸伽論（Vaiśeṣika)。勝論なり。
十、阿他論(Atharva-veda)。吠陀の四種の中、第四なり。
十一、王論(Rāja-vidyā)。
十二、阿毘梨論(Āmbhirya)。梵本の異本に、Ambhiya に作る。意義明ならず。
十三、諸鳥獸論(Mṛgapakṣiruta)。
十四、聲明論(Vyākaraṇa)。文法なり。
十五、因明論(Hetu-vidyā)。論理學なり。

誰か最も優れたりと爲ん」と。是に於て共に鐵鼓を射る。[五三]阿難陀曰く、「鐵鼓を置くこと二拘盧舍にす可し。」提婆達多曰く、「鐵鼓を置くこと四拘盧舍にす可し。」孫陀羅難陀曰く、「鐵鼓を置くこと六拘盧舍にす可し。」執杖大臣曰く、「鐵鼓を置くこと八拘盧舍にす可し。」菩薩言はく、「鐵鼓を將つて十拘盧舍に置き、幷に七の鐵猪及び七の鐵[五四]多羅樹を、十拘盧舍の外に置く可し」と。爾の時阿難陀は射て二拘盧舍に及び二の鐵鼓を過ぐ。提婆達多は、射て四拘盧舍に及び四の鐵鼓を過ぐ。孫陀羅難陀は、射て六拘盧舍に及び六の鐵鼓を過ぐ。執杖大臣は、射て八拘盧舍に及び八の鐵鼓を過ぐ。自ら此を限と爲して、皆越ゆる能はず。

爾の時菩薩、弓を引きて將に射んとするに、其の弓及び弦、一時に倶に斷ず。菩薩顧み視て、更に良弓を覓む。時に輸檀王、心に甚だ歡喜し、菩薩に報ひて言はく、「先王弓有り、天廟に在り。常に香花を以て供養す。其の弓勁强にして、人能く張る無し」と。菩薩言はく、「試に遣はして將ち來らせたまへ」と。王卽ち使を遣はして、先王の弓箭を取らしめ、持ちて諸の種種の子に授與するに、是の諸の釋種、皆張る能はず。然る後、弓を將つて菩薩に授與す。爾の時菩薩、安隱に坐し、左手に弓を執り、右指にて弦を上げて、忽然として張る。力を加へざるに似たり。弓を彈くの響、迦毘羅城に遍し。城中の居人、咸く皆驚怖して、各各相問ふ、「此れ何の聲とか爲す」と。時に諸の人天、同時に唱へて言はく、「善い哉善い哉」と。虛空の諸天、偈を說いて讃じて曰く、

「菩薩弓を張る時、安然として動搖したまはず。　意樂當に圓滿にして、魔を降して正覺を成じたまふべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「是の時菩薩の身心安隱にして、進止閑詳なり。然して後、弦を控へて諸の鐵鼓を射るに悉く皆穿過す。鐵猪も鐵樹も、貫達せざるは無し。箭は地に沒し、因つて井を成す。爾の後衆人號けて[五五]箭井と爲す。時に諸の人天、聲を同じうして唱へて言はく、「善い哉善

【五三】　阿難陀(Ānanda)。略して阿難といふ。譯、歡喜。斛飯王の子、提婆達多の弟、佛の從弟なり。

【五四】　多羅樹(Tāla)。樹の名。譯、岸樹、高竦樹。株高きものは七八十尺に至り、體堅くして鐵の如く、葉は長くして稠密なりといふ。

【五五】　箭井(Śarakūpa)。

最勝なり。爾の時、虛空の諸天、復偈を說いて言はく、

「菩薩多劫に行じたまへる施戒・忍辱・精進・慈悲の力、感得して是の如く身心を輕くして、周旋捷疾なり。汝當に聽くべし。汝は大士の常に此に居したまふを見て、一念に十方に往き、佛の國を遊歷して、遍く親承するを知らず。未だ曾つて彼に來去有しますことを知らず。是の釋子に於て殊勝を得たまへる、此の事希有と爲すに足らず」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「是の時五百の童子、力を角べ相撲つ。分れて三十二朋と爲る。難陀前に就いて其の剛勇を騁せしも、菩薩が手を擧げて纔に其の身に觸るるに、威力の加ふ所、時に應じて倒る。提婆達多は、常に我慢を懷き、菩薩を陵侮す。己の威力は菩薩と等しと謂ひ、挺然として衆より出で、彼の試場を巡り、疾走して來り菩薩を挫かんと欲す。爾の時菩薩、急ならず緩ならず。亦瞋忿も無く、安詳として之を待つ。右手に徐に捉へ、飄然として擎げ擧ぐ。其の我慢を摧かんとて、三たび空中に擲ぐるに、慈悲を以ての故に、傷損する無から使む。諸の釋種に告ぐらく、「汝宜しく盡く來つて我と相撲つべし」と。倶に瞋忿を生じ、銳意齊しく奔る。菩薩之を指すに、悉く皆顚仆す。時に諸の人天、聲を同じうして唱へて言はく、「善い哉、善い哉」と。虛空の諸天、衆の天花を雨して、偈を以て讃じて曰く、

「假使十方の諸の衆生、皆大力を具すること　那延[五二]の如くなるも、最上の智人、一念に於て、纔に之を指したまへば、時に悉く顚仆す。假使須彌鐵圍の山も、大士手をもつて摩したまへば、盡く末と爲る。何に況んや世間不堅の人にして、太子と優劣を挍べんや。當に大慈を以て道場に坐し、欲界天の魔軍を降伏して、復甘露を以て群生を洽ほしたまふべし。定んで知る、菩薩には能く勝る無きを」と。

爾の時執杖大臣、諸の釋子に告げて言はく、「我已に種種の伎藝を觀見せり。今は試み射る可し。

といふ。

【五〇】阿僧祇(Asaṃkhya)。譯、無數。

【五一】拘胝室哆(Koṭiśata)。百億。

【五二】那延。那羅延(Nārāyaṇa)のこと。天上の力士の名。

樂天あり。百億の[三〇]他化自在天あり。百億の[三一]梵身天あり。百億の[三二]梵輔天あり。百億の[三三]梵衆天あり。百億の[三四]大梵天あり。百億の[三五]少光天あり。百億の[三六]無量光天あり。百億の[三七]遍光天あり。百億の[三八]少淨天あり。百億の[三九]無量淨天あり。百億の[四〇]遍淨天あり。百億の[四一]無雲天あり。百億の[四二]福生天あり。百億の[四三]廣果天あり。百億の[四四]無想衆天あり。百億の[四五]無煩天あり。百億の[四六]無熱天あり。百億の[四七]善見天あり。百億の[四八]善現天あり。百億の[四九]阿迦尼吒天あり。是の如きを名けて三千大千世界と爲す。縱廣の量、乃至百由旬・千由旬・百千由旬・拘胝由旬・百拘胝由旬・尼由多由旬なり。是の如く次第して、由旬の數量、之を知ることを得可し。微塵の量は、諸の名數の能く及ぶ所に非るなり。是の三千大千世界の微塵は、算計す可からさるを以て、是の故に名けて[五〇]阿僧祇と爲すのみ」と。菩薩此の數を說ける時、頞順那及び諸の釋種、皆大に歡喜して、希有の心を生じ、踊躍すること無量なり。悉く上妙の衣服・衆寶・瓔珞を解きて、菩薩に奉上し、讃じて言ふ、「善い哉善い哉」と。頞順那即ち偈を說きて言はく、

「拘胝[五一]室哆阿由多、是の如く復尼由多有り。更割羅及び毘婆羅、數の名極まつて阿芻婆に至り、而して復無量の數を超過す。此等を太子は皆能く知りたまへり。諸釋汝今應に聽くべし。太子は世間に與に等しきもの無し。三千大千の衆の草木を、折りて以て籌と爲して智人と作すも、是の如きは挍量を爲すに足らず。況んを復五百の釋の童子をや」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に百千の天人有り。悉く唱ふ、「善い哉、善い哉」と。虛空の諸天、偈を以て讃じて曰く、

「過、現及び未來の若干の衆生の心、上中下品の類を、一念に悉く皆知りたまふ。何に況んや此の算數、明了すること能はさらんや」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『「菩薩、諸釋の童子を降伏し、伎藝を捔試するに、跳躑奔走皆悉く

【三〇】他化自在天（Paranirmita-vaśavartin）。以上は欲界にある天なれば六欲天といふ。
【三一】梵身天（Brahmakāyika）。
【三二】梵輔天（Brahmapurohita）。
【三三】梵衆天（Brahmapārisadya）。
【三四】大梵天（Mahābrahmaṇa）。以上四天を色界初禪天といふ。
【三五】小光天（Parittābha）。
【三六】無量光天（Apramāṇābha）。
【三七】遍光天（Ābhāsvara）。以上三天を色界二禪天といふ。
【三八】少淨天（Parittaśubha）。
【三九】無量淨天（Apramāṇaśubha）。
【四〇】遍淨天（Śubhakṛtsna）。以上三天を色界三禪天といふ。
【四一】無雲天（Anabhraka）。
【四二】福生天（Puṇyaprasava）。
【四三】廣果天（Bṛhatphala）。以上三天を色界四禪天といふ。
【四四】無想衆天（Asaṃjñisattva）。
【四五】無煩天（Avṛha）。
【四六】無熱天（Atapa）。
【四七】善見天（Sudarśana）。
【四八】善現天（Sudṛśa）。
【四九】阿迦尼吒天（Akaniṣṭha）。以上六天を色界淨梵地

と名く。此を過ぎて復數有り。(27)伊吒と名く。此を過ぎて復數有り。(28)古盧鼻と名く。此を過ぎて復數有り。(29)古吒鼻那と名く。此を過ぎて復數有り。(30)娑婆尼叉と名く。若し此の數を解する者有らば、能く恒河沙の拘胝絡叉を知らん。此を過ぎて復數有り。(31)阿伽羅娑羅と名く。若し此の數を解する者有らば、能く百拘胝恒河沙の絡叉を知らん。此を過ぎて復數有り。(32)隨入極微塵波羅摩嚩羅闍と名く。此の數に至り已つて、一切衆生、皆知ること能はず。唯如來及び最後身の、菩薩の、方に能く解するを除く爾」と。頞順那言はく、「太子云何ぞ能く極微塵の數を解したまはん。」菩薩答へて言はく、「凡そ七(1)[一八]極微塵にして一(2)阿耨塵を成じ、七阿耨塵にして、一(3)都致塵を成じ、七都致塵にして、一(4)牖中眼所見塵を成じ、七眼所見塵にして、一(5)兎毛上塵を成じ、七兎毛上塵にして、一(6)羊毛上塵を成じ、七羊毛上塵にして、一(7)牛毛上塵を成じ、七牛毛上塵にして、一(8)蟣を成じ、七蟣にして、一(9)芥子を成じ、七芥子にして、一(10)麥を成じ、七麥にして、一(11)指節を成じ、十二指節にして、一(12)搩手を成じ、兩搩手にして、一(13)肘を成じ、四肘にして、一(14)弓を成じ、千弓にして、一(15)拘盧舍を成じ、四拘盧舍にして、一(16)由旬を成ず。今此の衆中、誰か能く一由旬內の微塵の數量を了知する」と。頞順那曰く、「我、太子の所說を聞きて、猶ほ尙ほ迷悶す。何に況んや諸の餘の淺識寡聞をや、惟願はくば太子我が爲に宣說したまへ。一由旬の內に幾微塵有りや」と。菩薩答へて曰く、「由旬の微塵の數量は、阿芻婆一那由多を盡くす。復、三十拘胝那由多百千有り。復六萬拘胝有り。復、三十二拘胝有り。復、五絡叉有り。復、萬二千絡叉有り。是の如きの算計、一由旬の塵數を成ず。是の如く[一九]南閻浮提は七千由旬、[二〇]西拘耶尼は八千由旬、[二一]東弗婆提は九千由旬。[二二]北欝單越は十千由旬なり。是の如きの四天下、一世界を成ず。百億の四天下にして、一の三千大千世界を成ず。其の中に百億の[二三]四大海あり。百億の須彌山あり。百億の[二四]鐵圍山あり。百億の[二五]四天王天あり。百億の[二六]忉利天あり。百億の[二七]夜摩天あり。百億の[二八]兜率陀天あり。百億の[二九]化

【一八】極微塵。以下數目の名。1. Paramāṇurajaḥ 2. Aṇu 3. Truṭi 4. Vātāyanarajaḥ 5. Śaśarajaḥ 6. Eḍakarajaḥ 7. Gorajaḥ 8. Likṣārajaḥ 9. Sarṣapa 10. Yava 11. Aṅguliparva 12. Vitasti 13. Hasta 14. Dhanu 15. Krośa 16. Yojana.

【一九】南閻浮提 (Jambudvīpa)。新に南贍部洲。

【二〇】西拘耶尼 (Aparagodānīya)。新に西牛貨洲。

【二一】東弗婆提 (Pūrvavideha)。新に東勝身洲。

【二二】北欝單越 (Uttarakuru)。新に北瞿盧洲。

【二三】四大海。須彌山の四方に在る大海なり。須彌山は四大海の中央に在り、四大海の中に各一大洲ありて、四大海の外を鐵圍山にて圍繞す。

【二四】鐵圍山 (Cakravāḍa)。鹹海を圍繞して、一小世界を區劃する鐵山なり。

【二五】四天王天 (Catur-mahārājā)。

【二六】忉利天 (Trāyastriṃśa)。

【二七】夜摩天 (Suyama)。

【二八】兜率天 (Tuṣita)。

【二九】化樂天 (Sunirmita)。

しも、今は知る、太子の量る可からざるを」と。五百の釋種能く及ぶ無し。彼は昔、皆我能く算すと稱へ

時に諸の釋種、及び一切の人天、同聲に唱へて言はく、「善い哉善い哉。太子は算計の中に於ても、亦復第一なり」と。皆座より起ちて合掌頂禮し、大王に白して言さく、「善い哉大王。快く善利を得たまへり。今は太子の辯才智慧、皆悉く第一なり」と。

時に輸檀王、菩薩に告げて言はく、「頗し復能く頞順那と算を校量するや不や。」菩薩言はく、「大王。此の事可なるのみ。」時に彼の算師、菩薩に問うて言はく、「頗し百拘胝の外の數の名を了知する有りや以不や。」菩薩報ひて言はく、「我甚だ之を知れり。」頞順那言はく、「太子能く知りたまはば、請ふ我が爲に說きたまへ。」菩薩答へて言はく、「百拘胝を[一六](1)阿由多と名く。百阿由多を(2)尼由多と名く。百尼由多を(3)更割羅と名く。百更割羅を(4)頻婆羅と名く。百頻婆羅を(5)阿芻婆と名く。百阿芻婆を(6)毘婆訶と名く。百毘婆訶を(7)欝僧迦と名く。百欝僧迦を(8)婆呼羅と名く。百婆呼羅を(9)那迦婆羅と名く。百那迦婆羅を(10)底致婆羅と名く。百底致婆羅を(11)卑波婆他般若帝と名く。百卑波婆他般若帝を(12)醯兜奚羅と名く。百醯兜奚羅を(13)迦羅頗と名く。百迦羅頗を(14)醯都因陀利と名く。百醯都因陀利を(15)僧合怛覽婆と名く。百僧合怛覽婆を(16)伽那那伽致と名く。百伽那那伽致を(17)尼羅闍と名く。百尼羅闍を(18)目陀羅婆羅と名く。百目陀羅婆羅を(19)薩婆婆羅と名く。百薩婆婆羅を(20)毘僧以若跋致と名く。百毘僧以若跋致を(21)薩婆僧以若と名く。百薩婆僧似若を(22)毘浮登迦摩と名く。百毘浮登伽摩を(23)怛羅叉叉と名く。若し此の數を解する者有らば、即ち能く一須彌山の微塵數量を算知せん。此を過ぎて數有り。[一七](24)度闍阿伽羅摩尼と名く。若し此の數を解する者有らば、即ち能く恒河沙の絡叉の數量を算知せん。此の數を過ぎ已つて數有り。(25)度闍阿伽摩尼舍梨と名く。若し此の數を解する者有らば、即ち能く恒河沙の拘胝を算知せん。此の數を過ぎ已つて數有り。(26)婆訶那婆若爾炎致

【一六】阿由多。以下數目の名。1. Ayuta 2. Niyuta 3. Kaṅkara 4. Vivara 5. Akṣobhya 6. Vivāha 7. Utsaṅga 8. Bahula 9. Nāgabala 10. Tiṭilambha 11. Vyavasthānaprajñapti 12. Hetuhila 13. Karaphu 14. Hetvindriya 15. Samāptalambha 16. Gaṇanāgati 17. Niravadya 18. Mudrābala 19. Sarvabala 20. Visaṃjñāgati 21. Sarvasaṃjñā 22. Vibhūtaṃgama 23. Tallakṣaṇa.

【一七】度闍阿伽羅摩尼。以下數目の名。24. Dhvajāgravati 25. Dhvajāgraniśāmaṇi 26. Vāhanaprajñapti 27. Iṅgā 28. Kuruṭu 29. Kuruṭāvi 30. Sarvanikṣepā 31. Agrasārā 32 Paramāṇurajaḥpraveśānugatā.

城を越えしむ。[一四]一拘盧舍を過ぎて、其の象墮ちたる處、便ち大坑と爲る。爾る後、衆人號けて象坑と爲す。是の時、虛空の諸天、皆大に歡喜し、未曾有なりと歎ず。而して頌を說いて曰く、

「菩薩車中に左足を垂れ、指を以て象を重城の外に擲ちたまふ。　決定して當に能く智力を以て、諸の衆生を運んで死城を超えしめたまふべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時輸檀王、諸の釋種の長德・耆年・國師・大臣の無量の衆會と、藝場の所に集まる。五百の釋種童子、皆此の場に至る。時に諸の釋種、毘奢蜜多を請じて試藝師と爲す。毘奢蜜多に語つて言はく、「應に我等諸の童子の中、誰か最も書に工にして、誰か學の優贍なるかを觀るべし」と。而して毘奢蜜多は、先に菩薩が一切の書を解して、能く踰ゆる者無きを知れり。是に於て微笑して、諸の童子に向ひ、頌を說いて曰く、

「天上と人間の、所有文字、太子之を究めて、盡く其の底を窮めたまへり。　吾と汝等と、誰か能く及ばん者ぞ。　我が爲に書を說きたまひしも、其の名を識ること靡かりき。　適曾て校量せり。　人天の最勝なり」と。

爾の時五百の釋種、前みて王に白して言さく、「我等先に太子の書藝に通達し、能く及ぶ者無きを知れり。而も算術に於ては、或は未だ人に過ぎざらん」と。時に大臣有り。[一五]頞順那と名く。極めて算術に閑へり。輸檀王、頞順那に語つて言はく、「汝宜しく諸の童子の、算數中に於て、誰か最も優と爲すかを觀るべし」と。爾の時菩薩、自ら與に數を唱へ、諸の童子をして次第に籌を下さしむ。菩薩の唱ふるに隨つて、計及ぶ能はず。一一の童子、乃至、五百、皆悉く錯亂す。菩薩是の時、諸の童子に語る。「汝等數を唱へよ。我當に之を算すべし」と。諸の童子等、次第に數を擧げ、菩薩籌を運ぶに、唱は及ぶ能はず、都べて錯謬無し。乃至、五百の童子、一時に俱に唱ふるに、亦雜亂せず。時に頞順那、心に希有を生じ、偈を以て讚じて曰く、

【一四】拘盧舍(Krośa)。里程の名。牛又は鼓の聲の聞き得る最大距離。

【一五】頞順那(Arjuna)。頞順那の名は、般茶婆(Pāṇḍava)の五王子の一人として、大婆羅多書中に活躍す。此名は、恐らくはこの大文學より來れるならんか。

爾の時菩薩、父王の所に詣り、白して言さく、「大王何を以てか、憂愁したまふや。」王時に默然たり。乃ち三問に至る。王餘人を遣はして、爲に斯の意を說かしむ。是に於て菩薩、熙怡として微笑し、來つて王に白して言さく「世間に寧ぞ殊に妙伎を能くして、我と等しき者有らんや」と。王便ち歡喜して、更に審かに問うて言はく、「汝今能く他人と伎藝を捔ぶるや」と。是の如く三たび問ふ。菩薩答へて言はく、「大王。但當に速かに異術有る人を召したまふべし。我能く前に於て、衆の伎藝を現ぜん」と。時に輸檀王、迦毘羅城外に於て、一試場を爲り、遍く天下に告ぐ。「七日を過ぎて後、若し伎術を善くする有らば、皆此の場に集まれ。共に太子の、諸の伎藝を現ずるを觀ん。第七日に至り、五百の釋子、菩薩を首と爲して、當に共に城に出でて試場の所に往くべし」と。是の時執杖大臣、其の女を莊飾し、載するに寶車を以てし、侍從に圍遶せられて、來つて伎藝を觀、表號の令を立つ。「若し伎藝の人に出づる者有らば、女を以て之に妻はせん」と。時に輸檀王、最勝の白象を遣はし、將つて以て菩薩を迎へしむ。[二]提婆達多、先に城門に至り、此の勝象の莊嚴第一なるを見、是は誰の象なるかを問ふ。答へて言はく、「大王此の象を遣はし、將つて、以て太子を迎へしむ」と。提婆達多、是の語を聞き已りて、嫉妬の心を生じ、力を恃みて憍慢なり。前みて象の鼻を執り、手を以て之を搏つ。是に於て死せり。[三]難陀續いて到り、城門を出でんと欲して、彼の白象の路に當つて斃れたるを見る。問ふ「誰か殺せしや。」答へて言はく、「提婆達多なり」と。難陀時に手を以て倒しまに曳き、路の側に致す。菩薩尋いで至り、問ふ。「誰か象を殺せし。」御者答へて言はく、「提婆達多、左手に鼻を執り、右手にて之を搏てり。其の象、爾の時、手に應じて死せり」と。菩薩歎じて曰く、「提婆達多甚だ不善を爲す」と。復御者に問ふ。「誰か能く之を移せし。」答へて言はく、「難陀手を以て倒しまに曳きて、路の側に致せり」と。菩薩歎じて曰く、「善い哉。難陀」と。

爾の時菩薩、寶輅に坐しながら、左足の指を以て、彼の白象を持ち、徐に虛空に擲つて、七重の

【二】提婆達多(Devadatta)。譯、天授。斛飯王の子、阿難の兄、佛の從弟なり。出家して神通を學び、身に三十相を具し、六萬の法藏を誦するも、利養の爲に三逆罪を造り、生ながら地獄に墮つ。

【三】難陀(Nanda)。孫陀羅難陀、略して難陀と云ふ。牧牛難陀と別なり。是れ佛の親弟なり。

し、菩薩の前に至つて、暫く威光を覩るに、仰ぎ視ること能はず。爾の時菩薩、無憂の寶器を以て、次第して之に付す。皆厚禮を蒙り、顏を低れて去る。爾の時耶輸陀羅、侍從圍遶せられて、最後に至る。姿容端正にして、色相雙び無し。菩薩を諦觀し、目暫くも捨てず。怡然として微笑し、是の言を作さく、「獨り無憂の寶を垂賜したまはず。將我が身は採るに足らざるに非ずや」と。菩薩報じて曰はく、「我今汝に於て誠に嫌ふ所無し。汝後より來れり、寶器盡きたるのみ」と。即ち指環を脫して、以て之に與ふ。其の環の價直、百千兩なり。耶輸陀羅、指環を受け已つて、復是の言を作さく、「賜ふ所の物、何ぞ太だ少きや。我が身劣なりと雖も、止に直爾るのみなりや」と。是の時菩薩、著くる所の衆寶瓔珞を盡く脫して、以て之に贈る。耶輸陀羅言はく、「我今何爲ぞ太子の嚴身の寶を奪はん。自ら當に諸の寶飾を以て、太子に奉上すべし」と。是の語を作し已り、肯て之を受けずして、還つて本處に歸る。時に王の使者、具に上の事を以て、王に白して言さく、「大王、當に知るべし。太子の意は、執杖大臣の女耶輸陀羅に在り」と。王是の語を聞き、即ち國師を遣はして、執杖の家に詣り、是の如きの言を作さしむ。「聞くならく卿に女有り。太子の妃爲るに堪へんと。故に相を遣はして求む。宜しく此の意を知らしむべし」と。爾の時國師、王の勅を奉じ已つて、執杖の家に到り、具さに是の事を陳ぶ。爾の時執杖、國師に報じて言はく、「我が家法自り、積代相承す。若し伎の能く人に過ぎたる者有らば、女を以て之に妻せん。太子は深宮に生長して、未だ曾つて文武・書算・圖象・兵機・權捷・膂力・世間の衆藝を習學せず。何爲ぞ我が女、無藝の人に適かしめんや。應に諸の釋を會して、伎能を簡選すべし。誰か最も優長にして、當に是の女を得べきや」と。爾の時國師、此の語を聞き已り、歸つて王に白す。王此の言を聞き、愁憂して樂まず。竊かに是の念を作さく、「我先に諸の釋種に勅して、太子に親侍せしめしに、皆我に白して言さく、太子は勇ならずと。執杖が此辭、或は是に因るならん」と。

を具足すること猶ほ寶女の如し。是に於て大臣、執杖の家に詣りて、耶輸陀羅を見る。爾の時耶輸陀羅、大臣を拜して、之に問うて言はく、「何の緣を以てか來つて此に至れる」と。大臣、菩薩の書を以て耶輸陀羅に授け、而して頌を說いて曰く、

「釋氏大王の太子、顏容端正甚だ愛すべし、大人の相三十二、八十種好皆圓滿したまふ。　太子書中に婦德を述べたまふ。　是の如きの女を妃と爲すべし」と。

爾の時耶輸陀羅、菩薩の書を見、取つて之を讀み、怡然として微笑し、大臣に報じて曰く、

「書に載する德行、今悉く備ふ。　唯應に太子は我が夫爲るべし。　當に斯の意を以て速かに啓知すべし。　不肖をして共に居せしむること無かれ」と。

爾の時大臣、是の事を見已つて、歸りて王に白して言さく、「大王、我、迦毘羅城に於て、處處に求め訪ねて、一賢女を覩たり。太子の妃爲るに堪へん。端正姝妙にして、色相第一なり。長ならず短ならず、麁ならず細ならず。白に非ず、黑に非ず、婦容を具足すること、猶ほ寶女の如し」と。王曰く、「汝が稱する所の者は、誰の女ぞや。」白して言さく、「執杖大臣の女なり。耶輸陀羅と名く」と。王自ら惟念すらく、「太子の相好は世間に超過せり。德貌備足して、方に以て太子の妃に充つ可きのみ。汝が稱する所、何ぞ必ずしも美を具せん。我當に無憂の寶器を造るべし。太子の意に隨つて、來る者に之を遺り、竊かに伺候して、其の好む所を觀せ使め、其の好む所の者を、卽ち娉して妃と爲さん」と。乃ち金師をして多く無憂の器を造らしめ、復(二)七寶を以て嚴飾を爲し、鼓を擊ち宣令して、迦毘羅城に告げしむ。「自ら女の德貌有つて、太子の妃爲るに堪ふことを知らん者は、第七日に至つて、總べて王宮に集まれ」と。七日滿じ已つて、諸の女皆集る。菩薩爾の時、大殿に處り、仁賢の床に據りて、婇女に圍遶せらる。時に輸檀王、密かに內人をして菩薩の意の向ふ所を觀察せしむ。「當に速かに我に報ずべし」と。時に迦毘羅城の一切の美女、皆瓔珞を以て其の身を莊嚴

【二】　七寶。諸經論の諸說少異あり。阿彌陀經によれば金(Suvarṇa)、銀(Rūpya)、瑠璃(Vaiḍūrya)、玻璃(Sphaṭika)、硨磲(Musāragalva)、赤珠(Rohita-mukta)、瑪瑙(Aśmagarbha)をいふ。

陳べん。汝宜しく書に依つて善く求め覓むべし。若し少盛にして威儀を好み、麗容を恃みて慢を起さず、憍無く恪無く嫉妬無く、諂無く誑無く諸病無く、恒常に質直にして慈心を起し、衆生を憐愍すること愛子の如く、好んで惠施を行じて諸の過無く、沙門婆羅門を供養し、乃至、夢寐にも邪心無く、未だ曾つて懐孕せず、至つて貞潔に、恒に心の師と爲つて高く擧がらず。意を執すること卑遜にして猶ほ賤の如く、滋味及び欲樂を貪らず。慚有り恥有りて害すること無く、未だ嘗つて諸の外道に歸依せず、恒に眞正の理と相應し、身語意業常に清淨に、[四]惛沈睡眠は皆遠離し、作す所善く思惟せざるは無く、恒に善行を行じて未だ曾つて捨てず。舅姑に承事すること父母の如く、左右を愛念すること自身の如く、夫睡りて方に眠り、復先に起き、善く能く諸の義理を解了する有らば、是の如きの女、我方に取らん。豈凡劣以て妃と爲すことを得んや」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『是の時大臣、乃ち此の書を傳へて、輸檀王の所に至る。王、書を見已つて、諸臣に告げて言はく、「汝宜しく書を齎して、迦毘羅城に於て、諸の族姓の若は[五]刹帝利、若は[六]婆羅門、乃至、[七]毘舍、[八]首陀種族の中を觀ずべし。必ず女にして斯の衆德を具せ令むる有らば、當に是の女を娶りて太子の妃と爲すべし」と。即ち偈を說いて言はく、

「刹利・婆羅門・毘舍及び首陀、女有つて斯の德を具せば、宜しく速かに來つて我に報ずべし。太子の心の好む所は、法を奉ずるを以て先と爲す。汝今應に審に觀ずべし。種族を論ずること無かれ」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時大臣、王の勅を奉じ已つて、迦毘羅城に於て、是の如き令德の女を求め訪ぬ。一大臣有り。名を[九]執杖と爲す。其の人女有り。[一〇]耶輸陀羅と名く。相好端嚴にして、姝妙なること第一なり。長ならず短ならず、麁ならず細ならず。白に非ず黑に非ず、婦容

【四】 惛沈。心をして盲昧沈鬱ならしむる煩惱。
【五】 刹帝利(Kṣatriya)。四姓の第二、王種なり。
【六】 婆羅門(Brāhmaṇa)。四姓の第一、大梵天に奉事して、淨行を修する一族なり。
【七】 毘舍(Veśa)。四姓の第三、商賈の族なり。
【八】 首陀(Śūdra)。四姓の第四、農人奴隷なり。
【九】 執杖(Daṇḍapāṇi)。
【一〇】 耶輸陀羅(Yaśodharā)、梵文は(Gopā)となす。

には珠寶、五には女寶、六には主兵臣寶、七には主藏臣寶なり。千子を具足し、端正勇健にして、能く怨敵を伏したまはん。大王、若し太子をして出家せざら令めば、轉輪聖王必ず繼嗣有らん。諸の粟散王は、咸く當に歸伏すべし。應に爲に婚を求めて、染著を生ぜしめたまふべし。是に由つて自ら當に出家したまはざるべきなり」と。時に輸檀王、諸釋に告げて言はく、「誰の女か德有つて其の妃爲るに堪へん」と。時に五百の大臣有り。各〻王に白して言さく、「我が女、德有り。太子の妃爲るに堪ふ」と。輸檀王言はく、「太子の妃、固より選を爲すこと難し。知らず誰が女か能く其の意に稱ふかを。宜しく太子に、何等の女を以て妃と爲す可きかを問ふべし」と。是の諸の釋種、菩薩の所に往き、各各問ひて言さく、「太子は何等の女を娶りてか、以て妃と爲したまふ」と。是の時菩薩、諸釋に報ひて言はく、「却後七日、當に斯の意を述ぶべし」と。菩薩思惟して偈を說いて言はく、

「欲には無邊の過有り。諸の苦惱の因と爲す。猶毒樹の林の如し。亦猛火聚の如し。今深宮の內に處して、婇女と共に相娛しむ。此の處甚だ居し難し、猶霜刃を履む如し。未だ若かず禪定に住して、獨り山林に在らんには」と。

爾の時菩薩、七日を過ぎ已つて、大悲心を起し、思惟方便して衆生を度せんと欲し、諸の大臣に告げて頌を說いて曰く、

「蓮花は淤泥の中に生長すれども、淤泥の染する所と爲らず。王者の德は、衆庶に感じて、方に一切の宗とする所と爲る。世間の無量の諸の衆生、當に我が所に於て甘露を證すべし。是の故に妻子等有るも、五欲の染する所と爲るに非ざることを示さん。我今過去佛に隨順して、諸の禪定を退失せざらん。婚娉は宜しく應に伉儷を選び、凡女を娶りて以て妃と爲すこと勿るべし。相好を具足せる淸淨人、諦語心に稱ひて放逸無きを、我今書を爲して所好を

【三】粟散王—粟散とは、粟を散ぜし如く、小さき國のこと。是等小國の王者なり。

得せ令めたまふべし」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に諸の仙人、菩薩を讃じ已つて、頂禮圍遶し、空に昇つて去る。爾の時輸檀王、少時の間に於て、菩薩を見ず、悒然として樂します。是の如き言を作さく、「太子今は何の許に在りと爲んや」と。卽ち群臣を遣はして、處處に求め覓む。一大臣有り、閻浮樹に至つて、乃ち菩薩の、彼の樹下に在つて端坐して思惟せるを見る。諸樹の光陰は、日を逐うて轉ずるに、唯だ閻浮の影のみは、湛然として移らず。時に彼の大臣、是の如きの事を見て、心に希有を生じ、歸つて王に白して言さく、

「太子は閻浮樹に宴坐したまへり。其の樹は、時を經れども影移らず。種種の相好、以て莊嚴に超え、威德光明、釋梵に超えたまへり」と。

爾の時輸檀王、是の語を聞き已り、閻浮樹の下に往きて、菩薩の身相好莊嚴威光赫奕たるを見、偈を以て歎じて曰く、

「譬へば山峯に夜炬を然やすが如し。亦明月の虛空に在るが如し。太子は安隱に深禪に入れり。我今之を見て喜び且つ懼る」と。

現藝品第十二[一]

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時菩薩、年旣に長大なり。復一時に於て、輸檀王、諸の釋種長德耆年と共に、相與に談議す。時に諸の釋種、大王に白して言さく、「太子年漸く長大なり。無量の諸仙善く相を占ふ者皆云へり。太子若し出家するを得たまはば、必定して成佛したまはん。若し家に在さば、當に轉輪聖王と爲つて、四天下に王となり、十善もて物を御し、法を以て王と爲り、[二]七寶を成就したまふべしと。何をか謂つて七と爲す。一には輪寶、二には象寶、三には馬寶、四

【一】現藝品（Śilpasaṃdarśana-parivarta）。

【二】七寶—種々ある中に於て、輪寶（Cakra ratna）、象寶（Hasti ratna）、馬寶（Aśva ratna）、珠寶（Maṇi ratna）女寶（Strī ratna）、主藏臣寶（Gṛhapati ratna）、主兵臣寶（Pariṇāyaka ratna）を輪王の七寶といふ。嚴飾の七寶は、次に見ゆ。

有奇特の心を生ず。咸く是の言を作さく、「此れ何人爲れば威容乃ち爾るか。是れ帝釋爲りや。是れ四王爲りや。是れ魔王爲りや。是れ龍王爲りや。是れ摩醯首羅天爲りや。是れ〔一〇〕毘紐天爲りや。是れ轉輪聖王爲りや」と。時に諸の仙人、偈を以て讃して曰く、

「身色は四護世・釋梵・日月・自在天に超過したまふ。福德相好、能く踰ゆるもの無し。淸淨にして垢を離れたまふ。應に是れ佛なるべし」と。

爾の時〔一一〕林神、偈を以て仙人に答へて曰く、

「釋提桓因及び護世、梵王と毘紐と自在と、若し菩薩の威光に比すれば、百千萬分も一に及ばず。」

爾の時諸仙、是の偈を聞き已り、空より下つて菩薩の前に至り、乃ち菩薩の深禪定に入つて、身心動ぜざるを見る。偈を以て讃じて曰く、

「世間は煩惱の火、尊は是れ淸涼の池なり。當に無上法を以て、其をして熱惱を除かしめたまふべし」と。

復一仙有り。偈を以て讃じて曰く、

「世間は無明に覆はる。尊を智慧の燈と爲す。當に勝淨の法を以て、彼が爲に冥暗を除きたまふべし」と。

復一仙有り。偈を以て讃じて曰く、

「世間は憂惱の海なり。尊を大船筏と爲す。當に最勝の法を以て、之を濟うて彼岸に登らしめたまふべし」と。

復一仙有り。偈を以て讃じて曰く、

「世間に老病の苦あり。尊を大醫王と爲す。當に微妙の法を以て、之を救うて愈ゆることを

成正覺品にも、殆んど同樣の文句あり。

【八】金剛。金剛山は又金剛圍山、金剛輪山ともいふ。世界を周繞する鐵圍山のこと。鐵性堅固なれば金剛といふ。

【九】三禪捨念想—第三禪には喜受をも捨てゝ、捨のみあり（捨受にあらず）、而も禪定なるを以て念あり、想（新に慧）あり。こゝの樂は、喜樂二受を捨てたる上の意識の樂なり。

【一〇】毘紐天（Viṣṇu）。又那羅延天といふ。

【一一】林神（Vanakhaṇḍado-vata）。

でて遊び、觀行して園中に至り。諸の農夫の、勤勞して役を執るを見る。菩薩見已つて、慈悲の心を起し、世間に斯の如き苦有ることを哀れみ嗟きて、卽ち是の念を作さく「何の處か空閑なる。我當に彼に於て離苦を思惟すべし」と。乃ち園中に[二]閻浮樹有るを見る。枝葉蓊欝として、鮮榮愛す可し。菩薩爾の時、彼の樹の下に於て、結加趺坐す。諸の欲惡を離れて、[三]覺有り觀有り、[四]離生の喜樂ありて、初禪に住す。內一心を淨め、覺觀を滅し、離生の[五]喜樂あつて、二禪に住す。喜受を離れ、聖は捨に住すと說く。念有り想有りて、身に樂を證して、三禪に住す。苦樂を斷除し、憂喜を滅して、苦ならず樂ならず、念清淨にして、[六]四禪に住す。時に外の五通の仙人有り。虛に乘じて行き南より北に往く。閻浮樹に至りて、飛び過ぐること能はず。共に相謂つて言はく、「[七]我今何の爲に此の閻浮樹を飛び過ぐること能はざるか」と。心驚き毛竪つ。而して偈を說いて言はく、

「我等昔は能く、須彌及び[八]金剛、是の如き堅固の山を過ぐるに、去來罣礙無かりき。猶ほ大象有りて、衝いて小林叢を度るに[九]彼に於て留難無きが如く、其の事、亦是の如くなりき。又亦曾つて、諸天龍神の宮を飛び過ぎしも、皆悉く難しと爲さず、一切所障無かりき。今は是れ誰の力ぞ、來つて我が神通を制するか。此の閻浮林に於て、遲廻して過ぐること能はず」と。

爾の時、林の中に神有り。偈を說いて答へて言はく。

「輸頭檀王の太子、圓滿なること、猶ほ淸淨なる月の如し。身相は猶ほ日の初めて出づるが如く、面貌は猶ほ蓮花の敷けるが如し。此の閻浮樹の陰の下に於て、端坐して甚深定を思惟したまふ。劫を積みて、已に曾つて善行を修せり、故に能く熱を除きて淸涼を得たまふ。是の大士の威神に由りて、汝をして此を過ぐること能はざらしむ」と。

爾の時、諸の仙、是の偈を聞き已りて、遙かに菩薩の威光赫然として相好無比なるを見、各〻希

【二】閻浮樹(Jambu)。譯、穢。樹の名。

【三】有覺有觀。覺觀は新譯に尋伺といふ。麁思を覺と名け、細思を觀と名く。二者共に定心を妨ぐるもの。此の覺觀の有無に因つて定心の淺深を判ず。

【四】離生喜樂―初禪の離生は、(Vivekaja)なり。二禪につきては、成正覺品參照。

【五】喜樂。心の輕安の麁細をいふ。委しくいふ時は、眼耳身三識の無分別に悅豫するを樂といひ、意識の分別して悅豫するを喜といふ。

【六】四禪―四無色定のこと。麁細によりて、これを四種に分つ。尋伺喜樂の四あるを初禪とし、尋伺の二を離れ、また樂を離るゝを二禪とし、喜樂を離れて、別に心の樂を得るを三禪とし、一切を離れて捨のみあるを四禪とす。初禪には、六識中、鼻舌二識なく、二禪以上は意識のみなり。これによつて、樂受は初禪にあるのみ。

【七】二禪喜樂―初禪には眼耳身の三識あるを以て、樂受あれども、二禪には喜捨の二受ありて、樂受なきを法相とす。されば、二禪の樂は、初禪の樂受とその意義を異にし、意識の輕安なるをいふ。後の

字を唱ふる時、得果入現證の聲を出だす。[43] 婆(上聲)字を唱ふる時、解脫一切繫縛の聲を出だす。[44] 婆字を唱ふる時、斷一切有の聲を出だす。[45] 摩(上聲)字を唱ふる時、銷滅一切憍慢の聲を出だす。[46] 也字を唱ふる時、通達一切法の聲を出だす。[47] 羅字を唱ふる時、厭離生死欣第一義の聲を出だす。[48] 羅(上聲)字を唱ふる時、斷一切生死枝條の聲を出だす。[49] 婆(上聲)字を唱ふる時、最勝乘の聲を出だす。[50] 捨字を唱ふる時、一切奢摩他毘鉢舍那の聲を出だす。[51] 沙(上聲)字を唱ふる時、制伏六處得六神通の聲を出だす。[52] 娑字を唱ふる時、現證一切智の聲を出だす。[53] 呵字を唱ふる時、永害一切業煩惱を出だす。[54] 差字を唱ふる時、諸文字不能詮表一切法の聲を出だす」と。』佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、諸の童子と學堂に居りし時、同じく字母を唱へて、無量百千の法門の聲を演出し、三萬二千の童男、三萬二千の童女をして、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さ令めたり。是の因緣を以て、示現して學堂に入れり。』

觀農務品第十一[1]

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩年漸く長大なり。便ち一時に於て、諸の釋子と共に、城を出

---

rava-)。
【一四】 烏 ū (ūna-)。
【一五】 翳字 e (eṣaṇā-)。
【一六】 愛字 ai (airyāpatha-)。
【一七】 烏字 o (oghottara-)。
【一八】 僕字 au (aupapāduka-)。
【一九】 唵字 aṁ (amoghotpatti-)。
【二〇】 阿字 aḥ (astaṁ-)。
【二一】 迦(上聲)字 ka (karma-)。
【二二】 佉 kha (kha-sama-)。
【二三】 伽(上聲)字 ga (gambhīra-)。
【二四】 伽字 gha (ghana-)。
【二五】 哦字 ṅa (aṅga-)。
【二六】 者字 ca (catur-)。
【二七】 車(上聲)字 cha (chanda-)。
【二八】 社字 ja (jarā-)。
【二九】 闍字 jha (jhaṣadhvaja-)。
【三〇】 壤字 ña (jñāpana-)。
【三一】 吒(上聲)字 ṭa (paṭa-procchedu-)。
【三二】 咤字 ṭha (ṭhapaniya-)。
【三三】 荼(上聲)字 ḍa (ḍamara-)。
【三四】 荼字 ḍha (mīḍha-)。
【三五】 拏(上聲)字 ṇa (reṇu-)。
【三六】 多(上聲)字 ta (tathatā-)。
【三七】 他(上聲)字 tha (thama-)。
【三八】 陀(上聲)字 da (dāna-)。
【三九】 陀字 dha (dhana-)。
【四〇】 那(上聲)字 na (nāma-)。
【四一】 波(上聲)字 pa (paramārtha-)。
【四二】 頗字 pha (phala-)。
【四三】 婆(上聲)字 ba (bandhana-)。
【四四】 婆字 bha (bhava-)。
【四五】 摩(上聲)字 ma (mada-)。
【四六】 也字 ya (yathāvat-)。
【四七】 羅字 ra (rati-)。
【四八】 羅(上聲)字 la (latā-)。
【四九】 婆(上聲)字 va (vara-)。
【五〇】 捨字 śa (śamatha-)。
【五一】 沙(上聲)字 ṣa (ṣaḍ-)。
【五二】 娑字 sa (sarva-)。
【五三】 呵字 ha (hata-)。
【五四】 差字 kṣa (akṣara-)。
以上を四十六字門といふ。四十六字母を借りて、之を字母とせる佛教思想の要目を、出來得る限り、あらはさんとせるものなり。

【一】 觀農務品(Kṛṣigrāma-parivarta)。

面貌威嚴ありて能く視る無し。智慧神力、最も第一なり。當に善巧を以て我に敎詔したまふべし。己を顧るに微淺なり、焉んぞ能く學せん。徒書の名を聽くも、實は未だ知らず。

是れ最上天中の天爲り。世間中に於て二有ること無し」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時十千の童子有り。菩薩と倶に師の前に在りて、同じく[八]字母を學ぶ。[九]阿字を唱ふる時、一切諸行無常の聲を出だす。[一〇]長阿字を唱ふる時、自利利他の聲を出だす。[一一]伊字を唱ふる時、諸根本廣大の聲を出だす。[一二]伊字を唱ふる時、一切世間衆多病の聲を出だす。[一三]烏(上聲)字を唱ふる時、世間諸惱亂事の聲を出だす。[一四]烏字を唱ふる時、諸世間一切衆生智慧狹劣の聲を出だす。[一五]翳字を唱ふる時、所希求過患事の聲を出だす。[一六]愛字を唱ふる時、勝威儀の聲を出だす。[一七]烏字を唱ふる時、死曝流到彼岸の聲を出だす。[一八]懊字を唱ふる時、皆化生の聲を出だす。[一九]唵字を唱ふる時、一切物皆無我我所の聲を出だす。[二〇]阿字を唱ふる時、一切法皆滅沒の聲を出だす。[二一]迦(上聲)字を唱ふる時、入業果の聲を出だす。[二二]佉字を唱ふる時、一切諸法如虛空の聲を出だす。[二三]伽(上聲)字を唱ふる時、甚深法入緣起の聲を出だす。[二四]伽字を唱ふる時、除滅一切無明黑暗厚重瞖膜の聲を出だす。[二五]哦字を唱ふる時、銷滅衆生十二支の聲を出だす。[二六]者字を唱ふる時、觀四諦の聲を出だす。[二七]車(上聲)字を唱ふる時、永斷貪欲の聲を出だす。[二八]社字を唱ふる時、度一切生死彼岸の聲を出だす。[二九]闍字を唱ふる時、降一切魔軍衆の聲を出だす。[三〇]壞字を唱ふる時、覺悟一切衆生の聲を出だす。[三一]吒(上聲)字を唱ふる時、永斷一切道の聲を出だす。[三二]吒字を唱ふる時、置答の聲を出だす。[三三]茶(上聲)字を唱ふる時、斷一切魔惱亂の聲を出だす。[三四]茶字を唱ふる時、一切境界皆是淨の聲を出だす。[三五]拏(上聲)字を唱ふる時、永拔微細煩惱の聲を出だす。[三六]多(上聲)字を唱ふる時、一切法眞如無別異の聲を出だす。[三七]他(上聲)字を唱ふる時、勢力無畏の聲を出だす。[三八]陀(上聲)字を唱ふる時、施戒質直の聲を出だす。[三九]陀字を唱ふる時、希求七聖財の聲を出だす。[四〇]那(上聲)字を唱ふる時、遍知名色の聲を出だす。[四一]波(上聲)字を唱ふる時、證第一義諦の聲を出だす。[四二]頗

---

tara 54.(Padasaṃdhi) 55. Madhyāhāriṇīlipi 56. Sarvarutasaṃgrahaṇīlipi 57. (Vaśī?) 58. Vidyānulomāvimiśritalipi 59. Ṛṣitapastaptā 60. Rocamānā 61. Dharaṇīprekṣiṇīlipi 62. Gaganaprekṣiṇīlipi 63. Sarvauṣadhiniṣyandā 64. Sarvasārasaṃgrahaṇī 65. Sarvabhūtarutagrahaṇī

梵本には、本經の 7. 22. 33. 54. 57 を缺き、左の五書を載するを以て、總計六十五となれど、四九と五〇とを分たずして、之を六十四となす。

Vaṅgalipi, Maṅgalyalipi, Brahmavalilipi, Lūnalipi, Vāyasarutalipi.

【六】六十五書—麗本には六十四書と作し、宋元明三本には六十五書と作す。

【七】無見頂相—八十種好の中にある一相にして、頂高くして見る能はざるをいふ。因人たる菩薩に無く、佛にのみある相好なり。

【八】字母。悉檀の摩多と體文なり。是れ諸字を生ずる母なれば、字母といふ。

【九】阿字 a (anitya-)。

【一〇】長阿字 ā (ātma-)。

【一一】伊字 i (indriya-)。

【一二】伊字 ī (īti-)。

【一三】烏(上聲)字 u (upad-

中の天にして、最尊爲り。甘露を施したまひて、能く勝るもの無し。一切衆生の心行異れども、一念の中に於て、悉く能く知りたまふ。寂滅の法、猶能く悟りたまへり。況んや復文字を學びたまふを須ひんや」と。

爾の時天子、此の偈を説き已り、即ち天の妙香花を以て、菩薩を供養し、忽然として現ぜず。時に輸檀王、諸の童子及び諸の保母に勅して、菩薩に瞻侍せしめ、王は本宮に還る。菩薩爾の時、手に天の書栴檀の簡を執る。塗るに天香を以てし、摩尼明璣、以て嚴飾と爲す。而して師に問うて言はく。「(1)梵寐書、(2)佉盧虱底書、(3)布沙迦羅書、(4)央伽羅書、(5)摩訶底書、(6)央瞿書、(7)葉半尼書、(8)婆履迦書、(9)阿波盧沙書、(10)沓毘羅書、(11)罽羅多書、(12)多瑳那書、(13)郁伽羅書、(14)僧祇書、(15)阿跋牟書、(16)阿奴盧書、(17)達羅陀書、(18)可索書、(19)支那書、(20)護那書、(21)末提惡刹羅書、(22)蜜怛羅書、(23)弗沙書、(24)提婆書、(25)那伽書、(26)夜叉書、(27)乾闥婆書、(28)摩睺羅書、(29)阿修羅書、(30)迦婁羅書、(31)緊那羅書、(32)密履伽書、(33)摩瑜書、(34)暴磨提婆書、(35)安多力叉提婆書、(36)拘耶尼書、(37)欝單越書、(38)弗婆提書、(39)沃熱婆書、(40)匿憩波書、(41)般羅憩波書、(42)婆竭羅書、(43)跋闍羅書、(44)戻佉鉢羅底隷陀戻佉書、(45)毘憩波書、(46)安奴鉢度多書、(47)差舍薩多婆書、(48)竭賦那書、(49)嗚差波書、(50)匿差波書、(51)波陀戻佉書、(52)地怛烏散地書、(53)夜婆達書、(54)鉢陀散地書、(55)末提訶履尼書、(56)薩婆多增伽訶書、(57)婆尸書、(58)比陀阿奴路摩書、(59)尼師咨多書、(60)乎盧支摩那書、(61)陀羅尼閉瑳書、(62)伽伽那必利綺那書、(63)薩婆沃殺地彌產陀書、(64)婆竭羅僧伽訶書、(65)薩婆部多睺婁多書有り。上の所説の如き六十五書あり。何の書を以て、相教へんと欲するか」と。是の時毘奢蜜多羅、未だ聞かさる所を聞き、歡喜踊躍して、自ら貢高を去り、頌を説いて曰く、

「希有清淨勝智の人、已に自ら一切の法に該通したまへり。學堂に入りて、下問に從ふことを示したまふ。説きまひし所の書の名、昔より未だ聞かず。無見頂相、極めて尊高なり。

Puṣkarasārī 4. Aṅgalipi 5. Magadhalipi 6. Aṅgulīyaliyi 7. (Yavanī) 8. Sakārilipi 9. Pārṣyalipi 10. Drāviḍalipi 11. Kirātalipi 12. Dākṣiṇyalipi 13. Ugralipi 14. Saṃkhyālipi 15. Avamūrdhalipi 16. Anulomalipi 17. Daradalipi 18. Khāṣyalipi 19. Cīnalipi 20. Hūṇalipi 21. Madhyākṣaravistaralipi 22. (Mitralipi?) 23. Puṣpalipi 24. Devalipi 25. Nāgalipi 26. Yakṣalipi 27. Gandharvalipi 28. Mahoragalipi 29. Asuralipi 30. Garuḍalipi 31. Kinnaralipi 32. Mṛgacakralipi 33. (Māyu又はMayūra-lipi?) 34. Bhaumadevalipi 35. Antarīkṣadevalipi 36. Aparagoḍānīlipi 37. Uttarakurudvīpalipi 38. Pūrvavideha. 39. Utkṣepalipi 40. Nikṣepalipi 41. Prakṣepalipi 42. Sāgaralipi 43. Vajralipi 44. Lekhapratilekhalipi 45. Vikṣepalipi 46. Anudrutalipi 47. Śāstravarta 48. Gaṇanāvartalipi 49. Utkṣepāvartalipi 50. (Nikṣepāvartalipi) 51. Pādalikhitalipi 52. Dviruttarapadasaṃdhilipi 53. Yāvaddaśot-

べし。莊嚴の衆の珍寶は、汝自ら以て美なりと爲すも、菩薩は求むる所無し。菩薩の須ふる所に非ず。宜しく持ちて車匿に賜ふべしと。天神偈を說き已つて、忽然として現ぜず。王及び諸の釋種、深く希有の心を生じ、踊躍歡喜して言はく、釋氏當に興盛すべし』と。

示書品第十【一】

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩年始めて七歲、是の時、備ふるに百千の吉祥威儀の事を以てし、菩薩を將ゐて學堂に往詣せんと欲す。十千の童男、一萬の童女、圍遶翊從す。車一萬乘、載するに珍羞幷に諸の寶物を以てし、迦毘羅城の四衢道の中、及び諸の鄽里に於て、處處に散施す。復、百千の音樂有り。同時に倶作して、衆の天花を雨す。復、無量百千の婇女有り。衆寶瓔珞をもつて、其の身を莊嚴し、或は樓閣軒檻に在り。或は殿堂窓牖に處つて、菩薩を瞻望し、衆の妙花を以て、遙かに之を散ず。復、百千の天の諸の婇女有り。其の身を莊嚴して、各〻寶缾を執り、盛るに香水を以てし、前に於て道に灑ぐ。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等、各 虛空に於て、半身を出現し、手に花鬘・瓔珞・珠寶を執つて、其の上に垂懸す。一切の釋種、前后圍遶して、輸檀王に隨ひ、菩薩を將ゐて、學堂に詣る。爾の時菩薩、將に學堂に昇らんとするに、博士【二】毘奢蜜多、菩薩の來りて威德無上なるを見、自ら菩薩の師爲るに任へざるを顧み、大に慚懼を生じ、迷悶して地に躃る。時に兜率天子あり。名を【三】妙身と曰ふ。之を扶けて、起ちて座上に安置せしめ、身は虛空に昇り、頌を說いて曰く、

「所有世間の伎藝は、無量劫に於て、已に修習したまへり。諸の童子を成熟せんと欲すが爲に、俗法に隨順して、學堂に昇りたまふ。復、諸の衆生を調伏して、大乘眞實の法に入ら令めんと欲す。善く因緣を解して【四】四諦を知り、能く諸有を滅して淸涼を得たまへり。天

【一】示書品（Lipiśālāsaṃdarśana-parivarta）。

【二】毘奢蜜多（Viśvāmitra）。釋尊幼年時師事せし人。毘奢蜜多は、婆私吒（Vasiṣṭha）及び頗羅墮（Bharadvāja）と相伴つて、佛典中に屢々現はる。蓋、婆羅門學者中の名家なり。

【三】妙身（Subhāṅga）。

【四】四諦。聖者所見の眞理なれば、四聖諦ともいふ。一に苦諦（Duḥkha-āryasatya）、三界六趣の苦報なり。二に集諦（Samudaya-）、貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業なり。此の二能く三界六趣の苦報を集起すれば、集諦と名く。三に滅諦（Nirodha-）、涅槃なり。涅槃は惑業を滅し、生死の苦を離れて、眞空寂滅なれば、滅と名く。四に道諦（Mārga-）、八正道なり。是れ能く涅槃に通ずれば、道と名く。

【五】梵衆書等の六十五書の梵名を現存梵本に配當すれば左の如し。梵本になきは括弧内に入る。

1. Brāhmī 2. Kharoṣṭī 3.

の眷屬と與に、月、軫を離れて、角宿合する時、來りて王の所に至つて、王に白して言はく、「請ふ。太子の爲に寶莊嚴の具を造らん」と。時に王報ひて言はく「宜しく速かに造ら令むべし」と。五百の釋種大臣、亦各々菩薩の奉爲に莊嚴の具を造る。所謂指環・首飾、寶頸・耳璫、寶帶・瓔珞、寶屐・寶鈴、寶鐸・金網、是の如き等の莊嚴の具、既に成就し已る。而して弗沙星、正に月と合す。是の時諸釋眷屬、此の寶具を持ちて、王の所に詣つて、各々言さく「大王、我等造る所の莊嚴の具、願はくば太子に上らん」と。王言はく、「且らく待て。汝等先に以て種種に供養せり。我も今亦太子の爲に莊嚴の具を造らん」と。諸釋眷屬、重ねて王に白して言さく、「我等獻する所、豈に常に莊嚴するを得んと冀はんや。太子但許したまはば、各々爲に七日用に御せんこと、是れ所願のみ」と。明旦に至り、摩訶波闍波提、無垢光明園に往き、諸の寶具を以て、菩薩を嚴飾し、懷抱捧接して、園中に至る。時に八萬四千の婇女有りて、菩薩を迎侯す。一萬の童女有つて、菩薩を觀瞻す。一萬の釋種の童女有つて、菩薩を敬迎す。五千の婆羅門有つて、菩薩を讃歎す。是の如き等の欽望の心、皆厭倦すること無し。時に釋種有り。跋陀羅と名く。諸の造る所の寶莊嚴の具を以て、菩薩に衣著せしむ。爾の時に當つて、菩薩の身光、衆寶所有の光彩を暎奪して悉く復現ぜさらしむ。譬へば聚墨を閻浮檀金に對するが如し。爾の時、園中に神有り。名を離垢と曰ふ。即ち其の形を現じ、輸檀王及び諸の釋種の前に於て、偈を說いて讃じて曰く、

「假令三千界に、中に滿てて眞金を盛るとも、閻浮金の一銖、之に暎ずれば即ち色無し。假令閻浮金、三千界に充滿するも、菩薩の一毛光、之に暎ずれば亦色無し。光明甚だ圓滿なり。百の福相莊嚴す。是の如きの清淨の身は、豈外好に資らんや。日月星珠の彩も、梵釋諸天の光も、若し菩薩の身に對すれば、皆悉く現ずること能はず。先の淨業の感ずるに由つて、衆相自ら莊嚴して、下劣の人の、奉ぐる所の莊嚴の具を待たず。應に汝が所獻を屏ぞく

【三】軫（Hastā）。南方の星の名。
【四】角（Citrā）。東方の星の名。
【五】弗沙星。星の名。二十八宿中の鬼宿なり。南方にあり。
【六】冀—麗本には異に作り、元明二本に冀に作る。
【七】無垢光明園（Vimala-vyūha-nāmodyāna）。
【八】跋陀羅（Bhadrika）。
【九】閻浮檀金（Jambunada-suvarṇa）。金の名。其の色赤黄にして紫焔氣を帶ぶ。閻浮は樹の名。檀は譯、川。閻浮樹の下に川あり、閻浮檀といふ。この川の中より金を出す。故に閻浮檀金と名く。

一切皆欣喜せん。是の故に應に知るべし、我は、獨り天中の天たるを。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『是の如きの集會・軍衆・吉祥讃歎す。城闕・街陌・巷陌・鄽肆・諸門を莊嚴して、悉く已に清淨なり。時に輸檀王、自ら菩薩を將て、車に乘りて出づ。諸の婆羅門、刹利・大富・長者・居士・大臣、及び諸の國王、釋氏の眷屬、前後に翊從す。香を燒き、花を散じて、衢路に滿たし、象馬・車乘・軍衆・無量なり。皆悉く寶幢幡蓋を執持し、種種の鼓樂歌舞をもつて倡を作す。百千の諸天、菩薩の車に御し、無量百千那由他の天子、幷に天の婇女、虚空中に於て、衆の天花を散じ、鼓樂絃歌す。時に輸檀王、威力是の如くにして天廟に詣る。天廟に至り已つて、王自ら菩薩を抱持して、天廟の中に入る。足門閫を踰ゆる時、所有天像、皆座より起ち、菩薩を迎逆へて恭敬禮拜す。時に衆會中の百千の天人、皆大に歡笑踊躍すること無量なり。唱へて言さく、『善い哉。善い哉。甚だ希有爲り』と。迦毘羅國、六種に震動し、諸天の形像、各ゝ本身を現はして、頌を說いて曰く。

『芥子を須彌に並べ、牛跡を溟海に方べ、日月を螢火に對するに、豈以て倫と爲すに足らんや。
我は今芥子の如く、復、牛跡に同じ。亦螢火と等し。故に我應に彼を敬すべし。菩薩は、日月の如く、亦復溟海と同じく、而して須彌と等し。宜しく我を恭敬すべからず。福慧及び威力あり。禮せば大利を獲ん。若し人憍慢を去らば、天に生まれて涅槃を證せん。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『菩薩示現して天廟に入りし時、三萬二千の天子及び無量の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。諸の比丘よ。是の因縁を以て、我時に忍可して天廟に入れり。』

寶莊嚴具品第九[一]

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に大臣有り。優陀延[二]と名く。其の人、善く星曆に閑へり。五百

【一】寶莊嚴具品(Ābharaṇa-parivarta)。
【二】優陀延(Udayana)。

巻の第四

入天祠品第八[一]

爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく、「菩薩生れ已るや、諸の刹帝利・婆羅門・居士・長者・豪富の家の二萬の童女、皆悉く菩薩の婇女爲らんと擬す。王及び大臣にも、亦各々二萬の童女有りて、菩薩の婇女爲らんと擬す。此等の諸の女は、皆菩薩と日を同じうして生れしなり。是の時釋種の耆舊、輸檀王の所に詣り、白して言はく、「大王、今は太子を將て天廟に謁し、以て終吉を祈りたまふべし」と。王時に之を許し、即ち所司を遣はして、諸の城廓・鄽肆・巷陌を淨め、所有盲聾・瘖瘂・諸根不具、瓦礫・糞穢、諸の吉祥ならざるを、皆悉く除屏す。福德の鼓を撃ち、善相の磬を扣き、由る所の門を、皆藻飾せ令む。又諸の[二]國王・長者・居士・婆羅門等、期を[三]尅して同じく集まる。無量の婇女、車徒騎にて從ふ。諸の吉祥の鉼は、香油・香水をもつて悉く盈滿せ令む。婆羅門の子は、衢路を夾みて吉祥の音を詠ず。諸天の祠廟、皆悉く嚴好なり。是の如き等の事、一切成辦す。時に輸檀王、後宮に入り、摩訶波闍波提に告げて言はく、「太子を將て天廟に往かんと欲す」と。幷に宮人に勅すらく、「並に嚴飾すべし」と。摩訶波闍波提、諸の寶服を以て菩薩を莊嚴す。是の時菩薩、熙怡として微笑し、是の言を作さく、「今見るに將た何の處に往かんと欲するか。」姨母告げて言はく、「太子を將て、出でて天廟に謁せん」と。爾の時菩薩、偈を說いて言はく、

「我れ初め生まれし時より、三千界を震動せり。　日月、及び護世、梵釋、諸の天、龍、皆悉く閻浮に下り、倶に來りて我を頂禮す。　何ぞ天の相及ぶ有つてか、吾を將て其の所に造るぞ。

我は是れ天中の天なり。　天中に於て最も勝れたり。　天の與に等しき者無し。　誰か復能く過ぐるもの有らん。　世俗に隨順するが故に、所以に此に來生せり。　我が威神力を見ば、

【一】入天祠品（Devakula-pravesana-parivarta）。

【二】國王。三本闔王に作る。

【三】尅—麗本には克に作る、元明二本に尅と爲す。

と右に順ず。四十五には、腹圓滿なり。四十六には、腹妙好なり。四十七には、腹偏曲せず。四十八には、腹の相現ぜず。四十九には、黒子無し。五十には、牙圓正なり。五十一には齒白く齊密なり。五十二には、四牙均等なり。五十三には、鼻高く修直なり。五十四には、兩目明淨なり。五十五には、目に垢穢無し。五十六には、目美妙なり。五十七には、目脩廣なり。五十八には、目端正なり。五十九には、目青蓮の如し。六十には、眉纖くして長し。六十一には、見る者皆喜を生ず。六十二には眉の色青紺なり。六十三には、眉の端漸く細し。六十四には、兩の眉頭微かに相接連る。六十五には、頰の相平滿なり。六十六には、頰に缺減無し。六十七には、頰に過惡無し。六十八には、身缺減せず、譏嫌する所無し。六十九には、諸根寂然たり。七十には、眉間の毫相光白鮮潔なり。七十一には、額廣く平正なり。七十二には、頭頂圓滿なり。七十三には、髮美黒なり。七十四には、髮細軟なり。七十五には、髮亂れず。七十六には、髮香潔なり。七十七には、髮潤澤あり。七十八には、髮に五の[七三]卍字有り。七十九には、髮彩螺旋す。八十には、髮に[七四]難陀越多吉輪魚の相有り。大王、此は是れ聖子の八十種好なり。若し人、是の如き八十種好を成就せば、應に家に在るべからず。必ず當に出家して阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。時に輸檀王、阿斯陀仙の是の如く語るを聞き已り、身心泰然として、歡喜踊躍す。座より起ちて、菩薩を頂禮し、偈を説いて言はく、

「汝は帝釋、諸天人の一切の爲に、恭敬し、稽首し禮せらる。　及び一切の諸の神仙の爲に、皆來つて恭敬して尊重せらる。　諸の世間の塔廟爲り。　故に我、自在王を頂禮す」と。

諸の比丘よ、輸檀王は、阿斯陀仙及那羅童子の爲に、種種の飮食、上妙の衣服を施設し、右遶頂禮せり。時に阿斯陀仙、那羅童子の左の肩を撫でて、虚に乘じて去る。是の時仙人、童子に語つて言はく、「久しからずして佛有り。世に出興したまはん。汝當に往詣して、出家を求め請はば、長夜の中に於て大利益を得べし」と。

【七三】卍字（Svastika）。吉祥萬德の相とせらる。佛教古來の標形なり。

【七四】難陀越多吉輪魚相―難陀越多は、Nandy-āvarta ならん。Nandy-āvarta は、ベートリンク字書に、大魚の一種とせらる。鰐の一種なり。吉輪魚相とは、恐らくは髮に鰐の鱗に見らるる吉輪の相に似たる線ありといふならん。

て足の指纖長なり。二十八には、足趺隆起す。二十九には、手足柔軟にして細滑なり。三十には、手足の指に皆[六九]網鞔あり。三十一には、手足の掌中に各〻輪相有り。轂輞圓備し、千輻具足して、光明照耀す。三十二には、足の下平正にして、周遍して地に案ず。大王。王の聖子は、此の三十二大人の相を具したまへること、分明顯著なり。是の如きの相は、唯諸佛のみ有したまふ。輪王に有るには非ず。大王の聖子は、復[七〇]八十種好を有したまへり。家に在りて、轉輪王と作りたまふべからず。必ず當に出家して、佛道を成ずることを得たまふべし」。王言はく、「大仙、何者をか名けて八十種好と爲す。」仙言はく、「八十種好とは、一には、手足の指の甲皆悉く高く起つ。二には、指の甲は赤銅の如し。三には、指の甲潤澤あり。四には、手文潤澤あり。五には、手文の理深し。六には、手文分明顯著なり。七には、手文端細なり。八には、手足曲らず。九には、手の指纖長なり。十には、手の指圓滿なり。十一には、手の指の端漸く細し。十二には、手の指曲らず。十三には、筋脈露はれず。十四には、踝現はれず。十五には、足の下平かなり。十六には、足の跟圓正なり。十七には脣の色赤好にして[七一]頻婆果の如し。十八には、聲麁獷ならず。十九には、舌柔軟にして、色赤銅の如し。二十には、聲雷音の如く淸暢和雅なり。二十一には、諸根具足す。二十二には、臂纖長なり。二十三には、身淸淨嚴好なり。二十四には、身體柔軟なり。二十五には、身體平正なり。二十六には、身に缺減無し。二十七には、身漸く纖直なり。二十八には、身動搖せず。二十九には、身分相稱ふ。三十には膝輪圓滿なり。三十一には、身輕妙なり。三十二には、身に光明有り。三十三には、身斜曲無し。三十四には、臍深し。三十五には、臍偏せず。三十六には、[七二]齊位に稱ふ。三十七には、齊淸淨なり。三十八には、身端嚴なり。三十九には、身極淨にして、遍く光明を發し、諸の冥瞑を破る。四十には、行くこと象王の如し。四十一には、遊歩すること師子王の如し。四十二には、行くこと牛王の如し。四十三には、行くこと鵝王の如し。四十四には、行くこ

ふ。

【六八】伊尼鹿王(Aineyamr-garâja)。—Aineyaは鹿の梵名なり。伊尼鹿王腨とは、佛の膝が鹿王の膝に似て、長短處を得たるをいふ。

【六九】網鞔—宋元明三本には、網縵に作る。

【七〇】八十種好(Aśīti-anuvyañjana)。又八十隨形好ともいふ。好とは、相の細なるものにして、三十二相に隨伴せるものなり。八十種好は、普曜經の中に說かれず。

【七一】頻婆果(Bimba)。赤色の果實なり。

【七二】齊。三本臍に作る。

は、邪見の曠野の中を行く。佛當に能く涅槃清淨の道を示したまふべし。無量の衆生は、繋がれて煩惱の牢獄に在り。佛當に能く宥して解脱することを得せ使めたまふべし。無量の衆生は、生死に閉ぢられて、自ら出づること能はず、佛當に能く方便の門を與へ開きたまふべし。無量の衆生は、煩惱の箭の爲に中傷せらる、佛當に能く拔きて斯の苦を免れ令めたまふべし。大王。[五九]優曇花の時時に一たび現ずるが如し。諸佛如來の世に出興したまふも、亦復是の如し。我が今恨む所は、此の時に見はざらんことなり。自ら祐を失ふを惟うて、是の故に悲しむのみ。大王、若し人あつて、佛の菩提の座に坐し、魔怨を降伏して、法輪を轉じたまふに値はば、當に知るべし、是の人は必ず勝果を獲ん。大王。乃ち無量の衆生有つて、佛の出世に値ひ、正教を奉持せば、阿羅漢を得ん。我恨むらくは、彼の時に斯の事に預からざらん。是の故に悲しむのみ。大王。[六〇]韋陀論の中に記す所の如くんば、王の太子は、必定して轉輪聖王と作りたまはじ。何を以ての故に。[六一]三十二大人相、極めて明了なるが故に。」王言はく、「何等をか名けて三十二相と爲す。」仙言はく、「三十二相とは、一には、頂に[六二]肉髻あり。二には、螺髮右旋し、其の色靑紺なり。三には、額廣く平正なり。四には、[六三]眉間の毫相、白きこと珂雪の如し。五には睫は牛王の如し。六には、目は紺靑色なり。七には、四十齒有り、齊しくして光潔なり。八には、齒密にして踈ならず。九には、齒白くして[六四]軍圖花の如し。十には、[六五]梵音聲あり。十一には、味中に上味を得。十二には、舌軟薄なり。十三には、頰は師子の如し。十四には、兩の肩圓滿なり。十五には、身量七肘あり。十六には、前分は師子王の臆の如し。十七には、四牙皎白なり。十八には、膚體柔軟細滑にして、[六六]紫磨金色あり。十九には、身體正直なり。二十には、手を垂るれば膝を過ぐ。二十一には、身分圓滿にして、尼拘陀樹の如し。二十二には、一一の毛孔皆一毛を生ず。二十三には、身毛右旋して上に靡く。二十四には、[六七]陰藏隱密なり。二十五には、髀腨長し。二十六には、腨は[六八]伊尼鹿王の如し。二十七には、足跟圓正にし

【五九】優曇花(Udumbara)。花の名。具には優曇波羅、優曇鉢など。靈瑞と譯す。
【六〇】韋陀論(Veda)婆羅門所傳の經典の名。印度に於ける最古の聖典にして、大本四本に分つ。
【六一】三十二大人相(Dvātriṃśatmahāpuruṣalakṣaṇa)—古印度の人相說に、是等三十二相を具するものを大人の相とし、これあるものは、家に在れば、輪王となり、家を出れば、無上覺を悟るといへり。
【六二】肉髻。梵名、烏瑟膩沙(Uṣṇīṣa)。佛の頂上に一の肉團あり、隆起して髻の形を爲すが故に、肉髻といふ。
【六三】眉間毫相。佛の兩眉の間にある白き細毛、右旋宛轉して、常に光明を放てり。これを白毫相といふ。
【六四】軍圖花(Kunda)。花の名。揺難花。其の色甚だ鮮白なり。
【六五】梵音聲。梵は清淨の義。佛の音聲は、清くして遠く聞ゆるが故に。
【六六】紫磨金色。紫磨黃金の色なり。紫は紫色なり。磨は垢濁なきを云ふ。
【六七】陰藏。佛の陰莖のこと。佛の陰莖は、腹中に藏して現見せざらしむれば、陰藏とい

り、王に白して言はく、「大王、門に仙人有り。阿斯陀と名く。親しく謁するを得んを願ふ」と。王是を聞き已つて、宮殿を掃拭し、妙座を安施して、仙人を引き入る。仙人既に至り、呪[五七]をもつて王に願つて言はく、「吉祥尊貴、願はくば壽命を増し、法を以て王と爲りたまへ」と。王是の時に於て、種種の香氣を以て、仙人を供養し、其を延いて座に就かしむ。仙人坐し已る。王言はく、「大仙、恒に頂禮せんと思ひて、未だ所願を果さざりき。不審なり。今何に從りてか至れる。」仙言はく、「大王、聖子有りと聞く。我之に見えんと欲するが故に、此に來れるのみ。」王言ふ、「我が子適ゝ睡る。請ふ待つこと須臾せよ。」仙言ふ、「是の如き正士は、自性覺悟して、本眠睡無し」と。比丘當に知るべし。菩薩是の時仙人を念ずるが故に、睡より寤む。王自ら抱持して、仙人に授與す。仙人跪き捧げて、周遍觀察す。菩薩の身を見るに、相好を具足せること、梵王、釋提桓因、護世四王に超過す。光明の照曜は、百千の日に踰えたり。既に是を見已つて、卽ち起つて合掌し、恭敬頂禮し、種種に稱揚して、「未曾有なり、斯の大丈夫世に出現したまへり」と歎ず。右遶三匝し、菩薩を捧持して是の思惟を作さく、「今當に佛有りて世に出興したまふべし。自ら恨む、衰老して如來に値はず。常に長夜に處して恒に正法に迷はんを」と。是に於て悲啼懊惱し、歔欷哽咽す。時に輸檀王、阿斯陀仙の是の如く哀感するを見、自ら勝ふる能はず。王及び姨母、一切の眷屬、皆悉く啼泣す。仙人に白して言はく、「我子初め生れし時、已に相師を召して善否を占問せしめぬ。皆大に歡喜して、以て奇特と爲せり。今は大仙、悲涙すること、是の如し。我等眷屬、疑心無きに非ず、吉凶の事、願はくば我が爲に說きたまへ」と。時に阿斯陀仙、涙を抆[五八]ひて言はく、「惟願はくば大王、憂慮を懷きたまふこと勿かれ。我が今哀歎するは、異情有ること無し。年老ひて死の時將に至らんとす。正法を聞かず、佛の興りたまふを覩ざるを自ら傷むなり。大王、當に知るべし、無量の衆生は、煩惱の火に燒害せらる。佛當に能く甘露の法雨を灑ぎ、爲に之を滅除したまふべし。無量の衆生

【五七】呪。禪定によつて秘密語を發し、不測の神驗を有するを、呪といふ。

【五八】抆。麗本には捌に作り、元明二本には抆に作る。

は、親しく則ち姨母にして、慈有り惠有り。唯此の一人のみ、能く養育するに堪ふ」と。是の諸の釋種、皆共に和合して、摩訶波闍波提を請じて、養育の主と爲す。時に輸檀王、躬ら菩薩を抱き、姨母に付し、之に告げて言はく、「善く來れり、夫人、當に其の母と爲るべし」と。摩訶波闍波提、王の勅を奉じ已つて、三十二の養育の母を命ず。八母は抱持し、八母は乳哺し、八母は洗浴し、八母は遊戲して、菩薩を養育す。譬へば白月の、初一日より十五日に至るまで、清淨圓滿なるが如し。亦〔五一〕尼拘陀樹を、彼の膏腴沃壤の地に植うれば、漸漸に増長するが如し。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に輸檀王、又釋種と共に集り議論す。「我が此の太子は、轉輪聖王と作ると爲んや。當に出家して佛道を成ずべしと爲んや」と。時に〔五二〕五通の神仙有り。〔五三〕阿斯陀と名く。外族の〔五四〕那羅童子と、雪山中に居る。菩薩の生るる時、無量の希奇の瑞有るを見、又虛空の諸天佛世に出でたまへりと讃言するを聞き、又空中に種種の香花、種種の衣服を雨らして、人天往來し、歡喜踊躍するを見て、卽ち〔五五〕天眼を以て周遍觀察す。迦毘羅城の輸檀王の太子を見るに、福德光明、世間を照曜し、三十二大人の相を成就せり。此の事を見已つて、那羅童子に告げて言はく、「汝應に當に知るべし。閻浮提內迦毘羅城の、輸檀王の太子は、福德光明、普く十方を照す。世間の中に、此を大寶と爲す。三十二相、其の身を莊嚴す。若し家に在らば、當に轉輪聖王と爲つて、四天下に王となり、〔五六〕七寶を成就して、千子を具足し、大地を統領して、海の邊際を盡くし、法を以て物を御し、刀兵を假らずして、自然に降伏すべし。若し家を出でなば、當に成佛を得べし。他に由つて悟らず、天人の師と爲り、名稱普く聞えて、一切を利益せん。我今汝と與に當に往きて瞻禮すべし」と。時に阿斯陀仙、那羅童子と與に、猶鴈王の如く、空を翔けて至り、其の神足を攝め、歩みて王の城に入る。輸檀王宮に詣り、門下に立ちて、門を守る者に告ぐらく、「汝入りて通ずべし。阿斯陀(なるもの)有り。來りて王に造れりと」。時に門を守れる人、往きて王の所に到

〔五一〕 尼拘陀樹(Nyagrodha)。樹の名。原語は「下に生長する樹」の意味なり。卽ち榕樹(Ficus Indica)なり。
〔五二〕 五通。五神通のこと。通は自在の義にして、不思議自在の用に五種あり。所謂、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・如意通をいふ。
〔五三〕 阿斯陀(Asita)。譯、無比、端正。釋尊が淨飯王宮に生れし時之を相せし仙人。
〔五四〕 那羅童子(Naradatta)。
〔五五〕 天眼。天趣の眼なるが故に、天眼と名く。色界四大所造の淸淨の眼根を以て、麁細遠近の一切の諸色、又は衆生の未來に於ける生死の相を前知するもの。
〔五六〕 七寶。轉輪聖王の七寶なり。註は降生品第五の下にあり。

第して行く。二萬の大象、千種種に莊嚴し、次第して行く。八萬の寶車・幢幡・幰蓋・莊嚴微妙にして、翊從して行く。四萬の歩兵、悉く甲冑を被、皆儀仗を操り、陪列して行く。又、色界尊勝の諸天有り。拘胝百千那由他の寶幢幡蓋を執持し、虚空中に於て供養して行く。又欲界の諸天有り。拘胝百千那由他の寶幢幡蓋を執持し、虚空中に於て供養して行く。又欲界の諸天有り。種種の天の諸の寶具を以て、菩薩の車を莊嚴す。又二萬の諸天の婇女有り、菩薩の御と爲る。是の時、人天の婇女、羅列して行くに、天も嫌ふ所無く、人も羨む所無し。此れ菩薩の威神力に由るが故なり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『是の時、迦毘羅城の五百の釋種、各ゝ宮殿を造り、合掌恭敬し、稽首して輸檀王に請うて言はく、「善い哉。善い哉。一切利を成す。願はくば天中の天、我が宮殿に幸したまへ。願はくば最上の導師、我が宮殿に幸したまへ。願はくば歡喜悅樂者、我が宮殿に幸したまへ。願はくば好名稱、我が宮殿に幸したまへ。願はくば普遍眼、我が宮殿に幸したまへ。願はくば無等等、我が宮殿に幸したまへ。願はくば功德光明具相莊嚴者、我が宮殿に幸したまへ」と。是に由つて讃歎して利を成する因緣の故に、菩薩を名けて薩婆悉達多と爲す。

是に於て輸檀王、諸釋の意を愍み、菩薩を將ゐて諸釋の宮に入る。四月を經て、方に周遍することを得たり。然る後、乃ち菩薩を將ゐて自宮に歸る。自宮の中に於て一大殿有り。[四九]寶莊嚴と名く。菩薩彼の殿に居し已る。時に輸檀王、諸の親族の長德耆年を召す。凡そ國姻に預るもの、皆悉く來集す。之に告げて言はく、「我が子嬰孩にして、早く其の母を喪へり。乳哺の寄、今當に誰にか付すべき。誰か能く影護して、存活することを得せ令めん。誰か能く慈心もつて我が爲に瞻視せん。誰か能く養育して漸く長大なら令めん。誰か能く憐撫して己が子を愛するが如くせん」と。時に五百の釋氏の婦有り、前みて王に白して言はく、「我能く王の太子を養育せん」と。諸釋耆舊咸く是の言を作さく「汝等年少うして色盛んに心擧る。時に依つて太子を養育するに堪へず。[五〇]摩訶波闍波提

【四九】寶莊嚴(Nānāratnavyūha)。

【五〇】摩訶波闍波提(Mahāprajāpatī)。譯、大愛道、大生主。佛の姨母なり。後、出家して比丘尼となる。

行を習ひ、魔怨を降伏し已りて、能く清淨の妙願を成就し、大智幢と名けて、三千大千世界の中に於て、大導師と爲りまさん。天人は供養して福德を積集し、意樂を增長して、生老病死を遠離して、能く邊際を盡くさん。能く[四七]甘蔗上族の中に生まれ、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得て、世間を覺悟せん。我、汝等と共に彼に往きて供養恭敬し、尊重讚歎すべし。及び諸の餘の天子の憍慢掉擧を斷除せんが爲の故なり。彼の諸天をして長夜の中に於て利益を獲せ令めんが故なり。安樂を得んが故なり。菩提を證せんが故なり。又輸檀王に見え、吉祥を讚歎し、種族を慶賀して、菩薩の定んで當に成佛したまふべきを宣說せんと欲す」と。

爾の時、摩醯首羅天子、十二百千の天衆のために圍遶せられ、光明赫奕として迦毘羅城を照す。輸檀王宮に詣り、菩薩を頂禮して、遶ること百千匝す。恭敬捧持し、輸檀王を慶賀して言はく、「大王、應に大に歡喜したまふべし。何を以ての故に。王の太子の相好莊嚴は、一切世間の天人の中に於て、色相、光明、道德、名稱、悉く皆殊勝なり。大王、是の如きの菩薩は、決定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべし」と。是の如く、諸の比丘よ、摩醯首羅は、淨居天子と與に、大供養を設け、菩薩の定んで作佛し得んことを宣說し、本處に還歸せり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『菩薩初め生れて七日を滿じ已り、摩耶聖后、卽便ち命終つて[四八]三十三天に生まる。七日を過ぎ已つて、菩薩は迦毘羅城に還る。所有儀式、莊嚴殊勝にして、聖后の龍毘尼園に往きしに倍過すること百千拘胝なり。五百千の天女有りて、皆寶缾を捧げ、盛るに香水を以てす。五百千の婇女、孔雀の羽扇を持ちて、次第して行く。五百千の婇女、香水を地に灑ぎ、前に導きて行く。五百千の天女、前に於て箒を執り、地を掃つて行く。五百千の婇女、種種の瓔珞を以て、其の身を莊嚴し、次第して行く。五百千の天女、寶花鬘を執り、次第して行く。五百千の婇女、衆の寶具を持ちて、次第して行く。五百千の婆羅門、諸の寶鈴を執り、吉祥音を詠じて、次

【四七】甘蔗上族。釋尊の五姓の一。釋種は甘蔗王(Ikṣvāku)の苗裔なりといふ。

【四八】三十三天。忉利天(Trāyastriṃśa)の譯、三十三天。欲界の第二天にて、須彌山の頂上にあり。中央を帝釋天として、四方に各八天あれば、合せて三十三天なり。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩生れ已つて、聖母の右脇平復して故の如し。一井の中に於て、三種の泉を出して、菩薩の母を浴す。又池の中に於て、妙なる香油を出し、聖后身に塗る。五百千の天の諸の綵女有り。各々寶餅を執り好き香油を持ちて、聖后の所に至り、慰問して言ふ。「安隱に子を生みたまへり。願はくは上損無からんことを」と。復、五百千の天女有り。各各上妙の天衣を執持し、菩薩を供養せんが爲の故に、聖后に問うて言はく、「安隱に子を生みたまへり。願はくば上損無からんことを」と。復五百千の天の諸の綵女有り。各各寶莊嚴の具を執持して、菩薩を供養せんが爲の故に、聖后に問うて言はく、「安隱に子を生みたまへり。願はくば上損無からんことを」と。又、五百千の天の諸の綵女有り。各各上妙の音樂を執持し、鼓吹絃歌して、菩薩を供養せんが爲の故に、聖后に問うて言はく、「安隱に子を生みたまへり。願はくば上損無からんことを」と。此閻浮提の一切の外道、[四五]五通神の神仙、空に乘じて輸檀王の所に至り、王に白して言はく、「王、福徳の子を生みたまふ。吉祥無量にして、種族增盛ならん」と。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩生まれ已つて、龍毘尼園に於て、七日七夜、人天、種種微妙の音樂を擊奏して、以て供養し尊重し讃歎す。復、種種微妙の飲食を以て、一切に施設す。釋種の親族、皆悉く集會し、讃じて吉祥なりと言ふ。悉く惠施を行じ、諸の功徳を作す。三萬二千の名聞勝智ある諸の婆羅門を供養し、其の所須に隨つて皆滿足せ令む。梵王帝釋、化して端正なる[四六]摩那婆身と作り、衆會の中に於て、第一の座に坐し、而も吉祥微妙の讃歎を演ぶ。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩生れ已るや、摩醯首羅、淨居天子に告げて言はく、「菩薩は已に百千阿僧祇拘胝那由他劫に於て、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・方便・多聞を修習し、大慈・大悲・大喜・大捨を成就したまへり。心に常に一切を利益せんと希求し、已に過去の諸佛に於て深く、善根を種ゑ、彼よりして生ずる百の福相を以て、自ら嚴飾したまへり。勇猛決定して、諸の善

siddha)。譯、一切義成就、一切事成。

【四五】五神通。一に天眼通、二に天耳通、三に他身通、四に宿命通、五に如意通（又神境通とも云ふ）の五種不思議自在の用を云ふ。序品第一の下の六通の註を見よ。

【四六】摩那婆（Mānavaka）。譯、儒童、年少人、長者。

界、一切皆震動す。諸天白蓋を持ち、幷に素の瓔紼を執る。遍く虚空を覆ふに、皆寶莊嚴を以てし、種種の供具を持ちて、人師子を供養す。輸檀王に報ずる有り。「王、衆相の子を生みたまへり。王族を增長せん。王の種姓より生じたまふ。當に轉輪王と作つて、四天下を統領したまふべし。應に知るべし。釋種の中、時に五百の子を生む。一切皆勇健にして、力は[三二]那羅延の如し」と。復王に報じて言ふあり。「婢僕各〻八百あり、馬は二萬の駒を生み、牛は六萬の犢を生めり。象の子は二萬有り。四方の諸の國王、同時に皆慶賀す。其數亦二萬なり。諸王咸く欵附し、稽首して白して言さく、善い哉、最勝王、我願はくば僮僕と爲らんと。象王金網もつて飾り、歡躍して王宮に至る。牛に種種の色有り。端正甚だ愛すべし。駿馬[三三]珂雪の如し。騣尾皆金色なり。大王族を增顯す。王應に自ら往きて觀たまふべし」と。所有衆吉祥は、皆菩薩の力に因る。天人功德を見て、咸く歡喜心を生じ。發願して菩提を求む。速かに無上果に登らん』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『輸檀王、倍〻復增長して法行を行じ、來り求むる者を見れば一切施與す。諸の族姓の中に、同じく是の時に於て、二萬の女を生む。諸の女の中、[三四]耶輸陀羅を上首と爲す。又諸の僕使及び[三五]青衣等、生む所の男女、數各〻八百あり。諸の男の中に於て[三六]車匿を最と爲す。駿馬駒を生じ、其の數二萬あり。諸の馬の中に於て、[三七]乾陟を上と爲す。白象の子を生む、數亦二萬あり。四百拘胝の類の[三八]樹の中、[三九]菩提樹の[四〇]牙、是の時初めて生ず、[四一]阿說他と名く。[四二]四洲中に於て、[四三]栴檀の林を生ず。迦毘羅城の四邊に於て、自然に五百の園苑を出現し、五千の寶藏地より踊出す。上の所說の如き一切の事物、所司部錄して、菩薩に供へんと擬す。是の時輸檀王、諸の眷屬と聚り會し、是の念言を作さく「我が子生れ已り、一切の事物皆悉く增長成就す。我當に子に名を[四四]薩婆悉達多と與ふべし」と。卽ち種種の衣服飲食を以て、菩薩の此の名を慶賀す。』

【三二】那羅延(Nārāyaṇa)。天上の力士の名、或は梵天王の異名なり。
【三三】珂雪。雪の如き白き貝。以て物の鮮白に譬ふ。
【三四】耶輸陀羅(Yaśodharā)。譯、持稱。後に悉達太子の夫人、羅睺羅の母。
【三五】青衣。高家に事ふる婦人。
【三六】車匿(Chandaka)。譯、樂欲。佛出城の時の馭者なり。後出家して比丘となる。
【三七】乾陟(Kanthaka)。悉達太子、王宮を出でしとき乘りし馬。
【三八】樹。麗本には洲に作り、元明二本は樹に作る。
【三九】菩提樹(Bodhidruma又Bodhivṛkṣa)。釋尊此樹下にて成道したまひし故、菩提樹と名く。此の樹の本名につきて、西域記は畢鉢羅樹(Pippala)といふ。
【四〇】牙。元明二本は芽に作る。
【四一】阿說他(Aśvattha)。木の名。菩提樹子なり。
【四二】四洲。須彌山の四方の鹹海に住する四大洲なり。南贍部洲、東勝身洲、西牛貨洲、北倶盧洲の四を云ふ。
【四三】栴檀、具名栴檀娜(Candana)、譯、施樂。香木の名。
【四四】薩婆悉達多(Sarvārthasi-

譬へば人有り、諸の親友多し。唯一子を生みて、心に甚だ憐念す。其の人久しからずして、病をもつて命終らんと欲し、其の所親を喚びて、是の愛子を付するに、其の友、付を受けて、念ずること己が子の如くなるが如し。佛も亦是の如し。未來の諸佛は、皆是れ親友なり。是の衆生を以て、未來の佛に付す。阿難、我今汝を開悟す。汝應に此に於て深く淨信を生じ、當に勤めて修習すべし。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩生ぜし時、無量百千拘胝那由他の天の諸の婇女、天の妙花・塗香・末香・花鬘・衣服、衆の莊嚴の具を以て、聖后の上に散じて、雲の如くに下る。』爾の時世尊、是の偈を說きて言はく、

『將に離垢光を生まんとす。　天女六萬有り。　咸く妙なる歌頌を出して、菩薩の母を讃歎す。　皆聖后の前に於て、歡喜して是の言を作さく「願はくば憂惱を懷きたまふこと勿れ。我等供養するに堪へん。　尊生れて三界に出でたまふ。　無上の大醫王なり。　草木の花葉敷き、人天盡く恭敬す。　大地六種に動き、名聞十方に遍ねし。　是の如き最勝人、聖后、今彼を生みたまへり。」　虛空の諸の樂器、鼓たざれども自ら鳴る。　百千の淨居天、歸命して歡喜を生ず。　今や聖人出でて、世の爲に津梁と作りたまへり。　四王、釋梵等、及び餘の諸の天衆、躬を曲げて盡く圍遶し、咸く歡喜心を生ず。「彼の人中の師子、當に母の右脇より出でたまふべし。　光明極めて清淨なり。　暉耀金山の如くなり。」　釋梵手に承け捧げ、百千界を震動す。　三惡趣の衆生、苦を離れて皆安樂なり。　天衣及天花、虛空に遍滿す。　諸佛精進の力、此地を金剛と爲したまふ。　導師足を下す所、瑞蓮步に隨つて起り、周行すること七步なる時、妙なる梵音聲を演ぶ。「我大醫王と爲つて、能く生死の病を除かん。　我世間中に於て、最尊最勝と爲らん」と。　梵釋諸天等、虛空中に在りて、手を以て香水を捧げ、菩薩に灌灑す。　龍王二水を下し、　冷煖極めて調和す。　諸天香水を以て、菩薩を洗浴す。　三千大千

歸依を知りて、勝妙の樂を獲べし。是の如き等の人は、甚だ希有なりと爲す。世間の無上福田と作るに堪へたり。何を以ての故に。諸佛の法は、甚深にして信じ難きに、而も能く信ずるが故なり。何を以ての故に。諸佛如來、曾つて彼の人のために、多生中に於て、善知識と爲りたまへばなり。阿難、若し衆生有つて、佛世尊に於て、未だ見たてまつることを得ずと雖も、但、名字を聞きて、即ち信喜を生ぜん。或は復人有つて、佛の名を聞かず、如來を見たてまつることを得て、便ち信喜を生ぜん。或は復人有つて、見聞したてまつることを得と雖も、信喜を生ぜざらん。或は復人有つて、若は聞き若は見たてまつつて、皆信喜を生ぜん。阿難、信喜を生ぜざるを除きて、當に知るべし。是の人は多生中に於て、皆如來の善知識と爲りたまへるを蒙れるなり。其の人の功德、如來と等しく、即ち如來の爲に、之を成就度脫して攝受せらる。阿難、我昔、菩薩道を修せし時、諸の衆生有り、來つて我が所に至れり。我皆攝受して、其に無畏を施しぬ。汝等今應に淨信を生じて、精勤修習すべし。汝が應に作すべき所は、悉く已に開顯せり。亦汝等の爲に憍慢の箭を拔けり。阿難、譬へば人有つて久しく親友に別れ、百由旬を過ぎ、遠きを冒して之を尋ね、與に相見ゆることを得、暫く離念を解きて、尙歡喜を生ずるが如し。何に況んや曾つて佛に値ふことを得て、諸の善根を種ゑ、今復佛を覩たてまつつて、親友と爲ることを得て、喜ばざらんや。阿難當に知るべし。未來の諸佛、皆是の念を作さん。「此の諸人等、已に過去の如來の善知識と爲りたまふことを得て、今復我に値へり。我是の人と亦親友と爲らん」と。心に歡喜を生じたまふこと、譬へば人有つて親友を見る時、心に歡喜を生じ、友の友を見るも、亦歡喜を生ずるが如し。阿難、若し衆生有つて、此の經典に於て少分だも信を生ぜば、我是の人を以て未來の佛に付せん。彼の佛も、亦當に是の如きの念を作したまふべし。「此等の衆生は、是れ我が親友なり。其の所願の如き、當に滿足せしむべし」と。

く是の念を作さん。「我既に天に非ず。何ぞ能く佛道を修習するに堪任せん」と。便ち退屈を生ぜん。是の義に由るが故に、但、人間に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまふ。然るに彼の愚癡法賊の輩は、菩薩の不思議の事に於て、了知すること能はず。横に誹謗を生じ、妄りに憶度を爲す。阿難、愚癡の人は、尙ほ佛にすら無量の德有ることを信ぜず。何に況んや能く菩薩の神通を信ぜんや。是の如き比丘は、利養及以名聞に耽著し、罪垢に沈溺す」と。阿難、佛に白して言さく、『世尊、當來の世に、若し是の如き愚癡下劣の人有つて、此の經を誹謗せば、幾所の罪を得、當に何の處にか生ずべき。』佛、阿難に告げたまはく、『若し未來世に、是の如き等の諸の惡比丘有つて、此の經を誹謗し、衆罪を積集せば、沙門の法を離れん。阿難、譬へば人有つて佛菩提を滅し、十方三世の諸佛を毀呰する如き、其の獲る所の罪、寧ろ多しと爲んや不や。』阿難言さく、『甚だ多し、世尊。』佛、阿難に告げたまはく、『若し衆生有つて、斯の如きの大乘經典を誹謗せば、其の獲る所の罪、此の人と等し』と。爾の時阿難、是の語を聞き已つて、身毛爲に竪ち、是の如きの言を唱ふ。[二八]『南無佛陀、南無佛陀、我彼の人の、是の如き惡を行ずるを聞き、身心迷悶す』と。佛、阿難に告げたまはく、『若し衆生有つて、佛菩提を滅せば、其の人、此の惡行の因に由るが故に、當に[二九]阿鼻大地獄中に墮つべし。阿難、未來世に於て、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷有つて、斯の如き大乘經典を誹謗せば、其の人命終つて、定んで阿鼻大地獄中に墮ちん。阿難、汝、如來の功德に於て、應に限量すべからず。所以は何ん。如來の功德は、甚深にして測る可きこと難きが故なり。阿難、若し復人有つて、此の經典を聞き、信受愛樂して歡喜心を生ぜば、是の如き等の人は、即ち淨命を得、大利益を獲て、其の人、一生[三〇]唐捐ならずと爲す。已に善行を修し、已に眞實を得て、三惡道を離れて、當に[三一]佛子と成るべし。已に深信を得て、供養を受くるに堪へ、諸の聖賢に於て、心に淸淨を生ぜん。亦、當に一切の魔網を決除して、能く生死の曠野を出で、憂惱の箭を拔き、善く

【二八】 南無(Namas)。歸命と譯す。宗教的渇仰の情操を以て、超人格に對する時の語なり。

【二九】 阿鼻大地獄。阿鼻(Avīci)譯、無間。無間地獄は、地下の最底に在り。

【三〇】 唐捐。むなしく、あだなること。

【三一】 佛子。菩薩の通名。佛の聖教によつて、聖道を生ずればなり。

は、相害する心無く、餓鬼の衆生は、皆飽滿を得たり。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩は、阿僧祇百千拘胝那由他劫に於て、諸の善行を修せる精進力の故に、初生の時、卽ち能く十方に各ゝ行くこと七步なり。一切諸佛如來の威加はりて、此地は化して金剛と爲つて、菩薩の遊踐するに、陷裂無きを得。是の時、世界の中間幽冥の處、悉く皆大に明かに、其の中の衆生、各ゝ相見ることを得。又、此の時に於て、諸天の音樂微妙の聲を出し、衆の天花・末香・熏香を雨らし、花鬘珍寶、諸の莊嚴の具、上妙の衣服、雲の如くに下る。一切の衆生、皆上妙の安隱快樂を得たり。菩薩の世に出現する、最尊最勝にして、所有の功德、不思議に入る。若し廣く說かんと欲せば、劫を窮むるも盡きじ』と。爾の時阿難、座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ[二六]、右の膝を地に著け、合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、如來の菩薩爲りし時だも、尙能く是の如き勝れたる希有の事を成就したまふ。何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得たまふ(時)をや』と。

佛、阿難に告げたまはく、『未來世中に諸の比丘有らん。身戒心慧を修習すること能はず。愚癡無智にして、憍慢貢高なり。掉擧[二七]心亂れて、法律に遵はず。貪求する所多く、正法を信ぜず。沙門の垢を具し、沙門に相似す。是の如きの比丘、若し菩薩の清淨に胎に入るを聞くも、信受する能はず。乃ち復共に聚りて橫に誹謗を生じ、是の如きの言を作さん。『菩薩の胎に處して、母の右脇に居する、彼の膿血の汚す所と爲りたまはずと雖も、何ぞ能く、此の大功德有らんや』と。是の如きの愚人は、既に菩薩の積集せる功德を知ること能はず。亦、菩薩の示現して胎に入り、是の如き殊勝清淨の無量の功德有り、衆生を哀愍して世に出現することを知ること能はず。阿難、諸佛如來の世に出現したまふや、天上に於て正覺を成じ、妙法輪を轉じたまはず。但、人間に於て成佛を示現したまふ。何を以ての故に。若し天上に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜば、人中の衆生、咸

【二六】偏袒右肩。袈裟を掛くるに、偏に右肩を袒ぐなり。是れ比丘が尊者に恭敬を表する相なり。

【二七】掉擧。心を高擧して、安靜せしめざる煩惱なり。

又、北方に於て行くこと七歩にして、是の如き言を作さく、「我當に一切の衆生の中に於て、無上士と爲るべし。」

又、下方に於て行くこと七歩にして、是の如き言を作さく、「我當に一切の魔軍を降伏し、又、地獄の諸の猛火等の所有苦具を滅して、大法雲を施し、大法雨を雨すべし。當に衆生をして盡く安樂を受け令むべし。」

又、上方に於て行くこと七歩にして、是の如き言を作さく、「我當に一切衆生の瞻仰する所と爲るべし」と。菩薩是の語を說きし時、其の聲普く一切の三千大千世界に聞ゆ。比丘、當に知るべし。菩薩は、多生中に於て善根を積集し、最後生に於て阿耨多羅三藐三菩提を得。法爾として是の如く神通變化あり。

比丘、當に知るべし。是の時、一切の衆生、歡喜踊躍す。大地震動するも、諸の衆生、恐怖有ること無し。三千大千世界の所有非時の藥木、皆悉く榮茂し、虛空の中に於て、妙なる音聲を出す。微細の雨を降し、及び種種の天の諸の花香を雨らす。眞珠瓔珞、上妙の衣服、繽紛として徐に墜つ。又、和暢微妙の香風を扇ぎ、能く清淨柔軟の樂觸を生ず。雲無く霧無く煙無く塵及以暗冥無し。虛空中に於て清徹和雅の梵音あつて、菩薩の諸の功德法を稱歎するを聞く。爾の時菩薩、大光明を放ち、無量百千の種種の異色、三千大千世界に遍滿す。一切の衆生、斯の光に遇ふ者、身心安隱にして、快樂無極なり。一切の日月、諸大梵王、帝釋、護世、及び餘の天人の所有光明、皆悉く現ぜず。

是の時、一切の衆生、貪恚癡、憂悲驚恐を遠ざかり、亦不善、諸惡の罪障を離る。所有病苦の衆生は、皆痊除することを得、飢渴の衆生は、皆飽滿することを得。顚狂醉亂は、皆惺悟を得、諸根缺減は、皆圓滿を得。貧者は財を得、繫者は解脫し、地獄の衆生は、皆休息を蒙り、畜生の衆生

を禮す。
爾の時聖后、身より光明を放ち、空中の電の如し。仰いで樹を觀、卽ち右の手を以て、樹の東の枝を攀ち[二三]頻申欠呿して、端嚴として立つ。是の時、欲界の六萬百千の諸天の婇女、聖后の所に至りて、承事供養す。比丘、當に知るべし。菩薩、胎に住して、上の如き種種の功德を成就し、神通變現す。十月を滿足して、母の右脇より、安祥として生れ、正念正知にして染著無し。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『是の時、帝釋及び娑婆世界主梵天王、恭敬尊重し、躬を曲げて前み、一心正念に、卽ち兩手を以て、[二四]憍奢耶衣を覆ひ、菩薩を承け捧げて、其の事已に畢る。卽ち菩薩が胎に處するの時居する所の寶殿を將つて、梵宮に還る。

爾の時菩薩、既に誕生し已つて、四方を觀察す。猶、師子及び大丈夫の如く、安詳として瞻顧す。比丘。當に知るべし。菩薩は、多生中に於て善根を積集し、是の時、卽ち清淨天眼を得て、一切の三千大千世界の國土城邑、及び諸の衆生の所有心行を觀見し、皆悉く了知す。是の如く知り已つて、復、是の諸の衆生の、所有の戒定智慧、及び諸の善根の、我と等しきや不やを觀察して、乃ち十方三千大千世界に、一衆生として我と等しき者無きを見る。

爾の時菩薩、善く自ら思惟し稱量し正念す。扶持を假らずして、卽便ち自ら能く東に行くこと七步、足を下すの所處、皆蓮華を生ず。菩薩是の時、怖畏有ること無く、亦謇訥無くして、是の如き言を作さく、「我は一切の善法を得たり。當に衆生の爲に之を說くべし。」

又、南方に於て行くこと七步にして、是の如き言を作さく、「我天人に於て、應に供養を受くべし。」

又、西方に於て行くこと七步にして、是の如き言を作さく、[二五]「我は世間に於て最尊最勝なり。此れ卽ち我が最後邊の身なり。生老病死を盡さん。」

【二三】頻申――三本に嚬呻に作る。Vijṛmbhita の音譯。あくびすること。

【二四】憍奢耶衣(Kauśeya)。絹衣の名。野蠶の繭より取りたる絲にて作りたる衣。梵本には Kāśikā とす。

【二五】我於世間、最尊最勝――これ普通にいふ誕生偈、天上天下唯我獨尊に相當す。最初の佛傳は、たゞ七步をのみ說くも、佛傳の發達は本經の如く十方各七步たらしめたり。こゝには六方のみを擧ぐるも、後に十方とあり。而して誕生偈は諸種の經中、一として同一のものなしといふも可なり。中に於て、天上天下唯我獨尊の二句は、大唐西域記と、有部毘奈耶雜事とに見ゆるのみ。

し、念言すらく、聖后懷妊する所、必定して應に是れ天中の天なるべし。既にして護世四天王、帝釋、梵王諸の天衆の爲に・廣く無邊の大供養を設け、此れに由りて定んで當に成佛するを得べし。三界の諸の衆生の、斯の如き供養を受くるに堪ふる者有ること無し。設令釋梵及び諸の龍、四護世等、斯の供を受くるも、任に堪へざるが故に當に首碎くべし。或は斯の供に因つて便ち命終らん。唯最勝の天中天のみありて、人天の妙供養を受くるに堪へんと。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『時に八萬四千の象兵・馬兵・車兵・歩兵有り。皆悉く端正勇健にして敵無し。被るに甲冑を以てし、種種に莊嚴す。器仗を執持して聖后を護衞す。六萬の釋種の婇女、翊從圍遶す。王の眷屬の若は長、若は幼、恭敬衞護す。又六萬の王の婇女有り。伎樂を作し倡へて、種種に歌舞す。又、八萬四千の諸天の童女、八萬四千の[一七]龍女、八萬四千の[一八]乾闥婆女、八萬四千の[一九]緊那羅女、八萬四千の[二〇]阿修羅女有り。是の如き等、皆衆寶を以て自ら莊嚴し。衆の伎樂を作して歌舞讃詠す。佛の母に翊從して、龍毘尼園に往く。好香の水を以て遍く其の地に灑ぎ、散ずるに天花を以てす。園中の草木、若は時、非時に、枝葉花果悉く皆榮熟す。莊嚴殊勝なること、猶帝釋の歡喜園の如し。爾の時聖后、既に園に到り已つて、遊歷して詳に觀じ[二一]波叉寶樹に至る。其の樹の枝葉、蓊鬱として鮮に潤ふ。天花・人花・周匝して開敷す。微風吹動して、香氣芬馥たり。又、雜彩の摩尼珠寶を以て、之を嚴飾す。樹下、周遍して地平かなること掌の如し。出づる所の衆草、其の色青紺にして孔雀の尾の如し。能く樂觸を生ずること、[二二]迦隣陀衣の如し。過去無量の諸佛の母、亦皆來つて此寶樹の下に坐す。是の時百千の淨居天子、其の心寂靜なり。或は辮髮を垂れ或は寶冠を著く。此の樹の下に至つて、聖后を圍遶し、歡喜頂禮し、天の伎樂を奏して、之を讃歎す。卽ち菩薩の威神を以て、其の樹の枝幹、風靡して下る。是に於て、稽首して聖后の足

【一七】龍女。(Nāgakanyā)。

【一八】乾闥婆女。女の乾闥婆・(Gandharva)なり。八部衆の一にして樂神の名。緊那羅と共に帝釋に奉侍して伎樂を奏することを司る。

【一九】緊那羅女。女性の緊那羅(Kimnara)。八部衆の一。樂神の名。

【二〇】阿修羅女。女性の阿修羅(Asura)八部衆の一。常に帝釋と戰ひをなす神。

【二一】波叉寶樹。(Plakṣa)。

【二二】迦隣陀衣(Kācilindaka or-Kācilindika) 迦隣陀鳥の羽毛を以て造りたる衣。迦隣陀委しくは迦旃隣陀又は迦遮隣底迦に作る。慧琳音義四十一に、瑞鳥の名とし、身に茸毛あり、常の縟軟にあらず、績ぎて以て衣と爲す、轉輪聖王、方に此服を御すとあり。前出。

以て衆の珍饌を載せ、上に於て之を覆ふに微妙の〔一三〕帊あれ。〔一四〕又部車兵の勇健なる者に、甲を被て諸の器仗を執持せしめよ。又無量の諸の車乘に駕し、載するに珍琦なる衆の雜寶を以てせよ。又無量の諸の妙寶を以て、龍毘園を周匝し彫瑩せよ。又珠寶幷に綺繪を以て、園中の好き林樹を校飾せよ。處處皆名華を以て散じ、猶ほ帝釋の歡喜園の如くせよ。汝等種種嚴辦し訖らば、卽ち宜しく速かに疾く來りて我に報ずべしと。群臣既に王の勅を承け已つて、〔一五〕尋時に物を具して皆營辦し、福壽最勝王に奏言す。敎勅したまへる所の如き、皆已に集めたりと。王此の事を聞きて心、歡喜す。尋便ち閤に入りて內人に勅す。若し能く我に隨はんことを愛樂する者は、汝等應に當に盡く嚴飾すべし。香熏・繒綵・絃の衣服、柔軟微妙にして心を喜ば令めよ。珠珮瓔珞、自ら身を嚴り、各〻百千の衆の樂器を持て。琴瑟・簫笛・箜篌等、鼓吹して當に妙音を出さ令むべし。天人男女の若し聞く者に、皆愛樂して歡喜を生ぜ使めよ。聖后坐する所の寶車輿は、異人をして親近するを得令むること無かれ。諸の婇女等執御を爲し、一切の惡相を皆除屛せよと。〔一六〕四兵總べて王の門首に集まり、隱隱として海浪の聲を聞くが如し。聖后初め宮門を出で已れば、咸く吉祥微妙の頌を唱ふ。輦輿・王宮・自ら彫飾し、寶鈴寶鐸和音を振ふ。然る後百千の諸の天人、上に於て師子の座を安施す。車中傍らに四の寶樹を羅らね、枝葉花果皆榮茂す。復、瑞鳥有りて聲和雅に、繽紛翻舞して翔集す。幢幡蓋網天の衣服、高く聳え圍遶して遍く莊嚴す。諸天の婇女虛空に在り。歡喜心を以て讚歎す。聖后是の時寶乘に昇り、三千世界六種に動く。帝釋道路を淨除し、護世四王來りて車を御す。大梵天王前導と爲り、以て諸の惡相を屛除す。無量百千の諸の天衆、恭敬頂禮して瞻仰す。是の天衆の來りて營從するを見、父王心に大欣喜を生

【一二】羂索。わな梵語播捨（[illegible]）の譯。
【一三】帊。つゝみ覆ふ帛。
【一四】部車兵―部の字、宋元明の三本には步に作る。その方可ならん。部とする時は、車兵を從ふる事となる。
【一五】尋時。間もなき時、卽時の意。
【一六】四兵。轉輪聖王の出遊する時、隨從する四種の兵。象兵、馬兵、車兵、步兵の稱。

嚴飾して垂れ懸る。二十五には、衆寶の庫藏、忽然として自ら開く。二十六には、惡禽怪獸、皆聲を出ださず。二十七には、虛空の中に於て妙音の詞を出だし、唱へて善生善生と言ふ。二十八には、一切人間の作す所の事業、皆悉く停息す。二十九には、高下の地、悉く皆平正なり。三十には、所有街衢巷陌、遊從の道路、自然に柔軟にして、花を散じて嚴飾す。三十一には、一切の孕婦、產出に難無くして、皆安隱なることを獲。三十二には、[九]娑羅樹神、半身を出現して、合掌恭敬す。先づ此の如き三十二種の瑞相を現ず。

爾の時、摩耶聖后、菩薩の威神力を以ての故に、卽ち菩薩の將に誕生せんと欲するを知り、夜の初分に於て、輸檀王に詣り、偈を說いて言はく、

大王、我が今請ふ所を聽したまへ。久しく彼の[一〇]龍毘園に詣らんと思へり。我に於て嫌妬の心を懷かされ、願はくば速かに往きて暫く遊觀することを得ん。大王は精勤して法を思惟し、諸の苦行を修して疲倦多し。自ら我、此の清淨人を懷き、宮中に處在して亦已に久し。樹木蓊鬱として、初めて榮茂す。今時に正に園林を翫ぶ可し。節物方に春にして甚だ佳美なり。諸の婇女と相娛樂せん。衆鳥和鳴して歌頌に似、飛花處處に皆盈滿す。惟、願はくば大王速かに勅を垂れたまへ。時に及んで彼の好園苑に遊ばん。王、聖后の斯の語を聞き已つて、欣然として卽ち諸の臣佐に勅すらく、速かに諸妙好の諸の輦輿を嚴り、龍毘尼園も亦莊嚴せよ。又宜しく二萬の像に鞴被すべし。色は白雪に類し、形は山に似たるに、摩尼珠寶其の體を耀かし、眞金の線網其の上に彌ねくせよ。象王皆悉く六牙備はる。兩邊交へ垂るるに珍鐸を以てせよ。又、二萬の駿捷の馬を取れ。[一一]朱騌白質にして銀雪の如くなるに、勒するに金鞍寶鈴の網を以てせよ。其の馬迅く疾くして、風の如くに馳けん。二萬の勝兵皆勇健にして、能く怨敵を伏して營衞に堪ふるが、各々甲冑及び干戈を擐、并びに鬪輪を

【九】娑羅樹神。娑羅樹の神。娑羅(Sāla)は、堅固と譯す。

【一〇】龍毘園。(Lumbini)。又嵐毗尼などとも云ふ。園或は可愛と譯す。花園の名にして、迦毘羅城の東に在り。

【一一】騌は騣に同じ、騣はあしげなり。元明二本には、鬉に作る。鬉は鬣に同じく、たてがみなり。たてがみの方可ならん。

巻の第三

誕生品第七[一]

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩胎に處すること十月を滿足し、將に生まれんと欲する時、輪檀王宮に、先に、三十二種の瑞相を現ず。一には、一切の大樹、花を含んで將に發かんとす。二には、諸の池沼の中の[二]優鉢羅花・[三]拘物頭華・[四]波頭摩華・[五]芬陀利華・皆悉く蘂を含む。三には、諸の小華、叢吐して未だ舒べず。四には、自然にして八行の寶樹有り。五には、二萬の寶藏地より踊出す。六には、王宮の内に於て自ら寶牙を生ず。七には、地中に復、無量の寶瓶を出だし中に香油を滿たす。八には、[六]雪山の中より無量の師子の子來りて、迦毘羅城を遶り、歡躍震吼して各〻城門を守る。九には、彼の諸の師子、亦一切の人民を嬈害せず。十には、五百の白象の子雪山より來りて、王の殿前に至る。十一には、無量の天の諸の嬰孩有りて、忽然として現じ、婇女懷抱し、婉轉遊戲す。十二には、諸の龍女有りて、半身を出現し、手に微妙の諸の寶瓔珞を持ち、空に於て住す。十三には、十千の天女有り。各〻孔雀の羽扇を持ちて空中に現ず。十四には、十千の寶瓶有り。香水を盛滿して、泛ぶるに衆華を以てし、虛空に現じて、迦毘羅城を旋遶す。十五には、十千の天女有り。各〻寶瓶を捧げて、虛空の中に現ず。十六には、十千の天女有り。各〻幢幡寶蓋を執持して、虛空の中に現ず。十七には、無量の天の諸の婇女、天の樂器を持ち、虛空中に現じて、未だ擊奏せず。十八には、一切の香風、皆未だ飄拂せずして、靄然として住す。十九には、江河の諸の水、湛へて流れず。二十には、日月宮殿及び諸の星辰、皆運行せず。二十一には、[七]弗沙の星、將に月と合せんとす。二十二には、王宮殿堂に、自然の寶網、其の上に彌覆す。二十三には、一切の燈炬、皆悉く色無し。二十四には、一切の樓閣・殿堂・臺榭の上に、忽然として皆[八]摩尼珠寶有り。

【一】誕生品(Janma-parivarta)。
【二】優鉢羅花(Utpala)。青蓮花。
【三】拘物頭華(Kumuda)。黃蓮花。
【四】波頭摩華(Padma)。紅蓮花。
【五】芬陀利華(Puṇḍarika)。白蓮花。
【六】雪山(Himālaya)。譯、雪藏。印度の北境に聳ゆる大山ヒマラヤのこと。千古雪を頂けば、雪山といふ。
【七】弗沙(Puṣya)。星の名。鬼宿。
【八】摩尼。(Maṇi)。譯、珠、寶、如意、離垢。珠の總名。

見え、音樂鼓たざれども自ら鳴る。國土淸寧にして甚だ安隱なり。眷屬欣豫して同じく患無し。龍天斯に由つて時澤を降し、草木花果盡く敷榮す。一切の所須を惠施して、王宮に七日珍寶を雨す。是の時貧乏の者有ること無し。猶ほ帝釋の歡喜園の如し。王、法行を修して淨戒を持ち、堂殿に處すると雖も林野の如し。此に由つて聖后菩薩を懷き、每に後宮に入つて親しく慰問す。』

梵世に歸る。佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩胎に處するの時、已に能く三十六那由他の天人を化導して、三乘に任せしめたり』と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

『最上の勝人初めて胎に入るや、大地山林皆震動す。金色の淨光惡趣を銷し、一切の天人咸く喜悅す。此の大法王と成らんと欲するが爲に、胎中の寶嚴殿を示現す。導師居する所の寶殿は、〔三〕旃檀妙香をもつて極めて嚴飾す。此の香の一分の價直は、彼の三千界の珍寶に等し。下方に大蓮花を涌出す。其の花高く梵世に至る。花の中に承くる所の甘露の味、梵王持して以て菩薩に獻ず。世間一切の諸の群生、能く一滴の味をも銷する有ること無し。惟最後身の菩薩の、方に能く斯の甘露の食を致すを除く。劫を積みて集むる所の福の威力なり。奉事服する者、身心清淨なることを得。帝釋と梵王と四護世と、稽首して導師を供養す。頂禮して妙法を聞き、歡喜右遶して辭し去る。是の如く十方の菩薩衆、亦復斯に因つて法を樂しみて來り、光明衆寶の床に坐して大乘の法を聞いて歡喜を生ず。各ゝ恣に言談して爾に相顧み、無量に稱揚して、本國に還る。四方の男子及び女人、彼の鬼魅の爲に纒縛せられ、露首袒體にして心狂亂するも、若し佛の母を見れば皆除き愈ゆ。所有黃痰と癲癇と、盲聾、瘖瘂、種種の疾、佛の母手を舒べて其の頂を摩すれば、衆病時に應じて銷散することを得。或は困篤して遠方に在る有り、草を折りて籌と作して之に惠むに、籌、病者に至れば尋ち平復す。世間、衆祐を蒙らざるは無し。法の醫王の腹の中に在るに由つて、苦惱の衆生盡く安樂なり。聖后自ら菩薩の體を觀ずるに、猶ほ空中に明月を見るが如し。形相微妙にして甚だ端嚴なり。歡喜悅樂して心、安住す。復、貪瞋癡に擾さるる無し。亦愛欲嫉妬の害する無し。飢渴寒熱の爲に侵されず。身心靜然として衆惱を離る。人天上下更相

【三】旃檀(Candana)。譯、與樂。香木の名。

后も、亦見ること能はず。阿難、菩薩胎に處するの時、聖后をして身に沈重及び諸の苦逼を覺え令めず。柔軟輕安にして、怡懌歡暢なり。貪欲・瞋恚・愚癡・熱惱の患有ること無し。亦欲覺、恚覺、害覺無し。亦冷熱・飢渴・惛惑・罪垢・散亂無し。亦不可意の色及び聲・香・味・觸、一切の惡境無し。亦惡夢無し。亦女人の貪誑・諂曲・嫉妬・諸の煩惱の過無し。清淨禁戒を具足受持して、十善道を行ず。他人に於て欲心を生ぜず。亦他人の能く聖后に於て欲想を生ずる無し。迦毘羅城、及諸の聚落、幷に餘の國土に於て、所有男女、若は童男、若は童女、或は鬼神の著く所と爲れる者、菩薩の母を見れば、皆自ら痊愈す。或は衆生有り。種種の病を得――風黃痰氣・盲聾瘂痺・牙齒疼痛・瘰癧白癩・痟渴癲眩・瘻節瘡蠱・種種の諸の病――菩薩の母に、手を舒べて頂を摩せらるれば、自然に銷除す。設ひ衆生有つて是の如き病を得、親しく來つて菩薩の母を見ることを獲ずとも、聖后爾の時に草を折りて籌と爲し、以て之を賜ふるに、纔に籌を執る時に、所有病苦皆銷散することを得、平復して本の如し。聖后若し菩薩を觀ずるの時は、腹中に右脇にして住するを見る。明鏡の中に、諸の色像を覩るが如し。歡喜和悅し、身心泰然たり。阿難、菩薩胎に處するの時、諸の天、常に天樂を奏し、衆の天花を雨して、菩薩を供養す。是の時、國界寧靜にして、景候調和す。人民安樂にして、好んで恩惠を行ず。諸の釋種子、皆悉く惡を棄てて、善事を修習す。諸の節會に於て、園林に遊戲し、勝妙の樂を受けて、歡娛怡暢す。時に輸檀王、法行に隨順して、世榮を樂します。國務を捐棄して、苦行者の如し。阿難、菩薩の母胎中に處して、神力現化の成就すること是の如し。』

爾の時世尊、阿難に告げて言はく、『汝等當に佛の胎に在す時、居せし所の寶莊嚴殿を觀ずべし。』阿難言さく、『唯然なり。世尊。願はくば爲に顯示したまへ。』世尊、爾の時、卽ち阿難、釋提桓因、及び四護世、幷に餘の天人の爲に、如來が胎に處する時の寶莊の殿を顯示したまふ。皆大に歡喜し、未曾有なることを得て、淸淨心を生ず。是の現を作し已つて、大梵天王、還つて寶殿を持して

【二〇】欲覺、恚覺、害覺。合して三惡覺といひ、一切の凡夫必ず此の三惡覺を具す。欲覺は貪欲の知覺、恚覺は瞋恚の知覺、害覺は他を侵害する知覺にして惡覺の增長せしもの。

難、一切の菩薩、將に胎に入らんとする時、母の右脇に於て、先づ是の如き寶莊嚴殿有り。然る後に兜率天宮より、神を降して胎に入り、此の殿中に於て結加趺坐す。阿難、十方世界の一切の摩耶聖后、皆夢の中に於て、白象の來るを見る。釋提桓因、及び四天王、二十八夜叉大將[一九]、皆悉く隨從して之を衞護す。復四天女有り。一を、鄔佉梨と名け、二を、砵佉梨と名け、三を幢至と名け、四を、有光と名く。亦眷屬と、常に來りて衞護す。

爾の時菩薩、母胎の中に處し、身相光明あり。猶、夜暗に、山の頂上に於て大火炬を然すが如し。亦眞金の琉璃中に在るが如し。光明洞かに照して、世界に普遍す。四大天王、二十八夜叉大將、其の眷屬と、毎に晨朝に於て、恭敬供養し、皆菩薩を見て、安慰問訊するに、徐ろに右手を擧げて、座を指して坐せしめ、其が爲に法を說き、示教利喜して、未曾有なることを得しむ。若し去らんと欲する時には、菩薩徐ろに右手を擧げ、之をして去らしむ。頂禮圍遶し辭退して去る。釋提桓因、三十三天と、毎に中時に於て、恭敬供養し、法を聽かんが爲の故に、皆菩薩を見て、安慰問訊す。徐ろに右手を擧げて、座を指して坐せしめ、其が爲に法を說き、示教利喜して、未曾有なることを得しむ。若し去らんと欲する時は、菩薩徐ろに右手を擧げ、之をして去らしむ。頂禮圍遶し、辭退して去る。娑婆世界主大梵天王、毎に中時に於て、無量百千の梵衆天子と、恭敬供養し、法を聽かんが爲の故に、皆菩薩を見て、安慰問訊す。徐ろに右手を擧げ、座を指して坐せしめ、其が爲に法を說き、示教利喜して、歡喜を生じ、心をして未曾有なることを得しむ。若し去らんと欲する時は、菩薩徐ろに右手を擧げて、之をして去らしむ。頂禮圍遶し、辭退して去る。阿難、東西南北四維上下の十方に周遍せる無量百千の諸の菩薩衆、日の入る時に於て、恭敬供養し、聽法の爲の故に、此に來至す。爾の時菩薩、莊嚴師子の座を化作し、諸の菩薩を各々其の上に坐せ令む。互に相問答して、上乘を辯析す。此等の諸の來れる大菩薩衆は、惟是れ同行同乘の能く覩る所にして、摩耶聖

【一九】二十八夜叉大將(Aṣṭāviṃśatimahāyakṣasenāpatnya)。

はす。時に四天王、帝釋に問ひて言はく、『我等何の方便を作してか、能く斯の殿を覩ん。』帝釋報へて言はく、『當に如來を請じて乃ち見ることを得べきのみ』と。時に天帝釋、四天王と、稽首して佛を請ず。是の時大梵天王、先づ諸の梵と、菩薩の殿を捧げて佛の前に置く。其の殿、三重に周匝瑩飾す。皆[一四]牛頭栴檀の天香を以て成ろ所なり。其の香の一分の價は、三千大千世界に直る。光明照耀し、天の衆寶を以て之を嚴飾す。床座器物、皆菩薩に稱ふ。微妙綺麗なること、人天に無き所なり。惟菩薩の旋螺の相を除く。大梵天王の著る所の天服、菩薩の座に至れば、猶ほ水に漬けたる[一五]欽婆羅衣の如し。其の三殿内、周匝して皆淨妙の天花、有り。其の殿、堅牢にして沮壞すべからず。凡そ觸れ近づく所、皆妙樂を生ず。[一六]迦隣陀衣の如し。欲界の一切諸天の宮殿、悉く菩薩の寶殿の中に現ず。』

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩胎に入るの夜、下、水際より蓮花を涌出す。穿ちて地輪を過ぎて、上、梵世に至る。縱廣正等にして、六十八[一七]洛叉由旬なり。此の如き蓮花、能く見たる者無し。諸の如來、并びに諸の菩薩、及び大梵天王を除く。三千大千世界の中に於て、所有清淨殊勝の美味、猶ほ甘露の如きを、此の花の中に現ず。大梵天王[一八]毘瑠璃器を以て、此の淨妙甘露の味を盛つて、菩薩に奉上す。菩薩是に於て受けて之を食す。比丘、當に知るべし。世間の衆生、能く是の如き甘露の味を食するもの有ること無し。惟、十地究竟せる最後身の菩薩の、方に能く食するを除くのみ。諸の比丘よ。菩薩は何の善根を以てか、斯の味を感ぜる。昔、長夜に菩薩道を行ぜし時、能く醫藥を以て病苦を救濟し、所有欲願皆滿足せ令め、一切の恐懼に能く無畏を施す。又、上妙の花果を以て、如來及び佛の塔廟、一切聖衆、父母尊長を供養す。是の如く施し已つて、然る後自ら受けたるに由る。斯の福報を感ずるに由つて、大梵王、每に甘露の味を持つて、以て寶殿の内に奉獻す。上妙の衣服、諸の莊嚴の具、種種の器物は、菩薩の本願力の故に、隨意に能く現ず。阿

【一四】牛頭栴檀（Gośīrṣa-candana）。栴檀は香樹の名。牛頭山より出づるを以て。牛頭栴檀といふ。

【一五】欽婆羅（Kambala）。衣の名。毛綫を織りたるもの。

【一六】迦隣陀衣。迦隣陀鳥の毛を以て造りたる衣、至つて細軟なり。論出。

【一七】洛叉（Laksa）。數量の名。十萬なり。

【一八】毘瑠璃器（Vaidūrya-bhājana）。瑠璃の器なり。

『大厳三昧は、神化思ひ難し。諸天悦豫し、父王歡喜す。』

是の經を說きたまひし時、會中に諸の天子有りて、是の如き念を生ず『四天王天は此の人間を汚穢不淨(とす)と聞く。況んや此の上の三十三天、乃至、兜率の諸の大天をや。云何ぞ菩薩、世間の寶、最勝淸淨殊妙香潔にして、乃ち兜率を捨てて、人間に處在し、母胎中に於て、十月を經たまふか』と。爾の時阿難、佛の威神を承け[二]長跪合掌して、佛に白して言さく『世尊、女人の身は諸の欲惡多し。如何ぞ如來、菩薩爲りし時、乃ち兜率を捨てて母胎に處し、右脇にして住したまへるか。』佛、阿難に告げたまはく、『菩薩昔母胎に在りて、不淨の染汚する所と爲らず恒に寶殿に處して嚴淨第一なり。是の如き寶殿を、爲に見んと欲するや不や。當に汝に示すべし。』阿難佛に白して言さく『世尊、願はくば顯示を垂れたまへ。諸の見る者をして皆歡喜を生ぜしめん』と。爾の時如來、卽ち神力を以て、娑婆世界主梵天王と六十百千億の梵天とを、閻浮提に下りて佛の所に來詣せしむ。恭敬、稽首し、[三]右遶三匝して、却ぞいて一面に住す。爾の時に世尊、知つて而も故らに梵天王に問ひて言はく、『我昔菩薩爲りし時、胎に在ること十月、居りし所の寶殿、今所在と爲すや。汝持ち來るべし』と。梵天王言さく『今梵世に在り』と。時に娑婆世界主、稽首作禮して、忽然として現ぜず。刹那の頃に於て梵宮に昇り、妙梵天子に告げて言はく『汝宜しく次第に下つて三十三天に至り、高聲に唱へて言ふべし「今日梵王、如來處胎の時の所居の寶殿を將ゐて、還つて佛の所に至らんと欲す。若し見んと欲する者は、宜しく速かに來るべし」と。』爾の時梵王、卽ち菩薩の殿を持ちて、梵殿の中に置く。其の梵殿の量は、縱廣正等にして、三百由旬なり。而して八萬四千拘胝の梵天のために恭敬圍遶せられ、梵世より閻浮提に下る。是の時欲界の無量の諸天、皆悉く如來の所に雲集し、天の妙衣、種種の伎樂、花鬘妙香、天の莊嚴の具を以て供養を爲す。時に天帝釋、乃至、他化自在、永く菩薩の殿を觀ること能はず。審かに之を觀ずと雖も、亦見ること能

【二】長跪。兩膝地に據り、兩脛空に上げ、兩足の指頭地を柱へ、身を挺して立つこと。

【三】右遶三匝。尊者の傍を右に遶ること三度す。所尊を恭敬して、仰望の至誠を表するなり。

を得せ令めんか」と。時に四天王、來りて王の所に至り、是の如き言を作す、「惟願はくば大王、善く自ら安隱にして、此事を思ふこと勿れ。我、菩薩のために妙宮殿を取らん」と。時に【七】天帝釋、卽ち王の所に來つて、偈を說いて言はく、

「【八】護世宮を劣と爲す。　聖后の居に堪へず。　忉利に勝殿有り。　持ち來つて菩薩に奉げん。」

時に夜摩天子、復、王の所に來り、偈を說いて言はく、

「我に勝妙殿有り。　【九】忉利宮に超過す。　彼の夜摩天に在り。　今持つて菩薩に奉げん。』

兜率天子、復、王の所に來り、偈を說いて言はく、

「兜率の妙天宮に、　菩薩本居止したまへり。　是を最も殊勝と爲す。　還り持つて菩薩に奉げん。」

化樂天子、復、王の所に來り、偈を說いて言はく、

「我に寶宮殿有り。　心に隨つて化生する所なり。　莊嚴甚だ奇妙なり。　願はくば以て菩薩に奉げん」

他化自在天子、復、王の所に來り、偈を說いて言はく、

「我に妙宮殿有り。諸の欲天に超過す。　衆寶の莊嚴する所、　清淨にして心意を悅ばす。　光明甚だ奇耀に、周匝して香花を散ず。　願はくば以て聖后を安んじ、　持ち來つて菩薩に奉げん」と、

佛、諸の比丘に告げたまはく、『是の時欲界の諸の天子等、供養の爲の故に、各各彼の所有の宮殿を齎し來り、輸檀王宮に至る。其の王、亦菩薩の爲に、妙宮殿を造る。綺飾精麗、人間に無き所なり。爾の時菩薩、【一〇】大嚴三昧威神力を以ての故に、彼の一切の諸の宮殿の中に、悉く摩耶聖后の身を現ぜしむ。皆菩薩有り。母の右脇に於て【一一】結加趺坐す。諸の天子等、各各自ら謂へらく、菩薩の母惟我が宮に住せりと。』爾の時世尊、重ねて偈を說きて言はく、

【七】天帝釋。帝釋天ともいふ。忉利天の帝主、釋は姓なり。(Śakradevānām indra)。

【八】護世宮。護世四天王の宮殿。

【九】忉利宮。帝釋天の宮殿。

【一〇】大嚴三昧(Mahāvyūha-samādhi)。

【一一】結加趺坐。佛陀の坐法なり。趺を左右の髀上に結加して坐するをいふ。明本加字を跏に作る。

「我睡夢中に於て、象を見るに白銀の如し。光色日月に超え、身相甚だ嚴淨なり。六牙、威勢有り、壞し難きこと金剛の如し。支體甚だ堅好なり。來りて我が腹に入る。爾の後瑞相多し。願はくば王、今善く聽きたまへ。我、三千界を見るに、弘敞にして廣嚴飾あり。毎に寢寐の時に於て、諸天來りて我を讃ず。貪瞋等の煩惱、結使皆銷滅す。我が心、寂靜の樂あり、禪定の中に在るが如し。宜しく夢を占ふ人、圍陀論を明解し、善く八耀の法を閑ひ、能く吉凶を辨ずる者を喚びたまふべし。速かに彼の人を召し來りて、我が爲に斯の夢を解きたまへ。時に王此の語を聞き、卽ち夢を占ふ人を召し、而して彼の人に語つて言はく、宜しく聖后の夢を占ふべしと。聖后時に彼に、已が夢る所の因緣を告ぐ。汝旣に占を善くすと稱す。吾今汝が爲に說かん。我象を夢みたり、雪の如し。日月の光に踰えたり。威勢あり、六牙有りて、支體甚だ嚴好なり。妙色極めて光淨に、堅密なること金剛の如し。來りて我が腹の中に入りぬ。我是の如き事を夢みたりと。其の人聖后の、夢むる所の因緣を說くを聞き、皆曰ふ、利ならざるは無し。斯の夢甚だ吉なりと爲す。種族當に興盛すべし。必ず勝相の子を生みたまはん。家に在まさば輪王と作り、威力ありて所化を統べたまはん。出家したまはば、佛道を成じて、諸の世間を哀愍し、當に甘露法を灑ぎて、天人の敬ふ所と爲りたまふべし」と。

時に輸檀王、婆羅門の夢の因緣を解くを聞きて、心甚だ歡喜し、卽ち上妙の衣服、種種の美食を以て之に賜與し本處に歸らしむ。』

佛、諸の比丘に告げたまはく『時に輸檀王、四城門の四衢道中に於て、菩薩の爲の故に大施會を設く。食ふべきには食を與へ、衣るべきには衣を與へ、乃至、香花・臥具・田宅・騎乘、一切求むる所皆悉く給與す。王、時に念言すらく、「何の宮殿に於て聖后を安置し、憂無く歡樂して住すること

【六】八耀（Asta-mangala-kesi?）。八陽神呪經、八吉祥神呪經なるものあり。八方に八如來あるを說き、若、此經を持するものは、一切の災害より免るべしといふ。八耀法とは、蓋、八方の吉凶を判ずるものにて、前掲の經は、この方術を背景とするものなるべし。

具足す。其の牙は金色にして、首に紅光有り。形相諸根悉く皆圓滿す。正念に了知して、母の右脇に於て、神を降して入る。聖后是の時安隱に睡眠し、即ち夢の中に於て、斯の如き事を見る』と。爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく、

『勝人の生を託する、白象と爲る。皎潔なること雪の如く六牙を具す。鼻足殊妙にして首に紅光あり。支節相狀皆圓滿なり。身を右脇に降すこと遊戲するが如し。佛の母、斯に因つて極めて歡喜す。未だ嘗つて見ることを得ず、及び未だ聞かず。身心の安隱なること禪定の如し。』

『爾の時聖后、身心遍く喜ぶ。即ち座上に於て、衆妙寶を以て其の身を莊嚴し、無數の婇女、恭敬圍遶す。勝殿を下りて、無憂園に詣る。彼の園に到り已つて、信を遣はして輸檀王に白して言はく、「要ず相見えんと欲す。王宜しく暫らく來りたまふべし」と。王、是の信を聞きて、心甚だ歡喜し、寶座より起ちて、諸の臣佐及び諸の眷屬の與めに前後翊從せられて、無憂園に詣る。既に園門に至るに、擧體皆重し。前進すること能はず。而して偈を說いて言はく、

「憶ふに昔強敵に赴くも、身猶ほ重しと爲さざりき。今は忽ち是の如し。此の變、當に誰にか問ふべき。」

時に淨居天子、虛空中に於て、其の半身を現じて輸檀王の爲に、頌を說いて曰く、

「菩薩、大威德ありて、兜率宮を下り、託して聖后の胎に在り、王の太子と爲りたまふ。衆行皆圓滿して、人天に恭敬せられ、慈悲福慧を具し、灌頂して當に職を受けたまふべし。」

時に輸檀王、是の偈を聞き已り、合掌、稽首して、是の如き言を作さく、「我今此の希有の事を見る」と。是に於て入りて聖后を見るに、自ら憍慢を除き、前みて聖后に問ふ。「何なる所求をか欲する。惟願はくは爲に說け」と。爾の時聖后、偈を以て答へて曰く、

【五】　無憂園 (Aśokavanikā)?

慈の甲冑を被て煩惱を除き、世間を愍みたまふに由つて今現生して、第一妙喜捨を證得し、尊、梵住を獲たまへり、歸命し禮したてまつる。照すに智慧光明の炬を以てし、癡冥の諸の過失を淨除したまひ、三千大千以て主と爲す。牟尼大導師に歸命したてまつる。勝慧神足、諸の通を得、見眞實義を能く示現し、自ら既に濟ふことを得て能く物を拯ひたまふ。船師能渡者に歸命したてまづる。世法に隨順して凡に同ずることを示して、世法の染する所となりたまはず。一切衆生若し聞見すれば、不思議の勝利益を獲ん。況んや復尊妙の法を聽聞す。信樂せば當に廣大の善を生ずべし。兜率天宮は暗冥を行き、閻浮提中、日將に出でんとす。煩惱に惛睡せる諸の群生を、尊者は皆當に覺悟せしめたまふべし。迦毘羅城は益々興盛に、無量の諸の天衆に圍遶せられん。諸天寶女は天樂を奏し、王城を周遍して妙音を演べん。佛の母は妙色を以て莊嚴し、福德威容は淨業に乘る。聖子は端正甚だ奇特にして、光明遍く三千界を照したまはん。其の國の所有諸の衆生は、皆諍論と諸の煩惱とを離れて、一切慈心もつて相敬順せん。悉く菩薩の威力に由る。輸檀王種、當に興盛すべし。斯に由つて應に轉輪王を紹ぐべし。其の城の所有諸の珍藏、一切の衆寶は皆盈滿せん。[六六]夜叉・[六七]羅刹・[六八]鳩槃茶・[六九]修羅・[七〇]密跡・諸の天衆、菩薩所居の處を守護し、久しからずして皆當に解脫を證すべし。悉く以て菩提の道に迴向し、願はくば速かに尊の如く正覺を成ぜん」と。

處胎品第六[一]

佛、諸の比丘に告げたまはく、『冬節過ぎ已り、春分中の[二]毘舍佉月に於て、叢林花葉、鮮澤ありて愛すべし。寒からず熱からず。[三]氐宿合する時、三界の勝人、天下を觀察するに、白月圓淨にして、[四]弗沙星正に月と合す。菩薩是の時、兜率天宮より沒して、母胎に入り、白象の形と爲りて、六牙

【六六】夜叉(Yakṣa)。譯、能噉鬼。
【六七】羅刹(Rākṣasa)。義譯。暴惡可畏。
【六八】鳩槃茶(Kumbhāṇḍa)。譯、甕形鬼。
【六九】修羅、阿修羅(Asura)の略。譯、無端。
【七〇】密迹(Guhyaka)。密迹力士ともいひ、新譯には秘密主といふ。手に金剛の武器を持し、佛を警護する夜叉神の總名。
【一】處胎品(Garbhāvakrānti-parivarta)。
【二】毘舍佉月(Viśākhā)。毘舍佉は星の名、氐宿なり。二月に當る。
【三】氐宿(viśākhā)。東方の星。氐宿合すとは、この星と月と合するなり。
【四】弗沙星(Puṣya)。南方の星。

十八の相有り。所謂、搖動・極搖動・遍搖動・扣撃・極扣撃・遍扣撃・移轉・極移轉・遍移轉・涌覆・極涌覆・遍涌覆・出聲・極出聲・遍出聲・邊涌中沒・中涌邊沒・東涌西沒・西涌東沒・南涌北沒・北涌南沒なり。是の時、一切衆生、歡喜踊躍し、愛樂清淨・快樂無極なり。稱揚讃美して、諸の聲を聞く時、一衆生として恐畏驚悸する無し。梵釋、護世、日月の威光、皆悉く現ぜず。一切の地獄・畜生・餓鬼、及び諸の衆生、皆安隱を蒙る。一衆生として、此の時中に於て貪瞋癡等の一切煩惱の逼迫する所と爲るもの無し。互に相慈愍して、利益の心を起すこと、父の如く、母の如く兄の如く弟の如し。人天の樂器鼓たざれども自ら鳴る。無量の諸天は、是の妙樓閣を頂戴擎捧し、無量百千の天女は、前後圍遶して、天の伎樂を奏す。其の樂音中に、是の妙偈を出して、菩薩を歎じて曰く、

「尊者、長夜に修習を積みたまひ、所有淨業、皆圓滿し、眞正勝理中に住して、今天人をして供養を上ぐることを致さしめたまふ。往昔、無量拘胝劫に、能く愛する所の妻子等を施し、彼に由つて檀を行じ、勝報を獲、故に諸天の妙花香を得たまふ。自ら身肉を割きて之を秤り、慈心もつて彼の死に垂んとせし鴿を救ひたまふ。復[五八]檀を行ずるを以て勝報を獲、能く[五九]餓鬼をして充足することを得せしめたまへり。尊者は過去無邊劫に、淨戒を堅持して未だ嘗つて毀りたまはず。彼の[六〇]尸羅に由りて勝報を獲、能く惡趣をして衆患を息め令めたまへり。尊者は過去無邊劫に、菩提を求むるが故に忍辱を行じたまふ。彼の[六一]羼提に由りて勝報を獲、能く人天をして互に慈愍せ令めたまへり。尊者は過去無邊劫に[六二]精進を勝修して休み已みたまへること無し。彼の勤劬に由りて勝報を獲、身相端嚴にましますこと須彌の如し。尊者は過去無邊劫に、[六三]結使を斷ぜんが爲に諸の定を修したまふ。彼の[六四]禪那に由りて勝報を獲、能く今世をして煩惱無から令めたまへり。尊者は過去無邊劫に、智慧を修習して諸の結を斷じたまふ。彼の[六五]般若に由つて勝報を獲、能く光明をして甚だ清淨なら使めたまへり。

【五八】檀。檀那(Dāna)の略。譯、布施。六度の一。
【五九】餓鬼(Preta)。常に飢渇の苦を受くる一類の鬼。
【六〇】尸羅(Śīla)。正譯、清凉。傍譯、戒。身口意三業の罪惡、能く行人を焚燒し熱惱せしむ。戒は能く其の熱惱を消息すれば、清凉と名く。卽ち持戒のことにて、六度の一。
【六一】羼提(Kṣānti)。譯、忍辱。六度の一。
【六二】精進(Vīrya)。梵語は毘離耶、六度の一。
【六三】結使。結も使も共に煩惱の異名。心身を繫縛し、苦果を結成する故に結と云ひ、衆生に隨逐し、又は衆生を驅使すれば、使といふ。
【六四】禪那(Dhyāna)。譯、靜慮。禪定に同じ。六度の一。
【六五】般若(Prajñā)。譯、智慧。六度の一。

正なり。若し此の勝徳に非ずんば、誰か菩薩の母たるに堪へん。譬へば無價の珠を淨き寶器に置くが如し。是の如く菩薩の母は、勝徳の人を懷くに堪へたり。見る者歡喜を生じて、其心に厭倦無し。面目甚だ端正にして、身相極めて光明なり。月の虚空に在るが如く、之を觀れば意淨し。日の盛に暉輝するが如く、眞金の百鍊せるが如く、彼の菩薩の母を見るに、光明亦此の如し。髮は香ばしく、且つ柔澤あり。紺黑なること玄蜂に類す。皓齒は空の星の如く、目は青蓮華の若し。支節善く隨つて轉じ、手足皆平正なり。天中尙ほ匹無し。人間誰か與に比べん。是の如く審かに觀察し、右遶して香花を散ず。名を稱して佛母を歎じ、還つて天上に返る。爾の時[五六]四護世、釋梵及び欲天、幷びに餘の八部衆、皆來りて佛母を衞る。諸天咸く已に、菩薩の將に下生せんとするを見、妙香花を齎持して、歡喜して前に詣りて住し、合掌稽首して請ず。下生したまふ時已に至れり。辯才師子王、哀愍して世間に生まれたまへ」と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩將に下生せんとする時、東方に無量百千の菩薩有り。皆是一生補處なり。來りて兜率天宮に詣り、菩薩を供養す。南西北方四維上下の一生補處、皆兜率天宮に至りて、菩薩を供養す。十方世界の四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・樂變化天・他化自在天、是の如き等、各〻八萬四千の天女の與に、前後圍遶せられて、兜率宮に至り、鼓樂絃歌もつて菩薩を供養す。爾の時菩薩、大樓閣に處り、衆德所生の[五七]勝藏師子の座に坐す。彼の諸菩薩、及び無量百千萬億那由他の諸天圍遶して、供養恭敬し、尊重讚歎す。卽ち兜率最勝天宮より、便ち降生す。將に下生せんとする時、未曾有の身相光明を放ち、遍く三千大千世界を照す。世界の中間幽冥の處、日月威光の照す能はざる所、而も皆大明なり。其中の衆生、各〻相見ることを得て、咸く是の言を作さく、「云何ぞ此の中に忽ち衆生を生ぜるか」と。是の時、三千大千世界、六種に震動して、

【五四】塗香。手に塗る香。手のけがれを去るなり。

【五五】末香。沈檀を擣いて粉抹とせるもの。以て塔像に撒布す。

【五六】四護世。四天王のこと。須彌山の半腹に在りて、各〻其の一天下を護れば、護世といふ。

【五七】勝藏師子之座(Śrigarbhasiṃhāsana)。

香を熏じて、淨福者を供養せん。菩薩の胎中に處する、三垢の爲に染せられたまはず。生老死を越え、[四七]導を得て邊際を窮めたまはんに、我等は淨心を持して、智慧者に隨從せん。釋梵天王等は、七歩を行きたまふを見る時、手を以て香水を捧げ、是の[四八]無垢聖に浴がんに、世の諸の所爲に厭じて、人天は大福を獲ん。欲に處して常に染無く、城を踰へて寶位を棄てたまはんに、我等願つて隨逐せん。草を敷きて道場に坐し、魔を降して正覺を成り、微妙法を勸說して、佛事、三界に遍く、甘露をもつて群生を洽ほし、乃至、涅槃に歸したまはんに、常に隨つて暫くも捨つること無からん」と。

佛諸の比丘に告げたまはく、『欲界の無量の天女、菩薩身の形相微妙にして、將に下生せんと欲するを見、各〻是の言を作さく、「何等の女人か應に菩薩を生みたてまつるべき。必ず勝德有りて、尊者を懷くに堪へん」と。咸く皆慕ひ羨みて、敬愛の心を懷けり。己が福報を以て彼の神通を獲、[四九]意生身を得て、彼の天宮より、[五〇]刹那の頃に於て、[五一]迦毘羅城に至る。其の[五一]迦毘羅城は周匝せる百千の園林池沼ありて、莊嚴殊勝なること、[五二]帝釋宮の如し。其の宮內に於て一大殿有り。名を[五三]持國と曰ふ。摩耶聖后、住して其の中に在り。種種の莊嚴、敷置して綺麗に、淸淨無垢にして、光明威神あり。聖后、身に瓔珞を佩び、被るに天衣を以てし、種種の妙寶其の體を莊嚴す。時に諸の天女、此の殿に至り已り、住して虛空に在つて、聖后を瞻る。而して偈有つて言はく、

「欲界の諸の天女、菩薩の妙身を觀じ、咸く是の思惟を作さく、菩薩の母は何の類ぞと。競ひて花鬘等、[五四]塗香及び[五五]末香を持して、歡喜して王宮に詣り、合掌して恭敬す。殊勝にして麗はしき容貌なり。手を舒べて咸く共に指し、勝寶床に坐するを見、善心をもつて諦に觀察す。人間にして斯の妙質あり。天上にも未曾有なり。我等常に自ら謂へり。天女中の殊勝なりと。今斯の人を覩已りて、自ら輕賤の心を生ず。勝功德莊嚴ありて、顏容甚だ端

をいふ。輪王の七寶は、後に出づ。

【四三】無漏慧。漏とは煩惱の異名なり。煩惱に隨染する性質を離れたる純眞無垢の智慧を、無漏慧といふ。三乘の聖智なり。

【四四】緣覺。梵語辟支佛(Pratyekabuddha)。新譯には獨覺といふ。緣覺とは、一は十二因緣の理を觀じて、斷惑證理し、一は飛花落葉の外緣に因つて、自ら無常を覺悟して、斷惑證理するをいふ。聲聞の註は、序品第一の末に出ず。

【四五】羅縛。有情を羅縛して三界の獄に繫ぐ一切の煩惱をいふ。

【四六】曼陀花。曼陀羅華(Mandārava)の略。花の名。白團花、適意花などと譯す。

【四七】導。三本道に造る。

【四八】無垢聖(Suśuddhasattva)。

【四九】意生身、又意成身、Manomaya.)意のまゝに生るゝ身。

【五〇】刹那(Kṣaṇa)。譯、一念。時の最少なるもの。

【五一】迦毘羅城(Kapilāvyūha-mbhāpuravara)。

【五二】帝釋宮。帝釋天の宮殿。善見城の中に在り。殊勝殿とも名く。

【五三】持國(Dhṛtarāṣṭra)。

士に隨ふべし。若し大富貴と、端正及び名譽と、教令に威德有らんを求めば、應に梵音者に隨ふべし。若し人天の報あり、幷に三界の安きを致し、[四三]無漏慧と及び禪とあらんを求めば、應に法自在に隨ふべし。若し貪欲を斷じ、及び瞋癡等を去り、淡泊にして志の寂然たらんと求めば、應に調心者に隨ふべし。若し一切智、[四四]緣覺及び聲聞、十方師子吼を求めば、應に功德海に隨ふべし。若し惡趣を閉ぢて、諸の甘露門を開き、方に八正道に昇らんを求めば、應に遠險路に隨ふべし。若し諸佛を見たてまつり、甚深の法を聽受せんを求め、及び衆福祐を冀はば、應に功德藏に隨ふべし。若し生老病死の苦に[四五]纏縛せらるゝを出でて、清淨なること虛空の如くならんを求めば、應に離垢人に隨ふべし。若し一切敬の相好莊嚴の德と、及び能く自他を拯はんを求めば、應に可欣樂に隨ふべし。若し戒定慧の甚深にして證す可きこと難きと智者の速かなる解脫とを求めば、應に大醫王に隨ふべし。若し無量の德の究竟して皆圓滿すると、及び涅槃の樂を生ぜんとを求めば、應に智成就に隨ふべし」と。

爾の時、諸天の衆會、此の偈を聞き已る。八萬四千の四天王天、百千の忉利天、百千の夜摩天、百千の兜率天、百千の化樂天、百千の他化自在天、六萬の魔天、前世に德を積める六萬八千の梵衆天、乃至、阿迦尼吒天、無央數の百千の諸天と、是の如き等の天、先づ來りて會に在り。復、他方の東西南北四維上下の無量百千の諸天衆等有り。皆悉く來集す。時に大會中の上首天子、頌を說いて曰く。

「汝等、今應に聽くべし。我、決定心を起して、欲及び神通、諸禪三昧の樂を捨て、最勝者の降生して母胎に處したまふに隨從し、諸の惡をして侵さしめず。常に當に擁護を爲すべし。諸の妙音樂を以て、功德海を讚誦し、天人をして歡喜して、無上道心を發さしめん。人天は是を聞き已つて、歡喜して衆患を消し、散ずるに[四六]曼陀花、月花、勝月等を以てし、及び沈水

【三一】正法輪。如來所說の教法をいふ。佛の說法能く衆生の惡を摧破すること猶輪王の輪寶能く山岳巖石を輾摧するに譬へて法輪といふ。
【三二】忉利天(Trāyastriṃśa)。譯、三十三天。欲界六天中の第二、須彌山の頂に在り。帝釋此に居す。
【三三】般涅槃(Parinirvāṇa)。滅度と譯す。生死の因果を滅し、生死の瀑流を渡るなり。常に略して涅槃といふ。
【三四】忉利宮(Tridaśadeva-pura)。
【三五】清海月(Vimalacandra-mukha)。
【三六】妙園林(Miśraka-vana-vana)。
【三七】無垢光(Vimalate-ta-judhara)。
【三八】歡喜園(Nandana)。忉利天の帝釋の四園の一。諸天此に入れば自ら歡喜の情を起せば歡喜を名とす。
【三九】魔王(Māreśvara)。
【四〇】勝妙梵宮(Brahmapura)。
【四一】四等心。慈悲喜捨の四無量心のこと。平等に此の心を起すが故に四等心といふ。
【四二】七寶。七寶に多種あり。輪王の七寶といふときには、輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主兵臣寶、主藏臣寶の七

防護せ令む。　婇女は絃歌もつて相娯樂し、復[一四]瓔珞を以て身を莊嚴す。　珍床寶座敷くこと綩綖たり。　勝殿に處在して天女の如し』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく『爾の時[一五]四天王、[一六]釋提桓因・[一七]夜摩天・[一八]兜率陀天・[一九]樂變化天・[二〇]他化自在天・[二一]娑婆世界主梵天王・[二二]梵衆天・[二三]梵輔天・[二四]妙光天・[二五]少光天・[二六]光嚴天・[二七]淨居天・[二八]阿迦尼吒天・[二九]摩醯首羅天及び餘の無量の百千の天衆、悉く皆雲集し、互に相謂つて言はく、「菩薩將に下生せんと欲したまふ。我等[三〇]諸天往きて侍從せずんば、墮して反復すること無きに恩養を知らざらん。誰か能く侍衞に堪任して菩薩の閻浮提に下り、初め胎に入り、及び胎を出づるより、童子盛年、遊戲して欲を受け、家を出でて苦行し、菩提の座に詣りて魔軍を降伏し、[三一]正法輪を轉じ、大神力を現じて[三二]忉利天より下り、[三三]般涅槃に入りたまふまで、常に能く奉事して、終に捨離せざらん」と。爾の時に、諸の天子等、頌を說いて曰く、

「汝等誰か堪任する。　歡喜して菩薩に隨はば、當に福增長を得べし。　亦大名譽を獲ん。　若し[三四]忉利宮の勝妙なる常安樂と、婇女衆の圍遶を求めば、應に[三五]清淨月に隨ふべし。　若し[三六]妙園林の勝處に常に遊戲し、寶地金花の飾を求めば、應に[三七]離垢光に隨ふべし。　若し象馬の車にて[三八]歡喜園に遊處し、婇女衆に圍遶せられんことを求めば、應に大丈夫に隨ふべし。　若し夜摩天及以兜率宮の所生として、常に敬はれんことを求めば、應に大名稱に隨ふべし。　若し化樂天の自在なる諸の宮室と、遊戲變化の樂とを求めば、應に功德者に隨ふべし。　若し[三九]魔王と作つて、諸の毒心を遠離し、神變、邊際を窮めんと求めば、應に利益者に隨ふべし。
若し欲界を超えて、[四〇]勝妙梵宮に住し、[四一]四等心を修行せんと求めば、應に禪定者に隨ふべし。
若し人間に生れて、輪王の勝報を受け、[四二]七寶、心に從つて至らんことを求めば、應に離欲尊に隨ふべし。　若し人王の位と、長者及び居士と、財富あり、怨敵無きとを求めば、應に無上

【一四】　瓔珞。梵語(Keyūra)。寶玉を連ねて、身又は宮殿の飾りとするもの。
【一五】　四天王(Catur-mahārāja)。持國天、增長天、廣目天、多聞天の四をいふ。
【一六】　釋提桓因(Śakra-devānām-indra)。
【一七】　夜摩天(Suyāma)。
【一八】　兜率天(Tuṣita)
【一九】　樂變化天(Sunirmita)。
【二〇】　他化自在天。(Paranirmitavaśavartin)。
【二一】　娑婆世界主梵天王(Sahāmpati-mahābrahman)。
【二二】　梵衆天　(Brahmapāriṣadya)。
【二三】　梵輔天　(Brahmapurohita)。
【二四】　妙光天(Ābhāsvara)。
【二五】　少光天(Parittābha)。
【二六】　光嚴天(Prabhāvyūha)。
【二七】　淨居天(Śuddhāvāsa)。
【二八】　阿迦尼吒天　(Akaniṣṭha)。
【二九】　摩醯首羅天(Maheśvara)。
是等の天につきては、後の現藝品の中に、一層委說して、色界に十八天を分つ。
【三〇】　諸天不往侍從云云―諸天の侍從なくば、下生して再び天に反る事なきに、或は慈育を受けざる事もあらんの意なるべし。

りて、水上に覆映す。五には、王宮の珍器、自然にして[八]蘇油・[九]石蜜、種種の美味有り。食へども盡くること無し。六には、王宮の樂器、簫笛・箜篌・琴瑟の屬、撃奏に因るに非ずして、皆種種微妙の音を出す。七には、王宮の[一〇]金・銀・琉璃・車璖・馬瑙・摩尼・珊瑚、一切の珍藏皆盈滿す。八には、王宮に大光明有りて、日月を映蔽し、斯の光に遇ふ者、身心安樂にして未曾有なることを得。是の如きを、名けて八種の瑞相と爲す。是の時、摩耶聖后、澡浴莊飾して諸の天香を塗り、妙なる衣服を著る。衆寶自ら嚴り、歡喜悅豫して身心清淨なり。一萬の婇女を以て圍遶侍從して、音樂殿中に遊ぶ。輸檀王に詣り、王の右邊に於て、妙寶網莊嚴の座に昇る。坐し已つて、容貌熙怡として開顏微笑す。是に於て頌して曰く、

『善い哉。大王、幸に哀許したまへ。我今微妙の願を陳べんと欲す。是より恒に仁慈の心を起し、當に[一一]八關清淨戒を持すべし。衆生を害せず、己を愛する如くせん。三業に十善を常に修習せん。嫉妬諂曲の心を遠離せん。願はくは王、我に於て染を生ずること莫れ。此の禁戒を聞いて隨喜するに非ずんば、恐らくは王、長夜に苦報に嬰らん。惟願はくば我をして別居することを得せ令めたまへ。宮殿は、香花もつて自ら嚴飾せん。諸の善婇女常に圍遶し、鼓樂絃歌して法音を演べん。凡そ鄙惡の人は我より離れしめ、婬穢の香氣は皆御せざらん。一切の囚徒悉く寬宥し、要ず當に彼を遣りて囹圄を空ならしむべし。七日七夜廣く[一二]檀を行じ、貧乏を給濟し充足せしめたまへ。必ず化を正しくして傜役を輕からしめん。盡く公庭に諍訟無から令めん。各各慈心をもつて互に相向ひ、忉利の[一三]歡喜園に昇るが如くせん。世間を憐愍すること一子に同じくしたまへ。法教斯の如くせば、甚だ安樂ならんと。王此の言を聞きて、大に歡悅し、所願の如きは皆相許さん。即ち諸の臣に勅して宮殿を淨め、幡蓋香氣もつて恣に嚴飾す。復二萬の勇健の軍を以て、劍戟を操持して

【八】蘇油。(ghṛta)。牛乳より製せし油にして、或は食し、或は身に塗る。
【九】石蜜。氷砂糖なり。
【一〇】金。以下七珍の梵名は次の如し。金(Suvarna)、銀(Rūpya)、琉璃(Vaidūrya)、車璖(musāragalva)、馬瑙(Aśmagarbha)、摩尼(maṇi)、珊瑚(Vidruma)。
【一一】八關清淨戒。(aṣṭāṅga posadha)。關は禁の意なり。不殺、不盜、不婬、不妄語、不飲酒。身を塗飾香鬘せず、自ら歌舞し又歌舞を視聽せず。高廣の牀座に眠坐せざること。
【一二】檀。(Dāna)檀那。譯、布施、施與。
【一三】歡喜園(Nandana)。忉利天の帝釋の四園の一、諸天此に入れば、自ら歡喜の情をおこせば、歡喜を名とす。

卷の第二

[一]降生品第五

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、諸の天人の爲に正法を演說し、勸勉開曉して其をして悅豫せしめ、天衆に告げて言はく「我當に何の形像を以て閻浮提に下るべきか」と。或は說く有りて言はく[二]童子の形爲らんと。或は說く有りて言はく釋梵の形と。或は說く有りて言はく神妙の天形と。或は說く有りて言はく、阿修羅、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等の形と。或は說く有りて言はく、日月天の形と。或は說く有りて言はく、[三]金翅鳥の形と。是の如き等の種種の形像を說く。爾の時衆中に一天子有り。名を[四]勝光と曰ふ。昔、閻浮提中に在りて婆羅門と爲り、無上菩提に於て、心退轉せず。是の如きの言を作さく、「圍陀論に說けり。下生する菩薩は、當に象の形と作つて母胎に入るべし」と。即ち偈を說いて言はく。

『菩薩の神を降す、應に象の形と爲るべし。　端正姝好にして、頂上は紅色なり。皎潔鮮淨にして、白き[五]玻瓈の如し。　六牙を具足し、飾るに金勒を以てす。　吉祥ならざるは無し。圍陀に先に記せり。三十二相にして當に閻浮に下りたまふべし』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、兜率天宮に於て、周遍觀察して、將に下生せんとする時、輸檀王宮に、先づ[六]八種の瑞相を現ず。何等をか八と爲す。一には、王宮忽然として淸淨なり。掃灑を加へざれども、諸の穢惡・塵土・瓦礫・蚊虻・蚰蜒・百足の類無し。種種の妙花を周匝布散して、香氣芬馥たり。二には、[七]雪山の中より衆鳥來集す。異類雜色にして、毛羽の光鮮なり。王宮中の樓閣・殿堂・棟梁・軒牖に於て、哀鳴して相和し、遨遊して自ら樂しむ。三には、王宮の中に於て、草木花葉一時に敷き榮ゆ。四には、王宮の池沼に皆蓮華を生じ、大なること車輪の如し。百千の葉あ

【一】降生品。(Pranolu-pari-varta.

【二】釋梵。帝釋と梵天なり。

【三】金翅鳥。梵語、迦樓羅。(garuḍa)八部衆の一。翅翮金色なれば金翅鳥と名く。須彌山の下層に住し、常に龍を取つて食となす。

【四】勝光(ugratejas)。

【五】玻瓈。新譯、頗胝迦等といふ。(sphatika)。此方の水精に當る。紫白紅碧の四色あり。

【六】八種の瑞相(Asta-pūr-vanimitta)。

【七】雪山。印度の北境に聳つ大山。千古雪を頂けば雪山といふ。梵語 Himālaya 譯、雪藏。

勤修すべし。決定して涅槃を證らん。當に智慧の燈を以て、愚癡の暗を銷滅し、勝金剛智を以て、煩惱[五四]隨眠を破るべし。我無邊の法を得たり。當に汝の爲に宣說すべし。是の如き無邊の法、汝當に能く盡く行ぜん。我當に菩提を證して、方に甘露の雨を灑ぐべし。汝が心若し清淨ならば、我當に勝法を授くべし」と。

【五二】有爲(Saṃskṛta)。造作を有するもの。卽ち因緣所生の法は、盡く有爲なり。

【五三】調伏。身口意の三業を調伏して諸の惡行を制伏するなり。

【五四】隨眠。煩惱の異名。貪瞋等の煩惱、有情に隨逐して離れざれば隨といひ、煩惱の狀相幽微にして了知し難きこと、猶ほ睡眠の狀體の如くなれば、眠といふ。又有情は、隨逐して昏滯を增すこと睡眠の如くなれば、隨眠と名く。

比丘よ。菩薩は、又諸の天衆をして深心に歡喜せしめんと欲して、頌を說いて曰く、

「菩薩將に下生せんとして、兜率宮に處り、彼の諸の天衆を誡む。唯當に放逸する莫るべし。

今汝だちの心に樂しむ所の、微妙の寶莊嚴は、淨業の因より、斯の衆妙の果を致せるなり。

是の故に應に報を思ふべし。業をして消歇せしむることなかれ。惡趣の中に沈淪して、備に無邊の苦を受けん。我が汝に示す所の法に、應に尊重の心を生ずべし。自ら勵み勤めて修行せば、當に[四九]無爲の樂を獲べし。貪欲は皆無常なり。虛假なること猶ほ夢の如し。幻の如し、[五〇]陽炎の如し。電の如し、聚沫の如し。貪欲は厭足無し。渇して鹹水を飲むが如し。若し[五一]出世智を得ば、乃ち知足を爲す可し。天女と共に相娛むも、譬へば集戲場の如し。同じく城邑の中に會するも、暫く聚れば便ち離散す。[五二]有爲は常の伴に非ず。亦親善の友に非ず。唯垢行を除離して、恒に隨逐すること有ること無かれ。汝應に共に和合すべし。慈悲をもつて心を利益し、諸の善法を精求せば、終に當に熱惱を除くべし。常に佛法僧を念じ、心を勤めて放逸なること莫れ。施戒多聞忍、一切皆圓滿せよ。理の如く諸法を觀ぜよ。因緣和合して生じ、無常及び苦空、無主亦無我なり。我に神力辯才智慧等有りと觀じ、淨業にして放逸ならざれば、多聞持戒成ぜん。我は多聞戒を修せり。汝等應に隨つて學ぶべし。施戒及び[五三]調伏し、慈心にして放逸なること莫れ。義に依つて言に著くこと勿れ。言の如くに奉行せよ。堅固に勤めて修習せば、諸の群生を利益せん。常に宜しく自ら罪を知るべし。復他の過を觀ずること勿れ。作さざるに自ら成ずるは非ず。彼作して我が受くるに非ず。當に過去劫に、流轉せる生死の苦を思ふべし。常に邪妄の道を行じ、生死して涅槃に乖きぬ。汝今衆難を離れ、天に生じて善友に遇ひ、又最勝の法を聞けり。諸の貪妄を滅除せよ。憍慢貢高を棄てよ。調柔にして行質直にして、應に正道を

【四四】決擇。疑を決斷し理を分別すること。

【四五】授記莂。梵に和伽羅(Vyākaraṇa)といふ。佛、發心の衆生に對して、當來必當作佛の豫を授與するをいふ。

【四六】忉利天(Trāyastriṃśa)。譯、三十三天。欲界六天中の第二、須彌山の頂、閻浮提の上、八萬由旬の處にあり。佛、一時、忉利天に上り、三月此世界より身を沒せる事あり。

【四七】遠塵離垢。塵垢を遠離するなり。塵垢とは煩惱の總名なれども、今は八十八使の見惑を指す。八十八使の見惑を斷じて正見を得るを、遠塵離垢得法眼淨と云ふ。是れ二乘の初果と、菩薩の初地に於ての得益なり。

【四八】法眼淨。分明に眞諦を見るをいふ。大小乘に通ず。小乘にては、初果に四眞諦の理を見るをいひ、大乘にては、初地に無生法忍を得るをいふ。

【四九】無爲(Asaṃskṛta)。爲は造作の義、因緣の造作なきを無爲といひ、又生住異滅の四相の造作なきを無爲といふ。

【五〇】陽炎。春先の野原に於て、日光の浮塵に映じて、ちら〳〵するものをいふ。和名かげらふ。

【五一】出世智。無漏の聖智なり。

に。[三九]羼提波羅蜜は是れ法門、永く憍慢瞋恚等の一切の煩惱を離れて、衆生を敎化し諸の結を斷ずるが故に。[四〇]毘離耶波羅蜜は是れ法門、一切の善法を成就し引發して、衆生を敎化し嬾惰を除くが故に。[四一]禪波羅蜜は是れ法門、一切の禪定神通を出生して亂意の衆生を敎化するが故に。[四二]般若波羅蜜は是れ法門、永く無明有所得の見を斷じ、愚癡暗蔽惡慧の衆生を敎化するが故に。方便善巧は是れ法門、諸の衆生の種種の意解に隨つて諸の威儀を現じ、及び一切の佛法を示して安立するが故に。[四三]四攝事は是れ法門、諸の群生を攝して、求趣して大菩提の法を證せしむるが故に。成熟衆生は是れ法門、已が樂に著せず、他を利して倦むこと無きが故に。正法を受持するは是れ法門、一切衆生の雜染を斷ずるが故に。福德資糧は是れ法門、一切衆生を饒益するが故に。智慧資糧は是れ法門、十力を圓滿するが故に。奢摩他資糧は是れ法門、如來三昧を證得するが故に。毘鉢舍那資糧は是れ法門、慧眼を獲得するが故に。無礙解は是れ法門、法眼を獲得するが故に。[四四]決擇は是れ法門、佛眼淸淨なるが故に。陀羅尼は是れ法門、能く一切の佛法を持つが故に。辯才は是れ法門、巧に言詞を說きて、一切衆生をして歡喜滿足せしむるが故に。順法忍は是れ法門、一切の佛法に隨順するが故に。無生法忍は是れ法門、[四五]授記莂を得るが故に。不退轉地は是れ法門、一切の佛法を圓滿するが故に。諸地增進は是れ法門、一切智の位を受くるが故に。灌頂は是れ法門、兜率天より下生して、胎に入り、初めて生れ、出家し苦行して、菩提場に詣りて魔を降し佛を成じ、正法輪を轉じ、大神通を起し、[四六]忉利天より下り、涅槃に入るを現ずるが故に。是の故に菩薩は、將に下生せんとする時、天衆の中に於て斯の如きの法を說く。

諸の比丘よ。菩薩、是の諸法明門を說ける時、彼の會中に於て、八萬四千の天子は、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。三萬二千の天子は、無生法忍を得たり。三萬六千那由他の天子は、諸法の中に於て[四七]遠塵離垢して[四八]法眼淨を得たり。兜率の諸天、皆妙花を散じ、積つて膝に至れり。諸の

惟籌量して眞智を增長せしむるをいふ。

【三一】正語。眞智を以て口業を修め一切非理の語を作さざるをいふ。

【三二】正業。眞智を以て身の一切の邪業を除き淸淨の身業に住するをいふ。

【三三】正命。身口意の三業を淸淨にして正法に順ひて活命し五種の邪活法をはなるるをいふ。

【三四】正精進。眞智を發用して强め涅槃の道を修するをいふ。

【三五】正念。眞智を以て正道を憶念し邪念なきをいふ。

【三六】正定。眞智を以て無漏淸淨の禪定に入るをいふ。

【三七】檀波羅蜜 (Dāna-pāramitā)。以下六波羅蜜。布施。

【三八】尸波羅蜜(Sīla-pāramitā)。持戒。

【三九】羼提波羅蜜(Kṣānti-pāramitā)。忍辱。

【四〇】毘離耶波羅蜜 (Vīrya-pāramitā)。精進。

【四一】禪波羅蜜 (Dhyāna-pāramitā)。禪定。

【四二】般若波羅蜜(Prajñā-pāramitā)。智慧。

【四三】四攝事。四攝又は四攝法ともいひ、布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝をいふ。註は兜率天宮品第二の下にあり。

巧は是れ法門、遍く苦を知るが故に。界性平等は是れ法門、永く集を斷ずるに由るが故に。不取は是れ法門、正道を勤修するが故に。【一六】無生忍は是れ法門、滅に於て證を作すが故に。【一七】身念住は是れ法門、分析して身を觀ずるが故に。受念住は是れ法門、一切の受を離るるが故に。心念住は是れ法門、智障翳を出づるが故に。【一八】四正勤は是れ法門、一切の惡を斷じて一切の善を修するが故に。【一九】四神足は是れ法門、身心輕利の故に。【二〇】信は是れ法門、邪の引く所に非ざるが故に。精進は是れ法門、善く思察するが故に。念根は是れ法門、善業の所作なるが故に。定根は是れ法門、心解脱に由るが故に。慧根は是れ法門、智現前して證るが故に。【二一】信力は是れ法門、能く遍く魔力を超ゆるが故に。精進力は是れ法門、退轉せざるが故に。念力は是れ法門、遺忘せざるが故に。定力は是れ法門、一切の覺を斷ずるが故に。慧力は是れ法門、能く損壞すること無きが故に。【二二】念覺分は是れ法門、實の如く法に住するが故に。【二三】擇法覺分は是れ法門、一切の法を圓滿するが故に。【二四】精進覺分は是れ法門、智決定するが故に。【二五】喜覺分は是れ法門、三昧安樂なるが故に。【二六】輕安覺分は是れ法門、所作成辦するが故に。【二七】定覺分は是れ法門、平等に一切の法を覺悟するが故に。【二八】捨覺分は是れ法門、一切の受を厭離するが故に。【二九】正見は是れ法門、聖道を超證するが故に。【三〇】正思惟は是れ法門、永く一切の分別を斷ずるが故に。【三一】正語は是れ法門、一切の文字より平等に覺悟するが故に。【三二】正業は是れ法門、業果報無きが故に。【三三】正命は是れ法門、一切の希求を離るるが故に。【三四】正精進は是れ法門、專ら彼岸に趣くが故に。【三五】正念は是れ法門、無念・無作・無意なるが故に。【三六】正定は是れ法門、三昧を證得して傾動せざるが故に。菩提心は是れ法門、三寶の種を紹ぎて斷ぜざらしむるが故に。大意樂は是れ法門、下乘を求めざるが故に。増上意樂は是れ法門、無上廣大の法を緣ずるが故に。方便正行は是れ法門、一切の善根を圓滿するが故に。【三七】檀波羅蜜は是れ法門、相好を成就して佛國土を淨め、衆生を敎化して慳恪を除くが故に。【三八】尸波羅蜜は是れ法門、一切の惡道難處を超過して衆生を敎化し禁戒を守るが故

【一六】無生忍。無生無滅の理に安住して動かざるをいふ。或は初地の證の名とし或は七八九地の悟の名とす。
【一七】身念住。次の受念住・心念住に、法念住を加へて四念住といふ。四念處に同じ。註は兜率天宮品第二の下にあり。
【一八】四正勤。前出。
【一九】四神足。前出。
【二〇】信。以下の精神・念・定・慧を合はせて五根といふ。前出。
【二一】信力。以下の精進力・念力・定力・慧力を合はせて五力といふ。前出。
【二二】念覺分。常に定慧を明記して忘れず之をして均等ならしむ。以下七覺分なり。
【二三】擇法覺分。智慧を以て法の眞疑を簡擇す。
【二四】精進覺分。勇猛の心を以て邪法を離れ眞法を行ず。
【二五】喜覺分。心に善法を得て歡喜を生ず。
【二六】輕安覺分。身心をして輕利安適ならしむ。
【二七】定覺分。心を一境に住して散亂せしめず。
【二八】捨覺分。諸の妄謬を捨て一切の法を捨て平心坦懷更に追憶せず。
【二九】正見。四諦の理を見て分明なるをいふ。以下八正道。
【三〇】正思惟。四諦の理を思

愛樂は是れ法門なり、心清淨の故に。身戒は是れ法門、[八]三惡を除くが故に。語戒は是れ法門、[九]四過を離るるが故に。意戒は是れ法門、[一〇]三毒を斷ずるが故に。[一一]念佛は是れ法門、見佛清淨の故に。念法は是れ法門、說法清淨の故に。念僧は是れ法門、聖道を證り獲るが故に。念捨は是れ法門、一切事を捨つるが故に。念戒は是れ法門、諸願滿足するが故に。念天は是れ法門、廣大心を起すが故に。

[一二]慈は是れ法門、一切諸の福事業を超映するが故に。悲は是れ法門、增上して害せざるが故に。喜は是れ法門、一切の憂惱を離るるが故に。捨は是れ法門、自ら五欲を離れ及び他をして離れしむるが故に。[一三]無常は是れ法門、諸の貪愛を息むるが故に。苦は是れ法門、願求永く斷ずるが故に。無我は是れ法門、我に著せざるが故に。寂滅は是れ法門、貪愛をして增長せしめざるが故に。慚は是れ法門、內清淨の故に。愧は是れ法門、外清淨の故に。諦は是れ法門、人天を誑かざるが故に。實は是れ法門、自ら欺誑せざるが故に。法行は是れ法門、法に依るが故に。[一四]三歸は是れ法門、[一五]三惡趣を超ゆるが故に。知所作は是れ法門、已に善根を立てて失壞せしめざるが故に。解所作は是れ法門、他に因つて悟らざるが故に。自知は是れ法門、自ら矜高せざるが故に。衆生を知るは是れ法門、他を輕毀せざるが故に。法を知るは是れ法門、法に隨つて修行するが故に。時を知るは是れ法門、癡暗の見無きが故に。憍慢を破壞するは是れ法門、智慧滿足するが故に。障礙心無きは是れ法門、自他を防護するが故に。恨まざるは是れ法門、悔いざるに由るが故に。勝解は是れ法門、疑滯無きが故に。不淨觀は是れ法門、諸の欲覺を斷ずるが故に。不瞋は是れ法門、恚覺を斷ずるが故に。無癡は是れ法門、無智を破壞するが故に。法を求むるは是れ法門、義に依止するが故に。法を樂しむは是れ法門、明法に證契するが故に。多聞は是れ法門、理の如く觀察するが故に。方便は是れ法門、正勤に修行するが故に。遍く名色を知るは是れ法門、一切の和合愛著を超過するが故に。因見を拔除するは是れ法門、解脫を證得するが故に。貪瞋を斷ずるは是れ法門、癡垢に著せざるが故に。妙

【八】三惡。殺生・偸盜・邪婬なり。
【九】四過。妄語・綺語・兩舌・惡口なり。
【一〇】三毒。貪・瞋・癡なり。
【一一】念佛。以下の念法・念僧・念戒・念捨・念天の六を合はせて六念といふ。大小乘の通說なり。
【一二】慈。以下の悲・喜・捨を合はせて四無量心といふ。
【一三】無常。苦・無我を合はせて三法印といふ。寂滅を加ふる時は、四法印となる。
【一四】三歸。佛・法・僧の三寶に歸依すること。
【一五】三惡趣。地獄道・餓鬼道・畜生道の三惡道のこと。

天下の如し。復、種種の珍寶を以て、而も之を嚴飾す。凡そ見る所の者、歡喜せざるは莫し。是の時、四欲界・五色界の諸の天子等、此の道場の是の如く嚴麗なるを見て、己が所居を顧みるに、塚墓の如き想あり。菩薩の福德と自の善根力とにて、勝妙なる師子の座を成就し、飾るに金銀衆妙の珍寶を以てし、覆ふに輕軟無價の天衣を以てす。衆の天香を燒き、衆の天花を散ず。其の中の無量百千の珍寶、光明あつて照耀す。大寶網を以て、其の上に彌覆するに、寶鈴搖動して、和雅の音を出す。無量の寶蓋、雜色の繒綵、殊妙なる幡繧、周匝閒列し、無量百千の花鬘綺帶、以て嚴飾す。無量百千の六諸天の婇女、種種の歌舞を以て供養を爲す。是の諸天の樂、微妙の音を演べ、菩薩の無量の功德を稱揚す。無量百千の四大天王の擁護する所、無量百千の釋提桓因の圍遶する所、無量百千の大梵天王の讚歎する所なり。無量百千拘胝那由他の菩薩、師子の座を捧げ、復、十方の無量百千拘胝那由他の諸佛如來の護念したまふ所と爲る。其の師子座は、無量百千拘胝那由他劫より、諸の波羅蜜・福德・資糧の生起する所』と。佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩、此の功德成就の師子の座に坐して、天衆に告げて言はく、「汝だち且く我が百千福聚の相好嚴身を觀ぜよ」と。是の時大衆、尊顏を瞻仰し、目暫くも捨てず。乃ち東西南北四維上下、十方に周遍して、數量を超過せる兜率天宮を見る。各々最後身の菩薩有りて、將に下生せんと欲す。無量の諸天、恭敬圍遶す。皆悉く將に沒せんとするの相、諸法明門を演說す。爾の時大衆、既に見ること是の如くして、深く悲喜を生じ、恭敬稽首して、讃じて言はく、「善い哉。我れ尊者を觀たてまつりて、是の如き無量の菩薩を見ることを得たり。皆尊者の神通の力に由る」と。菩薩告げて言はく、「汝等、諦に聽け。諸の菩薩の如き、各々天衆の爲に、將に沒せんとする相、諸法明門を說いて、天人を安慰せり。我も今亦當に汝等の爲に諸法明門を說くべし。一百八有り。何等を名けて七百八法門と爲す。信は、是れ法門なり、意樂斷ぜざるが故に。淨心は、是れ法門なり、亂濁を除くが故に。喜は是れ法門なり、安隱心の故に。

【四】欲界(Kāma-dhātu)。三界の一。婬欲と食欲の二欲强き有情の住する所處をいふ。上は六欲天よりはじめて、中は人界の四大洲より、下は八大地獄に至る、是なり。
【五】色界(Rūpa-dhātu)。三界の一。身體といひ、宮殿國土といひ、物質的のもの、總べて殊妙精好なれば、色界といふ。之に四禪十八天あり。
【六】諸天の婇女(Apsara)。
【七】百八法門—本行集經には百八法明門と爲す。大同小異なり。この經には身受心法の三念住を、集經には身受心法の四念處と爲すを以て、その點に於て一を增すも、最後の諸地增進と灌頂とを合するを以て、一を減じて、同數となる。蓋、諸地增進と灌頂とを合するを可とすべし。此經の灌頂を見るに、之が說明なく、導、受一切智位故灌頂と、接續する方、文の上より見て、可なるべし。いづれにせよ、四念住の中に於て、法念住を脫せるは、然るべからず。

倫匹無し。故に號けて摩耶と爲す。容貌は天女に過ぎ、支節皆相稱ふ。天、人、阿修羅、之を覩て厭足無し。清淨にして諸の過を離れ、而も穢欲の心無し。言詞甚だ微妙にして、質直復柔軟なり。身體常に香潔にして、一切惡む可き無し。笑を含みて嚬蹙せず。法を知りて慚愧を具す。憍慢と諂曲と、及以嫉妬の心無し。邪を離れて諸の業を淨め、慈を行つて惠施を好む。世間の女人の過を、其の身悉く超越す。一切の諸の天人、能く踰ゆる者有ること無し。諸の功德を具足す。宜しく應に大聖を懷くべし。曾つて五百生に於て、恒に菩薩の母と爲りき。其の王も亦是の如し。多生以て父と爲りき。母請うて禁戒を持ちて、三十二月を經たり。梵行や威德を積みて、其の身常に光明あり。聖后の遊履する所、斯の處自ら嚴飾す。天、人、阿修羅、能く欲心にて視ること無し。一切咸く親敬して、母の如く姉妹の如し。此の清淨業を以て、威儀聖賢に比ぶ。王をして名譽を擅にせしめ、〔六九〕粟散咸く歸伏す。功德兩つながら相稱ふ。是れ菩薩の母爲り。更に諸の女人の、佛の母爲るに堪ふる者無し。威德ある衆の天子、大智ある諸の菩薩、咸く斯の母の德を歎ず。菩薩應に生を降すべし。』

〔一〕法門品第四

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『菩薩是の如く種姓を觀じ已るや、彼の兜率天宮に、一大殿有り。名を〔二〕高幢と曰ふ。縱高正等にして、六十四〔三〕由旬あり。菩薩爾の時、此の大殿に昇り、天衆に告げて言はく、「汝だち當に盡く集りて我が最後所說の法門を聽くべし。是の如き法門を、名けて敎誡思惟遷沒方便下生之相と爲す」と。是の時、一切の兜率天子及び諸の天女、是の語を聞き已りて、皆悉く雲集す。菩薩神力をもつて、即ち此殿に於て、道場を化作す。其量正等にして、四

---

yā)。欲界六天の女性なり。色界以上の諸天には、婬欲なければ男女の相なし。歡喜園は、帝釋の四園の一。

【六八】迦毘羅。迦毘羅婆蘇都(Kapilavastu)の略。城の名。輸頭檀王の都なり。

【六九】粟散。小王の多きこと、粟を散じたる如きをいふ。輪王より以下、一國一州を領するものを、皆粟散王といふ。

【一】法門品(Dharmaloka-mukha-parivarta)。

【二】高幢(Ucchadhvaja)。

【三】由旬(Yojana)。里程を計る稱目。帝王の一日行軍の里程。唐土の里法にて、或は四十里といひ、或は三十里といふ。一說に十二哩に當るといふ。

咸く一心を以て、其主に承事す。

王の聖后は、名を[六一]摩耶と曰ふ。[六二]善覺王の女なり。年少盛滿にして、相好を具足す。未だ嘗つて孕育せず。端正無雙にして、姿色妍美なること、猶ほ彩畫の如し。諸の過惡無く、言ふ所誠諦にして、妙音の詞を出す。身心恬和にして、罪無く惱を離れ、亦嫉妬無し。語は必ず時に應じ、樂んで惠施を行じ、性戒成就す。常に己が夫に於て、知足を生ず。心輕しく動かず、情に外染無し。支節相稱ひ、眉高くして長し。額廣く平正にして、髮彩紺黑なり。猶ほ玄蜂の如し。笑を含んで言ひ、美聲柔軟なり。所作右に順ひ、質直にして曲ること無し。諂無く誑無く、慚有り愧有り。心性安靜にして、顏容清淨なり。三毒皆薄く、溫和にして能く忍ぶ。而して面目及以手足に於て、善く自ら閑を防ぐ。身體柔軟して、[六三]迦隣陀衣の如し。目は淨く脩廣にして、靑蓮花の如し。脣色靑好にして、[六四]頻婆果の如し。頸は螺旋の如く、美なること虹蜺の若し。脩短度に合し、容儀法る可し。其の肩は端好にして、其の臂は傭長なり。支體圓滿にして、膚彩潤澤あり。猶ほ金剛の沮壞す可からざるが如し。善く衆藝を解するが故に、摩耶と號く。常に王宮に處りて、猶ほ[六五]寶女の如し。亦[六六]化女の如し。又[六七]天女に似たり。歡喜園に住して、斯の衆德を具す。乃ち能く菩薩の母爲るに堪任す。是の如きの功德、唯釋種のみ有り。餘は之有るに非ず」と。是に於て頌して曰はく、

『菩薩兜率に在りて、法集堂に處り、同乘及び天衆、皆恭敬圍遶す。共に勝族を觀ず、菩薩何の處に生ると。此の閻浮提の刹利王大姓を見るに、釋氏は最も清淨なり。彼に於て應に神を降すべし。城を[六八]迦毘羅と號く。積代輪王の種なり。安隱にして怨敵無く、善く化して衆に歸せらる。其の國甚だ嚴好にして、萬性皆歡喜す。法を奉じて善に從ひ、咸王者の心に同ず。親屬に勝能多く、力將巨象の比なり。或は二三の象と、其の力共に齊等なり。端正にして勇武にして伎藝多く、衆生を傷害せず。其の王の聖后は、千妃中の第一なり。

に至る間のことなり。

【五七】 弗沙(Puṣya)。星の名。二十八宿中の鬼宿なり。

【五八】 齋戒。心の不淨を淸むるを齋といひ、身の過非を禁ずるを戒と云ふ。

【五九】 釋氏輸頭檀王(Śākya-śuddhodana)。釋は釋迦族(Śākya)の略稱。佛世尊の姓なり。輸頭檀は、淨飯と譯す。迦毘羅衞國の王にして、釋尊の父なり。

【六〇】 業果。業は、善業の人天の樂果を感じ、惡業の三惡趣の苦業を感ずるもの。果は其の業の感ずる所、人天鬼畜等の果報なり。

【六一】 摩耶(Māyā)。輸頭檀王の夫人にして、釋尊の母なり。譯、幻、術。

【六二】 善覺王(Suprabuddha)。摩耶夫人の父の名。

【六三】 迦隣陀衣(Kācalinda-ka)。迦隣陀鳥(Kācalindikā-ka)の毛を以て織りたる衣。轉輪聖王の服する所の衣にして、細軟輕妙なり。

【六四】 頻婆果。頻婆(Bimba)樹の果實。赤色なり。林檎に似たりといふ。

【六五】 寶女。又玉女とも云ふ。轉輪王七寶の一。

【六六】 化女。佛菩薩自ら形を化して女となりしもの。

【六七】 天女。梵語(Devakan-

徳と爲す。一には、名稱高遠なり。二には、衆に咨嗟せらる。三には、威儀失無し。四には、諸の相具足す。五には、種姓高貴なり。六には、端正なること倫を絶す。七には、名徳相稱ふ。八には、長ならず短ならず、麁ならず細ならず。九には、未だ曾つて孕育せず。十には、[五四]性戒成就す。十一には、心に執著無し。十二には、顏色和悅なり。十三には、運動右に順ふ。十四には、識用明悟なり。十五には、姿性柔和なり。十六には、常に怖懼無し。十七には、多聞にして忘れず。十八には、智慧莊嚴す。十九には、心に諂曲無し。二十には、欺誑する所無し。二十一には、未だ嘗つて忿恚せず。二十二には、恒に慳悋無し。二十三には、性嫉妬せず。二十四には、性躁動無し。二十五には、容色滋潤なり。二十六には、口に惡言無し。二十七には、事に於て能く忍ぶ。二十八には、慚愧を具足す。二十九には、三毒皆薄し。三十には、一切女人の過失を遠離す。三十一には、天を奉ずること戒の如くす。三十二には、衆相圓滿なり。是の如きを、名けて三十二徳と爲す。若し上の如き功徳を成就する有らば、方に乃ち菩薩の母爲るに堪任す。菩薩は[五五]黒月に於て胎に入らず。要ず[五六]白月の[五七]弗沙星合するを以てす。其の母、清淨[五八]齋戒を受持せば、菩薩是に於て方に現じて胎に入る」と。彼の諸の菩薩及び諸の天子、是の如き種族の清淨、父母の功徳を說くを聞きて、各自に思惟すらく「誰か此の諸の功徳を具する者有るぞ」と。復是の念を作さく「唯[五九]釋氏輸頭檀王有り。族望殊勝にして、轉輪王の種なり。都する所の國邑は、人民衆多なり。安隱豐饒にして、甚だ愛樂すべし。其の輸檀王は、人相圓滿顏容端正にして、微妙第一なり。威徳光大にして、福智莊嚴し、爲す所必ず善に、善を以て俗を化す。其の家豪貴にして、富みて財寶有り。象馬七珍、皆悉く盈滿す。深く[六〇]業果に達して、諸の惡見を離る。釋種中に於て、唯此を主と爲す。四方歸伏し、見る者歡喜す。伎藝を閑習し、老いず少からず、教を知り時を知る。世間の軌式、解了せざるは無し。法を以て王と爲り、法に依つて物を御す。又其の國土の所有の人民は、善根を宿植し、

瞻波(Campā)、これなり。

【四六】 智幢(Jñānaketu)。

【四七】 最後身にある菩薩。生死界中の最後身にある菩薩。即ち等覺の菩薩。一生補處の菩薩のこと。

【四八】 二族。父母の族。

【四九】 禁戒。宗教的法律にて、非を禁じ惡を戒めしもの。

【五〇】 業。梵語、羯磨(Karma)、身口意の善惡無記の所作なり。

【五一】 論師。論を造つて法を弘むるもの。

【五二】 沙門(Śramaṇa)。勤息と譯す。勤修して煩惱を息むる義。もと外道と佛徒とを論ぜず、總じて出家者の都名なり。

【五三】 七珍。七つの珍重すべき寶をいふ。七寶に同じ。

【五四】 性戒。殺盜の如き自性是れ戒にして、他の制定を待たざるを、性戒と名く。飲酒等の戒は、其の性是れ罪に非ざれども、是をなせば能く他の諸戒を犯すが故に、殊に之を遮す。之を遮戒といふ。性戒は、遮戒に對する語なり。

【五五】 黒月。又黒分(Kṛṣṇa-pakṣa)といふ。大陰曆の下半月なり。

【五六】 白月。又白分(Śukla-pakṣa)といふ。大陰曆の上半月なり。即ち月の盈より滿

九には、[48]二族敬ふ可し。十には、二族望有り。十一には、二族德有り。十二には、其の家男多し。十三には、所生に畏無し。十四には、瑕疵有ること無し。十五には、貪愛微薄なり。十六には、[49]禁戒を遵奉す。十七には、皆智慧有り。十八には、凡そ是の用ふる所、要ず群下をして、先づ觀じて之を試み令む。十九には、人皆工巧あり。二十には、朋友と善く終始して、一の如し。二十一には、衆生を害せず。二十二には、恩義を忘れず。二十三には、儀式を行ふことを知る。二十四には、教に依つて事を行ふ。二十五には、疑へば卽ち成すこと無し。二十六には、[50]業に愚ならず。二十七には、物を恪まず。二十八には、罪惡を作さず。二十九には、功、唐捐ならず。三十には、心を施すこと殷重なり。三十一には、志性決定す。三十二には、取捨を善くす。三十三には、施に於て信樂す。三十四には、丈夫の作用あり。三十五には、爲す所成辦す。三十六には、勤勇自在なり。三十七には、勇猛増上す。三十八には、仙人を供養す。三十九には、諸天を供養す。四十には、[51]論師を供養す。四十一には、先靈を供養す。四十二には、常に怨恨無し。四十三には、名十方に振ふ。四十四には、大眷屬有り。四十五には、善友を阻まず。四十六には、多くの眷屬有り。四十七には、強き眷屬有り。四十八には、亂眷屬無し。四十九には、威德自在なり。五十には、父母に孝順す。五十一には、[52]沙門に敬事す。五十二には、婆羅門に遵ふ。五十三には、[53]七珍具足す。五十四には、五穀豐稔なり。五十五には、象馬無數なり。五十六には、諸の僕從多し。五十七には、他の爲に、侵されず。五十八には、所作成就す。五十九には、轉輪王の種なり。六十には、宿世の善根を資糧と爲す。六十一には、其の家の一切所有は、皆菩薩の善根増長に由る。六十二には、諸の過失無し。六十三には、諸の譏嫌無し。六十四には、家法和順す。是の如きを、名けて六十四德と爲す。若し上の如き功德を成就する有らば、補處の菩薩、當に其の家に生るべし。

若し女人有つて、三十二種の功德を成就せば、當に菩薩の母と爲るべし。何等をか名けて三十二

譯する事あれども、これは阿槃提國（Avanti）の王（Pradyota）なり。阿槃提國は、西印度要衝の地にあり、首府を優禪尼城（Ujjayinī）といふ。釋尊時代、一强國を成せり。

【三八】摩偷羅（Mathurā）。十六大國の一。中印度恒河の上流に在り。

【三九】善臂（Subāhu）。

【四〇】般茶婆（Pāṇḍava）。恒河の上流、所謂中國にあり。

【四一】象城（Hastināpura）。

【四二】五男─大婆羅諦の主人、五王子をいふ。この五王子と、同族の一百王子との間の大戰爭を叙述せるものは、有名なるマハーブハーラタなり。

【四三】彌梯羅城（Mithilā）。

【四四】善友（Sumitra）。

【四五】十六大國。佛典中に、印度古昔の大國として記さるゝも、其中には時代を異にするものあるを以て、蓋、同時並列のものにあらず。毘舍離（Vaiśālī）、憍薩羅（Kośala）、室羅筏（Śrāvastī）、摩伽陀（Magadha）、波羅痆斯（Bārāṇasī）、迦毘羅（Kapilavastu）、拘尸那（Kuśinagara）、憍賞彌（Kauśāmbī）、般遮羅（Pāñcāla）、波吒羅（Pāṭaliputra）、末吐羅（Mathurā）、烏尸（Uṣa）、奔吒跋多（Puṇḍavardhana）、提婆跋多（Devatāra）、迦尸（Kāśī）、

邪見の種族にして、殘害無道なり。宜しく彼に生まれたまふべからず。」

或は天有りて言はく、「[四〇]般荼婆王の都は、[四一]象城に在り。事を勸めて勇健に、支體圓滿なり。人相具足して能く怨敵を制す。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は閹官の人にして、室家壞亂す。[四二]五男有りと雖も、皆其の胤に非ず。宜しく彼に生まれたまふべからず。」

或は天有りて言はく、「[四三]彌梯羅城は、莊嚴綺麗なり。王を[四四]善友と名く。諸の王を威伏して、象馬四兵皆悉く具足す。珍寶無量にして、正法を聞かんことを樂ふ。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は是の如き美事有りと雖も、年時衰暮にして、力勢有ること無し　復子息多し。宜しく彼に生まれたまふべからず」と』。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『無量の菩薩及び諸の天子、閻浮提の[四五]十六大國の所有威德勝望ある王種に於て、周遍觀察す。皆悉く菩薩の往きて生るるに堪へず。相與に籌議すれども、竟に菩薩の生處を知ること能はず。爾の時、會中に一天子有り。名を[四六]智幢と曰ふ。善く大乘に入りて、心退轉せず。衆天子に告げて言はく、「汝等宜しく應に往きて、菩薩に當に何の處に生れたまふべきかを問ひたてまつるべし」と。諸の天子等、咸く共に合掌して、菩薩の所に詣り、而して前みて問ひたてまつりて言はく、「閻浮提中、何等の種姓が、何の功德を具してか、補處の菩薩、當に其の家に生じたまふべきか」と。

爾の時菩薩、諸の天子に告ぐ。「閻浮提中、若し勝望の種族有りて、六十四種の功德を成就せば、[四七]最後身の菩薩は、當に其の家に生るべし。何等をか名けて六十四德と爲す。一には、國土寬廣にして種姓眞正なり。二には、衆に宗仰せらる。三には、雜姓に生れず。四には、人相端嚴なり。五には、族類圓滿なり。六には、內外嫌ふこと無し。七には、心に下劣無し。八には、族高貴なり。

【二七】毘舍(Vaiśya)。四姓の第三商賈の族なり。
【二八】首陀(Śūdra)。四姓の第四、農人奴隸なり。
【二九】刹帝利(Kṣatriya)。四姓の第二、王士種なり。
【三〇】摩訶陀國(Magadha)。中印度の國名。十六大國の一。王舍城の在る所なり。
【三一】毘提訶(Videha)。
【三二】憍薩羅(Kośala)。國の名。十六大國の一にして、摩伽陀國の西北迦毘羅衞城の西。今のオードウ地方。波斯匿王の領せし地。
【三三】摩燈伽(Mataṅga)。正翻、有志。義譯憍逸。一賤種の稱。
【三四】犢子王(Vaṃśarāja)。犢子國は、摩伽陀國の西にあり。釋尊の時代、優塡王ありて、憍賞彌城(Kauśāmbī)に治在せり。十六大國の一として數へらるゝ憍睒彌これなり。
【三五】毘耶離(Vaiśālī)。十六大國の一。譯、廣嚴。中印度に在る國の名。佛滅一百年、七百賢聖、第二の結集を爲せし處なり。
【三六】離車子。離車(Licchavi)は毘舍離城の刹帝利種の名なり。子は其の族類を總稱す。
【三七】勝光王。舍衞國の王、波斯匿(Prasenajit)を勝光と

或は天有りて言はく「[三〇]摩訶陀國の[三一]毘提訶王は豪貴甚だ盛なり。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は、父母倶に眞正ならず。憍慢卒暴にして、善根微尠なり。大福德なし。宜しく彼に生まれたまふべからず」。

或は天有りて言はく、「[三二]憍薩羅王は種と望と殊勝なり。多く財寶・象馬・車乘・吏民・僮僕有り。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は、本是れ[三三]摩燈伽種なり。父母宗親悉く皆鄙劣にして、信少く福薄し。宜しく彼に生まれたまふべからず」。

或は天有りて言はく、「彼の[三四]犢子王は種姓豪强にして、富樂熾盛なり。好んで惠施を行ふ。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は凡劣にして、大威德無く、暴戾畏る可し。母族は、卑下にして、君位を簒竊す。宜しく彼に生まれたまふべからず」。

或は天有りて言はく、「[三五]毘耶離王は、尊貴富盛にして、安隱快樂なり。諸の怨敵無く、人民衆多なり。宮室・苑園・林泉・花果あり。莊嚴綺麗にして、猶ほ天宮の若し。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の國土の中の諸の[三六]離車子は、相敬順せず。各〻自ら尊と稱す。是の故に菩薩は、宜しく彼に生まれたまふべからず」。

或は天有りて言はく、「[三七]勝光王は大威力有り。兵衆を統御して、能く怨敵を破る。彼に生まれたまふべし」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は剛强にして、善業を修せず。是の故に菩薩は、宜しく彼に生まれたまふべからず」。

或は天有りて言はく、「[三八]摩偸羅城の王を[三九]善臂と名く。勇猛安樂にして、富貴自在なり。彼に生まれたまふ可し」。復說いて言ふあり、「菩薩は彼に生まれたまはじ。何を以ての故に。其の王は本是れ

なり。佛初轉法輪の地として有名なり。

【一四】　仙人鹿苑。鹿野苑(Mṛgadāva)に同じ。又仙人住處、仙人墮處、鹿園、施鹿園など云ふ。中天竺波羅奈國に在り。佛成道の後、始て此處に來つて四諦の法を說き、憍陳如等五人の比丘を度す。

【一五】　時(Kāla)。

【一六】　方(Deśa)。

【一七】　國(Dvīpa)。

【一八】　族(Kula)。

【一九】　劫初。成住壞空の四劫の中の第一成劫の初をいふ。卽ち此の世界の成り初めなり。

【二〇】　劫減。住劫の中に於て、人壽八萬四千歲が、百年毎に一歲を減じて、人壽十歲に至る間をいふ。

【二一】　弗婆提(Pūrvavideha)。

【二二】　瞿耶尼(Godānīya)。

【二三】　欝單越 Uttarakuru)。

【二四】　閻浮提(Jambudvīpa)。以上の四を四洲と稱す。須彌山の四方の鹹海の中にありといふ。新譯にては、東勝身洲、南贍部洲、西牛貨洲、北瞿盧洲と稱す。

【二五】　羝羊(Eḍamūka)。羊の啞なるもの。至つて愚かなる人に譬ふ。

【二六】　旃陀羅(Caṇḍāla)。譯、屠者。四姓の外に在つて、屠殺を業とするもの。

し家に在らば、當に轉輪聖王と爲るべし。若し出家せば、當に成佛を得べし」と。復、天子有り。閻浮提に下り、辟支佛に告げて、是の如き言を作さく、「仁者、應に此土を捨つべし。何を以ての故に。十二年後に、應に菩薩有りて、神を降して胎に入るべし」と。是の時、王舍城[7]尾盤山[8]中に辟支佛有り。名を[9]摩燈と曰ふ。是の語を聞き已りて、自ら其の身を見ること、猶、委土の如し。座より起ち、踊りて虚空に在り。高さ[10]七多羅樹なり。火を化して身を焚き、涅槃に入り、唯[11]舍利を除して、空より下れり。是の故に此の地を[12]仙人墮處と名く。諸の比丘よ。是の時[13]波羅奈國の五百の辟支、天語を聞き已り、亦復是の如く火を化し、身を焚きて涅槃に入り、唯舍利を除し、空より下れり。復、過去に仁慈王有り。群鹿に無畏を施せる處なるを以て、是故に彼地を、亦[14]仙人鹿苑と名く。

爾の時、菩薩、天宮に處り、四種の心を以て、遍く觀察す。一には[15]時を觀じ、二には[16]方を觀じ、三には[17]國を觀じ、四には[18]族を觀ず。比丘よ。何が故に時を觀ずるか。菩薩は[19]劫初に於て母胎に入らず。唯[20]劫滅に於てす。世間の衆生、明かに老病死苦あることを了知す。菩薩是の時方に母胎に入る。何が故に方を觀ずるか。菩薩は東[21]弗婆提・西[22]瞿耶尼・北[23]鬱單越及び餘の邊地に於てせず。唯閻浮に現ず。所以は何ん。[24]閻浮提の人は、智慧有るが故なり。何が故に國を觀ずるか。菩薩は邊地に生ぜず。其の邊地の人は、多く頑鈍にして、根器有る無きこと、猶ほ[25]瘂羊の如く、善と不善との言說の義を知ること能はざるを以てなり。是の故に、菩薩は但中國に生ず。何が故に族を觀ずるか。菩薩は[26]旃陀羅・[27]毘舍・[28]首陀の家に生れず。四姓の中に、唯だ二族に於てす。[29]刹帝利種及び婆羅門なり。今、世間に於ては、刹帝利を重んず。是の故に菩薩は、刹利の家に生る。是の如く觀じ已りて、默然として住す。爾の時會中の諸の菩薩衆、及び諸の天子、各々相謂つて言はく、「菩薩今は當に何の國に於て、何の種姓に依りて、生を託すべきか」と。

天竺四姓の一。淨行と譯す。大梵天に奉事して淨行を修する一族なり。

【五】圍陀論(Veda)。婆羅門所傳の經典の名。

【六】三十二種大人之相(Dvātriṃśatmahāpuruṣalakṣaṇa)。此の三十二相は、佛に限らず、總ての大人の相なり。此の相を具するものは、家に在りては輪王となり、家を出づれば無上覺を開くといふ。是れ當時の人相說なり。三十二相の一一につきては、此經卷第三誕生品第七の初に詳かなり。

【七】王舍城(Rājagṛha)。中印度摩伽陀國に在り。頻婆娑羅王が、上茅城の舊都より、新に都せし所。

【八】尾盤山(Vaibhāra ?)。

【九】摩燈(Mātaṅga)。

【一〇】七多羅樹(Saptatālamitra)。多羅(Tāla)は樹の名。高辣樹と譯す。極高きものは、七八十尺ありと云ふ。七多羅樹とは多羅樹を七倍せる高さなり。

【一一】舍利(Śarīra)。身骨なり。又總じて死屍にいく。

【一二】仙人墮處(Ṛṣipatana)。下の仙人鹿苑を見よ。

【一三】波羅奈國(Vārāṇasī)。中印度恒河流域の國の名。今のベナレスを中心とせる地方

正に徧く一切の眞理を知る無上の智慧のこと。
【六六】淨幢(Śvetaketu)。
【六七】阿提目多花(Atimuktikaka)。
【六八】俱毘羅花(Kovidāra)。
【六九】瞻波迦花(Campaka)。
【七〇】波吒羅花(Pāṭala)。
【七一】目眞隣陀花(Mucilindā)。
【七二】阿輸迦花(Aśoka)。
【七三】鎭頭迦花(Tinduka)。
【七四】阿婆那花(Asana)。
【七五】揵尼迦花(Karṇikāra)。
【七六】堅固花(Keśara?)。
【七七】大堅固花(Sāla)。
【七八】摩利迦花(Mallikā)。
【七九】蘇曼那花(Sumanā)。
【八〇】跋羅花(Valla)。
【八一】婆利師迦花(Vārṣikī)。
【八二】拘旦羅花(Kuṇḍala?)。
【八三】蘇揵提花(Sugandha?)。
【八四】天妙意花(Devasumana?)。
【八五】優鉢羅花(Utpala)。青蓮花。
【八六】波頭摩花(Padma)。紅蓮花。
【八七】拘物頭花(Kumuda)。黃蓮花。
【八八】芬陀利花(Puṇḍarīka)。白蓮花。
【八九】妙香花(Sugandhita?)。
【九〇】鸚鵡(Śuka)。
【九一】舍利(Śāri)。
【九二】拘枳羅鳥(Kokila)。
【九三】鵝(Haṃsa)。
【九四】鴈(Dhārtarāṣṭra)。
【九五】鴛鴦(Cakravāka)。
【九六】孔雀(Mayūra)。
【九七】翡翠(Krośa)。
【九八】迦陵頻伽(Kalaviṅka)。
【九九】命命(Jīvaṃjīvaka)。
【一〇〇】結使。結も使も煩惱の異名。
【一〇一】然燈(Dīpaṃkara)。錠光と譯す。釋迦如來、因行中に於て、此の佛の出世に逢ひ、未來成佛の記を授けらる。
【一〇二】三垢。三毒の異名。貪瞋癡なり。
【一〇三】閻浮提(Jambudvīpa, Jambudvīpa)。又贍部洲とも稱す。須彌山の南方に當れる大洲の名にして、卽ち吾人の住處なり。
【一〇四】欲界(Kāmadhātu)。三界の一。婬欲と貪欲との二欲強き有情の住する所處を欲界と名く。上は六欲天より始めて、中に人界の四洲、下は八大地獄に至る、是なり。
【一〇五】三脫門。空・無相・無願の三なり。前出の三解脫門に同じ。
【一〇六】含識。心識を有するもの。卽ち有情。
【一〇七】涅槃(Nirvāṇa)。滅度と譯す。生死の因果を滅し、生死の瀑流を渡るなり。
【一〇八】智慧以爲手、從於精進生—第二句は、智慧の生ぜる理由なるを以て、—を加へたり。智慧を註せるを表して。
【一〇九】魔軍。惡魔の軍兵。一切の惡事佛道を妨ぐるものを魔軍とす。
【一一〇】盛—麗本には成に作り、宋元明の三本に盛に作る。今、後に從ふ。
【一一一】摩尼(Maṇi)。譯、珠、如意、珠の總名。

勝族品第三

佛、諸の比丘に告げたまはく、『爾の時、菩薩、是の如き偈を聞きて、卽ち座より起ち、自宮より出でて、法集堂に詣り、師子座に坐す。復、無量無邊の同乘同行の大菩薩衆有り。皆法堂に昇りて、師子座に坐す。各〻六十八拘胝の眷屬有りて、前後圍遶す。菩薩將に降生せんと欲して、十二年前、淨居天に有り。閻浮地に下り、婆羅門と作りて、圍陀論を說く。彼の論に載する所、「十二年後に一勝人有り。白象の形を現じて、母胎に入る。其の人三十二種大人の相を具足す。二の決定あり。若

【一】勝族品(Kulaparīśuddhi-parivarta)。
【二】師子座(Siṃhāsana)。佛は人中の師子なれば、佛の所坐を、總じて師子座と名く。
【三】閻浮地(Jambudvīpa)。舊稱、閻浮提。新稱、贍部洲。須彌山の南方に當れる大洲の名。卽ち吾人の住所。此洲の中心に閻浮樹の林あるを以て、洲名とす。
【四】婆羅門(Brāhmaṇa)。

【三九】梵住。色界無色界諸天の住處、卽ち慈悲喜捨の四無量心なり。

【四〇】四攝。攝は、委しくは攝事又は攝法。(Saṃgraha-vastu)一に布施攝(Dāna)、衆生の心に隨つて財を布施し法を布施す。二に愛語攝(Priya-vāditā)、衆生の根性に隨つて、善言慰喩す。三に利行攝(Artha-caryā)、身口意の善業を起して衆生を利益す。四に同事攝(Samānārthatā)、法眼を以て衆生の根性を見、其の所樂に隨つて、形を分けて示現し、其の所作を同じくす。如上の四法によつて、衆生を利益し、之によつて親愛の心を生ぜしめ、道を受けしむるが故に四攝法といふ。

【四一】十二緣。十二因緣(Dvādaśāṅga-pratityasamutpāda)とも云ふ。三世に渉つて、衆生が六道に輪廻する次第緣起を說くものなり。無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死をいふ。其の一一の註につきては、成正覺品第二十二の下を見るべし。

【四二】三解脫門(Tri-vimokṣa-mukha)。三三昧ともいふ。解脫とは、涅槃なり。能く涅槃に入るの門なれば、三解脫門といひ、能修の行につきて、三三昧といふ。一に空門(Śūnyatā)、諸法は因緣生にして、我なく我所有なしと觀ずるなり。二に無相門(Animitta)、滅諦の滅・靜・妙・離の四行相と相應する三昧なり。三に無願門(Apraṇihita)、是れ苦諦の苦・無常の二行相、集諦の因・集・生・緣の四行相と相應する三昧なり。

【四三】頻申(Vijṛmbhita)。あくびすること。

【四四】毘奈耶(Vinaya)。譯、律調伏。佛所說の戒律をいふ。

【四五】四威儀。行住坐臥の四に各〻儀則ありて、威德を損せざるをいふ。

【四六】十力。序品第一の下の力の註を見よ。

【四七】四無所畏。序品第一の下の無畏の註を見よ。

【四八】解脫(Mokṣa)。縛を離れて自在を得るの義。惑業の繫縛を解き、三界の苦果を脫すること。

【四九】無明(Avidyā)。闇鈍の心、諸法の事理を照了する明なきをいふ。

【五〇】菩提(Bodhi)。道又は覺と譯す。佛果に於ける無上の智慧をいふ。

【五一】拘物頭花(Kumuda)。譯、黃蓮花。

【五二】輪王。轉輪王(Cakravarti-rāja)、此の王、身に三十二相を具し、位に卽く時、天より輪寶を感得し、其の輪寶を轉じて四方を降伏すれば、轉輪王といふ。其の輪寶に、金銀銅鐵の四種ありて、次第の如く四三二一の大洲を領すといふ。

【五三】四天下。金輪王の領する東西南北の四大洲をいふ。

【五四】七菩提分。前出の七覺支を見よ。

【五五】十善。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見の十、能く理に順ずるが故に十善といふ。

【五六】須彌山(Sumeru)。蘇迷盧ともいふ。妙高と譯す。一小世界の中心にある山の名。水に入ること八萬由旬、水を出づること八萬由旬。其の頂上は、帝釋天の所居なり。

【五七】迴向。回轉趣向の義。己が所修の功德を回轉して、期する所に趣向せしむるをいふ。

【五八】五福德。後に十善あるに顧みれば、五戒の事ならんか。人界に生を受くべき福德なればなり。

【五九】七淨財(Saptadhana)。一に信財(Śraddhā-dhanam)、正法を信受するなり。二に戒財(Śīla-)、法律を持するなり。三に聞財(Śruta-)、能く正教を聞くなり。四に慙財(Hrī-)、自分に慚づるなり。五に愧財(Apatrāpya-)、人に愧づるなり。六に捨財(Tyāga-)、一切を捨離して染着なきなり。七に慧財(Prajñā-)、智慧事理を照すなり。諸經の所說少異あり。

【六〇】十善道。十善業道ともいふ。十善の業行は、以て善處に生ずる道なれば、十善道といふ。

【六一】五十二種の善根。菩薩の位地五十二階に相應する善根の謂なるべし。

【六二】四十分位。十住十行十迴向十地をいふ。

【六三】拘胝(Koṭi)。數の名。譯、億。

【六四】辟支佛。辟支迦佛陀(Pratyeka-buddha)の略。緣覺又は獨覺と譯す。初發心の時、佛に値ひて世間の法を思惟し、後、無佛の世に出で、加行滿じて自然に獨悟するが故に、獨覺と名け又內外の緣を觀待して、聖果を悟るが故に、緣覺と名く。

【六五】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara samyak-saṃbodhi)。無上正遍智と譯す。眞

【三〇】　正道(Ārya-mārga)。八聖道のこと。其の道邇邪を離るれば正道と云ひ、又聖者の道なれば聖道といふ。其の八正道とは一に正見(Samyakdṛṣṭi)、苦集滅道の四諦の理を見て分明なるをいふ。二に正思惟(-saṃkalpa)、既に四諦の理を見て尙思惟して眞智を增長せしむるをいふ。三に正語(-vāc)、眞智を以て口業を修め一切非理の語を作さざるをいふ。四に正業(-karmānta)、眞智を以て身の一切の邪業を除き清淨の身業に住するをいふ。五に正命(-ājīva)、身口意の三業を清淨にして正法に順ひて活命し五種の邪活法を離るるをいふ。六に正精進(-vyāyāma)、眞智を發用して强め涅槃の道を修するをいふ。七に正念(-smṛti)、眞智を以て正道を憶念し邪念なきをいふ。八に正定(-samādhi)、眞智を以て無漏清淨の禪定に入るをいふ。以上四念處より八正道までを三十七道品又は三十七菩提分法といふ。

【三一】　菩提分法(Bodhyaṅga)。總じては四念處、四正勤、四神足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七道品に名け、別しては三十七道品中の七覺支に名く。今は前による。四念處等の三十七法は、菩提を成就する行法の支分品類なれば、菩提分法と名くるなり。

【三二】　相好(Lakṣaṇavyañjana)。佛の身體に就いて、微妙の相狀の了別すべきを相と云ひ、更に細相の受樂すべきを好といふ。相は大相、好は更に大相を莊嚴する小相なり。丈六の化身に就けば、相に三十二あり、好に八十あり。

【三三】　那由他(Nayuta)。數目の名。此の方の億に當る。億に十萬百萬千萬の三等あり。故に那由他の數を定むるにも、諸說不同なり。

【三四】　梵釋四王。梵天と帝釋と四天王なり。梵天(Brahmadeva)は色界の初禪天なり。此の中に大梵、梵衆、梵輔の三天あり。大梵天王の名を、尸棄(Śikhin)といふ。常に梵天といふは、大梵天王を指す。帝釋は釋迦提桓因陀羅(Śakrodevānām indra)のこと。略して釋提桓因といふ。須彌山の頂上、忉利天の主なり。四天王(Catur-mahārājakāyikā)は護世四天王とも云ひ、帝釋の外將にして須彌山の半腹に居る。東は持國天(Dhṛtarāṣṭra)、南は增長天(Virūḍhaka)、西は廣目天(Virūpākṣa)、北は多聞天(Vaiśravaṇa)なり。

【三五】　摩醯首羅(Maheśvara)。前出。

【三六】　天(Deva)。欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天なり。以下摩睺羅伽までを八部衆と稱す。

【三七】　龍(Nāga)。畜類にて水屬の王なり。

【三八】　夜叉(Yakṣa)。新に藥叉と云ふ。空中を飛行する鬼神なり。

【三九】　乾闥婆(Gandharva)。香陰と譯す。陰は五陰の色身なり。彼が五陰は、唯香臭を嗅ぎて長養すれば、香陰と名く。帝釋天の樂神なり。俗樂を奏す。

【三〇】　阿修羅(Asura)。舊に無酒、新に非天と譯す。酒なければ無酒と云ひ、其の果報、天に類すれども天に非ざれば、非天と云ふ。常に帝釋と戰鬪を爲す。

【三一】　迦婁羅(Garuḍa)。金翅鳥と譯す。兩翅相去ること三百三十六萬里あり。龍を撮つて食と爲す。鳥類の王なり。

【三二】　緊那羅(Kiṃnara)。人非人と譯し、新に歌神と譯す。人に似て頭上に角あれば、人非人と云ひ、帝釋の樂神なれば、歌神と云ふ。此は法樂を奏する天神なり。

【三三】　摩睺羅伽(Mahoraga)。大蟒神、大腹行などと譯す。地龍なり。以上八部衆。

【三四】　無礙解(Pratisaṃvit)。是れ諸菩薩說法の智辯なれば、意業に約して無礙解と云ひ、口業に約して無礙辯といふ。之に四あり。一に法無礙解(Dharma-)、能詮の教法に於て滯ることなきをいふ。二に義無礙解(Artha-)教法所詮の義理を知つて滯ることなきをいふ。三に辭無礙解又は詞無礙解(Nirukti-)、諸方の言辭に於て通達自在なるをいふ。四に樂說無礙解又は辯無礙解(Pratibhāna-)、前の三種の智を以て、衆生の爲に樂說自在なるをいふ。

【三五】　四瀑流。瀑流とは三界の煩惱能く善品を漂流するが故に瀑流と名く。一に欲瀑流、欲界の貪瞋癡等なり。二に有瀑流、色界無色界の貪慢等なり。三に見瀑流、三界の見惑なり。四に無明瀑流、三界の無明なり。

【三六】　煩惱(Kleśa)。貪欲・瞋恚・愚癡等の諸惑が、心を煩はし身を惱ますをいふ。

【三七】　增上。總て勢力の强きをいふ。

【三八】　世の八法。利・衰・稱・譏・毀・譽・樂・苦の八をいふ。

過無し。憶ふに昔無邊劫に、種姓恒に尊に處し、戒・忍及び精進、定・慧久しく修習したまへり。又念ふに無邊劫に、諸の如來を供養し、既に生老死を超えて、當に度すべき所を度すべし。衆生は悲愍すべし。惟尊、之を捨てたまふこと勿れ。諸の天龍鬼神、皆悉く共に瞻待しまつる。衆生久しく渇欲すること、海の群流を納るるが如し。惟尊は智充足したまふ。

當に諸の渇ける者を救ひたまふべし。世の譏嫌に遠ざかり、法を樂しみて貪欲を捨て、垢を離れて清淨に眠り、諸の世間を哀愍したまふ。菩薩、宿福德ありて、兜率宮に處りたまふに、天衆百千億、法を聞いて曾つて倦むことなし。當に[一〇三]閻浮提に下り、慈を垂れ甘露を灑ぐべし。已に[一〇四]欲界に過ぐる無數億の諸天、亦復共に希望す。菩薩當に下生したまふべし。必ず魔業を壞りて、能く諸の異學を摧きたまはば、佛道掌を觀るが如くならん。時到れり宜しく住まりたまふこと勿れ。煩惱の火增盛なり。願はくは爲に慈雲を布き、普く法雨を雨して、諸の猛焰を滅除したまへ。前佛已に過ぎ去りたまへり。今佛醫王と作り、當に[一〇五]三脫門を以て藥と爲して衆病を除きたまふべし。彼の諸の[一〇六]含識をして、[一〇七]涅槃に至ることを得せしめたまへ。如來の大法音は、外道を悉く摧伏すること、譬へば師子吼ゆるに、百獸咸く驚怖するが如し。[一〇八]智慧を以て手と爲し、――精進より生ず――。無量の諸の[一〇九]魔軍、自在に能く摧伏せん。梵釋百千の衆、敬心に佛を見たてまつらんことを祈る。

四王當に鉢を奉ずべし。唯だ悕くば速かに下生したまへ。尊今應に豫め觀じたまふべし。何の種族に依らんと欲したまふか。當に閻浮界に往きて、菩薩道を行ずることを示したまふべし。器の珍寶を[一一〇]盛るに、其の器自ら嚴潔なる如し。智慧の[一一一]淨摩尼よ、彼に於て甘露を雨らしたまへ。諸天樂器の中に、是の如き偈を演出し、菩薩を勸請す。大悲衆生を救ひたまへ』。

の邪信を破するもの。二に精進力(Viryā-)、精進根增長して能く身の懈怠を破するもの。三に念力(Smṛti-)、念根增長して能く諸の邪念を破するもの。四に定力 Samādhi-)、定根增長して能く諸の亂想を破するもの。五に慧力(Prajñā-)、慧根增長して能く三界の諸惑を破するもの。

【一九】覺支、菩提分(Bodhyaṅga)の譯。定慧を均等ならしめて、聖道を生ぜしむる法。覺法七種に分るるが故に支又は分と云ふ。七覺支とは一に擇法覺支(Dharmapravicaya-)、智慧を以て法の眞僞を簡擇す。二に精進覺支(Vīrya-)、勇猛の心を以て邪行を離れ眞法を生ずるなり。三に喜覺支(Prīti-)、心に善法を得て歡喜を生ずるなり。四に輕安覺支(Praśrabdhi-)、身心の麁重を斷除して輕利安適ならしむるなり。五に念覺支(Smṛti-)、常に定慧を明記して忘れず之をして均等ならしむるなり。六に定覺支(Samādhi-)、心を一境に住して散亂せしめざるなり。七に行捨覺支(Upekṣā-)、諸の妄謬を捨て一切の法を捨て、平心坦懷更に追憶せざるなり。此の七事を以て無學果を證するを得るなり。

家す。曾つて五十百億那由他拘胝の佛の所に於て、而も大施を行ず。已に曾つて三百五十拘胝の諸の辟支佛に親近し、已に曾つて無量阿僧祇の諸の聲聞衆を敎化して、皆正方便中に住せしむ。阿耨多羅三藐三菩提を證して、乃ち一生補處に趣かんと欲するが爲に、此より命終つて兜率天に生じて、彼の天子と爲り、名を淨幢と曰ふ。恒に諸天の供養する所と爲る。當に彼に於て沒して、後に人中に生れて、阿耨多羅三藐三菩提を證すべし』。

佛、諸の比丘に告げたまはく、『彼の天宮の中に、三萬二千の微妙安樂なる所住の處あり。高閣・重門・層樓・大殿あり。軒檻窓牖・花蓋繒幡あり。寶鈴垂飾し、珠網交絡す。散するに曼陀羅花・摩訶曼陀羅花を以てし、處處に彌滿す。諸天婇女、百千拘胝那由他ありて、天の伎樂を奏す。其の諸寶樹は、衆の天花を生ず。所謂 阿提目多花・倶毘羅花・瞻波迦花・波吒羅花・目眞隣陀花・阿輸迦花・鎭頭迦花・阿婆那花・建尼迦花・堅固花・大堅固花なり。處處に開敷して、以て嚴飾を爲し、眞金の線網、其の上に彌覆す。周匝間廁して、種種の莊嚴あり。諸の寶池の中に、摩利迦花・蘇曼那花・跋羅花・婆利師迦花・拘日羅花・蘇建提花・天妙意花・優鉢羅花・波頭摩花・拘物頭花・芬陀利花・妙香花を生ず。是の如き等の花、大花帳を成して、處處の莊嚴たり。無量の羽族、鸚鵡・舍利・拘枳羅鳥・鵝 鴈・鴛鴦・孔雀・翡翠・迦陵頻伽・命命等の鳥あり。雜類の形色、微妙の音を出す。諸天子等、百千拘胝那由他の數あり、法堂に大集して、菩薩を圍遶す。所說の無上の大法を聽受して、貪・瞋・憍慢の 結使、一切の煩惱を除斷す。廣大心を生じて、踊躍歡喜し、安隱樂に住す。菩薩久しく修せる淨業の感ずる所なり。諸天の伎樂、八萬四千、皆種種微妙の音聲を出す。其の音聲の中に、頌を說いて曰く、

『尊、憶ふに 然燈に記(せられたまひてより)、無邊の福を積習し、生死を超越して、智慧より光明を發す。　長時に惠施を修して、其の心常に染を離れ、　三垢・憍慢盡きて、語業に諸の

の惡に對しては更に生ぜざらしめんが爲に勤めて精進す。三に未生の善に對しては生ぜしめんが爲に勤めて精進す。四に已生の善に對しては增長せしめん爲に勤めて精進す。

【一六】 神足(Rddhipāda)。四正勤に次で修する所の行品なり。之に四ありて四神足と云ひ又四如意足とも云ふ。四種の禪定にして、心によつて心を攝め、定慧均等ならしめて、所願皆得るが故に、如意足とも神足とも名くるなり。一に欲神足、二に精進神足、三に心神足、四に思惟神足なり。次第の如く、欲、精進、心、思惟によつて、定を引發するなり。

【一七】 根。(Indriya) 五根をいふ。一に信根(Śraddhā)、三寶四諦を信ずること。二に精進根(Vīrya)、勇猛に善法を修すること。三に念根(Smṛti)、正法を憶念すること。四に定根(Samādhi)、心を一境に止めて散失せしめざること。五に慧根(Prajñā)、眞理を思惟すること。此の五法能く他の一切の善法を生ずる本なれば、五根と名く。

【一八】 力(Bala)。五力をいふ。五根增長して五障を治する勢力を有するもの。一に信力(Śraddhā)、信根增長して諸

罣礙する所無きとを以て其の香と爲す。[38]世の八法の能く染する所に非ず。師子王の如し。福智を體と爲し、神通を足と爲し、聖諦を爪と爲し、[39]梵住を牙と爲し、[40]四攝を頭と爲す。[41]十二緣を覺りて以て其の軀を生じ、三十七品菩提分法明了の知を以て其の頂と爲す。[42]三解脫門を以て[43]頻申と爲し、禪定智慧を以て其の目と爲し、諸の三昧を以て其の巖穴と爲す。[44]毘奈耶の林と[45]四威儀の路は其の身を怡悅す。[46]十力[47]四無所畏は慣習の所成にして其の力と爲る。諸の貪欲を離るるを其の行步と爲す。自在・無畏・無我・無法を以て其の吼と爲す。外道を摧伏すること群鹿を制するが如し。無上丈夫人中の日なり。[48]禪定・解脫・智慧を光と爲し、外道の螢燭を皆悉く掩蔽す。[49]無明昏翳は之を破りて餘無く、天人の中に於て廓然大照す。譬へば明月の白分に圓滿なるが如し。世間見ることを樂ひ、清涼にして雲無く、衆星の中に皎然として最も勝る。解脫の路を示し、[50]菩提の道を照す。天人の[51]拘物頭花を開敷す。譬へば[52]輪王の[53]四天下に於て法化平等なるが如し。[54]七菩提分を以て其の寶と爲す。一切衆生に於て心平等を行ずるを以て[55]十善を爲す。大願の成就せる無礙の法を以て其の輪と爲す。譬へば巨海の深廣にして入り難く、無量の衆寶其の中に充滿し、潮の限を過ぎざるが如し。緣起の智慧は深廣にして入り難く、一切の法寶其の中に充滿し、衆生の機に應じて爲に限を過ぎず。其の心平等にして、諸の憎愛を離るること、地水火風の如し。其の量、高妙堅固にして、動じ難きこと[56]須彌山の如し。智慧廣大にして、諸垢の染著する所と爲らざること、猶ほ虛空の如し。意、清淨を樂しみて、能く惠施を行ず。久しく淨業を積みて、虛妄の語無し。已に能く一切の善根を具足して、自在に熏修す。七阿僧祇に、習ふ所の善根、皆已に[57]迴向す。[58]五福德を弘め、[59]七淨財を施し、[60]十善道を行じ、[61]五十二種の善根を增長す。已に能く正行を修習して、[62]四十分位に相應す。已に能く誓願を修習して、四十分位に相應す。已に能く意樂を修習して、四十分位に相應す。已に能く正直を修習して、四十分位を解脫す。曾て四百億那由他[63]拘胝の佛の所に於て、佛に隨つて出

菩薩の大行に名く。

【九】大慈(Maitrī)。能く樂を與ふるの心なり。以下の四を合して四無量心、四梵行等と稱す。

【一〇】大悲(Karuṇā)。能く苦を拔く心。

【一一】大喜(Muditā)。人の離苦得樂を見て慶悅を生ず心なり。

【一二】大捨(Upekṣā)。如上の三心之を捨して心に存着せざるなり。

【一三】梵行。淨行に同じ。

【一四】念處(Smṛtyupasthāna)。念とは能觀の智、處とは所觀の境。智を以て境を觀察するを念處といふ。新譯には念住といふ。此に四あり。其の四念處とは一に身念處(Kāya-)、身は不淨なりと觀ず。二に受念處(Vedanā-)、受は苦なりと觀ず。三に心念處(Citta-)、心は無常なりと觀ず。四に法念處(Dharma-)、法は無我なりと觀ず。以下三十七道品。

【一五】正勤(Prahāṇa)。四念處に次で修する所の行品なり。一心に精進して行ずるが故に正勤と名く。又能く懈怠を斷ずるが故に正斷と名く。之に四あり。其の四正勤とは、一に已生の惡に對しては除斷の爲に勸めて精進す。二に未生

兜率天宮品第二

爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『何等をか名けて方廣神通遊戲大嚴經典となす。所謂菩薩を顯はす。兜率宮に住して、常に無量威德の諸天の供養する所と爲り、灌頂を逮得して、百千の梵衆に稱揚せらる。願力圓滿して、能く正しく諸佛の法藏を了知す。慧眼淸淨にして、其の心普く洽ほす。慚愧あつて足ることを知り、正念にして慧行あり。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、方便善巧の勝波羅蜜、大慈・大悲・大喜・大捨を熾然に修行す。梵行明に達して大神通を得、知見前に現じて無著無礙なり。念處・正勤・神足・根・力・覺支・正道の菩提分法、皆邊際を盡くす。相好を具足して、其の身を莊嚴し、衆生を利益して、時として暫くも替る無し。說の如くに作して、虛妄の語なく、正法を演說して、貪求する所無し。心淨く質直くして、諸の邪諂を離れ、怖畏有ることとなく、亦憍慢無し。一切衆生に於て、其の心平等なり。無量百千萬億の諸佛如來を供養し、恒に無量百千那由他の諸大菩薩の爲に恭敬尊重せらる。又梵・釋・四王、摩醯首羅、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦婁羅・緊那羅・摩睺羅伽等に。名を聞いて稱讃し、歡喜心を生ぜしむ。無礙解に入りて、方便善巧あり。一切文句差別の相を、皆悉く能く知る。凡そ宣說あれば、曾つて所著無し。大商主の如く、大法船に乘じて生死の海に遊び、三十七菩提の分、無量の珍寶を得たり。而して佛法に於て陀羅尼を得て、憶念修行して終に錯謬せず。大導師の四瀑流を越ゆるが如く、誓願滿足して魔怨を降伏し、諸の異學を摧く。金剛の慧及び大悲の軍を以て、能く煩惱を破る。譬へば蓮華の、功德廣大なる池中より出づる如く、增上願力の生起する所なり。大菩提心を其の根と爲し、潤すに甚深淸淨の法水を以てす。方便善巧を以て其の臺と爲し、菩提を莖と爲し、禪定を蘂と爲す。諸の熱惱を離れ淸淨廣大なるを以て其の葉と爲す。多聞持戒と及び放逸ならず

※兜率天宮品（Samutsāha-parivarta）。

【一】灌頂（Abhiṣecani）。天竺の國王卽位の時に、四大海の水を以て、頂に灌いで祝意を表する式なり。等覺の菩薩は、色界の摩醯首羅天に於て、十方の諸佛より灌頂を受けて成佛す。

【二】布施。檀那（Dāna）の譯。福利を人に施すこと。以下の六を六波羅蜜（譯六度）といふ。

【三】持戒。尸羅（Śīla）の譯、戒。戒律を受持して犯觸せざること。

【四】忍辱。羼提（Kṣānti）の譯。諸の侮辱惱害を忍受して恚恨なきこと。

【五】精進。毘梨耶（Vīrya）の譯。身心を精勵して前後の五度を進修すること。

【六】禪定。禪那（Dhyāna）の略、眞理を思惟して散亂の心を定止すること。

【七】智慧。般若（Prajñā）の譯。諸法に通達する智及び斷惑證理する慧なり。

【八】方便善巧（Upāya）。機に隨つて物を利するをいふ。波羅蜜は到彼岸又は度と譯し、

者の尊號にして、もと內外道に通ずる稱號なり。今は佛のこと。

【六三】　釋師子(Śākyasiṃha)。釋尊の德號なり。三界に於て無畏自在なること獸中の師子王の如し。故に釋師子と稱す。釋は釋迦の略。

【六四】　甘露(Amṛta)。味甘くして蜜の如きもの。天人の所食、不死の藥となす。

【六五】　禪定。禪は梵語、禪那(Dhyāna)の略。定は梵語、三昧(Samādhi)の譯なり。一心に物を考へ、一境に念を靜むること。

【六六】　阿僧祇(Asaṃkhya)。譯、無數。印度數目の名。

【六七】　劫(Kalpa)。譯、長時。通常の年月日時を以て算し能はざる長時をいふ。

【六八】　摩醯首羅(Maheśvara)。譯、大自在。色界の頂上に位する天神の名。

【六九】　難陀(Nanda)。

【七〇】　蘇難陀(Sunanda)。

【七一】　方廣神通遊戲大莊嚴法門(Lalitavistara nāma dharmaparyāyaḥ sūtranto mahāvaipulyanicayo)。

【七二】　兜率(Tuṣita)。譯、知足。欲界の天處にして、夜摩天と樂變化天との中間に在り。補處の菩薩は、兜率の內院に居るとせらる。

【七三】　五欲。色聲香味觸の五境。此れ人の欲心を起すものなるが故に、五欲と名く。

【七四】　力。(Bala)佛所具の十種の力用をいふ。十力とは一に知覺處非處智力、處とは道理の義、物の道理非道理を知る智力なり。二に知三世業報智力、一切衆生の三世の因果業報を知る智力なり。三に知諸禪解脫三昧智力、諸の禪定及び八解脫三三昧を知る智力なり。四に知根上下智力、衆生の機根の上下優劣あるを知悉する智力なり。五に知種種解智力、一切衆生の種種の知解を知る智力なり。六に知種種界智力、世間の衆生の種種の境界同じからざるに於て如實に普く知る智力なり。七に知一切至所道智力。五戒十善の行は人間天上に至り八正道の無漏法は涅槃に至る等の如く、各々其の行因の至る所を知るなり。八に知天眼無碍智力、天眼を以て衆生の生死及び善惡の業緣を見るに障碍なき智力なり。九に知宿命無漏智力、衆生の宿命を知り又無漏の涅槃を知る智力なり。十に知永斷習氣智力、一切の妄惑の餘氣を永く斷じて生ぜしめざるに於て能く如實に知る智力なり。

【七五】　無畏。(Vaiśāradya)佛が大衆の中に於て法を說くに泰然として畏るること無き德なり。又無所畏といふ。之に四あり。其四無畏とは、一に一切智無所畏、大衆の中に於て、我は一切智人なりと明言して畏心なきをいふ。二に漏盡無所畏、佛大衆の中に於て我は一切の煩惱を斷盡せりと明言して畏心なきをいふ。三に說障道無所畏、佛大衆の中に於て惑業等の諸の障法を說いて畏心なきをいふ。四に說盡苦道無所畏、佛大衆の中に於て戒定慧等の諸の盡苦の正道を說いて畏心なきをいふ。

【七六】　波頭摩勝佛。以下諸佛の梵名を出す。

1. Padmottara 2. Dharmaketu 3. Dīpaṅkara 4. Guṇaketu 5. (功德生佛缺) 6. Mahākara 7. Ṛṣideva 8. Śrītejas 9. Satyaketu 10. Vajrasaṃhata 11. Sarvābhibhū 12. Hemavarṇa 13. Atyuccagāmin 14. Prabhāsāgara 15. Puṣpaketu 16. Vararūpa 17. Sulocana 18. Ṛṣigupta 19. Jinavaktra 20. Unnata 21. Puṣpita 22. Ūrṇatejas 23. Puṣkara 24. Suraśmin 25. Maṅgala 26. Sudarśana 27. Mahāsiṃhatejas 28. Sthitabuddhidatta 29. Vasantagandhin 30. Satyadharmavipraktirtin 31. Jiṣya 32. Puṣya 33. Lokasundara 34. Vistirṇabheda 35. Ratnakīrtin 36. Ugratejas 37. Brahmatejas 38. Sughoṣa 39. Supuṣpa 40. Sumanojñaghoṣa 41. Suceṣṭarūpa 42. Prahasitanetra 43. Guṇarāśin 44. Meghasvara 45. Sundaravarṇa 46. Āyustejas 47. Salīlagajagāmin 48. Lokābhilāṣita 49. Jitaśatru 50. Saṃpūjita 51. Vipaśyin 52. Śikhin 53. Viśvabhū 54. Krakucchanda 55. Kanakamuni 56. Kāśyapa

毘婆尸より迦葉に至る六佛に、釋迦牟尼を加へて、過去七佛といふ。

【七七】　大乘。摩訶衍(Mahāyāna)の譯。灰身滅智の空寂涅槃を求めしめる小乘に對し、一切智を開かしむる敎を大乘といふ。

【七八】　三寶(Triratna)。佛法僧をいふ。

【七九】　曼陀羅花(Mandārava)。天花の名。譯、適意。

岸に到るが故に、到彼岸といふ。
【二九】彌勒菩薩。彌勒(Maitreya)慈氏と譯す。釋迦佛を繼承して、今より五十六億七千萬年の後に出世し、龍華樹下に成道したまふといふ菩薩。
【三〇】陀羅尼自在(Dhāraṇīśvararāja)。
【三一】師子王(Siṃhaketu)。
【三二】成就義(Siddhārthamati)。
【三三】寂戒慧(Praśāntacāritramati)
【三四】常精進(Nityodyukta)。
【三五】無礙慧(Pratisaṃvitprāpta)。
【三六】大悲思惟(Mahākaruṇācandri)。
【三七】比丘尼(Bhikṣuṇī)。女子の出家して具足戒を受けしものゝ通稱。
【三八】優婆塞(Upāsaka)。譯、淸信士。五戒を受けたる男子の稱、
【三九】優婆夷(Upāsikā)。譯、淸信女。五戒を受けたる女子の稱。
【四〇】刹利。刹帝利(Kṣatriya)の略、印度四姓の第二。武族なり。
【四一】婆羅門(Brāhmaṇa)。四姓の第一。梵天に奉事して淨行を修する文族なり。
【四二】長者(Gṛhapati)。財を積み德を具ふる者の通稱。
【四三】居士(Kulapati)。家に在つて佛道を志すものの稱。
【四四】四事。衣服・飲食・臥具・湯藥なり。
【四五】如來。以下佛の十號なり。如來(Tathāgata)とは、如實の道に乘じて來り、正覺を成ずるが故なり。
【四六】應供(Arhat)。人天の供養に應ずべきが故に。
【四七】正遍知(Samyaksaṃbuddha)。正しく遍く一切の法を知るが故に。
【四八】明行足(Vidyācaraṇasaṃpanna)。三明の行具足するが故に。
【四九】善逝(Sugata)。如實に彼岸に去つて、再び生死海に退沒せざるが故に。
【五〇】世間解(Lokavid)。世間の有情非情のことを能く解するが故に。
【五一】無上士(Anuttara)。一切衆生の中に於て無上なるが故に。
【五二】調御丈夫(Puruṣadamyasārathi) 能く丈夫を調御して善道に入らしむるが故に。
【五三】天人師(Śāstā devamanuṣyāṇāṃ)。人及び天の導師なるが故に。
【五四】佛世尊(Buddhabhagavat)。佛は佛陀の略、覺者と譯す。世尊は世に尊重せらる義なり。
【五五】五眼(Pañcacakṣu)。一に肉眼、肉身所有の眼。二に天眼、色界の天人所有の眼。人中禪定を修して之を得べし。遠近內外晝夜を問はず、能く見ることを得。三に慧眼、二乘の人の眞空無相の理を照見する智慧をいふ。四に法眼、菩薩の衆生を度せんが爲に一切の法門を照見する智慧をいふ。五に佛眼、佛陀の身中、前の四眼を具備するをいふ。
【五六】六通。三乘の聖者所得の神通に六種あり。一に神境智證通(Ṛddhiviṣayajñāna)、不思議に境界を變現する通力。又、遊往自在なるより、神足通ともいひ、身如意通ともいふ。二に天眼智證通(Divyacakṣu)、色界天の眼根を得て、照久無礙なるもの。三に天耳智證通(Divyaśrotra)、色界天の耳根を得て聽聞無礙なるもの。四に他心智證通(Paracittajñāna)、他人の心念を知るに於て無礙なるもの。五に宿命智證通(Pūrvanivāsānusmṛtijñāna)、自己及び六道の衆生の宿世の生涯を知るに於て無礙なるもの。六に漏盡智證通(Āsravakṣayajñāna)、三乘の極致、諸漏卽ち一切の煩惱を斷盡するに無礙なるもの。此六通を成就するは、三乘の聖者に限る。五通といふ時は、前五をいふなり。
【五七】初中後善。之を三善といふ。佛の說法は、初中後の三時共に善味なるをいふ。
【五八】佛莊嚴三昧(Buddhālaṃkāravyūha samādhi)。
【五九】頂髻。佛の頂上にありて、狀、髻の如き肉團なり。故に之を肉髻(Uṣṇīṣa)といふ。
【六〇】憶念過去諸佛無著智(Pūrvabuddhānusmṛtyasaṅgajñānālokālaṃkāra)。
【六一】淨居天(Śuddhāvāsa)。色界の第四禪にて不還果を證せる聖者の生すべき處にして、之に五地あり。一に無煩天(Avṛha)、一切煩雜無き所。二に無熱天(Atapa)、一切の熱惱なき所。三に善現天(Sudṛśa)、能く勝法の現はるる所。四に善見天(Sudarśana)。能く勝法を見る所。五に色究竟天(Akaniṣṭha) 色天最勝の所。此の五は、只聖人居するのみにて、異生の雜なきが故に淨居といふ。
【六二】牟尼(Muni)。譯、寂。身口意の三業を靜止する學道

謂(1)波頭摩勝佛、(2)法幢佛、(3)爲照明佛、(4)功德幢佛、(5)功德性佛、(6)大性佛、(7)仙天佛、(8)勝光明佛、(9)眞幢佛、(10)金剛堅固佛、(11)降伏一切佛、(12)眞金色佛、(13)極高行佛、(14)珊瑚海佛、(15)花幢佛、(16)最勝色佛、(17)善明佛、(18)仙護佛、(19)勝輪佛、(20)高勝佛、(21)開敷蓮花佛、(22)眉間光明佛、(23)蓮華臺佛、(24)善光明佛、(25)吉祥佛、(26)善見佛、(27)師子光佛、(28)堅牢惠施佛、(29)香春佛、(30)廣大名稱佛、(31)底沙佛、(32)弗沙佛、(33)世間端嚴佛、(34)普光明佛、(35)寶稱佛、(36)最勝光明佛、(37)梵光佛、(38)善聲佛、(39)妙花佛、(40)美音佛、(41)上色行佛、(42)微笑目佛、(43)功德聚佛、(44)大雲聲佛、(45)善色佛、(46)壽光佛、(47)象王遊歩佛、(48)世間欣樂佛、(49)降伏魔怨佛、(50)正應供佛、(51)毘婆尸佛、(52)尸棄佛、(53)毘葉浮佛、(54)迦羅孫佛、(55)倶那含牟尼佛、(56)迦葉佛、是の如き等の過去の無量の諸佛如來、皆此の經を說きたまへり。唯だ願はくば世尊。還つて過去の諸佛の如く、無量の衆生を利益し安樂にし、世間を悲愍して、義利を得せしめたまへ。諸の天人をして、大乘中に於て增益を得せしめたまへ。異道を降伏し、魔怨を摧滅して、菩薩所行の功德を顯發したまへ。而して上乘に於て勸勉精進して、正法を攝受し、三寶の種を紹ぎて、斷絕せざらしめたまへ。成佛を示現して、事業圓滿の故に、亦是の經を說きたまへ』と。如來、爾の時に、諸天を哀愍し、默然として請を受けたまふ。是の時に諸天、佛の垂許を蒙り、歡喜踊躍して淸淨心を生じ、稽首作禮して、右遶三匝す。天の曼陀羅花を散じて、佛を供養し、忽然として現ぜず。

爾の時、世尊、晨朝の時に於て、迦羅道場に詣り、座を敷きて坐したまひ、――諸大菩薩及び聲聞衆、恭敬圍遶す。――諸の比丘に告げたまはく『昨、中夜に於て、摩醯首羅、及び難陀、蘇難陀等の無數の淨居天衆、我が足を稽首し、合掌恭敬して、我に白して言さく『唯だ願はくば如來、神通遊戲大嚴經典を演說して、一切世界の天人を憐愍し、諸の菩薩をして現在未來に增益を得せしめたまへ』と。我、時に默然として、其の請ずる所を可せり。汝等諦に聽け。我今宣說せん』と。

に從侍すること二十五年。多聞第一。

【二一】羅睺羅(Rāhula)。佛の嫡子。密行第一。

【二二】菩薩摩訶薩。具には菩提薩埵摩訶薩埵(Bodhisattva mahāsattva)といふ。菩提薩埵は道衆生、摩訶薩埵は大衆生と譯す。道果を求むるが故に道衆生と云ひ、聲聞緣覺に簡んで、大衆生と云ふ。

【二三】一生補處(Ekajātipratibuddha)。前佛既に滅してのち、成佛して其の處を補ふを、補處といふ。而も一生を隔てて成佛すれば、一生補處といふ。卽等覺の位の菩薩なり。

【二四】遊戲神通。佛菩薩が、神通に遊んで人を化し、以て自ら娛樂するを云ふ。戲は自在の義。

【二五】三昧(Samādhi)。定と譯す。心を一處に定めて動かざること。

【二六】法忍。法を信じて惑はざること。

【二七】陀羅尼(Dhāraṇī)。總持と譯す。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用をいふ。智慧の目なり。

【二八】波羅蜜(Pāramitā)。到彼岸と譯す。菩薩の大行に名くるなり。此の大行に乘じて、能く生死の此岸より涅槃の彼

したまへり。

爾の時、如來、中夜分に於て、[五八]佛莊嚴三昧に入り、[五九]頂髻より大光明を放ちたまふ。其の光を[六〇]憶念過去諸佛無著智と名く。上、[六一]淨居天宮を照す。諸の天子を開發せんと欲するが爲の故に、光明網中にして、偈を說いて言はく、

[六二]『牟尼は身口意淸淨なり。智慧の光明、世間を照す。此の光、最勝にして、冥暗を除く。[六三]釋師子に於て、應に歸命すべし。智慧の大海に勝威德あり。法の自在を知りて法王と爲る。世間應に供すべし、天中の天。自在を覺悟せり、應に歸命すべし。所有の調へ難き心已に調ひ、意淨くして諸の魔網を超出す。其の見聞する所、空しく過ぎず。彼岸に解脫せり、應に歸命すべし。佛に體性無く與に等しきもの無し。所作無邊にして、常に寂然たり。淨妙の理を知つて、疑惑を除く。一切に深く信ぜしむ、應に歸命すべし。[六四]甘露の藥を施す大醫王なり。辯才雄猛にして邪道を摧く。法を眷屬と爲して勝義を知る。導師として無上法を演說せん』と。

爾の時に淨居天子、是の如き偈を聞きて、[六五]禪定より起ち、即時に、過去無量無邊、[六六]阿僧祇[六七]劫の諸佛如來、及び佛國土の功德莊嚴、說法衆會を憶念す。皆悉く明了なり。時に、[六八]摩醯首羅・[六九]難陀・[七〇]蘇難陀等の無數の淨居天衆、光明赫奕・威神魏魏として、祇樹給孤獨園を照し、佛所に來詣して、佛足を頂禮し、一心に合掌恭敬して立ち、佛に白して言さく、『世尊。經あり。名けて[七一]方廣神通遊戲大莊嚴法門と爲す。菩薩の衆德の本を顯示す。——[七二]兜率微妙の天宮に處り、思惟して生を降して勝種を示現す。諸の功德を具して、童子の事を行ず。藝業・伎術・工巧・書算・捔力・騁武は、世間に於て皆悉く最勝なり。[七三]五欲を受くることを示す。菩薩道を具して、魔軍を降伏し、如來の[七四]力[七五]無畏等の一切佛法を出生す。——此經は是の如し。過去の無量の諸佛世尊、皆已に宣說したまへり。所

し五比丘の上首。

【八】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)。大迦葉ともいふ。佛弟子中頭陀第一を以て知らる。以下第一と註せるは、所謂十大弟子にして、其の中、解空第一の須菩提(Subhūti)の名を缺く。

【九】舍利弗(Śāriputra)。智慧第一。

【一〇】摩訶目乾連(Mahāmaudgalyāyana)。大目乾連といひ、略して目連といふ。神通第一。

【一一】摩訶迦旃延(Mahākātyāyana)。論議第一。

【一二】富婁那彌多羅尼子(Pūrṇamaitrāyaṇīputra)。略して富婁那といふ。說法第一。

【一三】摩訶男(Mahānāma)。最初に度せられたる五比丘の一人。

【一四】阿㝹婁馱(Aniruddha)。阿那律とも音譯す。天眼第一。

【一五】劫賓那(Kapphiṇa)。

【一六】跋提羅(Bhadrika)。最初に度せられたる五比丘の一人。

【一七】優波離(Upāli)。持律第一。

【一八】難陀(Nanda)。佛の親弟。

【一九】娑伽陀(Svāgata)。

【二〇】阿難(Ānanda)。阿難陀の略。佛の從弟にして、佛

方廣大莊嚴經[一]

一名神通遊戯

巻の第一

序品第一[二]

是の如く我聞けり。一時、佛、舍衛國[三]、祇樹給孤獨園[四]に在したまひ、大比丘衆[五]萬二千人と倶なりき。皆是、大阿羅漢[六]なり。其の名を阿若憍陳如[七]・摩訶迦葉[八]・舍利弗[九]・摩訶目乾連[一〇]・摩訶迦旃延[一一]・富婁那彌多羅尼子[一二]・摩訶男[一三]・阿冕婁駄[一四]・劫賓那[一五]・跋提羅[一六]・優波離[一七]・難陀[一八]・娑伽陀[一九]・阿難[二〇]・羅睺羅[二一]と曰ふ。是の如き、衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。菩薩摩訶薩[二二]三萬二千人あり。皆是一生補處[二三]・遊戯神通[二四]・三昧自在[二五]なり。大願滿足して、無礙慧に入り、諸の法忍[二六]を獲、陀羅尼[二七]を具し、辯才滯り無し。一切皆波羅蜜[二八]より生ず。已に能く菩薩の諸地を圓滿し、已に一切菩薩の自在を得たり。其の名を彌勒菩薩[二九]・陀羅尼自在菩薩[三〇]・師子王菩薩[三一]・成就義菩薩[三二]・寂戒慧菩薩[三三]・常精進菩薩[三四]・無礙慧菩薩[三五]・大悲思惟菩薩[三六]と曰ふ。是の如き等の菩薩衆と倶なりき。

爾の時に世尊、諸の四衆、——比丘[三七]・比丘尼・優婆塞[三八]・優婆夷[三九]・國王・王子・大臣・官屬・刹利[四〇]・婆羅門[四一]・長者[四二]・居士[四三]、及び諸の外道の無央數衆の爲に、常に四事[四四]を以て恭敬施安せられたまふ。供養の中に於て、最も殊勝爲り。佛心の染無き、猶、蓮華の水に著かざるが如し。名稱高遠にして十方に遍し。所謂如來[四五]・應供[四六]・正遍知[四七]・明行足[四八]・善逝[四九]・世間解[五〇]・無上士[五一]・調御丈夫[五二]・天人師[五三]・佛[五四]世尊[五五]なり。五眼を成就し、六通[五六]を具足して、此の世間及び餘の國土に於て、諸の天人の爲に正法を演說したまふ。[五七]初中後善くして、其の義深遠、其の言巧妙にして、純一圓滿に、清白梵行の相を具足

【一】方廣大莊嚴經(Lalitavistaro nāma mahāpurāṇam)十二巻二十七品。大唐天竺三藏地婆訶羅(Divākara日照)の譯にかゝる。西晉の竺法護(Dharmarakṣa)の譯せる普曜經八巻三十品と同本異譯なれども、多くの追加あり。梵本 Lalita vistara 亦出版されて現存す。二十七品なり。

【二】序品(Nidāna-parivarta)。

【三】舍衛國(Śrāvasti)。室羅伐、室羅伐悉底などゝも音譯す。もと憍薩羅國(Kośala)の都城の名、以て國號と爲す。

【四】祇樹給孤獨園(Jetavana anāthapiṇḍasyārāma)舍衛城の長者須達(Sudatta)孤獨を哀みて、世に給孤獨(Anāthapiṇḍika)と稱せらる。佛に歸依し、國の太子祇陀の樹林(Jetavana)を購ひて、之に精舍を建て、以て佛に獻ず。これを祇樹給孤獨園といひ、又は祇園精舍といふ。

【五】比丘(Bhikṣu)。乞士と譯す。出家して具足戒を受けたるもの。

【六】阿羅漢(Arhat or Arhān)。應供と譯す。人天の供養に應ずべき資格ある意。小乘の悟を極めたる位の名なり。

【七】阿若憍陳如(Ājñānakauṇḍinya)。最初に濟度を受け

又、梵語に關しては、横超君が周到なる注意の下に、之を配當した外に、東京帝國大學助教授福島直四郎學士、同宮本正尊學士の二君、特に福島學士の懇切なる梵本との對照啓蒙があつたのである。特にこゝに附言して、謹んで謝意を表する。

猶、國譯についても、脚注についても、細密なる注意を拂つたけれど、恐らくは幾多の不備があるだらう。且、梵語の悉くが、福島君の眼に觸れたもので無いから、これまた至らぬ點があるだらうと思ふ。是等の不備は、自分の責任に屬する事を、こゝに附記せねばならぬ。

昭和五年十二月廿一日

譯者　常盤大定識

逢つて、近代中天竺那爛陀寺に、同時に戒賢・智光の二大德論師が居り、其の聲五印に高く、各々法相大乘・無相大乘の一宗を守つて、互に矛盾をなしてゐるとの傳へを聞き、之を十二門論宗致義記の中に錄してゐる。而して日照三藏自身は、般若空宗に屬する學者であつたのである。

十一、本經の流傳

本經は、健駄羅の佛敎藝術を始め、諸方のそれに影響を與へた。瓜哇(Java)ボロブドウール(Boro-budur)には、本經内の佛傳を彫刻せる密壇が存してゐる。それは西曆紀元九百年頃、印度の美術家によつて彫刻されたものといふから、本經が、長年月に亘りて、佛敎美術の材料として珍重されたことが察せられる。此の彫刻は、寫圖して和蘭より出版、美術界の至寶とせられてゐる。

印度や西域の佛傳藝術とは殆んと獨立に發展して、恐らくは經典それ自身に基いたと思はるゝ、支那南京棲霞寺の八角石塔の基壇に陽刻せられて居る、八相の中の菩提道場圖に、二人の少女が乳を煮つゝあるに當つて、器上に數段の花形の烟を出してあるのが見られる。これは明白に本經往尼連河品第十八の「當ニ煮レ之時、於ニ乳糜上一、現ニ千輻輪波頭摩等、吉祥之相一」といふのを造顯したもので、二人の少女は、優多羅女と、善生女とを圖したのである。乳糜の上に現ぜる吉祥相は、他の佛傳には無いから、本經に基いて居る事が判る。石塔の建立せられた年代が、南唐時代(A. D. 923-935)と想定せらるゝから、ボロブドルの雕刻と、ほぼ同時代となり、南北地を異にして、沒交涉的に本經の流布した事を語るのである。

尚此の經の梵本出版、及び藏英佛譯は左の如くである。

1. "Lalitavistara." Ed. by Rājendralāla Mitra, Calcutta, 1877. (Bibliotheca Indica, Vol. XLVI)
2. "Lalitavistara." Ed. by S. Lefmann, Vols, Halle, 1902.
3. "Lalitavistara." Jr. by R. Mitra, 1886.
4. "Le Lalitavistara", Jr. par Ph. Éd. Foucaux, Paris, 1884-1892. (Annales du Musée Guimet, VI, XIX)
5. Rgya tchér-rol-pa.
6. Rgya tchér-rol-pa' ou developpement des jeux. Jr, par Ph. Ed. Foucaux, Paris, 1847-1848.

附　言

本經の國譯は、文學士横超慧日君が、注意深き勞力によつて成したものを基礎として、更に修正を加へたものである。」

ばしめ、未來世の四衆に對して、偏へに斯の大乘經典を信受すべきを勸發してゐる。此などは、本經が佛傳としての材料を可なり古いものから受つぎ乍らも、大乘的色彩を濃厚ならしめ、而もこれを信受愛樂すべきものとした痕跡と云ふことが出來やう。かくの如くにして、初めより超人格的なる菩薩が成道を示現せしものと云ふのが、此の佛傳の眼目であるから、人間的生活の中にあつて、煩悶懊惱した結果、求道苦行の六年を經て、終に正覺を成就したといふ向上的佛傳とは、全く其の方向を異にしてゐる。從つて露骨に云へば、釋尊傳として見る時、心腑に徹する底の衝動を喚起しない爲に、何となく物足りなさを感ぜしめられるが、然し同時に、佛陀としての釋尊に、渴仰の首を垂れしむものがある。此點に於て、大乘の佛身觀には、著しい宗教的熱情が含まれて居るといはねばならぬ。佛人セナール氏が、釋尊の歷史的存在を否定して、大陽神話の變形的人物に過ぎぬと解し去つたのは、ネパールより發見せられた大乘梵典に表はれた釋尊に對し、偉大なる佛身現に伴ふ方便示現たるを理解せぬが爲であつた。

十、本經の譯時及譯者

本經は、中印度の沙門地婆訶羅（Divākara. 譯、日照）が、唐の永淳二年(A.D. 683)九月十五日、西大原寺歸寧院に於て、沙門復禮を筆受として、譯出せるものである。開元錄によれば、本經には前後四譯あつて、二存二闕なりといふ。二存は、第二出なる竺法護譯普曜經と、第四出なる本經とである。闕本の二譯は、共に經名を普曜經といひ、第一出は八卷失譯で、蜀土の所出に似たりと言つてゐる。次に第三出も、亦八卷（或六卷或五卷）で、宋の沙門智嚴が寶雲と共に譯出せるものであつたといふ。

日照三藏は、八藏・四阿含に曉通し、呪術五明にも兼ね洞らかなる、戒行淸高の沙門であつた。高宗の時に來唐し、儀鳳四年五月(A.D. 677)に、表して將來せる經を翻度せんことを請うたので、玄奘の例に準じ、一大寺の別院に安置して、譯業に就かしめられた。次で則天武后の垂拱の末には、兩京の東西大原寺と西京の廣福寺とに於て、大乘顯識經や大乘五蘊論等、凡そ十八部を譯し、戰陀般若提婆が譯語し、京城の大德十人が、證梵語・證義・綴文筆受等の事に任じ、以て其の法化を助けた。則天武后は、親しく序を製して賜はり、今現に藏經中に存してゐる。三藏は、享年七十五を以て、翻經小房に終り、武后勅して洛陽龍門の香山に葬らしめ、宋の贊寧の時には、その塔が見存したのであつた。

華嚴の賢首大師は、親しく日照三藏に

を七才の時のこととし、六年苦行し、逾城後十二年にして迦毘羅衛國に歸り給へりと言ふのみで、他の修行本起經・瑞應本起經・異出菩薩本起經・過去現在因果經・本行集經・十二遊經等の如く、詳しく年を出してゐない。これは佛傳としての本經の目的が、菩薩行としての佛陀を描き出さんとするにあつて、人間佛に關する記錄を旨とするものではないからである。

第四、佛の誕生偈として有名な、天上天下唯我獨尊の語は、人口に膾炙するものであるが、本經に於ては、生れて十方に七步を行き、夫々宣言せらるゝ中に於て、西方に於て「我は世間に於て最尊最勝なり」と言はれたといふのが、之に相當する句であり、鹿苑の初轉法輪の際、佛が光明を放ち、樂聞の者を召さんとして說かれた偈の中に、菩薩降生の時に、「我れ今一切に於て最尊最勝爲り」と唱へられたと言つてある。而して唯我獨尊の語は、詣菩提場品に見られ、天上天下の語は、轉法輪品に見らるゝが、二句連續した例は、本經の中にない。即ち詣菩提場品には「三千大千世界に於て唯我獨尊にして行く」といふ句があり、又轉法輪品には、佛弟子舍耆婆が舍利弗に語つた言葉の中に「天上天下唯我最尊、唯我最勝、云々」と唱へられたとある。是等は、天上天下、唯我獨尊の語の根據と見るべき大唐西域記や、有部律やの說に餘程近い。天上天下唯我爲尊の語は、他の佛傳にも出づる所である。

第五、三十二大人相ある人は、若し家に在らば轉輪聖王となり、若し出家せば成佛を得るといふことが、圍陀論に說いてあつて、其の圍陀論は「菩薩が降生せんとする十二年前に、淨居天が閻浮提に下り、婆羅門となつて說いた所のものであるといふ。又仙人墮處といふのは、摩燈といふ辟支佛が、十二年後に菩薩降神せらるべしといふ天子の語を聞き、焚身して涅槃に入りし地なりと言ひ、仙人鹿苑といふのは、過去の仁慈王が群鹿に無畏を施した地なるが爲であるといふ。又菩薩が托胎に先立つて、時方國族の四種を觀する所以を說き、且つ菩薩は黑月に於て胎に入らず、要らず白月の弗沙星合するを以てすと說いてゐる。其の他、かくの如く、一般に註釋的傾向を有してゐることも、亦注意すべきことであらう。

第六、菩薩が、母后の胎中に在りし時の宮殿を、梵天王に命じて、梵世より本經說法の會座祇樹給孤獨園に將來せしめ、以て會中諸天子の疑を晴らし、或は未來世中愚癡憍慢の比丘は、菩薩の方便示現を信ぜずして誹謗を生ずるであらうが、かくの如き人は、此の惡行の因によつて、阿鼻大地獄に墮するであらうと說いて、阿難をして南無佛陀々々々々と呼

支那(China)や匈奴(Hūna)まで、既に知られて居た事が分る。西域や東方の地名を擧げて居るに引きかへて、印度の地名には、割合に疎である事は、成立の地方が、北方であつた事を想像せしめる。殊に葉半尼(Yavani)が出て居る所から見れば、成立の年代は、希臘民族が大夏(Bactria)に定住した以後で無ければならぬ。恐らくは西暦二世紀の交、北印或は月氏邊で成立したものでは無からうか。勿論、印度内地については、十六大國の記述がある。即ち菩薩が、兜率天より降生せんとするや、淨居の諸天、閻浮提に於ける十六大國のあらゆる威德勝望の王種を觀じて、摩伽陀國毘提訶王・憍薩羅王・犢子王・毘耶離王・勝光王・摩偸羅王・般荼婆王・彌梯羅王等につき、一々其の長短を列擧してゐるのが、夫れである。然し十六大國の事は、他の經典に極めて普通のもので、特に印度の智識が無くとも、經典より採り得るのであるから、これは計算中に入れないでよいと思ふ。

九、本經に見らるゝ其他の特色

第一、多くの數目を掲げて、一々之を列擧してゐることである。列へば序品中の五十七佛名の如き、勝族品の勝族六十四種の功德、聖母三十二種の功德の如き、法門品の百八法門の如き、誕生品の欲生時三十二種瑞相、菩薩三十二大人相八十種好の如き、現藝品の極大數極微數の如き、示書品の六十四書の如き、音樂發悟品の四十餘佛名の如き、降魔品の魔女三十二種綺言妖姿の如き、轉法輪品の法輪の性二百七十二功德名の如き、其の特に著しき例である。其の他全篇に渉つて、如斯の類が少からずして、時には多少煩はしさを感ぜしむる。然し行文流暢にして往々珠玉の如き名句を有してゐるから、此の弊は十分補はれてゐる。その點に於て、乾燥な法相の臚列でなくして、大乘佛傳たる名稱に相應する。

第二、日時を出すに、必ず星宿によつてゐることである。即ち入胎に關しては、春分月毘舍佉月に於て、氐宿合する時に天下を觀察し、弗沙星が正しく月と合する時に、兜率天宮より沒して母胎に入つたとある。又大臣優陀延が、王の所に至り、寶莊嚴の具を造らんことを請ふたのは、月、軫を離れ角宿合する時である。諸釋が莊嚴の具を持つて王所に詣りしは、弗沙星正しく月と合する時であり、諸天が菩薩に對して出城を請うたのも、同じく弗沙之星が月と合する時であつた。群星によつて月日の運行を區劃する印度の曆法よりすれば、何月何日として出すよりも、此の方が正確にして妥當な記錄といふべきである。

第三、年齡に關しては、學堂に入りし

近し、亦最も多くの影響を與へたものに相違ないと思はれる。

八、本經成立の時處に對する暗示

本經成立の時處についての暗示の最も著しきは、六十四書の名目の中に含まれる。菩薩、學堂に昇るや、博士毘奢蜜多の前に、六十四書の名を列ねて驚かしめてゐる。此の六十四書のことは、修行本起經や過去現在因果經にも出てゐるが、其の一々の名を出してゐるは、本經以外にては、成立の大に後るゝ本行集經のみであるから、本經に出づる六十四書の名は、特に注意に値する。普曜經と、本經と、梵本と、及び本行集經と、四經を對照するに、大體は一致を見出し得るが、不明のものが二三あり、殊に普曜經所載のものとの間に、一致の明らかならぬものが多少存してゐる。六十四書全部の名を對照して出すことは、今此處に略するけれども、中に於て興味深き數種のものをの擧げれば、次の如くである。

(普曜經)		(方廣大莊嚴經)	(Lalitavistara)	(佛本行集經)	
梵書	1.	梵寐書	Brāhmi	梵天所說之書	今婆羅門書正十四音是
佉留書	2.	佉盧虱底書	Kharoṣṭi	佉盧虱吒書	隋言驢脣
弗迦羅書	3.	布沙迦羅書	Puṣkarasāri	富沙迦羅仙人說書	隋言蓮華
安佉書	4.	央伽羅書	Aṅgalipi	阿迦羅書	隋言節分
曼佉書	5.	摩訶底書	Maṅgadhalipi		
安求書	6.	央瞿書	Aṅguliyalipi	鴦瞿梨書	隋言指
大秦書	7.	葉半尼書	(Yavani)	耶寐尼書	隋言大秦國書
取書	8.	沙婆迦書	Śakārilipi	娑伽婆書	隋言牸牛
半書	9.	阿波廬沙書	Pārasyalipi	波流沙書	隋言惡言
陀比羅書	10.	沓毘羅書	Drāviḍalipi	陀毘荼國書	南天竺
			Vaṅgalipi	鶯伽羅書	隋言吉祥
	11.	闍羅多書	Kirātalipi	脂羅低書	隋言裸行人
	12.	多睦那書	Dākṣiṇyalipi	度其差那婆多書	隋言右旋
	13.	郁伽羅書	Ugralipi	優伽書	隋言嚴熾
	14.	傳祇書	Saṃkhyālipi	僧佉書	隋言算計
	15.	阿跋牟書	Avamūrdhalipi	阿婆勿陀書	隋言覆
	16.	阿奴盧書	Anulomalipi	阿奚盧囉書	隋言順
陀羅書	17.	達羅陀書	Daradalipi	陀羅多書	隋言烏場邊山
佉沙書	18.	可奈書	Khāṣyalipi	河沙書	疏勒
秦書	19.	支那書	Cīnalipi	脂那國書	大隋
匈奴書	20.	護那書	Hūṇalipi	摩那書？	斗升？
夷狄樂書					
康居書					

これによつて、本經成立の時代には、普曜經の夷狄塞(Saka)康居、(Samarkand)二三つは除くとするも、葱嶺以東の佉沙(Kashgar)は言ふに及ばず、遠く東方の

一切諸法、本性寂滅、不生不滅、無有處所、非分別非不分別、到於實相、昇于彼岸、空無相無願無作、體性淸淨、離諸貪欲、會於眞如、同於法性、等于實際、不壞不斷、無著無礙、善入緣起、超過二邊、不在中間、無能傾動、契諸佛無功用行、不進不退、不出不入、而無所得、不可言說、性唯是一、而入諸法、是爲不二、非可安立、歸第一義、入實相法、法界平等、超過數量、言語路斷、心行處滅、不可譬喩、平等如空、不離斷常、不壞緣起、究竟寂滅、無有變易、降伏衆魔、摧諸外道、超過生死、入佛境界、聖智所行、辟支所證、菩薩所趣、諸佛咨嗟、一切如來、同有如是無差別法。

といふ語句があり、又、偈の中には、次の樣な頌がある。

無處無戲論　無生亦無滅　體性空寂靜
轉如是法輪
不出亦不入　無因亦無相　一切法平等
轉如是法輪
如夢幻陽炎　水月及谷響　皆無有自性
轉如是法輪
入諸因緣法　不斷亦不常　遠離諸惡見
轉如是法輪
遠離於無有　非法非非法　本自不生滅
轉如是法輪
實際非實際　眞如非眞如　示諸法體性
轉如是法輪

前者には、眞如といひ、法性といひ、實際といひ、不二といひ、不生不滅・不壞不斷・不進不退・不出不入の八不が說かれて居る。後者には、無生無滅・不出不入・無因無相、不斷不常の八不の外に、遠離無有・非法非非法・實際非實際・眞如非眞如の、別な八不も說かれて居る。十二因緣を說き終りて、この轉法輪を八不の無戲論とせられて居る所は、如何にも龍樹の中論の第一偈に連絡を有するが如くに見られ、而して、是等の音樂發悟品といひ、彌勒請問の一段といひ、梵天勸請品の一節といひ、大乘教義の著しい部分が、本經に來つて新に加はれる部分である事は、大乘思想の發展經過の上から見ても、極めて興味ある材料とせねばならぬのである。

斯の如く、般若の思想が、よく本經の中に浸潤してゐることを知るが、本經と維摩經との間に、著しい同調のある事も、亦注意すべきである。入天祠品中の偈に、「芥子を須彌に並べ、牛跡を溟海に方へ、日月を螢火に對するも、豈に以て倫となすに足らんや」とあるのが、維摩經の弟子品や不思議品に見ゆる譬であり、又、轉法輪品にある、「一切衆生隨類各解」の文字が、維摩經佛國品に於ける有名な「衆生隨類各得解」の文より來たものであり、殊に轉法輪品の思想內容は、純乎たる維摩經の實相論である。其の「眞如に會し、法性に同じ、實際に等し」とあるのは、維摩經弟子品に說かるゝ「法性」「如」「實際」に相當し、「性は唯是れ一にして諸法に入る。是を不二となす」と云ひ、或は「言語路斷心行處滅」等といへる如きは、全く維摩默不二の心境を說かんとしてゐるものである。維摩經の思想は、確かに本經の成立に最も接

法・四無量といひ、殊に本生の有名なものを一々數へ上げて居る所には、本生の菩薩と大乘經典との間に、密接な關係あるを語るのである。本生の中には、輸迦婆羅門や、忍辱仙人や、奢摩仙子や、九色鹿や、抒海せる仙人や、尸毘王や、を初として、首婆幢牙・月燈・珠髻・大悲・堅猛・妙目の諸王、勝福・尸利・尼彌・訖瑟吒・雜薩梨・千耶若・法思・光明・堅强弓・戒月・光明・進德光の諸王、王仙・月形・猛實・善住・月光・殊勝行・地塵・勇施諸方主の如き、夥しい數が擧げられて居る。菩薩の觀念は、是等の本生に於て發達したものであらうが、然しその菩薩の觀念が、法身思想を背後に有つに至つて、上求菩提としてのそれより、下化衆生としてのそれに躍進したと思はれる。

更に思想方面より見るに、是等新加の部分に於ける般若思想に至つては、頗る徹底した說が記されてゐる、音樂發悟品の中には、「十二因緣を一々分析するに、過現未來、體性あることなく、求むるに不可得なり」と、佛敎本來の十二因緣觀より出發して、無體の實相に到達し、人法二空を完全に說破してゐる。卽ち人空につきては「和合に暫く有り、名けて衆生と曰ふ。第一義中には、都べて不可得なり」といひ、又「內外諸蘊皆悉く空寂なり、我無く人無く壽命者無し」と說いてゐる。又法空につきては、「常に諸法を觀ずるに生滅なし、一切諸法は本性空なり」と達觀してゐる。かく法性空の立場よりする時は、現前の諸法は、畢竟「幻の如く、夢の如く、影の如く、水中の月の如く、鏡中の像の如く、熱時の燄の如く、呼聲の響の如き」ものとならざるを得ぬ。大梵天勸請品には、第一義諦の境地を說いて、次の如く叙してゐる。「所謂五蘊を超過して第一義に入り、處無く行無く、體性清淨なり。取らず捨てず、了知すべからず、顯示する所に非ず。爲無く作無く、六境を遠離す。心の所計に非ず、言の能說に非ず。聽聞すべからず、觀見すべきに非ず。罣礙する所無く、諸の攀緣を離れ、究竟處に至る。空にして所得なく、寂靜の涅槃なり」と。誠に般若至極の境界を說き得て、餘蘊なしと云ふべきである。轉法輪品に「甚深難知難見難解般若波羅蜜光明場」の語あるも、亦所以なしとせぬ。この轉法輪品の中には、彌勒菩薩の請問に應じて、法輪の性を說示して居らるゝが、その說相がまた頗る般若的である。元來釋尊傳の中に、彌勒菩薩が現はれて來る事それ自身が、旣に大乘佛傳の特色中の特色で無ければならぬ。本經は、五比丘濟度の後に、彌勒等の諸大菩薩衆を出し來つて、その問答の中に、巧に大乘思想を織り込んで居るのである。卽ち長行の中には、

分けた考が見らるゝことである。佛が正覺所證の法は難解なれば、世間の衆生の解する能はざらんことを恐れて、默然として住したまひし時、梵天は切に說法したまはんことを請うた。その時世尊は、佛眼を以て觀じたまふに、諸の衆生には上中下根、卽ち邪定・正定・不定の三機あることを知り、邪定聚の衆生は、我が法を說くも說かざるも畢竟知らず、正定聚の衆生は、我が法を說くも說かざるも皆能く了知するであらう。然し不定聚の衆生は、我が若し法を說かば亦能く了知すべきも、我若し法を說かずんば了知しないであらうと思惟せられた。そこで世尊は、不定聚の衆生を觀じて、大悲心を起し、「我は本と此等の衆生の爲に法輪を轉ぜんとして、世に出でたのである」と言つて、終に大梵天王の請を受けらるゝに至つたといふ。三乘の思想は、智度論に出で、其の後瑜伽唯識系統の佛教中に入つて、五性各別思想の證權とせられ、持に邪定聚が、無性有情思想を表はしたものとして、頗る重要な意義を有するに至り、修道上の大問題となつたのであるが、其等の思想の萌芽として、三乘の考が明瞭に本經中に說かれてゐることは、大いに興味ある事といはねばならぬ。

七、本經新加の部分に於ける大乘思想

以上の如く、普曜經に於て、旣に三乘思想や、十方佛の信仰や、六波羅蜜の德本や、一切諸法本、從緣悉本無(化舍利弗目連品)と喝破せる般若思想が、十分に現はれて居るから、況んや遙に後るゝ本經が、一層多く大乘思想を有する事は、素より當然である。前來、華嚴經や、涅槃經や、優婆塞戒經や、首楞嚴三昧經や、智度論との間に、思想の一致があり、交涉があるべき事を述べたが、一層多く大乘思想を有するのは、本經に來つて新に加はれる音樂發悟品と、轉法輪の一段とである。

音樂發悟品に於て、十方諸佛の威神力によつて、宮內の鼓樂絃歌より、微妙の音を出して、菩薩の出家を勸請する偈を說き、又諸婇女等の樂器の音が、同じく出家を勸發する偈を說いたといふ構想は、華嚴經のそれと全く一致して居るのである。菩薩が本生に於て供養した四十一佛は、毘盧舍那佛を初として、中に釋迦佛や、藥師佛や、迦葉佛を交へて居る。中の毘盧舍那佛が、また華嚴經との間に連絡あるを語ると思はれる。又、幻・夢・影・水中月・鏡中像・熱時燄・呼聲響と、一連にせられて居る譬喩、空中電・坏器・風中燈・水聚沫・水上泡・芭蕉・幻・化・空拳と、一連にせられて居る譬喩は、般若經の有名な九喩と、連絡があるだらうと思ふ。又、六波羅蜜の德目を列擧し、四攝

其の他、大乘・上乘・菩薩乘の語は、經中屢々用ひられて居り、二乘と菩薩との間の廢立思想が、可成に深刻の域に進んで居る。

第三、義に依つて言に著すること勿れと言ひ(法明品)、或は意生身を得て彼の天宮より、刹那頃に於て迦毘羅城に至ると言ひ(降生品)、或は五十二種の善根・四十分位と言ひ(兜率宮品)、或は十地究竟せる最後身の菩薩と言ふ(處胎品)。百八法門の中には、六隨念・三法印・三十七道品の外に、六度・四無量心・四攝事等の法が存してゐる(法門品)。

第四、菩薩が菩提道場に坐し給ふや、十方佛國より諸佛菩薩來つて讃歎すと言ふが如き、同時存在の多佛を認むる事は、小乘佛教の說かざる所である。且つ未來世中の愚癡の人の爲に、佛が故らに人中に生れて成佛を示現する所以を說き、併せて此の經(大乘經典)信謗の罪福を詳說し、方便示現の佛陀に對して、偏へに敬虔の首を垂るべきを勸發してゐるが、此點の如きは、大乘に特有の說であると言はねばならぬ。

以上の諸例によつて、本經が大乘經典なることは明かであるが、然らば經中に流るゝ大乘思想なるものは、如何なる大乘經典を豫想するであらうか。本經中、他の大乘經典との關係を認め得べきものありとせば、如何なる點がそれに當るか。之につきて、一顧することにしやう。

先に記せし五十二種の善根・四十分位・十地究竟等の語が、華嚴思想と關係あることは、容易に肯づかれる所である。而して詣菩提場品の中に、菩薩が菩提樹下に東面して結加趺坐し、方廣神通遊戲大嚴の定に入られた時、無量の菩薩及び諸天人衆の供へた八萬四千の師子の座に坐し、一々の身上に、皆衆妙の相好莊嚴を具したので、其の余の菩薩並に諸の天人は、各々獨り我が座にのみ菩薩坐したまへりと思つたとある。同一の構想が、姚秦羅什譯の首楞嚴三昧經にも見え、これまた著しく華嚴的色彩を帶びてゐるといふべきであらう。況んや成正覺品には、既に如來藏・清淨法界の語をさへ見出すのである。この如來藏といふは、必ずしも眞如如來藏の意義で無いと思ふが、然し如來藏思想の經典と、一脈の連絡を有する事は、たしかであると思ふ。

三獸渡河の譬は、北凉曇無讖譯の優婆塞戒經に出で、又同譯の涅槃經に說かれてゐることによつて、極めて有名な譬喩となつて居るが、本經が涅槃經より成立年代の早いことは、諸種の點より動かし難い所である。優婆塞戒經との前後に關しても、恐らく本經の方が先んずるのではないかと思ふ。

更に注意すべきは、大梵天王勸請品に、上中下の三根を邪定・正定・不定の三聚に

ある所以・夜半出家・棄國捐王・自剃鬚髮・六年苦行・樹下降魔・七日不起・梵天勸請・余殃十事等、其の他佛傳中の多くの事實に對して、極めて委細に、それらは皆佛の善權方便によるものなりと說いてゐる。かくまで發達せる佛身觀菩薩觀ある以上は、菩薩行を說く中に佛傳を織り込む域より、一歩を進めて、佛傳の中に菩薩行を說き、釋尊の生涯即ち菩薩精神の具象的發露と見んとする要求が生ずるのは、蓋し當然な順序であらう。吾人は普曜經（即ち本經の原型）こそ、此の要求に促されて現はれた佛傳であると考へるのである。本經の中に、大乘的色彩は、到る處に、亦種々様々の形に於て、見出るさゝのであるが、降生より成道に至るまで、佛陀の生涯は、悉く神通に遊べる菩薩の示現なりと說き去り說き來ることは、最顯著なる大乘的特色と稱すべきである。吾人は、本經を前述三經に連關して見る時、佛身觀菩薩觀の發達經過に、歷然たる脈落の存することを認め得るのである。

要するに、大乘佛身觀の發展は、法身思想の確立より出發し、一轉して下化衆生の應身思想を發生せしめ、其の現實的適例として、釋尊傳に注目するに至りし結果、此處に再轉して、專ら應身思想の上に立脚せる、大乘佛傳の發生を見るに至つたものと言ふべきである。

六、本經と大乘經典との關係交涉

第一、本經は序品に於て、釋迦牟尼佛の傳記なりと言はずして、過去無量の佛も說き給ひし法門にて、菩薩衆德の本を顯示せるものなりと稱してゐることは、大乘佛傳の序品として、如何にも似つかはしい。

第二、三乘を並べ擧げて、菩薩を聲聞緣覺の二乘より遙かに勝れたるものとする思想が、到る處に見出される。降魔品中には、魔王波旬が魔軍を激勵する語として、「彼の志、方に我が境界を空にせんとす、緣覺及聲聞たらしめよ」と言つてあり、普曜經所現象品第三には、兎馬象三獸渡河の譬が出されてゐる。之に相當する文句は、本經の中に見出されないから、普曜經より其の文を引けば、次の如くである。

> 世に三獸あり。一に兎、二に馬、三に白象なり。兎の水を渡るや、趣きて自ら渡るのみ。馬は差々猛なりと雖も、猶ほ水の深淺を知らず。白象の渡るや、其の源底を盡くす。聲聞緣覺は、其れ猶ほ兎馬の如し。生死を度ると雖も、法本に達せず。菩薩大乘は、譬へば白象の若し。三界を解暢して、十二緣起、之が本元を了す。一切を救護し、濟ひ蒙らざるもの莫し。

論ぜんとするには、先づ此の如き佛傳の發生を促すに至りし佛身觀が、如何なるものであつたかを考へて見なければならぬ。それには、本經の古き異譯たる普曜經の譯者、西晉竺法護の譯經中に、佛身觀菩薩觀の發達經過を求むるのが、最妥當なる一つの方法であらうと思ふ。

斯る見地に立つて見る時、數多き竺法護の譯經に於て、特に注意を惹かしむるものは、如來興顯經、度世品經、慧上菩薩問大善權經等の諸經である。三經共に、如來は一法身なれども、方便示現して群萠に應同すると說く點に於て一致して居る。中に於て、華嚴經如來性品及十忍品の異譯たる如來興顯經は、如來は一法身なりといふことを力說し、三世に涉つて法身は平等なり、法身には色身なければ、起も無く滅も無く、去も無く來も無い。かく無身なるが故に、周遍せざる所なく、衆生志性の慕樂する所に隨つて示現し開悟せしめる。導くに三乘を以てし、或は滅度を示現する等は、衆生の信樂する所に隨はんとする如來の善權方便によるものなりといふ。同じく華嚴經離世間品の異譯たる度世品經は、法身常存を說きつゝも、更に進んで、菩薩行としての方便示現を强調する。卽ち菩薩は時に隨つて、佛正覺身を變現して諸の聲聞身緣覺身を現じ、非常に如來の業を示現すと云ひ、或は諸天に往生して自ら恣に馳騁し、神通に遊戲すと說く。殊に卷末には、處兜術天・現沒兜術天・住胎・現其安禪・修生・忻笑・行步・現幼僮・捨國・現勤苦行・詣道場・坐佛樹下・坐尊樹下・降魔官屬・成最正覺示如來力・轉法輪・現大滅度等につき、華嚴的約束に隨つて、夫々を十事に分つて、其の意義を說いてゐる。大乘佛傳の綱格は、既に此の中に存すると言ふも過言ではない。かくの如く、法身は普遍にして三世平等なりと言ふ佛身觀が、やがて展開して、衆生の機に應同示現するといふ方面に進んだのであつて、此の下化的意義は、大善權經に於て最も著しく發揮せられてゐる。經は、慧上菩薩の問に對して、極めて具體的に菩薩の善權方便といふことを說き、其の中には、戒律の上よりするも、既に自由なる大乘的分子を認め得るが、佛陀の生涯を一々の事項について、悉く菩薩の善權方便に基くものとしてゐる點より見れば、最早之を大乘佛傳と呼ぶも差支なきまでに達してゐる。其の論述は、頗る詳細にして、數種の本生を說きたる後、兜術天に於て發意の頃に成道し、法輪を轉ぜるにも拘はらず、閻浮提に下つて成佛を現ずる所以等より說き始めて、兜術天より沒し、胞胎に處し、樹園に於て右脇より生じ、地を行くこと七步、手を擧げて「吾於世尊、天上天下、爲最第一、當盡究竟生老死原」と宣說せること等を說き、或は配匹

八、普曜經十八變品第二十五は、其の內容が全く瑞應本起經と一致してゐる。別人の所譯にして、かくも多く同文であるといふことは、單なる暗合と解せらるべきではない。恐らくは、竺法護が、前代の所譯の佛傳を參酌し、意義の同一なる個所は、前代の譯文を其の儘使用したものだらうと思ふ。而して瑞應本起の中には、四門出遊と納妃、踰城と樹陰不移の前後等に關して、錯雜がある所から推度するに、普曜經の原本は、大乘的佛傳たる瑞應本起より其の材料を取り、之に追補し、之を整理して、一のまとまれる佛傳を成立せしめたものであらう。

又復、後漢の竺大力共康孟詳の譯（A. D. 197）の修行本起經は、瑞應本起や本經（普曜）の如く、生時の三十二瑞應を記載し、閻浮提に凡六十四書ありと云ふ等、これ又餘程近い關係にあるやうである。而して降魔の條にある三十六行の偈「比丘何求坐樹下……當稽首斯度世仙」は、修行本起、瑞應本起、及び普曜の三經の譯文が、一字一句の相違もなく全く符合する所である。以て佛典飜譯者が、前代の譯經を參酌して、前人の勞苦を無にせず、苟くも採るべきあれば、自由に採り用ひた事を知るべきである。大莊嚴經には、之に相當するものが存在しない。

又次に本經と、北涼の曇無讖譯（A. D.414-426）の佛所行讚との關係を見るに、佛所行讚が大小未分のものなるに比し、本經が純大乘の佛傳なるより考ふれば、所行讚よりも、本經の方が後の成立と考ふるが、至當であると思ふ。果して然らば、本經の成立は、馬鳴菩薩後であらねばならぬ事となる。成立の前後問題はさておき、佛所行讚は人間としての釋尊を讃したものである。本經は、應身としての釋尊を嘆じたものである。人間としての佛傳の代表作は、佛所行讚で、應身としての佛傳の代表作は、本經である。兩者の間には、佛身觀の上に天地の相違がある。上求菩提と、下化衆生との相違がある。前者には、釋尊の上に經驗せられた人生苦の問題が、ひし／＼と讀者の胸に迫つて來る。後者には、この悲哀は無いが、その代りに佛陀に對する歸依渇仰の情が、至る所に溢れて、思はず偉大なる佛陀の前に稽首禮足せしめずんば止まぬ。斯くて、兩者を并せて、初めて釋尊の眞面目が了解せられるのであるから、是等兩面の佛傳は、是非無けねばならぬのである。中に於ても、大乘經典の特に流通せる支那日本に、本經の流傳した理由が會得せられるのである。

五、佛身觀の發達と本經

既に述べたる如く、本經は發達せる大乘佛身觀の要求に應じて、現はれたる佛傳である。然らば本經の思想的特色を

一、方便示現の意味を強調せること、
二、信佛信法の精神の熾烈なること、
三、原始的資料を大乘化せんとしてゐること、
四、文學的構想の巧妙さを増したること、

等が氣付かしめられる。然し乍ら、本經に於て特筆さるべき最重要なることは、思想的にも、文學的にも、極めて豐富なる內容を有する音樂發悟品一品と、轉法輪品中に於て、彌勒等の諸大菩薩に對し、轉法輪の功德として、法輪の性を細說する一段が、全然新しく追加せられて居ることである。此の二箇所に於ては、他の部分になき諸々の大乘思想が、鮮明に開顯せられて居り、本經を啻に方便示現としての佛傳といふのみに止まらず、佛陀說法の內容までを、大乘思想を以て充滿せしめ、以て許多の佛傳中に於て、頗る異彩あるものとならしめてゐる。かくの如く、本經は、重要なる發達變化を遂げて成りたるものである爲に、普曜經に對しては、同一經典とはいひ乍ら、單に異譯、若しくは抽象譯と完全譯との相違といふのみにては說き去ることの出來ない關係にある。いふまでもなく、成立年代は、普曜經の方が早く、大莊嚴經卽ち本經は、爾後三百七十餘年間に於ける大乘思想の躍進的發展の中に育くまれて、顯著に其の影響を受くるに至つたものであらう。或は、斯の如き躍進的發展を遂げた、大乘思想の中に成立せる佛身觀に應じ、之と調和すべきものとして現はれたものと言ふ方が適當であらう。

四、普曜經と瑞應本起經との關係

瑞應本起經は、吳の支謙（223-228）の譯で、普曜經は、竺法護（309）の譯であるが、甚だ奇怪なことには、此の漢譯の二經の中に於て、一字一句の相違もなく、全く同文なる箇所が多く見出される。試みに大正大藏經によつて、其の同文の箇所を指摘すれば、

一、阿夷仙が太子を相し、三十二相あることをいふより、宮內の警衞を叙する約二十七行（瑞 474 a—b　普 496 a—b）

二、西の城門より出でたる時の菩薩の說法七行（瑞 474c　普 503a）

三、夜間宮女臥寢の醜態を見て、菩薩が三毒を除き三苦を離れて得道せんと誓へる十三行（瑞 475b　普 504c）

四、魔女、太子を誘惑せんとして、却つて老母に化せられしといふ十行（瑞 477b　普 519b）

五、成道後、五道を見るの明を得たることより約一頁（瑞 478　普 522）。但、少異がある。

六、提謂等の賈人を呪願する文、十六行（瑞 479b　普 527a）

七、十二緣起法の甚深なるが爲に、却つて說法せざらんと思惟せられし時、梵天が偈を說きて勸請せりといふ四十三行（瑞 479c—480b　普 527a—c）

如師子王　體・足・爪・牙・頭・軀・頂・頻申・月・巖穴・怡悅其身・力・行・歩・吼
七阿僧祇・五福德・七淨財・十善道・五十二種善根・四十分位・命終生兜率天・名曰淨幢
諸花名二十三種・諸鳥名十種
圍陀論所載・白象二胎・具相二決定（勝族品第三）
仙人墮處・仙人鹿苑
菩薩、時方國族を觀ず
菩薩の母の三十二種功德
三獸渡河の譬（所現象品第三）
六種震動十八相の名（降生品第五）
託胎清淨・在胎十月所居の宮殿（處胎品第六）
人間に成佛を示現する所以・信謗の罪福（誕生品第七）
耶輸陀羅・車匿・乾陟・菩提樹
名阿說多は太子と同時の所生
母后命終は菩薩の咎に非ず（欲生是時三十二瑞品第五）
菩薩に睡眠なきことを、六度・四等・四恩・三十七品・權方便・深三昧・解有無・三脫門・・・慈・化三乘等に託して頌す
八十種好
那羅童子

極大數・極微數・一由旬の微塵の數量・四大洲の大さ・一三千大千世界の大さ（現藝品第十二）
諸藝諸學の名三十餘
兜術天子、菩薩の出家を勸むる偈（試藝品第十）
耶輸陀羅に對する宮中の非難及び辯解の偈音樂發悟品第十三の一品全部
父王七種の夢、淨居天子の占夢（感夢品第十四）
耶輸陀羅二十種可畏の夢
化五道神（告車匿被馬品第十三）
自剃鬚髮（出家品第十五）
後人髻けて箭井となす（現藝品第十二）
後人塔を起つ三處（出家品第十五）
摩訶波闍波提の悲歎問責
三迦葉との問答（異學三部品第十四）
六年苦行中魔王退屈（往尼連河品第十八）五跋陀羅の離去
故破糞掃衣を洗ふ
微妙の梵聲三十二（詣菩提場品第十九）
正覺所證の法、四諦十二因緣（成正覺品第二十二）
正覺所證の法、三十七道品・十力・四無所畏・十八不共法（行道禪思品第十九）

第七七日までの佛の動靜（商人蒙記品第二十四）
第一義諦の說相
邪定聚・正定聚・不定聚（大梵天王勸請品第二十五）
外道阿字婆との問答（轉法輪品第二十六ノ一）
虛空を飛騰して恒河を渡る
轉法菩薩、衆寶輪を感得して如來に奉獻す
法意菩薩法、輪を轉じて此の法を歎說す（梵天勸助品第二十三）
五比丘に說ける出家人の二障・四諦・八正道
八淨居天の來聽（化五人轉法輪品第二十四）
今此經名曰普曜大方等法
三寶出現
十方諸佛皆悉く默然たり
彌勒の請により、諸菩薩に對して、法輪の性を說き、其の功德二百七十二を列ぬ
八畏を離る（囑累品第二十七）

其の他、順序の相違、相互の詳略等を數へたならば、殆ど枚擧に遑がない。此の表によつても知らるゝ如く、本經には、普曜經になき甚だ多くの要素を包藏してゐるが、それ等は、何れも重要なる意義を有するものである。今此等の相違によつて、一般的傾向を概觀するに、

普曜經	方廣大莊嚴經	
梵天勸助說法品第二十三	大梵天王勸請品第二十五	25. Adhyeṣaṇā-pa.
拘留等品第二十四 十八變品第二十五	轉法輪品之一第二十六	26. Dharmacakrapravartana-pa.
佛至摩竭國品第二十六 化舍利弗目連品第二十七 優陀耶品第二十八	轉法輪品之二	(無シ)
歎佛品第二十九 囑累品第三十	囑累品第二十七	27. Nigama-pa.

右の表によつて知らるゝ如く、序品もあり、囑累品もあり、獨立せる一經典としてまとまつた體裁を具へ、而も囑累品には、本經を信受し書寫し讀誦する等の功德を詳細に說いて、大乘經典としての特色を、遺憾なく發揮してゐる。

佛傳は、現存の漢譯のみにても、十七種以上に達するが、皆いづれも夫々の特色を有し、內面的に發達すべき意義を帶びて、次々に現はれ來つたものである。此の意味に於て、本經も亦純大乘の佛傳として、換言すれば、下化衆生の爲の、方便示現の應身佛としての立脚地より見たる佛傳として、十分獨立存在の價値を有するものである。斯くて本經と、他の佛傳との關係交涉や、同異具略や、種々の問題を考察する事が、興味ある問題となつて來るが、今は範圍を極めて小さく取り、異譯と稱せらるゝ普曜經と本經との關係、普曜經と瑞應本起經との關係について述べ、關說する必要のある限りに於て、修行本起經や、佛所行讃にも觸れて見たいと思ふ。

三、本經と普曜經との關係

普曜經は、西晉の竺法護(A. D. 309)の譯で、本經は唐の地婆訶羅(A. D. 683)の譯であるから、其の間に三百七十餘年の隔りがあるが、內容の上に變化は生じなかつたかどうか、又兩者は異譯なりと言はるゝが、果してよく一致し得るか如何といふに、從來旣に認められてゐた如く、普曜經は抽象譯にして、本經と逐字的に符合するものではない。否其のみならず、兩者の間には、抽象譯といふのみにては、到底解決し得ない相違がある。左に二經の相違する主なるものを表出してみやう。

普曜經	方廣大莊嚴經
	十四羅漢の名(序品第一) 如來の入定・放光・說偈 譬如蓮華――根・水・臺・莖・葉・藥・香(兜率天宮品第二)

つて、神童の意味を有してゐない。曝案品にも、此經のことを、大嚴經典、菩薩所行如來境界、自在神通遊戲之事（普曜經では普曜大方等典）と言つてあるが、これも、菩薩が神通に遊戲して、如來の境界を自在に行ずるの意であることは、容易に首肯せられるであらう。

二、本經の結構

本經は十二卷二十七品に分れて居つて、現存梵本 Lalitavistara の二十七品と、大體に於てよく一致してゐる。本經の異譯とせられてゐる西晉竺法護譯の普曜經は、八卷三十品に分れて居り、兩者の間には、相互に全く缺如し、又は相違してゐる部分もあるが、菩薩が兜率天に處してより、降生し、出家し、成道後六年にして迦毘羅衛城に歸り、釋種を化度せらるゝまでの佛傳たることは、全く同じである。今、漢譯二本と梵本との品名を對照すれば、次の如くである。

普曜經	方廣大莊嚴經	Lalitavistaraḥ
論降神品第一	序品第一	1. Nidāna-parivartaḥ.
說法門品第二	兜率天宮品第二	2. Samutsāha-pa.
所現象品第三	勝族品第三	3. Kulapariśuddhi-pa.
降神處胎品第四	法門品第四	4. Dharmālokamukha-p
欲生時三十二瑞品第五	降生品第五	5. Pracalā-pa.
入天祠品第六	處胎品第六	6. Garbhāvakrānti-pa.
現書品第七	誕生品第七	7. Janma-Pa.
坐樹下觀犂品第八	入天祠品第八	8. Devakulopanayana-pa.
王為太子求妃品第九	寶莊嚴具品第九	9. Ābharaṇa-pa.
試藝品第十	示書品第十	10. Lipiśālāsaṃdarśana-pa.
（ナシ）	觀農務品第十一	11. Kṛṣigrāma-pa.
四出觀品第十一	現藝品第十二	12. Śilpasaṃdarśana-pa.
出家品第十二	音樂發悟品第十三	13. Saṃcodanā-pa.
告車匿被馬品第十三	感夢品第十四	14. Svapna-pa.
異學三部品第十四	出家品第十五	15. Abhiniṣkramaṇa-pa.
六年勤苦行品第十五	頻婆娑羅王勸受俗利品第十六	16. Bimbisāropasaṃkramaṇa-pa.
迦林龍品第十六	苦行品第十七	17. Duṣkaracaryā-pa.
召魔品第十七	往尼連河品第十八	18. Nairañjanā-pa.
降魔品第十八	詣菩提場品第十九	19. Bodhimaṇḍagamana-pa.
行道禪思品第十九	嚴菩提場品第二十	20. Bodhimaṇḍavyūha-pa.
諸天賀佛成道品第二十	降魔品第二十一	21. Māradharṣaṇa-pa.
觀樹品第二十一	成正覺品第二十二	22. Abhisaṃbodhana-pa.
商人奉麨品第二十二	讚歎品第二十三	23. Saṃstava-pa.
	商人蒙記品第二十四	24. Trapuṣabhallika-pa.

方廣大莊嚴經解題

一、本經の名稱

本經は、大乘思想の上に立脚せる佛傳である。佛身觀の發達に伴ひ、之に應ぜんが爲に、佛說の形を以て記された佛傳である。一層適切にいへば、方便示現としての佛傳で、その點に於て、多くの他の佛傳に伍して、一大なる特色を有するものである。本經が大乘佛傳なることは、既に經題の上によく表はれ、經の現名方廣大莊嚴經、一名神通遊戲の語の出所なる序品の中に於て、最よく其の意味が說明せられてゐる。其によれば、淨居天子等は、祇樹給孤獨園に在す佛陀の所に來詣し、過去無量の諸佛も既に說き給ひし方廣神通遊戲大莊嚴法門と言へる經を說いて、諸の天人に大乘の益を得せしめ給へと勸請した。此の方廣神通遊戲大莊嚴法門とは、菩薩の衆德の本を顯示するものであつて、菩薩が兜率天に處してより、勝種に降生し、童子の事を行じ、文武に於て世間に最も勝れ、五欲を受くることを示し、次で降魔成道せることを說けるものであるといふ。之によつて、經の題名は、菩薩が佛德を莊嚴し、神通に遊んで、成道を示現せられしことを說きたる經といふ意味であることは、明かである。

然るに序品の中には、經名を方廣神通遊戲大莊嚴法門と、一連の名にしてあるに拘はらず、經題には、大莊嚴と神通遊戲の二名に分けてあるのは、何故であらうか。蓋し大莊嚴と、神通遊戲とは、同字の兩譯であつて、梵名 Lalitavistara の Lalita には、遊戲と莊嚴の二つの意味があるが爲に、序品中の經名には、兩意を存し、經題には、之を別名として分つたものであらう。而して本經の異譯に普曜經といふがあるが、これは Lalitavistara を莊嚴の意に取つて譯したものと思はれる。而して普曜經には、一名方等本起といふと記されてゐる所に、大乘佛傳たることが、最も明白に表はされてゐるのである。

尙ジュリアン及びアイテル二氏は、共に神通遊戲の通を童に改めて、神童遊戲と讀んでゐるが、然し神通遊戲の方が善いと思ふ。神通遊戲の語は、菩薩の德目として常に用ひらるゝ所であつて、今の場合も、意味の上に何等の不可解な所がない。殊に詣菩提場品第二十の中には、方廣神通遊戲大嚴の定（普曜經では淨曜定意）といふ語があるが、之を梵本には Lalitavyūham nāma bodhisattvasamādhi（遊戲莊嚴と名くる菩薩の三昧）とあ

下巻

◇　　◇

目次

本縁部　九

常盤大定譯

國譯一切經

大東出版社藏版